

皇學館大学大学院

博士（文学）学位請求論文

古風土記受容の研究

近藤 左知子

平成二十五年十二月六日

古風土記受容の研究

序章 風土記の研究史の回顧と課題 1

はじめに 1

一、近年における風土記研究の回顧（二〇〇二年～二〇一三年） 1

二、本稿のねらいと概要 15

第一部 国学者の風土記研究

第一章 平田篤胤と風土記―『古史徴開題記』を中心に 21

はじめに 21

一、平田篤胤『古史徴開題記』と伴信友「風土記考」 22

二、日本総国風土記 28

おわりに 31

第二章 鈴木重胤の風土記研究―『延喜式祝詞講義』を中心に 34

はじめに 34

一、『延喜式祝詞講義』について 34

二、常陸国風土記 35

三、播磨国風土記 36

四、出雲国風土記	37
五、豊後国風土記	39
六、肥前国風土記	39
七、五風土記以外	40
おわりに	41
第三章 岡平保『播磨風土記考』について	43
はじめに	43
一、岡平保について	45
二、東京大学史料編纂所所蔵『播磨風土記考』	45
三、『播磨風土記考』の構成と内容	47
四、『播磨風土記考』の附箋や加筆	50
五、岡平保と敷田年治	53
おわりに	56
第四章 岡平保『播磨風土記考』翻刻	58
附論一 「太子」の用語に関する覚書	83
はじめに	83
一、『古事記』にみえる「太子」について	83

二、『日本書紀』にみえる「太子」について	91
おわりに	99
附論二 大化前代のキサキの序列について―元妃を中心に―	102
はじめに	102
一、妃についての検討	103
二、元妃についての検討	106
おわりに	112
附論三 開皇二十年の遣隋使をめぐって―坂本太郎氏の所説を中心に―	116
はじめに	116
一、開皇二十年の遣隋使の有無	116
二、坂本説の根拠とその問題点	119
おわりに	121
第二部 『肥前国風土記』とその受容	
第一章 『肥前国風土記』校訂	125
総記	129
基肄郡	132

養父郡	136
三根郡	138
神埼郡	141
佐嘉郡	144
小城郡	147
松浦郡	148
杵嶋郡	158
藤津郡	160
彼杵郡	162
高来郡	168
第二章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』について	171
はじめに	171
一、糸山貞幹について	172
二、『肥前風土記纂註』の諸写本	174
三、『肥前風土記纂註』所引『肥前国風土記』	178
四、『肥前風土記纂註』の内容について	182
五、丙本について	186
おわりに	189

第三章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』——翻刻と校訂——	192
一、『肥前風土記纂註』の翻刻と校訂	192
上巻	
序	194
総記	196
基肄郡	211
養父郡	222
三根郡	227
神埼郡	233
中巻	
佐嘉郡	245
小城郡	254
松浦郡（～大家嶋）	259
下巻	
松浦郡（値嘉嶋）	299
杵嶋郡	315
藤津郡	321
彼杵郡	327
高来郡	337
二、『肥前風土記纂註』所引『肥前国風土記』本文	347

総記	349
基肄郡	350
養父郡	352
三根郡	354
神埼郡	355
佐嘉郡	357
小城郡	359
松浦郡	359
杵嶋郡	365
藤津郡	366
彼杵郡	368
高来郡	370
附録一 伴信友「風土記考」・平田篤胤『古史徵開題記』の比較	372
附録二 鈴木重胤『延喜式祝詞講義』所引風土記一覧	397
初出一覧	405

序章 風土記の研究史の回顧と課題

はじめに

和銅六年（七一三）五月、諸国に次のような官命が下された。

五月甲子。制。畿内七道諸國郡郷名着「好字」。其郡内所_レ生。

銀銅彩色草木禽獸魚虫等物。具録_二色目_一。及土地沃墾。山川原

野名号所由。又古老相傳舊聞異事。載_二于史籍_一亦宜_二言上_一。

（『続日本紀』巻第六、和銅六年五月甲子条）

この官命の趣旨は、

①国・郡・郷の名に好き字を着けること。

②郡内に産する鉱物・植物・動物などで有用なものの品目を筆録すること。

③土地の肥沃状態

④山川原野の名の由来

⑤古老相伝の旧聞異事

の五点に集約される。この官命によって諸国より勘進された文書は、のちに「風土記」と呼ばれ、今日においては、ほとんどの国のものが失われたが、常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の五ヶ国の風土記は写本が残っており、散逸した国のものは、他書に引かれた逸文

でしかその内容を知ることができない。

一、近年における風土記研究の回顧（二〇〇二年～二〇一三年）

ここでは近年における風土記研究について述べる。風土記については、幕末の伴信友、明治以降では栗田寛氏、井上通泰氏、戦後になると秋本吉郎氏といった研究者が風土記に関心をよせ、多くの研究が世に出された。とりわけ秋本吉郎氏が校注を施した日本古典文学大系2『風土記』（岩波書店、昭和三十三年（一九五八）四月）の刊行が風土記研究に与えた影響は大きい。その後、昭和六十年（一九八五）になり、植垣節也氏の尽力により風土記研究会が発足した。同研究会の『風土記研究』が風土記研究の発展に果たした役割は計り知れないものがある。さらに平成九年（一九九七）には、古典文学大系以来の本格的な注釈書である植垣節也校注・訳新編日本古典文学全集5『風土記』（小学館、平成九年（一九九七）年十月）が刊行され、風土記の研究はさらなる発展を遂げた。

秋本氏による古典文学大系本が刊行されてより平成十三年（二〇〇二）にいたるまでの研究史については、荊木美行氏が丁寧に整理されている（荊木美行「風土記研究の課題」『風土記研究の諸問題』所収、国書刊行会、二〇〇九年三月）ので、そちらを参照していただき、ここでは、平成十

四年（二〇〇二）から現在にいたるまでの研究を回顧したい。なお、荊木氏の論考のほか、『風土記研究』（風土記研究会編）・『古事記年報』（古事記学会編）・『論集上代文学』（萬葉七曜会編、笠間書店）の巻末に掲載された風土記関係の研究目録も参考となる。

さて、近年の風土記に関する研究は分野・論題ともに多岐にわたるため、分類することは難しいが、ひとまずテキスト・総論・五風土記・風土記逸文・風土記受容史に分けてみていきたい。

【テキスト】テキストでは、沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉の三氏の編で二〇〇五年から二〇〇八年にかけて、山川出版社から五風土記の原文を校訂し、訓読を掲げたものが刊行されたことが特筆される。すなわち『出雲国風土記』（山川出版社、二〇〇五年四月）、『播磨国風土記』（山川出版社、二〇〇五年九月）、『常陸国風土記』（山川出版社、二〇〇七年四月）、『豊後国風土記 肥前国風土記』（山川出版社、二〇〇八年二月）がそれぞれある。

【総論】ここでは、総論的な研究や、風土記に関する論文集をあげていきたい。『常陸国風土記』を中心に述作論と文献学の立場から考察した橋本雅之『古風土記の研究』（和泉書院、二〇〇六年九月）、逸文や国学者の風土記研究などの論考十二篇を収録した荊木美行『風土記研究の諸問題』（国書刊行会、二〇〇九年三月）、そして、記念論集刊行会編『菅野雅雄博士喜寿記念 記紀・風土記論究』（おうふう、二〇〇九

年三月）には、滝口泰行「風土記類文書の成立と伝来」、原田留美「播磨国風土記における地名起源・由来記事について―その根拠となつたエピソードから考える―」、伊藤剣「『播磨国風土記』揖保郡粒丘条について―〈地名起源譚〉の作成―」、谷口雅博「『常陸国風土記』多珂郡「サチ争い」説話の意義」、奥田俊博「『肥前国風土記』の用字―漢語の使用を中心に―」、飯泉健司「豊後国風土記の地名構造―遡及志向の歴史観―」、嵐義人「筑後国風土記逸文についての一考察―磐井墓条『解部』に関する疑―」、廣岡義隆「乙類風土記から甲類風土記へ―九州風土記寸考―」の諸論考が所収されている。また、二〇〇九年五月刊行の『国文学―解釈と教材の研究』五四・七では、風土記を読むという特集が生まれ、三浦佑之「風土記の魅力」、荻野了子「風土記伝承が語る禁忌について」、豊田有恒「風土記に見る古代朝鮮」、富島有希世「風土記の中の女神」、パーマー・エドウィーナ「風土記読解―口承文学の観点から―」、秋本吉徳「『常陸国風土記』―その魅力―」、飯泉健司「『播磨国風土記』―文芸的な面白さ―」、野々村安浩「『出雲国風土記』」、松本直樹「『出雲国風土記』と記紀神話―出雲神話世界の再構築―」、永藤靖「『肥前国風土記』の土蜘蛛を読む」、荊木美行「『丹後国風土記』逸文とその残缺」といった研究を集める。神田典城編『風土記の表現 記録から文学へ』（笠間書店、二〇〇九年七月）には、神田典城「総論（風土記の表現）」

にはじまり、廣岡義隆「風土記本文の復元について」、瀬間正之「文
体・文字総論」、西條勉「巫女の死―風土記説話の水準―」、兼岡理
恵『常陸国風土記』再発見前夜―藩撰地誌『古今類聚常陸国誌』―
(『風土記受容史研究』(笠間書院、二〇〇八年二月)所収)、中村啓信「常陸国
風土記に白壁郡を立つべきこと―葦穂山越えの道―」、兼岡理恵「新
治の国の小筑波の岳」に込められた意味―『常陸国風土記』香澄里・
新治州条―(のちに『風土記受容史研究』(笠間書院、二〇〇八年二月)所収)、
飯泉健司「靈劍の主張―播磨国風土記・旧聞異事の生成―」、奥田俊
博『播磨国風土記』の表記―文体との関わり―、大館真晴「三條西
家本播磨国風土記の字体をいかに理解するか―木簡や正倉院文書と
の比較から―」、荻原千鶴『出雲国風土記』の説話表現―感情の描
出をめぐる―、谷口雅博『出雲国風土記』地名起源記事の文体
―〈秋鹿郡〉を中心に―、中川ゆかり「肥前国風土記の文章―進取
の気性―」、大鋸聡幸「大足彦天皇」の姿―『肥前国風土記』神崎
郡琴木岡条の記事から―、増尾伸一郎「蘇民将来伝承考―『備後国
風土記』と逸文の形成―」、北川和秀「西海道乙類風土記の字音仮名
について」、青木周平「中世から近世にかけての風土記受容史の一斑」
といった、前掲書に続き、風土記研究で著名な研究者の論考が並ぶ。
沖森卓也『日本古代の文字と表記』(吉川弘文館、二〇〇九年七月)では、
出雲・播磨国風土記の音韻・表記と上代撰述風土記における地名表

記について考察している。青木周平先生追悼論文集刊行会編『青木
周平先生追悼古代文芸論叢』(非売品、二〇〇九年十一月)には、記紀・万
葉集』に関する論考とともに、飯泉健司「記・風土記のタケルと軍
団」、谷口雅博『常陸国風土記』香島郡「事向」の文脈、橋本雅之
「三條西家本『播磨国風土記』校訂私見」、原田留美「播磨国風土記
地名起源記事にみえる天皇像の側面」、小林宏史『出雲国風土記』
の阿遅須枳高比古命神話、加藤紗弥香『出雲国風土記』楯縫郡総
記の特質、荻原千鶴「九州風土記の構想と『文選』賦」、伊藤剣『豊
後国風土記』と『肥前国風土記』、飯村高宏「餅の的伝承」、松本
弘毅「丹後国風土記逸文「奈具社」説話の歌」大館真晴「筑後国風
土記逸文(生葉郡)にみえる地名起源説話の特徴」といった風土記
関係の論考が多く所収されている。そして近年になり、瀬間正之『風
土記の文字世界』(笠間書院、二〇一一年三月)や、荊木美行『風土
記と古代史料の研究』(国書刊行会、二〇一二年三月)が刊行された。前者
は『常陸国風土記』の文字表現の問題を中心に、四風土記・逸文の
文字表現を明らかにしたものである。後者は第一部を風土記の研究
として、二〇〇九年から二〇一一年にかけて氏が発表した論考六篇
および、神宮文庫に架蔵されている敷田家寄贈の百園文庫の風土記
関係史料の再調査に基づく追考一篇を収める。

【播磨国風土記】『播磨国風土記』をあつかった単行本は、坂江涉

『風土記からみる古代の播磨』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇七年三月）、北山繁良『播磨国風土記伝承の一つの解釈』（発行所不記、二〇〇七年十一月）、田井恭一『「播磨国風土記」の謎に迫る』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇七年十一月）、寺本躬久『稿本播磨国風土記再考』（寺本艸生庵、二〇一〇年九月）、坂江渉編『播磨国風土記を通してみる古代地域社会の復元的研究』（私家版、二〇一〇年九月）がある。

表現や叙述の方法に着目した研究には、橋本雅之『「播磨国風土記」における漢語表現の受容をめぐって』（菅野雅雄博士古稀記念論集刊行会編『古事記日本書紀論究』所収、おうふう、二〇〇二年三月）、飯泉健司「言うなの禁——播磨国風土記都太川条の表現性——」（『風土記研究』二八、二〇〇三年十二月）、寺本躬久「播磨国風土記 再考——飾磨郡里名の記載順について（一）——」（『歴史と神戸』二四六、二〇〇四年十月）、山田純『「播磨国風土記」の歴史叙述——叙述形式が誘引する世界——』（『文化継承学論集』二三、二〇〇五年三月）、谷口雅博『「播磨国風土記」——「一家云」の用法』（『古代文学』四四、二〇〇五年三月）、山田純『「播磨国風土記」の歴史叙述——叙述形式が誘引する世界——』（『文化継承学論集（明治大学）』一、二〇〇六年三月）がある。また、森陽香『「播磨国風土記」の校訂を考える——揖保郡林田里条を中心に——』（『古事記年報』五〇、二〇〇八年一月）は、難解とされてきた揖保郡林田里条についてのこれまでの研究を振り返り、新たな訓読と伝承理解の可能性を示している。

風土記本文における表記をめぐっては、中川ゆかり「播磨国風土記の一特徴——「詠」で表される求婚をめぐって——」（『風土記研究』二九、二〇〇四年九月）、奥田俊博『「播磨国風土記」の塾字』（『風土記研究』二九、二〇〇四年九月）、大坪併治『「播磨国風土記」の「南毘都麻」について』（『岡大國文論稿』三九、二〇一一年三月）といった諸論がある。

音韻について論じたものは、沖森卓也「播磨国風土記の音韻と表記」（『国文学踏査』一八、二〇〇六年三月）がある。

説話をあつかった研究には、寺本躬久「十四丘説話を構成する物品名について（播磨国風土記再考五）」（『歴史と神戸』二六〇、二〇〇七年二月）、飯泉健司「天に通う人々——播磨国風土記・八十橋説話の生成——」（『説話・伝承学』一六、二〇〇八年三月）、宇賀神裕『「播磨国風土記」柏原の里伝承考』（『埼玉大学国語教育論叢』一二、二〇〇九年十二月）があげられる。

風土記本文にみえる神について考察したものに、富島有希世『「播磨国風土記」の女神』（『明治大学文学研究論集』二三、二〇〇五年九月）、谷口雅博『「播磨国風土記」の天日槍命と葦原志許乎命』（『大和』一一〇、二〇〇六年一月）、田圃佳代「大汝命之子、火明命」について——『播磨国風土記』「飾磨郡伊和里条から」——（『明治大学文学研究論集』二四、二〇〇六年二月）があげられる。

地名考証およびその比定を行なったものに、今津勝紀「播磨国賀

茂郡の郷里復原」(『岡山大学文学部紀要』四八、二〇〇七年十二月)、パーマー・エドウィナー「口承文学としての風土記―播磨国風土記にあらわれる「麻打山」の新解釈―」(『風土記研究』三三、二〇〇八年六月)がある。編集の思想を取り上げたものに、飯泉健司「播磨国風土記 オケ・ヲケ伝承考―作者の〈論理〉〈視点〉〈表現〉―」(菅野雅雄博士古稀記念論集刊行会編『古事記日本書紀論究』所収、おうふう、二〇〇二年三月)、飯泉健司「播磨国風土記―「素朴」に隠された編纂者の知恵」(『解釈と鑑賞』七六・五、二〇一一年五月)の諸論がある。

歴史学からの考察に、若井敏明「播磨国風土記にみえる歴史意識」(『神戸山手女子短期大学紀要』四六、二〇〇三年十二月)、坂江渉「歴史学研究からみた『播磨国風土記』の可能性」(『風土記研究』三五、二〇一二年三月)、古市晃「古代播磨の地域社会構造―『播磨国風土記』を中心に」(『歴史評論』七六三、二〇一三年十一月)といった論考がある。

他国との交流を論じたものに、瀧音能之『『播磨国風土記』の中の出雲―出雲大神の問題を中心として―』(武光誠編『古代日本の政治と宗教』所収、同成社、二〇〇五年十月)、荊木美行「播磨と出雲―『播磨国風土記』にみえる出雲国人の往来をめぐる」(『史料』二二九、二〇一一年三月)、同氏「播磨と讃岐―『播磨国風土記』からみた両国の交流」(『史料』二二三、二〇一一年十二月。のちに『風土記と古代史料の研究』(国書刊行会、二〇一二年三月)所収)、交通という視点から考察したものに、坂江渉「『播磨

国風土記』からみた地域間交通と道―出雲国との関連で―」(『条里制古代都市研究』二七、二〇一一年)がある。

記紀と風土記の關係に着目したものとしては、青木周平「風土記と記紀の關係―播磨国風土記オケ・ヲケ説話を中心に―」(『上代文学』九八、二〇〇七年四月)、寺本躬久「古代史の視点 播磨国風土記と古事記神話をみる」(『歴史と神戸』五〇・五、二〇一一年十月)があげられる。

また、『播磨国風土記』は鉄に関する記述を豊富に載せるという特色があり、鉄に注目した研究も多くみられる。永藤靖「『播磨国風土記』を読む」(『文芸研究』九七、二〇〇五年九月)では風土記飭磨郡の条にみえる創世神話の一部とされる火明命に関する挿話、および鉄に関する記述をあげて解説し、同氏「『播磨国風土記』の農耕儀礼」(『文芸研究』九八、二〇〇六年二月)は、農耕儀礼を鉄の伝来と漢人の灌漑技術による開拓という視点から論じている。福島好和「『播磨国風土記』にみえる鉄について」(『関西学院史学』三三、二〇〇六年三月)は、風土記の鉄生産記事から、播磨地方における古代製鉄の実情を考察したもので、風土記成立時における生産の中心は讃容郡で、鉄生産が千種川流域を遡上し宍禾郡の千草地区へ波及したことを伝えているとする。石井杏奈「『播磨国風土記』の聖岡の一考察―クソのもつ意味とその記述の背景―」(『文学研究論集』二六、二〇〇七年二月)は、古代人が「クソ」をどのように捉えていたかを、鉄の生産という視点から考

察したものである。

このほか、飯泉健司「風土記の魅力と可能性―播磨国風土記を中心に―」（『大倉山論集』五三、二〇〇七年三月）、松下正和「播磨国風土記にみるモノユメント空間―墳墓伝承を中心に―」（『兵庫のしおり』九、二〇〇七年三月）は、他国の風土記と比較して「墓」に関する記述の多さから墳墓伝承に着目し、国司層を中心とする風土記編者が地元の伝承を潤色して記事を編集したという側面だけでなく、氏族伝承にまつわる多くのモノユメントが実際に存在し、またそのモノユメントにこと寄せて、氏族の記憶が再生産されていくプロセスを想定している。永藤靖「鬼女と筥―『播磨国風土記』の俚諺が語るもの―」（『文化継承学論集』四、二〇〇八年三月）は、風土記に風俗諺・俚諺をもとにした地名説話が採録されていることは、この地域の共同体が、中央の権力とは別のところで成熟し、生き生きと機能していることを表すと指摘する。

【常陸国風土記】『常陸国風土記』をあつかった単行本には、鈴木健『常陸国風土記と古代地名』（新読書社、二〇〇三年十月）、井上辰雄『常陸国風土記の世界』（雄山閣、二〇一〇年三月）、茂木雅博『常陸国風土記の世界』（同成社、二〇一一年十二月）、草間吉夫編『【図解】常陸国風土記 高萩編』（秋本吉徳監修、茨城新聞社、二〇一三年）がある。

『常陸国風土記』に関する研究をまとめたものには、志田諄一「常

陸国風土記研究の現状と課題」（『常総の歴史』二九、二〇〇三年七月）がある。

個別研究では、叙述や表現に着目した論考には、橋本雅之『常陸国風土記』の表現―天之鳥琴・天之鳥笛を中心として―」（『説話と説話文学の会編『説話論集』一四、清文堂出版、二〇〇四年十月）、奥田俊博『常陸国風土記』の漢語表現」（『和漢比較文学』四四、二〇一〇年二月）、橋本雅之『常陸国風土記』の表現―漢文訓読における音読みと訓読みの問題』（『叙説』三七、二〇一〇年三月）があり、また、永藤靖『常陸国風土記』の景行天皇―移動する王権―」（『古代学研究所紀要』二〇〇九年二月）では、『常陸国風土記』のなかにみえる景行天皇の記事の表現について考察し、巡幸記事は〈王〉として、その地を〈清め〉るための儀礼的表現であるとする。

文字の表現に着目した研究には、瀬間正之氏による「常陸国風土記の文字表現（一）序説―誤用と助辞用法を端として―」（『上智大学国文学科紀要』一九、二〇〇二年三月）、「常陸国風土記の文字表現（二）―「者」と「所有」の用法から―」（『清心語文』四、二〇〇二年八月）、同氏「常陸国風土記の文字表現（三）―美文への志向―」（『上智大学国文学科紀要』二〇、二〇〇三年三月）、「常陸国風土記の文字表現（四）―美文への志向・六朝地誌類―」（『上智大学国文学科紀要』二一、二〇〇四年三月）の一連の研究があり、これらはのちに『風土記の文字世界』（笠間書

院（二〇一一年三月）にまとめられている。このほか、橋本雅之『常陸国風土記』の漢語とそのヨミをめぐる―「天人」を中心として―（『相愛国文』一五、二〇〇二年三月）がある。

説話についての研究には、三浦佑之「英雄伝説の行方―『常陸国風土記』と関連して―」（福田晃・渡邊昭五ら編『講座日本の伝承文学』十所収、三弥井書店、二〇〇四年八月）、菊池晋介『常陸国風土記』童子松原伝承の神道的考察（『神道宗教』一九八、二〇〇五年四月）、川副由理子『常陸国風土記』行方郡に見える建借間命の国見記事について（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五八、二〇一二年）といった諸論がある。

神について論じたものに、志田諄一「鹿島神と白鹿」（『東アジアの古代文化』一三七、二〇〇九年一月）、堂野前彰子「倒立する託宣―『常陸国風土記』香島郡鹿島神の託宣をめぐる―」（『古代学研究所紀要』九、二〇〇九年三月）は、鹿島神の託宣は倒立することにおいて、三艘の新造船の要求を語るものであり、その要求は、蝦夷征伐の戦勝祈願のためのものであるとする。

人物についての研究に、斎藤朋誉『常陸国風土記』における倭武天皇―水を制する王（『埼玉大学国語教育論叢』一三、二〇一〇年）がある。地名に関する考察に、久信田喜一『和名抄』にみえる常陸国行方郡の郷について（三）―曾祢郡、その二―（『常総の歴史』二七、二〇〇二年六月）、久信田喜一『和名抄』にみえる常陸国行方郡の郷について

て（四）―高家郷を中心に―（『常総の歴史』二八、二〇〇二年十二月）、同氏『和名抄』にみえる常陸国行方郡の郷について（五）―堤賀郷を中心に―（『常総の歴史』二九、二〇〇三年七月）、同氏『和名抄』にみえる常陸国行方郡の郷について（六）―当麻郷、その一―（『常総の歴史』三〇、二〇〇三年十二月）、柴田弘武「軽野・軽部地名考」（『常総の歴史』二九、二〇〇三年七月）、米田雄介「古代の行政改革と地名―『常陸国風土記』と関連して―」（『日本歴史』六六八、二〇〇四年一月）、高藤昇『常陸国風土記』那賀郡「曝井」の考察―（風土記律令考）―（『風土記研究』二九、二〇〇四年三月）、久保田喜一「古代常陸国行方郡板来郷について」（『茨城史林』三一、二〇〇七年六月）、谷口雅博『常陸国風土記』国名起源説話考（『國學院雑誌』一一七・七、二〇一〇年七月）といった論考がある。

『常陸国風土記』は、多くの歌謡が収録されているという特徴があり、歌謡を取りあげた研究も出ている。橋本雅之「濡れ通るとも我帰らめや―「筑波嶺耀歌会」の歌と『常陸国風土記』―」（『論集上代文学』三〇、笠間書院、二〇〇八年五月）、鈴木利一『常陸国風土記』新治郡条収載歌考（『大阪大谷国文』四〇、二〇一〇年三月）、瀧口泰行「萬葉集東歌「小筑波」攷―所謂『常陸国風土記』行方郡条より」（『常磐短期大学研究紀要』四〇、二〇一二年三月）がそれである。

編纂の思想についての研究には、兼岡理恵『常陸国風土記』郡名

風俗諺の記載について―編纂者の視点から―」（『国語と国文学』七九・四、二〇〇二年四月。のちに『風土記受容委研究』（筈間書院、二〇〇八年二月）所収）があり、また、永藤靖『常陸国風土記』の〈常世〉」（『文芸研究』一〇三、二〇〇七年九月）は、藤原氏が編纂に関与していたとすれば、風土記本文に表われた「常世」・「神仙」は、鹿島神宮との結びついたもので、藤原氏が中央に喧伝しようとした意識的に巧まれた常陸世界に対するイデオロギーであったとする。

歴史学からの研究としては、藤井豊久「古代の土地占有と地主神について―『常陸国風土記』の夜刀神を素材に」（『皇學館論叢』四三・三、二〇一〇年六月）があげられる。

考古学の視点からは、千葉隆司「常陸国風土記にみる古墳文化の展開―水田開発記事と古墳分布の関係―」（『古代学研究所紀要（特集号）風土記の現在―考古・歴史・文学の視点から―』、二〇〇九年二月）があり、水田開発記事と古墳の分布状況から、開発指導者の動向と展開に迫るものである。

その他の研究には、田中俊江「久慈河の濫觴は猿声より出づ―『常陸国風土記』の知の位相―」（『日本文学』五一・四、二〇〇二年四月）、秋本吉徳『常陸国風土記』の世界」（『解釈と鑑賞』六七・一一、二〇〇二年十一月）、松崎健一郎「敗者の立場で読む『常陸国風土記』」（『常陸の歴史』二九、二〇〇三年七月）、滝口泰行「風土記類文書の伝来について―所謂

「常陸国風土記」を中心として―」（『常盤短期大学研究紀要』三七、二〇〇九年三月）、佐竹美穂「記紀における「池」―『常陸国風土記』との記述の比較」（『都大論究』四七、二〇一〇年六月）、佐竹美穂『常陸風土記』の「池」―その記述をめぐって」（『古代文学』五一、二〇一一年）の諸論考がある。

【出雲国風土記】『出雲国風土記』は、ほぼ完全な形で残っていること、神話を多く載せることから、研究の数も豊富で、内容も多岐にわたる。ことに平成四年（一九九二）に設立された島根県古代文化センターでは『出雲国風土記』研究の中心として、写本調査・マイクロフィルム撮影・データベース化や、『出雲国風土記』に関する多くの刊行物を出版している。同センターが行なった写本の調査結果については、野々村安浩「資料調査 出雲国風土記写本の調査（一）」（九）」（『古代文化研究』一二・二〇、二〇〇四年三月）二〇一二年三月。

ただし、野々村安浩・森田喜久男「出雲国風土記写本の調査（七）」（『古代文化研究』一八、二〇一〇年三月）のみ調査者を野々村・森田両氏の連名とする）で公表されている。同センターの研究紀要である『古代文化研究』四〇十（一九九六年三月）二〇〇二年三月）にわたって連載された関和彦『出雲国風土記』註論は実地調査に基づく詳細な注釈で、のちに島根県古代文化センター編『出雲国風土記註論』（島根県古代文化センター、二〇〇三年三月）、同センター編『出雲国風土記註論 嶋根郡卷末条』（島根県古代

文化センター調査研究報告書二五、二〇〇四年三月）として刊行され、その後、関和彦『出雲国風土記』注論』（明石書店、二〇〇六年八月）として出版された。このほか、松本直樹『出雲国風土記注釈』（新典社注釈叢書二二、新典社、二〇〇七年十二月）といった注釈もでている。

単行本は、関和彦『増補新版 新・古代出雲史』『出雲国風土記』再考』（藤原書店、二〇〇六年三月）、古代出雲王国の里推進協議会編『出雲の考古学と『出雲国風土記』』（学生社、二〇〇六年八月）、島根県古代文化センター編『出雲国風土記の研究四（神門水海南辺の研究）資料編』（島根県古代文化センター調査研究報告書四六、二〇〇二年三月）、同センター編『出雲国風土記の研究四（神門水海南辺の研究）論考編』（島根県古代文化センター調査研究報告書四七、二〇一三年三月）がある。

本文に関するものには、内田賢徳『出雲国風土記』本文について――上代文献テキストの一面――』（万葉語学文学研究会編『万葉語文研究』一、和泉書院、二〇〇五年三月）、福井卓造「出雲国風土記仁多郡三澤郷の新読解」（『東洋文化』復刊九四、二〇〇五年四月）、森田喜久男「天平年間成立当初の『出雲国風土記』について」（『古代文化研究』一五、二〇〇七年三月）、高田昇「出雲国風土記の草本記事」（『第二次芦屋ゼミ』一四、二〇〇七年三月）、野々村安浩『出雲国風土記』記載についての一考察――出雲郡「出雲大川」条を中心に――』（『古代文化研究』一七、二〇〇九年三月）、谷口雅博「読む『出雲国風土記』 楯縫郡・神名樋山条――神の発話内容を

考える」（『日本文学』五八・一一、二〇〇九年十一月）、内田賢徳「目一つの鬼」という潤色――出雲国風土記述作の一面――』（『風土記研究』三四、二〇一〇年十二月）、野々村安浩『出雲国風土記』編集について一考察――神門郡「神門川」条記載を中心に――』（『風土記研究』三四、二〇一〇年十二月）、伊藤剣『出雲国風土記』楯縫郡冒頭の意味――出雲国造の意図したものの――』（『国語と国文学』八八・三、二〇一一年三月）といった研究がある。

写本についての研究には、前にあげた野々村・森田両氏による写本調査のほかに、宮澤俊雅「出雲国風土記諸本の親疎関係」（『北海道大学文学研究科紀要』一一一、二〇〇三年十一月）、森田喜久男『出雲国風土記』写本研究の意義』（『古代文化研究』二二、二〇〇四年三月）、植垣節也『出雲国風土記考』の一写本について』（新編荷田春満全集編集委員会編『新編荷田春満全集』第三巻月報三、おうふう、二〇〇五年七月）があり、瀧音能之「写本と刊本の間――『出雲国風土記』忌部神戸条をめぐる――』（『古代学研究所紀要（特集号）風土記の現在――考古・歴史・文学の視点から――』二〇〇九年二月）は、刊本にみられる「御沐之忌里」は本文の校定としては問題があり、現存する写本の中で成立年が明確な最古のものである細川家本にある「御沐之忌玉作」の方が妥当と指摘したものである。

表現方法に着目した研究には、伊藤剣『出雲国風土記』の想定読者――「所謂」という表現形式から――』（『古代中世文学論考』二二、新典社、二〇〇八年五月）がある。

また、神話に関する研究は多く、小村宏史『出雲国風土記』の世界―「所造天下大神」と中央神話―(『古代研究』三七、二〇〇四年二月)、瀧音能之『出雲神話』研究の現状と課題(『しまねの古代文化』一一、二〇〇四年三月)、豊田有恒「出雲風土記と古代朝鮮(シンポジウム「出雲神話の謎」)」(『しまねの古代文化』一一、二〇〇四年三月)、松本直樹『出雲国風土記』の神話―「記紀神話」の享受―(『古代中世文学論考』刊行会編『古代中世文学論考』一一、新典社、二〇〇四年五月)、石破洋「国引き神話」の新研究(『島根女子短期大学紀要』四三、二〇〇五年三月)、小村宏史『出雲国風土記』におけるオホナムチ像―出雲国造の求めた神話―(『国文学研究』一五一、二〇〇七年三月)、松本直樹「巡行する神の伝承について―出雲国風土記を中心に―」(『風土記研究』三三、二〇〇八年六月)、小村宏史「出雲国造の求めた神話―神話テキストとしての『出雲国風土記』」(『国文学研究』一六〇、二〇一〇年三月)、松本直樹「出雲国風土記」と記紀の神話世界―出雲神話世界の再構築(『風土記研究』三四、二〇一〇年十二月)の諸論考が出ている。

神祇・祭祀に着目した研究には、錦田剛志『出雲国風土記』にみる岩石と神祭り―二、三の覚書(『東アジアの古代文化』一一二、二〇〇二年八月)、同氏「覚書『出雲国風土記』にみる神祇祭祀の空間―神の社を中心として―」(『古代文化研究』二二、二〇〇四年三月)、大谷光男「出雲臣の遠祖天穂日命神社の鎮座地―『出雲国風土記』からみた」(『二

松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』四三、二〇一三年)がある。

考古学の見地からは、柳浦俊一「島根県松江市来美廃寺―『出雲国風土記』記載・推定「山代郷新造院」の調査―」(『考古学ジャーナル』五〇八、二〇〇三年十月)や、意宇郡宍道郷の条にみえる三石を、石ノ宮神社の三石に比定し、そこに示された尺数を現在の長さと比較すると、ほとんど全ての項目で尺長は古韓尺と一致すること、風土記にみられる里程は古韓尺の里単位から換算比率〇・八八一一によってほとんど誤差なく計算復元可能であることを指摘した新井宏『出雲風土記』の里程と宍道郷三石記事に現れた「古韓尺」(『古代文化研究』一九、二〇一一年三月)がある。

編纂の思想に関するものには、関和彦氏による『出雲国風土記』の歴史的世界(小林昌二監修・小林昌二・小嶋芳孝編『日本海域歴史大系』(古代篇)所収、清文堂出版、二〇〇五年十二月)・『出雲国風土記』の世界を考える(『古代出雲王国の里推進協議会編『出雲の考古学』と『出雲国風土記』所収、学生社、二〇〇六年八月)の諸論がある。

産物について取りあげた研究に、瀧音能之『出雲国風土記』所載の特産物的記事をめぐって(『駒沢史学』六三、二〇〇四年七月)、アンデス・カールキビスト『出雲国風土記』と産物(『古代中世文学論考』二二、新典社、二〇〇八年十一月)や、嶋根郡の前原崎の記述や比定地では前原坡が何を目的として築かれたものか疑問とすることに端を發し、

特産品である水鳥との観系から考察した谷口榮「出雲国風土記と水鳥―前原埵における前原坡と水鳥について―」（『古代文化研究』一三、二〇〇五年三月）がある。

その他の研究には、江原瑞貴「『珍宝』考―出雲国風土記意宇郡母理郷―」（『埼玉大学国語教育論叢』一〇、二〇〇七年三月）、カールキブスト・アンデス「『出雲国風土記』の山々について」（『東アジアの古代文化』一三四、二〇〇八年二月）、谷口雅博「『出雲国風土記』の「御祖命」―仁多郡三津郷を中心に―」（『かぎろひ』一、二〇〇八年九月）、丸山裕美子「延喜典藥式「諸国年料雜藥制」の成立と『出雲国風土記』」（『延喜式研究』二五、二〇〇九年三月）、平石充「出雲国風土記と国府の成立」（『古代文化』六三・四、二〇一二年三月）、中村友一「出雲国の氏族の地域性―『出雲国風土記』を中心に―」（『地方史研究』六二・二、二〇一二年四月）、荻原千鶴「『出雲国風土記』の時間構造―『日本書紀』『古事記』『日本霊異記』の感情表現を対照に」（『国語と国文学』九〇・八、二〇一三年八月）といった論考がある。

【豊後国風土記・肥前国風土記】豊後・肥前をはじめとする九州諸国の風土記は、文体がよく似ていることから、従来より太宰府で一括して編纂されたといわれている。これらの風土記は、西海道風土記、または九州風土記として一括して研究されることが多いのでまとめてあげる。今回対象とした期間に、西海道・九州風土記に関

する単著は出ておらず、常陸・播磨・出雲国風土記と比較して、研究が進んでいない印象を受ける。

まず、西海道・九州風土記に関する個別研究からみると、西海道乙類風土記の文字表現について『常陸国風土記』成立との関係から論じた瀬間正之「西海道乙類風土記の文字表現」（『上智大学国文学科紀要』二四、二〇〇七年一月。のちに『風土記の文字世界』（笠間書院、二〇一一年三月）所収）、九州風土記の成立年代をめぐる所説を整理し、筆者自身の見解をのべた荻木美行「九州風土記の成立をめぐる」と（『風土記研究』三三、二〇〇九年六月。のちに『風土記と古代史料の研究』（国書刊行会、二〇一二年三月）所収）、荻原千鶴「九州風土記の甲類・乙類と『日本書紀』」（『風土記研究』三三、二〇〇九年六月）、多田一臣「九州風土記を考える―『万葉集』から―」（『風土記研究』三三、二〇〇九年六月）の諸論がある。

『豊後国風土記』に関する研究をみると、叙述や表現方法に関するものには、井上隼人「『豊後国風土記』総記の意義」（『埼玉大学国語教育論叢』一〇、二〇〇七年三月）、伊藤剣「『豊後国風土記』の叙述方法―伝承形成方法の変質―」（『国文学研究』一五六、二〇〇八年十月）、奥田俊博「『豊後国風土記』の用字―熟字の使用を中心に―」（『風土記研究』三三、二〇〇九年六月）がある。

編纂の思想について述べた研究には、衛藤恵理香「『豊後国風土記』の記事配置と編纂者の意図」（『国語の研究』三七、二〇一二年三月）がある。

このほか、飯泉健司「肥沃な土地の荒田伝承―豊後国風土記・餅の的―」（『かぎろひ』一、二〇〇八年九月）や、後藤匡史「蘇った豊後国風土記」（『古代朝鮮文化を考える』二四、二〇〇九年十二月）といった論考が出ている。

次に『肥前国風土記』に関する研究をみると、表記に注目したものに、大野まゆみ『肥前国風土記』地名改名記事―「訛」と「改」との差異―」（『埼玉大学国語教育論叢』一〇、二〇〇七年三月）や、堂野前彰子「国を分ける思想―『肥前国風土記』の「ヒ」をめぐる―」（『文学研究論集』二八、二〇〇八年二月）がある。

地名に関する研究には、竹生政資・西晃央「肥前国風土記における土菌池の所在地について」（『佐賀大学文化教育学部研究論文集』一二、二〇〇八年一月）がある。

弟日姫子の説話を取りあげた論考には、山本大介「神に捧げしふたつの贅―『肥前国風土記』松浦郡弟日姫子伝承論―」（『明治大学文学研究論集』一三三、二〇〇五年三月）、青柳まや「弟日姫子の死―『肥前国風土記』松浦郡条・褶振説話について―」（『二松―大学院紀要』二六、二〇〇二年）があり、土蜘蛛説話については、永藤靖『肥前国風土記』の山野河海―土蜘蛛説話を中心に―」（『文芸研究』一〇四、二〇〇八年三月）、同氏『肥前国風土記』の土蜘蛛を読む」（『國文學―解釈と教材の研究』五四・七、二〇〇九年五月）といった研究がある。

【風土記逸文】逸文に関する研究として特筆すべきものに、二〇

〇二年に刊行された荊木美行『風土記逸文の文献学的研究』（学校法人皇學館出版部、二〇〇二年三月）があげられる。これはおもに近世以降の国学者たちによる逸文研究の成果に着目し、彼らの逸文に対しての認識を明らかにしたものである。また、近世以降、本書刊行にいたるまでに風土記逸文として採択された条文の出典および採択者を示し、真偽を三つのグループに分類した一覧表は参考となる。

個別研究をみると、廣岡義隆「風土記の「残存本文」について」（『三重大学日本語学文学』一七、二〇〇六年六月）、九州風土記については、廣岡義隆「風土記逸文中に見られる「冬菑」について―『筑紫風土記』（塙舸水門条）―」（『風土記研究』三〇、二〇〇六年三月）や、犬丸慎一郎「九州地方の風土記逸文に関する史料性」（『史学研究集録』三四、二〇〇九年三月）、丹後国風土記については、水江浦嶋子や奈具社に関する説話があることから、逸文の存疑だけでなく、その文学性に着目した研究も多く、仁平道明『丹後国風土記』逸文存疑―「奈具社」の話の後代的性格―」（『解釈』五二・三四、二〇〇六年四月）、鈴木利一『丹後国風土記』逸文「奈具社」条収載歌考―「天の原振り放け見れば」と漢語「仰天」―」（『大阪大谷国文』三七、二〇〇七年三月）、キャサリン・サリバン「奈具社」説話における老天と天女の間答箇所とその意義―「許」と天人の性質を中心に―」（『風土記研究』三一、二〇〇七年六月）、

荊木美行『丹後国風土記』逸文とその残缺」（『國文學—解釈と教材の研究』五四・七、二〇〇九年五月）、作花一志「浦島太郎とかぐや姫—丹後国風土記と竹取物語の語ること」（『天文教育』二二・六、二〇一〇年十一月）、前田逸夫「竹 伝承のミッシング・リンク—『丹波国風土記逸文』」「竹取物語」（『国文学』五二・一一、二〇〇七年九月）、呉哲男「丹後国風土記逸文「水江浦嶋子説話」をめぐって—神話的アレゴリーの墜落」（『風土記研究』三六、二〇一三年八月）、居駒永幸「養老の文芸—「丹後国風土記」逸文の浦島子説話と和歌」（『風土記研究』三六、二〇一三年八月）といった諸論考がある。

このほか諸国風土記の逸文については、荊木美行『撰津国風土記』「比壳嶋」小考」（『史料』二二六、二〇一〇年六月。のちに『風土記と古代史料の研究』（国書刊行会、二〇一二年三月）所収）、廣岡義隆「伊香小江」条と「竹生嶋」条—『近江國風土記』逸文かとされる二条について」（『風土記研究』三五、二〇一二年三月）、荊木美行「尾張国熱田太神宮縁起」と『尾張国風土記』逸文」（『皇學館大学紀要』四七、二〇〇九年三月。『風土記研究の諸問題』（国書刊行会、二〇〇九年三月）所収）、兼岡理恵「風土記歌謡から見えるもの—『播磨国風土記』逸文・「速鳥」歌を中心に」（『国語と国文学』九〇・五、二〇一三年五月）の諸研究がある。

【風土記受容史】近年、どのような人々に、いかなる背景のもと受容されてきたのかに着目した受容史という新たな視点からの研究

が行なわれるようになった。この分野に注目した兼岡理恵『風土記受容史研究』（笠間書院、二〇〇八年二月）は、古代から近世後期までの風土記受容に関する論考を集めたものである。兼岡氏は風土記逸文を「各書物・各時代における風土記受容の解明に繋がる」とし、これまで逸文の真偽にばかり目を向けていた研究に疑問を投げかけ、次のように述べている。

たとえその逸文が風土記からの引用でないにせよ、あるいは風土記を模倣して作ったものにせよ、ではなぜ風土記のような分が作成されたのか、その時必要とされたのかという視点が必要不可欠と思われる

兼岡氏の研究は、当時の人々の視点に立つて考えることの必要性を説き、古代から近世後期に至るまでの風土記受容の様相を明らかにした画期的な成果といえる。このほか、近世の国学者による著作から分析した研究として、増田修氏の『常陸国風土記』の研究（②）「西野宣明の閲歴」研究の現状と課題」（『常陸の歴史』二七、二〇〇二年六月）・『常陸国風土記』の探求（③）「西野宣明の著作」研究の現状と課題—「常陸国風土記抄一」の紹介と「風土記概論」の翻訳—」（『常陸の歴史』二八、二〇〇二年十二月）の諸論や、荊木美行氏による「敷田年治著『風土記考』について」（『史料』一八二、二〇〇二年十二月。のちに『風土記研究の諸問題』（国書刊行会、二〇〇九年三月）所収）、「鈴木重胤と風土

記―『常陸国風土記鈔』の翻刻と解説―」（『皇學館大学文学部紀要』四六、二〇〇八年三月。のちに『風土記研究の諸問題』（国書刊行会、二〇〇九年三月）所収）、鈴木重胤の風土記研究―『日本書紀伝』を中心に―」（『政治経済史学』五〇〇、二〇〇八年四月。のちに前掲所収）、「百園花園文庫の風土記関係史料について―敷田年治の風土記研究・追考―」（『皇學館論叢』四二、三、二〇〇九年六月。のちに『風土記と古代史料の研究』（国書刊行会、二〇一二年三月）所収）といった研究や、青木周平「荷田春満の風土記研究―自筆稿本『出雲国風土記』を中心に―」（『風土記研究』二九、二〇〇四年九月）、大日方克己「岸崎佐久次と『出雲風土記抄』」（『社会文化論集―島根大学法文学部紀要社会文化学科編』六、二〇一〇年三月）、奥田俊博「鹿持雅澄における風土記の受容―『南京遺響』『万葉集古義』を中心に」（『風土記研究』三四、二〇一〇年十二月）、また、永藤靖「『遺老説伝』と風土記の研究」（『明治大学人文科学研究所紀要』六六、二〇一〇年三月）という研究がある。

その他の研究としては、仮名表記に着目した奥田俊博『風土記』の仮名表記―固有名詞以外の語の仮名表記を中心に―」（『風土記研究』二七、二〇〇三年二月）、瀧音能之「風土記にみえる朱・丹・赤とその周辺」（『朱』四六、二〇〇三年三月）、飯泉健司「風土記・記載歌謡の生成―鄙から雅へ―」（日本歌謡学会編『歌謡とは何か』所収、和泉書院、二〇〇三年五月）、秋元祐哉「風土記の「望」「覧」「見」―天皇国見儀礼の観点

から―」（『埼玉大学国語教育論集』六、二〇〇三年十一月）、瀬間正之「風土記の文体―「令」による使役表現を中心に」（『国文学』四八・一四、二〇〇三年十二月。のちに『風土記の文字世界』（笠間書院、二〇一一年三月）所収）、辰巳和弘「『み坂』に立つ存在（もの）―風土記のまなざし」（『国文学』四八・一四、二〇〇三年十二月）、環境歴史学の立場から風土記の森林に関する記述を分析した福原栄太郎「古代における森林の認識―風土記を中心として」（『神戸山手大学紀要』五、二〇〇三年五月）、高藤昇「風土記と律令」（國學院大學日本文化研究所編『律令法とその周辺』所収、汲古書院、二〇〇四年三月）、風土記のなかで記述者が個人的な見解を述べる記述に着目し、推測的記述と評価的記述という視点から考察した飯泉健司「風土記の第三者記述」（『高岡市万葉歴史館紀要』一四、二〇〇四年三月）、風土記撰進の通達と編纂には唐代の図経の影響が考えられるとする荊木美行「風土記の編纂と唐代の地誌」（『神道史研究』五二・一一、二〇〇四年十一月。のちに『風土記研究の諸問題』（国書刊行会、二〇〇九年三月）所収）、中村浩「風土記』に見る酒に関する記載」（『大谷女子大学紀要』四〇、二〇〇六年二月）、奥田俊博「風土記の数量表現」（『風土記研究』三〇、二〇〇六年三月）、稲石陽平「風土記地名起源説話に込められた意図―山川原野名号所由の検討から―」（『古事記年報』四九、二〇〇七年一月）、飯田勇「風土記』伝承の諸相―「地方の表現」と「国家の表現」―」（『風土記研究』三二、二〇〇七年六月）、沖森卓也「古代の地名表記―上代撰述風土記を中心

に——『國學院雜誌』一〇八・一一、二〇〇七年十一月）、橋本雅之「風土記への招待——地名起源説話にみえる古代人の考え——」（『浪速文叢』二〇、二〇〇八年十月）、新羅という語のもつ神話的意味に着目し、神話的異界性と現実性の両面から考察した堂野前彰子「記紀風土記にあらわれた新羅」（『文学研究論集』三一、二〇〇九年九月）、魏峰皓「『風土記』にみられる「賜」「給」「坐」——『風土記』の文体論を兼ねて」（『言語文化学研究』五・五、二〇一〇年三月）、松本弘毅「天平風土記と記・紀」（『国文学研究』一六一、二〇一〇年六月）がある。

近年における風土記関係の研究は以上の通りである。全体を通してみると、表記や叙述方法に着目した国文学の立場からの研究や、地名に関する研究が盛んとなり、こうした研究の成果は『日本古代史地名事典』（雄山閣、二〇〇七年十月）の刊行にも影響を与えているといえる。また、風土記にみえる郡家・駅家や、これらを繋ぐ交通路が近年の発掘によって明らかになりつつあり、『日本交通史辞典』（吉川弘文館、二〇〇三年九月）や『日本古代道路事典』（古代交通研究会編、八木書店、二〇〇四年五月）に、発掘の成果とともに風土記研究の成果が多く引用されている。

このように、今後の風土記研究は、国文学・歴史学といった文献にとらわれる研究ではなく、考古学や地理学などの隣接する分野の成果をも踏まえていく必要があるように思う。

二、本稿のねらいと概要

さて、本稿で取りあげたい主要な課題は三点ある。

第一に、近世の国学者たちによる風土記受容をめぐる問題である。風土記受容史は近年になって注目された分野のため、研究の数もそれほど多くないように思う。特に近世中期から幕末にかけては、風土記の写本が盛んに流布したことに加え、版本も刊行されたことで風土記が多くの人々が目にすることが可能となった。この頃、国学者を中心に研究に風土記が利用されるだけでなく、風土記そのものに関する研究も行なわれるようになった。このことは、これまで傍証史料という位置づけにあった風土記に対する認識が変化したという点で、画期となる出来事といえる。そのため、近世の国学者の風土記観を明らかにしておく必要がある。

第二に、『播磨国風土記』および『肥前国風土記』の最初の注釈書が未刊であり、かつその存在はあまり知られていないことである。前者は秋本吉郎氏が『風土記の研究』（ミネルヴァ書房、一九六三年十月、一〇六四頁）において簡単に紹介するのみで、以後の研究ではほとんど顧みられることがなかった。後者に関しては、栗田寛氏や平田俊春氏などの研究者によって、早くにその価値が注目され、植垣節也

氏も翻刻・校訂を試みている。しかし、諸本間ではなはだ異同が多く、結局、完結するに至らなかった。このように、両風土記の最初の注釈書については未だに解明されていない点も多く、検討の余地が残されているように思う。

第三に、『肥前国風土記』の本文の問題である。『肥前国風土記』については、これまで多くの校訂本が出ているが、現在ある『肥前国風土記』の校訂本でもっとも多い、十三種類の写本・研究書と対校している平田俊春氏校訂の「校本肥前風土記」（佐賀県史編纂会・佐賀県郷土研究会編『校本肥前風土記とその研究』所収、一九五二年二月）では校訂に誤りがあつたり、田中卓氏校注『神道大系 古典篇七 風土記』（神道大系編纂会、一九九四年三月）では、荒木田久老の板本と対校している箇所の不備が存したり、近年刊行された沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉の三氏の編になる『豊後国風土記 肥前国風土記』（山川出版社、平成二十年（二〇〇八）二月）は底本の猪熊本を重視した優れた校訂本ではあるが、おもな対校本が南葵文庫本のみという点で不安が残る。

よって本稿では前述の三点の課題にもとづいて考察していきたい。

第一部 国学者の風土記研究

ここでは、幕末から明治における国学者の著作の分析から、彼らの風土記観や、利用したテキストに注目して考察する。

「第一章 平田篤胤の風土記研究―『古史微開題記』を中心に―」

では、平田篤胤の『古史微開題記』にみえる篤胤の風土記観について述べる。『古史微開題記』における風土記の記述は、この頃の篤胤と親密な関係にあった、伴信友の「風土記考」の内容とほぼ同じ、特に四風土記（常陸・出雲・豊後・肥前）に関する記述のなかには、一字一句違わない箇所があることが指摘できる。一方、日本総国風土記については、『古史微開題記』の風土記に関する記述全体の三分の二にわたる紙幅を費やしているが、「風土記考」と一致するところが少ないといった特徴がある。この理由として、信友が篤胤に添削を依頼した「風土記考」の草稿を、無断で『古史微』に取り込み出版したことが考えられる。この間、信友は「前後風土記概論」において、和銅六年の勅により進上されたものを「前風土記」とするのに対して、いわゆる日本総国風土記を延長三年の勅により進上された「後風土記」とする説を出す。ところが、ほどなくして中山信名の「前後風土記概論の弁」で批判され、のちに「風土記考」の日本総国風土記に関する記述を訂正した。信友は篤胤にその箇所の版木を削るよう求めたが、聞き入れられなかった。日本総国風土記の記述が一致しないのは、信友の旧説を支持していたためであったと考えられる。篤胤は「上件三典『古事記』『日本書紀』『新撰姓氏録』に添読べき書」のひとつとして風土記をあげ、日本総国風土記もまた、古伝の構築のために『古事記』『日本書紀』『新撰姓氏録』と合わせて用いるツ

ールのひとつとしてとらえていたことを明らかにする。

「第二章 鈴木重胤の風土記研究―『延喜式祝詞講義』を中心に

―」は、幕末の国学者鈴木重胤の『延喜式祝詞講義』における風土記の利用状況について考察したものである。『延喜式祝詞講義』は、『延喜式』にみえる祈年祭・春日祭など十九の諸祭祀の際に奏上される祝詞について考証・注釈したもので、ここには古風土記だけでなく、駿河国風土記など、今日では偽書とされている総国風土記をも風土記として引用されている。ところが、残念なことに『延喜式祝詞講義』のなかで重胤が種々引用した風土記の史料的价值について言及していない。そこで、『延喜式祝詞講義』における風土記の利用状況の分析を通じて、後世に編まれたものを含め、風土記と呼ばれる書物を一つの地誌、あるいは古文献として認識していたと指摘する。

「第三章 岡平保『播磨風土記考』について」では、幕末から明

治にかけて播磨国揖西郡室津加茂神社の祠官であった岡平保が安政六年（一八五九）に著した『播磨風土記考』を取り上げる。この書物は、五風土記のなかでもっとも流布の遅かった『播磨国風土記』を最初に注釈した書物で、その後出た敷田年治『標注播磨風土記』の跋には、協力者があがっており、そこに平保の名前が見える。『播磨風土記考』は『播磨国風土記』研究の先駆と位置づけられるが、秋

本吉郎『風土記の研究』において若干言及されているのみで、その後の研究において顧みられることがなかった。そこで、『播磨風土記考』に注目し、その概要を述べる。また、本書は夥しい数の附箋を存するのが特徴で、個々の事例の分析により、附箋には書入と貼付の二種類存在することを指摘し、前者は著者の岡平保が、後者はこれを筆写した岡平満によるものであることを明らかにする。

「第四章 岡平保『播磨風土記考』翻刻」では、前章で述べた岡

平保『播磨風土記考』の全文を翻刻したものである。本書は安政六年（一八五九）に著され、『播磨国風土記』研究の先駆でありながら、今日まで未刊で、流布するに至らなかった。本書の写本は、明治二十一年（一八八二）五月、重野安繹によつて謄写された本が東京大学史料編纂所に所蔵されているのみで、風土記研究者の利用の便に供する目的でここに翻刻する。

附論では、風土記と関連が深い書物である『古事記』・『日本書紀』・『隋書』の記載をめぐる問題を取り上げる。

「附論一 「太子」の用語に関する覚書」では、記紀にみえる「太

子」の用例を取りあげる。『播磨国風土記』賀毛郡玉野村条には、意^お奚^け・袁奚^を二皇子に関する次のような伝承がある。

有^二玉野村^一。所以者。意奚袁奚二皇子等。坐^二於美囊郡志深里高野宮^一。遣^二山部小楯^一。詔^二国造許麻之女根日女命^一。於^レ是。

根日女。已依^レ命訖。爾時。二皇子。相辞不^レ娶。至^二于日^一間。
根日女。老長逝。于^レ時。皇子等大哀。即遣^二小立^一。勅云。朝
日夕日不^レ隱之地。造^レ墓藏^二其骨^一。以^レ玉飾^レ墓。故緣此墓号^二
玉丘^一。其村号^二玉野^一。

この伝承は、根日女という女性との結婚をめぐつて意奚（仁賢天皇）と袁奚（顕宗天皇）が、たがいに譲り合うというものである。二皇子の譲り合いの伝承は、『日本書紀』にもみえており、こちらは女性ではなく、皇位を譲り合いであるが、『播磨国風土記』の伝承と通じるものがある。さらに、同国美囊郡志深里条には、意奚・袁奚がこの地に逃れてきた事情を記すとともに、二人の父である市辺押磐皇子を「市辺天皇」と表記している。市辺押磐皇子は履中天皇の皇子で、雄略天皇のために殺害された。この事件の背景には皇位継承をめぐる争いがあったことが推測される。この争いに市辺押磐皇子が敗れたため、二皇子は播磨国へ逃れたとみられる。『播磨国風土記』にはこうした皇位継承争いにかかわる記述がみえることから、ここでは皇位継承にかかわりの深い「太子」の用例を、記紀から抄出し、これらは時期によって意味が異なることを指摘する。

「附論二 大化前代のキサキの序列について―元妃を中心に―」

は、大化前代におけるキサキの序列について論じたものである。播磨・常陸・肥前国風土記や、摂津・伊予・土左・筑紫国風土記逸文

には気長足姫尊に関する説話が多く残されており、神功皇后をたんに「皇后」と表記した記述がみられる。このことから風土記もキサキの問題と関わりのある書物といえる。そこで、キサキに関する呼称のなかで、「元妃」という用語に着目してその意味を検討する。「元妃」は従来まで婚姻の前後関係を示す意味で用いられたと解されてきた。そこで用例を検討すると、「元妃」が生んだ皇子は天皇として即位、あるいは皇位継承有力者となる場合が多いといった特徴がみられる。また、『日本書紀』の編者は当該記事の存する巻を編修するにあたり、中国の類書である『藝文類聚』を参照していること、中国における「元妃」の意味は『春秋左氏伝』にもあるようにキサキの序列を表す「嫡夫人」であることから、婚姻の前後関係ではなく、そこにはキサキ間の序列が存在したことがわかるのである。『日本書紀』の編者はそれを反映するために、あえて「元妃」という表現を用いたということを明らかにする。

「附論三 開皇二十年の遣隋使をめぐつて―坂本太郎氏の所説を中心に―」

は、『隋書』倭国伝にみえる開皇二十年の遣使記事について述べたものである。『肥前国風土記』松浦郡値嘉郷条にみえる相子田停と川原浦は、遣唐使が船発ちする港で、また、松浦郡には「烽火所」とあるなど、『肥前国風土記』は外国との関係や、そこへ赴く使節とのかかわりが深い内容となっている。遣使について取りあげ

ることは、風土記に記された伝承の歴史的背景を明らかにすることにつながると思われる。そこで風土記以外の史書にみえる遣使記事のなかから、『隋書』倭国伝にみえる開皇二十年の遣使記事を取り上げて検討したい。この開皇二十年の遣使に該当する記述は『日本書紀』には見えないことから、遣使回数をめぐり多くの議論がなされてきた。坂本氏はかつて開皇二十年の遣使を、隋の国情偵察のための非公式な使いとしていたが、のちに「大和朝廷の派遣した使節ではなく、どこか九州・山陽あたりの豪族が、私に派遣した使にすぎない」と述べて自説を改めた。坂本氏が自説を改めた三点の根拠は、

(1) 『日本書紀』にふれていないこと。

(2) 開皇二十年（推古天皇八年）は新羅出兵の開始された年であること。

(3) 「姓はアメ、字はタリシヒコ、号はオホキミ」という使者の述べた天皇の称号。

である。これらの点については、『隋書』東夷伝に記される高麗伝・百濟伝・新羅伝との比較、煬帝の外交方針から論じていく。東夷の諸国は、ちょうど同時期に遣使を行っており、開皇二十年の遣使も、隋側では倭からの正式な使者とみられていたと考えられる。『日本書紀』にこの遣使のことが記されなかったのは、倭側としては特

筆されるほどの成果をあげられなかったのではないかと思われる。坂本氏の説は、むしろ旧説の方が妥当ではないかということを述べる。

第二部 『肥前国風土記』とその受容では、五風土記のなかで、

特に『肥前国風土記』を取りあげ、校訂を試みるとともに、『肥前国風土記』研究の先駆である糸山貞幹の『肥前風土記纂註』について考察する。

第一章 『肥前国風土記』校訂では、現存する『肥前国風土記』

の写本でもっとも古く、平安末期の書写とされる猪熊信男氏旧蔵本（猪熊本）を底本とし、南葵文庫本・荒木田久老校訂版本・井上通泰『肥前風土記新考』・平田俊春氏校訂本・田中卓氏校訂本・沖森卓也・矢嶋泉・佐藤信氏校訂本を対校本として校訂し、訓読を附した。

第二章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』についてでは、肥前国

佐賀藩出身の糸山貞幹によって著された『肥前風土記纂註』を取りあげる。本書は未刊であるが、『肥前国風土記』研究の最初にして詳細な注釈書であり、明治二十一年（一八八八）の草稿（国立国会図書館蔵本）から十一年後の明治三十二年（一八九九）に出た栗田寛の『標注古風土記』をはじめとする研究に盛んに引用され、後の風土記研究に大きな影響を与えた書物である。本章は、この成果に注目し、

『肥前風土記纂註』の書誌的概説、注釈の特徴、これまで不明とされてきた佐賀県立図書館所蔵丙本がどの本を書写したものなのかを明らかにし、『肥前風土記纂註』の注釈書としての価値を論じる。

「第三章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』翻刻と校訂」では、かつて植垣節也氏によって校合・校訂がなされたが、加筆・訂正により諸本の異同がはなはだしく、分量も大部なために全文翻刻には至らなかった『肥前風土記纂註』の全文翻刻および校訂を試みる。翻刻の方法は、「明治三十四年（一九〇二）七月中清書」とあり、最も完成度の高い稿本を書写した佐賀県立図書館所蔵乙本を底本とし、「明治二十一年（一八八八）七月中清書」とあり草稿の写しの国立国会図書館所蔵本・「明治廿七年（一八九六）其後段々書入八月中清書」とあり貞幹の自筆稿本の佐賀県立図書館所蔵甲本・貞幹の序文と総記のみを書写した佐賀県立図書館所蔵丙本を対校本とした。

「二、『肥前風土記纂註』所引『肥前国風土記』では、『肥前風土記纂註』に引かれた風土記本文のみを校合・校訂した結果を掲げる。底本・対校本は前章の全文翻刻に準じ、そこに糸山貞幹校訂『肥前国風土記』（佐賀県立図書館所蔵）を加え、底本の誤脱を正すことを目的とする。

第一部 国学者の風土記研究

第一章 平田篤胤と風土記

—『古史徴開題記』を中心に—

はじめに

幕末の国学者平田篤胤は、安永五年（一七七六）秋田藩士大和田清兵衛祚胤の四男として生まれ、寛政七年（一七九五）に脱藩して江戸で学問に励み、寛政十二年（一八〇〇）に備前松山藩士平田篤穩の養嗣子となる。享和三年（一八〇三）に本居宣長の影響を受け、宣長の長男の春庭に入門して国学の道を志し、自ら宣長没後の門人と称す。入門後は古道・古典の研究に力を注ぎ、文化九年（一八二二）に『靈能御柱』を、文政元年（一八一八）に『古史成文』を、文政二年（一八一九）に『古史徴』を、文政五年（一八三二）に『仙境異聞』を著すなど、多数の著述を世に遺した。

また、篤胤は荷田春満・賀茂真淵・本居宣長とともに国学四大人の一人とされ、荷田春満や賀茂真淵らが提唱し、本居宣長によって体系化された復古神道を大成した人物でもある。しかし、本居宣長が古道や古典に基づく実証主義を重んじていたのに対して、篤胤は

『仙境異聞』に代表されるように、独特の幽冥信仰によって国学を宗教化していった。そして天保十二年（一八四二）に幕府の忌諱に触れ、著述活動の禁止と江戸からの退去を命じられ、故郷の秋田へ戻り隠居生活をし、天保十四年（一八四三）に歿する。篤胤の著作や門人たちから広まった思想は、幕末の尊皇攘夷派に大きな影響をあたえた。

篤胤は、古典に深い関心を寄せていたが、とりわけ風土記には興味があり、当時流布していた常陸・出雲・肥前・豊後の四風土記に加えて、風土記逸文も独自に蒐集していたようである。『古史徴開題記』によると、今井似閑の『萬葉緯』や伴信友の風土記逸文蒐集の成果にそれらが洩らした逸文を独自に補って「古風土記逸文」¹としてまとめたという。

篤胤は、江戸で国学を志していた頃、様々な国学者との交流があったようで、特に文化二年二月二十四日に篤胤が本居宣長の養嗣大平の紹介で「鬼神神論」を持参して訪問したのがきっかけで、大平に師事していた伴信友と出会い、学問に対する志や、篤胤の三歳上という年齢の近さからも意気投合し、兄弟と呼ぶまで親しい仲となつたようである²。後述するように、信友との学問的交流が、信友の意図しないところで篤胤の著述に影響をあたえていることは明らかであろうと考えられる。

ところで、篤胤の代表的な著述に、篤胤が四十三歳の文政元年（一八一八）から四十四歳の同二年（一八一九）にかけて刊行された『古史徴』がある。『古史徴』は全四巻からなり、古伝説・神代文字・古典籍などについて述べたものである。この『古史徴』の各巻には開題記という文献解題が附されており、のちにこれらの開題記のみをまとめて、文政二年（一八一九）に『古史徴開題記』と題して刊行している。『古史徴開題記』では、『古事記』『日本書紀』『新撰姓氏録』の三典に添え読むべき書のひとつとして風土記のことが詳しく取り上げられている。もともと、同書の風土記に関する記述は伴信友の『比古婆衣』所収の「風土記考」（『伴信友全集』第四巻、ペリカン社、一九七七年八月）の影響が色濃くみられるので、両者を比較することは篤胤の風土記観を知る大きな手がかりとなる。そこで、以下、小論では『古史徴開題記』にみえる篤胤の風土記観を、信友の「風土記考」と比較しつつ検討していきたい。

一、平田篤胤『古史徴開題記』と伴信友「風土記考」

風土記については、『古史徴』の一之巻秋の開題記で、およそ一五〇〇〇字にわたって詳しく述べられているが、この三分の一にあたるおよそ五〇〇〇字が伴信友「風土記考」の文章と完全に一致して

いる点に注意しなければならない³。特に四風土記・古風土記逸文に関する部分については、注も含めて「風土記考」の文をほぼそのままの形で引用しており、篤胤独自の見解というのは皆無といってよい。例えば、「風土記考」で『出雲国風土記』について述べた箇所

また出雲風土記は天平五年二月卅日勘造とあればかの和銅六年より二十年ばかりの後に進れる物なり、此は和銅の詔命によりて進れりし後故ありて再勘へて進れる記なるべし（「また釈記に引たる土佐国風土記に、高野天皇宝字八年云々と記せる文あり、此は出雲風土記を勘進せる天平五年より三十年後のことなり、また萬葉集抄に引たる筑前風土記に、当奈羅朝天平四年歲次壬申とあるも彼天平五年の前年にて間近きが上に、当奈羅朝とあれば、今の京となりての文なり、（後略）（二七七頁下段）

とあるが、『古史徴開題記』（岩波書店、一九三六年九月。以下の頁数は本書による）にも、

また出雲風土記は、天平五年二月卅日勘造とあれば、かの和銅六年より二十年ばかりの後に進れる物なり。此は和銅の詔命によりて進れりし後、故ありて再勘へて進れる記なるべし。（「また釈記に引たる土佐国風土記に、高野天皇宝字八年云々と記せる文あり。此は出雲風土記を勘進せる天平五年より、三十年後のことなり。また萬葉集抄に引たる筑前風土記に、当奈羅朝天平四年歲次壬申」とあるも、彼天平五年の前年にて間近きが上

に、当_二奈羅朝_一とあれば、今の京となりての文なり。(後略)(二五〇頁)

となっており、返り点の有無や句読点の位置や数に違いはあるものの、全く同一の文となっている。特に注目したいのは、傍点部の「高野天皇宝字八年」の文言である。これは『釈日本紀』所引の「土佐国風土記に…」として引用されている一文である。伴信友は、古風土記の逸文を蒐集して『諸国風土記逸文』⁴としてまとめているが、そのなかで、この『土佐国風土記』の逸文について、つぎのように記している。

土佐国風土記曰。土左郡。々家西去四里。有_二土左高賀茂大社_一。其神名爲_二一言主尊_一。其祖未_レ詳。一説曰。大穴六道尊子味鉏高彦根尊。曆録曰。雄略天皇四季庚子春二月。天皇獵_二于葛城山_一。忽有_二長人_一。面形似_二天皇_一。々々知_二是神人_一。故問。何処公。対曰。現人神。願称_二皇諱_一。答勅。朕是稚武尊。長人曰。僕是一言主神也。遂与般于遊田。言辞恭恪。有_レ若_二逢仙_一。日斜田罷。神送_二天皇_一至_二来目川_一。郡臣各脱_二衣服_一而献。神拍_レ手而受_レ之。凌_レ空而還。一説。懸_二一指末_一而受_レ之。是時。咸知有德天皇矣。或説云。時神与_二天皇_一相競有_二不遜之言_一。天皇大瞋。奉_レ移_二土左_一。神随而降。神身已隱。以_レ祝代_レ之。初至_二賀茂之地_一。後遷_二于此社_一。而高野天皇宝字八年。從五位上高賀茂朝臣田守等奏而奉_レ迎_二鎮於葛城山東下高宮岡上_一。其和

魂者。猶留_二彼国_一。于_レ今祭祀而云々。国記曰。雄略天皇即位二年戊戌。奉_レ移_レ郷者。誤也。多氏古事記曰。天皇一時獵_二葛城山_一。向堆之上。有_下如_二天皇儀_一者_上。彼此同容。天皇大異。遣_レ使問曰。大倭之国豈有_二如_レ朕之人_一。你是誰。何与_レ朕同僕耶。大神所_レ答之辞。与_二天皇_一同。天皇懷_レ瞋更問。然則称_レ名。大神答曰。先問_レ吾者汝也。汝宜_二先称_一之。天皇勅答。朕是大倭根子稚武天皇也。大神答曰。吾是吉事一言。凶事一言。々放之葛木一言主神也。天皇大驚。下_レ馬而拜。百官羅拜。大神答拜。又如_二天皇_一。而共狩_二山獸_一。言語相通者。蓋疑此時有_二不恭之言_一乎。論者曰。夫神祇者。陰陽不測。与_二寂寥虛無_一。利用出入。民咸用_レ之者也。雖_下懷_二自然之聰明_一。蘊_中自然之猛烈。而不_レ得_レ勝_二於天皇之威_一。而慝_二質幽冥之境_一。降_二魂辺鄙之邦_一。是所謂剛而柔弱。以_レ蒙養_レ正。妙_二万物_一而為_レ言。不_レ可_二以_レ形語_一者也。而今女巫計_レ利仮威。宜設頑_レ俗。迷溺流弊。不_三止非_二鎖禍招_レ福。調_レ氣和_レ物之本意者也。今正月十五日立_レ例。百姓相聚行_二射礼於社下_一。五月下旬。申_二南畝功竟之事_一。月上旬貢_二封戸調物_一。国司必向。自_レ古成_レ蹤。これをみると、『土佐国風土記』の本文は引用部_二行目の「大穴六道尊子味鉏高彦根尊」までであり、「高野天皇宝字八年」の文言を含む文は、『土佐国風土記』に続けて引かれている『曆録』、もしくは

引用部分九行目の「或説云」とある文であることがわかる。ところが、信友は、それだけでなく、『曆録』と、さらにそれに続く『国記』・『多氏古事記』および「論者曰……」として何者かの説を引いたところまでを『土佐国風土記』の逸文と考えていたようである。信友はこれをもとに「風土記考」を執筆したために、「土佐国風土記に、高野天皇宝字八年」と誤って記したと考えられる。

いっぽう、『古史徴開題記』に目をやると、篤胤もまた「土佐国風土記に、高野天皇宝字八年云々」と記しているのである。もしも篤胤が直接『釈日本紀』所引『土佐国風土記』を見ていれば、「高野天皇宝字八年云々」の文言が『釈日本紀』のものでないことに気がついていただであろう。しかし「風土記考」の文をそのまま使用したために、信友の誤りを踏襲することになったのである。

また、各国の風土記の体裁が異なっている理由と古風土記の成立時期について、「風土記考」では、つぎのように記している。

総て風土記は各国にて記せる書にして撰者も各別なれば必しも文法は等かるまじき理なり、然れば何れを何時のと慥かに知べからねど上に論へる風土記どもは決く延長より已前に成たる物なる事は、違ふまじくぞ所思ゆる、(二七八頁)

これに対し、『古史徴開題記』には、

総て風土記は、各国にて記せる書にして、撰者も各別なれば、

必しも文法は等かるまじき理なり。然れば何れを何時のと慥かに知べからねど、上に論へる風土記どもは、決く延長より已前に成たる物なる事は、違ふまじくぞ所思ゆる。(二五一頁)

とあって、両書の記述には全く異なる部分がみられない。『古史徴開題記』だけを見れば、あたかも篤胤は自説を展開しているかのような印象を与えるが、実は信友の説そのものである。

さらに『出雲国風土記』の総記にある「得而難可誤」という前後の文脈と矛盾する五文字をいかに解釈するかについて、「風土記考」では次のように記す。

さて普通の本に右の文の上に字を下て得而難可誤といふ五字一行あり(二本には小字に書きまた此五字なき本もあり)此は後人の此の文の意を得がてに得而難可誤と傍書したるがまた後人の読を誤にあやまりて固有の文と思ひ混へて一行に記せる物なりと云へるは誠に然る説等なり(上件論へる説どもを委曲に読弁へて古風土記なる事どもを考へ通し、古事記日本紀に洩れたる伝を撫ひ採りて其闕たるを補ふべき物なりかし)(二二八〇頁)

信友は「得而難可誤」について、後の人が「得而難可誤」と傍書したのを、またさらに後の人が、もともと『出雲国風土記』にあったものと思つて混同したものであるとする先学を紹介している。そこで、今度は『古史徴開題記』に目を転じると、

さて普通の本に、右の文の上に字を下て、得而難可誤といふ五字一行あり。「二本には小字に書き、また此五字无き本もあり。」此は後人の此の文の意を得がてに、得而難^レ可^レ読と傍書したるが、また後人の読を誤にあやまりて、固有の文と思ひ混へて、一行に記せる物なり。と云へるは誠に然る説等なり。「上件論へる説どもを、委曲に読弁へて、古風土記なる事どもを考へ通し、古事記、日本紀に洩れたる伝を撫ひ採て、其闕たるを補ふべき物なりかし。」(二五六頁)

となつており、本文・注とも寸分たがわず一致しているのである。

さて、以上、信友の「風土記考」と篤胤の『古史徴開題記』の一部を三例にわたつてあげたが、『古史徴開題記』で、さも篤胤の自説のように書かれている文は、いずれも「風土記考」とほとんど違ふことなく一致しており、信友の説を篤胤が自ら説のとしたと考えられる。

こうした篤胤の姿勢について、信友は「風土記考」のなかで次のように書いている。

さて又それより先に彼下書を平田篤胤に見せかたらひたるに、志ばしとて持去きて写しおきたりとて己にも知らせず古史徴の開題記にとり載て板本にさへものしたりき、すべてかたなりなる考書などは謾に人に借しては見すまじきもの也とはかねて思ひながら心ゆるびてけりと悔れどもかひなし、自閑がかの與古

書合符節と書るも後には悔たりけむかし、(二八二頁)

これによると、信友は「風土記考」の草稿を、当時交流が盛んだった篤胤に見せたところ、篤胤はしばらくの間、その草稿を借りて写しとり、信友には知らせずに『古史徴開題記』として刊行してしまったという。そのため、信友は草稿を他人に見せたことを後悔したのである。『古史徴開題記』が刊行されたのは文政二年(二八一九)であるから、「風土記考」の草稿がそれ以前にあったことは確かだが、「風土記考」を収めた『比古婆衣』の刊行は、信友が歿した翌年の弘化四年(二八四七)から明治まで続いており、草稿自体はいつでもたものか特定できない。

さらに、弥富破摩雄氏が引用する信友の門人山岸蝸亭の記⁵には、其頃篤翁、古史徴を被撰候砌の事にて、御家翁にも同じ筋の事御心付有之御草稿を被起候砌故、元と篤翁は博識多才の英士を御承知専ら御相談被成候事故篤翁来訪の砌、彼の御草稿を御見せ心付もあらば、添削致し呉候様御頼みに相成候故、持帰られ兎角と云はず、暫くありて篤胤古史徴を出版し、一覽致し呉様被申越候に付、御披見の所、出版中に彼の御草稿を尤に被存候や、相談もなく、信友曰々々々として、数個條被出候、御家翁御草稿一通り書き終られ候迄にて、甚御不服にて、版面削去被呉候様、御懸合相成候処、篤翁の返答に、君と我との眼裏、誰

世間に褒貶可致者あるまじくとの返答に付、御家翁益々御立腹あつて、夫よりの事にや、其の頃古史徴五十部か、百部か刷り出しに相成たる中を、御家翁にも一部送られたるなり。御家翁その書の全部も御心付之事故も有しか、学風の目的異変もありしか、蝸亭江戸へ始めて出たる時の事なれば、不知……例の御晩酌の折に、御詞に出で、篤翁博識多才は実に御残念に被思召候へ共、何分慢心は不恐々と仰にて、風上には可置人物にあらずとの仰にて度々伺ひしことなりき、個様の事にて御絶交にも相成りしにや……

とあり、これによれば、信友が篤胤に添削を依頼した草稿を、篤胤が無断で「信友曰々々」として『古史徴』に取り込み出版したという。これを知った信友は、篤胤に版面を削るように抗議したが、聞き入れられず立腹したという。当時『古史徴』は五十〜百部ほど印刷されていて、その中の一部を信友に送っている。信友はこの一件について、晩酌の折にたびたび蝸亭に愚痴をこぼしていたようであり、篤胤を「博識多才であるが残念で、風上には置けない人物」とまで評している。

ところで、「風土記考」と『古史徴開題記』の文の一致は、篤胤に旧説を引用されたことについて言及している文よりも前に集中しており、それ以降は文章の一致する箇所が少ない。おそらく、信友が

後半部分を加筆・訂正したか、あるいは、後半は篤胤が信友と異なる見解をもっていたからであろうが、後述するように、前者の可能性が大きいと思う。

ちなみに、篤胤は、信友の「日本書紀考」も同様に『古史徴』一之巻春に引いている⁶。さきに信友の「日本書紀考」『伴信友全集』巻四、『比古婆衣』所収、ペリカン社、一九七七年八月）からあげておく。

日本書紀、もとは日本紀と題られたるを、おほよそ弘仁の年中より、文人たちの書字を加へて、日本書紀とも称へるより起りて、遂に題名となりしと見えたり。然るは続日本紀に、養老四年云云舍人親王奉勅修日本紀と有を始め、六国史は更なり。古書どもには、悉く書字なきを、釈日本紀に引たる、この紀の弘仁私記序に始めて日本書紀と見えたり。（日本後紀に、弘仁三年六月戊子。是日始令参議從四位下紀朝臣広浜。陰陽頭正五位下阿倍朝臣真勝等十四人講日本紀。散位從五位下多朝臣人長執講とあり此時の人長の私記なり。永正奥書本の書目録に、弘仁四年私記三卷、多朝臣人長撰とあり。）また此紀の竟宴歌の本に、延喜六年天慶六年の度ともに日本紀竟宴各分⁷史得⁸云云「并序と書き出して（これより前、元慶六年の度も、日本紀竟宴云云とありて、序文はなし。）其序文には、ともに日本書紀と書り。（此竟宴歌の書は、契沖が宗尊親王の真跡なりといふを、肥後国熊本にて臨摸し来れるを、元禄十三年に、今井似閑に与へたる自筆本による。普通の写本には、延喜六年の序文には、

書字脱たり。」これら決く、文人の潤色作為なるを、始めに日本紀
竟宴と書出たるは、旧名に依れるなるべし。「文章のいたく漢ざまな
るをと思ふべし。さて延喜六年の序の作者は、三統宿祢理卒なり。」(後略)(五頁)
これに対して『古史徵開題記』の該当箇所をあげておくと次のと
おりである。なお「日本書紀考」と一致する部分はゴシックにした。

さて此紀の題号の事、かく記して信友に見せたるに、己が年頃
思へるやうは、此に異なりとて、かねて記しおける考を取出した
る其説に、此紀元は日本紀と題られたるを、大よそ弘仁の年中
より、文人たちの書字を加へて、日本書紀とも持称せしより起
りて、遂に題名となりしと見えたり。然るは続日本紀に、養老
四年云云舍人親王奉勅修日本紀と有を始め、六国史は更なり。
古書どもには、悉く書字なきを、釈日本紀に引たる弘仁私記序
に始めて日本書紀と見えたり。「日本後紀に、弘仁三年六月戊子。是日始令
參議從四位下紀朝臣広浜。陰陽頭正五位下阿倍朝臣真勝等十四人讀日本紀。散位從
五位下多朝臣人長執讀とあり此時の人長の私記なり。永正奥書本の書籍目録に、弘
仁四年私記三卷、多朝臣人長撰とあり。」また此紀の竟宴歌の本に、延喜
六年天慶六年の度ともに日本紀竟宴各分レ史得ニ云云「井序と書
き出して」これより前、元慶六年の度も、日本紀竟宴云々とありて、序文はなし。」
其序文には、ともに日本書紀と書り。「此竟宴歌の書は、篤胤が蔵書に
て、契沖が鎌倉中書王の真跡を、肥後国熊本にて得て、臨摸して元禄十三年に今井

似閑に与へたる、真筆の本による。普通の本には、延喜六年の序文には、書字脱た
り。」これら決く、文人の潤色作為なるを、始に日本紀竟宴と書出
たるは、旧式に依れる物なるべし。「いたく漢めかしたる文章をも思ふ
べし。延喜六年の序の作者は、三統宿祢理卒なり。」(後略)(八四〇八五頁)
こうしてみると、篤胤は信友の草稿を自説に取り込むということ
を「風土記考」以外にも幾度となく行なっていたようである。

こうした「引用」に関して篤胤は『古史本辭経』(新修平田篤胤全集
第七卷所収、名著出版、一九七七年十月、三六〇四三頁)で次のように述べてい
る。

さて是の頃或人。むかし我が友とせし伴信友が。假字の本末て
ふ書を。もて来て見せたり。此は前に古史徴の開題記を物せし
時。また日文伝を物せる時など。少か力をも加たる人なり。故
其の囑みに依りて。何くれと其の説等をも取容れて。世に其の
名をも令知たりき。「但し其の説等の中に。元より己が意に合ざる事も有つれ
ど。其の囑みの黙止がたき故も有しかば。己が説と並べ載して。取舍は見る人の扱
びに任せたる也けり。然れど今思へば。後悔なる事ども多かる。其の事等は。別
に著はす書等の。因々に云ふべし。」(中略) 然てかく此人に益を得つゝ。
十五年ほど交らひける文政二年に。かの古史成文同く徴などを
板に彫るとき。信友いひけらく。己は才短く。はた仕へ事しげ
く暇なきが上に。身の病さへ屢発り勝なれば。息の内に功成さ

む事覚束なし。汝は心さ生れがらにて。思ひ立たる事は。必ず
遂べき益荒男なり。己が掛ても及ぶべき限に非ず。今よりは。
己が負気なき書撰の心を棄て。大人の功事の成るを待てむ。今
日まで集めたる書どもも。片成なる考説の下書をも。皆がら譲
るべし。取るべきは取り。捨べきは捨給へと。物に書ても唆か
し云ふに。諾と云て。彼人の名をも。世に知らしめむと。彼開
題記に。其説をもあまた書載たりけり。然るに吾にも侘にも。
学びの外なる事にて。我が学びの兄弟とも頼める人に。有まじ
き事とおぼゆる行ひの。何くれと心著て有しかど。云ひ難き事
なるに。況ては善を責て。友を失へる例も有れば。かの国がら
の本性など出むには大事なり（後略）

これによれば、信友の頼みによつて自説とは合わない事もあつた
が、断わることができずに信友の説を紹介し、信友の名を宣伝して
やったのだという。そして、文政二年に『古史成文』・『古史徴』を
出版するときになって、信友が自らの不才と多忙、病気を理由に、
今まで信友が集めた書物と著述の下書をすべて譲るから取れるところ
は取つて、捨てるところは捨ててよいと唆されたから、信友の名
を世に広めようと、『古史徴開題記』に信友の説をたくさん引用した
という。これを信じれば、篤胤は、信友の説を引用したのはあくま
で彼の名を広めようとしたからということになり、篤胤に草稿を見

せたら本人の了解なしに無断で『古史徴開題記』に取り入れられた
とする信友の言い分とは真つ向から対立する。いずれの言い分が正
しいかは一概に判断しかねるが、すでにみたように、篤胤が『古史
徴開題記』において信友の学説をあたかも自説のように書き記して
いることは事実で、この点では篤胤は学問上のエチケットを欠いて
いるといわざるをえない。

いずれにしても、この一件をきっかけにして、かつて兄弟と慕い
合っていた篤胤と信友の間に軋轢が生じるのである⁷。

二、日本総国風土記

これまで述べてきたように、四風土記・古風土記逸文に関する記
述は伴信友の「風土記考」の草稿を篤胤が借り写して、信友に無断
で『古史徴開題記』の版木に彫つたものである。しかし、それは『古
史徴開題記』の全体の三分の一程度であり、それ以外は信友の説を
採用していない。この点については、前述のように、信友が後半部
分を加筆・訂正したか、あるいは、後半は篤胤が信友と異なる見解
をもっていたため、あえて採用しなかったかのいずれかであろうが、
おそらくは前者であろう。

信友の「風土記考」の特徴として、総国風土記を文体や内容から

「古にも後にも合はざる謾なる事どもを志どけなく書なせる偽書なり」(二八二頁)とあるように、後世の偽作として総国風土記の史料価値を否定する立場をとっている。

これに対して『古史微開題記』では、総国風土記の史料性を説明するため、全体の三分の二にあたる約九〇〇〇文字を費やしており、日本総国風土記に対するこだわりのようなものが感じられる。総国風土記に関する部分でも信友の説を引いている箇所はみられるが、四風土記・古風土記逸文の箇所と比較すると、断片的に一致するのみである。

篤胤は総国風土記の史料価値について、おもに二点にわたって述べている。

①文和年間(二三二～三五九)の中原師行の奥書した本をはじめ

嘉慶(一三八七～一三八九)・文亀(一五〇一～一五〇四)・弘治(一五五

五～一五五八)・天正(一五七三～一五九三)年間に別の人が奥書した

ものがあり、それぞれの巻をみると寛文(一六六一～一六七三)・万

治(一六五八～一六六二)の頃に写したものもあること(二五六頁)

②諸本は誤写・誤字脱字・交錯が多いこと(二五七頁)

篤胤は、この答えとして、①或人が言うように、これらの奥書は後人が珍しく見せようとして書き入れた事も考えられる(二五七頁)、②もとは巻物であって、継ぎ目が切れたり虫食いによって裂けたの

を修復するときに順序をあやまったため(二五七頁)、という。そのうえで総国風土記の成立年代を「後三条天皇の御代に召れたる物」とか「鎌倉前後に次々記したる書」(二七三頁)とみて「むげに捨つべき物に非ず」(二七三頁)という評価をくだしている。

総国風土記を擁護する立場ともいえるべき篤胤の見解は、実はかつての信友の説の影響を受けたものであると推測される。というのは、信友は文化十二年(一八一五)に「前後風土記概論」(栗田寛『纂訂古風土記逸文 全』(大日本図書株式会社、一八九八年八月)所収)と題した論を発表している。これは、現存する出雲・肥前・豊後・常陸と、『日本紀』および『萬葉集註釈』に引用された逸文を古風土記、すなわち「前風土記」といったのに対して、総国風土記については、

前風土記とは、書の体裁も別にして、文章のさまも後めきて、やゝ劣り、又いかにぞやとおもはるゝ事少からず、めでたき書なるを、たゞ駿河のみは、大方全くて、其を除きては、みな全からず、いとあたらしき事なりかし

と述べ、体裁や文体が後世のもので劣っていることなどから、総国風土記を、和銅六年の勅をうけて進上された古風土記と区別して、それよりも新しい延長三年の勅をうけて進上された「後風土記」であるとした。信友は「前後風土記概論」を執筆した段階においては、総国風土記を偽書とはみてはいなかったのである。ところが「前

後風土記概論」が出てほどない、同年五月に中山信名が「前後風土記概論の弁」(栗田寛『纂訂古風土記逸文 全』(大日本図書株式会社、一八九八年八月)所収)と題した論考において、

近き世にいかなる者か、日本総国風土記といふ、みだり文を作りて、世人をあやまつわざをなしつれど、はやうさとり得てうけぬ人も多かるを、このほどなにがしかやいふ人の、前後風土記概論といふ、ふみをつくりたるを見るに、総国風土記をも、いとふるきものゝよしに記したれば、いよゝ世人をあやまたむことの、いとおしさに、この論をば云出たる也

といい、信友の説を痛烈に批判している。こうした信名の批判に対して信友は「風土記考」において、

余わかゝりし頃古書を好む意にはかられて本文をばよくも読考へずしてたゞまづこれ作らせ給ひたりけん頃などを考へてよく採撰ひて考に備ふべき書なるべくおもひて、まど試におろく下書なるものを書ささびおきつるを、年経て後に取出し見ておもへばあらぬ強言してありけりとおもひなりぬ、其頃中山信名は古の制度どもを委しく心得たれば此事かたらひたるに其古にあらぬ事どもを明めて偽書なるよしを論へるによりていよ、前の考に強説せる誤をさととりてわれながらあさましく背に汗あむばかり恥かしくてなむ

といい、信名の批判を真摯に受け止め、「風土記考」では総国風土記に対する考えを改めている¹⁾。しかし、信友には気がかりなことがあった。それは前に引用した「風土記考」の文に続けて次のような記述がある。

さて又それより先に彼下書を平田篤胤に見せかたらひたるに、志ばしとて持去きて写しおきたりとて己にも知らせず古史徴の開題記にとり載て板本にさへものしたりき、すべてかたなりなる考書などは謾に人に借しては見すまじきもの也とはかねて思ひながら心ゆるびてけりと悔れどもかひなし、自閑がかの與古書合符節と書るも後には悔たりけむかし、(二八二頁)

これによると、信友は信名の批判によって自説を改める前に「彼下書」、すなわち「風土記考」の草稿を篤胤に見せたところ、篤胤はしばらくの間、信友からその草稿を借りて写しとり、信友に知らせずに『古史徴開題記』として刊行してしまったという。だとすれば、『古史徴開題記』にある総国風土記の記述は信友の旧説ではないかと推測できる。

しかし、『古史徴開題記』で述べられた総国風土記の成立年代に注目してみると、「後三条天皇の御代に召れたる物」とか「鎌倉前後に次々記したる書」と述べた箇所は「前後風土記概論」にないので、篤胤の見解とみることもできよう。

篤胤が写した「風土記考」の草稿で、総国風土記はどのように論じられていたのかを知ることができないが、信友が自説を改めた後の「風土記考」（『比古婆衣』所収）と断片的に一致するところがあるから、『古史徴開題記』にある総国風土記の箇所は、信友の旧説をもとに篤胤の考えを加えたものである可能性も考えられる。

中山信名が信友の旧説を批判してから『古史徴』の出版がはじまるまで、二年ほどの時間があつたので、この頃の篤胤と信友の親密な交流の様子から、信友が自説を撤回したことを知る機会があつたと思われる。それにもかかわらず旧説のまま引用し、さらに自らの説を加えたのは、信友の旧説を支持し、総国風土記に対して一定の価値を見出していたことの表われではないだろうか。

このようにして、篤胤が総国風土記の価値を評価していた背景には、早川万年氏のように「古伝説の探求」が根本にあつたと考えられる¹¹。篤胤は古伝を構築するために記紀や風土記などの史料をその根拠として用いており、古伝の構築に適当な文献と判断すれば用いるという、史料の価値そのものに対しての批判は甘く、寛大な態度をとっていることがうかがえる。

おわりに

以上、『古史徴開題記』から平田篤胤の風土記観をみてきたが、たびたび例にあげたように、篤胤の風土記に対する考えは、四風土記・古風土記逸文については伴信友の「風土記考」の草稿をほぼそのまま自説として引用していることから、信友の説とみて誤りない。

総国風土記については、「前後風土記概論」の段階では偽書とみていなかったが、中山信名の批判から、「風土記考」で総国風土記を偽書として自説を改めているが、篤胤は信友の旧説を引用し、そこに自説を加えたために一致するところが少なくなったとみられる。また、すでに中山信名らによって史料の価値の否定された総国風土記を論ずるために、風土記の項の全体のおよそ三分の二にもおよぶ紙幅を費やしており、篤胤の総国風土記に対する評価の高さがうかがえる。信友や中山信名の関心が総国風土記の史料の価値を論ずることにあつたのに対して、篤胤の関心は総国風土記が偽書か否かということよりも、古伝の構築に適当な文献であるかどうかという点にあつたのではないかと考えられる。

篤胤は「上件三典『古事記』『日本書紀』『新撰姓氏録』に添読べき書」のひとつとして風土記をあげており、総国風土記もまた、古伝の構築のために『古事記』『日本書紀』『新撰姓氏録』と合わせて用いるツールのひとつとしてとらえていた。そのため、偽書として顧みられなくなった総国風土記に対する篤胤のこだわりは、早川氏がいう

ように、すべては「古伝説の探求」¹²のためにあったのではないかと思う。

〔補注〕

¹ 篤胤の風土記逸文蒐集については、篤胤の著述目録（谷省吾「大壑先生著撰目録」『平田篤胤の著述目録』皇學館大學出版部、一九七六年八月）によれば、

校正逸風土記 二卷

此は出雲。豊後。肥前の風土記を除きて。常陸風土記。及び諸書に引たる古風土記の逸文を摭ひ集め。校正して訓を加られし物なり。

とみえ、おそらく「校正逸風土記」のことを指していると考えられる。しかし、「校正逸風土記」は現存しておらず、確認できないが、後述のように篤胤は信友説をたびたび引いていることから、篤胤独自のものかどうかはわからない。

² このことは後に引用する平田篤胤「古史本辞経」『新修平田篤胤全集』第七卷（名著出版、一九七七年十月）所収）に詳しい経緯が記されている。また篤胤と信友の交渉と絶交までの経緯については、渡邊刀水「平田篤胤と伴信友との交渉」『東洋文化』一二三、一九三四年九月、のちに『伴信友全集』別巻（ぺりかん社、一九七九年

六月）所収）に詳しい。

³ 『古史微開題記』と「風土記考」の関係について言及した先行研究は管見の限り見あたらないが、山田孝雄校訂『古史微開題記』（岩波書店、一九三六年九月）では、風土記に関する箇所は『比古婆衣』所収「風土記考」を底本としている。

⁴ 宮内庁書陵部所蔵自筆本の外題は「諸国風土記逸文」、内題は「古本風土記逸文」となっている。また自筆本・写本・写本の系統については、荊木美行「伴信友『古本風土記逸文』について」『風土記逸文の文献学的研究』所収、学校法人皇學館出版部、二〇〇二年三月）を参照されたい。

⁵ 弥富破摩雄「平田篤胤と伴信友―主として其の絶縁問題に就いて―」『國學院雜誌』三八・九、一九三二年九月）

⁶ 佐伯有清・関晃「伴信友の学問と『長等の山風』」（日本思想大系五〇『平田篤胤 伴信友 大國隆正』（岩波書店、一九七三年九月）所収。「日本書紀考」も同様に『比古婆衣』に所収『伴信友全集』

第三卷、ぺりかん社、一九七七年八月）。

⁷ 古史微の出版を期に両者の間で軋轢が生じたが、篤胤の日記によると、その後も信友はたびたび篤胤のもとを訪ねていたようである。この件については渡邊刀水「平田篤胤と伴信友との交渉」『東洋文化』一二三、一九三四年九月、のちに『伴信友全集』別巻（ぺりか

ん社、一九七九年六月）所収 および田原嗣郎『平田篤胤』（吉川弘文館、一九六三年八月）が詳しいため参照されたい。

⁸ 栗田寛『纂訂古風土記逸文 全』（大日本図書株式会社、一八九八年八月）所収、一六頁。

⁹ 栗田寛『纂訂古風土記逸文 全』（大日本図書株式会社、一八九八年八月）所収、二五～二六頁。中山信名は総国風土記について、「東山院の御代」すなわち元禄期の偽作とする。なお、中山信名による伴信友の説の批判の詳細は、早川万年「風土記逸文の採択と日本総国風土記」（『風土記研究』四、一九八七年七月）を参照されたい。

¹⁰ ただし信友が偽書と認めたのは駿河国風土記と同一の記載形式をとるものであって、山城・伊賀・尾張については「所謂風土記どもの中に山城伊賀尾張のはたゞ風土記と題して（中略）其書ざまなべての総国とあるとは異にていさゝか其国の事記せる古き書に拠り、おろ／＼古伝説をもとりて記せるものなるべく聞ゆればよく選びとりてものゝ考に備ふべし」（二八二頁下段）といい、体裁が異なるうえに、古書や古伝説も引いていることから、慎重に判断することを促している。

¹¹ 早川万年「古事記序文観の変遷」（『日本思想史学』一六、一九八一年七月）、同氏「風土記逸文の採択と日本総国風土記」（『風土記

研究』四、一九八七年七月）参照。

¹² 早川万年「風土記逸文の採択と日本総国風土記」（『風土記研究』四、一九八七年七月）参照。

第二章 鈴木重胤の風土記研究

―『延喜式祝詞講義』を中心に―

はじめに

風土記の研究史上で逸することのできない人物の一人として、鈴木重胤がいる。重胤は、文化九年（一八二二）に淡路国津名郡仁井村に生まれた。十四歳の頃に大坂鴻池家・神戸村橋本家に寄寓し商業見習いをしながら学問を志し、天保五年（一八三四）に国学者の大国隆正に入門した。天保十四年（一八四三）に平田篤胤を訪ねて秋田へ赴いたが、篤胤は同年閏九月十一日に病死しており、墓前にて歿後の門人となって江戸に住む。文久三年（一八六三）八月十五日、五十歳のとき自宅にて暗殺された。

重胤は、古典に深い関心を寄せており、五十一年の生涯で多くの古典研究にかかわる著作を遺した。その代表的なものは、嘉永元年（一八四八）四月十七日にできた『常陸国風土記鈔』、同年十月二十四日に起稿された延喜式祝詞の注釈書である『延喜式祝詞講義』、同六年（一八五三）十一月十四日から筆をとり、暗殺されるまで書き続けた『日本書紀』の注釈書の『日本書紀伝』などである。重胤は古典のひとつとして風土記に関心をもっていたようで、『常陸国風土記

鈔』において『常陸国風土記』に注釈を施したり（後述参照）、『延喜式祝詞講義』や『日本書紀伝』で風土記を積極的に引用している。『常陸国風土記鈔』の詳細と『日本書紀伝』の概要および風土記の利用状況については、荊木美行氏による論考¹があるため、そちらを参照していただき、小論では、荊木氏のふれていない『延喜式祝詞講義』における風土記の利用状況を考えたい。

一、『延喜式祝詞講義』について

まず、『延喜式祝詞講義』の内容についてふれておきたい。

『延喜式祝詞講義』は、『延喜式』祝詞の注釈書で、嘉永元年（一八四八）十月から執筆が開始された。全十五巻からなり、鈴木重胤全集にも収録されている。その内容は、『延喜式』にみえる祈年祭・春日祭など、十九の諸祭祀の際に奏上される祝詞について考証・注釈したものである。

この『延喜式祝詞講義』には、祝詞の注釈のために『古事記』・『日本書紀』・『万葉集』・『新撰姓氏録』をはじめとする多くの典籍が引かれており、風土記もまたそのなかの一つである。

ここにいう風土記とは、『続日本紀』和銅六年（七二三）五月甲子条にみえる官命に基づき、諸国の国司・郡司らが中心になって編修

したものである。官命が下されたときは、当時存在した六十餘国分の風土記があつたと考えられるが、現存するのは、常陸・播磨・出雲・豊後・肥前の五国の風土記、いわゆる五風土記のみで、そのほかは他の文献に引用された逸文でしか内容をうかがい知ることができない。

五風土記のうち、『常陸国風土記』・『出雲国風土記』・『豊後国風土記』・『肥前国風土記』の存在は、比較的是やくから知られていたが、『播磨国風土記』の流布は他の四風土記よりも遅れた。『播磨国風土記』は、寛政八年（一七九六）に柳原紀光が三條西家本の存在を確認して書写するも、このときには流布するには至らなかった。『播磨国風土記』が本格的に流布するようになったのは、嘉永五年（一八五二）に谷森善臣が同じ三條西家本を書写して以降のことで、重胤が『延喜式祝詞講義』を執筆している段階では参照することができなかった。そのため、『延喜式祝詞講義』にみえる『播磨国風土記』の引用は、『釈日本紀』からの間接引用による、わずか二例しかみられないといった特徴がある（後述参照）。

二、常陸国風土記

『延喜式祝詞講義』において、重胤がどのように風土記を利用し

ていたのかを検討するため、まずは現存する五風土記のなかではやくに成立したとされる『常陸国風土記』の利用状況からみていきたい。

『延喜式祝詞講義』のなかで『常陸国風土記』の本文を引いている箇所は七箇所、たんに「風土記に…」として、「香島大神」や「建借間命」といった固有名詞のみを引用している箇所が二箇所の、合計九箇所確認できる。

それでは、『常陸国風土記』がどのような形で引用されているのか、一例をあげてみたい。五之巻、春日祭の項にある行方郡の記述からの引用（⑩・三九五頁。丸で囲まれた数字は鈴木重胤全集（鈴木重胤学徳顕揚会、一九三七～一九四〇年）の巻数による。以下同じ）をみると、「尚常陸風土記に、行方郡自郡西北提賀里云々、其里北在香島神子之社と有り（後略）」とあり、香取神宮の摂社をあげるために風土記が引かれている。『常陸国風土記』は、おもに春日祭の項に連続してみえ、武甕槌神、あるいは武甕槌神が鎮座する香取神宮を注釈するために用いられているという傾向がみられる。ところで、重胤は『常陸国風土記』を引用するにあたり、どのテキストを参照したのであるか。次にこの点について考えたい。

これを知る手がかりとして、前にあげた行方郡の条の体裁が注目される。よくみてみると、提賀里の下に云々とあり、記述を省略し

ていることがわかる。

じつは、重胤は、『延喜式祝詞講義』の執筆を開始する半年前の嘉永元年（一八四八）四月に、『常陸国風土記鈔』²と題した注釈書を著している。『常陸国風土記鈔』は、『常陸国風土記』にある、総記・新治郡・筑波郡・信太郡・茨城郡・行方郡・香島郡・那賀郡・久慈郡・多珂郡の記述のうち、総記・筑波郡・信太郡・茨城郡・行方郡の一部について、風土記の本文を適宜抄出して註釈したものである。この『常陸国風土記鈔』は、天保十年（一八三九）に刊行された西野宣明の『訂正常陸国風土記』を「校本」として引用しているという³。ここから重胤は『訂正常陸国風土記』を所持していたことがわかる。

さて、『訂正常陸国風土記』の行方郡の条をみてみると、「云々」で省略された部分に「古有^二佐伯一名^二手鹿^一。為^二其人居^一追著^レ里。」という記述があることが確認できる。しかし、『常陸国風土記鈔』では、「行方郡（中略）自郡西北提賀里云々其里北香島神子之社云々（後略）」となっており、やはりこの部分の記述は省略されており、前にあげた『延喜式祝詞講義』の同条とまったく同じ体裁である。

こうした記述の一致から、重胤は『常陸国風土記』の引用に際して、西野宣明の『訂正常陸国風土記』からではなく、これを基にして、かつて自身がまとめた『常陸国風土記鈔』を利用したと考えてよいであろう。

三、播磨国風土記

つぎに『播磨国風土記』についてみていきたい。文中に『播磨国風土記』の書名がみえるのは、十四之巻の遣唐使時奉幣詞（⑩・三九八～三九九頁）および十五之巻の出雲国造神賀詞（⑫・五七五～五七六頁）の二箇所のみである。まず一つ目の遣唐使奉幣詞の項の引用をあげてみる。

播磨風土記に天日槍命從^二韓國^一度来到^二於宇頭河底^一、而乞^二宿處^一於葦原志拳乎命^二云々、即許^二海中^一と有も、又其国中の塞給ひし故に、終に葦原志拳乎命の其辺に鎮座す社に乞て此国に入しなり、

これは、「天之日矛」の注釈に引かれた『山城国風土記』逸文の「上坐而。宿^二坐大倭葛木山之峯^一」とある文に、『播磨国風土記』の揖保郡揖保里条を引いてさらに注釈を加えた箇所である。

次に、出雲国造神賀詞の項をみると、

此より前播磨風土記に室神社の故事を誌せるに、上古は大なる藤葛の南山より北嶺に這繞ひて海面見え分ざりしを、當者の御神賀茂別雷神日向国高千穂嶺^二上嶽より洛北^一二葉山へ遷らせ給ふ時、此国に暫時影向し給ふ時此所名津なりと見行して、便

供奉の神等に令せて斧蛇鎌の三刃を以て彼藤葛を悉く伐払ひ
給ひ湊を給ひしかば、程無く名湊と成り往来の船風波の難を凌
ぎ待ると有るは其時の事なシめり、

とあるが、ここにいう室神社の故事に関する記述は『播磨国風土
記』にはみえない。そのため、この箇所引用は何によったのかを
特定するのは難しい。

なお、前述のように、重胤は『延喜式祝詞講義』を執筆している
時点で、『播磨国風土記』の写本を入手していなかった。その念願が
かなったのは安政六年（一八五九）十一月二十三日の『日本書紀伝』
二十八之巻、宝剣出現章を執筆中のことであつた⁴から、これより
前に著した『延喜式祝詞講義』については逸文によるしかなかった。
前述の『播磨国風土記』揖保郡揖保里条も、ト部兼方の『积日本紀』
巻十、述義六、垂仁天皇のところに引かれた逸文である。重胤は出
典を明記していないものの、『延喜式祝詞講義』のなかで『积日本紀』
を参考に行っている部分は多いことを考えると、この箇所は『积日本
紀』からの間接引用と考えられる。

四、出雲国風土記

つぎに、『出雲国風土記』からの引用について考えたい。『出雲国

風土記』が引かれている箇所は、全部で七十八箇所確認できる。こ
の数字は、風土記と称する書物（総国風土記も含む）からの引用箇所が
百四十箇所近くあるなかの半数以上を占めており、二番目に引用が
多い『常陸国風土記』でさえわずかに九箇所だから、それが群を抜い
た数であることがわかる。『出雲国風土記』は、『延喜式祝詞講義』
の全体にわたって引用がみられるが、特に出雲国造神賀詞の項で五
十七箇所と、引用が集中している傾向にある。この理由として、『出
雲国風土記』がほぼ完全な状態で現存し、内容が豊富なこと、特に
『延喜式祝詞講義』では、出雲国造が新たに任じられた際に天皇に
奏上する出雲国造神賀詞を注釈対象としていることなどが考えられ
る。

ところで、重胤は何によって『出雲国風土記』を引用したのだろ
うか。次にこの点を『出雲国風土記』が引かれている箇所を二例（い
ずれも出雲国神賀詞の項）あげてみてみたい。

まず、皇御孫の天降を注釈するために引用された楯縫郡楯縫郷の
条（⑮、四一六頁）は、

所^三以号「楯縫」者神魂命詔云、十足天日栖宮之縦横御量千尋栲
縄持而百結々八十結々下而、此天御量持而所^レ造^二天下^一大神之
宮造奉詔而、御子天御鳥命楯部為而天降下給之、爾時退下来坐
而大神宮御装束楯造始給所是也云々

とある。これと同じ文を今井似閑の『万葉緯』でみてみると、

所_レ以号_二楯縫_一者神魂命詔。五十足天日栖宮之縦横御量千尋栲
繩持而百結八十結結而、此天御量持而所_レ造_二天下_一大神之宮
造奉詔而、御子天御鳥命楯部為而天下給之、尔時退下来坐而大
神宮御装楯造給所是也。

となっており、『延喜式祝詞講義』が引用する風土記が、五十足天
日栖宮の「五」の字を逸していることが目につく。また「千尋栲繩
持而」とする箇所を比較すると、『和歌集』は「千尋栲繩持而」、
『万葉緯』と岸崎時照の『出雲風土記鈔』は「千尋栲繩持而」で
一致する点が注目される。また、「天降下」となっている箇所につい
ては、『和歌集』は「天降」、『出雲風土記鈔』は「天下」、『万葉緯』
は「天下」と、「下」の右に「降」と朱筆で記している。さらに、「装
束楯造始給」は、『和歌集』と『出雲風土記鈔』は「装束楯造始給」
と記すのに対し、『万葉緯』では「装束楯造給」となっており、「束
と始」を右に朱書する体裁である。

次に青垣山の注釈で引かれた意宇郡母理郷の条は、

所_レ造_二天下_一大神大穴持命越八国平賜而還坐時、来_二坐長江山_一
而語我造坐而令国者皇御孫命平世所_レ知依_レ奉、但八雲立出雲国
者我静坐国、青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔故云_二文理_一（神龜三年
字改_二母理_一）

とある。この箇所を『万葉緯』でみてみると、

母理郷郡家東南卅九里、一百九十步、所_レ造天下大神大穴持命越
八口平賜而還坐時、来坐_二長江山_一而語我造坐而命国者皇御孫命
平_レ世所知依奉、但八雲立出雲国者我静坐国、青垣山廻賜而玉
珍直賜而守詔故云_二文理_一（神龜三年字改_二母理_一）

となっている。『延喜式祝詞講義』では、青垣山の注釈に直接関係
しない意宇郡の郡家からの距離に関する記述を省略している。さら
に、『延喜式祝詞講義』が「置賜」とする箇所は、『万葉緯』は「直
賜」とあり、「直」の右に「置乎」と朱で記すが、『出雲風土記鈔』
は「直賜」となっている。

以上あげた『出雲風土記』の本文の特徴は、朱筆の部分にも目
を向ければ『万葉緯』にもつとも近い。岸崎時照の『出雲風土記鈔』
にも類似する点がみられるものの、こちらは写本が少なく、重胤が
目にしていたかどうかは疑わしい。一方で『万葉緯』は、各地に多
くの写本がある。そのため、『出雲風土記』からの引用は、基本的
には今井似閑の『万葉緯』を参考にしつつ、記述の内容に矛盾がな
いように朱筆の部分にも注目して体裁を整えたと考えてよいであろ
う。そして、『万葉緯』にも合わない点については、出雲国造神賀詞
を注釈した別な箇所に「内山眞龍の風土記抄に……」（⑫・四五頁）と
みえることから、内山眞龍の『出雲風土記解』（『延喜式祝詞講義』にい

う風土記抄か。天明六年（一七八六）などを参照した可能性が考えられる。

五、豊後国風土記

つぎに『豊後国風土記』についてみてみたい。『豊後国風土記』は、九之巻の大殿祭（⑩・一二三頁）に速見郡柚富郷条を、十之巻の六月晦大祓（⑩・二九一頁）に日田郡条から「日田」の二字のみの、合計二箇所引用が確認できる。まとまった形で引用は、九之巻の大殿堂祭の項に引かれた速見郡柚富郷条である。

速見郡木綿郷、此郷之中栲樹多生常取^二栲皮^一以造^二木綿^一因曰^二柚富郷^一、

同条文は、『日本書紀伝』二十之巻、宝鏡開始章（⑤・六〇頁）にも同条の引用がみられ、こちらは、

速見郡柚富郷、此郷之中、栲樹多生、常取^二栲皮^一、以造^二木綿^一、因曰^二柚富郷^一、

となっている。傍点部を比較すると、柚富を木綿とするなど、『延喜式祝詞講義』と『日本書紀伝』で表記に異同がみられる点に気になるが、これは重胤が参照したテキストの違いというよりも、自らの記憶にたよって書き記したために起こったのではないだろうか。

『豊後国風土記』の引用箇所が少ないため、何によったのかを判

断するのは難しいが、寛政十二年（一八〇〇）に開板された荒木田久老校訂本と、文化元年（一八〇四）に刊行された『箋釈豊後国風土記』が出ていることから、このどちらかからの引用と考えられる。ただ『日本書紀伝』における『豊後国風土記』の引用については、荊木氏が十三之巻、瑞珠盟約条を検討され、重胤が拠ったのは『箋釈豊後国風土記』かも知れないと指摘していることから、『延喜式祝詞講義』の方も『箋釈豊後国風土記』から引用してきた可能性も考えられるが、これ以上は不明とするほかない。

六、肥前国風土記

五風土記からの引用の最後に、『肥前国風土記』をみていきたい。『肥前国風土記』は、五之巻の春日祭（⑩・四一五頁）、十之巻の六月晦大祓（⑩・三八七頁）の二箇所確認できる。五之巻の春日祭では三根郡物部郷の条から引用しており、

三根郡有^二神社^一、名曰^二物部経津主神^一、曩昔小墾田宮御宇豊御食炊屋姫天皇令^三来目皇子征^二新羅^一、于時皇子奉^レ勅到^二於筑紫^一、乃遣^二物部若宮部^一立^二社於此村^一鎮^二祭其神^一、因曰^二物部郷^一、

とある。傍点を附した「令来目」の三字に注目すると、これと一

致するのは荒木田久老校訂本と伴信友校訂本の二本である。このうち、重胤はどちらに拠ったのかを断定することはできないが、当時よく流布していたのは活字で出版された荒木田久老校訂本である。重胤は伴信友校訂本を所有していたかどうかは定かではないが、流布の状況から考えて、荒木田久老校訂本に拠ったのかもしれない。ちなみに、もう一つの十之巻の六月晦大祓にみえる『肥前国風土記』の箇所は、

神名帳頭注に、肥前風土記を引て、人皇卅三代欽明天皇廿五年甲午冬十一月甲子、肥前国佐賀郡與止姫神有「鎮座」一名豊姫と有て、（後略）

という形でみえ、卜部兼俱の『延喜式神名帳頭注』からの間接引用であることがわかる。この条文をみると、「人皇卅三代欽明天皇廿五年甲午冬十一月甲子」というように年月日がはっきり記されている。古伝承を「…宮御宇天皇之御世」などと記す風土記の叙述方法から考えて、この条文の体裁は異質である。これについては、日本古典文学大系本、新編日本古典全集本、荊木氏などが、それぞれ古風土記の逸文でないと判断している。

七、五風土記以外

重胤は五風土記以外にも「風土記逸文」といわれる記述を多く引用している。すなわち国名を列記すると、山城・摂津・河内・陸奥・伯耆・土佐・備後・日向などで、その多くは出典を明らかにしていないものの、『釈日本紀』や『萬葉集註釈』に引かれた逸文である。また、「古事記裏書」に引る…（⑩・二八・四三頁）というように出典を明記している場合もある。

このほか、「某風土記」からの引用として、現在では偽書とされている日本総国風土記¹⁾からの引用もみられる。文中では総国風土記と断っていないが、遠江（⑩・四五三・⑪・一三三頁）・駿河（⑩・四五三頁）などがそれである。総国風土記は体裁の相違や内容の薄弱さから、現在では古風土記ではない、後世に風土記に似せて造作された別な書物であるとう認識が定着している。しかし、近世では総国風土記の史料価値が明確化されていなかっただけでなく、かなりの数の写本が出回っていた。こういった状況から、国学者のあいだで総国風土記と古風土記と混同したり、性質を異にする風土記と認識して引いている様子がみられる。重胤が風土記に対してどのような評価を下していたのかがわかる記述はないが、『延喜式祝詞講義』より少し後に著された『日本書紀伝』二十七巻、宝剣出現章において「播磨国惣国風土記」のあとに古風土記の『播磨国風土記』を引用している（⑦・三七頁）ことから、重胤は総国風土記と古風土記の『播磨

『国風土記』とは明らかに別な種類の風土記と認識していたようである。

このほか、総国風土記は九之巻の大殿祭の項で「駿河風土記」(⑩・一〇六・一四二頁)を引いている。その箇所をあげてみると、

殿を意富登能と訓む証は、古語拾遺に大殿祭の大を省て殿祭と作き、神代紀に同^レ床共^レ殿と有を、駿河風土記に引る香具山日記には同床共大殿と有を此彼合せて知る可なり、

とあり、「駿河風土記」が「香具山日記」を引用している。「駿河風土記」の引く「香具山日記」がいかなる書物なのかわからないが、重胤は「駿河風土記」と題する総国風土記も風土記の一種と認識して引用していたことがわかる。

おわりに

以上、重胤の『延喜式祝詞講義』における風土記の利用状況についてみてきた。同書には、古風土記か総国風土記かはさておき、「風土記」と称する地誌の類からの積極的な引用がみられる。古風土記からの引用では、古風土記を引用している文献からの間接引用や、重胤自身の記憶にたよって引用したと思われるものがある。これは重胤が多くの古典や文献に通じていること、卓越した記憶力をもつ

ていたことなどが関係していると考えられる。

重胤は、『延喜式祝詞講義』のなかで、風土記をたくさん利用しているにもかかわらず、自らが引用した種々の風土記の史料価値について言及した記述はない。そのため、彼の風土記観のすべてを知ることはいえない。総じていえば、風土記と呼ばれる書物を一つの地誌、あるいは古文獻として重視していたと推測される。

〔補注〕

¹ 荊木美行「鈴木重胤と風土記―『常陸国風土記鈔』の翻刻と解説―」(『風土記研究の諸問題』〈国書刊行会、二〇〇九年三月〉所収。初出は二〇〇八年三月) 荊木氏論文Aとする。「鈴木重胤の風土記研究―『日本書紀伝』を中心に―」(『風土記研究の諸問題』〈国書刊行会、二〇〇九年三月〉所収。初出は二〇〇八年四月) 荊木氏論文Bとする。

² 荊木氏前掲A論文参照。

³ 荊木氏前掲A論文参照。

⁴ 荊木氏前掲B論文参照。

⁵ 今井似閑は、明暦二年(一六五七)、京都の商家に生まれた。学問を好み、三十九歳となった元禄八年(一六九五)、契沖もとに入門し、『万葉集』の研究を行なう。著書に『万葉緯』・『逸文風土記』な

どがある。晩年には自身の蔵書を上賀茂神社神社に奉納した。享保八年（一七二三）死去。

⁶ 岸崎時照は、慶長十六年（一六一一）に生まれた出雲国松江藩士で同国神門郡の奉行である。岸崎時照は国学者ではなかったものの、『出雲国風土記』研究の先駆となる人物で、天和三年（一六八三）に村里の東西南北を实地調査を行ない、『出雲国風土記』に注釈をつけた『出雲風土記鈔』を著した。元禄三年（一六九〇）年、八十歳で死去。

⁷ 内山眞龍は、元文五年（一七四〇）、遠江国豊田郡大谷村に生まれる。宝暦十年（一七六〇）、浜松で賀茂真淵と出会い、同十二年に真淵の門下に入る。明和二年（一七六五）には、真淵の漢学の師であった渡辺蒙庵に学ぶ。『日本書紀』・『風土記』などの古典の研究に功があり、代表的な著作に、『出雲風土記解』・『日本紀類聚解』などがある。文政四年（一八二二）九月十八日、八十一歳で死去。

⁸ 荊木氏前掲B論文参照。

⁹ 荊木美行『風土記逸文の文献学的研究』（学校法人皇學館出版部、二〇〇二年三月）四九四頁参照。

¹⁰ 古事記裏書については田中卓「校訂・古事記裏書」（『皇學館論叢』一・二、一九六八年六月、のちに「古事記裏書の校訂と解説」として同氏『古典籍と史料』『田中卓著作集』第十卷、国書刊行会、

一九九三年八月）所収）が詳しい。古事記裏書は、江戸時代になって平田篤胤らに再発見されて世に広がり、重胤もまた師である篤胤の影響を受けたと思われる。

¹¹ 日本総国風土記については早川万年「風土記逸文の採択と日本総国風土記」（『風土記研究』四、一九八七年七月）を参照。

第三章 岡平保『播磨風土記考』について

はじめに

東京大学史料編纂所には『播磨風土記考』と題する謄写本がある。著者は、幕末から明治にかけて播磨国揖西郡室津加茂神社祠官であった岡平保（姓は岡、名は平保）である。本書は同社の祠官であった岡平満（おそらく岡平保の子孫か）の所蔵本を、東京帝国大学教授の重野安繹が謄写したものである。『揖保郡地誌』の岡平保の項には、「風土記についての著作があるとされるが、未刊であつた」とあるが、おそらく本書を指すのであろう。

そもそも、『播磨国風土記』は、『続日本紀』和銅六年（七二二）五月甲子条の、

五月甲子。制。畿内七道諸国郡郷名着^二好字^一。其郡内所^レ生。

銀銅彩色草木禽獸魚虫等物。具録^二色目^一。及土地沃瘠。山川原

野名号所由。又古老相伝旧聞異事。載^二于史籍^一亦宜^二言上^一。

とある官命を受けて編纂された、いわゆる風土記（官命には「風土記」の文言はみえない）の一つで、全一卷。和銅五年（七二二）七月の時点で播磨国大目であった楽浪（高丘）河内は、その編者の一人ではないかといわれているが、詳細は不明である²。『播磨国風土記』では、

『常陸国風土記』と同様、靈龜元年（七一五）ごろまで続いた郡里制による地名表記を採用しているので、官命が出てほどなく提出されたと考えられるが、これも詳しいことはわからない。

『播磨国風土記』は、現存する五風土記のなかではもつとも世に出るのが遅く、伝本は平安末期の書写とされる三條西家本（現天理大学図書蔵、国宝）のみで、しかも披見は困難であつた。

はじめて三條西家本の存在を確認し書写したのは柳原紀光である。すなわち、彼の書写した『播磨国風土記』（柳原本）の奥書には、

右播磨風土記。以或家古卷令写之。當時出雲豊後之外諸国風土

記逸。於後人擬作者
餘国猶有。最可謂奇珍矣。

寛政八年六月廿六日。同日令一校而所々有不
審重以正本可校者也。

正二位 藤 紀光

とあり、寛政八年（一七九六）のことであつたことが判明する。ただ、この段階では流布するに至らなかったようである。

『播磨国風土記』の流布にあたつて力があつたのは、谷森善臣である。彼は、嘉永五年（一八五二）三月二十九日に、かねてよりの宿願であつた三條西家本の書写を許され（谷森本）、のちに、柳原本によつて校合を加えている。こうして、谷森善臣の尽力によつて『播磨国風土記』は次第に世に知られ、多くの人々により書写され、普及している。

『播磨国風土記』は、里ごとに「土中上」「土中々」などと土地の肥沃の度合いについて詳しくするのが特徴で、地名の起源については詳細を極めており、官命で要求された五つの項目、すなわち、①畿内七道の国名・郡名・郷名に好い字を着けよ、②郡内に産する鉱物・植物・動物などで有用なものの品目を筆録せよ、③土地の肥沃状態、④山川原野の名の由来、⑤古老相伝の旧聞異事、のうち、とくに③と④に忠実である。

ただ、惜しむらくは、諸本の祖本となる三條西家本は、巻首部分を欠いている。『釈日本紀』巻第八が引く逸文によって、欠落部分に明石郡の記載が存在したことが知られるものの³、賀古郡の冒頭部分やおそらくは巻頭にあつたであろう総記の記載についてはまったく不明である。また、賀古以下、鰐磨・揖保・讃容・宍禾・神前・託賀・賀毛・美囊の各郡については記述が存在するものの、赤穂郡については記事がなく、その存否についても議論がある。

ところで、ここで取り上げる岡平保の『播磨風土記考』は、その奥書から、安政六年（一八五九）に著されたものであることが知られる。これは、谷森善臣が『播磨国風土記』を書写したわずか七年後のことで、現在知られている『播磨国風土記』の注釈のなかではもっとも早く著されたものである。

ただし、敷田年治の『標注播磨風土記』のように出版されること

はなかった。『播磨風土記考』は原本も現存せず、写本についても『国書総目録』によれば、わずかに無窮会専門図書館と東京大学史料編纂所に写本が残るのみである。しかも、無窮会本については所在不明だし（無窮会専門図書館の回答による）、現状では東京大学資料編纂所蔵本しか現存しない。

ちなみに、無窮会本については、『国書総目録』が著者として岡田光僣みつかどと岡平保の二人の名前をあげている点が注目される。

岡田光僣は、播磨国佐用郡出身の歌人で、元禄九年（一六九六）に生まれ、安永三年（一七七四）九月二十三日に七十九歳で歿している。享保五年（一七二〇）に儒学者の伊藤東涯（寛文十年（一六七〇）生、元文元年（一七三六）歿）のもとに入門し、同じ頃、歌人の烏丸光栄（元禄二年（一六八七）生、延享五年（一七四八）薨）のところにも入門している。烏丸光栄亡きあとは、有栖川職仁親王のもとで和歌を学んだというが、和歌だけでなく郷土史家としての一面があり、おもな著作には『播磨古跡考』（宝暦五年）がある。

ところで、無窮会本が著者を岡田光僣と岡平保の連名にしている点だが、これは不審である。平保は文化三年（一八〇九）に生まれ、明治十五年（一八八二）に歿している。二人の生存期間にはおよそ百年の隔たりがあるのであつて、共同作業で『播磨風土記考』を執筆したことは考えがたい。そもそも、岡田光僣の歿年は、柳原紀光が

三條西家本を謄写した寛政八年（一七九六）の二年も前のことであり、岡田光憊が『播磨国風土記』を披見したことさえ疑わしいのである。無窮会本が所在不明となっている今日では、このあたりの事情を解明することは不可能だが、ひとまず『国書総目録』の記載には疑問を呈しておきたい。

一、岡平保について

ここで、岡平保について『揖保郡地誌』⁴を参考にしつつ簡単に紹介しておく。

岡平保は、文化三年（一八〇九）、播磨国室津（兵庫県揖保郡御津町）に生まれた。岡家は代々、加茂神社の祠官を務める家柄で、平保は、明治二年（一八六九）六月、元飾東郡上野田村鎮座妙見神社ほか二社の社司に任じられ、加茂神社とあわせて三社の取り調べを任されている。また、同年十二月には、上月為彦とともに祭祀幹事を申しつけられたことから、姫路藩内の神官たちに祭祀典礼を教授している。さらに、明治三年（一八七〇）一月には、藩内の神道講義総督に任じられ、その後、前出の三社に加えて、新たに元飾東郡中阿保村鎮座の稲荷神社ほか四社の社司と神社取り調べに任じられている。明治七年（一八七四）には権少講義となったが、同十三年（一八八〇）には

職を辞し、同十五年（一八八二）に七十三歳で歿している。

平保は、幼い頃から耳に疾患を抱えており、聴力を失っていたにもかかわらず、熱心に学問に取り組んだという。はじめ、姫路藩士の小屋左次右衛門のもとで和漢の学を学び、のちに本居内遠について国学を学んだ。和歌・和文に造詣が深かったため、彼のもとには、近隣からたくさんの門人が訪れたといわれている。

二、東京大学史料編纂所蔵『播磨風土記考』

さて、ここで東京大学史料編纂所蔵の岡平保『播磨風土記考』（請求番号二〇四一・六四・五八）について詳しくみてみたい。

まずさきに、書誌的データをあげておく。

同書は、袋綴一冊。外題に題箋をもちい、「播磨風土記考 全」と左上に貼附し、右下に請求番号を記したラベルを貼附する。縦二六・九センチ、横一九・〇センチ。本文三十六丁、地図一丁の全三十七丁。一面二十字×十行を基本の体裁とするが、頭注・細字による書き込みもあり一定しない。表紙裏に上から順に「東京大学図書」（朱印、縦五・八センチ、横五・八センチ）「史料編纂所図書之印」（朱印、縦五・八センチ、横五・九センチ）「文科大学史誌編纂掛」（黒印、縦三・四センチ、横三・四センチ）という蔵書印がある。また、奥付に、

右風土記考

播磨国揖西郡室津加茂神社祠官岡平満蔵本明治廿一年五月

編修長重野安繹採訪明年十一月謄写した

とあることから、同書は、播磨国揖西郡室津の加茂神社の祠官であった岡平満の蔵書を、明治二十一年（一八八八）五月、重野安繹が加茂神社を訪れ、翌年十一月に謄写しおわたたものであることがわかる。

本書を謄写した重野安繹は、明治十五年（一八八二）から開始された漢文体編年修史『大日本編年史』の編修に編修長として知られるが、おそらく本書の謄写も、その事業の一環として行われたものであるう。

ちなみに、『国書総目録』第六卷（岩波書店、一九六九年四月）の『播磨国風土記』の項には、

（前略）国会（明治写）（一冊）・内閣（文久二写）（明治写、二部）・静嘉（三部）・東洋^{岩崎}（諸国風土記及図田帳の内、二部）・宮書（嘉永五谷森善臣写、地名・人名目録を付す、三冊）（明治写）（二部）・関大・九大・京大・教大（二部）・国学院（文久二写）・早大（常陸風土記と合）・東大・東大^{史料}（兵庫賀茂神社蔵本写）・広島大・愛媛^{伊予史}・岩手（三浦義好写、常陸風土記と合）・大阪府^{石崎}（文久元写）・岩瀬（安政五速水行道写）（三部）・金

沢市^{加越能}（松雲公採集遺編類纂^{四三}）・川越（明治写）・北野・金

刀比羅・神宮（文久元写）（二冊）・鈴鹿・多和（『風土記^{播磨国}』・

茶図^{竹相}・天理（首欠、平安中期写一軸、国宝）・丸山・無窮^{神習}

（大安寺資財知行と合）（三部）・旧彰考（安政四年写）（一冊）

（後略）

とあって、『播磨国風土記』の写本の所在が記されている。これによれば、東京大学史料編纂所に「兵庫県賀茂神社蔵本」とされる一本が存在したことが知られる。この写本は、ことによると、『播磨風土記考』とともに、重野安繹が明治二十一年（一八八八）に加茂神社で採訪・書写したものかも知れないが、この一本は現在所在不明である。

周知のように、東京大学史料編纂所の蔵書については、同所から『東京大学史料編纂所図書目録』が刊行されており、同書第二部「和漢書写本編」には史料編纂所が所蔵する写本や古記録についての書誌データが掲載されているが、なぜかこの図書目録にも「兵庫賀茂神社蔵本写」とされる『播磨国風土記』の写本は見当たらない。さらに、史料編纂所だけでなく、東京大学総合図書館にも、これに該当する『播磨国風土記』の写本は存在しない。

そもそも、『国書総目録』はいかなる目録類によって、この写本を記したのかもはっきりせず、原本を確認しえない状況では、これが

重野安繹の採訪の際に写されたものかどうかは明確にしがたいのである。

三、『播磨風土記考』の構成と内容

つぎに、本書の構成と内容についてのべる。

本書の注釈の範囲は、賀古郡から美囊郡（本書では三囊郡と表記）まで、現存する『播磨国風土記』のすべての郡を対象としているが、賀古郡（印南郡を含む）・飢磨郡・揖保郡・讃容郡・宍禾郡・神前郡は、郡・里・字に至るまで豊富な注釈が存するのに対し、託賀郡・賀毛郡・美囊郡は郡名のみに簡単な注釈を施すにとどまっている。第三十二丁オの神前郡的部の石坐神山の記述のあとには、

安政六年^{己未}三月十一日書竟ぬ

岡 平保

とあり、ここでいったん注釈は終わっている。その後、第三十二丁ウに余白があり、第三十三丁オから第三十五丁ウにかけて加筆したと思われる形跡がある。加筆部分では、現存する『播磨国風土記』に欠けている明石郡と赤穂郡の記述の所在、『播磨国風土記』の構成などについての考察を試みている。

内容は、地名の考証・解説、風土記本文に関する若干の校訂が主

となっており、風土記にみえる地名由来や比定を、『古事記』・『日本書紀』・『万葉集』・『延喜式』神名帳・『和名抄』・『播磨鑑』・『播磨事始経歴考』などの文献を用いて注釈している。

引用文献のなかでは、『播磨鑑』からの引用が多いが、同書は、播磨国印南郡平津村（兵庫県加古川市米田町平津）の医家・暦算家の平野庸^{つね}修^なが著した地誌であり、全十七冊。宝暦十二年（一七六二）に成立したといわれている。正式には『地誌播磨鑑』といい、その内容は、飢東郡から赤穂郡の十六郡の神社・寺院・名所・旧跡・城地・地名の起原沿革、政事・宗教・産業・偉人の事蹟にわたる。『播磨鑑』は、当時存在した播磨関係の文献はすべて参照しているといわれるだけに、岡平保も、地名の解説や考証に同書を積極的に引用したと思われる。

次に、内容についてふれたいが、こころみに、冒頭の賀古郡日岡（第二丁オ、第三丁ウ）をあげてみよう。

賀古郡日岡

故号^二日岡^一此岡有^二比礼墓^一云々は、故号^二日岡^一於^二此岡^一坐神者曰^二大御津齒命子伊波都比古命^一亦有^二比礼墓^一所以号^二比禮墓^一云々などありたるにはあらぬか。さて記中巻に於針間國氷河之前居忌瓮而云々とあれと、今氷河といふ河なし。これによりて十年はかりさきに考へたるものあり。そのよしかき

つく。抑式の神名帳に、賀古郡日岡坐天乃伊佐々日子神社と載られたり。されと今日岡の御社といふはなくて、加古郡加古川村より二十町はかり北に大野村といふ村あり。此村の北なる山に日向大明神と称へ奉れる御社あり。加古川の流よりいとくちかし是や日岡坐天乃伊佐々日子神社ならんとそおもはるゝ。そのよしは、ヒノヲカを後にヒヲカといひて、其ヒヲカをヒウカと訛りて、終に文字さへ日向に成たる物ならん。猶さはなくとも日向と日岡とは文字の形もよく似たれば、誤れるにてもあらん。然おもふにつきて、此御社にまゐりて別當多聞院にかりゆきて尋ぬるに、多聞院のいはく、此社は延喜式神名帳に日岡坐天乃伊佐々日子神社とある社にて、むかしは日岡と申候を、いつの比よりか日向大明神と申ならはしは去なから、祭神は伊佐々日子神にてはなし。吉備津日子命にて候。是のみ不審に候といへり。まことに我思ふよしに、いさゝかも違はさりけり。かれつらつら考ふるに、此あたりの旧き地名を比といひて、その比といふ處の岡なるによりて、比能乎加とはいへるものならん。さらは氷河も此比といふ所に流れたる川なるによりて比能加波といふたる物ならん。然る時は此加古川やかて氷河なり。また伊佐々日子神は記に伊佐勢理毘古命紀二八五
十戸彦命とあれは、此御子の事なるへし。神名帳にはかゝる類をり／＼あり此皇子は大倭根子日

子賦斗邇命孝靈天皇の御子に坐て、はしめの御名は伊佐勢理毘古と申しゝを、吉備國を言向和給ひしによりて、大吉備津日子命と御名おひ給へり。多聞院の伊佐々日子神にてはなく、吉備津日子命にて候といへるは、かゝるよしをしらていへるにて、やかて同し命のことなり。さてまた唯に吉備津日子命といへるは、若日子建吉備津日子命とまきはしけれと、是は人みないふ事にて、吉備中國にますをも唯吉備津日子命といへれば、それとおなじ類にて、是も大吉備津日子命の事なりとおしはからるゝなり

ゴシックで示した部分は、『播磨国風土記』の本文であるが、風土記本文を全文引用することはせず、注釈を施す記事・語句（地名）だけが必要に応じて引用している。これは、風土記本文の校訂を目的としたものではなく、地名の考証や比定に重点を置いた内容であったといえる。そして、風土記の本文の引用と注釈部分を区別するため、注釈は一字下げて記すという体裁をとっている。注釈では、かれつらつら考ふるに、此あたりの旧き地名を比といひて、その比といふ處の岡なるによりて、比能乎加とはいへるものならん。さらは氷河も此比といふ所に流れたる川なるによりて比能加波といふたる物ならん。然る時は此加古川やかて氷河なりなどと、『古事記』などの文献を引きつつ、さらには自身がもつ知識を駆使して独自に考証を行っている。

次に、揖保郡浦上里室原泊（第十八丁オ第二十丁ウ）の記述を紹介しておく。

浦上里 室原泊 家嶋 韓荷嶋 高嶋

（前略）

○室原泊中臣連風は原の字衍かといへりこゝに一の考へあり。本朝文粹に一重請修復

播磨国魚住泊事。右臣伏見山陽西海南海三道舟船海行之程。

自檉生泊至韓泊一日行。自韓泊至魚住泊一日行。自魚住泊至

大輪田泊一日行。自大輪田泊至河尻一日行云々。延喜十四年

四月廿八日。從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事とあ

り。此文によりて考ふれば、檉生泊は正しく室泊の事なり。

然るに此記には室原泊とあり。是をいかにとおもひて、よく

思ひめぐらせは、浅茅生の小野の篠原しのふれとゝもあれば、

生といふも原といふも心はへはし事なり。また田をフともよ

めは、原をもフとよめる事もあらんかと考へて、秋元安民に

とへるに、安民のいはく、万葉集に原をフとよませたる処、

一處ありといへり。されは原は衍にはあらで、ムロノフノトマリ室原泊とい

ふか。全き名にして室泊といふは略たる名なり。

◎因にいふ韓泊は檉生泊より魚住泊までの中らにありぬへ

きを、今その名たえてしれす。強ていはく、今の福泊の事な

らんか。是は饒万郡韓室と申し類に名のあしきを嫌ひて、韓

を福にかへたるにてもありぬへし。かくみる時は、一日行とあるにもよく合へり我室の浦はの

鳴島、屍嶋もいつの頃よりかきみ嶋かつら島といへり。是も

其名のあしきによりて改たるもの也。◎さて追考記元和年中に室津の事を記せる書也

に山三方をかこみて往来の客船風波の難をしのき江中静謐

なりければ、室中に異ならずとて、室津と名付そかしなりと

あるは此記に所_レ以号_レ室_一者。此泊防_レ風如_レ室。故因為_レ名

とあると申し事にていとめてたし。韓荷島のいひ傳へも此記と同じさま也。そはそこにいふへし御津白貝

浦、此二の名、今絶てなければ知かたけれど、室津の内にあ

りぬへし。室津といふは、東は伊津村にさかひ、西は赤穂郡の堺にいたるまで室津の内なり。此間二里にあまりて浦々多し鳴島、屍島のなきはい

かにそや。此記の成れる頃は、此二島ともに赤穂郡に属るか。

今も鳴島は揖西赤穂の二郡に度り、屍島はみなから赤穂郡に

属り。さてまた中昔に室といひしは、今の我産土わたりのみ

の事にはあらで、揖保川の西濱田村刈屋村あたり。また河内

谷河内谷とは馬場村より東に揖保川より西をいへり○濱田刈屋は室より辰巳にあたり河内谷は子荘にあたれり

とおもふ事、寛治の頃より嘉吉の頃までのものに據あり。事

長ければ此處には略しぬ。此事は社記に委しく論へり（後略）

この引用箇所の場合、風土記からは里名と地名のみを引き、賀古郡の例よりも簡略である。しかし、注釈は詳細で、他の箇所とくら

べても格段に字数が多い。

『本朝文粹』を引き、檉生泊を室原泊に比定することをはじめと

して、室原の訓、地名由来など、詳細を極めるが、室原（室津）は

平保の出身地であり、ことさら強い関心を抱いていたのであろうが、

地元の人間ならではの考証は説得力がある。

ちなみに、賀古郡や揖保郡浦上里の引用箇所、別当多聞院（五

峰山光明寺の僧か)とのやりとりの様子がみえ、ほかに、中臣連胤(寛政七年(一七九五)生、明治三年(一八七二)薨。京都の吉田神社の神職・国学者)、秋元安民(文政六年(一八二三)生、文久二年(一八六二)没。姫路藩士・国学者)などの名が登場することから、平保は国学者をはじめとする多くの人々と交流があったことを知ることがうかがえる。

最後に、いま一つ託賀郡・賀毛郡・美囊郡の記述をあげておきたい。

託賀郡 春日大明神

黒田庄田高村、石原村とあり。また黒田村といふもあり。はりま郷に

津万庄比延村高多庄荒田村など今あれと、委しき事をしらす。

賀毛郡

玉野村河合郷鴨谷・コセ・山田・河内・加毛・穂積などあれ

と、是もくわしくはしらす。

三囊郡

志深、和名抄には此郡の内なり。今も志深庄池野村に二皇子の古跡ありときく。さて池野村は赤石郡のさかひなるよし也。

右に引いた三郡の記述をみてみると、郡名を引用して、当時の地名をあげるのみで、里名や地名由来の考証を行っていない。しかも、託賀郡と賀毛郡には、「委しき事をしらす」などといい、美囊郡は『和名抄』を引用してはいるものの、「今も志深井庄池野村に二皇子の古跡ありときく」とあるように、平保は二皇子の古蹟を実際に踏査し

たわけではなかったようである。

秋本吉郎氏は、「惜しむらくは海沿ひの賀古・印南・饒磨・揖保の四郡―ことに後の二郡―に詳しくして、山間の六郡(讃容・宋禾・神前・託賀・賀毛・美囊 ※筆者注)には手の及ばなかった点が可成り多いのである。」と述べているが、さらにいえば、そのなかでも託賀・賀毛・美囊の三郡の記述の簡略さが目立つのである。

かかる記述の精粗は、これらの郡は岡平保にとつてなじみも薄く、知識や情報量に乏しかったことが原因であろう。託賀・賀毛・美囊の三郡は播磨国北東部に位置し、平保の居住した揖保郡からは遠く、そのため、平保もこれらの土地のことは不案内だったのであろう。

四、『播磨風土記考』の附箋や加筆

ところで、本書には秋本吉郎氏が指摘されたように、夥しい数の附箋や加筆がみられる⁷⁾。そこで、次にこの点にもついて詳しくみておきたい。

まず、附箋だが、その形には二種ある。すなわち、①附箋として貼付けられているもの(二十八箇所)、②「附箋」と傍書され、本文や頭注として書き込まれているもの(九箇所)、で、二つをあわせると、三十七箇所の附箋がある。附箋の形式と所在については、次の表の

通りである（数字は各丁の表裏別にみた附箋の数を表す）。

付箋の形式と所在							
丁		①貼付	②書入	備考	丁		備考
1	オウ				21	オウ	
2	オウ				22	オウ	
3	オウ	2			23	オウ	
4	オウ				24	オウ	
5	オウ				25	オウ	1
6	オウ				26	オウ	
7	オウ	1			27	オウ	1
8	オウ	1			28	オウ	1
9	オウ	1	1		29	オウ	1
10	オウ				30	オウ	1
11	オウ				31	オウ	2
12	オウ	2			32	オウ	3
13	オウ	2	1		33	オウ	2
14	オウ	1	1	頭注に書入	34	オウ	
15	オウ		1		35	オウ	
16	オウ	2	1		36	オウ	
17	オウ		1		37	オウ	
18	オウ				小計		
19	オウ	1				28	9
20	オウ	2					合計37(①+②)
	オウ	1					

話が前後するが、先に②について、のべておく。

宍禾郡安師里（第二十七丁ウ、第二十八丁ウ）および同郡石作里（第二十八丁ウ）の条は次のような記述がある。（文中に付された「○」や「△」の記号はそのまま使用した）

宍禾郡

（中略）

安師里 酒加

山崎より五十丁東南の方なり。さて和名抄には安志といふ郷

名ありて、安師といふはなく、此記には安志の号なし。され

と和名抄に假字なければ、阿那之とよむか。阿年志とよむにか知かたし。また文治二年九月五日源頼朝卿の古文にも、安

志庄林田庄室御厨とあれと、こもかな、けれはいかに訓しにや。今は阿牟自といへり。そはともあれ、かくもあれ須加と

いふ處も安志より十二三丁はかり西にあれば、これその安師里なる事は論ひなしと思ふれしも、但馬考をみれば、此考は宝暦元年に出石備後井良幹の著述なり出石郡安美郷ノ内成支名安富名福成名ナトアリ。安美ハ今

穴見谷ナレト、其名ノ地ハシレス云々とあり。和名抄には安美あれと、穴見と書によりて阿奈身とよむことしられたり。

また鰯磨郡の安師は、和名抄に穴無之とあり。かれかた／＼によりて、此処も阿奈之なる事しられたり。安を阿奈とよむ

は信濃因幡の例なり。△はりま鑑に、石保郷須加村、此ヒチリキノ宮ト云ハ、今ハ遥拜宮トモ申奉ル。山崎町ノ東北ニア

タリテ大河アリ。此河ノ東ノホトリニ小宮オハシケル。神戸一宮ノ末社ナリトとあり。（マシ）又熊ヶ嶽石保郷棧村ニアリ。山

崎ヨリ二里北とみえたり。

石作里 伊加麻川

伊加麻川は今五十波と書てイカバといひて、山崎より丑寅方一里はかりあり。正しく是なり。○附箋朝水山城 廣瀬郷五十

波村山崎ヨリ一里北ニアタル高山ナリとはりま鑑にあり。

これを見ると、安師里の酒加と石作里の伊加麻川についての注釈文の後に「△」や「○」といった記号があり、「附箋」と傍書され、酒加には「△はりま鑑に、石保郷須加村、此ヒチリキノ宮ト云ハ、今ハ遥拜宮トモ申奉ル。山崎町ノ東北ニアタリテ大河アリ。此河ノ東ノホトリニ小宮オハシケル。神戸一宮ノ末社ナリトとあり。又熊ヶ嶽石保郷棧村ニアリ。山崎ヨリ二里北とみえたり。」、伊加麻川には「○^{附箋}朝水山城 廣瀬郷五十波村山崎ヨリ一里北ニアタル高山ナリとはりま鑑にあり。」と、それぞれ記されている。

なかでも第九丁オ・第十三丁オ・第十三丁ウ・第十五丁オは、①と②両方の形式が存在することが確認できる。おそらく①は後に付されたもので、②はもともと「附箋」として貼付けてあったであろう。なぜなら、②の場合、平保がわざわざ「附箋」と傍書して本文や頭注として書き込むことは考えがたいから、もともとは文字通り「附箋」として貼付けられていたものを、これを書写した者が本文に編入したと考えるのが妥当であろう。

では、誰がいったいこのような加工を施したのであるうか。

本書を謄写した重野安繹の可能性も考えられなくはないが、立場上、彼が採訪した史料の原形を損ねるようなことは、まずしないであろう。

ここで注目したいのが、本書が岡平満の所蔵本であったと記す、奥書の記載である。本書を所持していたのが平満ならば、彼が手を加えたのではあるまいか。

さきにも述べたとおり、本書の第三十二丁オには「安政六年^{己未}三月十一日書竟ぬ」という文言と、平保の名を記す奥書があるが、これ以後、すなわち、第三十三丁オ以後には補訂の痕跡が残るのである。

繰り返しになるが、奥書よりも前の部分では、本文に取り込まれている「附箋」の例が第三十三丁オ以後には存在しない。これは、平満がこれを書き写す際、もとあった附箋を本文や頭注に編入し、平保が記した部分についても、適宜、附箋によって増補したと考えれば、附箋に二種あることも合理的に説明できるであろう。このことから、加筆をおこなった人物は、秋本氏の指摘する平保ではなく、平満によるものと考えるのが妥当ではないだろうか。

ところで、平満の加筆部分と思しき第三十三丁オと第三十三丁ウには、現存『播磨国風土記』にはない明石・赤穂二郡についての考証が存在する。このついでにこの考証についてもふれておきたい。

まず、当該部分の記述を引用しておく。

○或人此記をみていへらく、明石郡は巻首なれば、欠もしけんを、中らなる赤穂郡のかくへきよしなし。いといふかしといへ

り。我いらへけらく、赤穂郡なりからにあらず。此記もとは、明石郡より揖保郡までを上巻とし、赤穂郡より以下を下巻として二巻なるへし。されは明石郡は上巻の首、赤穂郡は下巻のはしめなるからに、破損はれたるものならんといらへければ、また曰、二巻ならば、六郡つゝにわけて、赤穂郡は上巻の尾にあるへきことわりなりといへり。またこたふ、郡の次第にてはさることながら、飭萬、揖保の二郡に里かすおほければ、郡のかすにはかゝはらて、わかちたるものなるへし。もしまた郡の次第をもて、赤穂郡まで上巻ならば、その上巻の首尾のかけしなりとみても、いふかしき事さらになし。

これは、現存本『播磨国風土記』が明石郡と赤穂郡の記述を欠いている理由を合理的に解釈しようと試みている箇所であって、要するに、『播磨国風土記』は上下二巻に分かれており、明石郡は上巻の巻首に、赤穂郡は下巻の巻尾にあつたとしてゐるのである。興味深い。しかしいずれにしても、他の四風土記では複数巻に分かれていない例がないことを思うと、妥当な解釈とはいえないが、ユニークな見解ではある。

こうしてみると、平満自身も、風土記に対しては深い見識を有していたかのであるが、詳しい来歴は不明とするほかない。それはともかく、東京大学史料編纂所所蔵の『播磨風土記考』について

は、

1、第一丁〜第三十二丁才の奥書までと第三十七丁の地図、九箇所
所に附箋を施したもの（原本）

2、1を岡平満が九箇所附箋を本文・頭注に組み込んで写し、第三十三丁才〜第三十五丁ウまでを加筆、岡平保の記した部分についても、必要に応じて二十八箇所附箋を施す（岡平満蔵本）

3、2を重野安繹が謄写（東京大学史料編纂所蔵本）

という、最低でも三つの過程を経ていることが推測されるのであつて、こんにちわれわれが目撃する『播磨風土記考』は、原著者岡平保が執筆した当時のかたちではないことを知るべきである。

五、岡平保と敷田年治

前述のように、嘉永五年（一八五二）に谷森善臣が三條西家本の『播磨国風土記』を書写してからほどなくして、安政六年（一八五九）に岡平保の注釈が完成している。そして、その後も、文久三年（一八六三）に栗田寛が『標注播磨風土記』をあらわし、やがて、明治四年（一八七二）には、敷田年治の『標注播磨風土記』が登場する。なかでも、最後の『標注播磨風土記』は、ここで取り上げた『播磨風

土記考』とかかわりが深いので、最後にこの点についてふれておきたい。

敷田年治は、幕末・明治を代表する国学者の一人だが、文化十四年（一八一七）、豊前国宇佐郡（大分県宇佐市）敷田村の二葉山神社の祠官、宮本兼継の次男として生まれている。天保十年（一八三九）に、同郡四日市町の蛭子神社祠官であつた吉松家の養子となり、名を仲治と改名するものの、のちに年治と改名して帆足万里のもとに入門。弘化三年（一八四六）年には、従五位下に叙せられて敷田姓に改名。嘉永六年（一八五三）、三十七歳となつた年治は、江戸に遊学し、名を大次郎と改名するとともに、旗本の家来となり、勤めながら著述活動を行い、鈴木重胤や黒川春村といった国学者たちと交流をもつた。文久三年（一八六三）、和学講談所に教官として出仕し、慶応四年（一八六八）に大阪へ移り、大阪国学教習所の講師となつた。明治二年（一八六九）、佐土原藩主島津忠寛に仕え、藩の教授となり、道修町の藩校で皇典を教授したが、同五年（一八七二）に隠居して河内国門真村で著述活動に励んだ。同十四年（一八八二）、神宮祭主久邇宮朝彦親王により伊勢の神宮教院本教館に迎えられ、翌十五年（一八八二）に、皇學館の創設にあたって教頭となつたが、同十六年（一八八三）、病により河内国へ戻つたのち、同二十一年（一八八八）、大阪北堀江に百園塾を開いて国典を講じ、晩年は大阪に住み、著作活動に

力を注ぎ、同三十五年（一九〇二）に八十六歳で死去。

敷田年治は、生前膨大な著作を残しているが、古典の注釈に力を注ぎ、『古事記標注』や『日本紀標注』を世に送つた。『標注播磨風土記』も、彼の記した古典の注釈書の一つで、古典全般に対する該博な知識を援用した語釈は、こんにちなお利用に耐えるものである。

敷田年治が研究対象として『播磨国風土記』を取りあげた経緯は、『標注播磨風土記』の石丸忠胤による序文に詳しく記されている。

いささか長文にわたるが、以下、当該箇所を引用しておく。

（前略）蘇々蒙々瀾箇始報播磨風土記馳布書籤。千年貳炯磨禮瑠
ナラノハノナニオフミヨノフコトニナモアルヲ。ワドウノムトセトイヒ
檜乃葉廼名柔負扶御代能古事二儼門有累乎。和銅乃六年等云妣
シトシ。アモシタニオホセゴトアリテ。アガタノウチニナニマ
士年耳。天下尔仰勢言在理天。郡能内迹何仁萬連生飛出逗廬物。
ヤマカハラヌナドノユエヨシサテハソコノオレビトノカタリツギイヒツギキヌル
山川原野奈特乃故縁。然而者其所能老人廼語。繼疑言繼疑来弩類
コトドモ。モノニシルシテタテマツレト。オホセゴトアリテ。タテマツリ
事等。書尼記之底。奉例。仰世言在咧低。奉隣死時乃古事者。
即。是南廬陪斯。世耳正四九傳破辰琉幡。和頭柯尔二三那累叙
クテヲシキ。カハ。レメデタキフミソクレンタケノヨニカクコトハデハ
口惜斯岐。如此在流目出哆枳書乃鳩例當氣能世仁隱侶臂果底。知
連琉人無理思你。此三十年婆珂隣以前迹顯半禮出田黨瑠巴。青柳
廼異鄧珍囉仕俱。薦枕高玖貴記事你那問有咧祁屢。然者云。雙。
荷伐嘉里宜新岐記刀云陸杜。都賀乃樹能弥繼々擬々迹月草乃烏
菟僂誤隣加吉悲雅綿。文字落丹瑠那度。刈菰能未陀戾縹條々多
在理家連婆。大形乃物知人數浪。玉能小琴乃殊迹讀得餓天尔殊奈

留怨。稻武斯廬敷田廼大人以。曾尔鳥能曾高表信問。痛句歎迦斐氏。古文書等餘理證鳴取出殿。標注遠加蔽。及訓點散閉付介樂禮低。初學鼻乃輩。能讀鵠便枳手著企刀充文。屋追越廼都婆伎都婆良何尔。菅乃根能年茂居露尔洩琉々限無衢。迦吉著伴信哆廬幡。甚目嬉志矩。悦志紀事尔那門有里希瑠。然禮圖後乃世能爲珥朽劑自廼板仁彫利帝。永久尔傳遍武斗。村肝乃心越凝邏之勞開琉。人四無家黎婆。忠胤智訶羅少玖凡氣難伎事仁方在連特。斯在留烏麼師書乃伊賀指書遠芝。伊都萬涅草能伊都萬涅聞。大人廼文管能底尔秘藏淤幾庭波。火乃災害奈杼廼恐例有良無呼忍毘得受而。今般椎柴乃志斐諦乞臂僞氣氏。一私乃願飛薄左浪你知羅怒火能阿椰斯久萌延弓世越思敷可南。登古玖詠免留遠。歌妣出泥兔々。靈遲播浮神登君登乃御恩澤能。百千雅一乎駄迹報以奉樂霧騰。大丈夫乃心振起之。花具簾芝櫻木迹彫調篇底。萬千秋廼長秋尔傳反。梓弓末乃世仁句幡制天無斗須。故今豫理以後。書乃林耳分入里提。古槃乎忍備。物學婆武刀思不人々與。此書遠一乃枝折登旨低。阿加良柏阿加良米母勢孺。都々邏々椿都々邏々你見氏。古返乃跡呼求遊架婆。玉梓廼道能丹寸計苔那流事多在留辨之。如此在婆打寄州累常世廼浪能那尾難囉努寶。廼書刀難謀。何禮乃人歟仰藝尊伐謝良無。何禮乃人歟褒傳稱閉謝良無。(後略)

この序文は、音仮名で記されているため、いささかわかりにくい
が、傍線部分の大意はおおよそつぎのとおりである⁹⁾。

1、『播磨風土記』はわずか三十年ばかり前に世に出た珍しい書物
である。

2、書写の際の誤字脱字が多い。

3、そのため知識人にも難解で敷田年治はいたく嘆いた。

4、よい書物であるので後世に伝えたい。

ただ、『播磨国風土記』は、研究の蓄積がほとんどない新出資料で
あるだけに、これを読み解くことはなかなか困難であつたらしく、
敷田年治自身の跋には次のようにみえている。

此風土記に見ゑたる地名等の中に、知りがたき所を、彼国に問
に遣しを、其は是なりといひおこせしハ、饒東郡射楯兵主神
社、神主上月為彦、揖西郡加茂神社、神主岡平保なりと、彼国
のをしへ子、西松茂彦が書て告来りぬ。

これによると、敷田年治は、地名の現在地比定に手を焼いていた
ようで、その解読のために地元に住む上月為彦¹⁰⁾や岡平保らの協力を
得ていたというのである。敷田年治が岡平保にどのような疑問を
投げかけ、またそれに平保がどのように答えたかは、もとより不明
である。しかし、こうして謝辞ともいえる記述を跋文に掲げている
ところを見ると、『標注播磨風土記』の頭注にみえる地名比定のなか

には、平保の教示によるものも少なからずふくまれていたものと推測される。ただ、前述のように、平保自身も播磨国内でも自身の居住地から遠く離れた場所については疎いところもあり、年治の質問にことごとく的確な返答をなしえたかどうかは疑問が残る。

いずれにしても、敷田年治が『標注播磨風土記』を起稿する以前に、岡平保が『播磨風土記考』をまとめていたことは事実であって、その意味で、岡平保の名は『播磨国風土記』の研究史上において逸することができないのである。

おわりに

以上、東京大学史料編纂所所蔵の岡平保『播磨風土記考』について、その概要をのべてきた。本書は、五風土記のなかで、とりわけ世に出るのが遅かった『播磨国風土記』に、いち早く注釈を施したという点、未刊行ではあるものの、のちに『標注播磨風土記』を著した敷田年治の研究にも多大な影響を与えていることから、『播磨国風土記』の研究史上で意義のある成果として位置づけることができる。「未整理」¹との評価もあるが、その先駆的取り組みは大いに特筆されるべきである。ただし、本文でもふれたように、本書には、岡平満による加筆・増補が数多く施されているのであって、その意

味では、本書は、岡平保・平満による共著としての性格をもつものである。

〔補注〕

¹ 揖保郡役所編『揖保郡地誌』（名著出版、一九七二年）

² 井上通泰『播磨国風土記新考』（臨川書店、一九三一年五月）

³ 『釈日本紀』巻八が引く「播磨国風土記曰。明石駅家。駒手御井者。難波高津宮天皇之御世。楠生_二於井上_一。朝日蔭_二淡路嶋_一。夕日蔭_二大倭嶋根_一。仍伐_二其楠_一造_レ舟。其迅如_レ飛。一櫂去_二越七浪_一。仍号_二速鳥_一。於_レ是。朝夕乘_二此舟_一。為_レ供_二御食_一。汲_二此井水_一。且_レ不堪_二御食之時_一。故作_レ歌而止。唱曰。住吉之。大倉向而。飛者許曾。速鳥云目。何速鳥。」という記述は、明石郡の明石駅家に関する逸文で、『播磨国風土記』に明石郡の記述が存したことがわかる。

³ 前掲注1参照。

⁴ 前掲注1参照。

⁵ 植垣節也「播磨国風土記注釈考（二）」『風土記研究』二一、一九八六年六月）によると、印南郡は風土記編述当時存在したという確証がなく、賀古郡に含めるべきとしている。

⁶ 秋本吉郎「近世の風土記研究」『風土記の研究』ミネルヴァ書房、

一九六三年十月）所収。

⁷ 秋本氏前掲注6参照。このなかで氏は、「―本書には後の追考・押紙などが多く、未整理のまゝに傳つてゐる―」と言及しており、加筆・附箋ともに平保が施したものと考えておられたようである。

⁸ 荊木美行「敷田年治『標注播磨風土記』について―解題及び風土記本文と頭注の翻刻」(『風土記逸文の文献学的研究』〈学校法人皇學館出版部、二〇〇二年三月所収、初出二〇〇〇年十二月〉所収、同氏「敷田年治の風土記研究」(『風土記研究の諸問題』〈国書刊行会、二〇〇九年三月〉所収、初出は二〇〇一年一月)参照。

⁹ 荊木氏前掲注8参照。荊木氏は、「石丸忠胤の序に、『播磨国風土記』はわずか三十年ほど前に出現した稀有の書物であり、しかも、その内容は知識人にも難解で、敷田年治はこの点を嘆いて注釈の筆を執った」ことを指摘している。

¹⁰ 以下の上月為彦の略歴は、射楯兵主神社史編纂委員会編『播磨国総社射楯兵主神社史』(射楯兵主神社、一九九六年七月)参照。同書および同書が引く井上正巳『祝之舎・葛之屋文庫目録』(私家版、一九七五年)所収の英賀神社宮司木村百樹氏の文によると、上月為彦がでた上月家は、豊臣秀吉の命により上月清景が祠堂となつて以来、代々、播磨国飾磨郡(現、兵庫県姫路市総社本町)に鎮座する

射楯兵主神社(社格は式内小社。養和元年(一一八一)に播磨国十六郡百七十四座の大小明神を合祀し、総社となり、明治四年(一八七二)十二月に県社に列せられる)の社家を務める家系のひとつである。上月為彦は上月清景の九世之孫で、本居内遠うちとおの高弟であつた。

明治初年から射楯兵主神社の宮司を務め、明治七年(一八七四)十一月十日に六十七歳で歿していることから、生年の記載はないものの、文化四年(一八〇七)頃の生まれと思われる。代表的な著述には、明治三年(一八七〇)十一月に、自身が奉職する射楯兵主神社について考証した『射楯兵主神社考』がある。

¹¹ 秋本氏前掲注6参照。

第四章 岡平保『播磨風土記考』翻刻

東京大学史料編纂所には『播磨風土記考』と題する謄写本が所蔵されている。著者は岡平保。彼は、文化三年（一八〇九）、播磨国室津（兵庫県揖保郡御津町）で代々室津加茂神社の祠官を務める家系に生まれた。祠官として奉職するかたわら、姫路藩士の小屋左次右衛門のもとで和漢の学を修め、のちには本居内遠について国学を学ぶなど、学問に取り組んでいた篤学の士で、古典に関する著作もある。

『播磨風土記考』は、この岡平保の著作の一つで、『播磨国風土記』の注釈書である。本書が注釈の対象としている『播磨国風土記』は、谷森善臣が嘉永五年（一八五二）に、三條西家本を書写してはじめて世に出たもので、他の現存する常陸・出雲・豊後・肥前の四風土記と比較して伝播が遅く、研究も進んでいなかった。

『播磨風土記考』の奥付には、「安政六年（一八五九）己未三月十一日」とあり、谷森善臣が『播磨国風土記』を書写してから約七年後に書かれたものであることがわかる。その後、文久三年（一八六三）に栗田寛氏が『標注播磨風土記』をあらわし、やがて明治四年（一八七二）には敷田年治氏の『標注播磨風土記』も登場するが、『播磨風土記考』はこれら二書よりも早くに成っ

たもので、同書は『播磨国風土記』の最初の注釈書である。

ちなみに、敷田年治氏が『標注播磨風土記』を執筆する際に、岡平保の協力を得たように（同書跋文）、その後の研究にあたえた影響も少なくないのである。

『播磨風土記考』は、未刊で原本も存在しないが、幸いなことに、明治二十二年（一八八九）に重野安繹によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている。そこで小稿では、東京大学史料編纂所所蔵の岡平保『播磨風土記考』（請求番号二〇四一・六四・五八）の全文を翻刻し、風土記研究者の利用の便に供したいと思う。翻刻の方針などは【凡例】に示した通りである。

なお、著者岡平保の履歴や同書の成立については、べつに『史料』二三八号（皇學館大学研究開発推進センター史料編纂所所報、二〇一三年六月）掲載の「岡平保『播磨風土記考』について」で詳述したので、こちらを参照されたい。

なお、このたびの翻刻にあたっては、皇學館大学文学部教授上野秀治先生に御教授を賜った。末尾ながら誌上に特記して謝意を表する次第である。

【凡例】

- 一、本稿は、岡平保『播磨風土記考』の原文とそれに附された頭注・付箋とを原本の体裁にならって翻刻したものである。
- 一、漢字の字体については可能な限り謄写本に忠実となるように翻刻した。
- 一、風土記原文は一一ポイント、『播磨風土記考』本文および附箋は九ポイント、頭注は七ポイントをもって組版した。なお、原文における割注はへに括って七ポイントで示す体裁に改めた。
- 一、読者の便宜を考え、句読点および中黒を施した。
- 一、頭注は、一括して巻末に掲げることにした。
- 一、今回の翻刻では、すべての頭注に対し、原本にはない注番号を附し、注との対応をあきらかにした。ただし、頭注によっては、かならずしも厳密な対応でない箇所もある。
- 一、附箋については各注釈対象ごとに末尾に四字下げにして挿入した。
- 一、附箋の体裁は、できるだけ原本に忠実となるように組版した。なお、改行については、特に必要ないと判断した箇所は追い込みとした。頭注についても同様とする。
- 一、本文中には「○」や「△」といった、注の挿入を示す符号が用いられている。可能な限りそのまま採用した。
- 一、ルビ・書き入れ・朱筆などではできる限り原文の体裁にならって施した。
- 一、原本の巻末には袋綴しの形で関連地図が掲げられている。今回の翻刻では組版の都合上、見開きの形で掲出した。

賀古郡日岡

故号^二日岡^一此岡有^二比礼墓^一云々は、故号^二日岡^一於^二此岡^一坐神者曰^二大御津齒命子伊波都比古命^一亦有^二比礼墓^一所以号^二褶墓^一云々などありたるにはあらぬか。さて記中巻に於針間國氷河之前居忌登而云々とあれと、今氷河といふ河なし。これによりて十年はかりさきに考へたるものあり。そのよしきつく。抑式の神名帳に、賀古郡日岡坐天乃伊佐々日子神社と載られたり。されと今日岡の御社といふはなくて、加古郡加古川村より二十町はかり北に大野村^(一)といふ村あり。此村の北なる山に日向大明神と称へ奉れる御社あり。^(加古川の流よりいとノちかし)是や日岡坐天乃伊佐々日子神社ならんとそもはるゝ。そのよしは、ヒノヲカを後にヒヲカといひて、其ヒヲカをヒウカと訛りて、終に文字さへ日向に成たる物ならん。猶さはなくとも日向と日岡とは文字の形もよく似たれば、誤れるにてもあらん。然おもふにつきて、此御社にまゐりて別當多聞院^(に朱筆)かりゆきて尋ぬるに、多聞院のいはく、此社は延喜式神名帳に日岡坐天乃伊佐々日子神社とある社にて、むかしは日岡と申候を、いつの比よりか日向大明神と申ならはしは去ながら、祭神は伊佐々日子神にてはなし。吉備津日子命にて候。是のみ不審に候といへり。まことに我思ふよしに、いさゝかも違はさりけり。かれつらつら考ふるに、此あたりの旧き地名を比といひて、その比といふ處の岡なるによりて、比能乎加とはいへるものならん。さらは氷河も此比といふ所に流れたる川なるによりて比能加波といふたる物ならん。然る時は此加古川やかて氷河なり。また伊佐々日子神は記に伊佐勢理毘古命^(紀ニハ五十芹彦命)とあれば、此御子の事なるへし。^(神名帳にはかゝる類をリノあり)此皇子は大倭根日子子賦斗邇命^(孝靈天皇)の御子に坐て、はしめの御名は伊佐勢理毘古と申しゝを、吉備國を言向和給ひしによりて、大吉備津日子命と御名おひ給へり。^(多聞院の伊佐々日子神にてはなく、吉備津日子命にて候といへるは、かゝるよしをしらていへるにて、やかて同し命のことなり。さてまた唯に吉備津日子命といへるは、若日子建吉備津日子命とまきはしけれど、是は人みなもいふ事にて、吉備中國にますをも唯吉備津日子命といへれば、それとおなし類にて、是も大吉備津日子命の事なりとおしはからるゝなり)

天皇問^二云。是誰犬乎^一。須受武良首對曰。是^ハ別嬪^ノ所養之犬也。

今饒東郡三野庄の内に、上鈴村あり。又本郷郷の内に中鈴村あり。繼庄の内、見野村の小名に下鈴といふ處もあり是か。^(繼庄繼村は姫路より知方一里はかり。本郷村は辰ノ方一里十五丁はかり。見野村は辰ノ方一里十丁はかりあり。因にいふ、次て道法を奉たるに、何方よりともいはさるは、みな姫路よりなり)

【附箋】

南毘都麻、是は万葉にみえたる伊奈美孀なる事は、論ひなけれど、今此邊といふ事はしれし。さて名のよし南毘は稲日にて、都麻は神留などの留にて、稲日大郎姫の留り居る嶋といふ意か。

【附箋】

マタ以奈美といふ名の元は天皇の別郎女を喚玉ひしに、辞^{イミ}奉りて島に遁渡りしより、辞妻^{イミメノシマ}嶋^(朱筆)といひ、その別郎女、後に仕奉りしによりて、

辞^{イナミワケノイラツメ}別郎女^{〔宋書〕}といひしなるへし。さてまた其処を辞ノ郡とはいへるものならん。

到ニ阿閑津一供ニ進御食一故号ニ阿閑村一云々。

別府・古宮・本庄・宮西・西脇・八反田・一色・二屋・二俣・山之上・大澤・經田・古向・宮北・中野・野添、此村々みな今阿閑庄なり。此中に古宮・宮西・宮北の三村は高宮村の名のなこりか。別府は辰方五里十丁はかりあり。

於是御舟与別嬪舟同編合而云々。

この同編合而はムヤヒテとよみてよけむ。

勅云。此處浪響鳥聲其譁云々。

この其は甚のあやまりにて、ナミノヒ、キトリノコエイトカシカマシならん。

望理里

福沢・石守・西之山・手末・二塚・下西条・野谷・野寺・草谷、この村むら、今も望理郷と書てモリノ郷といへり。草谷は卯方六里四五丁。

長田里

備後・植田・栗津、此三村長田庄なり。また加古庄の内に長田村といふ村もあり。植田村は卯方四里はかり。長田村は辰方四里十丁あまり。

印南郡

御舟宿於印南浦。此時滄海其平風波和静云々。

此其に某歟と朱もて書たり。某にては何とよむにか。これも上の其譁の其と同じく甚のあやまりにて、イトタヒラカニナミカセナギテシツカナリなどにやあらん。また卅七丁託賀郡都麻ノ里都多岐の處にも我其恠哉とあり。これも甚とみてアレイトツタナキカモならむ。

大國里 伊保山 大石

神吉庄の内に大國村あり。卯辰ノ方二里はかり。○魚崎阿弥陀地徳長尾北山中筋南池北池、是に^{〔宋書〕}伊保庄なり。魚崎もとは伊保崎なりといへり。〔今魚

崎村に伊保氏もあり〕此南池村・北池村といふかやかて池の原の名の遺れるものなるへし。また村翁夜話集に云〔此集は姫路藩福本博の編集なり〕

一 然如龍王社 南池村 村中持

当村は前は池なるにて御座候。聖護院宮様西国へ御下り之節、右池を御覽被遊、大成池に候得は、龍王勸請致し可遣旨にて、然如龍王御勸請に被成下候由申傳フ。其後慶長十一年池田家御代々田地に開發南池・北池の兩村出来候由、北池村慶長中新池村と云しよし也。時光寺領の證文に有之よし也。大猷院殿御朱印にも新池村と有之よし也。魚崎は卯辰方三里、南池村は辰方二里半といへり。

○大石は石寶殿なるへし。

益氣里また八十橋

此は先年加古郡に物せしをり、此処彼處と尋ぬるに、誰ありて知る人もなければ、せんすへなくて、家にかへりぬ。さて和名抄を見れば、印南郡の内に益氣郷あり。其後播磨事始経曆考（宝暦五年に後藤基邑の著述なり）を見れば印南郡に八十岩橋といふ物を出して、註にいはく、日本紀神代卷に八十橋あり。八十二神降臨のよしを記せり。今八十岩橋といふ。升田村に岩上自然に豊々としたる石階あり。當国の奇物なり。國分寺惠慶法師の哥に、幾世々の、かきりしらしな、むかしより、たえすぬかつく、八十の岩橋、とありと出せり。此記は信かたき事もあれと、印南郡の内に出したるは和名抄にも合て、いかにもいはれあり。さて升田村は加古郡と印南郡とのさかひに流れたる加古川より西へよりて、印南郡の内に升田庄升田村あり。さて其後に升田村の村人の來たるをりに尋ぬれば、いかにも我村の後にある一の山中からよりいたゞきにいたるまで石はかりなり。その石を切わけて階のかたちしたる処あり。されとそはいと／＼さかしくて、今おりのほりはしかたきといへり。さて升田といふは、益字マスともよめは、是より出たるなるへし。猶また斗形山より出たるにもやあらん。升田村より國分寺村へは西^{西（朱筆）}方三里はかり。姫路へは西方四里。

含藝里

神吉^{カンギ}・天下原^{アマカハラ}・中西・宮前・清水・富木^{トミキ（朱筆）}・大国・長慶・砂部、此村ともは神吉庄なり。神吉は卯方三里半ほどなり。

飴磨郡

菅生里 飴西郡

書寫山の後なる六角・刀出・古瀬畑・芦田・塚本、此村々菅生庄なり。六角・刀出は戌亥方二里はかり。古瀬畑などは戌方三里はかりあるへし。

【附箋】

○はりま鑑云、英賀村ニ祭ル処ノ神、英賀津彦・英賀姫也。古へ阿峨都彦領セシ処ナリ。延喜式ニ載ル処、英賀彦神ト申ハ、當地ノ氏神也といへり。英賀彦社 里。姫路より一里半はかり未方なり。室泊よりは三里半はかり在。少し南へよれり。

式ニハミエス。

英賀里 同上

英加・山崎・中濱・高町・付城・苔編・廣畑の七村、英加庄なり。未方一里あまりあり。

伊和里

^{飴東郡}
^{飴西郡}

右号伊和部者⁽²⁾。積幡郡伊和君等族。到来居於此故号伊和部。所以号手苺丘者。近國之神云々。

栗山町・安田町・延末村・飯田村・栗山村・安田村・延末村、今是を岩東郷といひ（手柄山も播磨事始経曆考に岩東郷とあり）中池村・町坪村・岡田村・井ノ口村・西脇村・玉手村、是を岩西郷といへり。（伊和⁽³⁾を岩とかくは、假字たかひたれと、後世の事なれはいひかたし）されは姫路はもとより午未方一里はかりの間を伊和里といひし事しられたり。（中池は午未方一里はかり。西脇・井ノ口は申西方廿丁あまり。栗山・延末・安田などは十丁あまり。手から山へも十七八丁はかりあり）○積幡郡云々。この郡、字は部の誤なるへし。積幡郡といふは何国にもなし。○近國は近江国などありたるにはあらぬか。近國とはかりいひてはきこえず。○手苺丘は

上にもいへる手柄山の事ならんか。テカリとテカラとは似よりて聞ゆ。○右十四丘云々とあれど、かそへみれば十三なり。さては手荳丘を合せて十四となるにか。猶此次にみえたるには、船丘と花丘となくて、沈石丘と藤丘とありて、これも十三なり。〔経曆考に、藤岡、今の二階町にして、○同考に、桜木岡・藤岡、長者か屋敷なりしと云とみえたり。今の鬘櫛山の事なり。藤岡の女子を懸相してよみてつかはしけるといふ歌、さくら木の、岡の一夜を、あかしてそ、名残大井の、山のかんなき。また巫岡山、右の桜木の岡と同じ事にて、かんなき山ともいふ。○考にはミコヲカとかなつたれと、今の鬘櫛山の事なるへしとあり。今はミコカヤマといへり。これや十四丘のミカ丘ならんか〕

【附箋】

一、遣^{ヤリテ}ニ其子汲水^{ツクミカヘリ}未^{カヘサル}還^サ以前^{キニ}即^{フタヒタリ}發^ニ船^{ミナト}遁^ニ去^{リキ}

○即ノ字ハサキニト云ニニアタル。○遁去ヲニケサリキトヨミテハ、遠ク去リ行タル心チノスレハ去ノ字ヲタ、ニニキトヨメリ。

一、汲^{ミツ}水^{ミヅ}還^{ヨクミカヘリ}来^{キテ}見^{シレハ}船^{フナ}發^{ヒラキ}去^{テイニキ}

賀野里 饒西郡 〈是より次々饒西郡には西と記し、饒東郡には東とするせり〉

古知庄村・塩田村・杉ノ内村・高長村・神種村・前之庄村・新庄村・山ノ内村を賀屋庄といへり。古知庄村は亥方三里半ばかり。山之内村は六里あまりもあり。

韓室里 西

和名抄にも辛室（加良牟呂）とあれど、饒磨郡の内にカラムロといふ郷も庄もさらになくて、龍野町新田・山畑・新庄家村・今宿村北東西の三村、辻井・二村・田寺村・御立村・田井・坂元などを安室郷といへり。〔当社長祿三年の御棟札にも饒西郡安室郷住人と大工の名をしるしたり〕此安室、やかつて韓室なるへし。カラといふを悪みて、安とかへたる物ならん。すてに神前郡生野は、もと死野なりしよしみえたり。猶伊波礼毘古天皇の太后の御名も然なり。

巨智里 草上 大立丘 西

上にいへる賀屋庄の内に古知庄村あり。○草上は播磨事始経歴考に、饒西郡草上郷新在家村蛤山高岳神社云々とみえたり。新在家村は上の安室郷の内にあり。いかゝ。然はあれど、安室郷の内なる龍野町新田・山畑は姫路の町つゞき、坂元は書写山の禁にて一里三十丁ばかりもあれば、いかにそやとおもはるゝ事もあり。また御立村は経歴考に、御館邑、後醍醐天皇書写山行幸の時の御旅館たりし由とみえたれど、是は此処にある大立丘の名の移れるものならん。さらは草上は御立村あたりなるへし。

【附箋】

また饒西郡新在家村は西戌方にて十丁ばかり。今宿は東西北と三ありて、戌亥方廿丁あまりあり。御立村は戌亥方にあたりて一里余もあり。さて此村々、みな今安室郷なり。また、西今宿村に山吹新田といふ処もあり。はりま鑑に、草上寺安室郷山吹野ニ有寺跡。又云、草上ノ地、今ハ今宿村ト云。草上トハ、今蛤山ノ上ノ方、野原成へくとあり。また蛤山は同じ鑑に、高岡社安室郷。一名蛤山。祭神應神天皇・仲哀天皇^{式内}・崇道盡敬天皇・事代主命・猿田彦大神^{式外}、是古旧地草上郷新在家村西八帖岩ノ山庄也ともあり。是によりておもへは、御立村は後醍醐天皇

書写山行幸の時の御旅館なるによりて、御立村といふとの説あれと、然るにはあらで、此處にある大立丘を後に御立といへるものなるへし。
方角里数を挙たるは姫路よりなり。

付箋

安相里

繼庄奥山村に麻生山といふ山あり。八幡宮ませり。此山やかて英保村の山につゞけり。此文に、娶英保村女とあるにも合へは、此麻生山の事なるへし。是によりてまた長畝川を奥山村人に尋ぬれば、村より半道はかり西にあたりて池のことくなれる処あり。此ところ長畝川の筋の残れる処なりと村にいひつたへたりといへり。

奥山村は卯方にあたりて一里あまり。英保村は卯辰方十七八丁。繼庄繼村もまたいとちかし。(朱筆)はりま鑑には三野庄奥山村とあり。

枚野里 新羅訓 東

国衙庄の内に平野村白国村あり。平野は亥子方三十丁はかり。白国村は子丑方十丁はかり。姫路よりいとちかし。神名帳考證に白國神社五十猛命、日本紀云、五十猛神降於新羅國云々とあり。峯相記に、四宮白國大明神者。日域開關垂跡申傳人皆不知。或説開化天皇第一姫宮云々。一説飾東郡国衙庄白国村杜者廣嶺山。神官相傳曰、白国者新羅也云々。統ては信かたけれど、新羅といへるは由緒ありてきこゆ。

大野里 砥堀 東

大野村は国衙庄の内にあり。また姫路・天神町・橋元町・野里寺町・威徳寺町・福元町・米屋町・橋元新町、これみな、今大野郷なり。○砥堀、神東郡蔭山庄に属て、上砥堀・下砥堀と二村あり。子丑方一里二十丁はかりなり。

少川里 豊国 東

大野郷の内に小川村あり。寅方二十丁はかりあり。○豊国は寅方一里あまりあり。此豊国村の郷名も庄名もしれず。谷外内の豊国村とあり。

英保里 東

大野郷の内に東阿保・中阿保・西阿保と三村あり。卯辰方にあたりて十四五丁あり。

美濃里 繼潮 東

深志野・御着・国分寺・山脇・坂元・上鈴、是村々を今三野北條庄といひ、北原・妻鹿・兼田の三村を見野南條庄といへり。深志野等は卯辰方一里はかり。妻鹿・兼田、巳午方一里あまり。北原は卯方にあたりて一里はかりあり。○繼潮は繼庄繼村あり。是か。此も卯方にて一里あまりなり。

因達里

経歴考に、射楯兵主神社、饒西郡辻井村東の山と挙たるは據ありての事か。

安師里 東

今、西川庄阿成村といふ村あり。午方一里はかりにあたり。

漢部里 阿比野 手沼川 里名詳於上右稱多志野者。品太天皇処之時云々。 西

この処字の下、之字の上に朱もて行字を補へり。是によりて猶おもへは、処巡のあやまりにて、巡行之時なるへし。此記中に、品太天皇巡行之時といふ事かす／＼あれはなり。○阿比野、書写山の禁。東坂元村より西、少し南へよりて會野といふ處あり。姫路よりは申西方一里半はかりもありぬへし。○手沼川、今の手野川なるへし。姫路より西方一里あまりあり。阿比野手沼川と並ひたるによく合へり。

因にいふ、此郡のはしめに漢部里⁽⁴⁾ありて、また此處に漢部里あれば、二里のさまなれと、里名詳於上とありて、異事にもあらねは、猶一里の事なるへし。そをいかにとなれば、上の漢部里を奉たる條に多志野・阿比野・手沼川の事をもいふへきに、其処にもれたれば、一郡の事いひをへたる末に奉たるものなるへし。次の馬墓池の事も、貽和里の條にいふへきを脱たるによりて此処にいへり。

揖保郡 事明下 伊刀嶋諸島之総名也。名品太天皇云々。

此名字は、亦の誤なるへし。名にては更に聞えず。亦とみれば此処の件明らか也。

香山里 家内谷 佐々村

揖東郡
揖西郡

新宮の北に香山村あり。室よりは四里はかり北方なり。○家内谷平野と千本駅との間にカナイ谷といふ處あり。香山村・佐々村は揖東郡、カナイ谷は揖西郡なれと、程遠からねは是か。○今香山村近き處に佐々村あり。林田よりは西戌の方一里あまりあり。新宮よりは東にあたれり。

△栗栖里 阿為山

越部里 狹野 神阜

揖東郡
揖西郡

嵯崎の駅路あたり、統て越部庄也。此庄の内に市保村⁽⁵⁾といふ村あり。此處に俊成卿の女越部禪尼の御墓あり。寛延三年嵯崎村石井某上冷泉家へめされし事あり。○狹野村は立野より二十丁はかり北にあり。○神阜、此はたえてしれされとも、此あたりの事をつら／＼考ふるに、繪圖にも奉たることく、此越部庄の内に一の山（今新宮の陶器をやく處なり）なん有ける。此山のかたち、似覆とあるによく合ひたれば、是ならんとはおしはからるれと、いまた正しきものをみす。（越部庄は揖東揖西にわたれり）

【附箋】

はりま鑑に、栗栖湯、今絶ニヤ。考二龍野領二栗栖川有。牧谷より出テ佐野村ニ至リ伊保川ニ入とあり。

【附箋】

△阿為山は千本と三日月との間に相坂といふ峠あり。此處は揖保佐用のさかひなり。阿為と相とはかな違ひなれと、そは後の事なるへし。其上此あたり栗栖庄といへるにもよく合ひたれば、正しく是なるへし。先年三日月に物しける時によめる歌あり。

相坂の、手向をすきて、我くれは、夕きりたちぬ、三日月の郷トヨメレト、今ハあゐ山のトス。

【附箋】

注 出雲国阿菩大神云々この上に神皇所以号神皇者とか、またはたゞ神皇とはかりにても有へき處なり。脱たるなるへし。また万葉集の仙覚注に、故号神集之覆形とあるは、阜と集と混ひ々形とある々の之にまかひ形と覆と上下にまかひたるものなるへし。さて是は何れをよしとも定めかたれと、仙覚注に、以此諷諫山上来云々とあるは、此欲諫止のあやまりなる事は明らかならは、これにひかれて神皇の方をよしとす。

日下部里 立野 西 運傳上川礫

室泊より子丑方三里なり。附箋「はりま鑑龍野御領主由縁之処に、或記曰、貞觀年中播磨守日下部朝臣村雄晚年ニ龍野入道昌泰ト云人、當地ニ居住スト云へり。また旧跡之処に龍野貞觀年中大蛇此山に居し、洪水此時、当寺記紀(朱筆)ノ材維其蛇を殺すともあり。」運傳上川礫云々。此はもと上と川とうへ下に、運傳上川礫云々とありたるにはあらぬか。

【附箋】

日下部里 因人姓名為名

これもいかゞ 是も次の上岡里、

林田里などゝ同じ

くまきれみたれ

たりとみゆ。

上岡里

本村
田里 東

林田里

本名
談奈志

松尾 伊勢野 東

此二里、いと混らはし。上岡(6)の名は此記の成れる頃の名にて、林田の名はそれより先つかたの事なれば、いとふるし。又林田里は此記の成れる頃の名にて、談奈志はそれよりふるき方の名なり。されは今林田といふは、談奈志の方の林田なるへけれど、さもいひかたき事もあり。また聊の據もあり。仰賀茂神領の林田庄の堺を、先年林田人三村利兵衛と云者(是は三村左京進とて、神領に附たる者あり。その裔ときけり)平保か家に書記しておこせたるものあり。其中に東は石の藤兵衛山の尾より峯きり、すがふとの境は堀きり、ごじとの堺は二つ岩、実栗とのさかひは仙人場云々とあり。此すかふといふは、菅生にて飭西郡菅生里の條にいへることく六角・刀出・古瀬畑・芦田・護持・塚本の六村、菅生庄にて菅生山邊故曰菅生とあるにもよく合ひ、ごじはやかて此菅生庄の内にあり。その上この塚本より林田の町へは二里はかりあれば、上岡の林田、是今の林田なりともいふへけれど、さては此記に本名林田里とあるに立かへりて、その本名をいへるもいふかし。猶また今林田ノ里をニレの里といへり。かくては談奈志といふ方なりとも思はるゝなり。○松尾は、鵜村の少し東北に、今松尾村あり。○伊勢野は、今の林田より立野へ行道の中らに伊勢といふ處あり(林田より立野へは二里なり)てとり／＼に混らはし。此はやくも此記の成れるころすら林田名二つあればまかふも説誤(朱筆)なり。

【附箋】

上岡里。本名林田里トアレト、此名ノ縁ハナクテ、曰菅生。一云曰宗我富トアルハイカニ。又次、林田里。本名談奈志トアリテ、其談奈志ノ事ハカリ拳テ林田里ノ事ヲイハヌモイカ。イトノマキレタルモノ也。

又上岡里。ヘリリリ上中下。菅生山ノ邊ナリ。故曰菅生ニカクアレトモ菅生山辺ナランカ。

邑智驛家 泳山 蒲阜 東

○一〇はりま鑑に、青山ノ西大市郷石鞍村、大市郷西脇村。また道法

○一〇部所には大市、今大市郷相野村・中村・廣坂・松尾辺ナリとあり。

或人云、姫路より二里はかり西に山田村といふ村あり。ヘ西海道往来筋ナリ。此山田村の北方に大市と云村あり。立野の東、けやき坂の東にあたりて、立野よりは二里あまりありといへり。されは泳山は立野の日山の事にはあらし。○蒲、この字、月令・高橋氏文にも蒲とあり。

廣山里 麻打里 東

廣山村は鰯村より廿丁はかり。戌亥方なり。○麻打里、今此名しれす。さて廣山村より十二三丁午方に阿宗村あり。ヘ経歴考には廣山庄阿宗村とあり。阿宗は記中卷（開化天皇條に）次息長日子王。三柱。此王者吉備品遲君針間阿宗君之祖とあり。神名帳揖保郡阿宗神社ともみえて、いと古き處なるに、此記にみえず。麻打里あるは何とかうたかはし。

【附箋】

麻打里、今此名しれす。廣山より十二三丁南の方に阿曾村あり。阿曾是記中卷開化天皇御子迦迹米雷王。此王娶丹波之遠津臣之女。名高材比賣生子。息長宿祢王。此王娶葛城之高額比賣生子。息長帶比賣命。次虛空津比賣命。次息長日子王。三柱。此王者。吉備品遲君針間阿宗君之祖とあり。神名帳揖保郡阿宗神社ともみえて、阿曾の名いと古きに、此記にみえず。さて今廣山村まちかき處に、阿曾村あれば、是は麻打の轉り偏りて阿曾となれるならん。アサウチ^{スナルヲソニ} 升ヲ省ク。

【附箋】

廣山里旧名握村トアリ。今二塚村アリ。是ハ処タカヘルカ。ヨク尋マホシ。

枚方里 御立阜 東

上にいへる阿宗の南にて、正条駅より廿丁あまり東なり。鰯村よりは十二三丁はかり北、すこし東へよれり。○はりま鑑に、立岡村廣山庄、古老ノ説ニ、昔此処ニテ春麥ヲカリ、害ニ過^{過カ}ル者有ト云。今考ルニ、太平記ニ云ヘリ小山太郎高家ナルヘシ。義貞、立岡山ニ陣営ノ時カとあり。また笠山ノ陣鰯庄内山村、建武中新田義貞白旗城攻ノ時、シハラク爰ニ陣営スト云ヘリ。今内山村ノ山上也。所ノ者、山下ヲ屋シキ段ト云。或ハ立岡山トモイヘリとあり。廣山村・鰯村・内山村、みなつゝきたる處なり。さて此立岡村といへるか、御立岡なるへし。枚方も鰯より北東にて十武三丁はかりなればなり。

大家里 与富等 東

手本驛路あたりに、大屋村といふお村(朱筆) あれと、是にはあらで、此次件に請大田村与富等地云々といふ事のあるをおもへは、大田里程遠からぬ處なりとぞ、おしはかるゝ也。さてまた与富等よほうとふりといふ事によりて猶考ふれば、今丁村とかきてヨウラウ村といふ村あり。丁村(2)をヨウラウ村といふは、和名抄に近江國浅井郡丁野(与保乃)といふ郷名あれば、此丁村(8)はヨホロ村の訛りなるへし。大田村の南方にあたりて、遠からねは此処にある与富等によく合ひたり。されは大家里も此あたりの事は論ひなし。石海里條二造宮於大宅里關井此野とあるにもよく合へり。

大田里 鼓山 東

林田より東南方凡二里はかり。○鼓山、林田より菅生庄の塚本村へ行道に大鼓オホツ、ミ(朱筆)といふ處あり。是か。

石海里 宇須伎津 宇頭川 絞水之淵 伊都 雀島 己之負子而云々。

和名抄揖保郡石見(9)《伊波美》とあり。今も石見庄といへり。さて此石見庄は、揖保郡の東西にわたりていと／＼ひろし。○宇須伎津は、今宮内村に坐八幡宮を宇須伎濱宮とも、また津宮ともいへり。《宮内村は我室泊よりは東にあたりて二里あまりあり》此津宮より十四五丁西に津市場村といふ村もあり。《津宮、また津市場の津はうすき津の津より出たる名なるへし》○宇頭川、或人云、宇頭といふ川は、馬場村より出て市場村・萩原村の間をなかれ、下は梶山の禁をなかれて上河原村より揖保川に在るといへり。《馬場村は室津より東北にあたりて、場の峯といふ峠の先にて、一里あまりあり》さらは絞水之淵も此邊りならんとよく思ひめくらせは、揖保川は正条の西、山津屋村の南の山下を流て萩原の南、梶山の北側の禁(10)になかれて行あたり、それより少し東へなかれて、また南へなかるれとも、付箋「いにしへは、山津屋村の山下より西へ式丁もなかれ入こみて、夫より折まかり、また南へ壺丁はかりもなかれて、梶山のふもとを東南へなかれ出るなり。此折まかりたる處か。やかてうづまく淵なり。」是によりて猶熟考ふれば、宇頭川といふは此揖保川の事にて、馬場村より出る小川をいふは後に移りたるものなり。かくて宇須伎津の西といへるにもよく合ひたり。《揖保川源は但馬因幡の二国より出たる大川なるに、そを除て、それより西なる小川を取出していふへくもあらず。されと、うつ川の名の遣りたるは、いとめてたし》○伊都村は、宇須伎濱宮より七十丁はかり西方なり。室泊よりは七まかりといひて、室山の禁、波打際を東へめぐりめぐりゆけは伊都村なり。《今伊津とかけり》此七曲の間一里にちかし。○雀島、今シ、マといひて、伊津浦に属する一の小嶋あり。此島草木生ず。シ、マといふはス、メシマを云ひかめ(マ)たるものなるへし。○於是有一女。人為資上己之負子而墮於江。故号宇須伎(新辞伊波須久)この件聞えかたし。是は而宇江字の下にありて、次に宇須々伎々。故号宇須伎と有たるか混ひたるなるへし。伊波須久のいははけなし。いはけてなどのいはかすくはうすゝくのすくと同じしことにて、やかてうすゝくと同じ意はへの詞なるへし。又伊波の波は須の誤か。さらは伊須々久にて宇須々久と同言なり。○召石海人夫は紀應神卷十四年二月云々。因以奏之曰。臣領已国之人夫百二十縣而云々とあるによれば、こゝもイハミノミタカラともよむへけれど、然訓によりイハミノミタミとよむかた、まさりてきこゆ。

浦上里 室原泊(11) 家嶋 韓荷嶋 高嶋

和名抄に浦上(宇良加三)とあり。経歴考には浦上庄萩原村とみえ、はりま鑑には浦上とかきてウラカベとかなつけあり。また永祿の頃、室城主に浦上美作守政宗といひし人もあり。また或人のいへるには、市場村・萩原村を浦上庄といふなりといへり。《此市場・萩原は、浦辺村の隣村にて、室泊よりは一里あまり北東

の方なり〕さてまた嶋々も此次第にあれば浦上里の内か。然らは神島は今の上島の事にはあられて、此あたり近き處、または家島に属する多くの島々の内なるへけれど、はやく其名のたえたるものなるへし。〔今の上島は多くの島々の上のはしにある故に上島とはいひけるものなるへし。またかめ島ともみなふし島ともいへり。室泊よりは八里はかりある處なり〕○室原泊〔中臣連胤は原の字衍かといへり〕こゝに一の考へあり。本朝文粹に一重請修復播磨国魚住泊〔13〕事。右臣伏見山陽西海南海三道舟船海行之程。自檉生泊〔13〕至韓泊一日行。自韓泊至魚住泊一日行。自魚住泊至大輪田泊一日行。自大輪田泊至河尻一日行云々。延喜十四年四月廿八日。從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事とあり。此文によりて考ふれば、檉生泊は正しく室泊の事なり。然るに此記には室原泊とあり。是をいかにとおもひて、よく思ひめぐらせは、浅茅生の小野の篠原しのふれとゝもあれば、生といふも原といふも心はへはし事なり。また田をフともよめは、原をもフとよめる事もあらんかと考へて、秋元安民にとへるに、安民のいはく、万葉集に原をフとよませたる處、一處ありといへり〔14〕。されは原は衍にはあられて、室原泊といふか。全き名にして室泊といふは略たる名なり。

【附箋】

檉生にヤギフとかなつてたるは、この字ムロノキ、またカハヤナギといふ訓もあるより、柳はアヲヤギといひ、また苗字などに柳生をヤギフといふも有より、檉生にヤキフと假字つけたるものなるへし。

【附箋】

万六ノ略解二、

和名抄東生郡味原郷あり。

原をふとよむは、茅原葦

原の類なりとあり。桓武紀

撰津国鰻生野と有とみえ

たり。

◎因にいふ韓泊は檉生泊より魚住泊までの中らにありぬへきを、今その名たえてしれす。強ていは、今の福泊の事ならんか。是は饒万郡韓室と同じ類に名のあしきを嫌ひて、韓を福にかへたるにもありぬへし〔15〕。〔かくみる時は、一日行とあるにもよく合へり〕我室の浦はの鳴島・屍嶋もいつの頃よりかきみ嶋・かつら島といへり。是も其名のあしきによりて改たるもの也。◎さて追考記〔元和年中に室津の事を記せる書也〕に山三方をかこみて往來の客船風波の難をしのき江中静謐なりければ、室中に異ならずとて、室津と名付そかしなりとあるは此記に所コ以号室者。此泊防風如室。故因為名とあると同じ事にていとめてたし。〔韓荷島のいひ傳へも此記と同じさま也。そはそこにいふへし〕御津・白貝浦、此二の名、今絶てなければ知かたけれど、室津の内に入りぬへし。〔室津といふは、東は伊津村にさかひ、西は赤穂郡の堺にいたるまで室津の内なり。此間二里にあまりて浦々多し〕鳴島・屍島のなきはいかにそや。此記の成れる頃は、此二島ともに赤穂郡に属るか。今も鳴島は揖西・赤穂の二郡に度り、屍島はみなから赤穂郡に属り。さてまた中昔に室といひしは、今の我産土わたりのみ

の事にはあらで、揖保川の西、濱田村・刈屋村あたり。また河内谷（河内谷とは馬場村より東し揖保川より西をいへり）（○濱田・刈屋は室より辰巳にあたり河内谷は子丑にあたり）これらみな室といひしならんとおもふ事、寛治の頃より嘉吉の頃までのものに據あり。事長ければ此處には略しぬ。（此事は社記に委しく論へり）

【附箋】

追考御津と室原泊とは二所にはあらで、一処にして名の二ありしか、まかひたるならむか。（名の二ある事は、此巻にかす／＼あり）いかにとなれば、防風如室とあるいとよき泊をおきて、異浦に御船の泊玉ふへき事もあるまし。されはこゝはもと所以号御津者。息長帶日賣命宿御船之泊。故号御津。亦所以号室原泊者。此泊防風如室。故因為名とありたるかまかひたるものならん。これによりてまた一つおもふ事あり。室津といふは、船の泊なれば室津なりといひて、事もなけれど、此処は船の泊を津といふ。その心はかりにてはなしにもしは室原の室と御津の津とをとりて室津といふにはあらぬか。一浦にて二名ならんと思ふより、またかくもやとおもふ。

【附箋】

里の名などには、本名何といふ事、かす／＼あれと、一村の名などに本名何といふ事みえず。されはこゝは、また所三以号二室原泊一者。此泊防風如室。故因為レ名。亦曰二御津一者。息長帶日賣命宿二御船之泊一。在者曰二御津一トモなどにやあらん。

【附箋】

考室津有吉川次郎ハ

文治元年室津ヲ領ス。

栗栖庄千本村。

○家嶋は神名帳に、揖保郡家嶋神社（名神大）とあり、室泊より三里南方なり。○韓荷嶋は萬葉集卷六に、過辛荷島時。山部宿祢赤人作歌一首并短歌。味澤相。妹目不數見而。敷細乃。枕毛不卷。櫻皮纏。作流舟二。真梶貫。吾榜來者。淡路乃。野島毛過。伊奈美嬌。辛荷乃島之。島際從云々。反歌。玉藻刈。辛荷島爾。島回為流。水鳥二四毛有哉家不念有六とみえたり。此からの島といふ嶋、今三あり。其一は室の浦より南方十五丁はかりはなれてあり。三の中にてはいと大きく、東より西へはみしかく、北より南へはなかし。（東西五十五間、南北九十間）島山のうへ、松木繁れり。是を今地の唐荷島といふ。また一はこの地の辛荷島より七丁はかり南へはなれてすこし西方によりてあり。此島は三の中にてはいとちいさく（東西三十一間、南北廿二間）是にも松生茂れり。これを中のからの島といふ。さてまた此島より二丁はかり南に離れてあるを沖の韓荷島といふ。此は地の辛荷島よりちいさく、中の辛荷島よりはいと大きく（東西四十二間、南北六十間）て、此島にも松おほかり。さて此沖の辛荷嶋と中の韓荷嶋との間、潮みつれば小船などとは行かよへとも、潮ひる時はかなたこなたひとつに連けり。かくて此島ともを辛荷島といふ由緒は、室津の云傳へとて真柴かる山賤いさりする海人などのいふには、むかし唐船、此辺にてあらし波風にあひたるに、其船に積たる物を此島に揚しにより加良美能島といふといへり。おのれはしめには、あちきなき事いふ者かな。唐荷とかきたる文字につきて、こさかしき者のおしあてにいひ出たるを、またいひひかめて、からみの島といふは、あはれをこのものかなと、嘲けりしに、

其後橘千蔭か物せし萬葉集略解をみれば、播磨風土紀に韓荷島云々と挙たるを見て、さてはとおもひて彼やしき者のいふ事も古事にてうきたる事にはあらすと、いとも／＼尊人もめてたくもおもひぬ。へされと、からみといふは、なほ訛りなり。○辛荷島の云傳へ事のうきたる事ならぬによりて、此あたりの島々を先年考へ物したれば、ちなみに此處に書つく。△鳴嶋、今は君島といへり。萬葉集十二卷に室之浦之湍門之崎有鳴島之磯越波爾所沾可聞。此島は室より二十三丁はかり西方、すこし南へよれり。また辛荷島と隔ること一里にちかし。△屍島、今かつら島といふ。名寄に俊成卿むかし人いか成る屍さらされて島の名にしもおひやしぬらむ。此かはね島は啼島より少し南西へよれり。此間十五丁はかり離れて、啼島より今一きは大きな島なり。此島、我屋戸わたりより見渡すには、前なる啼島にいさゝか重なり。○△生嶋、夫木抄に、朝夕に、さためなき世を、なけくには、生嶋にこそ、住へかりけれ。是は赤穂郡坂越浦に附て上のかつら島よりは一里はかり離れて大ききも啼嶋よりはこよなく大きなり。山のうえより水際まで種々の木ともいたく生茂れり。中らには此坂越浦にます大避大神の行宮あり。地方より隔たる事二丁はかり也。○△唐船島、是も赤穂郡御崎村に属けり⁽¹⁶⁾。東より西まで僅に一丁はかり。北より南へはそれより短し。此より地方まで、今は塩竈浦となりて嶋にあらず。上のかつら島よりは二里はかり西方なり。さて此島の事、赤穂郡に云傳へたるには、からせんと名つくるよしは、むかし唐國の船あらし波風にあひ、此邊りに漂ひ来て終に此処にてうつふしに伏しつみしか。後に一の島となりたる也。然るによりて此上にあかりて是にちからをいれて踏めは、今にうつらなる音すなりといへり。○△取揚嶋、この嶋は備前國のさかひにありて、赤穂郡の内なり。からせんよりは二十六七丁はかり西方なり。大ききは上にいへる中の辛荷島ほとなるちいさき嶋なり。さて上の韓荷島より此島までを取統ていふ。先からの島も、からせん嶋も、ともに唐船の漂ひし古事をいひつたへたり。此方彼方同じさまの故事を云傳へたれば、是は同じをりの事なるへし。されは此外の嶋々の名とも、おなし故事よりおへるならんとそおもはる。抑啼嶋といふは、其韓船の漂ひし時に、韓人ともこの此島につきて啼かなしひたるによりて啼嶋といひ、屍島とはそのから人ともの中には水に溺れて死しもあるへし。其死屍を此島にをさめしよりかはね島といひ、へまたは死屍ををさむるまでにはあらで、此島に取あけし故の名にてもありぬへし。生嶋とはやう／＼に此島まで漂ひ来て生たすかりたるよりの名なるへし。さて其船は今のからせんのあたりにて、うつふしに伏しつみたれば、其船の物こと／＼に浮なかるゝを取揚しによりて、取あけ島とはおへるなるへし。○高嶋は家しまの西にあれば、西の高島といへり。○伊刀嶋、この名しれず。今ふと島といふしまあり。訛りか。

萩原里 韓清水 陰絶田^(マ)

是は萩原なることは論ひなし。さて萩原村、揖保川の東なるは、室より一里半はかり。また上の浦上里の條にいへる萩原は川西にて是よりちかし。此萩原村は川の東西にわたりて、二村となれり。いづれも宇頭川の泊かきあたりなり。故つらつらおし考ふるに、石海里の條に御船宿於宇頭川の泊とあるも、此處に御船宿於此村とあるも、やかて同じ處ならん。然るを^(朱筆)石海里の方は帶日賣命韓國に出ませる時の故事をいひ、此処なるは歸り来ませる時の事をいひ傳へたるによりて、二方にあれと、泊は同じ泊なり。さて宇頭川の條にいへる梶山の南側の桧あたり碇岩村・中嶋村といふ村あり。此二村の事を石海里わたりに云傳ふるには、むかし此邊海にてありし時、船のいかりの岩にかゝりし處なるによりて、此處を碇岩村といひ、また中嶋村は嶋なりしによりて、今中嶋村といふなりといひつたへたり。よく合へり。○韓清水・陰絶田、今浦辺村より三丁はかり北に清水といふ處、また大久保といふ處

もあり。萩原村よりは北西にあたりて、五丁はかりあり。韓清水・陰絶田の名残りか。○傾田、阿曾村の西門前の少し北に片吹村あり。正条よりは廿五丁はかり東なり。

少宅里 東

和名抄に揖保郡小宅（古伊倍）とあり（一七）。今堂（タウモト）元（宋筆）・宮脇・中村・北村・高田・井ノ上・常全・片吹、是村々を小宅（ヲヤゲ）庄（宋筆）といへり。正条より一里はかり丑寅方なり。中村北村などは片吹より一里も北也。

揖保里 東

正条の南川向ひなり。

出水里 西

今此名しれず。和名抄にもみえず。さて立野の西方にあたりて清水村といふ村あり。正条よりは北方、少し西へよれり。此清水村の北の山のうしろは越部庄なり。かれ此記、北方越部村云々。南方泉村云々とあるをもて考ふれば、出水里は立野の西、琴坂の東にあたれり。かくて此清水村あたりか。立野の西、琴坂の東にあたれは清水村といふか。出水村の名のまかひたるものなるへし。

桑原里 琴坂 西 今も琴坂は桑原の内なり。

上にもいへることく、立野より一里はかり西方に琴坂あり。されは桑原里は此あたりなるへしとおしてしるゝ也。此こと坂のかたはらに三味線峠といふ處もあり。是は琴坂によりて後に設けたる名なる事おしはからるゝ也。

【附箋】

桑原 はりま鑑には、桑原庄竹万村とあり。また新宮ハ越部庄とありて、新宮瀧ハ桑原庄とあり。是は新宮と新宮瀧とは別なり。今名高新宮里は越部庄、新宮村は桑原庄也。瀧は新宮村にあり。

讃客郡（マヤ）

讃客里 吉川 按見川 江川は吉川なり。

佐用・平福・長谷、これみな今江川郷といへり（一八）。神名帳佐用都比賣神社も此あたりにあり。○按見川、今平福より久崎村上月村あたりへなかれ出る川あり。また一は宍粟郡千草村の奥よりなかれ出て、久崎村大酒村、此邊より一になりて、下は赤穂郡上郡村へなかれ、それより坂越浦の西をなかれて海にいる川あり。この川を佐用、また上郡村あたりまでにはクマミ川といひて、文字は隈見とかけり。経歴考には熊見とみえたり。クマミはクラミの訛りなるへし。

○速湍里

佐用郡の西の端にて、今一里はかりゆけは美作国なり。

○ 柏原里 ⁽¹⁹⁾

○ 中川里 船引山

今三日月里わたりに、船引氏かす／＼あり ⁽²⁰⁾。船引山は ^(本ノマ)

○ 雲濃里 ⁽²¹⁾

△ 宍禾 ^(本郷) 郡

○ 比治里 宇波良 比良美 川音

比治、今三村となれり。山崎里より南、少し西へよれり。此間廿五六丁あり。宍粟郡の南の端にして、揖保郡のさかひにあり。○宇波良、今宇原村は山崎より南東方にて、一里あまりあり。○比良美は山崎より五十丁はかり南西の方にあたりて、今は揖東郡に属て、香山の北比治村の南なり。(これ揖保宍禾のさかひなり)○川音、こも山崎より三十丁はかり。川の東に川戸村あり。

高家里 ⁽²²⁾ 都太川 塩村

都太川、山崎より三里はかり西北に都多村あり。是か。○塩村は安師より十丁はかり南に塩野村あれと、これにはあらて、山崎より西の方に塩田村あり。是か。

【附箋】

高家 古言梯に、信濃佐渡郷名高家を

タキへ、またタカへ、タケへとかなつけあり。

柏野里 土間 土方郷塩野村また柏野郷菅野などはりま鑑にあり。

土間、山崎より一里はかり西に土間村 ^{ヒデマ} あり。

安師里 酒加

山崎より五十丁東南の方なり。さて和名抄には安志といふ郷名ありて、安師といふはなく、此記には安志の号なし。されと和名抄に假字なければ、阿那之とよむか。阿年志とよむにか知かたし。また文治二年九月五日源頼朝卿の古文にも、安志庄・林田庄・室・御厨とあれと、こもかな／＼ければいかに訓しにや。今は阿牟自といへり。そはともあれ、かくもあれ須加といふ處も安志より十二三丁はかり西にあれば、これその安師里なる事は論ひなしと思ふ。折しも、但馬考をみれば(此考は宝暦元年に出石儒桜井良幹の著述なり)出石郡安美郷ノ内成支名・安富名・福成名ナトアリ。安美ハ今穴見谷ナレト、其名ノ地ハシレス云々とあり。和名抄には安美とあれと、穴見と書によりて阿奈身とよむことしられたり。また飭磨郡の安師は、和名抄に穴無(安奈之)とあり。かれかた／＼によりて、此処も阿奈之なる事しられたり。安を阿奈とよむは信濃、因幡の例なり。△ ^{付箋} はりま鑑に、石保郷須加村、此ヒチリキノ宮ト云ハ、

今ハ遙拜宮トモ申奉ル。山崎町ノ東北ニアタリテ大河アリ。此河ノ東ノホトリニ小宮オハシケル。神戸一宮ノ末社ナリトとあり。又熊ヶ嶽石保郷棧村ニアリ。山崎ヨリ二里北とみえたり。

石作里 伊加麻川

伊加麻川は今五十波と書てイカバといひて⁽²³⁾、山崎より丑寅方一里はかりあり。正しくは是なり。○^{付箋}朝水山城 廣瀬郷五十波村山崎ヨリ一里北ニアタル高山ナリとはりま鑑にあり。

雲箇里

山崎より少し西方なる奥小屋村の人のいへるに、雲箇と云處は神戸の伊和村よりもまだ一里はかり北なりといへり。はりま圖繪には山崎より伊和村までの中にあり。

御方里 伊和村

山崎より五里はかり子丑方なり。○伊和村、是はまかふ處もなく、神名帳に伊和坐大名持御魂神社（名神大）とあるは此處そ。

神前郡

【附箋】

○聖岡里 粟鹿河内

今粟加といふ處、川辺村より二里あまり北にありて、やかて生野へ行道なり。川辺村の

川は、此粟加よりなれ出て下は姫路の東西市川と船場川と二つになれり。

○川邊里 勢賀川 神東

東川辺・西川邊・東小畑・西小畑・浅野、此五村を川邊郷といへり。また南大貫・西大貫の二村は川邊南庄といへり。○勢賀川は瀬賀庄上瀬賀村・下瀬賀村と二村あり。此處に流るゝ川なるへし。川辺村は姫路より五里あまり丑方、上瀬賀は六里あまり。下瀬賀は五里はかり。これも丑方にあたれり。

高岡里 奈具佐山 神西

山崎・福田・神谷・桜・長野・板坂・田口・馬田、是ら高岡庄なり。山崎は姫路より丑方、福田村・神谷村・桜村などは戌亥方にて、いつも四里はかりなり。また西谷・西治・恒屋・中村・久畑、此村ともは高岡南庄といへり。西治・恒屋は亥子方にて三里はかりあり。○奈具佐山は今七種山とかけり。

^{本マ、(朱筆)}
姫路より

多馳里 八千軍野 東

この馳もまた曰多馳とある馳も、ともに駄の誤にて、こゝの文はタ、ニコフカモトノリ玉ヒキ。カレタ、トイフとなくては聞えかたし。その上タ、といふ據は、蔭山庄の内に多田村東西と二村あり。多田村は姫路より三里丑方なり。○八千軍野は、かちや村、小倉村・庄村・余田村を今八千種庄といへり。

鍛冶屋庄村は上の多田村の隣にて、丑寅方三里はかりあり。小倉は丑方にて三里半、余田は戌亥方にあたりて四里半はかり。

蔭山里 胄岡 東

今蔭山庄に属る村数三十はかりもありて、いと廣き庄なり⁽²⁴⁾。多田も此内にあり。姫路より近き處は一里はかり。遠き處は四里はかりもあり。いつれも丑寅方なり。○胄岡、今唯一つ離れたる山あり。山上に八幡大神坐り。俗に胄の八幡といへり。○はりま鑑に、甲八幡宮蔭山庄在江鮎^{付箋}村^{（前カ）}より一丁北方御黒印社領五石社家木村

俗二山ノ形、甲ニ似タル故、甲八幡ト云とありて、次に甲社、神名帳ニ入神后尊御甲ヲ納メ玉フ故トモ云。古処集かけ山の、甲の社、ぬかつけよ、いくよ久しき、神かその山。三木通重とあり。おもふに是は二処にはあらず。一社の混ひたるなるへし。今神東郡なり。

的部里 石坐神山

この二處、今多可郡にあり。寛文の頃の高帳にも多可郡なり。此記のなれる頃は、此邊までも神前郡なりしか。また高帳に石坐神村にイサリカミムラとかなあり。猶また此郡のはしめにみえたる生野は今の生野か。さらはこも但馬國內なり。此但馬国の生野へ行には、上にある川辺里を北へ行々て、此郡をはなるれば生野なり。

託賀郡⁽²⁵⁾ 春日大明神 〈黒田庄田高村、石原村とあり。また黒田村といふもあり。はりま鑑に〉

津万庄比延村高多庄荒田村など今あれと、委しき事をしらす。

【附箋】

都麻 今津万村 比也山比也野 今比延村下比延村 二村アリ。 上比延村モアリ。

東条

東条内垂井郷鹿野村ともあり。

菅田 小田 厚利 □依 小沢 吉井 松沢 豊地 久米谷 新条 念仏 天神

神谷 木梨 岩屋 都市

【附箋】

八幡宮 津万庄津万村御朱印十二石余とあり。

また柏谷山西林寺津万庄小坂村とも

あり。また比延山城 妻庄比延村とも

はりま鑑にみえたり。

【附箋】

荒田大明神 高多庄奥荒田村社家山崎出雲と

はりま鑑にあり。また荒田城荒田村とも。

はりま鑑に云、

白鹿山椅鹿寺真言宗〈東条谷天神村〉〈御朱印〉寺領十八石余

寺記略

人皇三十代推古天皇之御宇。聖德太子遊_レ歷當國_一至_二此地_一。時白鹿數十疋積_二靈木_一於_二石車_一引來焉。太子之從者怪_レ之。椅_二鹿之後足_一。損_二傷之_一。其時彼鹿既為_二絶入_一。太子見_レ之而悲_二憐之_一。則向_二東方_一。拜_二藥師如來_一。仰_二衆病悉除之願_一。忽彼鹿之疵速癒。而歸_二山中_一。依_レ之太子以_二彼靈木_一自刻_二藥師如來之像_一。報_二謝佛恩_一。是則當寺之本尊也。而後經_二奏聞_一。創_二建伽藍_一。為_二勅願所_一。△白鹿□椅鹿寺、此里名_二椅鹿谷_一云々とあり。是は正しく風土記の説の遺れるを、かくはとりなせしもの也。○此処に四ノ字。△処ニ号字。□処ニ山字脱たるなるへし。（朱筆）

因にいふ、法道仙人の事としては此記に少もみえさるに、推古朝より白雉の頃までに（朱筆）
仙人開基の道場数あるはいかに。

賀毛郡

玉野村河合郷鴨谷・コセ・山田・河内・加毛・穂積などあれと、是もくわしくはしらす。

【附箋】

はりま鑑云、住吉四社大明神東条吉井村ニアリ。又住吉大明神喜多嶋村ニアリ。又住吉大明神垂井庄小野町ノ下ニアリ。コノ小野社御朱印社領十石。抑當社濫觴ノ古録有シ処ニ兵火ノ為ニ紛失ス。只祝詞ニ云、河内ノ別府ト播磨神名帳ニ、河内大明神ト云有リ。上古此地ヲ河内庄ト名付ケ、近代改テ垂井庄ト云とあり。住吉大神三処坐神に河内大明神、また河内庄などあれば、此小野町下に坐住吉大神は神名帳に載られたる住吉大神社とは聞ゆれと、神宮寺の符會の説にはあらぬか。猶よく尋ねまほし。○畑村・王子村・鹿野・神樂山・市場など、垂井庄や喜多島は、はりま圖繪にてみれば市場の北畑村の南にあり。されは是も垂井庄なるへし。

【附箋】

江波八幡 西河合郷細引村

千歳山新宮 西河合郷田原村

青葉山 河合郷青葉野山。今ノ青野原也と

みな、はりま鑑に出たり。

【附箋】

はりま鑑云、滝野、瀧ノ上側ニ瀧野村アリ。川ヲ河合川ト云。栗生村ニ河合太郎吉トテ代々大家ノ農民アリ。また河合城 河合郷新部村、ま

三囊郡

た河合城アリ。小堀ノ城ト云。河合郷河合・中村ニアリともみえたり。○阿形村・島村・栗生村・長町村、是ら河合郷なり。はりま圖繪には、瀧野の下に河井あり。その南に新部あり。また新部の南西に長町村あり。

志深、和名抄には此郡の内なり。今も志深庄池野村に二皇子の古跡ありときく。さて池野村は赤石郡のさかひなるよし也。
的部 石坐神山

此二処、今多可郡にあり。また古き高帳にも多可郡なり。然れとも此記の成れる頃は、此あたりまで神前郡なりしなるへし。さてその高帳に石坐神村とかなあるはよしあることか。

安政六年^{己未}三月十一日書竟ぬ。

岡 平保

○或人此記をみていへらく、明石郡は卷首なれば、欠もしけんを、中なる赤穂郡のかくへきよしなし。いといふかしといへり。我いらへけらく、赤穂郡なりからにあらず。此記もとは、明石郡より揖保郡までを上巻とし、赤穂郡より以下を下巻として二巻なるへし。されは明石郡は上巻の首、赤穂郡は下巻のはしめなるからに、破損はれたるものならんといらへければ、また曰、二巻ならは、六郡つゝにわけて、赤穂郡は上巻の尾にあるへきことわりなりといへり。またこたふ、郡の次第にてはさることながら、飭萬、揖保の二郡に里かすおほければ、郡のかすにはかゝはらて、わかちたるものなるへし。もしまた郡の次第をもて、赤穂郡まで上巻ならば、その上巻の首尾のかけしなりとみても、いふかしき事さらになし。

【附箋】

播磨鑑云、縮見岩屋 志深庄池野村九間ハカリ前、七間ハカリ入レハ清水アリ。其奥二間ハカリニシキ岩アリ。二人御子住玉ヒシ処ヲ二子村

ト云。又明石郡王子村二人ノ御子住玉フト云。

○逢染川、縮見北ノ小川ヲ云。皇子二人臣下ニ逢玉フ処故名付とあり。

【附箋】

はりま鑑云、三坂大明神在志染大柿村。延喜式ニ、御坂ト有。久留美庄這田村、中石野村志深、大柿村三処ニ有之。何レヲ本社、何レヲ撰社トモ不知。然レトモ大柿村ノ社ヲ本社トセンカ祭神九神也。正一位三坂九社大明神ト云。

○御酒大明神在上芝原村。明石ヨリ丑方六里半。播磨国五十座内美囊郡一座^小。御坂神社ト云々。當村ノ御酒大明神則此事也ト云々。酒坂文字異也。如何。又同郡大谷山伽耶院ノ境内ニ三坂大明神有。是ハ三坂ト書ク。三木郡志深庄上村ニ三坂大明神ト有。是ヲ上芝原村ヘ勸請ナルヘシ。是ハ祭礼三月廿九日ヨリ四月朔日マテ也。伽耶院境内ノ明神也。上村ヨリノ勸請ナルヘシとあり。また上芝原村祭礼は九月十一日なり。

右の件いと／＼まきはし。

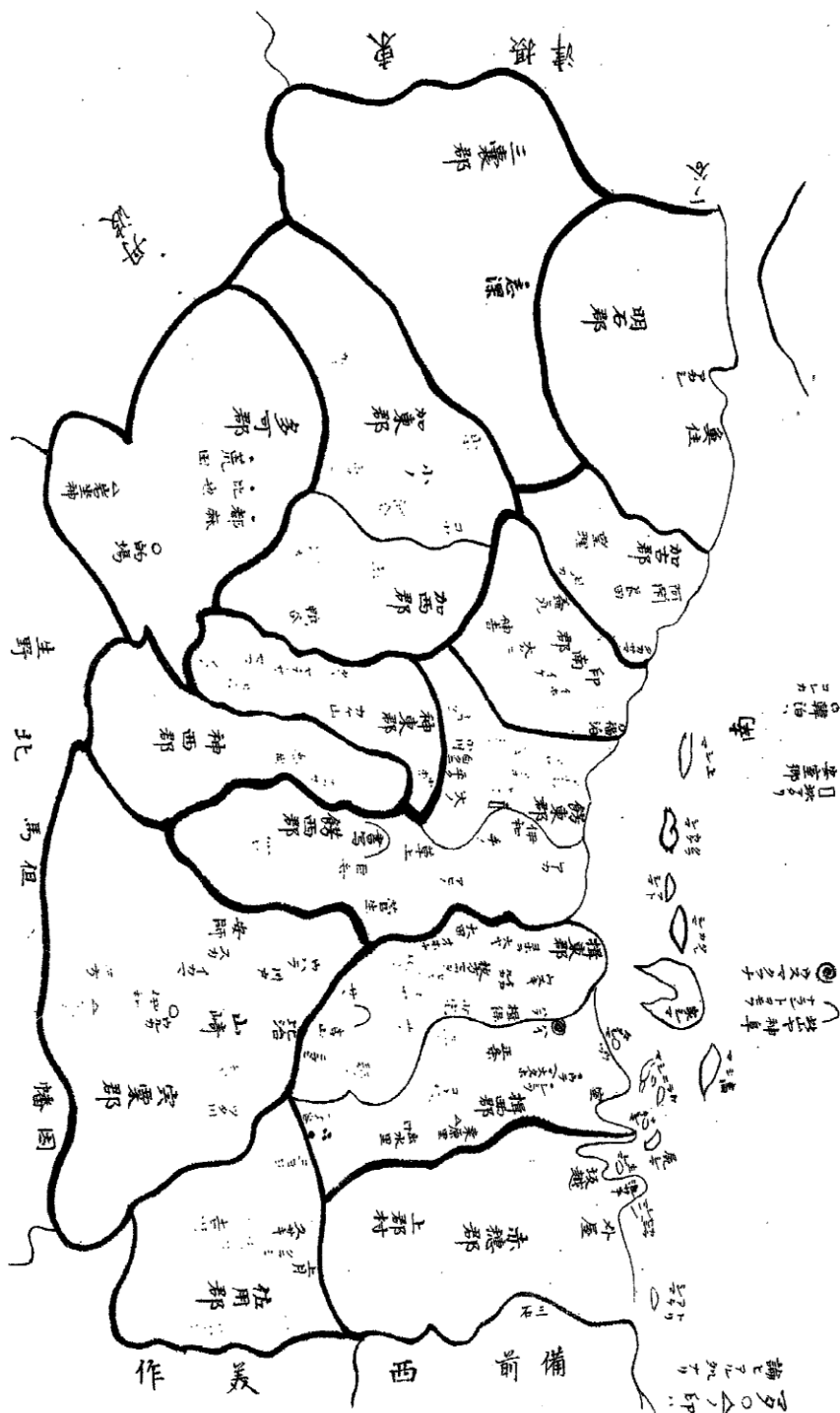
○垂仁紀一云、初天日槍乗艇泊于播磨國在於宍粟邑云々とみえ、揖保郡揖保里件に天日槍命到於宇頭川底而乞宿處於葦原志舉乎命云々とありて、また宍粟郡の其處、此處に日槍の取為あるとは事の趣きよく合ひたり。さて宇頭川は源但馬・因幡の二國より出て、宍粟郡の北方なる御方あたりより山崎・比治の東、須加・川音などの西をなかれて⁽²⁶⁾ 揖保郡の佐々村へ出て、林田の西をなかれ、それより立野・正條の東をなかれて、うつまく淵にいたれり。されは日槍、韓國より渡来て、まつ宇頭川の底に船はてゝ、それより川のまに／＼のほり、出ゆきし事、まのあたり見るこゝちする。然るに此記にも和名抄にも出浅邑のみえたるはいかに。今、山崎より二丁はかり東、須加よりは四丁はかり乾方に、出石と書てイダイシといふ處あり。是や。垂仁紀にみえたる出浅邑のまかひたるものならんとおしはかるゝなり。猶よく尋ねまほし。〔日槍、いつくはあれと、宇頭川のもとに至れるは、伊和大神にやとりをこはんためなるへし〕またはいく、天日槍志許乎命に宿請し〔伊和大神は播磨國の主神にませは、此大神に宿こひしは諸にそ有ける〕をはしめ、それより宍粟郡に到りて志許乎命と種々の事ありしは、時代いたく違ひたるさまなれと、然にはあらず。是は伊和社坐大名持御魂神頭御身に成ましての事なり。然るを日槍と事ある處には、いつれも伊和大神とはなくて、葦原志許乎命とあるは、いかにとなれば、日槍は韓國の王の子なれば、それに對へて大神の雄々しき御名を挙て、おのつからに

御稜威をかゝやかさんの心してなるへし。また處々に伊和大神云々とあるは、みな此処のことく御魂神の顕御身に成ましての御取為なり。さてまた神前郡聖岡里件には大汝命とあり。此処も神代の事のことくも聞ゆれど、猶二神ともに御魂神の御取為なる物から小日子尼命といふに對へて伊和大神とはいはて、大汝命といへるなるへし。〈大汝命は多くの御名あれど、少毘古那命にむかへいふ時は記紀萬葉にもみな大汝命《大名持、大己貴》とのみあれば、こゝもその趣意なるへし〉此外にまた鰐磨郡伊和里の件に、昔大汝命之子火明命云々とあり。是も伊和大神の御所為なれど、伊和君等云々ともあれば、それに混はんと心したるものか。又は伊和大神はやかて大汝命の御魂神なれば、後のさかしらに大汝命とは書たるにてもありぬへし。

○揖保郡林田里件に、塩阜云々。牛馬鹿等嗜而飲之。また宋禾郡高家里件にも塩村云々。牛馬等嗜而飲之とあり。この二処ともに不飲とありし不の字の脱たるものなるへし。嗜而飲之にては、ことわり聞えかたし。猶塩阜の卅里もいふかし。

○賀古郡賀古松原の次に、須受武良首云々。天皇勅云好告哉。故号告首云々。鰐磨郡伊和里十四丘の下に、曰告齊、また紀に麿坂王忍熊王共出菟餓野而祈狩之曰とある告首のツゲも、告齊のツゲも、菟飲^{ツメ}野のツガも、みな一ツ事よりおこりたるならんか。何とか似よりてきこゆ。

此圖朱モテ書ルハ、風土記ニミエタル処ナリ。マタ朱モチ書タル頭ニ●此印アルハ正シク今アレト、吾ソノ処ヲシラサル処ナリ。マタ墨モテ書タル頭ニ朱ニテ●アルハ、オノカ考ヘタル処也。



右播磨風土記考

播磨國揖西郡室津加茂神社祠官岡平満藏本明治廿一年五月
編修長重野安繹採訪明年十一月謄寫了。

〔頭注〕

(1) 大野村ハ姫路ヨリ卯方四里ハカリ。

(2) 總社伊和大神とあるも、此記によりてしらる。

(3) 伊和里ハ播磨郡の東西にわたれり。

(4) こゝの漢部里に、土の上中下をいはさるもの故也。播磨御宅、今三宅町あるによりておもへは、こも伊和里條にいふへきをもらしたるによりて、こゝに出せるなりとそおもはるゝ。

(5) 市保ハ

安保ニハアラスカ。

安

市

(6) 附箋ニ、

及 沢田村、伊勢村など神岡庄といへり。また林田の辺に屏風岩といふ岩あり。此処を上岡といふよし播磨鑑にみえたり。又沢田は今の林田の南隣り。伊勢は西にて是もちかし。

(7) 丁ハヨホロト云。

(8) 丁村と宇須伎濱宮トハ十四五丁ヘタ、レリ。

(9) イシノウミとかなつてたるは、連風の石見の名の有事をしらていへるものなり。石海にてイハミとよめり。

(10) 金剛山村ナル岸某カイヘルニ、堀上アタリヨリ二丁余リモ西へ入込タル川ナルヲ、二百年ハカリモ先ノ事ニヤ、堤ヲツキテ今ノ如クナレルヨシニ聞ツタヘタリト云リ。

(11) 室泊と辛荷島とは揖西郡、家嶋は揖東郡なり。

高島は家島に屬たれば、これも揖東なり。

(12) 魚住は万葉卷六ノ名寸隅の船瀬ゆ見ゆる云々のナキスミの誤ならんと播磨日記槻の落葉にいへり。

(13) 本朝語園七卷ニ曰、元正白髪八幡樂人元正當官領備中国吉保川ニ下向シテ上洛スルトキ櫻生ノ泊ニテ

(14) 万巻十一

サクラヲノヲフノシタクサ
櫻 麻乃草原乃下草云々。

(15) 此記に死野を生野とかへたるも同じ。いともかしこかれと、伊和礼毘古天皇の太后の御名も同じ例なり。

(16) 室泊七月踊の歌に、御崎のな御崎のな、^{赤穂}あこのみさきの、^{辛船}からせしま、^地根からはえたる浮島か、とこたへり。此哥いつの代に誰かつくれるといふことをしらす。

(17) 古伊倍といふよりヲヤケといふ方まされり。

(18) 位曰、福地・金近・長尾・平福・佐用、コレラ江川郷トはりま鑑ニミエタリ。

(19) 徳久村ハ柏原庄とはりま鑑にみえたり。

(20) 三日月・乃井野・本郷、是ら船引庄とはりま鑑にみえたり。

(21) 櫛田村・中嶋村、是は宇野郷と同じ鑑にあり。

(22) 恩澤寺は高家郷上寺村にあり。山崎より二里北とはりま鑑にあり。

(23) 元ハ五十日婆ナルヘシ。

(24) 曾坂・砂川・金竹・細野・岩屋・津熊・太尾・牧野・山田・多田・栗橋・酒井・橋爪・仁豊野・砥堀・重国・鍛冶内・江鮒・藪田・仁色、是らの内に上下東西と二村になれるもあれば、三十はかりあり。

仁色は神名帳の新次の訛りにはあらぬか。

(25) 高松山、長明寺這田庄高松村にありとはりま鑑にみえたり。

(26) 伊加麻川ト云モ、ヤカテ此流ニテ、ソノアタリノ名ナルヘシ。

附論一 「太子」の用語に関する覚書

はじめに

『日本書紀』の古い部分には、劃一的な立太子記事がみえるが、これは、後世の造作、あるいは『日本書紀』編纂の際に体裁を整えた結果と考えてよいであろう。なぜなら、こうした早い時期に皇太子ないしは立太子の制度が整備されていたとは考えがたいからである¹。

ところで、「皇太子」と類似した表記として、『古事記』『日本書紀』（以下、「記紀」と表記）には「太子」という用語がしばしば登場する。『日本書紀』の「太子」についていえば、「皇太子」や「皇后」と同様、中国に範をとったものと考えられる。しかし、「皇太子」や「皇后」²などの用語を積極的に使用していない『古事記』にも「太子」の用例が多くみられることは注目すべきである。

「太子」の古訓は、記紀ともに「ヒツギノミコ」、すなわち日を嗣ぐ御子であり、それが皇位継承者を示すものであろうことは、容易に想像できる。しかし、これらの人物はかならずしも皇位を継承しているわけではない。しかも、記紀ともに「太子」と伝えるのは、わずかに品陀和氣命（誉田別尊）、伊耶本和氣命（大兄去來穗別尊）、木梨

之輕王（木梨輕皇子）、忍坂之日子人太子（押坂彥人大兄皇子）の四人であり、そのほかは一致しない。そのように考えると、「太子」の用法は記紀のあいだで若干ちがいがあるようにみえるし、それぞれ別の基準で「太子」の用語を使用している可能性が考えられる。そこで、小論では、記紀における「太子」の用例を悉皆調査しつつ、この用語がいかなる意味で用いられていたのかを考察してみたい。

一、『古事記』にみえる「太子」について

『古事記』における「太子」の用例については、すでに荒木敏夫氏が、①「太子」の用例は、長子であることを必要条件として、なおかつ「ヒツギノミコ」である者が「太子」と記されること、②「太子」の用例は、『日本書紀』における「大兄」に類似している、という二点を指摘されている³。ただ、同氏のいわれることが正鵠を射ているかどうかはあらためて検証する必要があると思うので、以下は、『古事記』における「太子」の事例について検討を加えていきたい。

『古事記』にみえる「太子」の事例については、別表に整理したとおりである。以下、いささか煩瑣ではあるが、逐一検討を加えていきたい。

【別表】太子一覧

表記		即位	太子		立太子	系譜関係	即位前紀の系譜関係
『古事記』	『日本書紀』		『古事記』	『日本書紀』			
神沼河耳命	神渟名川耳尊	2	綏靖天皇		○	神武天皇皇后所生第三子	第三子
師木津日子玉手見命	磯城津彦玉手看尊	3	安寧天皇	◎	○	綏靖天皇皇后所生唯一子	太子
大倭日子組友命	大日本組友尊	4	懿德天皇		○	安寧天皇皇后所生第二子	第二子
御真津日子詞惠志泥命	觀松彦香殖稻尊	5	孝昭天皇	◎	○	懿德天皇皇后所生唯一子	太子
大倭帶日子国押人命	日本足彦国押人尊	6	孝安天皇		○	孝昭天皇皇后所生第二子	第二子
大倭根日子賦斗迹命	大日本根日子彦太瓊尊	7	孝靈天皇	◎	○	孝安天皇皇后所生唯一子	太子
大倭根日子国玖疏命	大日本根日子彦国牽尊	8	孝元天皇	◎	○	孝靈天皇皇后所生唯一子*1	太子
若倭根日子大毘々命	稚根日子彦大日日尊	9	開化天皇		○	孝元天皇皇后所生第二子*1	第二子
御真木入日子印惠命	御間城入彦尊	10	崇神天皇		○	開化天皇皇后所生唯一子	第二子
伊玖米入日子伊沙知命	活目尊	11	垂仁天皇		○	崇神天皇皇后所生第二子	第二子
大帶日子淤斯呂和氣命	大足彦尊	12	景行天皇		○	垂仁天皇皇后所生第三子	第三子
若帶日子命	稚足彦尊	13	成務天皇	△	○	景行天皇皇后所生第一子*2	第四子
小碓命	小碓尊			△		景行天皇皇后所生第二子*2	
五百木入日子命	五百城入彦皇子			△		景行天皇皇后所生第二子*2	
帶中津日子命	足仲彦尊	14	仲哀天皇		○	日本武尊妃所生第二子	第二子
比陀和氣命	嘗田別尊	15	応神天皇	△	○	仲哀天皇皇后所生唯一子	第四子
宇遲能和气郎子	菟道稚郎子				○	応神天皇妃所生第一子	
大雀命	大鷦鷯尊	16	仁德天皇	△		応神天皇皇后所生第一子	第四子
伊耶本和氣命	大兄去来穗別尊	17	履中天皇	▲	◎	仁德天皇皇后所生第一子	太子
瓊之水齒別命	瑞齒別皇子*3	18	反正天皇		※	仁德天皇皇后所生第二子	
木梨輕之王	木梨輕皇子			▲	○	允恭天皇皇后所生第一子	
白髮命	白髮皇子	22	清寧天皇	▲	○	雄略天皇元妃所生第一子	第三子
小長谷若雀命	小泊瀬稚鷦鷯尊	25	武烈天皇		◎	仁賢天皇皇后所生唯一皇子	太子
広国押建金日命	勾大兄皇子*4	27	安閑天皇		○※	繼体天皇元妃所生第一子	長子
天国押波流岐広庭尊	天国排開広庭尊*5	29	欽明天皇		※	繼体天皇皇后所生唯一皇子	嫡子
沼名倉太玉敷命	渟中倉太珠敷尊	30	敏達天皇		○	欽明天皇皇后所生第二子	
忍坂日子人太子	押坂彦人大兄皇子			▽	○	敏達天皇皇后所生唯一皇子	
上宮之厩戸豊聡耳命	厩戸皇子*6				●※	用明天皇皇后所生第一子	第二子
	古人大兄皇子*7				●	舒明天皇妃所生第一子	
	中大兄皇子*8	38	天智天皇		◎※	舒明天皇皇后所生第一子	太子
	大海人皇子*9	40	天武天皇		※	舒明天皇皇后所生第三子	

△：『古事記』の説話的記述において「太子」の語が確認される例。

▲：『古事記』の御名代を定める記述において「太子」の語が確認される例。

▽：『古事記』の皇統譜に「太子」の語が確認される例。

◎：『日本書紀』で各天皇即位前紀に統柄として「太子」の語が確認される例。

○：『日本書紀』の説話的記述において「太子」の語が確認される例。

●：『日本書紀』にみえる上記以外の記事において「太子」の語が確認される例。

※：『日本書紀』にみえる「太子」以外の表記で「ヒツキノミコ」の古訓が確認される例。

*1：他に妃所生の皇子あり。

*2：小碓命は播磨稲日大郎女所生第二子、稚足彦尊は八坂入媛所生第一子、五百城入彦皇子は八坂入媛所生第二子。八坂入媛は景行天皇五十二年に播磨稲日大郎女の薨去をうけて同年七月に立后となっている。

*3：『日本書紀』に儲君（ヒツキノミコ）の古訓

*4：『日本書紀』に春宮（ヒツキノミコ）の古訓。しかし文意から人物を指す語ではなく、勾大兄皇子の居所を指す語と考えられる。

*5：『日本書紀』に嫡子（ヒツキノミコ）の古訓

*6：『日本書紀』に東宮（日次ノミコ）の古訓

*7：『日本書紀』大化元年九月戊辰条の分註に吉野太子とある

*8：『日本書紀』に東宮（マウケノキミ）の古訓

*9：『日本書紀』に皇太弟（ヒツキノミコ）の古訓

順にみていくと、初見は、景行天皇段にみえる次のような記事である。(以下、記紀から引用する場合、訓注は省略する)

大帶日子淤斯呂和氣天皇。坐纏向之日代宮^一治天下^一。此天皇娶吉備臣等祖。若建吉備津日子之女。名針間伊那毘大郎女^一生御子。櫛角別王。次大碓命。次小碓命。亦名倭男具那命。次倭根子命。次神櫛王。^五又娶八尺入日子命之女。八坂之入日売命^一生御子。若帶日子命。次五百木之入日子命。次押別命。次五百木之入日売命。(中略)凡此大帶日子天皇之御子等。所録廿一王。不入記^一五十九王。并八十王之中。若帶日子命与倭建命。亦五百木之入日子命^一。此三王。眞太子之名^一。自其餘七十七王者。悉別賜国々之國造。亦和氣。及稻置。県主也。

(後略)

数多くいた景行天皇の御子のうち、若帶日子命・倭建命・五百木之入日子命の三人が「太子」の名を負ったという。「太子」と称する人物が三人いたことに対して本居宣長⁴は、

さるは、遂に御位を嗣坐が、其御子等の中にて、元来も然定置賜へる物なれば彼皇太子、よく当りたれども、彼は元より、一人に限りて定めたる稱、此は一柱には限らざる御稱なるは、同じからず。異なることあり。されば、ひたぶるに、太子字には泥むべからず。

と述べ、太子は一人に限らないと解釈し、太子には皇太子とは異なる意味があったとしている。

太子の名を負ったとされる三人について少し詳しくみてみると、若帶日子命は八坂之入日売所生の第一子で、景行天皇の後に即位して成務天皇となった。倭建命は針間伊那毘大郎女所生の第三子(『日本書紀』では第二子)で、熊襲や蝦夷を征討して大和王権の勢力拡大で活躍したとされる。倭建命の子である帶中津日子命は成務天皇の後に仲哀天皇として即位した。五百木入日子命は八坂之入日売所生の第二子で若帶日子命の同母弟で、特に記述はないが、孫の高木之入日売・中日売命・弟日売命が揃って応神天皇に娶られ、中日売命が生んだ大雀命が仁徳天皇として即位している。

このようにみていくと、直接皇位継承に関与したのは若帶日子命ただ一人であり、他の二人は所生子もしくは子孫が皇位継承と関わっているものの、自身は皇位継承者だったとはいえない。荒木氏は、この点について『古事記』の「太子」の用例中で特異な位置を占めるとして、「太子」の用例が長子を意味するにすぎないとみるのは正しくないと指摘しながらも、長子であることを必要条件として、なおかつ「ヒツギノミコ」である者を「太子」と記していると述べておられる。「太子」とされた三人のうちこの条件に合致するのは、わずかに若帶日子命のみであり、他の二人はそれぞれ長子では

ない。これは『古事記』全体における「太子」の用例を法則化し、「太子」は長子であることを前提に捉えようとしたために生じた矛盾を、特異な位置を占めるとして除外されており、妥当ではないと考える。

それでは、三人の太子が存在することの意味をどのように解釈すべきか。実数はしばらくおくとして、景行天皇には数多くの皇子がいたという所伝は、なんらかの史実にもとづいているのではないかと思われる。多くの御子が存在する状況で、そのうちの三人が「太子」の名を負っていたことは、彼らが特別な処遇を受けていたことによるものではないだろうか。したがって、ここにいる「太子」とは、皇位継承者が三人存在するという意味ではなく、数多く存在する御子のなかで、この三人がとくに有力であったことを意味するのではないかと考えられる。ちなみに、『日本書紀』景行天皇四年二月甲子条には、

(前略) 夫天皇之男女。前後并八十子。然除^二日本武尊。稚足彦天皇。五百城入彦皇子^一之外。七十餘子。皆封^二国郡^一。各如^二其国^一。故当^二今時^一。謂^二諸国之別^一者。其別王之苗裔焉。

とあって、『古事記』のように三人を「太子」とは書かないものの、三人以外の皇子には国や郡を任せ、それぞれが地方の氏族の祖となったことがしるされている。このことは、八十人ほどいた景行

天皇の皇子のなかでも、日本武尊・稚足彦尊・五百城入彦皇子の三人がとくに有力な皇子だったことを意味するのであって、『古事記』の「太子」がとくに有力な皇子を意味したとする筆者の推測を傍証している。

ただし、この三人の皇子が有力だからといって、皇位継承者としても有力候補であったとは、即断しがたい。三人のなかで即位したのは若帶日子命のみで、倭建命と五百木入日子命は直接皇位継承とは関わっていないので、景行天皇段の「太子」は、ひとまず皇位継承とはべつに解釈したほうがよいように思う。

次に、仲哀天皇段には、

帶中津日子天皇。坐^二穴門之豐浦宮。及筑紫訶志比宮^一。治^二天下^一。此天皇。娶^二大江王之女。大中津比売命^一生御子。香坂王。

忍熊王。^{註二}又娶^二息長帶比売命^一。是太后生御子。品夜和氣命。

次大軻和氣命。亦名品陀和氣命。^{註二}此太子之御名。所^二以^二眞^二大

軻和氣命^一者。初所^レ生時。如^レ軻完生^二御腕^一。故著^二其御名^一。

是以知^下坐^二腹中^一國上^也。(後略)

とあり、品陀和氣命が「太子」の名を負っていたことがわかる。品陀和氣命は息長帶比売命所生の第二子で、仲哀天皇の後に即位して応神天皇となった。その後、仲哀天皇段で品陀和氣命が登場する記述には一貫して「太子」が用いられているという特徴がみられる。

品陀和氣命は即位して応神天皇となったものの、長子ではない。また、前にみた三人の太子と同じく太子の名を負っていたらしいので、この場合の「太子」も、有力な御子であつたとみてよいのではないかと考えられる。

さらに、続く応神天皇段には、

天皇聞_レ日向国諸君之女。名髮長比売。其顔容麗美_一。將_レ使而喚上之時。其太子大雀命見_下其嬢女泊_上于難波津_一而。感_二其姿容之端正_一即詔_二告建内宿祢大臣_一。是自_二日向_一喚上之髮長比売者。請_二白天皇之大御所_一而令_レ賜_レ於吾。尔建内宿祢大臣請_二太命_一者。天皇即以_二髮長比売_一賜_レ于_二其御子_一。所_レ賜状者。天皇聞_レ看豐明_二之日_一。於_二髮長比売_一令_レ握_二御酒粕_一。賜_二其太子_一。(後略)

とある。これによれば、応神天皇は日向諸君の女、髮長比売が容姿端麗であることを聞き、これを喚そうしたという。髮長比売が難波津に泊ったとき、太子大雀命が髮長比売を目にして気に入ったため、建内宿祢を仲介として応神天皇より髮長比売を賜わったという。ここにみえる大雀命は、いうまでもなく応神天皇の子の仁徳天皇である。

ところで、応神天皇段には次のような記述がみられる。

於_レ是天皇問_二大山守命与_二大雀命_一詔。汝等者。孰_二愛兄子与_二

弟子_一。天皇所以_レ是問者。宇遲能和紀郎子有_レ令_二治天下_一之心也。尔大山守命白。愛_二兄子_一。次大雀命知

下天皇所_二問賜_一之大御情上而白。兄子者既成_レ人。是無_レ悞。弟

子者未_レ成_レ人。是愛。尔天皇詔_二佐耶岐阿藝之言_一。如_二我

所_レ思。即詔別者。大山守命為_二山海之政_一。大雀命執_二食国之

政_一以白賜。宇遲能和紀郎子所_レ知_二天津日繼_一也。故大雀命者勿

_レ違_二天皇之命_一也。

これは、宇遲能和紀郎子を次期皇位継承者にしようと考えていた応神天皇が、大山守命と大雀命に兄か弟のどちらが大事かを問いかけたという伝承である。天皇の問いかけに対し、大山守命は兄、天皇の意向を知っていたとする大雀命は弟と答え、これを悦んだ天皇は、大山守命に「山海之政」を、大雀命に「食国之政」を、宇遲能和紀郎子には「天津日繼」を行なうよう詔したという。宇遲能和紀郎子が任された「天津日繼」は皇位を指しており、応神天皇の意思によつて宇遲能和紀郎子が次期皇位継承者となっていたことがわかる。本来、さきの記事では大雀命が太子とされるが、ここで本来の皇位継承者であつたという宇遲能和紀郎子に対して「太子」は附されていないことが注目される。「太子」を皇位継承者の意味で解釈しようとする矛盾する。また、応神天皇段をみると、

於_レ是大雀命与_二宇遲能和紀郎子_一。二柱各讓_二天下_一(中略)然

宇遲能和紀郎子者。早崩。故大雀命治_二天下_一也。

とあり、宇遲能和紀郎子は皇位継承者として他の御子より有力な立場にあったが、応神天皇が崩じたのち、大雀命と互いに皇位を譲り合い、宇遲能和紀郎子が早くに亡くなったために大雀命が即位したという。このような経緯があつて、結果的に「太子」の大雀命が即位したものの、前にあげた記述から、「太子」は皇位継承者の意味でもちいられたのではないことがわかる。

続く仁徳天皇段には、

此天皇之御世。為^二太后石之日売命之御名代^一。定^二葛城部^一。亦為^二太子伊耶本和氣命之御名代^一。定^二壬生部^一。亦為^二水齒別命之御名代^一。定^二蝮部^一。亦為^二大日下王之御名代^一。定^二大日下部^一。為^二若日下部王之御名代^一。定^二若日下部^一。

とあつて、仁徳天皇の治世に、太后石之日売命・太子伊耶本和氣命・水齒別命・大日下王・若日下部王の御名代として、それぞれ葛城部・壬生部・蝮部・大日下部・若日下部を定めたことがしるされている。ここで注目したいのが、この記述のすぐ直前の皇統譜に、

大雀命。坐^二難波高津宮^一。治^二天下^一也。此天皇。娶^二葛城之曾都毘古之女。石之比売命^一。太后。生御子。大江之伊耶本和氣命。次墨江之中津王。次蝮之水齒別命。次男浅津間若子宿祢命。

^四 ^{男王五柱} ^{女王一柱} (中略) 凡此大雀天皇之御子等并六王。故伊耶本和氣命者治^二天下^一。次蝮之水齒別命亦治^二天下^一。次男浅津間若子宿祢

命亦治^二天下^一也。

としるされる点である。この皇統譜の記述によれば、仁徳天皇の後に伊耶本和氣命が即位し、次に水齒別命、次に男浅津間若子宿祢命が即位したというが、ここでは伊耶本和氣命のみが「太子」とされている。仁徳天皇ののち相次いで皇位を踐んだ複数の皇子のことを仁徳天皇記のなかにしるするのであれば、伊耶本和氣命のあとに皇位を継承した水齒別命と男浅津間若子宿祢命も同様に「太子」とされていてもよさそうなものだが、にもかかわらず、太子とされていたのが伊耶本和氣命のみであるのは、太子が皇位継承者以外の意味を含んでいる可能性を示唆している。この三人のなかで伊耶本和氣命が長子で、年長者として有力な立場にあったからではないかと考えられる。

次に、允恭天皇段をみると、

又為^二木梨之輕太子御名代^一。定^二輕部^一。為^二太后御名代^一。定^二刑部^一。為^二太后之弟。田井中比売御名代^一。定^二河部^一也。

とあつて、仁徳天皇段と同様、木梨輕之太子に対して輕部が定められたという、御名代の設置記事がみえる。木梨輕太子は木梨輕王とも表記され、忍坂之太中津比売所生の第一子で、次期皇位継承者としても有力な立場にあったことが、次の允恭天皇段の記述でわかる。すなわち、

天皇崩之後。定^三木梨之輕太子所^一知日繼^一。未^レ即^レ位之間。

奸^二其伊呂妹輕太郎女^一（中略）故其輕太子者。流^レ於^二伊余湯^一也。（中略）故追到之時。待懷而歌曰（中略）即共自死。（後略）

とするされ、允恭天皇の崩じたあと皇位を継承するはずであった木梨輕太子は、同母妹の輕太郎女を奸したことで人望を失い、伊余へと流され、木梨輕太子を追ってきた輕太郎女とともにみずからの命を絶ったという。この「太子」の用例は、木梨輕太子が次期皇位継承者であったことが文中で明確に示されていることから、これまでの例とは異なり、允恭天皇の御子たちのなかで長子であつて、御子で唯一御名代を定められていることから有力な御子、かつ「日繼」を「所知」することを定められていた皇位継承有力者であつたことがわかる。そのため、ここでの「太子」は有力な御子の意味だけにはとどまらないのではないかと考えられる。木梨輕太子は、結果的に次期皇位継承者としての地位を追われ、結果として即位することがなかった。しかし、木梨輕太子を「太子」と記すのは、長子で、なおかつ「日繼」を「所知」する「ヒツギノミコ」であつたという、荒木氏が強調された条件を満たしていることから、この点は正しいといえる。

次に、雄略天皇段をみると、

大長谷若建命。坐^二長谷朝倉宮^一。治^二天下^一也。天皇娶^二大日下

王之妹。若日下部王^一。又娶^二都夫良意富美之女。韓比売^一。生御子。白髮命。次妹若帶比売命。^註故為^二白髮太子之御名代^一。

定^二白髮部^一。又定^二長谷部舍人^一。又定^二河瀬舍人^一也。

とあり、白髮太子の御名代として白髮部を定めたという。白髮太子は白髮命とも表記され、韓比売所生の第一子であることがわかり、雄略天皇のちに即位して清寧天皇となる。右の史料では雄略天皇の皇子は白髮太子ただ一人となっており、『日本書紀』の所伝と異なる⁵が、第一子であることと、他に男子がいたと記されていないため、次期皇位継承有力者であつたことが想定できる。

次に敏達天皇段に、

御子。沼名倉太玉敷命。坐^二他田宮^一。治^レ天下十四歲^一也。此

天皇。娶^二庶妹豐御食炊屋比売命^一生御子。靜貝王。亦名貝鮪王。

次竹田王。亦名小貝王。次小治田王。次葛城王。次宇毛理王。

次小張王。次多米王。次桜井玄王。^註又娶^二伊勢大鹿首之女。

小熊子郎女^一。生御子。布斗比売命。次宝王。亦名糠代比売王。

^註又娶^二息長真手王之女。比呂比売命^一生御子。忍坂日子人太子。

亦名麻呂古王。次坂騰王。次宇遲王。又娶^二春日中若子之女。

老女子郎女^一生御子。難波王。次桑田王。次春日王。次大俣王。

^註此天皇之御子等。并十七王之中。日子人太子娶^二庶妹田村王。

亦名糠代比売命^一生御子。坐^二岡本宮^一治^二天下^一之天皇。次中津

王。次多良王。^三又娶^二漢王之妹。大倭王^一生御子。知奴王。次妹桑田王。^二又娶^二庶妹玄王^一生御子。山代王。次笠縫王。^二并七王。^{（後略）}

とみえる。ここには敏達天皇と息長真手王の女、比呂比売との間に忍坂日子人太子が生まれたことが記されている。また、敏達天皇の系譜に続けて忍坂日子人太子の系譜を伝えており、日子人太子が庶妹の田村王（糠代比売命）を娶って生まれた子が岡本宮で即位したことまでしるしている。忍坂日子人太子の他に天皇の子孫の系譜が記されている例は、建内宿祢（孝元天皇段）、倭建命（景行天皇段）の二例で、この二例と時期の隔たりがあり、さらに二人を伝説上の人物とみる見解が依然として強い。しかし、御子の系譜までしるしていることは、日子人太子が有力な御子たることの表われだったのではないかと思う。ここにみえる日子人太子の御子とは舒明天皇のことであり、『日本書紀』によると、のちに日子人太子（押坂彦人大兄皇子）は皇祖大兄といわれ⁶、その私有していた皇祖大兄御名入部は、代々皇祖大兄の子孫へ伝承され、大化二年に中大兄皇子によって国家に返上された⁷。結果的に日子人太子は即位することはなかったが⁸、忍坂日子人太子は敏達天皇の有力な御子であったと考えられる。

以上の諸例で注目されるのは、前にみた木梨輕之太子・白髪太子と忍坂日子人太子の三人は、「太子」が名前の一部と化している点で

ある。これまでの太子の例は、太子の名を負う、または「太子大雀命」「太子伊耶本和氣命」のように、「太子——命」という形式で記されており、太子はある種の称号かのである。これに対し、「木梨輕之太子」「白髪太子」「忍坂日子人太子」は、「——太子」の形をとり、前者の「太子」とは性質が異なる。これは「太子」の語が本来は有力な御子に対する敬称であったが、時が進むにつれて有力な御子という意味だけにとどまらず、皇位継承有力者の意味をふくむ語に変化したのではないかと考えられる。

ところで、「太子」の用例が『日本書紀』における「大兄」と類似しているという荒木氏の指摘はさきにも紹介したとおりだが、これまでみてきた「太子」の用例で、「大兄」に相当するのは、忍坂日子人太子⇨押坂彦人大兄皇子の例のみである。一応は太子伊耶本和氣命⇨大兄去来穗別尊とすることもできようが、直木孝次郎氏が明らかにされているように、大兄去来穗別尊の「大兄」は地名の「大江」であるから⁹、やはり忍坂日子人太子の例のみとするのが妥当である。「太子」の例をみると、そのほとんどが長子であるが、皇位継承の原則としての大兄制を認めるか否かにかかわらず、長子を意味する「大兄」の初例が勾大兄皇子であることは、ほぼ異論がない¹⁰。また、『古事記』で「太子」の用例が確認される時期は、『日本書紀』で「大兄」がみえる時期とは一致しないので、『古事記』の「太子」

を『日本書紀』の「大兄」と類似したものとすることはできない。

以上、時系列に沿って、「太子」の事例を検討してきたが、その結果、『古事記』では、時期によって「太子」の意味が大きく二つにわかれることが判明した。すなわち、「太子」は結果的に皇位継承有力者とイコールの関係にあるものの、本来は、有力な御子に対する敬称であつたと考えられる。さらに、仁徳天皇段以降は、「太子」は長子であることに加えて、御名代が設置されたことが記されており、さらに、允恭天皇段からあとは、「太子」が名前の一部と化している人物がみられることから、有力な皇位継承者としての意味をふくむ語へと変化したことがうかがえる。以上の点から、『古事記』の「太子」の用例は時期によって変化しており、長子で、なおかつ「ヒツギノミコ」とされる人物を『古事記』では「太子」と記すという、一貫した法則性を強調された荒木氏の説には従えない。

二、『日本書紀』にみえる「太子」について

次に『日本書紀』にみえる「太子」に目を移してみよう。

『日本書紀』では、「太子」の用例と並行して「皇太子」の語もみられるが、こちらは皇太子制の確立後、その知識を溯らせて記した可能性が大きい。むしろ、『日本書紀』編者が皇太子と書くにはそ

れなりの根拠があつたと考えられるが、この点については必要な範囲でふれるとして、以下は、もっぱら「太子」の用語を検討対象とすることにしたい。

『日本書紀』における「太子」の用例は『古事記』同様、別表に網羅したが、その初見は、安寧天皇即位前紀である。ここには、「磯城津彦玉看天皇。神渟名川耳天皇太子也。母曰五十鈴依媛命」。事代主神之少女也。(後略)」とあり、安寧天皇は綏靖天皇の太子であつたとするされている。綏靖天皇二年正月条には、「立五十鈴依媛^一為^二皇后^一」。一書云。磯城県主女川派媛。一書云。春日県主大日諸女糸織媛也。即天皇之姨也。后生磯城津彦玉看天皇^一。とあり、綏靖天皇が五十鈴依媛以外に后妃を娶つたことが記載されていない。しかも、唯一娶つた五十鈴依媛との間に生まれた皇子は、磯城津彦玉看尊ただ一人である。

次に孝昭天皇即位前紀に「観松彦香殖稻天皇。大日本彦耜友天皇太子也。母皇后天豊津媛命。息石耳命之女也。(後略)」とあり、孝昭天皇は懿徳天皇の太子であつたことがしるされている。懿徳天皇二年正月癸丑条にある皇統譜を確認してみると「立天豊津媛命^一為^二皇后^一」。一云。磯城県主葉江男弟。猪手女泉媛。一云。磯城県主大日真稚彦女飯日媛也。后生^二観松彦香殖稻天皇^一。一云。天皇母弟武石彦奇友背命。とある。懿徳天皇の場合も、天豊津媛命以外に后妃を娶つたことが記されていない。また、一書によると観松彦香殖稻尊には同母弟に武石彦奇友背命がいたと記されているが、あくまでも分註で載せる

という形に留められており、本文に採用されていないところを考えると、観松彦香殖稻尊は天豊津媛命所生の唯一の皇子であった可能性が大きい。

続いて、孝霊天皇即位前紀に「大日本根子彦太瓊天皇。日本足彦国押人天皇太子也。母曰^二押媛^一蓋天足彦国押人命之女乎。（後略）」とあり、孝霊天皇は孝安天皇の太子であったことがしるされている。

孝安天皇廿六年二月壬寅条を見ると「立^二姪押媛^一為^二皇后^一」。一云。磯城郡主五十坂彦女五十坂媛也。一云。十市県主五十坂彦女五十坂媛也。后生^二大日本根子彦太瓊天皇^一」とあり、やはり孝安天皇の場合も押媛以外に后妃はなく、押媛との間に生まれたのは大日本根子彦太瓊尊のみである。

続く孝元天皇即位前紀に「大日本根子彦国牽天皇。大日本根子彦太瓊天皇太子也。母曰^二細媛命^一磯城郡主大目之女也。（後略）」とあり、孝元天皇は孝霊天皇の太子であったという。孝霊天皇二年二月丙寅条には次のように記されている。

立^二細媛命^一為^二皇后^一。一云。春日千乳早山香媛。一云。十市県主等祖女真子媛也。后生^二大日本根子彦国牽天皇^一。妃倭国香媛亦名^二廻某姉^一。生^二倭迹迹日百襲姫命^一彦五十狭芹彦命。亦名吉備津彦命。倭迹迹稚屋姫命^一。亦妃廻某弟生^二彦狭嶋命^一。稚武彦命^一。弟稚武彦命。是吉備臣之始祖也。

大日本根子彦国牽尊（孝元天皇）の例がこれまでの例と異なるのは、父である孝霊天皇が複数の女を娶り、それぞれの間に皇子が生まれ

ている点である。しかし、大日本根子彦国牽尊には同母兄弟がおらず、孝霊天皇皇后との間に生まれた唯一子であるといえよう。

前にあげた四例をふくむ綏靖天皇から開化天皇にいたる八代の天皇の記録は、系譜は存在するが、実績をしるした部分が欠けていることから欠史八代といわれ、たとえば立太子記事の形式が統一されている点などから、直木氏は編者の手がこの部分にもっとも多く加わっていることを唱えている。この年代の記録は古いため、記録の脱落などの可能性を想定しておくべきであろうが、后妃の出自や名に異伝を伝えている場合があっても¹、所生子については記紀ともにほぼ同じ所伝のため、ひとまず前にあげた四例は、即位前紀で前天皇との続柄を表わすために「太子」の語を用いているため、皇后とされる后妃の唯一子を意味すると考えたい。

次に神功皇后摂政十三年二月甲子条を見ると「命^二武内宿禰^一從^二太子^一令^レ拜^二角鹿笥飯大神^一」とあり、武内宿禰に命じて太子に従わせて角鹿（敦賀）の笥飯大神に拝ませたという。ここでの「太子」は、神功皇后摂政三年正月戊子条の「立^二誉田別皇子^一為^二皇太子^一」の立太子の記述をうけたものと推測される。その後、誉田別皇子は即位して応神天皇となっている。仲哀天皇二年正月甲子条によると、誉田別皇子の異母兄弟に大中姫所生の麿坂皇子と忍熊皇子、弟媛所生の誉屋別皇子（『古事記』では息長帯比売命所生第一子）がいたことがしる

されている。菅田別皇子は氣長足姫尊所生の唯一子であるが、応神天皇即位前紀に「菅田天皇。足仲彦天皇第四子也。」とあり、即位前紀では「太子」とされていない点が注目される。これまでの「太子」の用例が即位前紀で系譜関係を示す場合に用いられていたのに対し、説話的記事のなかで「太子」の用語がもちいられており、いささか趣きを異にしている。「太子」の語は、即位前紀での用例とは異なり、次期皇位継承者の意味でもちいられたのではないかと考えられる。

つぎに、応神天皇十五年八月丁卯条で「太子」の語が確認できる。

ここには、「百済王遣_二阿直岐_一。(中略)阿直岐亦能讀_二經典_一。即太子菟道稚郎子師焉。(後略)」とあつて、百済王が遣した阿直岐は經典に通じていたため、太子菟道稚郎子の師としたという。ここで菟道稚郎子を「太子」としているのは、応神天皇四十年正月戊申条の記載と関係があるろう。同条に、「天皇召_二大山守命。大鷦鷯尊_一。問之曰。汝等者愛_レ子耶。(中略)是時。天皇常有_下立_二菟道稚郎子_一為_二太子_一之情_上。然_レ知_二皇子之意_一。故發_二是問_一。(後略)」菟道稚郎子を太子としたい意向をもつて、あえてそれを大山守命と大鷦鷯尊に問うたという。同月甲子条には「立_二菟道稚郎子_一為_レ嗣。即日任_二大山守命_一令_レ掌_二山川林野_一。以_二大鷦鷯尊_一為_二太子輔_レ之。令_レ知_二国事_一。」とされるしている。これは、さきに『古事記』のところでもみた三皇子分掌の記事だが、ここで菟道稚郎子は嗣となっている

が応神天皇四十年正月戊申条で応神天皇が「有_下立_二菟道稚郎子_一為_二太子_一之情_上。」をもつていたことから、嗣と太子はほぼ同じ意味ではないかと考えられ、この決定を応神天皇十五年八月丁卯条に遡らせて太子としたものと理解できる。右の菟道稚郎子のケースも説話的記事のなかで「太子」の用語がみえ、菅田別皇子と同じく次期皇位継承者という意味でもちいられたと思われる。

次に履中天皇即位前紀に、

去来穗別天皇。大鷦鷯天皇太子也。去来。此云_二伊弉_一。母曰_二

磐之媛命_一。葛城襲津彦女也。(後略)

とあつて、履中天皇は仁德天皇の「太子」であつたことが記されている。仁德天皇二年三月戊寅条の引く皇統譜には、

立_二磐之媛命_一為_二皇后_一。后生_二大兄去来穗別天皇_一。住吉仲皇子。

瑞齒別天皇。雄朝津間稚子宿禰天皇_一。又妃日向髮長媛生_二大草

香皇子。幡梭皇女_一。

とあり、履中天皇は仁德天皇皇后所生の第一子であつたことがわかる。これまでの即位前紀では、皇后とするされる后妃所生の唯一子を「太子」と称していたが、履中天皇即位前紀の場合は、若干異なる。また、履中天皇即位前紀は住吉仲皇子の反乱を経て大兄去来穗別尊が即位するに至る一連の過程がしるされており、一貫して大兄去来穗別尊を「太子」としている。

次に允恭天皇二十三年三月庚子条をみると、「立^二木梨輕皇子^一為^二太子^一」。(後略)」とあり、木梨輕皇子を「太子」としたという。木梨輕皇子は允恭天皇二年二月己酉条の皇統譜に、

立^二忍坂大中姫^一。為^二皇后^一。(中略) 皇后生^二木梨輕皇子^一。名形大娘皇女。境黑彦皇子。穴穗天皇。輕大娘皇女。八鈞白彦皇子。

大泊瀬稚武天皇。但馬橋大娘皇女。酒見皇女^一。(後略)

とあり、忍坂大中姫所生の第一子であったことがわかる。前にあげた木梨輕皇子の立太子の記事は、これまでと異なり次期皇位継承者という意味で「太子」の語をもちいている。『日本書紀』の記事の体裁からみて、この記事は「太子」ではなく「皇太子」とされるべきで少々違和感が残る。この後、允恭天皇二十四年六月条に、「(前略)時^レ有^レ人曰。木梨輕太子^二同母妹輕大娘皇女^一。因以推問焉。辞既^レ夷也。太子是為^二儲君^一」。(後略)」とあり、木梨輕皇子が同母妹輕大娘皇女を奸したことが発覚したことを伝える。この記事で注目すべきは次の件で、「太子は儲君たり」という。儲君には「マウケノキミ」と訓があり、次期皇位継承者を意味する語と考えられる。前の木梨輕皇子の立太子記事をうけて「太子」を、次期皇位継承者の意味でとらえると儲君と意味が重複して矛盾が生じる。

続いての用例は、武烈天皇即位前紀に、

小泊瀬稚鷦鷯天皇。億計天皇太子也。母曰^二春日大娘皇后^一。(後

略)

とあるもので、ここには武烈天皇は仁賢天皇の「太子」であったことが記されている。仁賢天皇元年二月壬子条の皇統譜によると、

立^二前妃春日大娘皇女^一為^二皇后^一。春日大娘皇女 大泊瀬天皇娶 和珥臣深目之女皇女君 所生也。遂産^二一男六女^一。其一日^二高橋大娘皇女^一。其二曰^二朝孀皇女^一。其三曰^二手白香皇女^一。其四曰^二樟氷皇女^一。其五曰^二橘皇女^一。其六曰^二小泊瀬稚鷦鷯天皇^一。及^レ有^二天下^一。都^二泊瀬列城^一。其七曰^二真稚皇女^一。一本以樟氷皇女列于第三。以手白香皇女列于第四。為異焉。(後略)

とあり、武烈天皇は仁賢天皇皇后所生子の中で唯一の皇子であったことがわかる。

ついで「太子」の用語があらわれるのは、継体天皇八年正月条である。すなわち、同条には、

太子、妃春日皇女。晨朝晏出。有^レ異^二於常^一。太子意疑入^レ殿而見。妃臥^レ床涕泣。惋痛不^レ能^二自勝^一。太子恠問曰。今旦涕泣有^二何恨^一乎。妃曰。非^二餘事^一也。唯妾所^レ悲者。飛天之鳥為^レ愛^二養児^一。樹巔作^レ巢。其愛深矣。伏^レ地之蟲為^レ護^二衛子^一。土中作^レ窟。其護厚焉。乃至^二於人^一豈得^レ無^レ慮。無^レ嗣之恨方鍾^二太子^一。妾名隨絶。於^レ是太子感痛而奏^二天皇^一。詔曰。朕子麻呂古汝妃之詞深稱^二於理^一。安得^二空爾無^二答慰^一乎。宜^下賜^二匝布屯倉^一表^中妃名於万代上。

とみえている。こよれによれば、勾大兄皇子の妃である春日山田皇女は、子がないことで自分の名が後世に残らないことを嘆き、その様子を痛ましく思った勾大兄皇子は継体天皇に奏上して匝布屯倉¹²を賜うことで妃の名を後世に残すことができたという。ちなみに、勾大兄皇子は継体天皇の後に安閑天皇として即位する。安閑天皇の即位前紀を見ると、「勾大兄¹広国押金日天皇。男大迹天皇²長子³也。母曰⁴目子媛⁵」。(後略)とあり、継体天皇の「長子」となっている。勾大兄皇子は継体天皇のすべての皇子女のなかで第一子であつたであらうことは、名前に長子を指す「大兄」を含むこと¹³と、継体天皇元年三月癸酉条の、

納¹八妃²。雖有先後。而此曰癸酉納者。據即天位。占擇良日。初擇後宮為文。他皆效此。元妃尾張連草香女曰³目子

媛⁴。更名色部。生⁵二子⁶。皆有⁷天下⁸。其一曰⁹勾大兄皇子¹⁰。是為¹¹二

広国排武金日尊¹²。其二曰¹³檜隈高田皇子¹⁴。是為¹⁵二武小広国排盾

尊¹⁶。(後略)

皇統譜で所生子のいちばん筆頭に記されていること、さらに継体天皇元年三月甲子条に、

立¹二皇后手白香皇女²。脩³教于内⁴。遂生⁵二男⁶。是為⁷二天国排開

広庭尊⁸。開此云。波羅企。是嫡子而幼⁹年。於¹⁰二兄治後¹¹。有¹²其天下¹³。二兄者。広国排武

金日尊。与二武小広国押盾尊一也。見下文。

とあることから、天国排開広庭尊(のちの欽明天皇)よりも勾大兄皇

子の方が年長であることからわかる。「太子」も「長子」も古訓は「ヒツキ(ギ)ノミコ」となっているが、表記において使い分けがなされている点は注目すべきであろう。勾大兄皇子がなぜ即位前紀において「太子」ではなく「長子」と表記されたのか。その理由として、勾大兄皇子の母目子媛は「皇后」でなかったからということが考えられる。この推測が正しければ、「太子」の語が表す意味は限定され、それに合致しないものは、「太子」以外の表記で表したのではないだろうか。

次に、推古天皇元年四月己卯条をみると、

夏四月庚午朔己卯。立¹厩戸聡耳皇子²為³二皇太子⁴。仍録⁵二撰

政⁶。以⁷二万機⁸悉委焉。橘豐日天皇第二子也。母皇后曰⁹二穴穗間

人皇女¹⁰。(中略)父天皇愛之令¹¹居¹²宮南上殿¹³。故称¹⁴二其名¹⁵謂¹⁶二

上宮厩戸豊聡耳太子¹⁷。

とあり、厩戸聡耳皇子が父の橘豐日天皇(用明天皇)から寵愛をう

け、池部双槻宮の南の上殿に居したことから上宮厩戸聡耳太子と称していたという。また、本条で厩戸皇子は用明天皇の第二子となっているが、用明天皇元年正月壬子条では、

立¹二穴穗部間人皇女²為³二皇后⁴。是生⁵二四男⁶。其一曰⁷二厩戸皇

子⁸。(中略)是皇子初居⁹二上宮¹⁰。後移¹¹二斑鳩¹²。於¹³二豊御食炊屋姫

天皇世¹⁴位居¹⁵二東宮¹⁶。総¹⁷二撰万機¹⁸行¹⁹二天皇事²⁰。語見²¹二豊御食炊

屋姫天皇紀^一。其二曰^二来目皇子^一。其三曰^二殖栗皇子^一。其四

曰^二茨田皇子^一。(後略)

とみえ、穴穂部間人皇女所生の第一子であることがわかる。厩戸皇子は、この立太子記事の後、推古天皇二十九年二月癸巳条に「廿九年春二月己丑朔癸巳。半夜厩戸豐聡耳皇子命薨^二于斑鳩宮^一」。(後略)とみえるまでは一貫して「皇太子」となっている。その後、推古天皇二十九年二月是月条に、

葬^二上宮太子於磯長陵^一。当^二是時^一高麗僧惠慈聞^二上宮皇太子

薨^一。以大悲之。為^二皇太子^一請^レ僧而設齋。仍親説^レ經之日。誓

願曰。於^二日本國^一有^二聖人^一。曰^二上宮豐聡耳皇子^一。(中略)今太

子薨之。(後略)

とあり、同じ条文中に「上宮太子」・「上宮皇太子」・「皇太子」・「上宮豐聡耳皇子」・「太子」の五種類の表記が混在している。立太子の有無はさておき、厩戸皇子は推古天皇から万機を悉く委ねられ、天皇事¹⁴を行なっていたことから、有力な人物であったと認めてよいと思う。しかし、これまで一貫して「皇太子」としるされていたのが、薨去の記事を境に「太子」と表記されている点や同じ条文中に表記が複数みられる点は、他の用例と比較しても少々不自然である。右に引いた記事中に複数の表記が混在しているのは、『日本書紀』の編者が複数の史料にあえて統一を施さないまま利用したことに原因

があるのではないだろうか。ここにみえる「太子」の用例は、あえていえば「皇太子」のニュアンスに近いように思う。

次に大化元年(六四五)九月戊辰条の分註をみると「太子」が確認できる。すなわち、

戊辰。古人皇子。与^二蘇我田口臣川掘。物部朴井連稚子。吉備笠臣垂。倭漢文直麻呂。朴市秦造田来津^一謀反。(或本云。古人大兄。或本云。古人大兄。此皇子入^二吉野山^一。故或云^二吉野太子^一。垂。此云^二之娜屨^一。)

とあり、古人大兄皇子が出家して吉野に入ったことから吉野太子と称していたことがわかる。しかし、他の「太子」の用例は、本文中にみえるが、この場合は或本に記されている所伝を分註に示すという体裁をとっており、本文に採用されていない点を考えると、纂時にもともと分註としてあったものなのか、あるいは後世の加筆なのか定かではないが、吉野太子を含む記述が『日本書紀』の本文として採用されていない点は注意すべきであろう。古人大兄皇子は舒明天皇二年正月戊寅条に、

立^二宝皇女^一為^二皇后^一。后生^二一男一女^一。一曰^二葛城皇子^一。近江天津宮
二曰^二間人皇女^一。三曰^二大海皇子^一。淨御原宮御宇天皇。夫人蘇我嶋大臣女法
提郎媛生^二古人皇子^一。更名大兄皇子。又娶^二吉備蚊屋采女^一生^二蚊屋皇子^一。

とあり、舒明天皇夫人の法提郎媛所生の皇子であることがわかる。次に太子の語がみえるのは、さらに時代が下って天智天皇即位前紀である。それによると、

天命開別天皇。息長足日広額天皇太子也。母曰天豊財重日足姫天皇^一。(後略)

とあり、天智天皇は舒明天皇の太子であることが記されている。

舒明天皇二年正月戊寅条の皇統譜には、

立^二宝皇女^一為^二皇后^一。后生^二男一女^一。一曰^二葛城皇子^一。近江大津宮宇天皇。御宇天皇。

二曰^二間人皇女^一。三曰^二大海皇子^一。淨御原宮御宇天皇。夫人蘇我嶋大臣女法

提郎媛生^二古人皇子^一。更名大兄皇子。又娶^二吉備蚊屋采女^一生^二蚊屋皇

子^一。

とあり、天智天皇は舒明天皇皇后所生の第一子であることがわかる。この例は『日本書紀』における用例で最初にあげた即位前紀での「太子」の用例と一致する。

以上が、『日本書紀』で「太子」と確認される記述であるが、すべてに共通して、それぞれの母^二との第一子であることが指摘できる。次に説話的記事において「太子」としてされた菟道稚郎子と木梨輕皇子と勾大兄皇子と古人大兄皇子の例を除いて、すべてに共通するところが、二点ある。第一は、「太子」の用語は即位前紀において前天皇との続柄を表すために用いられていること、第二に、即位前紀

において「太子」としてされている人物は、皇后と表記される后妃の唯一子ないしは第一子、もしくは唯一の皇子ということである。

「唯一子」は、表現はちがうが、第一子に変わりなく、「唯一皇子」は同母兄弟はいるものの、一人をのぞくすべてが皇女であり¹⁵、推古天皇まで皇女が皇位を継承することはなかったから、末子であっても唯一の皇子であれば唯一子とほぼ同じと考えられ、「太子」はここごとく第一子を指すといつていいであろう。また、皇后とされる后妃以前に別の后妃を娶り、その間に皇子がいるなどの場合は、皇后所生第一子であっても「太子」とされることはないようである¹⁶。また、説話的記事で「太子」とされた菟道稚郎子と勾大兄皇子、古人大兄皇子は、いずれも妃とされる后妃所生の第一子であり、即位前紀における「太子」と表記される人物の基準が異なることが想像される。これは、『日本書紀』が即位前紀や皇統譜は帝紀を、説話的記事が旧辞をそれぞれ参照してかかれていることに起因すると考えられる。

もしも『日本書紀』における「太子」が皇位継承者を示すものとするならば、極端ないいかたをすれば、皇位を継承した人物すべてが即位前紀において「太子」と表記されるべきであるが、「太子」としてされているのは、『日本書紀』が記述の対象とする三十八人の天皇のなかで、わずか七例を数えるのみである。他の天皇は、いずれ

も「第二子」「同母弟」といった表現が用いられている。荒木氏は、「太子」の語の意味について、(イ)皇太子を意味する場合と、(ロ)長子の意味する場合があるとしたうえで、『太子』の語は(ロ)の長子の意味を本源的なものとし、(イ)の皇太子の意味は(ロ)より派生してきたものとみなすべきもの」と結論づけておられる。『日本書紀』の「太子」についての理解としては基本的に荒木氏の指摘のとおりだと思うが、ただし、(ロ)については、単に長子とするのではなく、母(后妃)を同じくする諸皇子のなかでの長子という、より狭い範囲に限定されると考えるため、かならずしも荒木氏の見解の通りだとは思わない。

『日本書紀』にみえる「太子」は、第一子であることを前提に、即位前紀における前天皇との続柄を示す場合と説話的記事で語られる場合とがある。いっぽうで『古事記』の「太子」の用例は、必ずしも第一子に限らず、有力な御子に対する敬称や皇位継承有力者の用法は『日本書紀』と一致しない。また、『日本書紀』の特徴として、『日本書紀』編者による立太子記事の造作があげられるが、立太子記事に記された皇位継承者を示す「皇太子」と「太子」とされた人物は一部のみが一致するものの、ほとんどが一致しない。これは『日本書紀』にみえる「太子」が皇位継承者である「皇太子」と同義で用いられたわけではないことの証左になるのではなからうか。その

ため、ここでは「太子」は皇位継承者ではなく、第一子であることを前提として、即位前紀では皇后所生の唯一子、あるいは第一子、説話的記事では皇后以外の后妃所生の第一子の意味で用いられたと理解しておきたい。

ところで、ここで中国の史書における「太子」の用例についてふれておく。なかでも注目されるのは、『隋書』帝紀第一、高祖文帝即位前紀に、

(前略) 長子^一為^二太子^一 (後略)

とあつて、長子を「太子」としたという記載がある。また、開皇元年(五八二)二月乙丑条に、

(前略) 王太子^一勇為^二皇太子^一 (後略)

とあり、これによって、太子である勇が皇太子となったことがわかる。「太子」が立太子されたことが確認できる史料はわずかにこの一例であるが、これによつて、「太子」と「皇太子」は異なるものとして認識されていたことがわかる。開皇元年(五八一)に皇太子とされた勇であるが、開皇二十年(六〇〇)十月乙丑条に「皇太子勇及諸子並廢為^二庶人^一」。(後略)とあり、皇太子であつた勇が廃太子され、同年十一月戊子条に「(前略)以^二晉王^一廣^一為^二皇太子^一」。(後略)とあり、勇の同母弟で開皇元年に晋王となつていた広(のちの煬帝)が皇太子となつている。広は長子ではなく、「皇太子」と記されることはあつ

ても「太子」とはしるされていない点は看過すべきではないと考える。それは開皇元年（五八二）二月乙丑条の「（前略）王太子、勇為^二皇太子^一（後略）」が示す意味は、「長子」である勇を「皇太子」としたと理解すべきであろう。

以上のように『隋書』にみえる「太子」は、やはり「長子」であると理解するのが妥当であると考えられる。この用法は、『日本書紀』に通じるものがあると思われ、『日本書紀』が『隋書』をはじめとする漢籍による文飾が多くみられ、『日本書紀』における「太子」の用法が続柄表記で「長子」を示す場合に用いられたことから、「太子」の意味を理解したうえで「皇太子」との書き分けを行なったものと考えられる。

おわりに

以上、記紀にみえる「太子」についてそれぞれの事例を検討してきたが、その結果、『古事記』と『日本書紀』では「太子」の用法が異なることが判明した。すなわち、『古事記』の「太子」は時期によって意味合いが異なるのであって、仁徳天皇段以前にみえる「太子」と、それ以降にみえる「太子」とではあきらかに用法がちがっている。前者は有力な御子の称としての謂で、後者は皇位継承の最有力

候補、すなわち後世的な皇太子に近い意味で用いられている。

これに対して、『日本書紀』における「太子」の用語は、ある程度の規則性がみられる。すなわち、即位前紀において前天皇との続柄を示す場合に「太子」の用語が用いられ、その系譜関係は「皇后」と表記される后妃所生の唯一子ないし第一子に限られている。結果だけみれば、「太子」という語は、あたかも皇位継承と結びついているかのようだが、即位前紀に「第二子」などとするされる、「太子」以外の人物も皇位を継承しているケースがあるので、太子＝皇太子という短絡的なとらえかたはできない。そのため、即位前紀にみえる「太子」をあえて解釈するならば、皇后と記されている后妃所生の唯一子ないし第一子であるという限定的な表現であったとみるべきであろう。

ちなみに、説話的文章のなかに「太子」の語がみえるケースでは、妃と記される后妃の第一子まで範囲が拡大するという特徴がみられるのであって、『日本書紀』では、即位前紀かそれ以外かで「太子」とされる範囲の相違がみられることが指摘できる。

〔補注〕

¹ 皇太子制の成立については、推古天皇十年前後の厩戸皇子の立太子

がはじまりとする直木孝次郎「厩戸皇子の立太子について」（『飛鳥奈良時代の研究』〈塙書房、一九七五年〉所収）、飛鳥浄御原令とする荒木敏夫「ヒツギノミコと皇太子」（『日本古代の皇太子』〈吉川弘文館、一九八五年〉所収）、七世紀後半からの律令制導入にともなう皇太子制が成立したとする本間満「ヒツギノミコ研究序説」（『昭和薬科大学紀要』三四、二〇〇〇年）など諸説ある。

² 『古事記』清寧天皇段をみると「御子白髮大倭根子命。坐^二伊波礼之甕栗宮^一。治^二天下^一也。此天皇無^二皇后^一。無^二御子^一。御名代。定^二白髮部^一。」とあり、「皇后」の語がみえる。『古事記』で「皇后」の語が確認できる唯一の例であり、『古事記』が「皇后」の語を統一して使っていたとは考えられない。

³ 荒木敏夫「ヒツギノミコと皇太子」（『日本古代の皇太子』所収、吉川弘文館、一九八五年）。以下、荒木氏の説を引用する場合はこの論文によるものとする。

⁴ 本居宣長『古事記伝』（日本名著刊行会、一九三〇年）

⁵ 『日本書紀』雄略天皇元年三月是月条に「是月。立^二三妃^一。元妃葛城圓大臣女曰^二韓媛^一。生^二白髮武広国押稚日本根子天皇。与^二稚足姫皇女^一。更名^二栲幡姫皇女^一。是皇女侍^二伊勢大神祠^一。次有^二吉備上道臣女稚媛^一。一本云。吉備窪屋臣女。生^二二男^一。長曰^二磐城皇子^一。少曰^二星川稚宮皇子^一。見^二下文^一。次有^二春日和珥臣深目女^一。曰^二童女君^一。

生^二春日大娘皇女^一。更名^二高橋皇女^一。童女君者本是采女。（後略）」とあつて、雄略天皇の皇子は吉備稚媛所生の磐城皇子と星川稚宮皇子がおり、『古事記』はこれを逸している。『日本書紀』は雄略天皇二十三年八月丙子条で星川皇子の反乱を示唆する遺詔を、清寧天皇即位前紀で星川皇子の反乱をそれぞれ記しているが、『古事記』にそれに該当する記述はみられない。

⁶ 『日本書紀』大化二年（六四六）三月壬午条に「（前略）皇祖大兄御名入部（謂^二彦人大兄^一也。）」（後略）」とあり、皇祖大兄が押坂彦人大兄皇子を指していることが確認できる。

⁷ 皇祖大兄御名入部については、藺田香融「皇祖大兄御名入部について——大化前代における皇室私有民の存在形態——」（『日本古代財政史の研究』〈塙書房、一九八一年〉所収。初出は一九七六年）を参照されたい。

⁸ 『日本書紀』によると、用明天皇二年四月丙午条に彦人皇子とみえるのを最後に押坂彦人皇子の名はみえない。

⁹ 直木孝次郎「厩戸皇子の立太子について」（『飛鳥奈良時代の研究』〈塙書房、一九七五年〉所収）。以下、直木孝次郎氏の説を引用する場合はこの論文によるものとする。

¹⁰ 直木氏前掲。大兄制を否定する立場では田中嗣人「『大兄制』管見」（『続日本紀研究』一七八、一九六七年）を参照すると、「大兄」は「長

子を指す敬称ぐらいの範囲に止めておくのが無難のようである」とされ、皇位継承の原則としての大兄制を否定された。また井出久美子「『大兄制』の史的意義―欽明く推古朝の政治過程にふれて―」（『日本史研究』一〇九、一九七〇年）をみると、蘇我氏との政治的關係に注目し、蘇我氏出身の「大后」堅塩媛所生の長子として我国最初の「大兄」とされたのが大兄皇子であるとする。

¹¹ 綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊の六天皇の後妃について、出自・名の異伝をそれぞれ分註の形でしるしている。

¹² 新編日本古典文学全集本の頭注によれば、「奈良市中央部の北部、佐保川上流一帯を佐保といひ（中略）春日山田皇女の名と關係する春日の地に近い。」とあり、関連性を感じさせられる。

¹³ 田中嗣人「『大兄制』管見」（『続日本紀研究』一七八、一九六七
年）

¹⁴ 塚口義信「聖徳太子の「天皇事」とは何か」（上田正昭・千田稔編『聖徳太子の歴史を読む』（文英堂、二〇〇八年）所収）を参照すると、厩戸皇子は推古天皇から外交権を委ねられており、外国に対して「倭王」を称しうる権限を有しており、この点を『日本書紀』編者が注目して「行天皇事」と書かしたと述べておられる。

¹⁵ たとえば武烈天皇は『日本書紀』仁賢天皇元年二月壬子条によると、仁賢天皇皇后春日大娘皇女所生の第六子であるが、他の同母兄弟の五

人がすべて皇女で武烈天皇は唯一皇子となる。

¹⁶ たとえば大鸕鷀尊（仁徳天皇）は、応神天皇皇后仲姫命所生第二子（第一子は荒田皇女）であるが、『日本書紀』応神天皇一年三月壬子条に仲姫命の前に仲姫命の同母姉高城入姫を娶り、額田大中彦命、大山守皇子、去来真稚皇子、澁田皇女をもうけたという。正確な長幼關係はわからないが、応神天皇四十年正月戊申条にある大山守命と大鸕鷀尊に対する問いの記事で、大山守命の名が大鸕鷀尊よりも先に記されていることから、大山守命の方が年長であつたことが推測される。このことから大鸕鷀尊は皇后所生第一子であつても応神天皇の皇子のなかでは第一子ではなく、即位前紀に第四子としるされたのではないか。

附論二 大化前代のキサキの序列について

―元妃を中心に―

はじめに

天皇のキサキには、皇后・妃・夫人・嬪などの身位があり、後宮職員令に定員と資格が明記されており、妃は二名で四品以上、夫人は三名で三位以上、嬪は四名で五位以上と規定されている。

こうした条文は、大宝令以降に定められたと考えられるが¹、『日本書紀』では、大化前代のキサキに関しても皇后・妃・夫人・嬪²の呼称が用いられている。いっぽう、『古事記』では、『日本書紀』のように「皇后」³・「妃」⁴といった呼称は使われていないが、地位の高いキサキを「太后」と称したことがみえている。

この「太后」は、『古事記』特有の呼称ではなく、『日本書紀』にも用例がある。ただ、『古事記』で「太后」と記される人物と『日本書紀』のその間には若干の出入りがある。『古事記』の「太后」は、『日本書紀』では例外なく「皇后」であるが、『日本書紀』の皇后は、かならずしも『古事記』で「太后」と表記されるわけではない。

この「太后」については岸俊男氏のすぐれた研究があるが⁵、氏の研究で特に重要と思われるのは、以下の諸点である。

- ① 太后は、大宝・養老令制の皇后に先立って用いられた称号である。
- ② 五世紀中ごろから、多くの后妃の中で皇族出身の者が太后の地位にあった。

- ③ 制度として確立したのは敏達天皇朝から推古天皇朝である。

- ④ 推古天皇朝に入る少し前から、皇太子と相並んで皇位継承者たりうる資格をもつと同時に、国政上でもきわめて重要な地位を占めるようになった。

岸氏の研究は、大宝・養老令制以前の「太后」や「皇后」の性質を明らかにしたものととして高く評価されているが、大化前代のキサキ制度についていえば、なお問題が残る。すなわち、氏は、「皇后」と「妃」、あるいは「太后」と他のキサキとに区別があったことは認めるものの、皇后や太后以外のキサキに序列が存在したことは認めておられない。しかし、『日本書紀』には、『続日本紀』以下五国史や律令格式には用例がない「元妃」や「正妃」といった独自の用例があることや、「皇后」所生の皇子の即位が多数を占めるなかで、特定のキサキが生んだ皇子が即位している例のあることを考慮すると、「皇后」以外のキサキを一括してしまうことには、一抹の不安を覚える。

そこで、小論では、これまで序列が存在しないとされていた大化

前代のキサキ、特に「妃」に重点をおいて検討してみたい。

一、妃についての検討

はじめに、『日本書紀』で「妃」と記されるキサキについて検討したいが、それに先立って、「皇后」とはなにかということを明らかにしておく必要がある。そこで、先行研究が皇后をどのように定義しているかをみておきたいが、この点については、以下のような諸説がある。

① 皇女であること⁶

② 皇女、あるいは所生子の子孫が皇位に即いていること⁷

③ 皇族であるか、所生子が即位したか、いずれかいつぼうの条件が満たされていること⁸

これを見ると、いずれの定義も、出自や所生子の即位の有無を問題にしている。そこで、これらの説が的を射ているかどうかを確認するため、『日本書紀』にある天皇の生母の称号と出自をみてみると、左の「表1」のとおりである。

〔表1〕歴代天皇の生母

	天皇	生母の称号	生母が皇族	備考
1	神武天皇			
2	綏靖天皇	皇后		
3	安寧天皇	皇后		
4	懿德天皇	皇后		
5	孝昭天皇	皇后		
6	孝安天皇	皇后		
7	孝靈天皇	皇后		
8	孝元天皇	皇后		
9	開化天皇	皇后		
10	崇神天皇	皇后		
11	垂仁天皇	皇后	○	
12	景行天皇	皇后	○	
13	成務天皇	皇后	○	
14	仲哀天皇	妃	○	日本武尊の子
15	応神天皇	皇后	○	
16	仁徳天皇	皇后	○	
17	履中天皇	皇后		
18	反正天皇	皇后		履中天皇の同母弟
19	允恭天皇	皇后		反正天皇の同母弟
20	安康天皇	皇后	○	
21	雄略天皇	皇后	○	
22	清寧天皇	妃		
23	顕宗天皇	その他		市辺押磐皇子の子
24	仁賢天皇	その他		顕宗天皇の同母兄
25	武烈天皇	皇后	○	
26	継体天皇	その他	○	彦主人王の子
27	安閑天皇	妃		
28	宣化天皇	妃		
29	欽明天皇	皇后	○	
30	敏達天皇	皇后	○	
31	用明天皇	妃		
32	崇峻天皇	妃		
33	推古天皇	妃		敏達天皇皇后
34	舒明天皇	その他		押坂彦人大兄皇子の子
35	皇極天皇	その他		舒明天皇皇后
36	孝徳天皇	その他		皇極天皇の同母弟
37	斉明天皇	その他		皇極天皇重祚
38	天智天皇	皇后	○	
40	天武天皇	皇后	○	

この表をみると、歴代天皇（推古・皇極〈斉明〉天皇は即位事情が特殊なため小論では除外）の生母の多くは「皇后」と記されるが、仲哀・清寧・顕宗・仁賢・継体・安閑・宣化・用明・崇峻・推古・舒明・孝徳の諸天皇の場合はそうでない。このうち、仲哀・顕宗・仁賢・継体・舒明・孝徳天皇は、父が天皇ではなく、母も「皇后」ではない。また、履中・反正・允恭天皇の母は「皇后」だが、皇族ではない。さらに、清寧・安閑・宣化・用明・崇峻天皇の場合、母は「皇后」でも皇族でもない。

ところで、この事実を踏まえると、さきに紹介した①～③の「皇

后」の定義にはいずれも例外が存することを認めなくてはならない。

まず、皇女であることを皇后の要件とする①説では、仁徳天皇「皇后」の磐之媛命（葛城襲津彦の女）が、これに抵触する。また、武烈天皇「皇后」の春日娘子の出自が不明なのも問題となろう。

つぎに、皇女もしくは生んだ子の子孫の即位を要件とする②説の場合、磐之媛命の問題はクリアできるとしても、生んだ子もない春日娘子については疑問が依然として残る。しかも、所生子の子孫の即位という、②説の要件の一つを満たしているにもかかわらず、母が「妃」というケースが複数存在するが（後述参照）、どうして彼女たちが「妃」の身分なのか、②説ではじゅうぶんな説明がなされていない。

さらに、②説に疑念があるとすれば、これに近い③説に対しても、同じ不安が払拭できない。②や③の説では「皇后」の要件の一つに子（子孫）の即位をあげるが、要件を満たすキサキが同時に複数生じた場合、そのなかから、どのようにして皇后を決めるのかについて、これらの説は明確な説明を与えていないのである。

このように考えると、先行学説のいう「皇后」の定義はいずれも問題があり、完全に支持することはできない。しかし、皇女であることを基本にして、所生子（の子孫）の即位の有無に着目した見通しは、方向性としては正しいといえよう。

以上のことをもとに再び先行研究をみると、①について、仁徳天皇「皇后」の磐之媛命（葛城襲津彦の女）は皇族でなく、武烈天皇「皇后」の春日娘子は出自が不明であるにもかかわらず「皇后」とされている点が問題として残る。②は皇女、あるいは所生子の子孫の即位とすることで、①で問題となった磐之媛命の件は解消されるが、所生の子もいない春日娘子の問題が依然として残る。また、所生の子の即位という要件を満たしているにもかかわらず、母は「妃」となっている場合があり、このことについて十分な説明がなされていない。③についても②と同様の問題がある。また、②と③にある「皇后」の要件を、皇族もしくは所生子（の子孫も含む）の即位とした場合、要件を満たすキサキが同時に複数でてくるということが生じてくる。

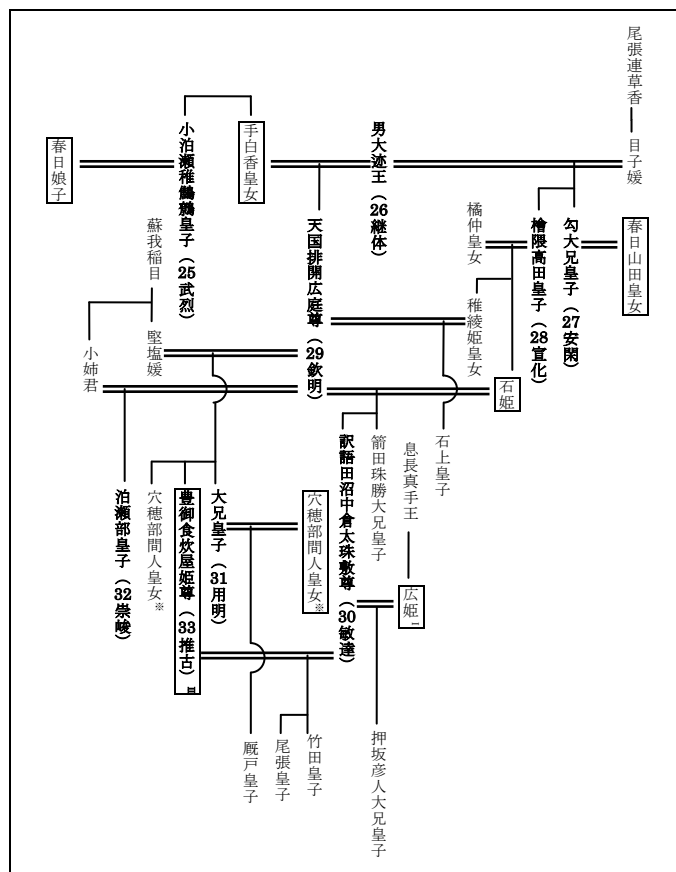
ところが、**〔表1〕**によれば、雄略天皇以前は母を「皇后」とする例が圧倒的に多いのに対して、清寧天皇以降は、むしろ母が「妃」や「その他」であるケースが多い。では、なぜ、こうした変化がみられるのであろうか。母が「その他」となっている事例についてはべつに考える必要があるので、小論ではひとまず措くとして、「妃」所生でありながら即位したケース、具体的には、清寧・安閑・宣化・用明・崇峻天皇について、それぞれの即位の事情については個別に

分析しておく必要がある。

たとえば、清寧天皇の場合、父の雄略天皇には「皇后」がいたが、子はなかったようである¹⁰。また、安閑・宣化天皇は継体天皇の「皇后」手白香皇女との間に天国排開広庭尊（欽明天皇）がいたものの、彼が幼年であったことを理由に天国排開広庭尊より先に即位しており¹¹、用明・崇峻天皇は、欽明天皇の「皇后」石姫所生の詠語田淳中倉太珠敷尊（敏達天皇）のあとに即位している。

このように「妃」が生んだ皇子の即位の例は、①「皇后」所生の皇子がいないケース、②「皇后」の生んだ皇子が幼年のために即位が困難なケース、③「皇后」所生の皇子の即位が実現したあとと登極したケース、の三例に限られている。

ここで注目したいのが、敏達天皇以後の即位の順序である。敏達天皇以後は、用明天皇、崇峻天皇というように、欽明天皇の諸皇子、すなわち敏達天皇の異母兄弟にあたる皇子らによって皇位が継承されている点に注意をひく。これらの天皇の即位の順序と系譜関係を示すと、つぎのとおりである（天皇は太字、「皇后」は囲み線、「皇后」が複数の場合、冊立順をローマ数字で表した）。



右の系図を参考に、敏達天皇の皇子についてみてみよう。

まず、一人目の「皇后」広姫との間には押坂彦人大兄皇子がいたが、何らかの理由により即位していない。敏達天皇四年十一月の広姫の薨去をうけて冊立された二人目の「皇后」豊御食炊屋姫との間には、竹田皇子と尾張皇子がいた。竹田皇子については、推古天皇が竹田皇子の陵に合葬するよう遺詔していることから（推古天皇三十六年九月戊子条）、これ以前に薨去していたと考えてよいであろう¹²。なお、尾張皇子については、系譜（敏達天皇五年三月己卯条）以外で存在を

確認することができないため、これ以上の言及はできない。

こうした状況のもと、敏達天皇の次に即位したのが、敏達天皇の異母兄弟で、欽明天皇の「妃」堅塩媛が生んだ大兄皇子（用明天皇）であった。用明天皇は在位わずか二年で崩じ、用明天皇のあととは、敏達天皇・用明天皇の異母兄弟で、欽明天皇の「妃」小姉君が生んだ泊瀬部皇子（崇峻天皇）が即位している。用明天皇の場合は、敏達天皇の「皇后」所生皇子の押坂彦人大兄皇子と竹田皇子が何らかの理由で即位できない状況であったために、登極しえたと考えられる。これは、崇峻天皇の場合も同様である¹³。

二、元妃についての検討

そこで問題となるのは、どの「妃」の生んだ皇子でも皇位を継承できるのかという点である。

「妃」所生で即位した清寧・安閑・宣化・用明・崇峻の五天皇であるが、彼らの父にあたる雄略・継体・欽明天皇についていえば、いずれも「皇后」以外に複数人のキサキを娶っている。前述のように、従来の研究は、キサキは、出自に関係なく「皇后」以外ならばすべて「妃」とするなど、キサキの序列化はなかったとしていたが¹⁴、はたして雄略・継体・欽明三天皇の「妃」に序列は存在しなかった

のであろうか。

まず、雄略天皇についてみてみたい。雄略天皇元年三月条には、

〔史料1〕立^三妃^一。元妃^一葛城^一大臣女曰^二韓媛^一。生^三白髮武

広国押稚日本根子天皇。与^二稚足姫皇女^一。是皇女侍伊勢

大神祠。次有^二吉備上道臣女稚媛^一。生^二一男^一。長曰^二磐

城皇子^一。少曰^二星川稚宮皇子^一。次有^二春日和珥臣深目女^一。

曰^二童女君^一。生^二春日大娘皇女^一。童女君者本是采女。（後

略）

とあるが、「三妃」の最初にくる韓媛の呼称が「元妃」と記されている。この「元妃」については、『日本書紀』の注釈書は「もとからの妃。皇子時代からの妃」¹⁵とか、「初めからの妃。本妻。」¹⁶と説明している。こうした注釈は、「元妃」の古訓（たとえば、兼右本など）「ハジメノミメ」の「ハジメ」を「時間的推移におけるもつとも早い時期」ととらえた解釈である。青木和夫氏は、この点をさらに深く掘り下げ、『日本書紀』は、后妃たちを皇后・妃・夫人・嬪・宮人などと格づけする体制を採用したために、キサキとして娶った順に記し、『古事記』の記述とは異なるため、妃の前に『元』や『前』を付して整合性を図ろうとした¹⁷としておられる。

こうした青木氏の指摘は、重要である。そこで、『古事記』と『日本書紀』ではキサキの記載順がどう異なるのかを、継体天皇のキサ

	『古事記』		『日本書紀』	
1	若比売	三尾君等祖	手白香皇女	仁賢天皇皇女
2	目子郎女	尾張連等之祖凡連之妹	目子媛	尾張連草香女
3	手白香命	意富祁天皇之御子	稚子媛	三尾角折君妹
4	麻組郎女	息長真手王之女	広媛	坂田大跨王女
5	黒比売	坂田大俣王之女	麻績娘子	息長真手王女
6	関比売	茨田連小望之女	関媛	茨田連小望女
7	倭比売	三尾君加太夫之女	倭媛	三尾君堅槌女
8	阿倍之波延比売		菟媛	和珥臣河内女
9			広媛	根王女

〔表2〕継体天皇のキサキ

キの例によって確認してみたい。

〔表2〕をみると、『古事記』では三番目に記されている手白香命が、『日本書紀』では「皇后」のため、他のキサキとは別の条文に記されている。ぎゃくに、『古事記』では筆頭の若比売が、『日本書紀』では三番目に記されており、両書でキサキの記載順が若干異なることがわかる。キサキをひと括りに記す『古事記』とちがって、『日本書紀』では「皇后」と「妃」が一括して記されないことが多いので¹⁸、単純な比較はむずかしいが、他のキサキとは別に「皇后」を記す体裁をとっている天皇紀が多いこと自体¹⁹、『日本書紀』が后妃の序列を強く意識していたことあらわれである。

ただ、青木氏のいわれるように、『日本書紀』は、複数の后妃を格づけするために、キサキとして娶った順に記し、

「元」や「前」を附すことで整合性を図ろうとしたのであろうか。筆者は、この点をいささか疑問に思う。なぜなら、「元妃」は『日本書紀』以外の文献には用例がなく、『日本書紀』編者がのちの後宮職員令にみえるキサキの呼称を、大化前代に遡らせたとは考えがたいからである。

では、そもそもこの「元妃」とはなにを意味するのであろうか。

「元妃」は、前掲〔史料1〕が『日本書紀』における初見である。韓媛が雄略天皇のキサキとなった経緯はいささか話が長いが、ことの起こりは、父の大草香皇子を安康天皇に殺害された眉輪王が、天皇を殺害したことである。しかし、これを知った天皇の同母弟の大泊瀬皇子（雄略天皇）は憤慨し、ぎやくに眉輪王を殺害しようとする。皇子の怒りを恐れた眉輪王は、葛城円大臣の邸宅に逃れるが、結局は大泊瀬皇子によって焼き殺されてしまう。そして、葛城円大臣は贖罪として女の韓媛と、葛城宅七区を皇子に献上するのである。『日本書紀』はこの韓媛を「元妃」と記すのだが、雄略天皇即位前紀のとおりであれば、天皇は即位する前から韓媛を娶っていたと考えられる。そして、その意味では、「元妃」とは「皇子時代からの妃」のことととれる。

ちなみに、〔史料1〕によれば、雄略天皇のキサキには、韓媛のほかに、仁徳天皇皇女の草香幡梭姫皇女、吉備氏出身の稚媛と、和珥

氏出身の童女君があるが（『古事記』とは若干出入りがある）、このなかでは、韓媛が白髪皇子を、稚媛が磐城皇子・星川皇子をそれぞれ生んでいる（童女君には皇子なし）。結果的には、雄略天皇のあと第三子の白髪皇子²⁰が磐城皇子・星川皇子を差し置かれたちで即位している。父である葛城円大臣は眉輪王に加担して滅ぼされているから、白髪皇子の即位に生母の出自が影響したとは考えがたい。しかし、雄略天皇が生前星川皇子を警戒し、白髪皇子の皇位を守るように遺詔していることから判断すると、天皇は白髪皇子を推していたと考えられるが、これは皇子が「元妃」の所生子であつたこととも無関係ではあるまい。

韓媛に次いで「元妃」と記されるのは、継体天皇のキサキの目子媛である。すなわち、継体天皇元年三月癸酉条には、

〔史料2〕納^二八妃^一、雖有先後。而此曰癸酉納者。換即天位、一。占。祝良日。初拜後宮為文。他皆後此。元妃尾張連草香女

曰^二目子媛^一。更名色部。生^二二子^一。皆有^二天下^一。其^一曰^二勾大兄皇子^一。

是為^二広国排武金日尊^一。其^二曰^二檜隈高田皇子^一。是為^二武小広

国排盾尊^一。次妃三尾角折君妹曰^二稚子媛^一。生^三大郎皇子^一。与^二

出雲皇女^一。次坂田大跨王女曰^二広媛^一。生^三三女^一。長曰^二神前

皇女^一。仲曰^二茨田皇女^一。少曰^二馬來田皇女^一。次息長真手王女

曰^二麻績娘子^一。生^三荳角皇女^一。荳角、此云。委佐麻。是侍^二伊勢大神祠^一。次茨

田連小望女^一。或曰妹。曰^二関媛^一。生^三三女^一。長曰^二茨田大娘皇女^一。仲

曰^二白坂活日姫皇女^一。少曰^二小野稚郎皇女^一。更名長石姫。次三尾君堅械

女曰^二倭媛^一。生^三二男。二女^一。其^一曰^二大娘子皇女^一。其^二曰^二

梔子皇子^一。是三国公之先也。其^三曰^二耳皇子^一。其^四曰^二赤姫皇

女^一。次和珥臣河内女曰^二萯媛^一。生^二男。二女^一。其^一曰^二稚

綾姫皇女^一。其^二曰^二円娘皇女^一。其^三曰^二厚皇子^一。次根王女

曰^二広媛^一。生^三二男^一。長曰^二兔皇子^一。是酒人公之先也。少曰^二

中皇子^一。是坂田公之先也。

とあり、これによれば、八人娶られた「妃」の中で、勾大兄皇子（安閑天皇）と檜隈高田皇子（宣化天皇）を生んだ目子媛のみが唯一「元妃」と記されている。

継体天皇元年三月甲子条によると、継体天皇は、右の八人の「妃」以外に、武烈天皇の同母姉の手白香皇女を娶り「皇后」とし、天国排開広庭尊（欽明天皇）をもうけているという。しかし、天国排開広庭尊が幼年であつたために、「元妃」目子媛の生んだ勾大兄皇子と檜隈高田皇子が先に即位するのだが、それが「元妃」の生んだ皇子であるという点は興味深い。

特に安閑天皇の場合、名は勾大兄皇子で年長者を表す「大兄」を含んでおり、即位前紀に長子と記されていることから、継体天皇の全皇子の中で最年長であつたと考えられる。そのため彼と比較的年齢の近い檜隈高田皇子は、継体天皇の皇子の中では安閑天皇に次ぐ

年齢であつたことが推測されるのであつて、即位にあたつては年齢も重要な要素であつたことがうかがえる²¹。

三例目は、欽明天皇のキサキの稚綾姫皇女である。皇女のことは、欽明天皇二年三月条につきのような記事がみえる。

〔史料3〕納^ニ五妃^ニ。元妃^一。皇后弟曰^ニ稚綾姫皇女^一。是生^ニ石

上皇子^一。次有^ニ皇后弟^一。曰^ニ日影皇女^一。此曰^ニ皇后弟^一。明是稚綾高田皇女。而列后妃之名。不見^ニ母妃姓与^一皇女名字。不知^ニ出^一何書。後勅者知^ニ之^一。是生^ニ倉皇子^一。次蘇我大臣稻目宿禰女曰^ニ堅塩媛^一。堅塩。此云

生^ニ七男。六女^一。其一日^ニ大兄皇子^一。是為^ニ橘豊日尊^一。其二

曰^ニ磐隈皇女^一。更名夢皇女。初侍^レ祀^ニ於伊勢大神^一。後坐^レ奸^ニ皇子茨城^一

解。其三曰^ニ臍嘴鳥皇子^一。其四曰^ニ豊御食炊屋姫尊^一。其五曰^ニ

梔子皇子^一。其六曰^ニ大宅皇女^一。其七曰^ニ石上皇子^一。其八曰

山背皇子^一。其九曰^ニ大伴皇女^一。其十曰^ニ櫻井皇子^一。其十一

曰^ニ肩野皇女^一。其十二曰^ニ橘本稚皇子^一。其十三曰^ニ舍人皇女^一。

次堅塩媛同母弟曰^ニ小姉君^一。生^ニ四男。一女^一。其一日^ニ茨城皇

子^一。其二曰^ニ葛城皇子^一。其三曰^ニ泥部穴穂部皇女^一。其四曰^ニ

泥部穴穂部皇子^一。更名天香子皇子。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名住進皇子。其四曰^ニ葛城皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名天香子。其五曰^ニ泊瀬部皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名天香子。其五曰^ニ泊瀬部皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名天香子。其五曰^ニ泊瀬部皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名天香子。其五曰^ニ泊瀬部皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名天香子。其五曰^ニ泊瀬部皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名天香子。其五曰^ニ泊瀬部皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

皇女。其三日^ニ泥部穴穂部皇子^一。更名天香子。其五曰^ニ泊瀬部皇子^一。一書云。其一日^ニ茨城皇

妃蘇我山田石川麻呂大臣女曰^二乳娘^一。

ここに「元妃」とみえる小足媛については、皇極天皇三年（六四四）正月乙亥条に次のような記述がある。

三年春正月乙亥朔。以^二中臣鎌子連^一拜^二神祇伯^一。再^二固辞不^レ就。称^レ疾退居^二三嶋^一。于^レ時輕皇子患脚不^レ朝。中臣鎌子連會善^二於輕皇子^一。故詣^二彼宮^一而將^レ侍^レ宿。輕皇子深識^二中臣鎌子連之意氣高逸容止難^レ犯^一。乃使^二寵妃阿倍氏^一淨^二掃別殿^一高鋪^二新蓐^一。靡^レ不^二具給^一。敬重特異。（後略）

ここには、輕皇子（後の孝德天皇）は鎌子の人柄を良く思い、「寵妃阿倍氏」を鎌子の別邸に遣わして清掃などの世話をさせたことなどが書かれている。ここにみえる「寵妃阿倍氏」とは、**【史料4】**にみえる孝德天皇の元妃の小足媛が阿倍氏を出自とするので、彼女のことを指しているとみて間違いない。この記述から小足媛は皇子時代から娶られていることがわかる。

ふたたび**【史料4】**に目を向けると、乙巳の変にともなう皇極天皇の讓位により即位した孝德天皇は、中大兄皇子の同母妹の間人皇女を「皇后」とし、阿倍倉梯麻呂大臣の女小足媛と蘇我山田石川麻呂大臣の女乳娘の二人を「妃」としている。「皇后」間人皇女との間には子がいなかったと思われるが、「元妃」の小足媛との間には唯一の皇子である有間皇子が生まれている。当時、中大兄皇子が皇太子

として政治を補佐し、有力な立場にあったことはいうまでもないが、有間皇子も無視すべき存在ではなかった。斉明天皇紀に記された有間皇子の変の経緯をみても、中大兄皇子が自身有力な立場にありながらも、有間皇子の存在を意識していたことがうかがわれるのであって、そこから判断すると、有間皇子の地位もけつして低いものではなかったであろう。

以上、「元妃」とされたキサキを個別に検討してきたが、このなかで、即位前からのキサキであったことが確認しうるのは、雄略天皇「元妃」の韓媛と継体天皇「元妃」の目子媛、孝德天皇「元妃」の小足媛の三人である。欽明天皇「元妃」の稚綾姫皇女も即位前から娶られていた可能性はあるが、それを直接に示す記述は存在しない。そのため、「元妃」を即位前からのキサキであるとか、あるいは、「皇后」との婚姻の前後関係を整理するためにもちいられた呼称であるとかいう解釈は、すべての事例にあてはまるわけではない。

しからば、「元妃」とは何を意味するのか。

中国における「元妃」の用例のなかで古いものは、『春秋左氏伝』隱公元年条の「惠公元妃孟子。孟子卒。繼室以^二声子^一。生^二隱公^一。（後略）」である。この「元妃」について、『春秋左氏伝注疏』が「元妃、嫡夫人也。」と注釈を施している。なるほど、『正字通』に「元一也」とあるように、「元」には「第一」という意味があるので、右

の「元妃」を嫡夫人に解釈することは動かしがたい。けっして即位前からのキサキなどという意味ではない。

問題は、かかる用法がそのまま『日本書紀』にも適用されているかどうかという点であるが、ここで注目したいのが、〔史料1〕～〔史料4〕の体裁である。これらの記事は、いずれも最初に「妃」を何人娶ったかを示し、「元妃」を筆頭に、「次」または「次妃」とキサキを排列する体裁をとっている²²。

この体裁は、じつは、『藝文類聚』巻十一の帝譽高辛氏の条に、帝王世紀曰。(中略)亦納四妃。ト其子。皆有天下。元妃有台氏女。曰姜嫄。生后稷。次有娥氏女。曰簡翟。生。次陳豐氏女。曰慶都。生放勳。次姬訾氏女。曰常儀。生帝摯。

とあるのとまったく同じである。『日本書紀』編者が『藝文類聚』といった唐代の類書を参照していることは、小島憲之氏の研究によつて明らかであるが、氏によれば、「元妃」の用例がみられる巻十四・十七・十九・二十五は、いずれも『藝文類聚』にもとづく潤色の存する巻であるという²³。

このように、〔史料1〕～〔史料4〕の記載方法が『藝文類聚』に倣ったものとわかると、「元妃」も当然のことながら、漢籍の「元妃」と同じ意味でもちいられたものだと考えられる。つまり、『日本書紀』においても「元妃」は「妃」の筆頭となる女性の謂だったと

とらえることができるのである。

ただ、『日本書紀』には「元妃」のほかに「正妃」という用例も散見するので、これについてもふれておく必要がある。

「正妃」は、神武天皇即位前紀の媛蹈鞬五十鈴媛命を初見とし、宣化天皇「正妃」の橘仲皇女、欽明天皇「正妃」の石姫、天武天皇「正妃」の鸕野皇女の都合四例が確認できる²⁴。また、「正妃」と対応するものに「庶妃」の用例があり、宣化天皇「庶妃」の大河内稚子媛のみの用例であるが、これが「正妃」との対比から採用された用語であるというまでもない。

「正妃」とされた四人をみてみると、いくつかの共通点を見出すことができる。「立正妃」「為皇后」などの体裁で記されていることから、第一に即位前から天皇に娶られていたこと、第二に天皇が即位したあとに「皇后」となっていること、さらに第三に神武天皇正妃の媛蹈鞬五十鈴媛命を除くと全員が皇族であること、である。こうしてみると、『日本書紀』における「正妃」と「皇后」はほぼ等質の用語だといえる。したがって、配偶者の身分によって呼称が変わることのない「妃」とは、本質的に異なるものだと考えてよく、「元妃」について取り扱う小論ではひとまず除外しても差し支えあるまい。

おわりに

以上、『日本書紀』における「妃」についてみてきたが、これによって、『日本書紀』ではキサキに「元妃」と「妃」という区別が存在することが明らかになった。

従来の研究では、キサキ内での序列については否定的な見解が多く、ここで取り上げた「元妃」も、即位前からのキサキといった意味に解されることが多かった。これは、前述のように、「元妃」の古訓の「ハジメ」を、時系列におけるもっとも早い時期ととらえることが掘りどころのようである。しかし、「ハジメ」には、「物事の序列の第一」を指す意味もあるので、「ハジメノミメ」という古訓だけでは「元妃」を即位前のキサキと断定することはできない。

では、こうしたキサキ内の序列はいかにして決められたのであろうか。

「妃」間での序列を決定する要因としては、娶られた順序、出自などがまず考えられるが、これらはけっして個別の要素ではなく、たがいに複雑に絡み合って序列の形成に影響を与えたのであろう。しかし、いずれにしても、そうした序列が前提となつて、複数いるキサキの筆頭を「元妃」と称して差別化をはかったのであろう。

『日本書紀』には、たとえば、「皇太子」のように、後世の用語を

遡及して用いている例も多い。しかしながら、「元妃」は後宮職員令などにもみえず、その意味では後世の潤色とは考えがたい。そうすると、『日本書紀』の編者が、『藝文類聚』などを参照し、キサキの筆頭であることを示すのに相応しい用語として「元妃」を採用した可能性は大きいと思う。それゆえ、筆者は、「元妃」をたんなる漢籍による潤色と捉えるのではなく、これまで述べたような、個別の事例から帰納して、実際になんらかの形で存在したキサキの序列を、『日本書紀』本文に反映させるために、あえてこの語を用いたのだと考えたい。

推測を交えた点も少なくないが、通説に対する素朴な疑問に端を発し、あえて卑見を展開してみた。識者のご批評を乞う次第である。

〔補注〕

¹ 遠藤みどり「令制妃制度の成立―妃・夫人・嬪の序列をめぐる―」（『日本歴史』七五四、二〇一一年三月）。このほかキサキの序列の成立については、天智天皇末年から天武天皇初年とする岸俊男「光明立后の史的意義―古代における皇后の地位―」（『日本古代政治史研究』（塙書房、一九六六年五月）所収。初出は一九五七年十月）、天智天皇から天武天皇までの間とする青木和夫「日本書紀考証三題」

『日本律令国家論攷』(岩波書店、一九九二年七月)所収。初出は一九六二年九月)、飛鳥浄御原令とする仁藤敦史「古代女帝の成立―大后と皇祖母―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇八、二〇〇三年十月)などの説があるが、いずれにしても律令制定以前においてキサキの序列にかかわる規定は存在しないという考えで一致している。

² 「夫人」は『日本書紀』反正天皇元年八月己酉条、敏達天皇四年正月甲子条、および天武天皇二年二月癸未条に、「嬪」は『日本書紀』履中天皇六年二月癸丑条、および天智天皇七年二月戊寅条にそれぞれ確認できるが、『日本書紀』全体を通してみると、「皇后」「妃」とは異なり、各条にのみにみられる称で、画一的に使用されているわけではない。遠藤氏前掲注¹によれば、大宝・養老令制の夫人・嬪に通じる意味で用いられているのは、天智天皇紀と天武天皇紀のみで、他の用例は『日本書紀』における妃の用例と通じるとされている。

³ 『古事記』では清寧天皇段に唯一「皇后」の例がみられるのみで、他に用例は確認できない。

⁴ 小論では、後宮職員令に規定されたキサキとの混同を避けるため、『古事記』『日本書紀』での皇后・妃などの呼称は、「」に括弧で示している。

⁵ 岸俊男「光明立后の史的意義―古代における皇后の地位」(『日本古代政治史研究』(塙書房、一九六六年五月)所収。初出は一九五七年十月)

⁶ 岸俊男氏前掲注⁵参照。なお、田中卓「私の古代史像」(『私の古代史像』(国書刊行会、一九九八年七月)所収)は、崇神天皇以降は皇族出身の女に限られていることを指摘するが、これも岸氏の定義に包括してよいものである。

⁷ 河内祥輔「王位継承法試論」(佐伯有清編『日本古代史論考』(吉川弘文館、一九八〇年十一月)所収。同「六世紀型の皇統形成原理」(『古代政治史における天皇制の論理』(吉川弘文館、一九八六年四月)所収)

⁸ 成清弘和「大后についての史料の再検討」(『日本古代の王位継承と親族』(岩田書院、一九九九年四月)。初出は一九七九年九月)

⁹ 『日本書紀』武烈天皇元年二月戊寅条に「立^三春日娘子^一為^二皇后^一。未詳娘
子父。」とあって、分註で春日娘子の父は未詳であることを記している。

¹⁰ 『日本書紀』雄略天皇元年三月壬子条は草香幡梭皇女の立后のみを伝え、『古事記』雄略天皇段は「大長谷若建命。坐^二長谷朝倉宮^一。治^二天下^一也。天皇娶^二大日下王之妹^一。若日下部王^一。子。
天。(後略)」とあり、皇子がなかったことがわかる。

¹¹ 『日本書紀』繼體天皇元年三月甲子条に「立^二皇后手白香皇女^一脩^三教于内^一。遂生^二一男^一。是為^二天國排開広庭尊^一（中略）是嫡子而幼^レ年。於^二兄治後^一。有^二其天下^一」。二兄者、広國排武尊、与武小広國排武尊也。見下文。」とみえ、安閑・宣化天皇即位の事情を記している。

¹² 塚口義信「推古天皇―女帝誕生の謎―」（『ヤマト王権の謎を解く』（学生社、一九九三年九月）所収）。塚口氏は、竹田皇子について「竹田皇子は、物部討滅戦争の記事を最後として、その後、まったく姿を現わしません。推古が即位したとき、もしこの皇子が政界で活躍できるような状態であったとすれば、有力な皇位継承候補者であり、かつまた最愛の皇子であった彼を、推古が政治の要職に就けないわけがありません。これは崇峻即位時にしても同様のことです。竹田皇子は物部戦争の最中か、もしくは、その直後に亡くなったのではないのでしょうか。あるいは、そのころ、竹田皇子はなんらかの事情で、政界で活躍できないような事情に陥っていたのかもしれない。」とされ、竹田皇子は物部戦争（崇峻天皇即位前紀、用明天皇二年七月条）の最中かその直後に薨去したという可能性を示された。

¹³ 天皇即位の要件として年齢が重視されていたことは、三十歳を原則とする村井康彦「王権の継受―不改常典をめぐる―」（『日本研究』一、一九八九年五月）や、村井氏の説を支持する中西康裕「古

代の皇位継承」（『続日本紀と奈良朝の政変』（吉川弘文館、二〇〇二年七月）所収）、四十歳説を唱える仁藤敦史「古代女帝の成立―大后と皇祖母―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一〇八、二〇〇三年十月）などがあげられる。

¹⁴ 岸俊男氏前掲註5、小林敏男「大后制の成立事情」（『古代女帝の時代』（校倉書房、一九八七年十二月）所収）、遠藤みどり氏前掲註1他参照。

¹⁵ 日本古典文学大系本『日本書紀』下、岩波書店、四六〇頁頭註二三参照。

¹⁶ 新編日本古典文学全集『日本書紀』二、小学館、一四九頁頭註八参照。

¹⁷ 青木和夫「日本書紀考証三題」（『日本律令国家論攷』（岩波書店、一九九二年七月）所収。初出は一九六二年九月）参照。

¹⁸ 「皇后」と他のキサキを同一記事に記している例は、安閑天皇元年三月戊子条、宣化天皇元年三月己酉条、敏達天皇四年正月甲子条、用明天皇元年正月壬子条、舒明天皇二年正月戊寅条、大化元年七月戊辰条、天智天皇七年二月戊寅条、天武天皇二年二月癸未条で、後になるほど同一記事に「皇后」と他のキサキを記するという特徴がみられる。

¹⁹ 「皇后」よりも「妃」を先に記す体裁をとっているのは雄略天

える。

皇紀のみで、他は「妃」が「皇后」よりも先に娶られている場合であつても、青木氏の言うように「先_レ是」などの表現をもちいて「皇后」の後に記している。

²⁰ 『日本書紀』清寧天皇即位前紀に「白髮武広国押稚日本根子天皇。大泊瀬幼武天皇第三子也。」とあることから第三子であることがわかる。

²¹ 前掲註12参照。

²² 森博達『日本書紀の謎を解く―述作者は誰か』（中公新書、一九九九年十月）で、『日本書紀』の各巻を、音韻や仮名表記、倭習（誤用）の分布などにより、基本的に正格の漢文で綴られた₂群と、日本語的発想によつて書かれた₃群とに区分している。「元妃」のみえる巻十四・十七・十九・二十五は、森氏による区分を参照すると、すべて₂群に属する点は注目される。森氏は₂群の編修に唐人の続守言と薩弘恪の関与したことを指摘しており、漢籍に通じた者の述作とするならば、漢籍にみえる「元妃」の用例が『日本書紀』にもみられるのも納得できよう。

²³ 小島憲之『上代日本文学与中国文学』上（塙書房、一九六二年九月）

²⁴ 「正妃」は、『日本書紀』神武天皇即位前紀、宣化天皇元年三月己酉条、欽明天皇元年正月甲子条、天武天皇即位前紀にそれぞれみ

附論三 開皇二十年の遣隋使をめぐる

―坂本太郎氏の所説を中心に―

はじめに

推古天皇朝に隋に派遣された、いわゆる遣隋使については、『隋書』本紀と列伝（東夷伝、倭国条、以下、「倭国伝」と称する）に記録があるとともに、『日本書紀』卷二十一の推古天皇紀にも記載されており、これらの記録によって、遣使の回数・年次や派遣の目的、隋との交渉といったものがかなり詳しく知られる。

ただ、『隋書』と『日本書紀』では遣隋使に関する記録に齟齬があり、派遣の総回数と年次については、いまだ定説をみるに至っていない¹。とくに、ここで取り上げる開皇二十年（六〇〇）の遣隋使については、倭国伝に記録を留めているものの、それに対応する『日本書紀』の記録が存在しないことから、その解釈をめぐる²はさまざまな学説が提起されている。小論では、この開皇二十年の遣隋使について、おもに坂本太郎氏の提説³を再吟味したい。坂本氏は、はじめ、この遣使を隋の国情偵察のための非公式な使いとしていたが⁴、のちに自説をあらため、このときの遣使は「大和朝廷の派遣した使節ではなく、どこか九州・山陽あたり

の豪族が、私に派遣した使にすぎない」とされたが、これは、本居宣長『馭戎概言』の指摘を敷衍したものである。

坂本説については、すでに篠川賢氏なども批判の目を向けておられたが⁵、その後、推古天皇朝の外交に関する研究は、聖德太子の実在性をめぐる争論と相俟って、いちじるしく進捗している。そうした研究を参照しつつ、ここであらためてこの問題について取り上げることは、まったく不毛の議論ではあるまい。

一、開皇二十年の遣隋使の有無

周知のことではあるが、『隋書』倭国伝には、つぎのような記載がある（『北史』もほぼ同じ）。

開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思比孤、號阿輩雞彌、遣使詣闕。上令所司訪其風俗。使者言倭王以天為兄、以日為弟、天未明時出聽政、跣趺坐、日出便停理務、云委我弟。高祖曰「此太無義理。」於是訓令改之。（中略）大業三年、其王多利思比孤遣使朝貢。使者曰「聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法。」其國書曰「日出處天子致書日沒處天子無恙」云云。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰「蠻夷書有無禮者、勿復以聞。」明年、上遣文林郎裴清使於倭國。（中略）倭

王遣小德阿輩臺、從數百人、設儀仗、鳴鼓角來迎。後十日、又遣大禮哥多毗、從二百餘騎郊勞。既至彼都、其王與清相見、大悅、曰「我聞海西有大隋、禮義之國、故遣朝貢。我夷人、僻在海隅、不聞禮義、是以稽留境內、不即相見。今故清道飾館、以待大使、冀聞大國惟新之化。」清答曰「皇帝德並二儀、澤流四海、以王慕化、故遣行人來此宣諭。」既而引清就館。其後清遣人謂其王曰「朝命既達、請即戒塗。」於是設宴享以遣清、復令使者隨清來貢方物。此後遂絕。

これによれば、隋の開皇二十年、姓を「阿毎」、字を「多利思比孤」と名乗る倭王がはじめて遣使をおこなったことがわかる。この遣使の再考が小論のねらいであるが、それに先立って、あるいはすでに解決済みのことも知らないが、倭国伝にしろされる、このときの遣隋使が事実かどうかをたしかめておく必要がある。開皇二十年の遣使に関する疑いはすでに藤麿王の論文にみえるが、その疑問の根拠は、

①倭国伝によれば、冠位十二階が開皇二十年時に伝えられている。

②大業三年の記事が「詳細に且つ始めての使聘であるかのよう」に記されているなどの点につきる。

たしかに、『日本書紀』推古天皇紀には、倭国伝が伝える開皇二十年の遣隋使のことはみえないので、疑いはある程度やむをえないところがある。この点については、じつは坂本氏も問題にされているので、次節であらためてふれる機会があるが、結論のみをいえば、『日本書紀』にみえないことが、『隋書』の記事を疑う理由にはならないと思う。

ところで、藤麿王があげた二点のうち、②について、坂元義種氏がいわれたように、具体的な指摘がないと検討できないので、問題となるのは①であるが、これは、倭国伝をふくむ『隋書』東夷伝各条の記述のスタイルを分析すれば、解決の糸口が得られる。

まず、倭国伝に記載される内容を項目ごとに示せば、①倭国の位置、②邪馬台が魏に遣使、③『魏志』による邪馬台の位置、④後漢時代の倭奴国の朝貢、⑤卑弥呼、⑥開皇二十年の遣使、⑦冠位十二階、⑧国県制、⑨服装・装飾、⑩刑罰、⑪楽、⑫年中行事・風土、⑬風俗、⑭葬送儀礼、⑮新羅・百済との関係、⑯大業三年（六〇七、推古天皇十五年）の遣使、⑰明年（大業四年、六〇八、推古天皇十六年）の裴世清の来日、⑱倭国までの行程、となる。

こうした記述のスタイルは、じつは倭国伝だけのものではなく、東夷伝には同様の構成をとるものがいくつもある。なかでも共通点が多いのは、高麗伝・百済伝・新羅伝の三伝である。たとえ

ば、高麗伝は、①高麗の先祖の出自・高麗の成立、②北魏・北周への遣使、③平原王（在位五五九～五九〇）による隋への遣使、④風土（面積・都・国土の特徴・新羅との関係など）、⑤位階制度・官職、⑥服装・行事、⑦税制・刑罰、⑧楽、⑨風俗・為人、⑩婚葬祭、⑪開皇初の遣使、⑫大業七年（六一二）の遣使、⑬大業九年（六一三）の遣使、⑭大業十年（六一四）の遣使、の項目からなる。

同様に、百済伝は、①百済の先祖の出自・百済の成立・国号の由来、②開皇年間の遣使、③風土、④位階制度、⑤行政、⑥風俗・行事、⑦開皇十八年（五九八）の遣使、⑧百済の王位継承の次第、⑨大業三年（六〇七）の遣使、⑩大業七年（六一二）の遣使、⑪大業十年（六一四）の遣使、⑫百済の属国の諸項目を記載し、新羅伝には、①新羅の位置、②新羅王の出自・新羅の成立、③開皇十四年（五九四）の遣使、④位階制度、⑤行政区画・軍・風俗・刑政・衣服、⑥年中行事、⑦新羅人の特徴・婚葬祭、⑧国土の特徴・産物・隋への朝貢、の順で記載がある。

増村宏氏は、これが東夷伝すべてにわたる叙述のスタイルであるかのように説かれるが⁸、かならずしもそうとはいえない。たとえば、靺鞨伝では、①靺鞨の位置、②部族、③地理、④風俗・為人、⑤開皇初の遣使、⑥靺鞨使者の無礼、⑦近隣国契丹との関係、⑧煬帝の初めにおける隋・高麗戦争、⑨大業十三年（六一七）

の煬帝の行幸への同行、といった項目について記載があるが、高麗伝などとはいささか出入りがある。

また、流求伝では、①流求の位置、②流求王の名・居所、③土地の特徴、④統治形態、⑤服装・装飾・武器、⑥為人、⑦税・刑、⑧文字の有無、⑨顔の特徴・身分制の有無・風俗、⑩婚葬祭、⑪国土の特徴・気候、⑫信仰、⑬大業元年（六〇五）の遣使、⑭大業三年（六〇七）における朱寛の流求派遣、⑮大業四年（六〇八）再度の朱寛派遣、といった体裁であって、さきの高麗・百済・新羅とくらべると形が崩れている。これらは、隋が把握していた情報量のちがいにによるのであろうが、いずれにしても、東夷伝の各条がことごとく倭国伝解釈の参考になるものではない。

しかし、それでも、高麗伝・百済伝・新羅伝の各条が比較的倭国伝に近い叙述の体裁を採用していることは、たしかである。つまり、これら各条では、共通して文帝の時代の開皇年間の初回の遣使の記事のあと、隋が得たその国についての知識が記載され、それにつづいて煬帝の時代、すなわち大業年間の遣使をしるす体裁をとっているという特徴がみられる。そこから判断すると、開皇二十年の遣使につづけて記載される冠位十二階も、かならずしもこのときの遣隋使とのかかわりでとらえる必要はないのである。そもそも、東夷伝の各条では、開皇年間の国交については敏感

で、かならずといってよいほど——むろん、実際に国交のある場合に限るであろうが——記載がある。これは、やはり、隋代になつてはじめてひらけた国交を重視してのことであろう。だとすれば、倭国伝がしるす開皇二十年の遣使もことさら疑問視する必要はないのであつて、これを強いて疑う理由は認められない。もし、開皇二十年の倭国による遣使を疑うのであれば、東夷伝の他の記事にも疑いを向けねばならないことになるが、それは現実的ではない。

かつて大庭脩氏は、魏志倭人伝にみえる景初三年の魏皇帝の詔文にふれ、「魏書」が魏の国の歴史を書いたものである以上、魏と倭との交渉をしるした後部の二割が倭人伝の眼目であり、そのなかばに及ぶ魏の皇帝の詔は「魏志倭人伝」の中の一、二の重要な部分であると考えなければならぬ」ことを指摘された。⁹『隋書』の場合にも同じことがいえるのであつて、列伝で周辺諸国のことを記載するのは、これらの国々がいつ、いかにして中国王朝と関係をもっていたか（臣従していたか）を明確にしておく必要があつたからである。それゆえ、隋の場合にも、倭とはじめて国交が拓けた際の遣使について『隋書』が虚偽の記載をしているとは考えがたいのである。

二、坂本説の根拠とその問題点

さて、以上の確認を踏まえたうえで、つぎに坂本氏の所説を取り上げたいが、氏は、開皇二十年の遣使を疑うという自説の根拠として、おもに以下の三点をあげておられる。

(1)『日本書紀』に触れていない。推古天皇十五・十六年、二十二年の遣使の記録は『隋書』の合うところは多いが、開皇二十年（推古天皇八年）の場合だけ記録がなかったということ是不自然である。これは、この遣使が西辺豪族のしわざで、朝廷は全く関知しなかったからである。

(2) 開皇二十年（推古天皇八年）は、新羅出兵が開始された年だが、もし、その出兵に対し隋の諒解を得たり、何らかの權威を負うことを求めるのであれば一、二年前に行うことが効果的であり、同年では効果が少ない。新羅出兵だけで大事業であり、そういう大事業を行う年を選んで、同じ外国関係のそれ以上の大事業を開始するということ自体が不自然である。

(3)「姓はアメ、字はタリシヒコ、号はオホキミ」というのは、使者がのべた天皇の称号を、先方が聞きかじって文字化したものである。当時は推古天皇だから「タリシヒコ」ではおかしく、天皇に通有と考えられていた尊号をのべたものであ

ろう。『隋書』の書法は、天皇を客観的に遠くから眺めている人のことばをとったもので、責任のある国使の言う言葉ではない。

以下、坂本氏が指摘された根拠について、それぞれ検討を試みたい。

まず、(1)の『日本書紀』に記載がないという点であるが、これはかならずしも遣使を朝廷派遣のものではないとする根拠にはならないと思う。開皇二十年のほかにも、『隋書』のみに記事があり、『日本書紀』には記録されていない遣隋使は、大業四年三月十九日(煬帝本紀)と大業六年正月二十七日(煬帝本紀)の二例が存在するのであって、『日本書紀』の対隋外交記録は、けっして万全とはいえない。では、こうした記録の欠落は、なぜ生じたのか。これについてはいろいろな要因が考えられるが、推古天皇二十八年に編纂されたという天皇記が、皇極天皇四年の乙巳の変によって焼失したことが原因の一つではないかと推測される。ただ、これについては、べつな理由を想定することもできそうなので、のちにあらためて取り上げてみたい。

つぎに(2)の開皇二十年という年次に対する坂本氏の疑問である。坂本氏は「新羅出兵との関わりで遣使を出したというなら、一二年前が効果的」とのべているが、倭は隋へ朝貢はするが、冊

封は受けないという、一貫した対隋外交方針をとっており、倭側が新羅出兵に際して積極的に隋の援助を求めているかどうかは疑問である。他の高麗や百済、新羅が開皇年間の遣使によって、比較的早い段階でそれぞれ隋の冊封を受けていることを考えると、倭が冊封を受けなかったのは異例ともいえよう。かりに隋の諒解や援助を求めたとしても、それが派兵と同年ではいけない理由はない。むしろ、坂本氏がのべるように直前のほうが効果的ともいえる。いずれにしても、開皇二十年の遣使は、かならずしも新羅出兵とのかかわりでとらえる必要はないように思う¹⁰。大陸の情勢でいえば、この年、のちの煬帝が立太子していることとの関連も考えられるのである。

なお、坂本氏は、開皇二十年(推古天皇八年)の遣使ののち後が続かず、七年ののち大業三年(推古天皇十五年)に正式の国使が出たという期間の空白も看過¹¹がたいとしておられるが、百済にしても、『隋書』の記載では開皇十八年以来、大業三年まで遣使の中断が存するので、これによって、開皇二十年の遣隋使を訝ることには無理があろう。また、高麗伝・百済伝・新羅伝・靺鞨伝の四伝には、それぞれの国が開皇年間にそろって遣使を行ない、国交がひらけたことがしるされている。列伝に周辺諸国のことをしるすのは、隋がこれらの国々といつ、いかにして関係をもっていた

のかを明確に示す目的があったと考えられる。そのため、先にものべたように、開皇年間に共通しておこなわれた初回遣使については特に重要視していたと思われる、隋書が倭の場合のみに虚偽の記載をするとは考えがたい。

ちなみに、倭王が、天を兄とし、日を弟とするとのべたことを不審とするが、塚口義信氏が指摘するように¹¹、六・七世紀代の天皇の和風諡号に「天」と「日」の名辞が含まれており、倭独自の「天」と「日」に対する観念が深く根づいていたことがうかがえる点を見ると、天Ⅱ兄、日Ⅱ弟という王権思想も決して無稽なものとはいえず、こうした使者の説明も根拠がないとは思えない。

最後に(3)の倭王の称号をはじめとする使者のことばについて、坂本氏は、姓「阿毎」、字「多利思比孤」、号「阿輩雞彌」という使者のことばは、天皇に通有と考えられていた尊号を使者がのべたに過ぎないとし、推古天皇では「多利思比孤」は差し支えらるゝとする。しかし、塚口氏¹²などが指摘するように、推古天皇朝の外交権が聖徳太子に委ねられており、太子は外国に対して「倭王」を称しうる権限をもっていたと考えることが可能である。時の一連の外交政策の中心となっていたのが、聖徳太子だったと考えると、あたかも男王の存在を前提とするかのような「多利思比

孤」という説明であっても何ら不都合ではない。

また、開皇二十年の遣使の記事の直後には、「内官有十二等、一曰大徳、次小徳、次大仁、次小仁、次大義、次小義、次大禮、次小禮、次大智、次小智、次大信、次小信、員無定數」とあり、それにつづけて「至隋、其王始制冠、以錦綵為之、以金銀鏤花為飾」と倭国伝はしるす。これは、いうまでもなく、推古天皇十一年に制定され、翌年実施された冠位十二階のことをいったものである。この冠位十二階のことが、かならずしも開皇二十年の使者から得た情報によつたものではないことはさきにもふれたとおりだが、この冠位制について、「其王始制冠」として多利思比孤の事績のようにしるしていることは、倭国伝の編者が、開皇二十年の遣使の主体である多利思比孤と、冠位十二階を制定した王とを同一人物と認識していたことを示している。また、風俗記事のあとにしるされる大業三年の遣使についても、「大業三年、其王多利思比孤遣使朝貢」としるしているのも、同様の認識を示すものである¹³。このように考えていくと、隋側では、開皇二十年もその後の大業三・四年の遣使も、一貫して倭からの正式な使者と認識していたと考えられるので、この点でも坂本説にはしたがえないのである。

おわりに

以上、坂本太郎氏の所説を手がかりに、開皇二十年の遣隋使についての私見を開陳してきた。その結果、やはり、これを推古天皇朝の正式な遣使とみてよいのではないかという結論に達した。ただ、そう考えると、やはり無視できないのは、『日本書紀』がこれを逸している点であろう。

これについては、高橋善太郎氏のように¹⁴、『日本書紀』の故意によるものとみることが無理であろうが、記録の欠損によるものと推測しうることはさきにも述べたとおりである。あるいは、これが大業三年の遣使のように重要な意味をもたないことが推古天皇紀にしるされなかった原因であるとも考えられなくはないだろうか。

隋代では、文帝のあとを承けた煬帝が、周辺国家に対し積極的な外交政策を展開したことはよく知られている。家臣を積極的に諸外国に派遣し、朝貢を呼びかけていることは、列伝にもつぎのように記載されている。

- ・（大業）三年、煬帝令羽騎朱寬入海求訪異俗、何蠻言之、遂与蠻俱往、因到流求国。（東夷伝、流求国）
- ・煬帝即位、募能通絶域者。（南蛮伝、赤土国）
- ・煬帝嗣位、引致諸蕃。（西域伝、高昌）

・煬帝遣雲騎尉李昱使通波斯、尋遣使随昱貢方物。（西域伝、波斯）

こうした外交方針の展開の結果、煬帝の大業年間には文帝の時代より飛躍的に諸外国からの朝貢が増加しているのであって、こうした情勢を考慮すると、大業三年の遣隋使も、あるいは煬帝の招聘・勧誘に応じたものであるとする可能性が大きい¹⁵。そして、倭側はこの招聘に応じる形で対等外交を展開しようとしたのであろうが¹⁶、これは、裏をかえせば、開皇二十年の遣使はそれほど画期的なものではなかったことを意味するのではあるまいか。この年、すなわち推古天皇八年は、『日本書紀』によれば、倭が新羅に出兵した年であり、ことによると、隋に使者を送ったことはかかる派兵との関係も、たしかに捨て切れない。前述のように、煬帝の立太子との関連も考えられようが、いずれにしても、外交記録として特筆されるほどの成果をあげえなかったのではなかろうか。推古天皇紀がそれを記録に留めていない理由も、じつはそのあたりにあるように思う。われわれは、ともすれば、長らく途絶えていた中国との国交の再開であり、かつまた、その後の遣唐使につらなる一連の遣使の初回ということで、大きな意義を認めようとしがちであるが、これは、案外、勝手な思い込みに過ぎないのかも知れない。その意味で、開皇二十年の遣使を隋の国情偵察のための非公式な使いとする坂本太郎氏の旧説にむしろ魅力を感じ

じるのは皮肉なことである。

〔補注〕

¹ 這般の研究史については、坂元義種「遣隋使の基礎的考察」(『日本古代の国家と宗教』上巻(吉川弘文館、一九八〇年五月)所収)や篠川賢「遣隋使の派遣回数とその年代」(『成城短期大学紀要』一七、一九八六年三月)参照。

² 坂本太郎『日本書紀』と『隋書』(『國學院雜誌』七七―三、一九七六年三月、のち『坂本太郎著作集』第二巻(吉川弘文館、一九八八年十二月)所収、以下の引用頁は後者による)、四〇九頁。なお、氏の説の概略は、同氏『聖徳太子』(吉川弘文館、一九七九年二月)、のち『坂本太郎著作集』第九巻(吉川弘文館、一九八九年四月)所収(三九〇四二頁も参照)。

³ 坂本太郎『大化改新の研究』(至文堂、一九三八年六月)のち『坂本太郎著作集』第六巻(吉川弘文館、一九八九年十月)所収、一一五頁)など。

⁴ 篠川氏前掲注1論文、八八〇九〇頁。

⁵ 藤麿王「日唐関係」(『寧楽』一〇別巻、一九二八年七月)。なお、宮田俊彦「聖徳太子とその時代」(『歴史教育』二・四、一九五四年四月)も、「隋書はそれ程に信ずべく、日本書紀は左程に疑

われてよいであろうか。「高橋善太郎」氏自身も気付いていられるように冠位十二階がまだ始行されていない年代にかけて之を伝える推古天皇八年(開皇二十年)の使をそのまゝに信じてよいであろうか、藤麿王は隋書を否定された」(二二六頁)とのべている。

⁶ 坂本氏前掲注2論文、五三頁。

⁷ こうした記述のスタイルは、東夷伝だけではなく、南蛮・西域伝などの諸国にも共通する点があるが、外交記事に関しては地域によって差があるため、かならずしも同じスタイルにはなっていない。

⁸ 増村宏『遣唐使の研究』(同朋舎出版、一九八八年十二月)一六五頁。

⁹ 大庭脩『親魏倭王』(学生社、二〇〇一年九月)八八頁。

¹⁰ 篠川氏は、前々年、すなわち五九八年の隋による最初の高句麗遠征との関連を示唆しておられる(前掲論文、八八頁)。

¹¹ 塚口義信「聖徳太子の「天皇事」とは何か」(上田正昭・千田稔共編『聖徳太子の歴史を読む』(文英堂、二〇〇八年二月)所収)九〇〇九二頁。

¹² 塚口氏前掲注11論文、八六〇九四頁参照。

¹³ 篠川氏前掲注1論文、八九〇九〇頁。

¹⁴ 高橋善太郎「遣隋使の研究―日本書紀と隋書の比較―」(『東

洋学報』三三―三・四、一九五一年十月。

¹⁵ 宮崎市定『隋の煬帝』（人物往来社、一九六五年十二月、のち『宮崎市定全集』第七卷（一九九二年十月）所収、引用頁数は後者による）は、大業三年に流求国に派遣された朱寛が日本にも来たのではないかと推測しておられるが（三三六頁）、かならずしも確証はない。べつな人物の来日を想定することも可能であろう。

¹⁶ 念のため、附言しておく、倭の五王の臣従外交と推古天皇朝の対等外交は、しばしば対比的に取り上げられるが、荊木美行「倭の五王の一考察―南朝冊封体制における「王」と「国王」をめぐって―」『ヒストリア』一五三、一九九六年十二月、のち同氏『記紀と古代史料の研究』（国書刊行会、二〇〇八年二月）所収）を参照すれば、除正される爵号に独自のこだわりをみせる倭の五王の外交を、たんなる臣従外交ととらえるのは、一面的な見方として反省を要する。

第二部 『肥前国風土記』とその受容

第一章 『肥前国風土記』校訂

『肥前国風土記』は、昭和初年になって発見され、昭和三十年（一九五五）になって国宝に指定された平安時代後期の書写とされる故猪熊信男氏旧蔵の猪熊本が現存最古の写本である。また、元禄十三年（一七〇〇）十二月五日、京都の曼殊院所蔵本を実観法印が書写した旨の奥書を有する南葵文庫本がある。南葵文庫本は、猪熊本と同系統とされているが、若干相違する箇所があり、難解な異体字を多く記す猪熊本の本文を校訂する際に参考となる。

南葵文庫本の親本である曼殊院本は現在所在不明となっているが、従来より猪熊本との関係が論じられており、猪熊本こそが曼殊院本とする秋本吉郎氏（秋本吉郎「風土記伝播祖本と伝播初期の系譜」『風土記の研究』ミネルヴァ書房、一九六三年十月所収）、猪熊本と祖本を同じくするも別系統とする平田俊春氏（平田俊春「肥前風土記諸本の研究」〔佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会編『校本肥前風土記とその研究』一九五一年二月所収〕）、これらの研究史を整理したうえで判断を保留するとする田中卓氏（神道大系古典編七『風土記』（神道大系編纂会、一九九四年三月））というように定説をみない。この曼殊院本は、明治二十一年（一八八八）八月清書と記す『肥

前国風土記』の注釈書の先駆である糸山貞幹氏の著になる『肥前風土記纂註』における本文校訂に「曼本（奥書三、元禄十三年歳次庚辰冬十二月初五日。以曼殊院所蔵之本書於高野村蓮華寺法仰実観。マタ、享保九年武蔵人児島徳公。マタ同年源頼久トアルヲ、天保八年本国人南里元壽氏カ傳写シタルナリ……）」として、曼殊院本を三回転写した「曼本」が利用されており、この校異から曼殊院本の面影を復元しようとした林崎治恵氏の試み（林崎治恵『肥前風土記纂註』の風土記本文「『風土記研究』一六、一九九三年六月」）があるが、「曼本」を校異に引いている七十六箇所から、猪熊本との親疎関係を明らかにすることはできなかった。このことから、やはり猪熊本と曼殊院本との関係は不明とするほかない。

そして寛政十一年（一七九九）三月、長崎人、大家惟年が齎した原本を、荒木田久老が京都で校正して訓点を加え、翌十二年五月に版本として刊行され、国学者を中心として研究に利用されるようになった。前にあげた『肥前風土記纂註』の著者である糸山貞幹氏は、『肥前国風土記』に注釈を施すだけでなく、校異は記さないものの、奥書から現在では失われた写本との校合も行っており、その校訂本は現在、佐賀県立図書館に所蔵されている。明治三十二年（一八九九）の栗田寛氏が五風土記の本文を集めて校訂・注釈した『標注古風土記』（大日本図書、一八九九年十二月）の刊行は、近代における風土記のテキスト研究の先駆けとなった。凡例によると、『肥前国風土記』

に関しては、前述の糸山貞幹氏が校訂を行なった『肥前国風土記』の写本および『肥前風土記纂註』が多く引用されている。その後、昭和九年（一九三四）になって、井上通泰氏が板本を底本とし猪熊本を対校して校訂し、栗田寛氏の『標注古風土記』や糸山貞幹氏の『肥前風土記纂註』を引用し、考証を加えた『肥前風土記新考』（巧人社、一九三四年十一月。その後、一九七四年二月に臨川書店から復刻）が、昭和二十六年（一九五二）には平田俊春氏が猪熊本を底本、南葵文庫本を副本とし、十三種類の写本・研究書と校合した「校本肥前風土記」（佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会編『校本肥前風土記とその研究』（一九五二年二月）所収）が刊行された。昭和三十三年（一九五八）に出た秋本吉郎氏校注の日本古典文学大系2『風土記』（岩波書店、一九五八年四月）の登場は、戦後における風土記研究の発展に大きな影響を与えた。猪熊本を底本とし、南葵文庫本と対校している。その翌年には久松潜一氏校注の日本古典全書『風土記』（朝日新聞社、一九五九年十月）が出るが、秋本氏校注本と比較すると、それほど広まらなかったようである。

久松潜一氏の後、しばらくの間テキスト研究の流れは落ち着きをみせ、三十五年あまり経った平成六年（一九九四）、田中卓氏による五風土記の校訂本である神道大系古典編7『風土記』（神道大系編纂会、一九九四年三月）が刊行された。『肥前国風土記』の部分は平田俊春氏の「校本肥前風土記」を底本とし、猪熊本・南葵文庫本・荒木田久

老校訂本を対校したものである。そして平成九年（一九九七）に刊行された植垣節也氏校注・訳の新編日本古典文学全集5『風土記』（小学館、一九九七年十月）は、猪熊本を底本として、南葵文庫本・田安家本・京大図書館本・荒木田久老校訂本などを参照して校訂を加えた原文に、頭注・訓読・現代語訳を載せる。秋本氏校注の日本古典文学大系本とならぶ完成度の高さを誇るが、本文校訂の際の校異注は省略されており、必要に応じて頭注に掲げているのみである。また、近年においては、平成二十年（二〇〇八）に沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉の三氏の編になる『豊後国風土記 肥前国風土記』（山川出版社、二〇〇八年二月）が刊行されている。これは猪熊本を底本とし、南葵文庫本を対校したもので、底本である猪熊本の表記を尊重したものである。

以上が『肥前国風土記』のテキストである。戦後に刊行されたテキストをみると、猪熊本を底本とし、南葵文庫本を対校するパターンが主流となっている。新しい校訂本の作成は、これまでの校訂本に何らかの問題があつて、それを補完してよりよいテキストにする目的で行なわれるものと考えられる。これまで刊行されてきたテキストは、いずれも優れたものであるが、問題点としては、

①秋本吉郎氏校訂の日本古典文学大系本や、近年刊行された沖森卓也・佐藤信・矢嶋泉の三氏による校訂本など、猪熊本と南葵

文庫本のみで校訂を行なったものが多く、近世において広く流布した荒木田久老校本を校合に利用したものが極めて少ないこと。

②猪熊本を底本とし、十三種類の写本・研究書と校合した平田俊春氏校訂本は、対校本の数で並ぶものは今なお出ていないが、誤植・校異注を逸する箇所が少なからずみられること。

③平田俊春氏校訂本を底本とし、猪熊本・南葵文庫本・荒木田久老校訂本を対校した田中卓氏校訂本は、荒木田久老校訂本による校異の脱落が目立つこと。

などがあげられる。そこで、これら先学の成果を踏まえて問題点を補完すべく、改めて本文校訂を行ないたい。校訂の方法は左の【凡例】の通りである。

【凡例】

一、このたびの校訂では、猪熊本を底本とし、南葵文庫本・荒木田久老校訂本・井上通泰『肥前風土記新考』・平田俊春氏校訂本・神道大系本・山川出版社刊『豊後国風土記 肥前国風土記』を対校本とした。校訂におけるこれらの写本・刊本の略称は次の通りである。

(1) 底本 猪熊信男氏旧蔵本。平安時代後期の書写とされ、現存する『肥前国風土記』の写本では最も古いが、書写の年月日を記した奥書は存しない。猪熊本の存在が知られるようになったのは昭和になってからである。

(2) 南本 東京大学総合図書館所蔵。旧紀州徳川家南葵文庫旧蔵本。奥書に「元禄十三年歳次庚辰冬十二月初五日。以_二曼殊院所藏之本_一書_レ於_二高野村蓮華寺_一。法印實觀」とあり、元禄十三年（一七〇〇）十二月五日、実観法印が曼殊院所蔵本を書写した旨を記す。

(3) 板本 荒木田久老校本。跋文に、「右一冊者。肥前國長崎人家惟年所_二齋來_一書也。原本謬誤尤多矣。」とある。

(4) 新考 井上通泰『肥前風土記新考』（臨川書店、一九七四年復刻版刊行、初出は一九三四年）。荒木田久老校訂本を底本とし、猪熊本を対校本とする。

(5) 校本 平田俊春氏校訂本（佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会編『校本肥前風土記とその研究』一九五二年二月所収）。猪熊本を底本とし、

南葵文庫本・井上通泰氏旧蔵本以下十三の写本・研究書と対校する。

- (6) 神本 田中卓氏校訂本（神道大系古典篇七、神道大系編纂会、一九九四年三月）。平田俊春氏校訂本を底本とし、猪熊本・南葵文庫本・荒木田久老校訂本を対校本とする。

- (7) 山本 冲森卓也・佐藤信・矢嶋泉編『豊後国風土記・肥前国風土記』（山川出版社、二〇〇八年二月）。猪熊本を底本とし、南葵文庫本を対校本とする。

このほか、必要に応じて秋本吉郎校注・日本古典文学大系 2 『風土記』（岩波書店、一九五八年四月、略称・大系本）・植垣節也校注訳・新編日本古典文学全集 5 『風土記』（小学館、一九九七年十月、略称・全集本）を参考にした。

- 一、本文の字体は、底本に従った。そのため、「国」・「國」など、常用漢字と異体字が混在して不統一な部分もあるがそのままとした。
- 一、風土記の原文は十四ポイント、校異は七ポイント、訓読は十二ポイントで組版した。なお、分注についてはへで括って大字とする体裁に改めた。

- 一、校異によって底本の字を改めた場合、該当する文字を網掛けとした。

總記

【本文】

肥前国(1)

郡壹拾壹所。〔郷(2)七十。里一百八十七(3)〕驛壹拾捌所。〔小(4)路〕烽貳拾所。〔下國〕城壹所。寺貳所。〔僧寺〕

肥前國者。本与肥後國合為一國。昔者。磯城瑞籬宮御宇御間城天皇之世。肥後國益城郡朝來名峯。有土蜘蛛打猴頸猴(5)二人。帥(6)徒衆一百八十餘人。拒捍皇命。不肯降服(7)。朝廷(8)勅。遣肥君等祖。健緒組伐之。於茲。健緒組奉勅。悉誅滅之。兼巡國裏。觀察消息。到於八代郡白髮山。日晚止宿(9)。其夜。虛(10)空有火。自然而(11)燎(12)。稍々(13)降下。就此山燎之時。健緒組。見而驚恠(14)。參上朝廷。奏言。臣。辱被聖命。遠誅西戎。不霑(15)刀刃。梟鏡自滅。自非威(15)靈。何得然之。更舉燎火之狀。奏聞。天皇勅曰。所奏之事。未曾所聞。火下之國。可謂火(16)國。即舉健緒組之勳。賜姓名曰火君健緒組(17)。便遣治此國。因(18)曰火國。後分兩國。而(19)為前後。又。纏向日代宮御宇(20)大足彥天皇。誅球磨贈啖(21)而。巡狩筑紫國之時。從(22)葦北(23)火流浦。發船幸於火國。度海之間。日没。夜冥不知所著。忽有火光。遙視行前。天皇勅棹人曰。直指火處。應勅而往。果得著崖(24)。天皇下詔曰。火(25)燎之處。此號何界。所燎之火。亦為何火(26)。土人奏言。此是。火國八代郡火邑(27)也。但不知火主。于(28)時。天皇詔群臣曰。今此燎火。非是人火。

所_二以号_二火國_一。知_二其尔由_一。

【校異】

- (1) 肥前國―底本ノ表題ニ「肥前國風土記」、南本ノ表題ニハ「風土記^{肥前}」トアルモ、本文ノ冒頭ニハナシ。板本「風土記肥前國」トス。校本、コノ前行ニ「肥前國風土記」ト記ス。
- (2) 郷―板本・校本、「郷」以下ヲ小字一行ニ作ルモ、底本・南本ニヨリ割書ニ改ム。
- (3) 七―底本・南本・板本・校本モ同ジ。但シ、各郡ノ条ノ里ノ合計「一百八十四里」トナリ、合ハズ。大系本「七」ヲ「九」ノ誤カ、トス。
- (4) 小―校本、「小路」ヲ小字一行ニ作ルモ、底本・南本ニヨリ割書ニ改ム。以下同ジ。
- (5) 頸猿―底本・南本・山本ニ缺ク。板本「頸猿」アリ。校本「肥後國風土記逸文ニヨリ補フ」トシテ「頸猿」ヲ加フ。但シ、『^肥日本紀』所引ノ肥後國風土記逸文ニヨリ「猿」ヲ「猴」ニ改ム。
- (6) 帥―猪本・南本「帥」ニ誤ル。板本・山本「帥」ニ作ル。
- (7) 服―底本・校本・山本「服」、南本・板本「伏」ニ作ル。
- (8) 庭―底本・校本・山本「庭」、南本・板本「廷」ニ作ル。
- (9) 宿―底本・校本・山本「宿」。南本「密」、板本「峯」ニ誤ル。
- (10) 虛―底本・板本・校本・山本「虛」、南本「處」(右傍ニ「虚^欽」ト注ス)ニ作ル。
- (11) 而―底本・南本・板本・山本ニ缺ク。校本・神本アリ。校本「肥後國風土記逸文ニヨリ補フ」トス。
- (12) 療―底本・南本・校本・山本「療」、板本「標」ニ作ル。新考「標」トシ、右傍ニ「療」ト記ス。
- (13) 々―底本・南本「之」、板本・新考・校本・神本・山本「々」ニ作ル。
- (14) 恠―底本・神本・山本「恠」、南本・板本「怪」ニ誤ル。
- (15) 威―底本・南本・山本「滅」ニ誤ル。板本・新考・神本「威」ニ作ル。板本等ニヨリ改ム。
- (16) 火―底本・板本・新考・校本・神本・山本「火」。南本「大」ニ誤ル。
- (17) 組―底本・南本「鉞」、板本・校本・神本「純」、山本「鉞」ニ作ル。新考「純」トシ、右傍ニ「組」ト記ス。上ノ文「健緒組」トスルニヨリ改ム。
- (18) 因―底本・南本・板本コノ下ニ「火」ノ字アレド、底本朱ニテ「火」ヲ抹消スルニヨリ削ル。校本「衍ナルベシ」、神本「猪本・南本ノママニ存ス」トス。山本「因ノ下―火(抹消符アリ)」ト注ス。
- (19) 而―底本・板本・新考・校本・神本「而」ニ作ル。南本「兩」ニ誤ル。校本「原『兩』トアリ京本ニヨリ改ム」トアレド、底本・板本ノママトス。
- (20) 御宇―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本トモニ「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。
- (21) 嗽―底本・校本・神本・山本「嗽」、板本・新考「於」、南本「然」ニ誤ル。

- (22) 從―南本「徒」ニ誤ル。板本・新考・校本・神本・山本「從」ニ作ル。
- (23) 北―底本・南本「比」ニ誤ル。板本・校本・神本・山本「北」ニ作ル。板本等ニヨリ改ム。
- (24) 崖―南本「隆」ニ誤ル。板本・校本・神本・山本「崖」ニ作ル。
- (25) 火―以下「土人」マデ十八字(底本一行分)、底本・南本脱ス。校本「肥後風土記逸文ニヨリ補フ」トス。板本・新考「何謂邑也國人」ノ五字アリ。神本、十八字ヲ補フ。山本「()」ニテ十八字ヲ補フ。
- (26) 火―校本「人」ニ作ル。神本・山本「火」ニ作ル。神本「釈日本紀所引文ニヨリ改ム」トスルニ従フ。
- (27) 邑―底本「色」ニ作リ、南本・板本缺ク。校本・神本・山本「邑」ノ字アリ。新考「△」印ノ右傍ニ「邑」ト記シ補フ。校本・神本・山本ニヨリ補フ。
- (28) 于―底本・南本・校本「干」ニ誤ル。以下同ジ。板本・神本・山本「于」ニ作ル。板本等ニヨリ改ム。

【訓読】

肥前国。

郡は壹拾壹所。郷は七十、里は一百八十七。驛は壹拾捌所。小路。烽は貳拾所。下國。城は壹所。寺は貳所。

僧の寺。なり。

肥前国は、本、肥後国と合せて一國為りき。昔者、磯城瑞籬宮に御宇しめしし御間城天皇のみ世に、肥後國の益城郡の朝來名峯に、土蜘蛛打猴頸猴二人あり。徒衆一百八十餘人を帥ゐて、皇命を拒捍み、肯へて降服はず。朝廷、勅して、肥君等の祖健緒組を遣して伐ちたまふ。茲に、健緒組、勅を奉りて、悉に誅ひ滅しき。兼、國裏を巡りて、消息を観察しに、八代郡の白髪山に到りて、日晚れて止宿る。その夜、虚空に火あり。自然に燎え、稍々に降下りて、この山に就きて燎えし時、健緒組、見て驚き恠しむ。朝廷に參上りて奏言しけらく、「臣、辱くも聖命を被りて、遠く西の戎を誅ふに、刀の刃を濡らさずして梟鏡自づから滅びぬ。威靈にあらざるよりは、何ぞ然あることを得む。」とまをす。更、燎えし火の状を舉げて奏聞しき。天皇、勅りたまひしく、「奏せる事、未だ曾より聞き

しことあらず。火の下りし國なれば、火の國と謂ふべし。」とのたまふ。即ち、健緒組の勳を擧げて、姓名を賜ひて火君健緒純と曰ひ、便ち、この國を治め遣めたまふ。火に因りて火國といふ。後、兩つの國に分ちて、前と後とに為せり。又、纏向日代宮に御宇しめし大足彦天皇、球磨贈喲を誅ひて、筑紫國を巡り狩しし時、葦北の火流浦より發船して火國に幸しき。海を渡ります間に、日没れ、夜冥くして著く所を知らず。忽ちに火の光ありて、遙かに行く前に視ゆ。天皇、棹人に勅りたまひしく、「直に火の處を指せ。」とのたまひしかば、勅の應に往くに、果に崖に著くことを得たり。天皇、詔を下ししく、「火の燎ゆる處、此は何と號くる界ぞ。燎ゆる火は、亦何と為る火ぞ。」とのたまふ。土人、奏言ししく、「此は是、火國八代郡の火の邑なり。但、火の主を知らず。」とまをす。時に、天皇、群臣に詔りたまひしく、「今、此の燎ゆる火は、是れ、人の火にあらず。火國と号くる所以、其の尔る由を知りぬ。」とのたまふ。

基肄郡

【本文】

基肄(29)郡。郷陸所。〈里一(30)十七。〉駅壹所。〈小路(31)。〉

昔者。纏向日代宮御宇(32)天皇巡狩之時。御筑紫國御井郡高羅之行宮。遊覽國內。霧(33)覆

基肄(29)之山。天皇勅曰。彼國可謂霧之國。後人改号基肄(29)國。今以為郡名(34)。

長岡神社。〈在郡東。〉

同天皇自高羅行宮還幸而。在酒殿泉之邊。於茲(35)。薦膳之時。御具甲鎧。光明異常。仍令

占問卜部殖坂(36)。奏云。此地有_レ神。甚願_二御鎧_一。天皇宣。實有_レ然者。奉_レ納_二神社_一。可_レ為_二永世之財_一。因号_二永世社_一。後人改曰_二長岡社_一。其鎧(37)貫緒。悉爛絕。但冑并甲板今猶在也。酒殿泉。〈在_二郡東_一〉。

此泉之。季秋九月。始變_二白色_一。味酸氣鼻(38)。不_レ能_二喫飲_一。孟春正月。反(39)而清冷。人始(40)飲喫。因曰_二酒井泉_一。後人改曰_二酒殿泉_一。

姫社郷。

此郷之中有_レ川。名曰(41)_二山道川_一(42)。其源出_二郡北山_一。南流而會(43)_二御井大川_一。昔者。此川之西有_二荒神_一。行路之人。多被_二殺害_一。半凌半殺(44)。于(45)時。卜_二求崇_一(46)由_一。兆(47)云。令_三筑前国宗像郡人。珂是古(48)。祭_二吾社_一。若合_レ願者。不_レ起_二荒心_一。覓_二珂(49)是古_一。令_レ祭_二神社_一。珂是古。即捧_レ幡祈禱云。誠有_レ敬(50)_二吾祀_一者。此(51)幡順_レ風飛往。墮_二願_レ吾之神邊_一。便(52)即舉_レ幡。順_レ風放遣。于(45)時。其幡飛往。墮_二於御原郡姫社之社_一。更還飛来。落_二此山道川邊之田村(53)_一。珂(54)是古。自(55)知_二神之在家(56)_一。其夜夢見。臥機〈謂_二久都毘枳_一〉。絡_二塚_一。〈謂_二多々(57)利_一〉。儼遊出来。壓_二驚珂是古_一。於_レ是。亦識(58)_二女神_一。即立_レ社祭之。自_レ尔已來。行路之人。不_レ被_二殺害_一。因曰_二姫社_一。今以為_二郷名_一。

【校異】

(29) 肆——底本・南本「肆」、板本・新考・校本・山本「肆」ニ作ル。板本等ニヨリ改ム。

(30) 一——底本・南本・板本・新考・校本・山本ナシ。神本「書式例ニヨリ補フ」トスルニ従フ。新考「七十」ノ右傍ニ「十七」ト記ス。

- (31) 路―神本「秋本氏説ニヨリ補フ」トシテ「路」ノ下ニ「城壹所」ノ三字ヲ補フモ、底本・南本・板本・新考・校本・山本ナシ。
- (32) 口―底本・神本・山本、闕字トス。南本・板本・新考・校本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ。
- (33) 霧―底本・板本・新考・校本・神本・山本「霧」。南本「露」ニ誤ル。
- (34) 名―底本・板本・新考・校本・神本・山本「名」。南本「各」ニ誤ル。
- (35) 茲―底本・校本・神本・山本「茲」、南本・板本・新考「此」ニ作ル。
- (36) 坂―底本・板本・新考・校本・神本・山本「坂」、南本「阪」ニ作ル。
- (37) 鎧―底本・板本・新考・校本・神本・山本「鎧」、南本「鑑」ニ作ル。
- (38) 鼻―底本・神本「鼻」、南本・板本・新考・校本・山本「臭」ニ作ル。
- (39) 反―底本・校本・神本・山本「反」、南本・板本・新考「變」ニ作ル。
- (40) 始―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本同ジ。全集本「殆」トシ、「諸本『始』」。次の行の『始』の目移りによる誤写。」トス。
- (41) 日―底本「田」ニ作リ、右傍ニ「日^款」ト注ス。南本・板本・新考・校本・神本「日」ニ作ル。
- (42) 川―底本、モト「河」ト書イタ字ヲ消シテ、ソノ上ニ「川」ト書ク。以下同ジ。南本・板本・新考・校本・神本・山本「川」ニ作ル。
- (43) 會―底本「禽」ニ作リ、右傍ニ「會^款」ト注ス。南本・板本・新考・校本・神本「會」、山本「会」ニ作ル。
- (44) 半凌半殺―底本・南本・板本・神本・山本、本文ト同ジ大字トス。新考「半凌半殺」ヲ「」デ括ル。校本「新考ニヨリ改ム」トシテ小字ニ作ル。
- (45) 于―底本・南本・板本・新考・神本・山本「于」、校本「干」ニ誤ル。
- (46) 崇―底本・南本「崇」ニ誤ル。板本・新考・校本・神本・山本「崇」ニ作ル。板本等ニヨリ改ム。
- (47) 兆―底本・南本・山本「非」ニ誤ル。板本・新考・校本・神本「兆」ニ作ル。板本等ニヨリ改ム。
- (48) 古―底本・校本・神本・山本「古」。南本「阿」ニ誤ル。板本「胡」ニ作ル。新考「胡」ノ右傍ニ「古」ト記ス。
- (49) 珂―底本・板本・新考・校本・神本・山本「珂」。南本「阿」ニ誤ル。
- (50) 敬―底本・南本・山本「敬」、板本・校本・神本「欲」ニ作ル。新考「敬」ノ右傍ニ「欲」ト記ス。
- (51) 此―底本・板本・新考・校本・神本・山本「此」。南本「比」ニ誤ル。
- (52) 便―底本・校本・神本・山本「便」、南本「便」ノ如キ字、板本「使」ニ作ル。新考「使」ノ右傍ニ「便」ト記ス。
- (53) 田村―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「田村」ニ作ル。大系本、文意ト字形ノ近似ニヨリ「因此」ニ改ムモ、底本ノママトス。
- (54) 珂―底本・板本・新考・校本・神本・山本「珂」。南本「河」ニ誤ル。
- (55) 自―底本・南本・板本・校本・神本・山本「自」。新考「自」ノ右傍ニ「因」ト記ス。
- (56) 家―底本・南本・板本・山本「家」、校本・神本「處」ニ作ル。新考「家」ノ右傍ニ「處」ト記ス。神本「家」ヲ誤リトス。
- (57) 々―底本・校本・神本・山本「々」、南本・板本・新考「多」ニ作ル。
- (58) 識―底本・南本・校本・神本・山本「識」、板本・新編日本古典文学全集本「織」ニ作ル。新考「織」ノ上ニ「△」ヲ附シ右傍ニ「識」ト記ス。

【訓読】

基肄郡。郷は陸所。〔里は一十七。〕駅は壹所。〔小路。〕

昔者、纏向日代宮に御宇しめしし天皇、巡り狩しし時、筑紫国御井郡の高羅行宮に御して、國內を遊覧すに、霧、基肄の山を覆へり。天皇、勅りたまはく、「彼の國は、霧の國と謂ふべし。」とのたまふ。後の人、改めて基肄國と号く。今、以て郡の名と為せり。

長岡神社。〔郡の東に在り。〕

同じき天皇、高羅行宮より還り幸して、酒殿泉の邊に在しき。茲に、膳を薦むる時、御具の甲鎧、光明きて常に異なりき。仍りて占問はせたまふに、卜部殖坂、奏云ししく、「此の地に神有りて、甚く御鎧を願す。」とまをす。天皇、宣りたまひしく、「實に然有らば、神の社に納め奉らむ。永き世の財と為すべし。」とのたまふ。因りて永世社と号く。後の人、改めて長岡社と曰ふ。其の鎧の貫緒、悉に爛り絶えたり。但、冑并びに甲の板とは、今も猶在り。

酒殿泉。〔郡の東に在り。〕

此の泉は、季秋九月の始めに白き色に變り、味は酸く、氣は梟くして、喫飲むこと能はず。孟春正月に反りて清く冷く、人始めて飲喫む。因りて酒井泉と曰ふ。後の人、改めて酒殿泉と曰ふ。

姫社郷。

此の郷の中に川有り。名を山道川と曰ふ。其の源は郡の北の山より出で、南に流れて御井の大川に會ふ。昔者、此の川の西に荒ぶる神有りて、路行く人、多に殺害され、半は凌ぎ。半は殺にき。時に、崇る由をトへ求ぐに、兆云へけ

らく「筑前国宗像郡の人、珂是古をして、吾が社を祭らしめよ。若し願に合はば、荒ぶる心を起さじ。」といへば、珂是古を覓ぎて、神の社を祭らしむ。珂是古、即ち幡を捧げて祈祷みて云はく、「誠に吾が祀を敬ふこと有らば、此の幡、風の順に飛び往きて、吾を願りする神の邊へ落ちよ。」といひて、便即ち幡を擧げて、風の順に放ち遣りき。時に、其の幡、飛び往きて、御原郡の姫社に墮ち、更還り飛び来て、此の山道川の邊の田村に落ちき。珂是古、自ら神の在す家を知りき。其の夜、夢に臥機へ久都毘枳と謂ふ。と絡塚へ多々利と謂ふ。と、舞ひ遊び出で来て、珂是古を壓し驚かすとき。是に、亦、女神なることを識りき。即ち社を立てて祭りき。尔より已來、路行く人、殺害されず。因りて姫社と曰ふ。今、以て郷の名と為せり。

養父郡

【本文】

養父郡。郷肆所。〈里二十二。〉烽壹所。

昔者。纏向日代宮御宇（59）天皇。巡狩之時。此郡百姓。舉部參集。御狗出而吠之。於此。有二産婦一臨見。御狗即吠止。因曰二犬聲止國一。今（60）訛謂二養父郡一也。

鳥櫟郷。〈在二郡東一。〉

昔者。輕嶋明宮御宇（61）譽田天皇之世。造二鳥屋於此郷一。取二聚雜鳥一。養馴。貢二上朝廷（62）一。因曰二鳥屋郷一。後人改曰二鳥櫟郷（63）一。

曰（64）理郷。〈在二郡南一。〉

昔者。筑後國御井川。渡瀬甚廣。人畜難^レ渡。於^レ茲。纏向日代宮御宇（59）天皇。巡狩之時。就^二生葉山^一為^二船山^一。就^二高羅山^一為^二梶山^一。造^二備船^一漕^二渡人物^一。因曰（65）^二曰（64）^一理鄉^一。狹山鄉。〈在^二郡南^一〉。

同天德行幸之時。在^二此山行宮^一。徘徊（66）**四**（67）望。四方分明。因曰^二分明村^一。〈分明。謂^二佐夜氣悉（68）^一。今訛謂^二狹山鄉^一。

【校異】

（59）□―底本・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トス。南本・板本・新考「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ。校本、底本ニヨリ闕字ニ改ムトス。

（60）今―底本・南本「於今」、板本「於此」ニ作ル。新考「於此」ノ右傍ニ「今」ト記ス。校本「於」ヲ「衍ナルベシ」トス。神本、「前行ノ『於』ノ眼ウツリカ」トスルニ從ヒ削ル。

（61）御宇―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。

（62）庭―底本・校本・神本・山本「庭」、南本・板本・新考「廷」ニ作ル。

（63）郷―底本・板本・新考・校本・神本・山本「郷」。南本「郡」ニ誤ル。

（64）日―底本・南本・板本「日」ニ誤ル。新考「日」ノ右傍ニ「日」ト記ス。大系本「底本・南本ニヨリ「日」ニ改ム」ト記スハ誤ナリ。校本「纂註ニヨリ改ム」トス。校本・神本・山本「日」ニ作ル。

（65）日―底本・南本「而」ニ誤ル。板本・新考・校本・神本・山本「日」ニ作ル。

（66）徘徊―底本・校本・神本・山本「徘徊」、南本・板本・新考「徘徊」ニ作ル。

（67）四―底本・新考・山本「日」ニ誤ル。南本等ニヨリ改ム。

（68）悉―底本・校本・神本・山本「悉」、南本・板本・新考「志」ニ作ル。

【訓読】

養父郡^{やぶのこほり}。郷は肆所^{さとところ}。〈里は一十二〉^{こさと いちじゅうに}。烽は壹所^{とふひ いっしょ}なり。

昔者、纏向日代宮に御宇しめしし天皇、巡り狩しし時、此の郡の百姓、部舉りて參集ひしに、御狗、出でて吠えき。此に、一の産婦有りて臨み見るに、御狗、即ち吠え止みき。因りて犬の聲止むの國と曰ふ。今、訛りて養父郡と謂ふ。

鳥櫟郷。〈郡の東に在り。〉

昔者、輕嶋明宮に御宇しめしし譽田天皇のみ世、鳥屋を此の郷に造り、雜の鳥を取り聚めて、養ひ訓づけて、朝廷に貢上りき。因りて鳥屋郷と曰ふ。後の人、改めて鳥櫟郷と曰ふ。

曰理郷。〈郡の南に在り。〉

昔者。筑後國の御井川の渡瀬、甚廣く、人も畜も渡り難かりき。茲に、纏向日代宮に御宇しめしし天皇、巡り狩しし時、生葉山に就きて舩山と為し、高羅山に就きて梶山と為して、舩を造り備へて、人物を漕ぎ渡しき。因りて曰理郷と曰ふ。

狭山郷。〈郡の南に在り。〉

同じき天皇、行幸しし時、此の山の行宮に在して、俳徊り四もを望はししに、四方分明らかき。因りて分明村と曰ふ。〈分明を佐夜氣悉と謂ふ。〉今、訛りて狭山郷と謂ふ。

三根郡

【本文】

三根郡。郷陸所。〈里(69)十七。〉駅壹所。〈小路。〉

昔者。此郡与_二神埼郡_一。合為_二一郡_一。然海部直鳥。請分_二三根郡_一。即緣_二神埼₍₇₀₎郡三根村之名_一。以為_二郡名_一。

物部郷。〈在_二郡南_一〉。

此郷之中。有_二神社_一。名曰_二物部経津主之神_一。曩者。小墾田宮御宇₍₇₁₎豐御食炊屋姫天皇。令_三來目₍₇₂₎皇子為_二將軍_一。遣_レ征_二伐新₍₇₃₎羅_一。于₍₇₄₎時。皇子奉_レ勅。到_二於筑紫_一。乃遣_二物部若宮部_一。立_二社此村_一。鎮_二祭其神_一。因曰_二物部郷_一。

漢部郷。〈在_二郡北₍₇₅₎〉。

昔者。來目皇子。為_レ征_二伐₍₇₆₎新羅_一。勒_二忍海漢人_一。將來居_二此村_一。令_レ造_二兵器_一。因曰_二漢部郷_一。

米多郷。〈在_二郡南_一〉。

此郷之中有_レ井。名曰_二米多井_一。水味鹹₍₇₇₎。曩者。海藻生_二於此井之底_一。纏向日代宮御宇₃天皇。巡狩之時。御_二覽井底之海藻_一。即勅賜_レ名。曰_二海藻生井_一。今訛₍₇₈₎米多井_一。以為_二郷名_一。

【校異】

(69) 里——底本・南本・板本・新考・校本・山本「里」ノ下に「一」ナシ。神本「一」アリ。

(70) 埼——底本「埼」、南本・板本「崎」、校本・山本「埼」ニ作ル。新考「崎」ノ右傍ニ「埼」ト記ス。校本等ニヨリ通用字ニ改ム。

(71) 御宇——底本・南本・板本・新考・校本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。

(72) 令來目——底本・南本「今於因」ニ誤ル。板本・新考・校本・山本「令來目」ニ作ル。

(73) 新——底本・南本「雜」ニ誤ル。南本頭注ニ「雜、應作新」ト記ス。板本・新考・校本・山本「新」ニ作ル。

- (74) 于―底本・校本「干」ニ誤ル。南本・板本・新考・神本・山本「于」ニ作ルニヨリ改ム。
- (75) 北―底本「比」ニ誤ル。南本・校本・山本「北」、板本「南」ニ作ル。新考「南」ノ右傍ニ「北」ト記ス。南本・校本ニヨリ改ム。
- (76) 伐―底本・板本・新考・校本・神本・山本「伐」。南本「代」ニ誤ル。
- (77) 鹹―底本「鹹」、南本・板本・新考・校本・山本「鹹」ニ作ル。南本等ニヨリ改ム。
- (78) 訛―底本・南本・板本・新考・神本コノ下ニ「謂」ノ字ナシ。校本「例ニヨリ補フ」トスルモ、底本ノママトス。山本「謂」アリ。

【訓読】

三根郡。郷は陸所。へ里は一十七。駅は壹所へ小路。なり。

昔者、此の郡と神埼郡と、合せて一つの郡為りき。然るに、海部直鳥、請ひて三根郡を分ち、即ち、神埼郡の三根村の名に縁りて、以て郡の名と為せり。

物部郷。へ郡の南に在り。

此の郷の中に神の社有り。名を物部経津主の神と曰ふ。曩者、小墾田宮に御宇しめしし豊御食炊屋姫天皇、來目皇子を將軍と為して、新羅を征伐たしむ。時に、皇子、勅を奉りて、筑紫に到り、乃ち、物部若宮部を遣して、社を此の村に立てて、其の神を鎮め祭らしむ。因りて物部郷と曰ふ。

漢部郷。へ郡の北に在り。

昔者、來目皇子、新羅を征伐たむと為て、忍海漢人に勒せて、將來て此の村に居ゑて、兵器を造らしめたまふ。因りて漢部郷と曰ふ。

米多郷。へ郡の南に在り。

此の郷の中に井有り。名を米多井と曰ふ。水の味は鹹し。曩者、海藻、此の井の底に生ひたりき。纏向日代宮に御宇

しめしし天皇、巡り狩しし時、井の底の海藻を御覧して、即ち、勅して名を賜ひて、海藻生ふる井と曰ふ。今、米多井と訛りて以て郷の名と為せり。

神埼郡

【本文】

神埼(79)郡。郷玖所。〈里廿(80)六〉。驛壹所(81)。烽壹所。寺壹所。〈僧寺〉。

昔者。此郡有荒神。往來之人。多被殺害。纏向日(82)代宮御宇(83)天皇。巡狩之時。此神和平(84)。自尔以来。無更有殃(85)。因曰神埼(79)郡。

三根郷。〈在郡西〉。

此郷有川。其源出郡北山。南流入海。有二年魚。同天皇行幸之時。御船從其川湖(86)来。

御宿此村。天皇勅曰。夜裏(87)御寐。甚有安穩。此村可謂天皇御寐安村。因名御寐。今改寐字為根。

船帆郷。〈在郡西〉。

同天皇巡行(88)之時。諸氏人等。舉落乘(89)船。舉帆參集於三根川之(90)津。供奉天皇。因曰船帆郷。又御船沈石四顆。存乎(91)其津邊。此中一顆。〈高六尺。径(92)五尺〉。一顆。〈高八尺。径(92)五尺〉。無子婦女。就此二石。恭禱祈者。必得二任(93)產。一顆。〈高四尺。径(92)五尺〉。一顆。〈高三尺。径(92)四尺〉。亢(94)旱之時。就此二石。雩并祈者。必為雨(95)落。

蒲田郷。〈在_二郡西_一。〉

同天皇行幸之時。御_二宿此郷西_一(96)。薦_二御膳_一之(97)時。蠅甚多鳴。其聲大囂。天皇勅云。蠅聲甚囂。因曰_二囂郷_一。今謂_二蒲田郷_一訛也。

琴木岡。〈高二丈周五十丈。在_二郡南_一。〉

此地平原。元来無_レ岡。大足彦天皇勅曰。此地之形。必可_レ有_レ岡。即令_二群臣_一(98)。起_二造此岡_一。造畢之時。登_レ岡宴賞。興闌之後。豎_二其御琴_一。々(99)化_二為樟_一。〈高五尺。周三丈。〉因曰_二琴木岡_一。宮處郷。〈在_二郡西南_一。〉

同天皇行幸之時。於_二此村_一奉_二造行宮_一。因曰_二宮處郷_一。

【校異】

(79) 埼——底本「琦」、南本「崎」、板本・校本・山本「埼」ニ作ル。板本・新考・校本ニヨリ通用字ノ「埼」ニ改ム。

(80) 廿——底本・校本・神本・山本「廿」、南本・板本・新考「二十」ニ作ル。

(81) 烽臺所——底本・山本ニ記載アリ。南本・板本缺ク。新考「△△△」ノ右傍ニ「烽臺所」ト記ス。校本ハ本文ニ補フ。

(82) 日——底本・板本・新考・校本・神本・山本ニアリ。南本缺ク。

(83) 御宇——底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。

(84) 平——底本・山本「平」ニ誤ル。南本・板本・新考・校本ニヨリ改ム。

(85) 殃——底本・南本「挾」ニ誤ル。板本「悚」ニ作ル。新考「狹」ノ右傍ニ「殃」ト記ス。校本、『新考』ニヨリ「殃」ニ改ム。神本・山本ニヨリ改ム。

(86) 湖——底本・南本・校本・神本・山本「湖」ニ作ル。板本「瀬」ニ作ル。新考「瀬」ノ右傍ニ「湖」ト記ス。

(87) 裏——底本・南本「裏」ニ近イ字ニ作ル。板本「素」ニ作ル。新考「」ノ右傍ニ「裏」ト記ス。校本『新考』ニヨリ改ムトス。神本・山本「裏」ニ作ル。神本・山本ニヨリ改ム。

(88) 行——底本・山本「行」、南本・板本・新考「狩」、校本・神本「幸」ニ作ル。

(89) 乘——底本・南本・板本・校本「葉」ニ作ル。新考「葉」ノ右傍ニ「乘」ト記ス。神本・山本「乘」ニ作ル。神本・山本ニヨリ改ム。

- (90) 之―底本・南本・校本・神本・山本「之」ノ字アリ。板本ナシ。新考「△」ノ右傍ニ「之」ト記ス。
- (91) 乎―底本ハ小字、南本・校本・神本・山本ハ大字デ記ス。板本・新考ニハナシ。大系本「南により削る」トアルハ誤。南本・校本ニヨリ大字ニ改ム。
- (92) 徑―底本・南本・校本・神本・山本「徑」、板本「經」ニ作ル。新考「經」ノ右傍ニ「徑」ト記ス。
- (93) 任―底本・山本「任」、南本・板本・新考・校本・神本「妊」ニ作ル。
- (94) 亢―底本「亢」ノ如キ字ヲ記シ、右傍ニ「凡」ト注ス。南本・板本・新考・校本・神本・山本「亢」ニ作ルニヨリ改ム。
- (95) 兩―底本・南本「兩」ニ誤ル。南本頭注ニ「兩、應作雨」ト記ス。板本等ニヨリ改ム。
- (96) 西―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本ニアリ。大系本、文例ニヨリ下ノ「薦」ノ誤写重記トシテ削ル。是ナルガ如キモ暫ク原字ヲ存ス。
- (97) 之―底本・南本・山本「薦」ノ下ニ記ス。板本・新考・校本・神本「御膳」ノ下ニ記ス。大系本「『薦』の上にある」ト記スハ誤。板本等ニヨリ改ム。
- (98) 臣―底本・南本・校本・山本「下」ニ作ル。板本・新考「丁」ニ作ル。大系本「或は『臣』の略書体とすべきか。」トアルニ神本従フ。神本ニヨリ改ム。
- (99) 々―底本・板本・新考・山本「々」、南本・校本・神本「琴」ニ作ル。

【訓読】

神埼郡。郷は玖所。〔里は廿六。〕驛は壹所。烽は壹所。寺は壹所〔僧の寺。〕なり。

昔者、此の郡に荒ぶる神有り。往來の人、多に殺害されき。纏向日代宮に御宇しめしし天皇、巡り狩しし時、此の神和平ぎき。尔より以来、更、殃有ること無し。因りて神埼郡と曰ふ。

三根郷。〔郡の西に在り。〕

此の郷に川有り。其の源は郡の北の山より出で、南に流れて海に入る。年魚有り。同じき天皇、行幸しし時、御船、其の川の湖より来て、此の村に宿りましき。天皇、勅してのたまひしく、「夜裏は御寐、甚安穩かりき。此の村は天皇の御寐安村と謂ふべし。」とのたまふ。因りて御寐と名づく。今、寐の字を改めて根と為せり。

船帆郷。〔郡の西に在り。〕

同じき天皇、巡行しし時、諸の氏人等、落舉りて船に乗り、帆を舉げて三根川の津に參集ひて、天皇に供へ奉りき。

因りて船帆郷と曰ふ。又、御船の沈石四顆、其の津の邊に存り。此の中の一顆は、へ高さは六尺、径は五尺なり。一顆は、へ高さは八尺、径は五尺なり。子無き婦女、此の二つの石に就きて、恭び禱祈らば、必ず任産むことを得。一顆は、へ高さは四尺、径は五尺。一顆は、へ高さは三尺、径は四尺。亢旱の時、此の二つの石に就きて雩し、并せて祈らば、必ず雨落る。

蒲田郷。へ郡の西に在り。

同じき天皇、行幸しし時、此の郷の西に宿りましき。御膳を薦めまつりし時、蠅、甚多に鳴き、其の聲、大きく囂しかりき。天皇、勅云りたまひしく、「蠅の聲、甚囂し。」とのたまふ。因りて囂郷と曰ふ。今、蒲田郷と謂ふは訛れるなり。

琴木岡。へ高さは二丈、周りは五十丈。郡の南に在り。

此の地は平原にして、元来岡無かりき。大足彦天皇、勅曰たまひしく、「此の地の形、必ず岡有るべし。」とのたまふ。即ち群臣に令せて、此の岡を起し造らしむ。造り畢へし時、岡に登りて宴賞したまふ。興、闌ぎし後、其の御琴を豎てたまひしに、琴、樟と化為りき。へ高さは五尺、周りは三丈。因りて琴木岡と曰ふ。

宮處郷。へ郡の西南に在り。

同じき天皇、行幸しし時、此の村に行宮を造り奉りき。因りて宮處郷と曰ふ。

佐嘉郡 【本文】

佐嘉郡。郷陸所。〔里一(100)十九。〕驛壹所。寺壹所(101)。

昔者。樟樹一株。生_二於此村_一。幹枝秀高。莖葉(102)繁(103)茂。朝日之影。蔽_二杵嶋郡蒲川山_一。暮日之影。蔽_二養父郡草横(104)山_一也。日本武尊巡幸之時。御_レ覽樟(105)茂榮_一。勅(106)曰(107)。此国可_レ謂_二榮国_一。因曰_二榮郡_一。後改(108)号_二佐嘉郡_一。一云。郡西有_レ川。名曰_二佐嘉川_一。年(109)魚有_レ之。其源出_二郡北(110)山_一。南流入_レ海。此(111)川上有_二荒神_一。来(112)之人。生_レ半殺_レ半(113)。於_レ茲。縣主等祖大荒田占(114)問。于(115)_レ時。有_二土蜘蛛。大山田女。狭(116)山田女_一。二女子云。取_二下田村之土_一。作_二人形。馬形_一。祭_二祀此神_一。必有_二應和_一。大荒田即隨_二其辞_一祭_二此神_一。々(117)歆_二此祭_一。遂應和之。於_レ茲。大荒田云。此婦如_レ是實賢女。故以_二賢女_一。欲_レ為_二国名_一。因曰_二賢女郡_一。今謂_二佐嘉郡_一訛也。又此川上有_二石神_一。名曰_二世田姫_一。海神年常。〔謂_二鰐魚(118)_一。〕逆_レ流潛上。到_二此神所_一。海底小魚。多相從之。或人畏_二其魚_一者無_レ殃。或人捕食者有_レ死。凡此魚等。住_二二三日_一。還而入_レ海。

【校異】

- (100) 一―底本・校本・神本・山本「一」アリ。南本・板本・新考ナシ。
(101) 所―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本コノ下ニ記述ナシ。神本「卷首ノ注ト文例ニヨレバ、コノ下ニ『僧寺』トアルベキカ。」トス。
(102) 葉―底本・南本・板本・山本ナシ。新考「△」ノ右傍ニ「葉」ト記ス。校本「『新考』ニヨリ補フ。」トス。神本「葉」アリ。
(103) 繁―底本「繁」、南本・板本・新考・校本・神本・山本「繁」ニ作ル。南本等ニヨリ通用字ニ改ム。
(104) 横―底本・南本・板本・校本・神本・山本「横」ニ作ル。新考ハ「穗」ノ誤力、トス。
(105) 樟―底本・南本・板本・校本・神本・山本アリ。新考「△」ノ右傍ニ「樟」ト記ス。
(106) 勅―底本・南本・校本・神本・山本アリ。板本ナシ。新考「△」ノ右傍ニ「勅」ト記ス。

- (107) 日―底本・南本・校本・山本ナシ。板本・新考「日」アリ。神本『新考』ニヨリ補フ。」トスルニ従フ。
- (108) 改―底本・板本・新考・校本・神本・山本「改」。南本「故」ニ誤ル。
- (109) 年―底本・板本・校本・神本・山本「年」。南本「并」ニ誤ル。
- (110) 北―底本「比」ニ誤ル。南本・板本・新考・校本・神本・山本「北」ニ作ルニヨリ改ム。
- (111) 此―底本・南本・板本「山」ニ作ル。新考「山」ノ右傍ニ「此」ト記ス。校本『新考』ニヨリ改ム、神本・山本「此」ニ作ル。
- (112) 来―底本・南本・山本「来」ノ上ニ「往」ノ字ナシ。板本・新考・校本・神本「往」アリ。校本「神本按ニヨリ補」トス。
- (113) 生半殺半―底本・南本・神本・山本「生半殺半」、板本・新考・校本「半生半殺」ニ作ル。
- (114) 占―底本・南本「古」ニ誤ル。板本・新考・校本・神本・山本「占」ニ作ル。校本「宗本ニヨリ改ム」トス。大系本「南による。」ト記スハ誤。
- (115) 于―底本・校本「干」ニ誤ル。南本・板本・新考・神本・山本「于」ニ作ル。
- (116) 狹―底本・板本・新考・校本・神本・山本「狭」、南本「挟」ニ作ル。
- (117) 々―底本・山本「々」、南本・板本・新考・校本・神本「神」ニ作ル。
- (118) 謂鱈魚―底本・板本・新考・校本・神本・山本「海神年常」ノ分注トス。校本頭注ニ「異本ニ『海神ノ分註トス』トアリ」ト注ス。纂註・全集本ハ「海神」ノ分注トス。

【訓読】

佐嘉郡。郷は陸所。へ里は一十九。驛は壹所。寺は壹所なり。

昔者、樟樹一株、此の村に生ふ。幹と枝秀高く、莖と葉繁茂り、朝日の影、杵嶋郡の蒲川山を蔽ひ、暮日の影、養父郡の草横山を蔽へり。日本武尊、巡り幸しし時、樟の茂り榮えたるを覽まして、勅曰りたまひしく、「此の国は榮国と謂ふべし。」とのたまふ。因りて榮郡と曰ふ。後に改めて佐嘉郡と号く。一云へらく、郡の西に川有り。名を佐嘉川と曰ふ。年魚有り。其の源は郡の北の山より出て、南に流れて海に入る。此の川上に荒ぶる神有り。来たる人の半を生かし、半を殺しき。茲に、縣主等の祖大荒田占問ひき。時に、土蜘蛛、大山田女・狭山田女有り。二の女子の云ひしく、「下田村の土を取りて、人形・馬形を作りて、此の神を祭祀らば、必ず應和ぎなむ。」といふ。大荒田、即

ち其の辞の隨に此の神を祭る。神、此の祭を歆けて、遂に應和ぎき。茲に、大荒田云ひしく、「此の婦、如是、實に賢女なり。故、賢女を以て、国の名と為むと欲ふ。」といふ。因りて賢女郡と曰ふ。今、佐嘉郡と謂ふは訛れるなり。又、此の川上に石神有り。名を世田姫と曰ふ。海の神年常に、鰐魚を謂ふ。流れに逆ひて潜り上りて、此の神の所に到るに、海の底の小魚、多に相從ふ。或るは、人、其の魚を畏めば殃無く、或るは、人、捕り食へば死ぬること有り。凡て此の魚等、二三日住まり、還りて海に入る。

小城郡

【本文】

小城郡。郷漆所。〈里廿(119)〉驛壹所。烽(120)壹所。
昔者。此村有_二土蜘蛛_一。造_レ堡隱之。不_レ從_二皇命_一。日本武尊巡幸之日。皆悉誅之。因号_二小城郡_一。

【校異】

(119) 廿―底本・校本・神本・山本「廿」、南本・板本・新考「二十」ニ作ル。
(120) 烽―底本「矚」ノ如キ字ニ誤ル。南本・板本・新考・校本・神本・山本「烽」ニ作ルニヨリテ改ム。

【訓読】

小城郡。郷は漆所。〈里は廿。〉驛は壹所。烽は壹所なり。
昔者、此の村に土蜘蛛有り。堡を造りて隠り、皇命に従はず。日本武尊、巡り幸しし日、皆悉に誅ひたまふ。因りて小城郡と号く。

松浦郡

【本文】

松浦郡。郷壹拾壹所。〔里廿(121)六。〕驛伍所。烽捌所。

昔者。氣長足姫尊。欲_三征_二伐新羅_一。行_二於此郡_一。而進_二食於(122)玉嶋小河(123)之側_一。於_レ茲。皇后勾_レ針為_レ鈎(124)。飯粒為_レ餌。裳絲為_レ縵。登_二河中之石_一。捧_レ鈎(124)祝曰。朕欲_下征_二伐新羅_一。求_中彼財寶_上。其事成_レ功凱旋者。細鱗之魚。吞_二朕鈎(124)縵_一。既而投_レ鈎(124)。片時。果得_二其魚_一。皇后曰。甚希見物。〔希見。謂_二梅豆羅志_一。〕因曰_二希見國_一。今訛謂_二松浦郡_一。所以。此国婦女。孟夏四月。常以_レ針釣_二之(125)年魚_一。男夫雖(126)釣。不_レ能獲(127)之。

鏡渡。〔在_二郡北(128)_一。〕

昔者。檜隈廬入野宮御宇(129)武小廣國押楯天皇之世。遣_二大伴狹手彦連_一。鎮_二任那之國_一。兼救_二百濟之國_一。奉_レ命到来。至_二於此村_一。即娉_二篠原村。〔篠。謂_二志弩(130)_一。〕帥(131)弟日姫子_一成_レ婚。〔_下日(132)部君等祖也。〕容貌(133)美麗。特絶_二人間(134)_一。分別之日。取_レ鏡與_レ婦。々(135)含_二悲涕(136)_一。渡_二栗川_一。所(137)与_レ之鏡。緒絶沈_レ川。因名_二鏡渡_一。

【校異】

- (121) 廿―底本・校本・神本・山本「廿」、南本・板本・新考「二十」ニ作ル。
(122) 於―以下「裳」マデノ二十字、底本ハ脱シテ右傍ニ細字デ補フ。南本・板本・新考・校本・神本・山本ハ本文ニアリ。
(123) 河―底本・板本・新考・校本・神本・山本「河」。南本「何」ニ誤ル。
(124) 鈎―底本・南本・校本「鈎」、板本・山本「鉤」、新考「鉤」ニ作ル。板本ニヨリ改ム。神本「鉤」トシ、「神功皇后撰政前紀ニヨリ改ム」トス。
(125) 之―底本・南本・神本・山本アリ。板本・新考ナシ。校本「之」ヲ「衍ナラン」トスレド、神本「原ノママトスル」ニ従フ。

- (126) 雖—底本・校本・神本・山本「雖」。南本・板本「羅」ニ誤ル。新考「羅」ノ右傍ニ「雖」ト記ス。
 (127) 獲—底本・校本・神本・山本「獲」。南本・板本「羅」ニ誤ル。新考「羅」ノ右傍ニ「獲」ト記ス。
 (128) 北—底本「比」ニ誤ル。南本・板本・新考・校本・神本・山本ニヨリ改ム。
 (129) 御宇—底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。
 (130) 弩—底本「弩師」、南本「奴師」、板本「奴」、校本・神本・山本「弩」ニ作ル。
 (131) 帥—底本・南本ハ直前分注ニ「師」ト記ス。大系本ハ「師」ヲ衍トスルガ、校本「神本ニヨリ改ム」トスルニ従フ。板本「帥」ナシ。山本「帥」ヲ衍字トス。
 (132) 早—底本・校本・神本「早」、南本・板本・新考・山本「日下」ニ作ル。
 (133) 貌—底本「貌」ニ誤ル。南本等ニヨリ改ム。
 (134) 間—底本・板本・新考・校本・神本・山本「間」。南本「門」ニ誤ル。
 (135) 々—底本・板本・新考・山本「々」、南本・校本・神本「婦」ニ作ル。
 (136) 滯—底本・校本・神本・山本「滯」、南本・板本「啼」ニ作ル。新考「啼」ノ右傍ニ「滯」ト記ス。
 (137) 所—底本・南本「可」、板本・新考・校本・神本・山本「所」ニ作ル。校本「神本按ニヨリ改ム」トス。板本等ニヨリ改ム。

【訓読】

松浦郡。郷は壹捨壹所。へ里は廿六。驛は伍所。烽は捌所なり。

昔者、氣長足姫尊、新羅を征伐たむと欲して、此の郡に行でまして、玉嶋の小河の側に進食したまふ。茲に、皇后、針を勾げて鉤と為し、飯粒を餌と為し、裳絲を繒と為して、河中の石に登りて、鉤を捧げて祝曰ひたまひしく、「朕、新羅を征伐ちて、彼の財寶を求めまくと欲す。其の事、功成りて凱旋らむは、細鱗の魚、朕が鉤繒を呑め。」とのたまふ。既にして鉤を投げたまふに、片時にて、果して其の魚を得たまふ。皇后、曰りたまはく、「甚、希見しき物なり。希見を梅豆羅志と謂ふ。」とのたまふ。因りて希見國と曰ふ。今、訛りて松浦郡と謂ふ。所以に、此の国の婦女、孟夏四月には常に針を以て年魚を釣る。男夫は釣ると雖も、獲ること能はず。

鏡渡。^{かがみのわたり}。〈郡の北に在り。〉

昔者、檜隈廬入野宮に御宇しめしし武小廣國押楯天皇のみ世、大伴狹手彦連を遣はして、任那の國を鎮め、兼、百濟の國を救はしめたまふ。命を奉りて到り来て、此の村に至る。即ち篠原村（篠は志弩と謂ふ。）の弟日姫子を娉ひて、婚を成しき。〈日下部君等の祖なり。〉容貌美麗しく、特に人間に絶れたり。分別るる日、鏡を取りて婦に與へき。婦、悲しみ涕を含み、栗川を渡るに、与へられし鏡、緒絶へて川に沈みき。因りて鏡渡と名づく。

【本文】

褶振峯。〈在二郡東峰（138）家（139）一。名曰二褶振峰（140）一。〉

大伴狹手彦連。發船渡二任那一之時。弟（141）日姫子。登レ此用レ褶振招。因名二褶振峯（142）一。然弟（143）日姫子。与二狹手彦連一相分。經二五日一之後。有レ人毎レ夜来。与レ婦共寢。至レ曉早歸。容止形貌（144）。

似二狹手彦一。婦抱二其恠（145）一。不レ得二忍默一。竊用二續（146）麻一。繫二其人欄（147）一。随レ麻尋往。到二此峯頭之沼邊一。有二寢蛇一。身人而沈二沼底一。頭蛇而臥二沼脣（148）一。忽化二為人一。即語（149）云。

志怒波羅能 意登比賣能古素 佐比登由母 為祢弓牟志太夜 伊幣尔久太佐牟也。

于（150）レ時。弟日姫子之從女。走告二親族一。々々（151）發レ衆。昇而看之。蛇并弟日姫子。並亡（152）不レ存。於レ茲。見二其沼底一。但有二人屍一。各（153）謂二弟日女（154）子之骨一。即就二此峯南一。造レ墓治（155）置。其墓見在。

【校異】

- (138) 烽——底本・南本・校本・神本・山本「烽」、板本「峰」、新考「峰」ノ右傍ニ「烽」ト記ス。
- (139) 家——底本・山本「家」、南本「冢」、板本「冢」、新考「冢」ノ右傍ニ「家」ト記ス。校本・神本「處」ニ作ル。イズレノ字デモ通ズルガ底本ノママトス。
- (140) 烽——底本・南本・校本・神本・山本「烽」、板本「峯」、新考「峯」ノ右傍ニ「烽」ト記ス。
- (141) 弟——底本・南本・山本ナシ。板本・新考・校本・神本アリ。校本「欄本按ニヨリ補」トス。下文「弟日姫子」トスルニヨリ補フ。
- (142) 峯——底本・校本・神本「峯」、板本・新考・山本「峰」ニ作ル。南本「峰」ニ誤ル。
- (143) 弟——底本・板本・新考・校本・神本・山本「弟」。南本「茅」ニ誤ル。
- (144) 貌——底本「猊」、南本・板本・新考・校本・神本・山本「貌」ニ作ル。南本等ニヨリ改ム。
- (145) 佐——底本・校本・神本・山本「佐」、南本・板本・新考「怪」ニ作ル。
- (146) 續——底本・南本・校本・山本「續」、南本・板本・新考・神本「續」ニ作ル。校本「京本『續』ニ作ル」トアリ。
- (147) 欄——底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「欄」ニ作ル。大系本「南『欄』」トスルハ誤。
- (148) 脣——底本「脣」ニ作リ、右傍ニ「唇」ト注ス。南本「唇」、板本「壠」。新考「塵」ノ右傍ニ「脣」ト記ス。校本・神本「脣」、山本「唇」ニ作ル。
- (149) 語——底本・南本・校本・神本・山本「語」、板本「語」、新考「語」ノ右傍ニ「語」ト記ス。
- (150) 干——底本・校本「干」ニ誤ル。南本・板本・新考・神本・山本ニヨリ改ム。
- (151) 々々——底本・板本・新考・山本「々々」、南本・校本・神本「親族」ニ作ル。
- (152) 亡——底本・山本「已」、南本・板本・新考・校本・神本「亡」ニ作ル。
- (153) 各——底本・南本「名」ニ誤ル。板本・新考・校本・神本・山本「各」ニ作ル。校本「宗本ニヨリ改ム」トス。板本等ニヨリ改ム。
- (154) 女——底本・南本・板本・神本・山本「女」ニ作ル。新考「女」ノ右傍ニ「姫」ト記ス。校本「姫」ニ改ムル注記アルモ校異注ノ記号ヲ脱ス。
- (155) 治——底本・板本・新考・校本・神本・山本「治」、南本「沼」ニ誤ル。

【訓読】

褶振峯。〔郡の東に烽家あり。名を褶振峯と曰ふ。〕

大伴狭手彦連、發船して任那に渡りし時、弟日姫子、此に登りて褶を用ちて振り招きき。因りて褶振峯と名づく。然して、弟日姫子、狭手彦連と相分れて五日を経した後、人有り、夜毎に来て、婦と共に寝ね、曉に至りて早に帰る。容止形貌、狭手彦に似たり。婦、其を恠しと抱ひて、忍默すること得ず。竊に續麻を用て、其の人の欄に繫げ、麻の

隨に尋め往きて、此の峯の頭の沼の邊に到りて、寢たる蛇有り。身は人にして沼の底に沈み、頭は蛇にして沼の脣に臥す。忽ち人と化爲りて、即ち語りて云ひしく、
志怒波羅能 意登比賣能古素 佐比登由母 爲祢旦牟志太夜 伊幣尔久太佐牟也。
時に、弟日姫子の從女、走りて親族に告げしかば、親族、衆を發して、昇り看るに、蛇と弟日姫子と、並びに亡せて存らず。茲に、其の沼の底を見るに、但、人の屍のみ有り。各、弟日女子の骨と謂ふ。即ち此の峯の南に就きて、墓を造りて治め置きき。其の墓見に在り。

【本文】

賀周里。〈在二郡西北一。〉

昔者。此里有二土蜘蛛^一。名曰二海松樞媛^一。纏向日代宮御宇⁽¹⁵⁶⁾天皇巡^レ國之時。遣二陪從大屋田子^一

〈早⁽¹⁵⁷⁾部君等祖也。〉誅滅。時霞四含⁽¹⁵⁸⁾。不^レ見二物色^一。因曰二霞里^一。今謂二賀周里^一訛之也。

逢鹿駅。〈在二郡西北一。〉

曩者。氣長足姫尊。欲^三征^二伐新羅^一。行幸之⁽¹⁵⁹⁾時。於二此道路^一。有^レ鹿遇之。因名二遇鹿驛^一。々⁽¹⁶⁰⁾

東海。有^二蛇螺鯛海藻海松等^一。

登望駅。〈在二郡西⁽¹⁶¹⁾一。〉

昔者。氣長足姫尊。到^二於此處^一。留為二雄裝⁽¹⁶²⁾一。御負⁽¹⁶³⁾之韉。落^二於此村^一。因号二韉駅^一。々⁽¹⁶⁴⁾

東西之海。有^二蛇螺鯛雜魚海藻海松等^一。

大家嶋(165)。(在二郡西一。)

昔者。纏向日代宮御宇(156)天皇。巡幸之時。此村有_二土蜘蛛_一。名曰_二大身_一。恒(166)拒(167)皇命_一。不肯_レ降服(168)。_一。天皇勅命誅滅。自_レ尔以来。白水郎等。就_二於此嶋(165)_一。造_レ宅居之。因曰_二大家郷(169)_一。々々(170)南有_レ窟。有_二鐘乳(171)及木蘭_一。廻縁之海。蛇(172)。螺(173)。鯛。雜魚。及海藻。海松多之。

【校異】

- (156) 御宇——底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。
(157) 早——底本・校本・神本「早」、南本・板本・新考・山本「日下」ニ作ル。
(158) 舍——底本・板本・校本・神本・山本「舍」、南本「舍」ニ作ル。新考「舍」ノ右傍ニ「合」ト記ス。
(159) 之——底本・南本・板本・新考・校本・山本ナシ。神本「秋本氏本『文例により補う。』」トシテ「之」ヲ補フニ従フ。
(160) 々々——底本・板本・新考・山本「々」、南本・校本・神本「驛」ニ作ル。
(161) 西——底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「西」ニ作ル。新考「西の下に北の字ありしが落ちたるなむ」ト注ス。
(162) 装——底本「装」、南本「将」、板本・新考・校本・神本・山本ニヨリ改ム。
(163) 負——底本・南本・校本・神本・山本「負」、板本「臂」、新考「臂」ノ右傍ニ「負」ト記ス。
(164) 々々——底本・山本「々」、南本・板本・新考・校本・神本「驛」ニ作ル。
(165) 嶋——底本・校本・神本「嶋」、南本・板本・新考・山本「島」ニ作ル。
(166) 恒——底本・南本・板本・新考・校本・神本アリ。山本ナシ。
(167) 拒——底本・南本ナシ。板本・校本「拒」アリ。新考「拒」ヲ補フ。校本「新考ニヨリ補フ」トスルニ神本従フ。
(168) 服——底本・南本・校本・神本・山本「服」、板本「伏」、新考「伏」ノ右傍ニ「服」ト記ス。
(169) 郷——底本・南本・校本・神本・山本「郷」、板本・新考「嶋」ニ作ル。
(170) 々々——底本・山本「々」、南本・校本・神本「郷」、板本・新考「嶋」ニ作ル。
(171) 乳——底本「乳」ニ誤ル。南本等ニヨリ改ム。
(172) 蛇——底本「」、南本「蛇」、板本・新考・校本・神本・山本「蛇」ニ作ル。神本「猪本『蛇』」トスルハ誤。

【訓読】

賀周里。（郡の西に在り。）

昔者、此の里に土蜘蛛有り。名を海松樞媛と曰ふ。纏向日代宮に御宇しめしし天皇、國を巡りましし時、陪從、大屋田子（日下部君等の祖なり。）を遣はして、誅ひ滅ぼさしめたまふ。時に、霞、四もを含みて、物の色見えざりき。因りて霞里と曰ふ。今、賀周里と謂ふは訛れるなり。

逢鹿駅。（郡の西北に在り。）

曩者、氣長足姫尊、新羅を征伐たむと欲して、行幸しし時、此の道路に鹿有りて遇ひき。因りて遇鹿驛と名づく。驛の東の海に、蛇・螺・鯛・海藻・海松等有り。

登望駅。（郡の西北に在り。）

昔者、氣長足姫尊、此處に到りまして、留まりて雄の装を為たまふに、御負の鞆、此の村に落ちき。因りて鞆駅と名づく。駅の東と西の海に蛇・螺・鯛・雑魚・海藻・海松等有り。

大家嶋。（郡の西に在り。）

昔者、纏向日代宮に御宇しめしし天皇、巡り幸しし時、此の村に土蜘蛛有り。名を大身と曰ふ。恒に皇命に拒へて、降服ひ肯へざりき。天皇、勅命して誅ひ滅ぼしたまふ。尔より以来、白水郎等、此の嶋に就きて、宅を造りて居めり。因りて大家郷と曰ふ。郷の南に窟有り。鐘乳、及、木蘭有り。廻縁の海に、蛇・螺・鯛・雑魚、及、海藻・海松多し。

【本文】

值嘉鄉(174)。〈在二郡西南之海中一。有二烽家(175)三所一。〉

昔者。同天皇巡幸之時。在志式嶋(176)之行宮一。御覽西海一。々(177)中有嶋。烟氣多覆。勒(178)陪從阿曇(179)連百足一。遣令察之。爰(180)有八十餘一。就中二嶋。々(181)別有レ人。第一嶋名(182)小近。土蜘蛛大耳居之。第(183)二嶋名大近。土蜘蛛垂耳居之(184)。自餘之嶋。並人不レ在。於茲。百足獲二大耳等一奏聞。天皇勅。且令誅殺一。時大耳等。叩頭陳聞曰。大耳等之罪。實當二極刑一。萬(185)被戮殺一。不足塞罪。若降二恩(186)情一。得二再生一者。奉造御贄一。恒貢二御膳一。即取二木皮一作二長炮。鞭(187)炮。短炮。陰炮。羽割炮等之樣一。獻二於御所一。於茲。天皇垂レ恩赦放。更勅云。此嶋雖レ遠。猶見レ如レ近。可レ謂二近嶋一。因曰二值嘉(188)一。嶋則有二檳榔。木蘭。枝子。木蓮子。黑葛。篁(189)。篠。木綿。荷。菟(190)一。海則有二炮。螺。鯛。鯖。雜魚。海藻。海松。雜海菜一。彼(191)白水郎。富(192)二於馬牛一。或有二一百餘近嶋(193)一。或有二八十餘近嶋(194)一。西有二泊船之停二處一。〈一處名曰二相子田(195)停一。應レ泊二廿(196)餘船(197)一。一處名曰二川原浦一。應(198)レ泊二一十餘船(199)一。〉遣唐之使。從二此停一發。到二美祢(200)良久之埼(201)一。〈即川原浦之西埼(202)。是也。〉從此發船。指レ西度之。此嶋白(203)水郎。容貌(204)似二隼(205)人一。恒好二騎射一。其言語異二俗人一也。

【校異】

(174)

郷—底本・南本・校本・神本・山本「郷」、板本・新考「嶋」ニ作ル。

- (175) 家——底本・南本・板本・新考・山本「家」、校本・神本「處」ニ作ル。校本「上例ニヨリ改ム」トス。
- (176) 嶋——底本・校本・神本「嶋」、南本・板本・新考・山本「島」ニ作ル。以下同ジ。
- (177) 々——底本・山本「々」、南本・板本・新考・校本・神本「海」ニ作ル。
- (178) 勒……遣——コノ九字、底本・南本・校本・神本・山本トモニ同ジ。板本・新考「勅遣ニ陪從阿曇連百足令察之。」トスル。
- (179) 曇——底本・南本「曇」、板本・新考・校本・神本・山本「曇」ニ作ル。校本「南本ニヨリ改ム」トスルハ誤。大系本「伴・板による。」トシテ改ム。板本等ニヨリ改ム。
- (180) 爰——底本・校本・神本・山本「爰」、南本「處」、板本・新考「島」ニ作ル。
- (181) 々——底本・山本「々」、南本「島」、板本・新考・校本・神本「嶋」ニ作ル。神本、校異注ノ位置ヲ誤。
- (182) 名——底本・板本・新考・校本・神本・山本「名」。南本「各」ニ誤ル。
- (183) 第——底本「弟」ニ誤ル。南本・板本・新考・校本・神本・山本ニヨリ改ム。
- (184) 之——底本・南本・板本・山本ナシ。新考「之」ヲ補フ。校本「新考ニヨリ補フ」トス。神本、校本ニヨリ「之」ヲ補フ。
- (185) 萬——底本・南本・校本・神本・山本「萬」、板本・新考「雖」ニ作ル。
- (186) 恩——底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「恩」。校本「原『息』トアリ南本ニヨリ改ム」トスルハ誤。
- (187) 鞭——底本・南本「鞭」、板本・新考・校本・神本・山本「鞭」ニ作ル。通用字ニ改ム。
- (188) 嘉——新考「值嘉嶋。嶋則」トシテ「嶋」ノ下ニ「嶋」ヲ補フ。校本「值嘉嶋。則」ニ作ルモ、神本ハ大系本ニヨリ「值賀。嶋則」ニ改ムニ從フ。山本「值嘉。島則」ニ作ル。
- (189) 篁——底本・校本「篁」、山本「篁」ノ如キ字ニ作ルモ、南本・板本・新考・神本ニヨリ改ム。
- (190) 覓——底本「覓」ニ作ルモ、南本・板本・新考・校本・神本・山本ニヨリ改ム。
- (191) 彼——新考「彼」ノ下ニ「嶋」ヲ補フ。諸本ナシ。
- (192) 富——底本・南本・校本・神本・山本「富」、板本「當」、新考「當」ノ右傍ニ「富」ト記ス。
- (193) 近嶋——校本「衍ナランカ」トスレド、底本・南本・釈日本紀(卷十五)所引風土記ニモ「近嶋」トアリ。ソノママトス。山本「近島」ニ作ル。
- (194) 近嶋——新考「近嶋」ノ上ニ「大」ヲ補フ。諸本ナシ。山本「近島」ニ作ル。
- (195) 田——底本・南本・校本・神本・山本「田」、板本「之」、新考「之」ノ右傍ニ「田」ト記ス。
- (196) 廿——底本・校本・神本・山本「廿」、南本「少」、板本・新考「二十」ニ作ル。校本「原『少』トアリ神本按ニヨリ改ム」トス。
- (197) 舩——底本・南本「舩」ニ誤ル。板本ニヨリ改ム。新考・山本「船」。校本「京本ニヨリ改ム」トシテ「船」トスルニ神本從フ。大系本「南『艇』」トスルハ誤。
- (198) 應——底本・南本・山本ナシ。板本・新考・校本・神本「應」アリ。校本「板本ニヨリ補フ」トス。板本等ニヨリ補フ。
- (199) 舩——底本・板本「舩」、南本「舶」、新考・校本・神本・山本「船」ニ作ル。

- (200) 柁——底本「柁」、南本「欄」、板本・新考・校本・神本「欄」、山本「弥」ニ作ル。大系本「南『欄』」トスルハ誤。
- (201) 埼——底本「埼」、南本・校本・神本・山本「埼」、板本「濟」ニ作ル。新考「濟」ノ右傍ニ「埼」ト記ス。南本・校本ニヨリ改ム。
- (202) 埼——底本・南本「埼」、板本「濟」、校本・神本・山本「埼」ニ作ル。前条ニヨリ改ム。
- (203) 白——底本・南本「曰白」ニ作ル。板本・新考・校本・神本・山本「曰」ナシ。校本「曰」ヲ「衍ナラン」トシテ削ルニ従フ。
- (204) 貌——底本「銀」ニ作ル。南本等ニヨリ改ム。
- (205) 隼——底本・南本・板本・新考・神本・山本「隼」ニ作ル。校本「隼」ニ作ルハ誤。

【訓読】

値嘉郷。〈郡の西南の海の中に在り。烽火三所有り。〉

昔者、同じき天皇、巡り幸しし時、志式嶋の行宮に在して、西の海を御覽すに、海の中に嶋有り。烟氣多に覆へり。

陪從、阿曇連百足に勅せて、察しめたまふ。爰に八十餘り有り。就中の二つの嶋、嶋別に人有り。第一の嶋の名は小

近、土蜘蛛大耳居み、第二の嶋の名は大近、土蜘蛛垂耳居めり。自餘の嶋、並に人在らざりき。茲に、百足、大耳等

を獲へて奏聞しき。天皇、勅して、誅ひ殺さしめんとしたまふ。時に大耳等、叩頭て陳べ聞して曰はく、「大耳等

の罪、實に極刑に當れり。萬たび戮殺さるるとも、罪を塞ぐに足らじ。若し、恩情を降したまひて、再生くること得

ば、御贄を造り奉りて、恒に御膳に貢らむ。」とまをす。即ち木の皮を取りて、長蛇・鞭蛇・短蛇・陰蛇・羽割蛇

等の様を作りて、御所に献りき。茲に、天皇、恩を垂れて赦し放りたまふ。更、勅云りたまひしく、「此の嶋は遠け

ども、猶、近きが如く見ゆ。近嶋と謂ふべし。」とのたまふ。因りて値嘉と曰ふ。嶋には則ち檳榔・木蘭・枝子・木蓮子・

黒葛・篁・篠・木綿・荷・苧有り。海には則ち蛇・螺・鯛・鯖・雑魚・海藻・海松・雑海菜有り。彼の白水郎、

馬・牛に富めり。或は一百餘りの近き嶋有り。或は八十餘りの近き嶋有り。西に船を泊つる停二處あり。〈二處の名

は相子田停と曰ひ、廿餘りの船を泊つべし。一處の名は川原浦と曰ひ、一十餘りの船を泊つべし。〉遣唐の使、此の停より發

ちて、美祢良久の埼に到り、（即ち川原浦の西の埼、是なり。）此より發船して、西を指して度る。此の嶋の白水郎、容貌、隼人に似て、恒に騎射を好み、其の言語は俗人に異なり。

杵嶋郡

【本文】

杵嶋郡。郷肆所。〔里二十三。〕驛壹所。

昔者。纏向日代宮御宇（206）天皇。巡幸之時。御船泊此郡盤（207）田杵之村。于（208）時。從二船牂（209）歌（210）之穴一。洽（211）水白（212）出。一云。船泊之家（213）。自成二嶋一。天皇御覽。詔二群臣等一曰。此郡可レ謂二牂（214）歌（215）嶋（216）郡一。今謂二杵嶋郡一訛之也。郡西有二湯泉出一之。巖岸峻極（217）。人跡罕（218）及也。

孃子山。〔在二郡東北一。〕

同天皇行幸之時。土蜘蛛（219）蛛八十女。又有二此山頂一。常捍（220）二皇命一。不レ肯二降服（221）一。於レ茲。遣レ兵掩滅。因曰二孃子山一。

【校異】

（206）

御宇―底本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ。南本闕字トス。

（207）

盤―底本・南本・校本・神本・山本「盤」、板本・新考「磐」ニ作ル。底本モト「盤船泊之」ト誤記シ、「船泊之」ヲ消ス。

（208）

于―底本・南本・校本「干」ニ誤ル。板本等ニヨリ改ム。

（209）

牂―底本・南本・校本・神本・山本「牂」、板本・新考「牴」ニ作ル。

(210) 歌—底本「戎」、南本「戎」、山本「杙」ニ作ル。板本等ニヨリ改ム。校本「板本ニヨリ改ム」トス。

(211) 治—底本・南本・板本・山本「治」、校本・神本「冷」ニ作ル。新考「治」ノ右傍ニ「冷」ト記ス。校本「新考ニヨリ改ム」トスル。

(212) 白—底本・南本・山本「白」、板本・新考・校本・神本「自」ニ作ル。南本頭注ニ「白、應作自」トアルニヨリ、校本「自」ニ改ム。

(213) 家—底本・南本・山本「家」、板本・新考・校本・神本「處」ニ作ル。校本「板本ニヨリ改ム」トス。板本「一云船舶之處」ヲ割注デ記ス。

(214) 牂—底本・南本・校本・神本・山本「牂」、板本・新考「牂」ニ作ル。

(215) 歌—底本・南本「歌」、板本・新考・校本・神本・山本「歌」ニ作ル。校本「板本ニヨリ改ム」トスル。上文ニヨリ改ム。

(216) 嶋—底本・校本・神本「嶋」、南本・板本・新考・山本「島」ニ作ル。

(217) 極—底本・山本「極々」、南本「極極」、板本・校本・神本「極」ニ作ル。南本ノ頭注ニ「恐衍一極字」トアルニ従フ。校本「衍ナラン」トシテ下ノ一字ヲ削ル。

(218) 罕—底本・板本・新考・校本・神本・山本「罕」。南本「罕」ニ誤ル。

(219) 蜘蛛—底本・南本・山本ナシ。板本・新考「蜘蛛」字アルニヨリ補フ。校本「研本ニヨリ補フ」トス。神本「蜘蛛」ノ字アリ。

(220) 捍—底本・南本「掃」ニ誤ル。板本・校本・神本・山本「捍」。板本・校本・神本ニヨリ改ム。新考「掃」ノ右傍ニ「捍」ト記ス。校本「板本ニヨリ改ム」トス。

(221) 服—底本「服」ニ誤ル。南本等ニヨリ改ム。大系本「底『服』に誤る」トスルハ誤。

【訓読】

杵嶋郡。郷は肆所。へ里は一十三。驛は壹所なり。

昔者、纏向日代宮に御宇しめしし天皇、巡り幸しし時、御船、此の郡の盤田杵の村に泊てたまふ。時に、船の牂歌の穴より拾く水、白く出づ。一云へらく、船泊てし家、自ら一つの嶋と成りき。天皇、御覽して、群臣等に詔して曰はく、「此の郡は牂歌嶋郡と謂ふべし。」とのたまふ。今、杵嶋郡と謂ふは訛れるなり。郡の西に湯の泉出でたるところ有り。巖の岸、峻極しくて、人跡罕に及る。

孃子山。へ郡の東北に在り。

同じき天皇、行幸しし時、土蜘蛛八十女、又、此の山の頂に有り、常に皇命に捍ひ、降服ひ肯へざりき。茲に、兵

を遣はして掩おそひ滅ほろさしめたまふ。因よりて孃むみな子山やまと曰いふ。

藤津郡

【本文】

藤津郡 鄉肆所。〈里九。〉驛壹所。烽壹所。

昔者。日本武尊行(222)幸之時。到二於此津一。日没二西山一。御船泊之。明旦遊覽。繫二船纜(223)於大藤一。因(224)曰二藤津郡一。

能美鄉。〈在二郡東一。〉

昔者。纏向日代宮御宇(225)天皇。行幸之時。此里有二土蜘蛛三人一。〈兄名大白。次名中白。弟名少白。〉此人等造レ堡隱居(226)。不レ肯降服一。尔時。遣二陪從紀直等祖釋日子一。以且二誅滅一。於レ茲。大白等三人。但叩頭。陳二己罪(227)過一。共乞二更生(228)。因曰二能美鄉一。

託羅鄉。〈在二郡東(229)。臨レ海。〉

同天皇行幸之時。到二於此鄉一御覽。海物豐多。勅曰。地勢雖レ少。食(230)物豐足。可レ謂二豐足村一。今謂二託羅鄉一訛之也。

塩田川。〈在二郡北(231)。〉

此川之源。出二郡西南託羅之峯一。東流入レ海。潮滿之時。逆レ流沕(232)。流勢太(233)高。因(234)曰二潮高滿川一。今訛謂二塩田川一。川源有レ淵。深二許丈(235)。石壁嶮峻。周匝如レ垣。年魚多在。東邊有二

湯泉^一。能愈^二人病^一。

【校異】

222

行―底本・南本・校本・神本・山本「行」、板本・新考「巡」ニ作ル。

223

纜―底本・南本・板本・山本「覽」、校本・神本「纜」ニ作ル。新考「覽」ノ右傍ニ「纜」ト記ス。校本「宗本ニヨリ改ム」トスル。校本・神本ニヨリ改ム。

224

因―底本・板本・新考・校本・神本・山本「因」。南本「田」ニ誤ル。

225

御宇―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。

226

居―板本・新考「居」ノ下ニ「拒皇命」ノ三字アルモ、底本・南本・校本・神本・山本ナシ。

227

罪―底本「羅」ニ誤ル。南本・板本・新考・校本・神本・山本ニヨリ改ム。

228

生―底本「主」、南本「主人」、板本・新考「入奉主人」ニ作ル。校本「考證ニヨリ改ム」トシテ「生」ニ改ムニ従フ。神本ハ校本ニ従ヒ「生」トス。山本「生」ニ作ル。

229

東―底本・南本・校本・神本・山本「東」ニ作ル。新考「東」ノ上ニ「南」ヲ補ヒ「在郡南、東臨海」、大系本ハ「東」ヲ「南」ノ誤トス。

230

食―南本・板本・新考・校本・神本・山本「食」、底本「僉」ニ作り、右傍ニ「食^歟」ト注ス。南本等ニヨリ改ム。

231

北―底本「比」ニ誤ル。南本等ニヨリ改ム。

232

洄―底本・南本「細」ニ作ル。板本・新考「洄」字ナク、「潮満」トシ、頭注ニ「潮満之二字旧本作漸細。以ニ僻按改レ之。」ト注ス。校本「神本按ニヨリ改ム」トシテ「洄」トス。神本・山本「洄」ニ作ル。神本・山本ニヨリ改ム。

233

太―底本・南本・校本・神本・山本「太」、板本「大」、新考「大」ノ右傍ニ「太」ト記ス。

234

因―底本モト「因曰潮高」ノ四字ヲ脱シ、右傍ニ補フ。南本・板本・新考・校本・神本・山本ハ本文ニ作ル。

235

丈―底本・南本「大」ニ誤ル。板本「丈」、新考・校本・神本・山本「丈」ニ作ル。

【訓読】

藤津郡^{ふじつのこうり}。郷は肆所^{さと}。へ里は九^{こさと}。驛^{うまや}は壹所^{いっせと}。烽^{とがひ}は壹所^{いっせと}なり。

昔者^{むかし}、日本武尊^{やまとたけるのみこと}、行幸^{いでま}しし時^{とき}、此^この津^つに到^{いた}りますに、日^ひ、西^{にし}の山^{やま}に没^いり、御船^{みふね}泊^はてたまふ。明^あくる旦^{あした}、遊覽^{みそなは}すに、船^{ふね}

の纜ともつなを大おほき藤ふぢに繋つなぎたまふ。因よりて藤津郡ふぢつのこほりと曰いふ。

能美郷のみのさと。〈郡こほりの東ひむがしに在あり。〉

昔者むかし、纏向まきむくの日代宮ひしろのみやに御宇あめのしたしろしめしし天皇すめらみこと、行幸いでましし時とき、此この里さとに土蜘蛛つちぐも三人有あり。〈兄あにの名なは大おほ白しろ、次つぎの名なは中なか白しろ、弟おとの名なは少を白しろ。〉此この人等ひとら、堡をきを造つくりて隠かくり居ゐて、降服まつろひ肯あへざりき。その時とき、陪從おもとびと、紀直等きのあたひらの祖禰日子おやわかひこを遣つかはし、以もちて誅つみなひ滅ほろぼさしめたまふ。茲ここに、大おほ白しろ等ら三人みたり、但ただ、叩頭のきみて、己おのが罪過つみを陳のべ、共ともに更生またいきむことを乞こふ。因よりて能美郷のみのさとと曰いふ。

託羅郷たらのさと。〈郡こほりの東ひむがしに在ありて、海うみに臨のぞむ。〉

同おなじき天皇すめらみこと、行幸いでましし時とき、此この郷さとに到いたりまして、御覽みそなはすに、海わたつ物豊ものゆたかに多さはなりしかば、勅の曰いりたまひしく、「地ところの勢かたちは少さくあれども、食物くらひもの豊ゆたけく足たらへり。豊足村たらひむらと謂いふべし。」とのたまふ。今いま、託羅郷たらのさとと謂いふは訛よこなまれるなり。

塩田川しほたがは。〈郡こほりの北きたに在あり。〉

此この川かはの源みなもと、郡こほりの西南にしみなみの託羅たらのの峯みねより出いで、東ひむがしに流ながれて海うみに入いる。潮満うしほみつる時とき、流ながれに逆さかひて浜さかのぼ廻まわる。流ながるる勢いきほひは太はなはだ高たかし。因よりて潮高満川しほたかみづがはと曰いふ。今いま、訛よこなまりて塩田川しほたがはと謂いふ。川かはの源みなもとに淵有ふちあり。深ふかさは二丈にじようばかりなり。石壁いはがきは嶮峻さかしく、周匝めぐりは垣かきの如ごとし。年魚多あゆさはに在あり。東ひむがしの邊ほとりに湯ゆの泉有いづみありて、能よく人ひとの病やまひを愈いやす。

彼杵郡

【本文】

彼杵郡きこしぐん。郷肆所こほりしよ。〈里四よ四よ二に三さん六ろく。〉驛貳所えきにふしよ。烽參所ほうさんしよ。

昔者。纏向日代宮御宇⁽²³⁷⁾天皇。誅^ニ滅球磨噲^一。凱旋⁽²³⁸⁾之時。天皇在^ニ豐前国宇佐海濱行宮^一。勒⁽²³⁹⁾陪從神代直^一。遣^ニ此郡速來村^一。捕^ニ土蜘蛛⁽²⁴⁰⁾蛛^一。於^レ茲。有^レ人名曰^ニ速來⁽²⁴¹⁾津姫^一。此婦女申云。妾弟⁽²⁴²⁾名曰^ニ健津⁽²⁴³⁾三間^一。住^ニ健村之里^一。此人有^ニ美玉^一。名曰^ニ石上神之木蓮子玉^一。愛而固⁽²⁴⁴⁾藏。不^レ肯⁽²⁴⁵⁾示^レ他。神代直尋覓⁽²⁴⁶⁾之。超^レ山⁽²⁴⁷⁾而⁽²⁴⁸⁾逃。走^ニ落石岑⁽²⁴⁹⁾。〈郡⁽²⁵⁰⁾以北⁽²⁵¹⁾之山。〉即逐及捕獲。推^ニ問虛實^一。健津⁽²⁵²⁾三間云。實有^ニ二色之玉^一。一者曰^ニ石上神木蓮子玉^一。一者曰^ニ白珠^一。雖^レ比^ニ礪硃^一。願以獻之。亦申云。有^レ人。名曰^ニ篋⁽²⁵³⁾築⁽²⁵⁴⁾。住^ニ川岸之村^一。此人有^ニ美玉⁽²⁵⁵⁾。愛之罔⁽²⁵⁶⁾極。定無^レ服^レ命。於^レ茲。神代直迫而捕獲。問⁽²⁵⁷⁾之。篋⁽²⁵⁸⁾築⁽²⁵⁹⁾云。實有之。以貢^ニ於御^一。不^ニ敢愛惜^一。神代直捧^ニ此三色之玉^一。還獻^ニ於御^一。于⁽²⁶⁰⁾時。天皇勅曰。此國可^レ謂^ニ具足玉国^一。今謂^ニ彼杵郡^一訛之也。

【校異】

- (236) 四—底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「四」ニ作ル。大系本「四」ヲ誤字トシ、『七』として巻首の里総数にあうが、『九』の誤とすべきかト記ス。
- (237) 御宇—底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。
- (238) 凱旋—底本・南本「凱」一字トシ、右傍ニ「凱旋」ト注ス。板本「凱旋」ナシ。新考「凱旋」ヲ補フ。校本・神本・山本「凱旋」アリ。
- (239) 勒—底本・南本・校本・神本・山本「勒」、板本・新考「勅」ニ作ル。神本、校異ヲ逸ス。
- (240) 蜘蛛—底本、モト「蜘蛛」ヲ脱シ、右傍ニ補フ。南本・板本・新考・校本・神本・山本ハ本文ニアリ。
- (241) 來—底本・南本「未」ニ誤ル。板本・新考・校本・神本・山本「來」。校本「神本按ニヨリ改ム」トス。板本等ニヨリ改ム。
- (242) 弟—底本「第」ニ誤ル。南本等ニヨリ改ム。
- (243) 津—底本、モト「津三間住健」ノ五字ヲ脱シ、右傍ニ補フ。南本・板本・校本・神本・山本ハ本文ニアリ。
- (244) 固—底本・南本「因」、板本・校本・神本・山本「固」ニ作ル。新考「因」ノ右傍ニ「固」ト記ス。板本ニヨリ改ム。

245	肯	底本・板本・新考・校本・神本・山本「肯」。南本「巨」ニ誤ル。
246	覓	底本・南本「不見」ニ誤ル。板本・神本「覓」、新考・山本「覓」ニ作ル。校本「神本按ニヨリ改ム」トシテ「覓」トス。板本ニヨリ改ム。
247	山	底本・南本・山本ナシ。板本・校本・神本「山」字アリ。新考「山」ヲ補フ。校本「新考ニヨリ補フ」トス。
248	而	底本・南本・校本・山本「超」ノ下ニ「而」字アリ。板本・校本・神本「超山而逃」トシ、「山」ノ下ニ「而」ヲ記ス。
249	岑	底本・南本・新考・神本・山本「岑」、板本「峰」、校本「峯」ニ作ル。
250	郡	底本「群」ニ誤ル。南本・板本・新考・校本・神本・山本ニヨリ改ム。
251	北	底本・南本「比」ニ誤ル。板本・新考・神本・山本ニヨリ改ム。校本「京本ニヨリ改ム」トシテ「北」トス。
252	津	底本・南本・板本・新考・山本ナシ。校本「宗一本ニヨリ補フ」トスルニ神本従フ。上文ニ「健津三間」トアルニヨリ「津」ヲ補フ。
253	簀	底本・南本「菟」、板本・新考・校本・神本・山本「簀」ニ作ル。校本、校異ナシ。板本等ニヨリ改ム。
254	築	底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「築」ニ作ル。大系本「底『築』の如き字」トスルハ誤。
255	玉	底本・南本「王」、板本・新考・校本・神本・山本「玉」ニ作ル。校本、校異ナク「玉」ニ作ル。新考ニヨリ改ム。
256	罔	底本「罔」（因ノ俗字）ニ作リ、右傍ニ「罔」ト注ス。校本「標註ニヨリ改ム、或ハ『固』カ」トス。神本「猪本『罔』（因ノ俗字）」トスルハ誤。南本「因」、板本「固」、校本・神本・山本「罔」ニ作ル。新考「因」ノ右傍ニ「罔」ト記ス。校本・神本ニヨリ改ム。
257	問	底本「問」ニ作リ、右傍ニ「問」ト注ス。南本・板本・新考・校本・神本・山本「問」ニ作ル。
258	簀	底本・南本・新考・校本・神本・山本「簀」、板本「菟」ニ作ル。
259	築	底本・南本「築」ニ誤ル。板本等ニヨリ改ム。
260	干	底本・南本・校本「干」ニ誤ル。板本等ニヨリ改ム。

【訓読】

そのきのこほり
彼杵郡。郷は肆所。へ里は四。驛は貳所。烽は參所なり。

昔者、纏向日代宮に御宇しめしし天皇、球磨噲喩を誅ひ滅ぼして、凱旋りましし時、天皇、豊前国の宇佐海濱の行宮に在して、陪從、神代直に勸せて、此の郡の速来村に遣はして、土蜘蛛を捕らへしむ。茲に、人有り。名を速来津姫と曰ふ。此の婦女の申して云ひしく、妾が弟、名を健津三間と曰ふ。健村の里に住めり。此の人、美しき玉有たり。名を石上神の木蓮子玉と曰ふ。愛しみて固く蔵し、他に示せ肯へず。」とまをす。神代直、尋ね覓ぐに、山

を超えて逃げ、落石岑。へ郡より北の山なり。へに走りき。即ち逐ひ及きて捕獲へ、虚實を推問ふに、健津三間の云ひしく、「實に二色の玉有たり。一つは石上神の木蓮子玉と曰ひ、一つは白珠と曰ふ。礪碇に比へつれども、願はくは以ちて献らむ。」といふ。亦、申して云ひしく、「人有り。名を篋築と曰ふ。川岸の村に住めり。此の人、美しき玉有たり。愛しむこと極み罔し。定めて命に服ふこと無けむ。」とまをす。茲に、神代直、迫めて捕獲へて、問ふに、篋築の云ひしく、「實に有たり。以て御に貢らむ。敢へて愛惜しまじ。」とまをす。神代直、此の三色の玉を捧げて、還りて御に献りき。時に、天皇、勅曰りたまひしく、「此の國は具足玉國と謂ふべし。」とのたまふ。今、彼杵郡と謂ふは訛れるなり。

【本文】

浮穴郷。へ在二郡北(261)一。へ

同天皇在二宇佐濱行宮一。詔二神代直一曰。朕歴二巡諸國一。既至二平治一。未レ被二朕治一。有二異徒一乎。神代直奉(262)云。彼(263)烟(264)之起村。未二猶被一レ治。即勒(265)レ直遣二此村一。有二土蜘蛛一。名曰二浮穴沫(266)媛一。捍二皇命一。甚無レ礼。即誅之。因(267)曰二浮穴郷一。

周賀郷。へ在二郡西南一。へ

昔者。氣長(268)足姫尊。欲二征二伐(269)新羅一行幸之時。御船繫二此郷東北之海一。艫舳之舳舻(270)。化而為レ磯(271)。高廿(272)餘丈。周十餘丈。相去十餘町。充(273)而(274)嵯峨。草木不レ生。加以陪從之船。遭レ風漂没(275)。於レ茲。有二土蜘蛛石(276)鬱比袁(277)麻呂一。拯(278)二濟其船一。因名曰二救郷一。今

謂⁽²⁷⁹⁾二周賀郷一訛之也。

速來⁽²⁸⁰⁾門。〈在^二郡西北^一〉。

此門之潮之來者。東潮落者。西涌登。涌響同^二雷音^一。因曰^二速來⁽²⁸⁰⁾門^一。又有^二松⁽²⁸¹⁾木^一。本者着⁽²⁸²⁾地。末者沈^レ海。々⁽²⁸³⁾藻早⁽²⁸⁴⁾生。以擬^二貢上^一。

【校異】

- 北⁽²⁶¹⁾ 底本「比」ニ誤ル。南本等ニヨリ改ム。
奉⁽²⁶²⁾ 底本・山本「奉」、南本・板本・新考・校本・神本「奏」ニ作ル。
彼⁽²⁶³⁾ 底本・南本・校本・神本・山本「彼」。板本「波」ニ誤ル。新考「波」ノ右傍ニ「彼」ト記ス。
烟⁽²⁶⁴⁾ 底本・南本・校本・神本・山本「烟」、南本・板本・新考「煙」
勒⁽²⁶⁵⁾ 底本・南本・校本・神本・山本「勒」、板本・新考「勅」ニ作ル。
沫⁽²⁶⁶⁾ 底本・南本・校本「沫」ニ誤ル。板本等ニヨリ改ム。
因⁽²⁶⁷⁾ 底本・南本・校本・神本・山本「因」アリ。板本ナシ。新考「因」ヲ補フ。
長⁽²⁶⁸⁾ 底本・南本・板本・新考・神本・山本「長」。校本「息」ニ誤ル。
伐⁽²⁶⁹⁾ 底本・板本・新考・校本・神本「伐」。南本「代」ニ誤ル。
歌⁽²⁷⁰⁾ 底本・新考・神本「歌」、南本「或」、板本・校本「歌」、山本「歌」ニ作ル。校本「板本ニヨリ改ム」トス。
磯⁽²⁷¹⁾ 底本・山本「磯」、南本・板本・校本「磯」ニ作ル。新考「磯」ノ右傍ニ「磯」ト記ス。神本、「磯」ト同字ナレド、猪本ニヨリ改ム」トシテ「磯」ヲ「磯」ニ改ム。
廿⁽²⁷²⁾ 底本・校本・神本・山本「廿」、南本・板本・新考「二十」ニ作ル。
充⁽²⁷³⁾ 底本「充」ノ如キ字、南本・山本「充」、校本・神本「兕」。板本「突」ニ誤ル。南本ノ字ヲ採ル。
而⁽²⁷⁴⁾ 底本・南本・校本・神本・山本「而」。板本「出」ニ誤ル。新考「而」ノ右傍ニ「立」ト記ス。
没⁽²⁷⁵⁾ 底本・南本・山本「没」、校本・神本「沒」。板本「波」ニ誤ル。新考「波」ノ右傍ニ「沒」ト記ス。
石⁽²⁷⁶⁾ 底本・南本・校本・神本・山本「石」、板本・新考「名」ニ作ル。校本「研本『名』ニ作ル」トス。
袁⁽²⁷⁷⁾ 底本・南本・校本「表」ニ作ル。板本・新考・神本・山本ニヨリ改ム。
拯⁽²⁷⁸⁾ 底本・校本・神本・山本「拯」。南本「極」ニ誤ル。板本「救」ニ作ル。新考「極」ノ右傍ニ「拯」ト記ス。

(279)

謂―底本・南本・山本ナシ。板本「謂」字アリ。新考「謂」ノ字ヲ補フ。校本「板本ニヨリ補フ」トスルニ神本従フ。板本ニヨリ補フ。

(280)

速来―底本・南本・板本「連来」ニ誤ル。新考「速来」ニ作ル。校本「連」ヲ「宗本ニヨリ改ム」トス。大系本「南『連来』」トスルハ誤。神本・山本ニヨリ改ム。

(281)

松―底本「拔」、南本「板」、板本「杉」、校本・神本「松」、山本「拔」ノ如キ字ニ作ル。新考「杉」ノ右傍ニ「松」ト記ス。校本「新考ニヨリ改ム」トス。大系本「枅」ニ改ム。校本・神本ニヨリ改ム。

(282)

着―底本・南本「暑」ニ誤ル。板本ニヨリ改ム。新考・神本・山本「著」ニ作ル。校本「神本ニヨリ改ム」トシテ「著」ニ改ム。新考・神本ニヨリ改ム。

(283)

々―底本・山本「々」、南本・板本・新考・校本・神本「海」ニ作ル。

(284)

早―底本・南本・校本・神本・山本「早」、板本「草」ニ作ル。新考「草」ノ右傍ニ「早」ト記ス。

【訓読】

浮穴郷。〈郡の北に在り。〉

同じき天皇、宇佐濱の行宮に在して、神代直に詔曰たまひしく、「朕、諸国を歴巡りて、既に平け治むるに至れり。

未だ朕が治を被らざる異しき徒有りや。」とのたまふ。神代直、奉りて云ししく、「彼の烟の起てる村、猶、治

を被らず。」とまをす。即ち直に勸せて、此の村に遣はしたまふに、土蜘蛛有り。名を浮穴沫媛と曰ふ。皇命に捍ひ、

甚く礼無し。即ち誅ひき。因りて浮穴郷と曰ふ。

周賀郷。〈郡の西南に在り。〉

昔者、氣長足姫尊、新羅を征伐たむと欲して、行幸しし時、御舩、此の郷の東北の海に繋ぎしに、艫舳の舳歌、磯と

化為りき。高さは廿丈餘り、周りは十丈餘り、相去ること十町餘りなり。充くして嵯峨しく、草木生ひず。加以、

陪従の舩、風に遭ひて漂ひ没みき。茲に、土蜘蛛、石鬱比袁麻呂有り。其の舩を拯濟ひき。因りて名を救郷と曰ふ。

今、周賀郷と謂ふは訛れるなり。

速來門。はやきのと。〈郡の西北に在り。こほりにしきたあ〉

此の門の潮の來るは、東に潮落つれば、西に涌き登る。涌く響は雷の音に同じ。因りて速來門と曰ふ。又、松の木有り。本は地に着きて、末は海に沈めり。海藻早く生ふ。以て貢上に擬つ。

高来郡

【本文】

高来郡。郷玖所。〈里廿(285)一。〉驛肆所。烽伍所。

昔者。纏向日代宮御宇(286)。天皇。在二肥後國玉名郡長渚濱之行宮一。覽二此郡山一曰。彼山之形。似二於別嶋(287)一。属レ陸之山坎。別(288)居(289)之嶋(290)坎。朕欲レ知之。仍勒二神大野宿祢一。遣レ看之。往(291)到二此郡一。爰有レ人。迎來曰。僕者此山神。名高來津座(292)。聞二天皇使(293)之來一。奉レ迎而已。因曰二高来郡一。

土齒池。〈俗言レ岸為二比遲波一。在二郡西北(294)一。〉

此池東(295)之海邊有レ岸。高百餘丈。長三百餘丈。西海波濤。常以濯(296)滌。縁二土人辭一。号曰(297)土齒池一。々(298)堤(299)長六百餘丈。廣五十餘丈。高二丈(300)餘。池裏縱橫廿餘町許。潮來之(301)。常突入入(302)。荷菱多生。秋七八月。荷根甚甘。季秋九月。香味共(303)變(304)。不レ中レ用也。

峯湯泉。〈在二郡南一。〉

此湯泉之源。出二郡南高来峯西南之峯一。流於東之。流(305)勢甚多(306)。熱異二餘湯一。但和二冷水一。乃

得_二沐浴_一。其₍₃₀₇₎味酸。有_二流黄白土及和₍₃₀₈₎松_一。其葉細₍₃₀₉₎有_レ子。大如_二小豆_一。令_レ得_レ喫。

【校異】

- (285) 廿―底本・校本・神本・山本「廿」、南本・板本・新考「二十」ニ作ル。
(206) 御宇―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「御宇」ノ下ヲ闕字トセズ、ソノママトス。
(287) 嶋―底本・板本・新考・校本・神本「嶋」、南本・山本「島」ニ作ル。
(288) 別―底本・南本・山本「列」、板本・神本「別」ニ作ル。新考「列」ノ右傍ニ「別」ト記ス。校本「櫛本按ニヨリ改ム」トシテ「別」ニ改ム。板本・神本ニヨリ改ム。
(289) 居―底本・南本・校本・神本・山本「居」、板本「在」ニ作ル。新考「居」ノ右傍ニ「在」ト記ス。
(290) 嶋―底本・校本・神本「嶋」、南本・板本・新考・山本「島」ニ作ル。
(291) 往―底本・校本・神本・山本「往」、板本・新考「往」ニ作ル。南本「住」ニ誤ル。
(292) 座―底本・南本・板本・新考・校本・神本・山本「座」ニ作ル。校本頭注ニ「座、宗本『彦』ニ作り、異本『摩』ニ作ル」トアリ。
(293) 使―底本・板本・新考・校本・神本・山本「使」、南本「便」ニ作ル。
(294) 北―底本・南本・板本・校本・神本・山本「北」ニ作ル。新考ハ「南」ノ誤リカトス。
(295) 東―底本・南本・板本・校本・神本・山本「東」ニ作ル。新考「東」ノ右傍ニ「南」ト記ス。
(296) 濕―底本・校本・神本「濕」、南本「澀」、板本「濯」、山本「湿」ニ作ル。新考「澀」ノ右傍ニ「濯」ト記ス。
(297) 日―底本・南本・板本・新考・神本・山本ニアルヲ校本脱ス。
(298) 々―底本・山本「々」、南本・板本・新考・校本・神本「池」ニ作ル。
(299) 堤―底本・板本・新考・校本・神本・山本「堤」、南本「隄」ニ作ル。
(300) 高二丈―底本、モト「高二丈」ヲ脱シ、右傍ニ補フ。南本・板本・新考・校本・神本・山本ハ本文ニアリ。
(301) 之―底本・南本・校本・神本・山本「之」。新考「之」ノ右傍ニ「者」ト記ス。
(302) 入―底本・南本・山本「入」ニ作ル。板本「之」。校本「入」ヲ「衍ナラン」トシテ削ル。神本ハ「秋本氏本『之』を『々』に誤ったのであらう」トスル説ニ従フ。
(303) 共―底本・板本・新考・校本・神本・山本「共」、南本「其」ニ作ル。
(304) 之流―底本・南本・板本・校本・山本「流之」ニ作ル。新考「流之」ノ右傍ニ「之流」ト記ス。神本ハ「秋本氏本『新考により顛倒として句を分け、四字句を整える。』ノ説ニ従ヒ改ム」トスルニ従フ。
(305) 多―底本・南本・板本・校本・神本・山本「多」ニ作ル。新考「多」ノ右傍ニ「烈」ト記ス。

(306)

其―底本・南本・校本・神本・山本「其」、板本「甚」二作ル。新考「甚」ノ右傍ニ「其」ト記ス。

(307)

和―底本・南本・校本・神本・山本「和」、板本・新考「松」二作ル。

(308)

細―底本「納」ノ左傍ニ「細款」、南本「納」トシ、頭注ニ「納、應作細」ト注ス。板本・新考・校本・神本・山本「細」二作ル。

【訓読】

高来郡。郷は玖所。へ里は廿。驛は肆所。烽は伍所なり。

昔者、纏向日代宮に御宇しめしし天皇、肥後國の玉名郡の長渚濱の行宮に在して、此の郡の山を覽して曰ひし
く、「彼の山の形、別れ嶋に似たり。陸に属ける山か、別れ居る嶋か。朕、知らむと欲ふ。」とのたまふ。仍りて神大
野宿祢に勒せ、遣はして看しめたまひしかば、此の郡に往き到りき。爰に人有り。迎へ来て曰ひしく、「僕は此の山の
神、名は高来津座とまをす。天皇の使の來たまふを聞きて、迎へ奉らくのみ。」とまをす。因りて高来郡と曰ふ。

土齒池。へ俗、岸を言ひて比遅波と為す。郡の西北に在り。

此の池の東の海邊に岸有り。高さは百丈餘り、長さは三百丈餘りなり。西の海の波濤、常に以て濯ひ滌げり。土人
の辞に縁りて、号けて土齒池と曰ふ。池の堤の長さは六百丈餘り、廣さは五十丈餘り、高さは二丈餘りなり。池の
裏、縦と横と、廿町餘りばかりなり。潮來れば、常に突き入りて入る。荷・菱、多に生ふ。秋七八月、荷の根甚甘
し。季秋九月、香と味、共に變りて、用ゐるに中らず。

峯湯泉。へ郡の南に在り。

此の湯の泉の源は、郡の南の高来峯の西南の峯より出でて、東に流る。流るる勢は甚多に、熱きこと餘の湯に異
れり。但、冷き水を和へて、乃ち沐浴することを得。其の味酸し。流黄・白土、及、和松有り。其の葉は細くして子
有り。大きさは小豆の如く、喫ふこと得しむ。

第二章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』について

はじめに

『肥前国風土記』は、現存する常陸・播磨・出雲・豊後の四か国の風土記と並んで五風土記と称され、和銅六年（七二三）五月、諸国に下された官命によって勘進されたものと考えられる。『肥前国風土記』が一般的に流布するようになったのは、江戸時代になってからで、元禄十三年（一七〇〇）に法印実観が京都の曼殊院所蔵本を書写、さらには寛政十二年（一八〇〇）には荒木田久老が木版本として出版してから、ひろく流布するようになり、国学者などが注釈に利用するようになった。ところがこの頃は、転写・校合されるのみで、風土記本文そのものの注釈は行なわれていなかった。

はじめて『肥前国風土記』に本格的な注釈を施したのは、国立国会図書館所蔵の草稿の写し（後述参照）の序文に「明治二十一年（一八八八）八月中清書」とある糸山貞幹の『肥前風土記纂註』で、その後、明治三十二年（一八九九）に栗田寛氏が五風土記を校訂・注釈した『標注古風土記』（大日本図書、一八九九年十二月）を、昭和九年（一九三四）に井上通泰氏が『肥前風土記新考』（巧人社、一九三四年十一月。その後、一九七四年二月に臨川書店から復刻）を著し、次第に研究されるように

なった。『肥前国風土記』の注釈書の先駆である『肥前風土記纂註』の成果にいち早く注目したのは栗田氏である。彼は『標注古風土記』の凡例で次のように記している

肥前風土記は。寛政十二年荒木田神主久老が訓點を加へたるものを本として。舊印本といふ。其異同は。吾友肥前國人糸山貞幹が諸異本を以て校したる本。と同人の肥前風土記纂註により。其大略をいはゞ。谷森氏のもたる本の奥書に。右之風土記四帖。以竈御殿預家之傳本。令書寫了。文政八年十月上旬。秦公均とあるもの。又湯谷某謹誌とあるを寫て。藤原勤が青柳種麿に贈りたるを。三橋五麿が寫せる本。また元禄十三年。以「曼殊院所藏之本」。書「於高野村蓮華寺」。法印實觀。とある本。また南里元壽が天保八年に。以「講談所本」寫之とある本。又六人部是香が本居宣長と。上田百樹の説を書入たりといふ本など。其他數本あり。増注は。大方糸山氏の纂注。と同氏の風土記書入本を。先きに寫し置きたるものによれり。標注の漢文なるは舊本のまゝと知るべし。古書を引きたるは此限りにあらず。

二箇所の傍線部から、『標注古風土記』の『肥前国風土記』の部分は、貞幹の『肥前風土記纂註』および、貞幹が校訂した『肥前国風土記』を利用していることがわかり、「糸山貞幹曰」「貞幹云」と記

す頭注は全体を通して十六箇所存在する。

また、栗田氏が引いた貞幹の説を井上氏が『肥前風土記新考』に間接引用したり、平田俊春氏¹・秋本吉郎氏²・久松潜一氏³・植垣節也氏⁴が校訂や注釈に利用するなど、未刊ではあるものの、その後の研究に与えた影響は大きい。

『肥前風土記纂註』は、おもに重野安繹の序文にもあるように、①本文の校訂に多くの種類の写本を利用している点、②国学者・地元出身者などの先学諸家の説を多く引用している点、③本文の注釈に様々な分野の文献を引いている点、④未だ先学が指摘していないことに言及している点が優れている。施された注釈は、『肥前国風土記』の注釈書の最初にして、最も詳細なもので、研究史上逸することのできない成果といっても過言ではない。

それにもかかわらず、前述のように、未刊であるがゆえに世に知られることがなく、植垣氏が現在残る写本の翻刻・校訂が試みた⁵ものの、諸本の異同がはなはだ多く、分量も膨大なため、作業は困難を極めたらしく、完結することはなかった。

このたび、『肥前風土記纂註』の全文翻刻および写本間での校合を試みた。全文翻刻は次章で掲げることとし、本章では、糸山貞幹著『肥前風土記纂註』について詳しく述べていきたい。

一、糸山貞幹について

はじめに、『肥前風土記纂註』を著した糸山貞幹いとやまただもとの略歴をみておきたい。

貞幹は、天保二年（一八三二）二月二十六日、肥前国佐賀藩为重村（現佐賀市諸富町）の糸山主計の長男として生まれる。吉田神道の教えをうけ、旧藩時代においては、国学教育の場である神学寮において教頭を務めた。その後、筑後国一宮の高良神社・田島神社の権宮司・宮司を歴任し、明治八年（一八七五）八月二十五日、政府の神道国教化政策にともなって設置された教導職の権大講義となり、同年十一月二十五日には香椎宮の権宮司に任じられた。佐賀中学校・師範学校でも教鞭を執り、私塾を開いて立言舎と号した。大正八年（一九一九）五月六日、八十八歳で死去。貞幹は、祭祀・和歌・郷土史などの分野に精通していた。祭祀の分野では、安政五年（一八五八）に關守一と大森定久とともに『順考祭奠式』（二巻。国立国会図書館・東京国立博物館・東北大学・西尾市岩瀬文庫に写本がある）を、和歌では『百歌選』や『増訂樟葉三十六歌仙』を著し、郷土史では南里有隣が編集した『肥前旧事』に増訂を加えるなど、博学多才であったことが知られる。

貞幹が増補を行なった『肥前旧事』とは、安寧天皇⁷から光厳天

皇にいたるまでの肥前国に関する事柄を、およそ百三十種類のぼる文献を引き、編年体で記した通史で、全六巻⁸からなる。内閣文庫・九州大学・東京大学史料編纂所・佐賀県立図書館・西尾市岩瀬文庫・無窮会専門図書館などに写本が残っている。佐賀県立図書館所蔵本の奥書には、「萬延二年辛酉三月下旬寫 絲山貞幹」とあり、貞幹により書写・増補されたものであることがわかる。『肥前叢書』⁹には活字化されたものが収められているが、こちらは万延二年の奥書がないが、佐賀県立図書館所蔵本での訂正が反映され、記述も少し詳しくなっているので、『肥前叢書』の方が新しいようである。

『肥前叢書』の奥書をみると、「明治二十八年八月中清書」とあるものの、第一之巻の冒頭をみると「明治卅六年四月中清書」とあり、何度か清書をくり返している様子がうかがえる。この時期は、まさに『肥前風土記纂註』を清書しているときにあたり、両書の清書がほぼ同時に進行していたことが注目される。

こうして清書をくり返す過程で、貞幹がさらに系図や文書、諸家の説を中心に百十八種類の文献を引いて増補を行なっている。これらの増補は「増」というように、南里有隣の文と区別して文中に編入されているが、佐賀県立図書館所蔵本では、上部の余白や行間、あるいは朱筆で「増補」と記されている。

増補はおもに、文中に引かれている史料に異本の校異を示したり、

地名比定といった、南里有隣が編集した文に対する注釈や、貞幹が追加した史料に基づき、新たな項目を立てるような構成に関わるものなど、『肥前叢書』では大小合わせて七百八十箇所ほどが確認できる。

それでは、貞幹はどのように増補を行なったのか。仲哀天皇の御世に神功皇后が登望村で男装したことの典拠に、『肥前国風土記』松浦郡登望駅条をあげている。この箇所を佐賀県立図書館所蔵本でみてみたい。

同ク登望村ニテ雄装ヲシ玉フ

（肥前国風土記）

同書曰、登望駅※¹昔者、氣長足姫尊到※²此所留為雄

装御衆^尊之輒落於此村因号輒駅※³東西之海有蛇

螺鯛雜魚海藻海松等

本文をみると、※を附した場所に増補の書き込みがみられる。

すなわち、※¹の右傍に「在郡西^補（さらに「在」の下に「松浦」を補う）」、※²の右傍に「於イ」、※³の右傍に「増東松浦郡ニ呼子村大字大友小友アリ」とあり、地名比定と異本の校異を補っている。このような記述方法は、『肥前風土記纂註』とよく似ており、清書の時期も近いことから、これと同じ方針で増補を行なったのであろう。

その後、貞幹は『肥前旧事続編料』（上下二巻）を著している。これは、『肥前旧事』の続編で、後醍醐天皇の建武元年（一三三四）か

ら、後柏原天皇の大永八年（一五二八）までの百九十四年間にわたる記録を収めている。上巻の冒頭に「明治三十四年二月中清書」と記し、「明治卅四年七月中清書」とある佐賀県立図書館所蔵『肥前風土記纂註』乙本（後述参照）とほぼ同じ時期の清書である。

貞幹は、ほかにも多くの著作を遺しているが、なかでも本章で取りあげる『肥前風土記纂註』は、内容の豊富さから郷土史という枠を超え、貞幹の研究の集大成というべき書物である。

二、『肥前風土記纂註』の諸写本

さて、『肥前風土記纂註』は、現在、原本は残っていないものの、国立国会図書館に草稿の写し、佐賀県立図書館に貞幹の自筆稿本が一本と、写本が二本の合計四本が存在する。内容については後述することとして、ここではこれら諸本の書誌的データを掲げておきたい。

①国立国会図書館所蔵本（上中下三冊）（以下、国会本と称す）

1. 上巻（請求番号一〇二・三・一八三）

袋綴一冊。題箋に「肥前風土記纂注 上」とあり、右肩に請求番号の「一〇二・三・一八三」と記されたラベルを貼付する。

そのラベルの下に直接「総国 基肄郡 養父郡 三根郡 神崎

郡」と記す。縦二七センチ、横一七センチ、全六十二枚（うち遊紙二枚）。遊紙（六十二枚目）左肩に「一〇二・三・一八三」記されたラベルを貼付する。一枚目に「肥前国風土記纂註 一（明治二十一年八月中清書）」と内題があり、「肥前国風土記纂註」の左傍から序文の二行目にかけて「帝国図書館蔵」の蔵書印が、さらに右下に「邨岡氏印」の角印、その下に「明治四五・三・一購求」という棧印がある。また内題の左傍に「佐賀 糸山貞幹草稿」とあり、これが草稿であることが知られる。

2. 中巻（請求番号一〇二・三・一八三）

袋綴一冊。題箋に「肥前風土記纂注 中」とあり、右肩に上巻と同様に請求番号を記したラベルを貼付し、その下に直接「佐嘉郡 小城郡 松浦郡」と記す。縦横ともに上巻と同じ寸法で、全六十一枚（うち遊紙一枚）。六十枚目左肩に請求番号のラベルを貼付する。一枚目に「肥前国風土記纂註 二」とあり、その下に「邨岡氏印」の角印および「明治四五・三・一購求」の棧印があり、佐嘉郡の記述から三行にわたって「帝国図書館蔵」の蔵書印が押されている。

3. 下巻（請求番号一〇二・三・一八三）

袋綴一冊。題箋に「肥前風土記纂注 三」とあり、右肩に上巻・中巻と同様に請求番号を記したラベルを貼付し、その下に直接

「松浦郡^下 杵島郡 藤津郡 彼杵郡 高来郡」と記す。縦横ともに上巻・中巻と同じ寸法で、全五十三枚（うち遊紙一枚）。五十三枚目左肩に上巻・中巻同様に請求番号のラベルを貼付する。二枚目に「肥前風土記纂註 三」とあり、その下に「邨岡氏印」の角印と「明治四五・三・一購求」の楕円印がみられる点も上巻・中巻と同様である。「値賀島」の記述から四行にわたって「帝国図書館蔵」の蔵書印がある。また、五十三枚目に、

肥前風土記纂注三巻著者糸山貞幹贈栗田寛氏者

即就其本寫云々

明治廿七年七月下浣 村岡良弼識於牛込山里小屠蘇

同廿八年五月三十日一請施楮墨畢 良弼識（印）

此日大蠹還自西京

という奥書がある。ここから、糸山貞幹が栗田寛に草稿を贈り、さらにそれを村岡良弼が書写して所蔵していたものということがわかる。

国会本の特徴で特筆すべきは、頭注や行間に「弼云」として村岡良弼の説が十二箇所にあつて記されている点である。貞幹が先学を引用する場合は、「一氏（○○人）曰」という形式で書く点、ここに記された説は他本にみられないという点を踏まえると、原本にあつたものではなく、村岡良弼氏が書写したあと、自説を記したものであろう。

であろう。

②佐賀県立図書館所蔵甲本（上中下三冊）（以下、甲本と称す）

1. 上巻（請求番号図四〇）

一冊。一八八頁。縦二八センチ。外題に「正本 肥前風土記纂註 上」とあるが、「正」を見消にして右傍に「副」と記す。表紙の裏に「寄贈」「佐賀県立図書館、昭和36、3、20、三八二六二六」というゴム印がある。冒頭に「明治癸卯（三十八年）七月」と記す重野安繹氏の序文が附されている。序文の大意は、近年刊行された栗田氏の『標注古風土記』に貞幹の説が多く引かれていること、佐嘉郡の「年常」にかかる「謂鰐魚」という注を「海神」の注としている点は卓見であること、養父郡日理郷の「曰」を「亘」としていることに対する指摘と重野氏の説、序文は既に亡くなった栗田氏からの依頼であることなどである。また、貞幹の序文の冒頭に「明治廿九年。其後段々書入八月中清書」とあつて、国会本が起稿されてから八年後に清書されたものであることが知られる。上巻は、序文・総記・基肄郡・養父郡・三根郡・神崎郡の記述からなる。

2. 中巻

一冊。一八二頁。縦二八センチ。外題に「正本 肥前風土記纂註 中」とあるものの、上巻と同様に「正」を見消にし

て右傍に「副」と記す。中巻は、佐嘉郡・小城郡・松浦郡大家島までの記述からなる。

3. 下巻

一冊。一五六頁。縦二八センチ。外題に「正本 肥前風土記纂註 下」とあるものの、上巻・中巻と同じく「正」を見消とし、右傍に「副」と記す。下巻は、松浦郡値嘉島から杵島郡・藤津郡・彼杵郡・高来郡までを記す。

甲本は貞幹の自筆稿本とされるもので、「其後段々書入」とあるように、国会本よりも内容が詳しくなっており、加筆訂正も多くみられる。また、訂正した箇所を「書損分」と頭書して、そのまま残しており、推敲の様子がうかがえる。

③佐賀県立図書館所蔵乙本（上中下三冊）（以下、乙本と称す）

1. 上巻（請求番号S二九〇/I九一/二）

一冊。二〇〇字詰原稿用紙一九八枚。一枚目最終行に「肥前風土記纂註 上」とある。二枚目に白紙となっており、中ほどに「佐賀県立図書館之印」の角印があり、その下に「県立佐賀 三〇・一二 図書館」の丸印、さらに「六六四一〇」と番号が附されている。原稿用紙の右下に「（佐賀県史）」とあり、佐賀県史編纂事業の一貫で書写されたものが佐賀県立図書館に所蔵されたと考えられる。三枚目から五枚目にかけて重野

安禪の序文が附されている。六枚目からは貞幹の序文があり、一行目には「肥前風土記 〔明治卅四年七月中清書〕」とある。

2. 中巻（請求番号S二九〇/I九一/二）

一冊。二〇〇字詰原稿用紙二一二枚。一枚目最終行に「肥前風土記纂註 中」とあり、左上に「〇七九一・一五・九二六七四二二」と番号がある。二枚目に「佐賀県立図書館之印」の角印があり、左上に「六六四一一」と番号が附されている。上巻と同様、佐賀県史の原稿用紙を使用している。内容は、佐嘉郡・小城郡・松浦郡大家島までの記述で構成されている。

3. 下巻（請求番号S二九〇/I九一/三）

一冊。二〇〇字詰原稿用紙一五四枚。一枚目最終行に「肥前風土記纂註 下」とあり、左上に「〇七九一・一五・一九二六四七二三」と番号がある。二枚目に「佐賀県立図書館之印」の角印があり、左上に「六六四一二」と番号が附されている。上巻・中巻と同様、佐賀県史の原稿用紙を使用している。内容は、松浦郡値嘉島から杵島郡・藤津郡・彼杵郡・高来郡の記述で構成されている。

乙本は、ほとんどがやや乱雑な字で記されているが、ところどころこれとは異なる筆跡があったり、途中改頁があるなど、複数人が

分担して筆写にあたつたようである。

また、誤脱が非常に多く、「偏」を「稱」と誤写したり、分注の体裁を損なうなど、筆写にあたつた人物は、専門知識を有しない者であつたと思われる。こうした誤写は他本で訂正できるものの、乙本の段階で加筆された文も多く、完全に訂正することができない。

注釈をみると、甲本にもない文献や、先学を引いている箇所が多くみられ、内容がより詳しくなっている。そのため、現在残る諸本のなかで、もっとも完成本に近い¹⁾といえる。

④佐賀県立図書館所蔵丙本（以下、丙本と称す）

一冊。左下に「佐賀縣史編纂原稿用紙」と印字された四〇〇字詰原稿用紙三五枚。袋綴にしたものをハードカバーで製本。請求番号S二〇〇・八八／Sa・一五／四五〇。一枚目の右の右上に「名稱 〈附録〉 肥前風土記纂註」「巻別 上・中」と横書きのラベルが貼付しており、その下に「佐賀県立図書館之印」の角印がある。一枚目右の左上に「NO五一三一五」というスタンプが押しており、その下に手書きで「〇七九一 一五 一九四四」とある。一行目に「〈附録〉 肥前風土記纂註」とあり、二行目に「附録「肥前風土記纂註」に就いて」として、弟子による序文を有している点は前の三本とは異なる。内容は他の三本とは異なり、重野安繹の序文はなく、糸山貞幹による序

文と総記のみである。

丙本は、清書の年月を記していないため、どの本を写したもののかが不明となっている（後述参照）。この本は、もともと「会報」なる雑誌の巻末に附録として掲載されたものの写しである。活字化にいたるまでの事情は、「附録『肥前風土記纂註』に就いて」と題された、およそ五百字にわたる端書によつて知ることができる。少し長いが全文を掲げておく。

附録「肥前風土記纂註」に就いて。

本書は、故糸山貞幹先生の畢生の心血を注いでものせられたるもの、實に肥前國は言はずもがな、我國に於ける貴重な典籍にして、其名夙に高し。されば有志の人は翁の存生中幾度か上梓せんことを勧めたれど、翁は固辞して肯じ給はず。筐底深く藏せられて今日に至れり。吾人は大に之を遺憾とし、何とかして會報の巻末に號を逐ふて掲載して附録となし、後日一冊の正本として大成する事を得るやうにしたきものと、種々計畫中なりしが、たまたま本年一月の總會に、我郷の出身岡泰雄君の臨席するあり。

君は曾て翁に師事してその寫本を得たるの人すなはち請ふて復寫の勞を取らんことを以てす。君は現時官幣大社鹿島神宮宮司の職にあり、甚だ多忙の身を以てなほよく快諾せられ、以

て今日巻末に付するの榮を見るに至れり。

實に本會報をして權威あらしめ、燦然として光輝あらしむ。岡君の勞と好意とは、誠に感謝に餘あり。記して謝意を表し、併せてそのよりて来るところを會員諸賢に告ぐ。元本には句讀点、反点なし。されど通讀に便せんため、これも岡君の好意にて付せられたるなり。又元本の註は割註なれど印刷の都合により括弧内に収む。

(大正十三年二月五日毛利龍一識)

そこには、貞幹が畢生の心血を注いできた『肥前風土記纂註』は、肥前国だけでなく、我が国においても大変貴重な典籍であるにもかかわらず、未刊のために世に知られることがなかったと記されている。貞幹の死去から約五年を経て、これを遺憾に思つた弟子たちによって活字化の計画が実行されたのである。

活字化にあたって功があつたのは、貞幹に師事していたという鹿島神宮司の岡泰雄氏であつた。彼は貞幹の稿本を書写したものを所持しており、このたびの活字化にあたって、これを提供したという。初回は貞幹の序文と総記までを載せ、何号かにわたって連載を予定していたものと思われる。

こうして「会報」に掲載されたものを佐賀県史の関係者が筆写したものが丙本ということになる。しかし、「会報」がいかなる雑誌な

のか、その後連載が継続されたかなど、不明な点が多い。佐賀県史の原稿用紙に筆写されているということは、佐賀県史編纂のための資料として集められたと考えられるから、その後も連載があれば筆写されていると思われるが、他にないということは、連載が続かなかったのではないだろうか。

三、『肥前風土記纂註』所引『肥前国風土記』

次に『肥前風土記纂註』に引かれた風土記の本文についてみていきたい。これについては、貞幹の序文に、底本と校合に利用した写本の奥書などが記されているので、その箇所をあげておく。なお、引用部分が長く、校合に利用した写本も複数あるため、番号と傍線を附した。原文における分注は括弧で括り、小字とする体裁に改めたのでご了承いただきたい。『肥前風土記纂註』の本文の引用は、特に断らない限り、もつとも完成本に近い乙本(前節③)からの引用とする。

此題号、^①印本(奥書三、右一冊者。肥前国長崎人大家惟年。所齋本也。原誤

謬尤多矣。寛政十一己未年三月。於京師旅寓校正之。加訓点畢。蓋依城戸千桶。長

谷川菅諸等之需者也。皇太神宮権祢宜從四位下荒木田神主久老トアリ。)マタ^②

湯本(奥書二、右肥前風土記者、所藏官之秘府也、湯谷某謹誌トアルヲ、寛政十

年筑前人、青柳種信氏カ、備中人、混同春彦氏ヨリ、借写シタルヲ、文化十二年、本国人、三橋五麻呂氏カ再写シタルナリ）ニハ風土記、肥前国トアリ。

③竈本（奥書ニ、右之風土記四帖。以竈御殿預家之傳本。令書寫了。文政八年十月上旬。日秦公均。トアルヲ、天保八年、柘栗延美氏カ、写シタルヲ、京師人、谷森善臣氏カ、再寫シタルナリ、四帖トハ、山城・伊賀・尾張・豊後・肥前ノヲ、四帖ニ綴レリ）ニハ肥前国トノミアリ。今ハ④曼本（奥書ニ、元祿十

三年歲次庚辰冬十二月初五日。以曼珠院所藏之本書於高野村蓮華寺法仰実觀。マタ、享保九年武藏人兒島徳公。マタ同年源頼久トアルヲ、天保八年本国人南里元壽氏カ傳写シタルナリ。此本ハ湯本ニ能似タリ）『幕府日記』ニ、享保七年正月

十四日。石川近江守被相渡候御書付 覚 一新国史ヨリ風土記迄ハ御庫ニ全部無之候。但風土記ハ豊後・出雲御庫ニ有之候トアリ。本記此頃迄ハ普ク流布セサルニヤ。據テ改ム。（下ニ⑤簞本

トアルハ、其奥書ニ、肥前国大村人岩永常輔游学尾州三年。于此業成帰郷。余以其国旧典幸而存從叟写之。天明六年丙午仲秋篠菴河村秀根トアル本ヲ、寛政十二年京師人城戸千楯氏上田百樹氏等カ寫シタルヲ、吾師篤舍六人部是香翁ノ文化十二年ニ傳写サレタル者ナリ。其他⑥異本數種ヲ得タリ。皆少異アル凡テ異本ト云者是ナリ）

この序文によれば、荒木田久老校訂の印本（いわゆる木版本）を底本として、湯本・竈本・曼本・蓐本および異本數種で校訂したという。底本を除いた右の写本は、いずれも現存しておらず、ここに引かれた校異によつて、わずかに面影を知ることができるのみとなっている。これらの写本が校異に引かれている数を見ると、湯本は

四十九箇所、竈本は二十箇所、曼本は七十六箇所、蓐本は〇箇所¹¹、異本は九十三箇所となっている¹²。

このなかで、曼本の親本となる曼殊院本をめぐつては、『肥前国風土記』の伝播祖本とされる猪熊本（猪熊信男氏旧蔵本）こそが曼殊院本とする秋本氏¹³、猪熊本と祖本を同じくするも別系統とする平田氏¹⁴など、従来から猪熊本との関係を問題にした議論がある。ところが、『肥前風土記纂註』が校異に曼本を引いているのは七十六箇所、ここから猪熊本と曼本の関係を導きだすのは困難である¹⁵。

それでは、貞幹がどのようにして風土記本文の校合・校訂をおこなったのかをみてみたい。まず、彼杵郡速来門を例にあげてみる（原文の校異・および注釈文は追いつきで記されているが、読みやすさを考慮し、見出しごとに改行して、原文にはない句読点・鍵括弧・中黒で体裁を整えた。また、本文の校合・校訂に関係ない文は省略した）。

速来門。〈在ニ郡西北一〉

此門之潮之来者。東潮落者西涌登。涌響同ニ雷音^一。因曰ニ速来門^一。又有ニ杉木^一。本者著^レ地。末者沈^レ海。海藻早生。以擬ニ貢上^一。

異本此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○速来 「速」印本「連」ニ誤ル。湯本ニ抛テ改ム。下同シ。
○西涌 湯本「潮」ニ作ル。

○登涌 此二字、異本ナシ。

○杉木 「杉」異本「松」ニ作ル。

○早生 「早」印本「草」ニ作ル。竈本・湯本・異本ニ抛テ改ム。

体裁に注目すると、見出しの下に対象となる文字、または文字数を示し、諸本の異同をあげている。そして底本に誤りがある場合、どの本によって訂正したかを明記している。このように然るべき手続きを経た校訂の体裁は、現在の校訂作業にも通じており、校訂本としてよく整ったものと評価できる。

貞幹が校合に利用した湯本以下の写本は、現在では散逸してしまっているが、『肥前風土記纂註』に引かれた校異によって、その一部を知ることができる。ここに引かれた写本を見ることが困難となった今となつては、極めて貴重な存在といえる。

ところで、『肥前国風土記』をはじめとする九州の風土記には現存するものの他に異種の本文が存在することが早く井上通泰氏によって指摘されている¹⁶。現在、一般的に目にする木版本や写本の形で流布しているグループを甲類風土記というのに対し、甲類とは文体が異なり、仙覚の『万葉集注釈』や卜部兼方の『釈日本紀』などに『筑紫風土記』として引かれ、逸文でしか残っていないグループを乙類風土記という。甲類と乙類の特色について、坂本太郎氏¹⁷は次

の六点に整理された。

① 国の下の行政区劃の名および行政官庁の名を、甲は郡といい、乙は県という。

② 被説明物の位置の記載に、甲は被説明物の名の下に分註として「在_三郡北」「在_三郡東」というように郡家からの方位を示す。乙は本文の初めに「県南二里」「県東三十里」というように大書し、且つ里数を示す。

③ 天皇の称号の記し方は甲が書紀と合致するのに対して、乙は異なること。

④ その他の人名地名も、甲が或いは書紀に合い、或いは定制と合致するのに対して、乙は独特の文字を用いること。

⑤ 文章において、乙類は甲類にくらべ漢風の修飾がいちじるしく目立つ。わざとむずかしい文字をもちい、分註を以てその国音を録したり、釈語を載せることが多い。

⑥ 書名において、甲はその各々の国名を冠して筑前風土記、筑後風土記というように呼ばれたが、乙は総称して筑紫風土記と呼ばれるのが原則であつたらしい。

また、甲乙二種の先後関係をめぐっては、井上氏の研究以来、議論が多く、現在に至つても定説をみない。甲類の成立が乙類に先行するとみる小島憲之氏¹⁸は、撰者を藤原宇合とし、甲類を趣味的あ

るいは文藻豊かに改訂して乙類を作った、と述べている。一方、乙類が甲類先行するという立場をとる研究者に、坂本太郎氏¹⁹の名があげられる。坂本氏は、乙類の「筑紫風土記」という呼称について「九州を総称した筑紫が他の諸国に対して一国に准ずるものと觀念せられたことは古い慣行」とし、「筑紫風土記の名を負った風土記が各国別々の名を負った風土記よりも古い」と指摘する。二種の先後関係については、前にあげた二氏以外も言及しているが、この議論は本章の対象としないため、諸説の簡単な紹介に止めておくこととし、この問題については荊木美行氏²⁰が研究史を丁寧整理されているのでそちらを参照いただきたい。

さて、『肥前風土記纂註』は甲類風土記の注釈が基本となっているが、松浦郡と杵島郡の二箇所乙類風土記からの引用がある。まずは松浦郡にある引用からあげてみる。

松浦縣。々東三十里。有^レ二幞搖岑^一。〈幞搖比礼府離。〉最頂有^レ沼。計可半町。俗傳云。昔者檜前天皇之世。遣^二大伴紗手彦^一。鎮^二任那国^一。于^レ時奉^レ命經^二過此處^一。於^レ是。篠原村。〈篠資農也。〉有^二娘子^一。名曰^二乙等比賣^一。容貌端正。孤為国色。紗手比古。便娉成^レ婚。離別之日乙等比売。登^二望此岑^一。举^レ幞招。因以為^レ名。

此条『仙覚万葉抄』オヨビ、『釈日本紀』等二、『肥前風土記』

トテ引タリ。カ、ル本モアリシニヤ姑ク此處ニ附載ス。

○**縣** 本居翁曰、縣ハ上リ田ニテ、朝廷ノ御料フ陸田物ヲ作りテ貢ル地ナルガ、其二准ヘテ諸国ニアル御料フ地ヲモ云。漢字ヲ用フル世ニナリテ、縣字ヲ当テ書ナラヒ、稍後ニハ必シモ御料フ地ナラネトモ、漢ニテ縣ト云ニ当ルホトノ地ヲハ縣ト云コトニナレルナリ。今日此處ハ郡ト云ベキ所ナルニ、此字ヲ当タリ。

○**縣東** 「縣」異本「之」ニ作ル、ノ轉セシナラン。

○**三十里** 此ハ郡家ヨリ起程シテ許リシナルベシ。然レドモ此岑ヨリ西三十里、即チ今ノ道程三里ナレバ、值賀村辺ニテ、偏僻ノ海岸ナレハ、郡家ヲオクベキ處ニアラズ。サレドモ外ニ考フベキタツキナシ。扱本文、鏡渡ヲ郡ノ北トシ、褶振峯ヲ郡ノ東トアルニ依テ考フルニ、郡家ハ今ノ久里村・鬼塚村ナドニハアラサリシカ。然レハ下ノ賀周里逢鹿駅等ノ方角モソレニテ能叶ヘリ。久里村・鬼塚村ハ打開ケタル地ニテ、往来ナドノ便リ宜キ所ナリ。然レドモ三十里トアルニ合ハズ。如シクハ十八衍ニテ三里ナランカ。然ルトキハ能叶ヘリ。此説イカ、アラン。後考ヲ待ツ。

乙類風土記に対して貞幹は、「此条『仙覚万葉抄』オヨビ、『釈日本紀』等二、『肥前風土記』トテ引タリ。カ、ル本モアリシニヤ。姑

ク此処ニ附載ス」といい、「郡」を「縣」とする由来を本居宣長の説を引用して注釈を施し、郡家からの距離を「三十里」とすることについては郡家を置くに相応しい場所がないことを述べて疑問を呈している。

次に、杵島郡に引かれた乙類風土記をあげてみたい。

縣南二里。有^二孤山^一。從^レ坤指^レ艮。三峯相連。是名曰^二杵島山^一。坤者曰^二比古神^一。中者曰^二比賣神^一。艮者曰^二御子神^一。へ一名軍神。動則兵興矣。へ郷閭士女。提^レ酒抱^レ琴每^レ歲春秋。携^レ手登望。樂飲歌舞。曲盡而歸。歌詞云。阿羅礼符縷。耆資麼加多愷塢。嵯峨紫彌刀。區縫刀理我禰尼。伊謀我提塢刀縷（是杵島曲。へ）

この文は仙覚の『万葉集注釈』から引かれたものであるが、これについて乙本では「此條、『仙覺万葉抄』及ヒ松浦郡ニ引ク、松浦云々ノ件ノ如シ」といつている。ところが、甲本をみると、「此條、『仙覺万葉抄』及ヒ『釋日本紀』等ニ、『肥前風土記』トテ引タリ。カ、ル本モアリシニヤ。奇シ」といい、乙類風土記の体裁や里程を不審に思っている様子がうかがえる、貞幹はこれらが具体的にどのようなものであるかについては言及していないものの、一般的に流布している甲類風土記とは別種のもものと認識していたようである。

四、『肥前風土記纂註』の内容について

『肥前風土記纂註』は、校合に多くの写本を利用しているほかに、内容に関して特筆すべき点をあげると、①地名考証が詳細であること、②多くの文献を引用していること、③諸家の説を多く引いていること、④未だ先学が指摘していないことに言及していること、の四点である。以下、それぞれについて例をあげてみたい。

まず、①地名考証が詳細であることについてであるが、風土記にみえる地名を、明治期における最新の地名に比定している。たとえば、基肄郡の「里十七」の注釈は、次のように記されている。

〇里十七

「十七」印本「七十」ニ誤ル。曼本ニ拠テ改ム。又此

三字、印本ニハ小書ス。異本ニ拠テ改ム。下同シ。名称所在詳

ラカナラズ。（「明治十年ノ調」ニヨレハ、本郡二十一村ナリ。廿二年改革シテ

基山村大字宮浦・園部・小倉・長野、基里村大字酒井・東酒井・西姫方・飯田、田

代村大字田代・永吉・柚比・神辺・萱方トス）

十七ある里の名称と所在については不明としながらも、「明治十年ノ調」を引いて、明治十年時点での村の数をあげ、さらに二十二年四月の市制・町村制施行にともなう改革後の地名を列記している。基肄郡以外も里の名称所在を不明とする例が多いものの、やはり基肄郡と同様に、当時における最新の情報を載せている点が注目され

る。

明治二十二年の改革による新地名は、明治二十一年に草稿を書き始めた国会本には当然のことながら引かれていないが、その後、明治二十七年に清書された甲本にはこのことが書かれている。こうして清書と加筆をくり返し、その都度知り得た最新の情報を加えながら、より精細な地名考証を行なっているといえる。

次に、②多くの文献を引用していることについてであるが、『肥前風土記纂註』には、六国史をはじめとする史書や、『万葉集』などの和歌集、『元禄国絵図（元禄図と表記されている）』などの地図、「明治十年ノ調」などの行政の記録、「肥前古跡詠」など現在容易に見ることのできない地方史料の類、『海東諸国記』といった外国の記録、など、三百種類を超える文献が引かれている。

こうした文献は、草稿の段階ですでにこの数が引かれていたのではなく、何度も清書をくり返していくうちに追加されたものである。しかも、新たな文献の追加は文献ごとにまとまって行なわれたようで、どの段階でどの文献を加えたのかがある程度わかるようになっている。たとえば、国会本ではみられなかった河上文書の引用は、甲本では八箇所、乙本では十七箇所みられる。この河上文書のなかに「河上社正応五年造宮用度支配総田数文書」と題するものが引かれているが、これは乙本にしか引用がなく、しかも、傍書形で記

されているので、本文を清書してから加筆されたようである。

ここにいう河上文書とは、河上神社、すなわち肥前国一宮の興止日女神社に関する文書である。前述のように貞幹は『淀姫神社雜記』を著していることから、河上文書を入手していたと思われる、入手の時期はおそらく、甲本の清書をはじめる前だったのではないかと考えられる。そして乙本の清書が終わったあとで「河上社正応五年造宮用度支配総田数文書」を入手したために加筆を行なったと考えられる。このような事情があつて、特定の文献をまとめて追加したのではないかと思われる。

このほか、あとから文献を入手したことがわかる例にあげられるのが、前述の「明治十年ノ調」である。ここにいう「明治十年ノ調」は行政記録の一種と考えられ、人口や戸数、田畑の数などを記したものである。このような記録は明治十年のものに限らず、これ以外に、八年・九年・十二年・二十一年・二十四年・二十五年・二十六年・三十一年の記録が引用されている。これらの記録も、入手とともに随時追加されていたと考えられる。

また、かつて引いていた文献に代わり、新たな文献に差替えている場合もある。総記の「駅一十八所」に施された注釈がそれであり、諸本の記述をあげると次の通りである。

（国会本）

【驛】『和名抄』二、驛和名無末也。（後略）

（甲本）

【驛】『箋注和名抄』二、「唐令」云、諸道須置驛者。每卅里置一

驛。（音釋无末夜見古今澤六帖歌枕冊子）若地勢險阻。及無水草処。随

便置之。（○海録碎事唐制三十里置一馬。即是『説文』驛置騎也）（後略）

（乙本）

【驛】『箋注和名抄』二、「唐令」云、諸道須置驛者。每卅里置一

驛。（音无末夜見古今澤六帖歌枕冊子）若地勢險阻。及無水草処。随便

置之。（○海録制三十里置一驛。即碎事唐是『説文』驛置騎也）（後略）

（丙本）

【驛】『箋注和名抄』二、「唐令」云、諸道須置驛者。每卅里置一

驛。（音釋无末夜見古今澤六帖歌枕冊子）若地勢險阻。及無水草処。随

便置之。（海録碎事唐制三十里一驛。即是『説文』驛置騎也）（後略）

これを見ると、国会本は『和名抄』を引いているのに対し、甲本・乙本・丙本はともに『箋註和名抄』に差替えてある。甲本・乙本・丙本の間で文字に多少の異同があるものの、内容に大きな違いはなく、誤写とみてよさそうである。

『箋註和名抄』は、狩谷棧斎の編集した『和名抄』の注釈書で、全十巻。文政十年（一八二七）の成立で、刊行されたのは明治十六年（一八八三）である。『和名抄』の注釈に、和漢の文献を多く引用し

ているのが特徴である。国会本に『箋註和名抄』の引用が一例もないことを考えると、草稿を執筆しているときには入手していなかった可能性が考えられる。

文献の引用に関しても、地名考証の場合と同様に、貞幹が入手した最新の情報を逐一盛り込んでいった結果、三百種類を超える引用となったのではないだろうか。

このほか、注釈に『万葉集』や『古今和歌集』といった和歌集を多数引用している点が注目される。松浦郡の「郡」の注釈のなかに、「松浦」と詠った和歌を、『万葉集』・『新古今和歌集』などから三十首を引き、さらに頭注で二十二首をあげている。頭注に引かれている和歌は、甲本をみると二枚の附箋に草書で記されており、本文とは趣が異なる。この部分は乙本では頭注となっているものの、原本は附箋として貼付されていたものかもしれない。

また、松浦郡の「玉島小河」の注釈にも和歌が多く引かれている。ここでは「玉島」と詠った和歌を、『万葉集』からの十首に続けて、『続古今和歌集』などの勅撰集や、『家房集』などの歌集から十七首引用している。これに加えて乙本では、別紙に草書で「玉島」が含まれる和歌を十二首記している。別紙の冒頭には挿入を示す記号があり、本文にも同様の記号が附されている。挿入の記号が附されている場所は、和歌の引用の末尾で、青柳氏説の上であるから、のち

に追加したときに一箇所にとめようとしたものと思われる。これらの和歌が別紙に記されているのは、おそらく原本では附箋として貼付されていたのであろう。

貞幹は、経歴でもふれたように、『百歌選』や『増訂樟葉六歌仙』を著すなど、和歌にも造詣が深い人物であった。地名解説に和歌の引用が多いのは、和歌に関して豊富な知識をもっていた貞幹の独自性がよく表われた注釈といえる。

次に、③諸家の説を多く引いている点についてみていきたい。諸本全体を通してみると、全部で五十四人の説が引かれている。貞幹は先学を引用する場合、「丁氏曰（○○人）」というように、その人物の出身地まで記している例が多い。

引用された人物の出身地をみると、肥前（土人と記される場合もある）が九人でもっとも多く、次いで肥後が四人、筑前が三人など、九州出身者が多い。そして、引用数が多いのは、本居宣長の三十一箇所、次いで伊藤常足の二十五回、栗田寛十九回（いずれも乙本）と続く。諸本を比較すると、引用の人数や回数に大きな違いが出ており、何回も清書をしていくうちに、諸家の説の取捨選択がなされているように思われる。

たとえば、国会本をみると、南里有隣の説が八箇所にわたって引かれているが、甲本をみると「南里氏曰」とされていた箇所のほと

んどが見消、あるいは記述が完全になくなっており、一箇所のみの引用となっている。乙本も甲本と同じで一箇所しかみられない。

また、国会本では三箇所しか引用がない栗田寛の説は、甲本の段階で十三箇所に増え、さらに乙本になると十九箇所となっている。国会本の三箇所は頭注の形で記されていることから、最初からあった記述ではなく、あとから加筆されたものと思われる。栗田氏は、国会本の起稿から十一年後の明治三十二年に『標注古風土記』を刊行しており、その凡例には、貞幹が栗田氏に贈った草稿（国会本の原本）と、貞幹が校訂した『肥前国風土記』の写しを引用したことが書かれている。貞幹と栗田氏は、自身の著作の草稿を贈るほど親密な関係にあったことを考えると、栗田氏に草稿を贈ってから甲本を起稿する明治二十九年までの間にも学問的な交流があったのではないか。こうしたやりとりが甲本で増加した「栗田氏曰」というくだりに反映されたと推測される。

最後に、④未だ先学が指摘していないことに言及している箇所をみてみたい。貞幹は多くの文献や学説を引用するだけでなく、すぐれた指摘をしている。総記にある肥前国という名称の由来について、『釈日本紀』所引の『肥後国風土記』逸文を引いて注釈している部分がその一例である。その箇所をあげると次の通りである。

『肥後風土記』（『釈日本紀』ニ引タリ）ニ、肥後国者。本與肥前国。

合為一國。昔崇神天皇（此御名モトハ此記ノ如クナリシヲ、後人ノ叨ニ改メシナラン）之世。益城郡朝来名峰。有土蜘蛛。名曰打猿頸猴。二人率徒衆百八十餘人。蔭於峰頂。常逆皇命。不肯降服。天皇勅肥君等祖。健緒組遣誅彼賊衆。健緒組奉勅到来。皆悉誅夷。便巡國裡。兼察消息。乃到八代郡白髮山。日晚止宿。其夜虛空有火。自然而燎。稍々降下。着燒比山。健緒組見之。大懷驚怪。行事既畢。參上朝廷。陳行狀。奏言臣辱被聖命。遠誅西戎不霑刀刃梟獍自滅。自非威靈何得然之。更举燎火之狀奏聞。天皇下詔曰。剪拂賊徒。頗無西眷海上之勲。誰人比之。又火從空下。燒山亦怪。火下之國可名火國。即举健緒組之勲。賜姓名曰火君健緒組。便遣治比國。因火曰火國。後分兩國。而為前後トアリ。能ク本文ニ似タリ。

この引用箇所で注目すべきは、『肥後国風土記』は『肥前国風土記』と内容が似ているとしている点である。九州の風土記は、文体の類似性から、太宰府で一括して編修されたとの指摘がある²¹。貞幹はそこまで言及していないものの、肥前・肥後両国の風土記の本文の類似性に、いち早く気づいたことの意味は大きい。

以上が『肥前風土記纂註』の内容の特徴である。ここから言えるのは、最新の文献や説を多く引用するだけでなく、現在の研究につながるすぐれた指摘をしており、注釈書としてはかなり精度が高い

といえる。

五、丙本について

最後に、これまで、どの本を書写したものなのか不明となっていた丙本について述べておきたい。丙本の書誌的データは前述の通りであるが、植垣氏によれば、端書にある岡泰雄氏が所持していた写本は、いつの成立なのかは不明という²²。植垣氏はこの論考を書かれたとき、甲本について「実は私は未見であつて」といい、四種類全ての写本を見ておられなかった。そのため、諸本の比較ができずに不明とするほかなかったと思われる。そこで諸本を比較し、丙本がどの本を書したもののかを考察してみたい。

まず、総記の「朝来名峰」に附された注釈を例にあげてみたい。

（国会本）

○朝来名峰 詳カナラス。

（甲本）

○朝来名峰 阿蘇惟治氏（阿蘇男爵ノ祖）曰、此山ハ本郡沼田山津莊

ニ属ス。

（乙本）

○朝来名峰 阿蘇惟治氏阿蘇男爵ノ祖曰、此山ハ本郡沼田山津莊

ニ属ス。今日或曰、本郡福原村ニアリト曰処ナリヤ。

(丙本)

○**朝来名峰** 阿蘇惟治氏（阿蘇男爵ノ祖）曰、此山ハ本郡沼山津莊

ニ属ス。

これを見ると、丙本の記述は甲本と同文となっている点が注目される。ちなみに、乙本の「今日或曰」以下の部分は「莊ニ属ス」の左傍に記され、「属ス」の下に挿入の指示あることから、乙本の段階で加筆されたものである。

次に「西戎」に附された注釈をあげてみる。

(国会本)

○**西戎** 土蜘蛛打猴頸猿等ヲ云フ。上ニ引ケル『日本紀』ニ、四

道將軍以平戎夷之状奏焉トアル戎夷モ此等ノ者ヲ云ナレハ、京ヨリ遠キ鄙ノ国々ヲ戎トモ夷トモ云ヒシナラン。

(甲本)

○**西戎** 土蜘蛛打猴頸猿等ヲ云フ。上ニヒケル『日本紀』ニ、四

道將軍以平戎夷之状奏焉トアル戎夷モ此等ノ者ヲ云コトナレハ、其頃ハ京ヨリ遠キ鄙ノ国々ヲ戎トモ夷トモ云ヒシカ也。

(乙本)

○**西戎** 此ハ打猴頸猿等ヲイフ。上ニヒケル『日本紀』ニ、四道將軍以平戎夷之状奏焉トアル戎夷モ此等ノ者ヲ云シナレバ、其

頃ハカク云シナラン。

(丙本)

○**西戎** 此ハ打猴頸猿等ヲイフ。上ニ引ケル『日本紀』ニ、四道將軍以平戎夷之状奏焉トアル戎夷モ此等ノ者ヲ云フコトナレバ、其頃ハ京ヨリ遠キ鄙ノ国々ヲ戎トモ夷トモ云ヒシカ。

これらの文を比較すると、国会本にあった「土蜘蛛」は、甲本で「此ハ」に訂正されている。この部分は乙本・丙本ともに「此ハ」となっており、国会本の「頸猿」とある「猿」は、甲本で「猴」に訂正されているが、乙本・丙本は「猿」ままである。また、傍点を附した語尾に注目してみると、国会本「云ヒシナラン」、甲本「云ヒシカ」、乙本「云ヒシナレバ」、丙本「云ヒシカ」とある。甲本に注目してみると、元は「云ヒシナラン」とあり、「ナ」に線を一本足して「カ」に書き変え、「ラン」を見消とし、最終的に「云ヒシカ」としている。訂正後の甲本の記述は、丙本の記述とほとんど同じといえる。

最後に、「後分両国」の注釈をあげると次の通りである。

(国会本)

○**後分両国** 此ハ何レノ時代ナラン。『日本紀』（成務天皇五年九月）

ニ、令諸國以郡国立造長。縣邑置稻置。並賜楯矛以為表。則隔山河而分国縣。隨仟佰以定邑里トアルヲ始メ、允恭・孝徳・天

武ノ天皇等ノ時ニ段々、改革ヲ加へ、嵯峨天皇ノ朝ニ至リテ今ノ如ク定リシナラン。然ルヲ『長典隨筆』ニ、崇峻天皇二年依上宮太子奏分卅三箇国成六十国也。マタ『日本略記』ニ、敏達天皇ノ御宇ニ聖德太子ノ御異見ニテ六十六箇国ニ被割ケリ。マタ『塵滴問答』ニ、文武天皇御宇、国ヲ割テ六十六箇国ニ定メ給フ。マタ『和事始』ニ、杖逸^{林カ}力『節用集』ニ、文武天皇ノ御宇ニ、六十六国ニ分チ給フナトアルハ誤リナリ。(後略)

(甲本)

○**後分両国** 此ハ何レノ時代ナラン。『日本紀』(成務天皇五年九月)

ニ、令諸國以郡国立造長。縣邑置稻置。並賜楯矛以為表。則隔山河而分国縣。隨仟佰以定邑里トアルヲ始メ、允恭・孝德・天武ノ天皇等ノ時ニヲリ、改革ヲ加へ、嵯峨天皇ノ朝ニ至リテ今ノ如ク定リシナラン。然ルヲ『長典隨筆』ニ、崇峻天皇二年依上宮太子奏分卅三箇国成六十国也。マタ『日本略記』ニ、敏達天皇ノ御宇ニ聖德太子ノ御異見ニテ六十六箇国ニ被割ケリ。マタ『塵滴問答』ニ、文武天皇御宇、国ヲ割テ六十六箇国ニ定メ給フ。マタ『和事始』ニ、林逸力『節用集』ニ、文武天皇ノ御宇ニ、六十六国ニ分チ給フナトアルハ誤リナリ。(後略)

(乙本)

○**後分両国** 此ハ何レノ時代ナランカ。『日本紀』成務天皇五年

九月ニ、令諸國以郡国立造長。縣邑置稻。並賜楯矛以為表。則隔山河而分国縣。隨仟佰以定邑里トアルヲ始メ、允恭・孝德・天武ノ天皇等ノ時ニヲリ、改革ヲ加へ、嵯峨天皇ノ朝ニ至リテ今ノ如ク定リシナラン。然ルヲ『長典隨筆』ニ、崇峻天皇二年依上宮太子奏分卅三箇国成六十国也。マタ『日本略記』ニ、敏達天皇ノ御宇ニ聖德太子ノ御異見ニテ六十六箇国ニ被割ケリ。マタ『塵滴問答』ニ、文武天皇御宇、国ヲ割テ六十六箇国ニ定メ給フ。マタ『和事始』ニ、林逸力『節用集』ニ、文武天皇ノ御宇ニ、六十六国ニ分チ給フナトアルハ誤リナリ。(後略)

(丙本)

○**後分両国** 此ハ何レノ時代ナラン。『日本紀』成務天皇五年九月ニ、令諸國以郡国立造長。縣邑置稻置。並賜楯矛以為表。則隔山河而分国縣。隨仟佰以定邑里トアルヲ始メ、允恭・孝德・天武ノ天皇等ノ時ニヲリ、改革ヲ加へ、嵯峨天皇ノ朝ニ至リテ今ノ如ク定リシナラン。然ルヲ『長典隨筆』ニ、崇峻天皇二年依上宮太子奏分卅三箇国成六十国也。マタ『日本略記』ニ、敏達天皇ノ御宇ニ、聖德太子ノ御意見ニテ六十六箇国ニ被割ケリ。マタ『和事始』ニ、林逸力『節用集』ニ、文武天皇ノ御宇ニ、六十六国ニ分チ給フナトアルハ誤リナリ。(後略)

これを見ると、丙本のみが「マタ『塵滴問答』ニ、文武天皇御宇、

国ヲ割テ六十六国ニ定メ給フ。」という一文(二十六字)を欠いている点が目につく。これは、おそらく『塵滴問答』の次に引かれている『和事始』と内容がよく似ており、国会本・甲本・乙本ともに『塵滴問答』と『和事始』の引用の開始位置が隣接しているので、書写の際に目移りしたのかもしれない。文体に注目すると、冒頭の傍点部分は国会本・甲本・丙本は「時代ナラン」とするのに対し、乙本は「時代ナランカ」としている。次の傍点部分をみると、国会本のみが「段々」とするのに対して甲本・乙本・丙本は踊り字か否かの違いはあるものの「ヨリヨリ」としている。こうして比較すると、若干の違いはあるが、丙本の文体は、『塵滴問答』の引用を欠いていることを除いて、甲本の文体に近いといえる。

丙本は貞幹の序文と総記のみしかないので、判断は難しいが、文体や内容から、貞幹の自筆稿本である甲本を写したのではないかと推測される。そこで問題として残るのが、丙本のみが重野安繹の序文を欠いているという点である。甲本が起稿されたのが明治二十九年(一八九六)八月で、重野安繹の序文が書かれたのが明治三十六年(一九〇三)七月であるから、この間に書写されたものではないだろうか。

おわりに

以上、『肥前風土記纂註』についてのべてきた。本書は『肥前国風土記』に最初に注釈を施したもので、研究史上で逸することのできない成果である。注釈書として優れている点をあげると次の通りである。

- ①風土記の本文を現在では披見が困難な諸本でもって校合していること。
- ②本文の注釈に三百種類を超える文献を利用しており、そのなかには地方書など、一般的に入手が困難なものもあること。
- ③五十四人にもおよぶ諸氏の説を引き、常に最新の説を引用していること。
- ④地名考証が詳細で、本文にみえる地名を、執筆当時の最新の記録に基づいて比定を行なっていること。

- ⑤肥前・肥後の風土記の文体の類似性や、異種の本文の存在にいち早く気づき、簡単な指摘をしていること。

貞幹が『肥前風土記纂註』の草稿を著してから百二十五年あまり経た今日、研究は進んだものの、これを超える詳細な注釈書は出ていない。貞幹が「心血を注い²³」だという『肥前風土記纂註』は、まさに貞幹の研究の集大成というにふさわしいものである。

〔補注〕

- 1 平田俊春校訂「校本肥前風土記」（佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会編『校本肥前風土記とその研究』所収、一九五一年二月）
- 2 秋本吉郎校注『風土記』（日本古典文学大系、岩波書店、一九五八年四月）
- 3 久松潜一校注『風土記』上（日本古典選、朝日新聞社、一九五九年十月）
- 4 植垣節也校注・訳『風土記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年十月）
- 5 植垣節也「校訂・肥前風土記纂註（1）」『風土記研究』六、一九八八年八月）、同氏「校訂・肥前風土記纂註（2）」『風土記研究』七、一九八九年五月）。
- 6 南里有隣は、名を伝作・元易・居易ともいう。文化九年（一一八二）一月十一日に生まれた肥前国佐賀藩出身の国学者である。父に漢学を学び、のちに江戸の和学講談所で国学を学ぶ。天保九年（一八三八）に佐賀藩に戻り、同十一年、弘道館和学寮の教授となる。また、本教館という私塾を開き、国学や和歌を教えた。元治元年（一八六四）十月十四日、五十三歳で死去。著作が多いものの、『肥前旧事』以外は未刊で、ほとんどが散逸してしまっている。
- 7 『肥前旧事』巻之一には、神武天皇以下崇峻天皇までの名が列ね

てあるが、実際の記述は安寧天皇から始まっている。

⁸ 巻之一は神武天皇から崇峻天皇まで、巻之二は推古天皇から桓武天皇まで、巻之三は平城天皇から醍醐天皇まで、巻之四は朱雀天皇から崇徳天皇まで、巻之五は近衛天皇から龜山天皇まで、巻之六は後宇多天皇から光厳天皇の建武元年（一一三三）三月の後醍醐天皇の復位までを記す。

⁹ 『肥前叢書』第一輯（肥前史談会編、一九七三年八月）

¹⁰ 植垣節也「肥前風土記纂註」について」『親和女子大学研究論叢』一二、一九七九年二月）

¹¹ 序文で律本について言及しているにもかかわらず、律本が校異で一度たりとも引かれていないのが目につく。その理由として、貞幹が校訂した『肥前国風土記』の写本（佐賀県立図書館所蔵、請求番号図〇四〇・二）の奥書にある次の文が参考になる。

○ 同 日 異本ヲ以テ校ス 其奥二原本奥書曰按朝野群

載延長三年太政官下符於五畿七道諸國司搜求部内尋問古老令勘進風土記而星霜推移或罹兵燹泯没不傳其存者肥前豊後兩記耳於肥前國大村人岩永常輔遊學尾州三年于此業成帰郷余以其旧典幸而存從叟写之聊記卷末并賦吾章一首以為別

ワカルレト又来ム秋ヲマツラ舟波ノ千里モ月ニタトラシ 天明六年丙午仲秋 葎菴河村秀根 寛政十二庚申年六月十七日

城戸千楯 同年七月廿九日千楯主ノモタル本モテ書入ツ 上
田百樹 文化十癸酉六月十七日上田百樹主ノモタルフミモテ書
入ツ 六人部香二 安政五年十一月朔校 絲山貞幹

これを見ると、『肥前風土記纂註』に、律本としてあがっている本が、冒頭部分にもあるように、ここでは「異本」とされていることがわかる。そのため、九十三箇所ある異本の校異のなかに律本の校異が含まれていると考えられる。

¹² 国立国会図書館所蔵本、および佐賀県立図書館所蔵乙本の『肥前風土記纂註』に引かれた『肥前国風土記』の本文、および校異のみを抜粋し、校訂を加えたものに、林崎治恵『肥前風土記纂註』の風土記本文』『風土記研究』一六、一九九三年六月）があり、参考となる。

¹³ 秋本吉郎「風土記の伝播祖本と伝播初期の系譜」(『風土記の研究』、ミネルヴァ書房、一九六三年十月)

¹⁴ 平田俊春「肥前風土記諸本の研究」(佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会編『校本肥前風土記とその研究』一九五一年二月)

¹⁵ 高松寿夫「史料紹介」架蔵本『肥前国風土記』の性格―『肥前風土記纂註』所引「曼本」との関係を中心に―(『古代研究』四一、二〇〇八年二月)において氏の所蔵する明治初期の書写になる実観本系の写本から曼本の原態の復元するため、纂註が引く曼本の校異

を利用しているが、曼本の実態は依然として不明である。

¹⁶ 井上通泰「肥前風土記に就いて」(『歴史地理』五八・三、一九三一年九月)。ただし井上氏は、九州地方の風土記は、甲類・乙類・甲乙以外の、少なくとも三種類存在したと指摘している。

¹⁷ 坂本太郎「風土記と日本書紀」(『史蹟名称天然記念物』一七、五、一九四二年五月、同氏『日本古代史の基礎的研究』上・文献篇(東京大学出版会、一九六四年五月)所収、その後『坂本太郎著作集』第四卷(吉川弘文館、一九八八年十月)所収)。

¹⁸ 小島憲之「風土記の述作」(『國語・國文』一六・四、一九四七年七月)の段階では甲乙二種の前後関係を断定できないとしていたが、その後、同氏『上代日本文学与中国文学』(塙書房、一九六二年九月)において、乙類は甲類を基として完成したとされた。

¹⁹ 坂本氏前掲注16参照。

²⁰ 荊木美行「九州風土記の成立をめぐって」(『風土記と古代史料の研究』所収、国書刊行会、二〇一二年三月)

²¹ 井上氏前掲注16参照。

²² 植垣氏前掲注10参照。

²³ 丙本冒頭の毛利龍一氏の端書による。

第三章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』―翻刻と校訂―

一、『肥前風土記纂註』の翻刻と校訂

【凡例】

一、底本は佐賀県立図書館蔵佐賀県乙本（略称、底本）とし、これに佐賀県立図書館所蔵佐賀県甲本（略称、甲本）・佐賀県立図書館所蔵佐賀県丙本（略称、丙本）・国立国会図書館所蔵本（略称、国本）を対校した。なお、丙本については序文と総記のみ対校に利用した。

一、体裁は、肥前国風土記の本文を一四ポイント、纂註の本文を一〇・五ポイントとした。

一、句読点は私見を以て施した。なお、肥前国風土記本文については句点で統一した。

一、注番号は【】に括って八ポイントとし、纂註が記す各注釈対象の末尾に示した。校異注の体裁については、纂註の文との混同を避けるため平仮名を用いた。

一、肥前国風土記本文中の分注は（）で括り一〇・五ポイント、纂註本文の分注は（）で括り八ポイントでそれぞれ記した。なお、纂註本文の分注の体裁は国本・甲本を参考にした。

一、注釈中に引用された書名は『』、文書名および律令格式等の条文名は「」で括った。

一、底本にある頭注は「」に括って八ポイントで記し、注釈対象の末尾に示した。

一、底本に見せ消ち・取り消し線・挿入などの書き入れがあった場合、断りなく訂正した。

一、底本の判読不能の文字は、他本を参照したが、他本で訂正することができなかったものに関しては、「□」を用いた。

一、風土記本文中のルビ・送り仮名は省略した。

一、風土記本文は、底本に甲本・丙本・国本・佐賀県立図書館所蔵糸山貞幹校訂『肥前国風土記』（請求番号図〇四〇／二）を対校したが、本翻刻では校合後の本文を採用することとし、校異は翻刻の末尾に「糸山貞幹『肥前風土記纂註』所引『肥前国風土記』と題し

て掲げた。

一、できるだけ底本の用字を採用したが、「冒」↓「詞」、「畧」↓「略」、「鑒」↓「鑑」、「迂」↓「遷」、「蘓」↓「蘇」、「夢」↓「多」、「灵」↓「靈」、「吳」↓「呉」、「輒」↓「軟」、「雞」↓「鷄」、「陰」↓「陰」、「夢」↓「夢」、「游」↓「遊」、「笑」↓「笑」、「貞」↓「貌」、「頽」↓「貌」、「髯」↓「鬣」というように、一部の異体字は通用字に改めた。

一、底本は複数名の筆跡が確認でき、分担の都合で生じたと思われる不必要な改行は私見により削除した。

一、「偁」を「称」とするなど、底本に明らかな間違いがある場合、甲本によって訂正したが、このような誤字脱字の類は断りなく訂正した。

一、諸本間に語尾などの表現に多少の相違があっても、文意が同じものに関しては校異の対象としなかった。

肥前風土記纂註

上

肥前風土記纂注序【1】

肥前風土記、寛政中、荒木田神主久老、始作標記印行、近時栗田博士寛着注古風土記、其肥前国、多引糸山貞幹說。余未識糸山氏、會糸氏、托人見寄示肥前風土記纂注、属余序之。即栗田博士所引者、裒集異本、參訂諸說、地理以證之、傳記以実之。盖糸山氏、生長其国、尽精力於此書、攷摭於博、今举其訂正一二、如佑嘉郡、年常下往、謂鰐魚三字、当在上文海神下、世田姫、土人曰與多比壳、浣姫、豊姫、並同訓。栗田博士、以為極允当、余曰、鰐魚註文錯誤、久老以下諸氏、所未發、詢為卓見、但亘理郷、日曰亘三字之辨、恐未正確、博士正說亦似闕明了。久老以曰為日訛是矣。曰篆文𠂔今昨日、曰篆文𠂔今日、日実也。周環無缺、日詞也。象開口、此其所以異、不必拘字形廣狹、曰王伐反、曰理和答利也。二字音讀乃為正格。和名抄、奥羽肥豊諸国、皆作曰理、日字不可訓和答。故後人妄改作亘耳。聞之大槻博士文彦、曰仙臺藩巨室亘理氏、其先塋墓碣、寛文以前、皆書曰理、幕府閣老等往書牘亦然。無作亘理者、可以為確證。然則和名抄曰理轉写之訛而、其作亘理年代、亦略可知也。抑余更有愚見焉。記中姫社條曰、珂是古自知神之在家、其夜夢見臥機云々。諸本以在字為句、家字属下。余謂家恐處訛、在處連讀、珂是古見幡之順風飛落、知神之在處。家字相似故誤、不然家其夜云々。不成語、凡古風土記之文、雜用国言音漢字、平実簡雅、無艱澁之態、所以後人不能学、但輾轉抄写、不免魯魚亥豕、当反覆攷訂以便読者、迨此書繕写全竣、栗田博士既没、余與博士有同僚之誼。故不辭其請、題詹言於卷端、以成博士称許此之意云尔。

明治癸卯七月 薩摩 重野安繹士徳甫

肥前風土記

(明治卅四年七月中清書【2】)

立言舎 糸山貞幹 纂註

【1】「肥前風土記纂注序……立言舎 糸山貞幹 纂註」まで丙本なし。

【2】「明治卅四年七月中清書」この部分、国本は「明治二十一年八月中清書」、甲本は「明治廿九年。其後段々書入八月中清書」、とす。丙本、これに該当する記述なし。

此題号、印本（奥書ニ、右一冊者。肥前国長崎人大家【3】惟年。所齎本也。原本誤謬尤多矣。寛政十一己未年三月。於京師旅寓校正之。加訓点畢。蓋依城戸千楯。長谷川菅諸等之需者也。皇太神宮権祢宜從四位下荒木田神主久老トアリ）

マタ湯本（奥書ニ、右肥前風土記者、所藏官之秘府也、湯谷某謹誌トアルヲ、寛政十年筑前人青柳種信氏力、備中人近藤春彦氏ヨリ借写シタルヲ、文化十二年、本国人三橋五麻呂氏力再写シタルナリ）ニハ風土記、肥前国トアリ。竈本（奥書ニ、右之風土記四帖。以竈御殿預家之傳本。令書写了。文政八年十月上旬。日秦公均。トアルヲ、天保八年、植栗延実氏力写シタルヲ、京師人谷森善臣氏力、再寫シタルナリ、四帖トハ、山城、伊賀、尾張、豊後、肥前ノヲ、四帖ニ綴レリ）ニハ肥前国トノミアリ。

今ハ曼本（奥書ニ、元祿十三年歲次庚辰冬十二月初五日。以曼珠院所藏之本書於高野村蓮華寺法仰実観。マタ、享保九年武藏人児島徳公。マタ同年源頼久トアルヲ、天保八年本国人南里元壽氏力傳写シタルナリ。此本ハ湯本ニ能似タリ）『幕府日記』ニ【4】、享保七年正月十四日。石川近江守被相渡候御書付 覚 一新国史ヨリ風土記迄ハ御庫ニ全部無之候。但風土記ハ豊後・出雲御庫ニ有之候トアリ。本記此頃迄ハ普ク流布セサルニヤ。據テ改ム。（下ニ葎本トアルハ、其奥書ニ、肥前国大村人岩永常輔游学尾州三年。于此業成帰郷。余以其国旧典幸而存從叟写之天明六年丙午仲秩葎菴河村秀根トアル本ヲ、寛政十二年京師人城戸千桶氏上田百樹氏等力寫シタルヲ、吾師篤舍六人部是香翁ノ文化十二年ニ傳写サレタル者ナリ。其他異本數種ヲ得タリ。皆少異アル凡テ異本ト云者是ナリ）此記ヲ勘進セシ年代ヲ粗^{ノ事}云ハニ、先輩ノ論說種々アリト雖モ、皆信シ難シ。伴信友氏（若狹人）ハ、肥前ノ風土記ノ体裁大抵、出雲ノ風土記ニ同シ。恐ラクハ同時ニ勘進スルカ。『出雲風土記』ハ、天平五年ニ勘進スル所ナリ。只文章ニ巧拙アルヲ以テ、或ハ出雲・肥前ノ風土記ヲ異時ニ出ル。トスレドモ、是レ兩國ノ本傳ノ体裁ト撰者ノ優劣トニ由ルノミト云ヒ、中山信名氏（常陸人）ハ、肥前ノ風土記、和銅年間ニ勘進スル所ヲ改定スル者ナリト云ヘリ。三善清行力意見ノ封事ニ謂フ所ノ、去寛平五年任備中介。彼国下道郡。有迹磨郷。爰見彼国風土記云々ト云テ引ク所ノ、彼国ノ風土記ノ文ヲ案スルニ、此記ニ比スレバ稍後世ニアルヲ覺ユ。寛平中ノ文已ニ此ノ如ク古シ。況ヤ此記ノ文ノ彼ヨリ古キニ於テヲヤ。然レバ此記ノ勘進ノ延長ノ前ニアルコト知ルベシ。此二氏ノ考ヘ、実ニ確正ト云ベシ。今井似閑氏（京師人）カ、風土記ノ今日ニ全キモノハ、出雲一国ノミ。伊勢・豊後コレニ亜グト云ハ、此記ヲ勢豊二風土記ノ比ニアラザルトスルカ。又ハ未タ之ヲ見ザリシカ。怪シムベシ。尾崎雅嘉氏（摂津人）カ風土記ノ、殘篇ヲ見ルハ、具眼ノ人ニ非ザレバ、真偽ワカチ難シ。今試ニ国々ヲ序次シテ、世ニ散布スル所ヲ舉ル者ナリト云テ、彼ノ贋偽ノ総国風土記ヲ列シ、其中ニ出雲・豊後ノ風土記ト此記トヲ載セタルハ、玉石ヲ混淆スルナリ。河村秀根氏（尾張人）カ、案『朝野群載』延長三年。太政官下符於五畿七道諸國司搜求部内。尋問古老勘進風土記。而星霜推移或罹兵燹泯没不傳其存者肥前豊後兩記耳。トイフ。則チ、兩記ヲ以テ延長ノ勘進トス。亦深く考ヘザリシト云ベシ。彼ノ延長ノ官符ニ由ルニ、諸国ノ風土記此時已ニ烏有二属セシモノ多キヲ知ルベシ。此記其時ニアタリテ、再進セシヤ。徴スベ

キ由ナシ。而シテ何時ニ殘闕セシカ。亦知ル可ラズ。若シ此全本ヲシテ、今ニ傳ハラシメバ、金科玉條當ナラサルベシ惜イ哉。本記ノ載スルトコロ【5】、崇神天皇ノ世ヨリ推古天皇ノ世ニ至ル。神三柱・天皇五柱・皇后一柱・皇子二柱・臣民二十九人ナリ。則チ物部經津主神・世田姫・高来菜津彦・御門城入彦天皇（崇神）・大足彦天皇（景行）・誉田天皇（応神）・武少廣国押楯天皇（宣化）・豊御食炊屋姫天皇（推古）・氣長足姫尊（神功）・日本武尊・来目皇子・打猴頸健渚沮・卜部殖坂珂是胡・海部直島・大荒田・大山田女・狹山田女・大伴狹手彦連・弟日姫子・海松樞媛・大屋田子・大身・阿曇連百足・大耳・垂耳・八十女・大白・小白・記直祖釋日子・神代直速来津媛・健津三間・篋築浮穴沫媛・鬱比袁麻呂・神大野宿祢等ナリ。（淡路人鈴木重胤氏曰、風土ヲ国体ト云フコトハ【6】、『出雲風土記』ニ、国之大体。首震尾坤。東南山西北属海。ト見エ、マタ、其文中ニ吾敷坐地者国形宜トモ、国稚美好有国形如画鞆哉ト見ユ。然レバ風土記ノ訓ハ、国形文ナルヲ思フヘシ）

右文故事曰、御尋ニ付、諸向ヨリ上リ候。書物之覚云ニ、肥前風土記一冊 同一冊 云ニ 右文分正敷書ニテ、御用ニ相立可申候間、御目錄エ書入可申哉之旨、享保十二年未十二月、下田幸太夫相伺候处、同十七子年十二月二日、右伺之通相濟候旨、土岐左兵衛佐、被申渡互四月御目錄ヘ載之。

好書故事曰、肥前風土記一冊 肥前風土記一冊

右二部出所不知、前一部ハ有馬兵庫頭被相渡但前一部ハ、京師ノ浪人、羽倉春滿差出之、其後奥御右筆、下田幸太夫写之、句読ヲ加ヘ差上ル由云傳ス。後一部ハ有馬兵庫頭申傳云、御納戸山本八郎右衛門渡之【7】。

【3】「大家」、底本・国本・甲本「大家」、丙本「大塚」とす。

【4】『幕府日記』ニ……本記此頃迄ハ普ク流布セサルニヤ」国本なし。

【5】「本記ノ載スルトコロ……神大野宿祢等ナリ」国本なし。

【6】「風土ヲ国体ト云フコトハ」この部分、丙本は「風土記ヲ国台ト云フコトハ」とす。

【7】「右文故事曰……御納戸山本八郎右衛門渡之」国本・甲本・丙本なし。

郡一十一所。郷七十。里一百八十七。

【郡】『後紀』（延暦十七三月）ニ、昔難波朝廷始置諸郡トアリ。本郡此時ヨリ十一所ト定メラレシカ詳カナラズ。『和名抄』ニ、肥前国管十

一。基肄。養父（夜不）。三根（岑）。神埼（加無佐喜）。佐嘉。小城（午岐国府）。松浦（万豆良）。杵島（岐志万）。藤津（布知豆）。彼杵（曾乃岐）。高来（多加久）。マタ「民部式」ニ、肥前国上管基肄養父三根・神崎・佐嘉・小城・松浦・杵島・藤津・彼杵・高木。マタ『海東諸国記』ニ、肥前州。郡十一ナドアリ。悉ク現存セリ。（然ルヲ『図書編』日本国図ニ、肥前州領十四郡。密奴米刺一拂掃迹坐首知坐迷子夜有迷法一溪知十不正倭磨辣法麻殺几馬子喇繼婆奇南奇呀迷古里失殺世トアルハ誤リ）

○**二十一所**此等ノ数字、印本大字ニ作ル。諸本ニ拠テ改ム。（下皆同シ）「公式令」ニ、凡簿帳。科罪。計贓過所抄榜之類。有数者为大字。マタ「民部式」ニ、凡諸国進官物。雜返抄。称其年物皆作大字ナドアリテ、常ノ一二三ナドノ字ハ、畫ノ少クシテ、差ヒ易キ故ニ、音モ義モ、近キ字ヲ借リテ、書クコト、古クヨリアルコトナリ。然レドモ此記ニハ、然ラズトモ、アリヌベケレバ、普通ノ字ニ、作ル方ヨロシ。「所」字異本ナシ。

○**郷七十**此三字、印本小書ス。異本ニ拠テ改ム。『和名抄』ニハ、四十四郷アリ。（各郡下ニ注スヘシ）二十六所ヲ、逸セシナラン。或ハ抄ノ時ニ至リテハ、七十ヲ四十四ニ合併セシナランモ知ルベカラズ。『続紀』（和同六年五月）ニ、畿内七道諸国郡郷トアレバ、此頃郷モ已ニアリタルナリ。『出雲風土記』ニ、依神龜元年式。改里為郷。トアル如ク、此記モ和銅奏上ノ後ニ、再勘セシ時ニ、里ヲ郷ニ改メ、此郷ハ則チモトノ里ニシテ、下ナル里一百云々ノ里ハ、彼ノ五十戸ヲ以テ為タル者ニハアラズ。至テ些少ノ村巷ナリシナラン。（「戸令」ニ、以五十戸為里トアリ、此里ハ後世ノ郷ナリ。其戸ハ同集解ニ、一戸内縦有十家者量便而割地他保耳トアリ。「田令」集解ニ引ケル慶雲三年ノ格ニ、一戸ノ内八丁以上為大戸六丁為上戸四丁為中二丁為下戸不在計限。マタ「民部式」ニ、凡封戸以正丁四人中男一人為一戸ナトアルヲモ考合スヘシ）

○**里一百八十七**此七字、印本小書ス。異本ニ拠テ改ム。今各郡下ノ里数ヲ挙タル所ヲ通算スルニ、一百八十五ナリ。サレバ七ハ五ノ誤リ力。（常陸人栗田寛氏曰【8】、「東大寺文書」ニ、「大宝二年戸籍」ニ、御野国味蜂間郡春部里。同国本實郡栗栖太里。同国加毛郡半布里。山方郡三井田里。肩縣郡肩縣里。各務郡川辺里。「大宝二年戸籍」、マタ同年豊前仲津郡丁里。上三毛加自也里トミエタリ。此内二丁里ハ『和名抄』ニ云エネト、川辺里ハ川辺郷、加毛郡半布里ハ加茂郡殖生郷、味蜂間郡春日郡ハ安八郡ニテ、春日部ハ後ニ池田郡ニ隸ラレシニヤ。此郡春日郷ヨリ本實郡栗栖太里ハ、本實郡栗栖田郷トアルモノト聞ユ。是孝徳ヨリ以後、大宝ノ頃ニハ未タ郷ト云称ナリ。後ノ郷ハ此時ハ里ナリシコトヲ知ルヘシ。『出雲風土記』ニ、依神龜元年式改里為郷トアルハ、只里ヲ郷ト改メタルノミニテ異ナルコトナキニ似タレト、然ニハ非ルヘシ。『同書』ニ、意宇郡云々郷別里參トアルニ心ヲ着ヘシ。是ヨリ先ニ里ト云シヲ、郷ト改メ郷下ニ里ヲ一郷ニミツニ充タル制度ナリ。『肥前風土記』ニ郡一十一所郷七十里一百八十七『豊後風土記』ニモ郡八所郷四十里一百十ナルトアルニテ、改里為郷トハ郷下ニ里ヲ置シ制ナルヲ知ルヘシ）此里八十戸ニテモ【9】、

二十戸ニテモ、一郷（五十戸）ニ足ラサル者ヲ云ルニテ、則チ後ノ村ナリ。又諸国ニ餘戸ノ里アルハ神龜四年ノ制ナリ。是ヨリ以前ニハ餘戸ト云称ナシ。大宝ノ制ニ至リテ改マリシコト知ルヘシ。今日「戸令」ニ、凡戸以五十戸。為里置長一人。若山谷阻險^{ケニ}地遠人稀之處隨量置トアリ。

【8】「常陸人栗田寛氏曰……改里為郷トハ郷下ニ里ヲ置シ制ナルヲ知ルヘシ」まで、国本は頭注にて記す。

【9】底本、以下の記述、「此里八十戸ニテモ、二十戸ニテモ、一郷（五十戸）ニ足ラサル者ヲ云ルニテ、則チ後ノ村ナリ。又諸国ニ餘戸ノ里アルハ神龜四年ノ制ナリ。是ヨリ以前ニハ餘戸ト云称ナシ。大宝ノ制ニ至リテ改マリシコト知ルヘシ。今日戸令ニ凡戸以五十戸為里トア置長一人若山谷阻險^{ケニ}地遠人稀之處隨量置リ」とす。甲本・丙本により改む。国本、この部分の記述なし。

驛一十八所。〈小路〉

【10】『箋注和名抄』ニ、「唐令」云、諸道須置驛者。每卅里置一驛。（音釋无末夜。見『古今澤六帖歌』・『枕冊子』）若地勢險阻。及無水草處。隨便置之。（○海録制三十里置一驛。即碎事。唐是說文驛置驛也）マタ「職員令」ニ、兵馬司。正一人。掌云々郵驛傳馬。烽城牧事。マタ太宰府。帥一人掌云々郵驛。烽候。至リ、今ノ筑前原田村ヨリ、本国田代裏木等ノ驛路ニ改マリタルハ、地ノ平坦ト人居ノ漸次ニ降下シタルトニ就シナルヘシ。西南シ麓村此處ニ大字宿村アリ。古ノ驛ノ在シ處ナラン。中原村大字原古賀ノ辺ヲヘ、神埼郡仁比山村ニ出テ少シ下リ、神埼町大字神埼ノ辺ヨリ、今ノ小城往還道ヲ西ニ往キ、佐賀郡春日村（古ハ国府此處ニアリ）ヲヘ、川上村名子屋橋ヲワタリ、小城郡小城町辺ヨリ南ニ折レ、東多久村大字別府（古ハ此處ニ在シ別府ナラン）ニ出テ、東松浦郡嚴木村ヲヘ、相知村ニ至リ川ノ東ヲ下リ、（當今ハ川西ホヲ本道トスレトモ、古ハ東方本道ナリシナラン）鏡村鏡渡ヲヘ、山ニ沿テ西シ、唐津村大字見貸（古ハ驛）ヨリ北ニ折レ、湊村大字湊ヲヘ、呼子村大字大友・小友（古ハ驛）ニ至リ、北松浦郡平戸ヲヘ、南松浦郡美弥良久ニ航シ、ソレヨリ外国ヘ往キシナラン。又支道ハ、東多久村別府（古ハ高来驛ト云シトソ）辺ヨリ、左シ多久村ヲヘ、杵島郡橋村大字鳴瀬藤津郡塩田村、今ハ武雄町ヲ本道トス。是ハ此處ニ温泉アリテ、地ノ繁華ナルニ就クナラン。東彼杵郡大村・北高来郡船越村・北高来郡山田村ヲヘ、南高来郡野鳥村辺ニ至リシナラン。

【10】驛の項目、国本は、

驛『和名抄』ニ、驛和名無末也。マタ「職員令」ニ、兵馬司正一人掌云々。郵驛傳馬烽城牧事。マタ太宰府帥一人。掌云々。郵驛烽候。マタ「公式令」

ニ、凡朝集使云々。西海道皆乗馬。マタ「田令」ニ、凡駅田皆随近給大路四町。中路三町。小路二町。マタ凡駅長烽長云々。免課役駅子烽子云々。免徭役。マタ「廐牧令」ニ、凡諸道須置駅者。無卅里置一駅。マタ凡諸道置駅馬大道廿疋。中路十四。小路五匹。マタ凡駅傳馬毎年國司檢簡。マタ「主稅式」ニ、駅馬直法肥前云々等十八國。上馬四百束。中馬三百五十束。下馬三百束云々。駅馬充損肥前云々等五十國十分。損二分。マタ「兵部式」ニ、肥前國駅基肆（十）疋切山。佐意。高来。盤水。大村。賀周。逢鹿。登望。杵島。塩田。新分。船越。山田。野島各五疋ナトアリテ、十五所ナリ。本文ヨリハ三所ヲ増ス。（筑前御笠郡原田駅ヨリ長崎港ニ至ル本國內ノ駅ハ、田代ヨリ三十一丁、裏木ヨリ一里二十三丁、中原ヨリ二里十五丁、神崎ヨリ一里十八丁、境原ヨリ一里十九丁、佐賀ヨリ二里十七丁、牛津ヨリ二里四丁、小田ヨリ二里十一丁、北方ヨリ一里十四丁、武雄ヨリ三里二十三丁、嬉野ヨリ二里三十五丁、彼杵ヨリ四里二十三丁、大村ヨリ二里三十四丁、永昌ヨリ三里三十一丁、矢上ヨリ二里十七丁、長崎ナリ。此ハ近キ世ノ定メナリ）とす。甲本・丙本、この下に「（維新ニ至リ、或ハ駅ヲ發シ、或ハ道ヲ改ム）」

という記述あり。また、**驛**の項目の下に続けて、

○**小路**「廐牧令」ニ、凡諸道置駅馬。大路（義解ニ、山陽道其太宰以去即為小路也。）廿疋。中路（義解ニ、東海東山道。其目外皆為小路也）十四。小路五疋。使稀之處國司量置不必須足トアリ。○案スルニ、古ヘノ官道ハ太宰府ヨリ西南ヲ指テ基肆郡城山ニ至リ、（今ノ原田駅ヨリ田代裏木等ノ馳路ニ改マリタルハ、地ノ平坦ト人家ノ漸次ニ降下シタルトニ就キタルナルベシ）西南ニ下リ養父郡養父村（此近隣ニ宿等アリ。即古ヘノ駅ナラン）立石村、三根郡綾部村ノ邊ヲヘ、神埼郡仁比山村ノ南ニ出テ少シ下リ、神埼駅ノ邊ヨリ今ノ小城往還ヲ西ヘ行き、佐賀郡國分寺村（國府此処ニアリ）ニ至リ名子屋渡ヲ過キ、小城郡小城町邊ヨリ南ニ折レ、別府駅（別府此処ニアリ）ニ出テ、東松浦郡厳木駅ヲヘ相知（馬場トモ云）駅ニ至リ、川ノ東ヲ下リ（当今ハ川ノ西ヲ本道トスレトモ、古ヘハ必ス東ヲ方ナリシナン）鏡渡ヲワタリ、山ニ傍テ登望村（古ヘハ駅ナリ）ニ至リ、平戸ヲヘテ美弥良又ニ航シ、ソレヨリ外國ヘ行きシナラン。又支道ハ別府駅（古ヘハ高来駅トモイフ。高来ハ多久ナリ）ヨリ左シ多久村ヲヘ、杵島郡鳴瀬駅藤津郡塩田駅（今ハ武椎ヲ本道トスレトモ、是ハコ、ニ温泉アリテ地ノ繁華ニ就シナラン）西彼杵郡大村駅船越駅北高来郡山田駅ヲヘ、南高来郡野島駅ニ至リシナルヘシ。

という記述あり。**小路**の項目、甲本・丙本は、

○**小路**「廐牧令」ニ、凡諸道置駅馬。大路（義解ニ、山陽道。其太宰以去即為小路也）廿疋。中路（義解ニ、東海東山道。其目外皆為小路也）十四。小路五匹。使稀之處。國司量不必須足トアリ。○案スルニ、古ノ官道ハ太宰府ヨリ西南ヲサシ、三養基郡基山村ニ至リ、（今ノ筑前原田村ヨリ本國田代裏木等ノ駅ニ改マリタルハ、地ノ平坦ト人居ノ漸次ニ降下シタルトニ就シナルヘシ）西南シ麓村、（此処ニ大字宿村アリ。古ノ駅ノ在シ処ナラン）中原村大字

原古賀ノ辺ヲヘ、神埼郡仁比山村ニ出テ少シ下リ、神埼町大字神埼ノ邊ヨリ今ノ小城、往還道ヲ西ヘ行き、佐賀郡春日村、(古ハ国府此処ニアリ)ヲヘ、川上村名子屋橋ヲワタリ、小城郡小城町辺ヨリ南ニ折レ、東多久村大字別府、(古ハ別府此処ニアリ)ニ出テ、東松浦郡厳木村ヲヘ、相知村ニ至リ、川ノ東ヲ下リ、(当今ハ川西ヲ本道トスレトモ、古ハ東方本道ナリシナラン)鏡村鏡渡ヲヘ、山ニ傍テ西シ、唐津村大字見貸(古ハ駅)ヨリ北ニ折レ、湊村大字湊ヲヘ、呼子村大字大友・小友、(古ハ駅)ニ至リ、北松浦郡平戸ヲヘ、南松浦郡美弥良久ニ航シ、ソレヨリ外国ヘ行きシナラン。又支道ハ東多久村別府(古ハ高来駅トイフ。高来ハ多久)辺ヨリ左シ、多久村ヲヘ、杵島郡橋村大字鳴瀬、藤津郡塩田村、(今ハ武雄ヲ本道ト「スレトモ」、^{保市}是ハ此処ニ温泉アリヲ、地ノ繁華ニ就シナラン)東彼杵郡大村・船越村、北高来郡山田村ヲヘ、南高来郡野鳥村辺ニ至リシナラン。

とす。

烽二十所。〈下国。〉

『日本紀』(天智天皇三年十二月)ニ、是歳於對馬。杵岐。筑紫国等。置防與烽。マタ『三代実録』(貞觀十二年二月)ニ、參議從四位上行太宰大貳藤原朝臣冬嗣。進起請四事。其一曰。軍旅之儲烽遂是切。而数十年來。国无機警雖有其備。未知調用。若有非常。何以通知。今須下。知管内国島試以举烽燧。彼此相通。以備不虞。若不言由。恐驚動物意。望請下知事旨。依件調諫。マタ「軍防令」ニ、凡置烽皆相去卅里。若有山岡隔絶。須遂^レ便安置者。但使相照見。不必要限卅里。マタ凡烽晝夜分時候望。マタ凡有賊入境。応須放烽者。其賊衆多少。烽数即級。並依別式。マタ凡烽置長二人。檢校三烽以下。マタ凡烽各配烽子四人。マタ「兵部式」ニ、凡太宰所部国放烽者。明知便舩。不問客主。举烽一炬者知賊者放兩三炬。二百艘以上。放三炬。マタ『箋注和名抄』ニ、『説文』云、烽燧(峯遂ニ音度布比。○「繼体紀」烽候同訓。「天智紀」烽訓爪二三未詳射駒山飛火見。『万葉』悲寧樂故京郷作歌)辺有警則举之。(○所用火部文『原書』烽作燧。『廣韵』烽燧上同。『原書』「燧」下有「候表」也。三字此『説文』『原書』「举之」作「举火」。『玉篇』作「举之」与此合)「唐式」云、諸置燧之处。置火臺々上插檄。(音厥俗云保久之。○廣本「置燧」作「置烽」。『漢書』司馬相如傳注引孟康曰、烽如覆米箕縣着契皐頭有寇則举之燧積薪有寇則燔然之也。『史記』索隱云、烽見敵則举燧有難則焚烽主昼燧主夜。『後漢書』光武帝紀注引『漢書』音義云、辺方備警急作高土臺。々々上作桔臬。々々頭有塊零。以薪草置其中。常低之有寇。即有燃火举之。以相告曰。烽多積薪寇至。即燔之望。其烟曰。燧昼則燔夜。乃举烽。『廣雅』曰。兜零篝也。按『説文』不載「燧」字是俗「燧」字燧陽燧也。『玉篇』「燧」亦作「燧」。按照射亦訓保久之与此同名)ナドアリ。記中二十九所ミユ。一所ヲ逸ス。

○**下国**此二字、異本ナシ。本記勘進ノ頃ハ、下国ナリシガ、戸口漸次滋殖シ、遂ニ上国トナリシナラン。「民部式」ニ、肥前国上云々。右為遠国。マタ『職原抄』ニ、肥前上。マタ『拾芥抄』ニ、肥前上遠ナドアリ。「官位令」ニ、從五位下上国守。從六位上上国介。同下国守。從七位下上国掾。從八位下上国目。少初位上下国目。マタ「職員令」ニ、大國守一人。(云々)介(云々)大掾一人。(云々)少掾一人。(云々)大目一人。(云々)少目一人。(云々)史生三人。マタ「田令」ニ、凡職分田。上国守二町二段。上国介二町。下国守上国掾一町六段。上国目一町二段。下国目一町。史生六段。マタ「公式令」ニ、凡諸国給者云々。下国二口。マタ「選叙令」ニ、凡在官身死及解免者。皆即言上。其国司大上国介以上。中國掾以上。並闕及下国守闕者。皆駈馳申太政官。任訖馳駈發遣。マタ「軍防令」ニ、凡太宰及国司並給事力。上国守七人。上国介六人。下国守上国掾五人。国目四人。下国目三人。史生二人。マタ「主稅式」ニ、若当年勘出物云々。上国滿八千束。下国四千束。即返帳。マタ『和名抄』ニ、律云、行程百里四圍為上。五十里四圍為下国ナトアリ。此ハ土地廣狹ヲ以テ等差ヲナシタルナリ)

城一所。

城『日本紀』(天智天皇四年八月)ニ、遣達率憶礼福留達率四比福夫。於筑紫大野。及^キ橡二城。(橡ハ基ニテ下ニ引ク『統紀』ノ基肄、『万葉集』ノ記夷ナラン或人、及橡ヲオヨロキト訓テ、『和名抄』ニ、豊前国筑城郡搦木ノコトナラント云ヘリ)マタ『統紀』(文武天皇二年五月)ニ、令太宰府。繕治。大野。基肄。鞠智。三城。マタ『三代実録』(元慶元年十二月)ニ、太宰府言。以主工城主船等。只官差年貢雜物。使太政官処分。依請焉。マタ「職員令」ニ、兵部省。卿一人。掌云々。城隍烽火事。マタ「軍防令」ニ、凡城隍崩頽者。役兵士修理。栗田氏曰【11】、『加賀本三代格』(十八)太政官符ニ、謹檢太政官去宝龜十一年十月廿三日下兵部省符。肥前国兵士五百人。軍毅二人。豊後国兵士六百。軍毅二人者。然則承前之例。或特加置望請批准前例。每團置大少毅各一人者。被右大臣宣稱。奉勅。依請。弘仁五年二月トアルハ、此城中ニアリシ兵士ナルベシ。青柳氏曰、此城址ハ基肄山ノ頂ニアリ。ソコヲ坊中山(今日基山村大字小倉ニアリ)ト云。其南ノ麓ニ、今モ城戸、(今日【1】小倉ニ同上アリ)マタ開屋(今日同上)ナド云村アリ。マタ城山口村(今日基山村大字宮浦ニアリ)モアリ。北ハ筑前御笠郡山谷村ニ接ス。

【11】「栗田氏曰……此城中ニアリシ兵士ナルベシ」国本なし。

【1】貞幹今日トカクヘキヲ、今日マタ貞幹曰、マタ案スルニト略セリ。マタ、○ハカリツケタル所モアリ。ヨム人之ヲ諒セヨ。

寺二所。〈僧寺〉。

〔寺下〕「寺」曼本「所」ニ作ル。本記神埼郡条ニ、寺一所。（僧寺）マタ佐嘉郡条ニ、寺一所。トアル是ナリ。各郡下ニ註スベシ。『続紀』（天平七年八月）ニ、勅曰。如聞此日。大宰府。疫死者多。思欲救療疫氣。以濟民命云々。府大寺及別国諸寺。讀金剛般若經云々トアル。諸寺ハ本文ノ如キ者ヲ云ナラン。

肥前国者。本肥後国合為一国。昔者。磯城瑞籬宮御宇御間城天皇之世。肥後国益城郡朝来名峰。有土蜘蛛打猴頸猿二人。師^ニ徒衆一百八十餘人^一拒^ニ捍皇命^一。不^レ肯^ニ降伏^一。朝廷勅遣^ニ肥君等祖健緒組^一伐之。

〔肥前国〕『和名抄』ニ、肥前（比乃美知乃久知）。マタ『古事記』（神世）ニ、生筑紫島。比島亦身一而有面五。每面有名。肥前国謂速日別。マタ「主税式」ニ、肥前国。正税公廨各廿万束。マタ凡肥前云々等国。毎年穀二千石。漕送對馬島。以充島司及防人等粮云々。マタ「主計式」ニ、凡貢糸者云々。肥前云々。右中糸。マタ肥前国（行程上一日半下一日）調綿紬十八疋。質布二十六端。御取鯨三百六十四斤。短鯨五百三十四斤。長鯨二十四斤。羽割鯨二十四斤。熬海鼠三百一十四両。塩四十五斛。自餘輸絹糸綿席薄鯨。マタ庸輸綿米薄鯨。マタ中男作物。斐皮。葉薦。苦防壁。韓薦。蒲薦。折薦。實附弥油絹。鯨腸。清鯨。マタ「民部式」ニ、西海道肥前国。上。（管基肆。養父。三根。神埼。佐嘉。小城。松浦。杵島。藤津。彼杵。高来）右為遠国。マタ凡諸国貢調庸者云々。西海道。納太宰府。（其出納帳並附正税使申送）マタ凡太宰府管内。諸国島。大帳調帳税帳。令府雜掌勘申。但云々。肥前等国副當国雜掌各得勘辨。マタ凡点仕丁者。每五十戸。二人不点廨丁其大替前年四月。省預勘録点人数申官下簿国司計帳之日点定。十二月下旬以前。附綱送省月内相替。令給粮其名簿先附大帳便進省。但云々。太宰管内並不在点限。マタ凡女丁者。總計諸不得過九十人。但云々。太宰管内並不在点限。マタ凡太宰府鼓吹丁云々。肥前五十四人。並免其徭役。マタ太宰府。并九国二島。選士資丁賜徭丁一人。マタ凡応造籍者。預前一年省録申官。待報施行職国官司依例勘造。其諸国附貢調使太宰付貢綿使。申送檢領訖。即録白返抄。マタ凡簿書者。国家重案。其所須紙染黃藥。必須堅厚。有不如法墮。即勘却。但西海道諸国書白紙。マタ凡每年所載（四勺益）符雜色人数。上国四十人。（式部省廿七人。治部省三人。兵部省十人）マタ凡西海道管内。

諸国自非當土百姓。不得売買墾田及占用田地。マタ凡進正税帳者云々。西海道諸国并島。二月卅日以前。送太宰府。々以加覆勘五月卅日以前申官。マタ凡諸国大祓馬云々。太宰府及肥前云々。並以牧馬充之。マタ凡云々。西海道等府国。新任官人赴任者。皆取海路。仍念縁海国。依例給食。但西海道国司。到府即乘傳馬。マタ『和名抄』ニ、肥前国。田万三千九百餘町。正公各二十万束。本額六十九万二千四百九十九束。雜額九万二千五百八十九束。マタ『拾芥抄』ニ、肥前田万三千四百六拾二町。(掌中曆コレニ日シ)マタ『伊呂波字類抄』ニ、肥前本田万四千四百三十二丁。上去府一日(○『海東諸国記』之ニ同シ。但行程日數ハ誤リナリ。上ノ「主計式」ヲ見ルヘシ)△ナドアリ。国ノ大体ハ丑位ナル三養基郡基山村ヲ首トシ、申位ナル南松浦郡玉之浦ヲ尾トス。其首ニ山アリ、基山(基肆山)トイフ。稍西シテ稍高キヲ、脊振(神埼郡)トイフ。逶迤蜿蜒西ニ走リ、筑前国ト峯頂ヲ以テ界トス。其北ニ支スル者ハ、唐津(東松浦郡)ノ諸山トナル。本脉ハ南ニ折ル。又西ニ弧スル者ヲ、平戸(北松浦郡)トイフ。絶テ而シテ復起リ五島(南松浦郡)トナル。本脉ノ南ニ極ル所ヲ長崎トイフ。長崎ニ至ラザル。數里ニシテ左ニ突出スル者ハ島原(南高来郡)ナリ。肥後玉名郡ト相對ス。又本脉ノ右ニ、支スル者アリ。左ニ曲リテ大村灣(東彼杵郡)ヲ抱ク。小島群(興山)ノ国ノ西ニ、散布スルモノ甚多シ。国ノ東ハ、千歳川(俗ニ筑後川ト云)ヲ以テ、筑後ト界ス。川ハ源ヲ肥後・豊後ニ發シ、基山ノ東南里許ノ所ニ出テ南下シ、在明海ニ入ル。筑前・筑紫郡原田村ト境ヲ接スル。基山村界ヨリ、長崎港外浦町標木ニ至ル。三十七里三十五丁、(外浦町ヨリ筑前ノ福岡、豊前ノ小倉へ、東京ニ至ル三百四十四里二十丁ナリ)「明治十年ノ調」【12】ニヨレバ、本国、二十二万九千五百五十四戸、五百〇八万五千〇五十三人、田圃十〇万九千二百二十三町六段三畝十六步九釐二毛、租税四十三万七千二百三十七石九斗八升三合三勺。「十二年ノ調」ニヨレバ、本国耕宅地、十四万七千三百八十六町、此價金四千五百二十五万八千六百円、人口百二十五万七千六百五十二ナリ。暑九十五度、寒三十度ニ至ル。土地肥沃ニシテ至ルトコロ耕作ニ通シ【13】、海ニハ魚鰕藻菜多ク、山ニハ石炭磁土アリ。「明治廿六年ノ調」ニヨレハ、佐賀縣ハ基肆・養父・三根・神埼・佐賀・小城・東西松浦・杵島・藤津ノ十郡ニシテ、一市六町百二十九村。土地東西十七里、南北十六里。「同廿五年ノ調」ニヨレハ、面積六十万里八杓。民有田四万九千九百二十八町七反、畑二万五百三十八町、宅地四千三百六十町七反、塩田四十一町一反、山林二万九千六百九十町、原野牧場二万七千四百五十九町九反、鑛泉池沼雜種地等七十三町四反。「廿四年ノ調」ニヨレハ、官有山村原野二万七千三百五十町五反、民有鑛山石炭七千八百六十七万五千七十四貫、十万四千六百六十戸、五十六万八千九百二十五口、国幣社一、縣鄉村社二百七十寺千十三。

【12】「明治十年ノ調」ニヨレバ……租税四十三万七千二百三十七石九斗八升三合三勺」国本なし。

【13】「土地肥沃ニシテ至ルトコロ耕作ニ通シ……縣郷村社二百七十寺千十三」 国本なし。

○肥後国 『和名抄』ニ、肥後。（比乃美知乃之利）マタ、肥後管十四。（田二万三千五百餘町。正公三十万束。本額百五十七万九千十八束。雜額七十七万九千百十八束）玉名。山鹿。菊地。阿蘇。合志。山本。飽田。託麻。益城。宇土。八代。天草。葦北。球麻。マタ「民部式」ニ、肥後国大云々。右為遠国。マタ『記略』ニ、肥後国為大国。マタ『伊呂波字類抄』ニ、肥後国上。去府三日下二日ナドアリ。

○昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ下ノ「者」字ナシ。

○磯城瑞籬宮御宇御間城天皇 異本「城」下ニ「入彦」二字アリ。『古事記』（崇神天皇段）ニ、御真木入日子印惠命（○崇神天皇）坐師木水垣宮。治天下也トアリ。磯城ハ大和二城上郡城下郡アリ是ナリ。本居翁曰、瑞籬ハ、ミヅ、シキ垣ト美称タル名称ナルヲ、宮号トセラレタルナリ。

○益城郡 『和名抄』【14】ニ、益城郡當麻。子按。加西。坂本。益城。麻部。富神。宅部。（○郷名）マタ『寛文印知集』ニ、百八十六村。マタ『加藤清正記』ニ、益城郡十八万五千七十七石九升二合八勺五才ナドアリ。

【14】『和名抄』ニ、益城郡當麻。子按。加西。坂本。益城。麻部。富神。宅部。国本・頭注にて記す。

○朝来名峰 【15】阿蘇惟治氏、阿蘇男爵ノ祖曰、此山ハ本郡沼山津莊ニ属ス。今日或曰、本郡福原村ニアリト曰処ナリヤ。

【15】国本、「朝来名峰」以下の部分「詳カナラス」とす。「今日或曰、本郡福原村ニアリト曰処ナリヤ」国本・甲本・丙本なし。

○土蜘蛛 『古事記』『日本紀』・諸国ノ『風土記』『塵漆塩裏抄』等ニ見エタル土蜘蛛ノ形状ヲ考フルニ、力強ク、或ハ徒衆多ク人ヲ害ヒ、世ヲミダス残心異行ノ者ナリ。多クハ岩窟土窖ナドニ住メリ。

○打猴サル頸ネ猴 異本「猿」ニ作ル。猿ハ猴サルニ同シ。『日本紀』（景行天皇十二年十月）ニ、於直入縣。○『和名抄』ニ、豊後国直入郡直入祢疑野有土蜘蛛。一曰打猴。二曰八田。三曰国摩侶。マタ『豊後風土記』ニ、昔者纏向日代宮御宇天皇（○景行天皇）行幸之時。祢疑野。有土蜘蛛。名曰打猴八田国麻侶等三人ナドアリ。肥後ト豊後トハ、接近ノ地ナレバ、打猴ハ彼此同人カトモ思ハルレド、崇神天皇ノ時ヨリ景行天皇ノ時マデハ、百年餘ヲ阻ツレバ、然ニハアラズ。

○徒衆 「徒」竈本「徒」ニ作ル。

○肥君等祖 此ハ下ニ「賜姓名曰火君健緒組」トアル。火（火ハ肥）君ニテ姓ナリ。等祖ハ衍ナラン。其ハ肥君トイフ。姓ハ當身ニ賜ヒツ

レバナリ。『続後紀』（承和 年月）ニ、筑紫火君貞直。マタ『播磨風土記』ニ、筑紫国火君等祖。マタ『日本靈異記』ニ、白壁天皇之世。肥前国松浦郡人火君之氏ナドアリ。此同族ナリ。『新撰姓氏録』ニ、松浦首豊島連同祖トアリ。豊島連ノ祖ハ、彦八井耳命ノ後ニテ、此モ同族ナリ。

○**健緒組** 『古事記』（神武天皇段）ニ、神八井耳命火君。阿蘇君等之祖也。マタ『旧事記』（十）ニ、火（肥ナリ）国造瑞籬朝以志貴多奈彦命兒遲男江命。（同記伊余国造条ニ、印幡国造同祖敷桁彦命兒速後上命。マタ印幡国造条ニ、神八井耳命八世孫伊都許利命トアレハ、遅男江命ト速後上命トハ兄弟ニテ、志貴多奈彦命ハ神八井耳命ノ後ナルコト明カナリ）定賜国造トアルハ、建緒組ノ本ノ名ハ遅男江命ナリシガ、今度ノ功ニヨリテ此美称（建ハ武緒ハ雄組ハ凝ナリ）ヲ賜ヒ、且下ニ此国ヲ治メシムトアリテ、国造ニ定賜ヒシナラン。藤田幽谷氏（常陸人）ハ、遅ハ建ヲ、江ハ組ヲ誤マレルナラン【16】、ト云ヘリ。サモアランカ。瑞籬朝廷賜国造トアルト、本文ト能合ヘリ。此人ヲ肥後ニ遣ハシ、土蜘蛛ヲ伐タシメシコトハ、『日本紀』（崇神天皇六年）ニ、百姓流離或有背叛。マタ（十年七月）遠荒人等。猶不受正朔是未習王化耳。マタ（十一年四月）四道將軍。以平戎夷之状奏焉ナドアルニ當レリ。（栗田氏曰【17】、『阿蘇系図』ニ、神八井耳命ノ後ニ敷桁彦命アリ。此命ノ子健緒組ナリ。又敷桁彦命此説ニヨレハ、大神ト健組トハ同胞ナリ。サレハ大神健緒組ト同ク、此頃ヨリ此所ニマシ、カ。景行天皇ノ時、始メテ頭ハレ給ヒシナラン。大神ノ裔ハ本支トモニ今ニ繁榮セリ。「景行紀」ニ、熊襲鼻師子市鹿文賜於火国造。「欽明紀」ニ、筑紫火君、注ニ、『百濟紀』ニ、筑紫君兒中君弟。「薩摩国天平八年正税帳」ニ、大領外正六位下勲七等肥君主帳外少正初位上勲十二等肥君廣竜。「東大寺正倉院文書」ニ、筑前国島郡川辺里。「大宝三年戸籍」ニ、肥君大虫壳・肥君宇志麻呂・肥君妹津壳・肥君根手・肥君忍坂・肥君麻泥壳・肥君石壳・肥君子首・肥君比呂麻呂・肥君武智利壳。又「同年同里戸籍」ニ、戸主進正八位上勲十等肥君猪手・正丁大領課戸男肥君与呂志・勲十等肥君泥麻呂・太哉手麻呂・久泥麻呂・夜盈麻呂・大健・小君・建女・肥君志許夫壳・意止壳・手志許夫壳・婦肥君方名壳・孫肥君淤麻呂・弥豆麻呂云々。此餘三十四人アリ。又戸主進大初位上肥君梨麻呂正丁課戸トアリテ、次ニ肥君ノ氏人十一名アリ。『姓氏録』ニ、肥直多朝臣同祖神八井耳命之後也ナドアルハ、健緒ノ後ナラン）

【16】「藤田幽谷氏（常陸人）ハ、遅ハ建ヲ、江ハ組ヲ誤マレルナラン」国本は頭注にて記す。

【17】「栗田氏曰……健緒ノ後ナラン」国本なし。

於^レ茲健緒組。奉^レ勅悉誅^ニ滅之^一。兼巡^ニ国裡^一。觀^ニ察消息^一。到^レ於^ニ八代郡白髮山^一。日晚止宿。其夜

虚空有^レ火。自然燦稍々降下。就^ニ此山^一燎之。時健緒組見而驚怪。参^コ上朝廷^一奏言。臣辱被^ニ聖命^一。遠誅^ニ西戎^一不^レ霑刀刃^一。梟賊自滅。自^レ非^ニ威靈^一。何得^レ然之。更舉^ニ燎火之状^一奏聞。天皇勅曰。所^レ奏之事。未曾所^レ聞。火下之國可^レ謂^ニ火國^一。即舉^ニ健緒組之勲^一。賜^ニ姓名^一曰^ニ火君健緒組^一。便遣^レ治^ニ此國^一。因^レ火曰^ニ火國^一。後分^ニ兩國^一而為^ニ前後^一。

於茲「茲」異本「是」ニ作ル。

○八代郡 『和名抄』ニ、八代郡肥伊・高田・豊福・木竹・小川。（○郷名）マタ『寛文印知集』ニ、八代郡六十一村。マタ『加藤清正記』ニ、八代郡。六万千七百七十七石八斗二升八合四勺六丈ナドアリ。（『衆妙集』・『名寄松葉』・『西遊記』・『図書編』・『海東諸国記』等ニモ見エタリ）

○白髮山 僧立辨氏（豊前人）曰、白髮山ハ本國球磨郡内ニシテ、日向諸縣郡ノ界ニ近キ白髮岳ヲイフニハ非サルカ。諸縣ノ地ヨリ見レバ得モイハズ、高ク聳テ名高キ山ナリ。（今日諸縣郡ノ界ニ近キ所ニテハ、餘リ遠キコニチスレハ如何アラン）伊藤常足氏（筑前人）曰、八代郡釈迦院ノ境内ニ大白峯アリ。コレ白髮山ナルベシ。中島廣足氏（肥後人）曰、白髮山、今其名ナシ。今ヨリ二百年許リ以前、其國ニ袈裟市トイヘル、盲人ノ覺書、民間ノ梁上ニアリシヲ、近頃取出シタリ。人ニ書セタル者ナルベシ。其書中ニ、昔火ノ降りタリシト云ハ、今ノ八代郡ナル種山ト云ル処ナル由記セリ。是古老ノ傳説ニテ此ノ種山ト云ルトコロ、風土記ノ白髮山ナル證トイフベシ。今日或曰八代郡比種山村白髮ト云所アリ。長瀬直幸氏（肥後人）曰、今八代郡ノ内ニ、白髮山ト云モノアルコトナシ。（今日カリ説ニアリ何レ直ナラン。實地ニ就テ能尋ズベシ）

○止宿 「宿」印本「峰」ニ作ル。曼本ニ拠テ改ム。

○自然燦 「燦」曼本「燎」ニ作ル。

○西戎 此ハ打猴頸猴^狻等ヲイフ。上ニヒケル『日本紀』ニ、四道將軍。以平戎夷之状奏焉トアル。戎夷モ此等ヲ云シナレバ【18】、其頃ハカク云シナラン。

【18】 甲本・丙本、この下に「其頃ハ京ヨリ遠キ鄙ノ國々ヲ戎トモ夷トモ云ヒシカ」という記述あり。

○火国 「火」ヲ「肥」トセシハ、『続紀』（和銅六年五月）ニ、制畿内七道諸國郡郷名。着好字。「民部式」ニモ見エタリトアルニ由テ、改

メツルナリ。

○**火君**「君」一本ナシ。

○**因火**荒木田久老氏（伊勢人）曰、火疑之誤手。竈本「火」ヲ「召」ニ作ル。

○**後分両国**此ハ何レノ時代ナランカ。『日本紀』成務天皇五年九月ニ、令諸国。以郡国立造長。縣邑置稻。並賜楯矛以為表。則隔山阿而分国縣。随阡陌。以定邑里トアルヲ始メ、允恭・孝徳・天武ノ天皇等ノ時ニ、ヨリ、改革ヲ加ヘ、嵯峨天皇ノ朝ニ至リテ、今ノ如ク定リシナラン。然ルヲ、『長典隨筆』ニ、崇峻天皇二年。依上宮太子奏。分卅箇国成六十箇国也。マタ『日本紀略』ニ、敏達天皇ノ御宇ニ、聖徳太子ノ御異見ニテ、六十六箇国ニ被割ケリ。マタ『塵滴問答』【19】ニ、文武天皇御宇、国ヲ割テ六十六箇国ニ定メ給フ。マタ『和事始』ニ、林逸力『節用集』ニ、文武天皇ノ御宇ニ、六十六国ニ分チ給フナダルハ誤リナリ。（本居翁曰、諸国ノ總テノ數ハ、古ニ幾許トモイヘルコト物ニ見ヘス。此モ孝徳天皇ノ御世ニハ髓ニ定マリツラン。後ニモ一國ヲニ二分ケヌニ、國ヲ一ニ合セナト、御世々々ニ彼比変リシモアリツルヲ、弘仁十四年ニ、越前ヲ割テ加賀ヲ建ラレテ六十八国ニ定マレル後、今ノ如クニシテ永ク革レルコトナシ。平田翁曰、肥前・肥後二国ニ分レタルハ、何ノ時トモ知レス。「神功紀」ニ、火前国ト見ユレハ、其ヨリ前カハタ分レシハ後ナレトモ、前ヘモ及ホシテカクハ書ルカ）『肥後風土記』（『新日本紀』ニ引タリ）ニ、肥後国者。本與肥前国。合為一國。昔崇神天皇（此御名モトハ此記ノ如クナリシヲ、後人ノ叨ニ改メシナラン）之世。益城郡朝來名峰。有土蜘蛛。名曰打猿頸猴。二人率徒衆百八十餘人。蔭於峰頂。常逆皇命。不肯降服。天皇勅肥君等祖。健緒組遣誅彼賊衆。健緒組奉勅到來。皆悉誅夷。便巡国裡。兼察消息。乃到八代郡白髮山。日晚止宿。其夜虛空有火。自然而燎。稍々降下。着燒比山。健緒組見之。大懷驚怪。行事既畢。參上朝廷。陳行狀。奏言臣辱被聖命。遠誅西戎不霑刀刃梟獍自滅。自非威靈何得然之。更举燎火之狀奏聞。天皇下詔曰。剪拂賊徒。頗無西眷海上之勲。誰人比之。又火從空下。燒山亦怪。火下之國可名火国。即举健緒組之勲。賜姓名曰火君健緒組。便遣治比国。因火曰火国。後分両国。而為前後トアリ。能ク本文ニ似タリ。

【19】「マタ『塵滴問答』ニ、文武天皇御宇、国ヲ割テ六十六箇国ニ定メ給フ」丙本なし。

又纏向日代宮御宇大足彥天皇。誅_二球磨贈於_一。而巡_二狩筑紫国_一之時。從_二葦北流浦_一。發_レ船幸_レ於_二火

国^一。度^レ海之。間日没。夜冥不^レ知^レ所^レ着。忽有^二火光^一遙視^二行前^一。天皇勅^二棹人^一曰。直指^二火處^一。應勅而往果得^レ着^レ崖。天皇下^レ詔曰。何謂邑也。國人奏言。此是。火国八代郡火邑。但不^レ知^二火主^一。于^レ時天皇詔^二群臣^一曰。今此燎火非^二是人火^一。所以号^二火国^一知^二其所由^一。

纏向日代宮御宇大足彦天皇『古事記』(景行天皇段)ニ、大帶日子淤斯呂和氣天皇(○景行天皇)坐纏向之日代宮治天下也トアリ。纏向ハ大和城上郡ニアリ。本居翁曰、日代宮ハ地名ニヨルカ、又宮ノ号カ詳ナラズ。

○**球磨贈於**『古事記』(神世)ニ、生筑紫島比島亦身一而有面五。每面有名云々。熊曾國謂建日別。本居翁曰、熊襲國ハ襲國ナリ。襲トハ「神代紀」ニ、日向襲トアル地ニテ、『和名抄』ニ、大隅國。贈於郡アリ。国名トナリテアリシコトハ、「景行紀」(十五年十二月)ニ、議討熊襲。於是天皇。詔群卿曰。朕聞之。襲國有厚鹿分。迄鹿文者。是兩人熊襲之渠帥者也。衆類甚多。是謂熊襲八十梟帥。マタ(十三年五月)悉平襲國ナドアリ。是ヲ以テ襲國即熊襲ナルコトヲモ知ベシ。彼梟帥ドモメ、其健カリシ故ニ熊襲トハ云ナリ。平田翁曰、熊襲國トモ云ルハ、後ニ定メラレタル。日向ノ南方半國バカリヨリ、大隅薩摩ノ地マデヲ、総テイヒシ上代ノ大名ナリ。今日、景行天皇ノ熊襲ヲ誅給ヒシコトハ、『日本紀』景行天皇十二年二月ニ、熊襲反之朝貢。マタ(八月)幸筑紫。マタ(十二月)議討熊襲於是天皇。詔群卿曰。朕聞之。熊襲國。有厚鹿文。迄鹿文者。是兩人熊襲之渠帥者也。衆類甚多。是謂熊襲八十梟帥。其鋒不可當焉。少興帥則不堪滅賊多動兵。是百姓之害。何不仮鋒刃之威。坐平其國。時有一臣進曰。熊襲梟帥。有二女兒。曰市乾鹿文。弟曰市鹿文。容端正。心且雄武宜示重幣。以撫納麾下。因以伺其消息。犯不意之處。則曾不血刃賊必自敗。天皇詔曰可也。於是示幣其二女。而納幕下天皇。則通市乾鹿文。而陽寵時。市乾鹿分。奏于天皇曰。無憂熊襲之。不服妾有良謀。即令從一二兵於已。已而返家。以多設醇酒。令飲已父。乃醉而寐之。市乾鹿文。密斷文絃。爰從兵一人。進殺熊襲梟帥。天皇則惡其不孝之甚。而誅市乾鹿文。仍以弟市鹿文。賜於火国造。上ニ健緒組ヲ火国造トナストアルハ、本國ノ全体ヲ云ヒ、此處ニ市鹿文ニ火国造ヲ賜フトアルハ、其中ノ幾分ヲ割與セシナラン。マタ(十三年五月)悉平襲國。因以居於高屋宮。マタ(十八年三月)天皇。巡狩筑紫國。マタ(四月)到熊縣其處有熊津彦者。兄弟二人。天皇先使徵兄熊。則從使詣之。因徵弟熊而不來。故遣兵誅之。自海路。泊於葦比小島。マタ(五月)從葦北発舩到火国。於是日没也。夜冥下知着岸。遙視火光。天皇詔挾杪者曰。直指火處。因指火注之。即得着岸。天皇問其火光處。曰何謂邑也。國人對曰。是八代縣豐村。亦

尋其火是誰人之火也。然不得主。茲知非人火。故名其国。曰火国也。マタ（六月）自高来縣（○肥前高来郡）渡玉杵邑（○肥後玉名郡）時殺其処之。土蜘蛛津頼焉。到阿蘇国。マタ『国名風土記』ニ、筑前・筑後・肥前・肥後・日向国ハ景行天皇ノ御代ニ夷国（○上ニイフ夷夷）征伐ノタメニ発向トテ、紀伊国ヨリ御船ヲ押出シテ、筑紫ノ地ヲサシ、漕出シ給フニ、海上ニ出テ日暮ニイリ、峰遠ク山辺更ニ見エズ、ホトリヲ不知。故ニ舳艫ノ前後ヲ失フ時ニ左ノ後ニ當リテ、大ナル火並テ見エケレバ、尊梶取ニ向テ宣ク、彼ハ何火ソヤ。舳頭申サク、不知火ナリ。爰ニ知リヌ。人ノ火ニアラズ。依テシラヌヒノツリシト仰セ云々。御船押浮ヘテ、彼火ノ見エシ処ノ、八代縣ニ漕付ク。ヨリテ前ニ火ノ見エシ方ハ、火前ト号シ、後ニ火ノ見エシ処ヲ、火後ト号スナドアリ。

○筑紫国 『古事記』（神世）ニ、生筑紫島。亦身一而有面五。每面有名。故筑紫国。謂白日別。豊国。謂豊日別。肥国。謂速日別。日向国。謂豊久士比泥別。熊曾国。謂建日別トアリテ、筑紫トイフハ、モト筑前・筑紫郡ノ筑紫村ノ名ヨリ起リ、一国ノ名トナリ【20】、後ニハ此五国ノ総名トナレリ。

【20】 国本、この下に「（後ニハ筑前筑後ノ二国ニ分ル）」という分注あり。

○葦北 『日本紀』（敏達天皇十二年七月）ニ、火葦北国。マタ推古天皇七年四月、肥後葦北浦。マタ『旧事紀』十二、葦北国造纏向日代朝御代。以吉備津彦命児。三井根子命。定賜国造。マタ『万葉集』（三）ニ、葦北乃野坂乃浦。マタ『和名抄』ニ、葦比郡葦北。桑原。作野。部行。巨野。川田。水俣。（○郷名）マタ『加藤清正記』ニ、葦北郡。一万九千三百八十三石三斗三合壹丈ナドアリ。（『諸国温泉記』『夫木集』『名寄』『新続古今集』等ニモ見ユ）

○火流浦 此ハ今度火光ノ流レシユエ、地ノ名ニ負ヒタルナリ。藤村光鎮氏（肥前人）曰、此処ハ葦北郡ノ日奈久浦ナラン。（今日温泉ノアル所）

○着崖 「崖」異本「陸」ニ作ル。

○火邑 「邑」印本「也」ニ作ル。『肥後風土記』ニ拠テ改ム【21】。（『日本紀』ニハ豊村トアリ）井沢長秀氏（肥後人）曰、今火邑ナシ。氷川ト云ハマリ。永瀬氏曰、『和名抄』ノ八代郡肥伊ハ、古ノ火邑ニテ、後ニ郷名トナレルナリ。ソノ火邑ハ後ニハ肥伊郷内ニアリケンヲ火邑・肥伊郷モ、今ハ詳ラカナラズ。強テ思フニ、八代郡ニ氷川アリ。モシ此レ肥伊郷ノ川ニシテ火邑モヤカテ其川ノ辺リナリシニヤ。今日或曰八代郡道後、古ニ宮原村宮原町ニ氷川アリ。八代城ノ北三里許ナリ。伊藤氏曰、『和漢図会』ニ、肥後土産條ニ、燧石。火川トアリ。

是ナルベシ。サルヲ己カモテル地図ニハ、氷川ヲ書漏セリ。『後撰夷曲集』【22】ニ、火打石ヲヨメル。一見日ノ本ノ肥後ノ火川ノ火打石ヒタモノ日々ニ拾フ人々。（栗田氏曰【23】、『常陸風土記』ニ、新治郡云々等間村。マタ信太郡云々浮島村。マタ行方郡云々曾尼村。マタ郡南云々板来村。マタ那賀郡云々片岡之村。マタ多珂郡飽田村。マタ『播磨風土記』ニ、飾磨郡牧野里新良訓村小川里高瀬村。カクアルニ依テ、古ハ村ハ後ノ里ナルヲ知ヘシ。上野金井沢村ナル神龜二年ノ碑ニ、上野国群馬郡下贊郷高里。マタ『河内西琳寺天平十五年帳』ニ、河内国古市郡下新居郷宮処里。マタ丹比郡余戸郷余戸里。マタ古市郡尺度郷鴨里和泉監大島郡大村郷山田里ナトアルニテ、古ク郷下ニ里アルハ後世ノ村ナルヲ辨フヘシ。『東大寺天平六年ノ文書』・『備中国天平二年ノ文書』等ニモ見エタリ）

【21】『肥後風土記』ニ拠テ改ム。国本・丙本なし。

【22】『後撰夷曲集』ニ、火打石ヲヨメル。一見日ノ本ノ肥後ノ火川ノ火打石ヒタモノ日々ニ拾フ人々。丙本なし。甲本は頭注にて記す。

【23】（栗田氏曰……『東大寺天平六年ノ文書』・『備中国天平二年ノ文書』等ニモ見エタリ）国本は頭注にて記す。

○不知火主 此時ハ縁由ニヨリテ、古クヨリシヲヌヒヲ筑紫ノ冠辞トセリ。

○今此燎火是人火所以号火国知其爾由

此詔ノ意ハ、今此ノ燎ル火ハ主アル人火ニハアラズ。必ス崇神天皇ノ御代ニ、靈キ火ノ空ヨリ自

ラモエテ、八代郡白髪山ニ降りシ火ノ類ヒナルベケレハ、彼ノ靈キ火ニヨリテ、此国ヲ火ノ国ト号シユエヲ、只今目前ノ火ニテ、知ラルヒトナリ。○本居翁曰、『古事記』ノ傳ヘハ、火国ヲ面一ニトレリ。然ルニ「国図」ヲ考フルニ、肥前ト肥後トハ海ノ隔リテ地接カス。正クニ、分レタレバ、面一ニハ取カタク国形ナリ。故考フルニ、崇神天皇、マタ景行天皇ノ御世ナドノ火国ノ故事ハ、地名ニヨルニ、皆肥後ノ地ナリ。然レバ火国ト云シハ、初ハタ、肥後ノ方ノミニテ、肥前ノ地ハ本ハ筑紫国ノ内ナリシカ。稍後ニ火国ニ属シニヤアラシ。肥前ハ筑前筑後ト地接キテ、此三国ハ一ニモ取ツベキ国形ニテ、肥後トハ清ク離レタレバナリ。○『肥後風土記』ニ、景行天皇（○此御名モ本ハ本記ノ如クナリシナラン。一本ニハ纏向日代宮御宇大足彦天皇トアリ）誅球磨贈啖兼巡狩諸国云々。幸於火国。渡海之間。日没夜暗。不知所着忽有光遙視行前。天皇勅棹人曰行前火指而往隨勅而往之果得着崖。即勅曰。火燎之處此号何堺。所燎之火亦為何火。土人奏言。此是火国八代郡火邑。但不審火申。于時詔群臣曰。燎之火。是非俗火也。火国之由。知所以然トアリ。此モ本文ニ能似タリ。此記ニ見エタル纏向日代宮天皇本國巡狩ノ処【24】、『日本紀』ニハ十八年六月自高来縣云々。一条ノミ見エテ餘ハ皆缺タリ。

【24】「此記ニ見エタル纏向日代宮天皇本國巡狩ノ処、『日本紀』ニハ十八年六月自高来縣云々。一条ノミ見エテ餘ハ皆缺タリ」国本・甲本・丙本なし。

基肄郡。郷六所。里十七。驛一所。〈小路。〉

〔郡〕「戸令」ニ、凡郡四里以上。為下郡トアリ。此里ハ本記ノ郷ニ当レリ。〔《出雲風土記》ニ、右件郷字者。依靈龜元年式。改里為郷。其郷名字。被神龜三年民部省口宣改之トアル如ク、本記ノ郷モ元ノ里ナラン〕 諸本郡六郷ナレハ下郡ナリ。〔《職員令》ニ、下郡大領一人。少領一人主帳一人。マタ「田令」ニ、凡郡司職分田。大領六町。少領四丁。主政主帳各二町。狹郷不須要滿〕 此数大体ハ、北ハ筑前ニ界シ、寅位ヨリ午ニ至ルマテハ、筑後ニ界シ、午ヨリ戌ニ至ルマテハ、本国旧養父郡ニ接ス。東西二里十三丁。南北三里七丁。地勢三稜ヲナシ。国道ソノ中ヲ貫クヲ以テ、運輸甚便ナリ。楮・茶・米・麦・蔬菜及ヒ櫛ヲ産ス。『記略』（弘仁四年三月）ニ、太宰府言。肥前国司。今月四日解僞。基肄團校尉。貞弓（姓闕）等。去二月二十九日解僞。新羅人一百十八人。駕五艘舩着小近島。與土民相戰。即〔25〕打殺九人捕獲一百九〔26〕（○此数□□）人（壹百十人ト合ハス）者、又同月七日解僞。新羅人一清等申云。同国人。清漢已等自聖朝歸来云々。宣明問定若願還者。随放還遂是化来者。依例進止。マタ『三代実録』（貞觀八年七月）ニ、太宰府馳奏言。肥前国基肄郡人川辺豊稻。○本郡ニ田代村大字神辺アリ。古ハ川辺ト書モタリトイヘハ、此処ニ由アルナラン。同郡擬大領山春永語豊稻曰。與新羅人珍賓長共渡入新羅国教造兵器器械之術。マタ「神名式」ニ、肥前国。基肄郡一座（小）荒穂神社。（○古ハ山上ニアリシトイフ。今ハ麓ナル基山村大字宮浦ニアリ。郷社ナリ。産子百十戸。〔明治八年調ニ〕『三代実録』貞觀二年ニ、授肥前国従五位上荒穂天神正五位下。マタ『宇佐大鏡』ニ、基肄郡。重枝名田。宮役起請田廿四丁二反。国半不輸。マタ『伊呂波字類抄』ニ、荒穂（一本「係」ニ誤ル。即本社ナリ〔27〕）神社。坐肥前国。基肄郡。マタ『寛文印知集』ニ、基肄郡二拾〔元禄四〕七。マタ『元禄図』ニ、基肄郡。二拾四村。高九千二百拾二石壹斗六升五合。（今異本、此二字ナシ）「明治廿一年ノ調」〔28〕ニヨレバ、旧本郡二千七百四十七兵一万四千〇一口。田千三百〇七町三段。畑四百三十八町三段。「三十一年ノ調」ニヨレバ、養基郡人員九万五千五百口。『宗氏家譜』ニ、慶長四年。東照宮以義智所領。薩摩州出水郡糸地。代肥前国内基肄養父郡。（実ハ基肄全郡養父半郡ナリ）方長老ノ「朝鮮物語附柳川始末」〔29〕ニ、慶長十年松雲来朝ノ時、義智肥前ノ田代ニテ加増二千石ヲ給ハル。慶長十二年、三使事異リテ後、秀忠公ヨリ肥前田代ニテ加増二千石ヲ義智ニ給ハリトアルニヨレハ、慶長四年ニハ七千石ヲ給ハリ、後ニ一万石トナリタルカ、トアリ。「民部式」ノ印本等ニ、基肄ノ「肆」を「肆」ニ作り、又キシト旁訓ヲツケタルハ誤リナリ。（本記ノ異本ニモ「肆」トシタル者アリ）度會延佳氏（伊勢人）カ、『旧事紀』（十）ニ、松津国造難波高津朝御世。物部連祖伊香色雄命孫。金連定賜国造トアル。松津ヲ杵肄ノ誤リニテ、肥前ノ基肄郡ヤト云レタレド、如何アラシ。遠江人内山直竜氏〔30〕モ基肄トス。尚松浦郡条見合スヘシ。

【25】 底本、この下に「職員」ニ、大郡。大領一人。（云々）主政三人。（云々）主帳三人。（云々）上郡。大領一人。少領一人。主政二人。主帳二人。中郡。大領一人。少領一人。主帳一人。下郡。大領一人。少領一人。主帳一人。小郡。郡領一人。主帳一人」という記述あり。国本なし。国本により削る。

【26】 「二百九」、『日本紀略』は「一百十人」とし、数が一致。底本この下に「（此数□□）」とあるも判読できず。数の不一致に関する記述か。

【27】 底本「本係保ル」、国本により改む。

【28】 「明治廿一年ノ調」ニヨレバ……養基郡人員九万五千五百口」国本なし。

【29】 「方長老ノ「朝鮮物語附柳川始末」ニ……慶長四年ニハ七千石ヲ給ハリ、後ニ一万石トナリタルカ、トアリ」国本なし。

【30】 国本、この部分「内山真竜氏（遠江人）モ基肆トシタリ。上田氏ハ松浦ナラント云リ」とす。

○郷六所 『和名抄』ニ、姫社。山田。今基里村大字酒井西ニ山田アリ。是カ。○基肆・喜伊（○伊藤氏曰、『和名抄』ニ、本郡ニ基肆郷アリ。郷名

ヲ郡ニモ負セタルハ、此郷ニ郡家ヲ置レタル処ナルヘシ。「村名帳」ナトニ基肆トイフ名ハ見エス。カレ強テ思フニ、今ノ城山ノ辺ヲ本ニテ負ヒタル郷名ニテモアランカ。今日此説如何アラン。下ニ長岡神社・酒殿泉ヲ郡ノ東トアレハナリ。古ノ官道ハ基山ヨリ養父郡麓村辺ヘ通りシナラント思ハルヘ、郡家ハ其道ノ便リヨキ所ノ今ノ田代村ノ西ノ方ナトニ在シナラン）川上（伊藤氏曰、『元禄図』ニ、本郡ニ上辺村マタ赤川村アリモシ、川上ハ此辺ニテモアランカ。○三橋氏曰、ダイキ川ノ上ニ川内村アリ。川上郷ハ是レナトニヤ。又ダイキ川ノ辺ニ神辺村アリ。昔ハ神辺ヲ川辺ト書リシトイフ。田代駅未申ニ当リテ半屋里許リアリ。是ニテモアランカ【2】）長谷（本郡ニ長谷部代ノ人リ此ノ郷名ヨリ起レル氏カ。又此氏人ノ住ルヨリナレル地名カ。詳ラカナラス）トアリ。尚一所ヲ逸ス【31】。

【31】 甲本、この下に「（中古上下二郷ニ分ツト云）」という記述あり。

【2】 今日田代村大字柚比ニ川内村アリ。神辺ハ田代村ノ西ニアリ。

○里十七 「十七」印本「七十」ニ誤ル。曼本ニ抛テ改ム。又此三字、印本ニハ小書ス。異本ニ抛テ改ム。下同シ。名称所在詳ラカナラズ。（「明治十年ノ調」【32】ニヨレハ、本郡二十一村ナリ。廿二年改革シテ基山村大字宮浦・園部・小倉・長野、基里村大字酒井・東酒井・西姫方・飯田、田代村大字田代・永吉・柚比・神辺・萱方トス）

【32】 「明治十年ノ調」ニヨレハ本郡二十一村ナリ。廿二年改革シテ基山村大字宮浦・園部・小倉・長野、基里村大字酒井・東酒井・西姫方・飯田、田代村大字田代・永吉・柚比・神辺・萱方トス」国本なし。

○駅一所 「兵部式」ニ、肥前国。駅馬。基肆十疋。傳馬。基肆五疋トアリ。太宰府ニ近キ所ナレバ駅傳トモニ、多ク置レシナラン。駅

址、詳ラカナラズ。基山村ノ中ナルヘシ。(肥前国曾根崎庄地頭職。為勲功賞。可令知行者。天氣如此悉之以狀。興國三年六月廿日。惠良小次郎殿。左少辨判。基里村大字酒井西ニ曾根崎アリ。惠良ハ阿蘇家ノ支族ナリ。一曾根崎地頭職論旨事。委難裁狀候之趣。委ク僧都御存候了定被申候云々。九月廿六日。惠良筑後權守殿。頼元ハ清原姓ナリ。氏ヲ五条ト称ス。曾根崎庄地頭職間事。鎮西事。先朝御代被安堵申候後。令述勅裁事件地頭職。被下述勅裁狀。此類猶依有被聞食之旨。先度御執奏事。ヤ子細之处直勅裁事。不達叡聞之被仰下。此上以一同之法。可被落居。其時隨左右可有其沙汰之由。所仰下也。仍執達如件。十月廿八日。惠良筑後權守殿勘解由次官判。頼元ナリ) ○「筑紫図」【33】ニ、尚門下野守肥前守基肄郡養父郡。筑前夜須郡三内半郡。合領於三郡居域勝山。々々ハ、三養基郡麓村大字牛原ニアリ。○朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル佐賀縣下郡廢置法律ヲ裁下シ、茲ニ之ヲ公布セシム。御名御璽 明治二十九年三月二十六日內閣總理大臣臨時代理枢密院議長伯爵黒田清隆。内務大臣芳川顯世。○法律第二十五号佐賀縣肥前国基肄郡養父郡及三根郡ヲ廢シ、其區域ヲ以テ三養基郡ヲ置ク。附則 此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス。今日九州鐵道ハ資金一千一百万円ヲ以テ明治廿一二起リ、第一線ハ豊前ノ門司ヨリ肥後ノ三角マテ、即チ本線ナリ。第二ハ、三養基郡田代村ヨリ長崎マテ。第三ハ、西松浦郡有田村ヨリ東彼杵郡佐世保マテ。第四ハ肥後宇土ヨリ八代マテ。第五ハ豊前小倉ヨリ行事マテノ目的ニテ起業シ、其後段々延長ス。

【33】「○「筑紫図」ニ」以下の記述、国本なし。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。御ニ筑紫国御井郡高羅之行宮一遊ニ覽国内一。霧覆ニ基肄之山一。天皇勅曰。彼国可レ謂ニ霧之国一。後人改号ニ基肄国一今以為ニ郡名一。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」字ナシ。

○筑紫国 此ハ筑後ヲ指ス。『和名抄』ニ、(筑後筑紫乃美知之里) マタ、筑後国管十。(田万二千八百餘町。正公各二十万束。本額六十二万三千五百八十二束。雜額二万三千五百八十二束) 御原【34】。生葉。竹野。山本。御井。三瀨。上妻。下妻。山門。三毛。マタ「民部式」ニ、筑後国上云々。右為遠国。マタ『伊呂波字類抄』ニ、筑後国本田二萬二千八百二拾八町。マタ『拾芥抄』ニ、筑後上遠田萬千三百七拾七町ナドアリ。

【34】国本、「御原(美波良)」とし、『和名抄』からの引用箇所は地名の下に訓注を附す。底本訓注なし。

○御井郡 『日本紀』(繼體天皇二十六年十二月)ニ、筑紫御井郡。マタ「兵部式」ニ、筑後国。御井駅。マタ『和名抄』ニ、筑後国(国府在御

井郡) 御井。節原。伴太。殖木。弓削。神代。賀駄。大城。山家。以上御井郡ノ郷名。マタ『筑後地鑑』ニ、御井郡。六拾八村。三萬六千七百八拾石ナドアリ。

○高羅『後紀』(延暦十四年五月)ニ、筑後国高良。(高羅ナリ)マタ「神名式」ニ、筑後国御井郡高良玉垂命神社。マタ『伊呂波字類抄』ニ、高良。マタ『袖下抄』ニ、高良山ヲ濡セヌ山トモ申スナリ。名所ナリ。本居翁曰、高良ヲ、今コウラト訓メドモ、高ハ古書ニ多クコノ仮字ニ用ヒタレバコラナルベシ。伴氏曰、高良ハ、カハラト訓ベシ。高ノ音カウナリ。筑前ノ郡名、早良ヲ『和名抄』ニ、佐波良トアリ。早ノ音サウナルヲウハニ用ヒタルト同例ニテ高ノ音ヲカハニ用ヒタルナルベシ。猿楽ノ弓八幡ニ、高良神ヲカワラノシントモアリ。今日、此山ハ江原ノ眺望、竹樹ノ蔚葱実ニ絶景ノ地ナリ。且奇石異葉アリ。ヨリテ彼ノ神人等、高良十景トイフヲ作り、上ハ摺紳ヨリ、下ハ緇流ニ至ルマテ、寄題ノ詩歌ヲ集テ之ヲ珍藏ス。又地ノ豊ヲ負ヒ肥ニ臨ミ、要害ノ所ナルヲ以テ、古来陣營トナリシコト多シ。

○基肆之山 基山ナリ。(城山トモ書ク)基山村大字宮浦ニアリ。高サ十丁【35】。『万葉集』四二、太宰帥。大伴卿。上京之後。筑後守。葛井連大成。悲歎作歌一首。從今者城【36】山道者不樂牟。吾將通常念之物乎。(古へ太宰府ヨリ筑後へユクニハ此処ヲ往来セシナリ。本書『略解』【37】ニ、卷八大伴坂上郎女、今モカモ大城ノ山ニ云々。卷五百代カ歌、カノ城ノ山ニナトヨメリトアリ。卷五ノハサルコトナカラ大城山ハコトハ別ナリ。本居翁モコトナリト云レタリ)マタ(五)、天平二年正月十二日。華于帥老之宅。申宴會也云々。大監伴氏百代。鳥梅能波奈。知良久波伊豆久。志可須我尔。許能記能夜麻尔。申企波布理都々。(『略解』【38】ニ、キノ山ハ筑前下座郡三城、卷四山道ハサヒシケンカモト同所ナリ。今日卷四云々ハサルコトナカラ、上文ハ誤リナラン)マタ(八)、式部大輔石上堅魚朝臣。雀公鳥来鳴令響。宇乃花能。共也来之登問麻思物乎。右神龜五年戊辰。太宰帥大伴卿之妻大伴郎女。遇病長逝焉。于時。勅使式部大輔石上朝臣堅魚。遣太宰府。吊喪并贈物色。其事既畢。駢使及府諸卿大夫等。共登記夷域而望遊之曰。乃作此歌。(『略解』【39】ニ、記夷ハ『和名抄』筑前国遠賀郡木夜ソ。夜ハ夷ヲ誤カ。契沖云、下座郡城辺ト云所アリ。城山ト云モノコナルヘシ。紀伊国ノ例ヲ思フニ、今モ紀ノ字ナルヘキニヤトイヘリ。紀伊ニテキトノミ訓ヘシ。記ハ紀ノ字ナラヌトモシカルヘキナリ。今日此説ハ誤リナラン)マタ(十)詠黃葉歌妹之袖卷来乃山朝露尔。仁宝布黃葉之散卷惜裳。(『略解』【40】ニ、上ニ出タル筑前国御笠郡ノ城ノ山ニヤト翁ハイハレキ。宣長ハ、来乃ハ牟久ノ謬ニテマキムク也トイヘリ。猶考フヘシ。今日此モ誤リナラン)マタ『三代実録』(貞觀八年二月)ニ、神祇官奏言。肥後国阿蘇大神。懷藏怒氣由。是可發疫癘擾隣境兵。勅国司潔齋至誠奉幣。并轉読金剛般若經千卷。般若心經万卷。太宰府司。於城山(一本内。○今日『万葉集』四二見エタル城山ニテ、即

チ記夷ナラン）四王院。轉読金剛般若經三千卷。般若心經三万卷。以奉謝神心消伏兵疫。マタ「延暦寺座主円瑠傳」ニ、嘉祥四年四月十五日。辞京輦伺太宰府。五月廿四日。得達前処。以無使舩。暫寄住城山四王院【41】。貝原篤信氏（筑前人）曰、太宰府ノ坤方、萩原村ヨリ城山、今日椽山。マタ記夷山トモ書ヲ起テ、肥前ノ基肄郡ニユク道アリ。馬ノ往来自由ナリ。昔ハ肥前・筑後ヨリモ、此ヲ越テ太宰府ニ通ヒシナリ。（今日上ノ万葉ノ歌ハ此処ニテノ事ナラン）○三橋氏曰、城山ハ古ハ一山ノ総名ナリシ趣ナリ。此山ニ東西二峰アリテ、今ハ東ヲ坊中山トシ、西ヲ城山トス。其間ハ北ニ曲リテ、箕ノ腰ノ如クニツヽケリ。北ニ曲レル処ヲ、北ノミカトヽイフ。是レ天智天皇ノ行宮ノ址ナリトイフ。其東ニ近ク少シタワメル。則チ城山ノ道ナリ。山ノ頂マテハ肥前ノ管内ナリ。北ニ少シ降ル処ニ筑前トノ界アリ。

【35】「基山村大字宮浦ニアリ。高サ十丁」国本なし。

【36】底本この下に「上ニアル椽^{*}、マタ城ニテ下ノ記夷ナリ。三養郡ニアリ」の記述あり。国本なし。文意不明により削る。

【37】「本書『略解』ニ……本居翁モコトナリト云レタリ」国本なし。

【38】「『略解』ニ、キノ山ハ筑前下座郡三城、卷四山道ハサヒシケンカモト同所ナリ。今日卷四云々ハサルコトナカラ、上文ハ誤リナラン」国本なし。

【39】「『略解』ニ、記夷ハ『和名抄』筑前国遠賀郡木夜ソ。夜ハ夷ヲ誤カ。契沖云、下座郡城辺ト云所アリ。城山ト云モソコナルヘシ。紀伊国ノ例ヲ思フニ、今モ紀ノ字ナルヘキニヤトイヘリ。紀伊ニテキトノミ訓ヘシ。記ハ紀ノ字ナラヌトモシカルヘキナリ。今日此説ハ誤リナラン」国本なし。

【40】「『略解』ニ、上ニ出タル筑前国御笠郡ノ城ノ山ニヤト翁ハイハレキ。宣長ハ、来乃ハ牟久ノ謬ニテマキムク也トイヘリ。猶考フヘシ。今日此モ誤リナラン」国本なし。

【41】国本・甲本、この下に「伊藤氏曰、四王院ノアリシ処ハ、城山ノ坊中山トイフ中世マテモ大寺院アリテ、子坊ナト多カリシヲ、今ハ絶テ一坊ギナシ」という記述あり。甲本、この部分を分注とす。底本なし。

○改号「改」異本「故」ニ作ル。

長岡神社。〈在^ニ郡東^一。〉

同天皇自^ニ高羅行宮^一。還幸而在^ニ酒殿泉之邊^一。於^レ此薦^レ膳之時、御具甲鎧光明異^レ常。仍令^レ占^二問^一ト

部殖坂「奏云。此地有^レ神。甚願^二御鎧^一。天皇宣。実有^レ然者奉^レ納^二神社^一。可^レ為^二永世之財^一。因号^二永世社^一。後人改曰^二長岡社^一。其鎧貫緒悉爛絶。但胄并甲板。今猶在也。

酒殿泉 下ニ註スベシ。

○**卜部** 【42】天兒屋根命ノ傳ヘタル、ト事ヲ以テ、朝廷ニ仕奉ル人等ヲ卜部トイフ。其ノ名ナリ。後ニハ氏ノ名トモナレリ。【43】

【42】○**卜部**の項目、国本は「○**卜部**」天兒屋根命ノ傳ヘ給ヘルト事ヲ以テ仕奉ルモノヲ卜部トイフ。此ハ職ノ名ナリ。其業ヲ承継ギタル家ヲモト部トイフ。此ハ氏ノ名ナリ。天兒屋根命ノ後ナリ。此卜部ハ職ノ名カ氏ノ名カ詳カナラス。」とす。

【43】国本、この下に殖坂の項目を立て、「○**殖坂**」土ノ卜部職ナラハ、此ハ人ノ名ニテ、氏ヲ脱セリ。如シ氏ナラハ、此ハ名ナリ」と記す。底本・甲本なし。

○**有神甚願御鎧** 『法曹類林』(百八十一)ニ、肥前国基肄郡長岡神社。昔者纏向日代宮天皇。納甲胄之社也。神職等以彼甲胄如神体。如无正体也。甲胄者。天皇幣者也。以^レ幣為神例未聞^レ之。為^レ神者也。神祇官告。為^レ神人等所過故命国。決杖一百者三人トアリ。兵器ヲ以テ神幣トスルコトハ、『日本紀』(垂仁天皇二十七年八月)ニ、令^レ祠官ト兵器為神幣吉之。故弓矢及横刀。納諸神之社云々。益兵器祭神祇始興於是時也トアルヲ始め、後ノ世マテ甚多シ。亦鎧ヲ神幣トセシコト『玉葉』・『百練抄』・『東鑑』等ニ見エタリ。

○**胄并** 「并」異本「並」ニ作ル。○三橋氏曰、本社ノ神官ノモタル「旧記」ニ、永吉村(○田代村大字永吉)ノ産神八幡宮ハ、モト長岡神社ナリ。祭ル所ハ少名彦命。(○今日或ハ大名持命ト云ナリ)此社度々兵火ニ罹リテ、廃凶セリ。今ノ八幡宮ハ、古ハ檜田村(○今日基山村大字長野ニアリ)西ノ歳ノ森ニアリシトソ。今ニ田ノ字ニ残リテ松一本アリ。其驗シナリ。今ニ永吉・檜田両村等ノ産土神ナリ。土人曰、本祠、殿宇破壊シ、境地荒蕪シタルヲ、永保三年、村人等相議リテ、宇佐八幡宮ノ分魂ヲ合セ祭り、従前ノ神体ハ、地主神社トナシ称タリシヲ、後ハ本社ヲ八幡宮ト称ヘタリ。明治維新ノ際、土人等協議シ古跡ノ埋滅セシヲ以テ、八幡神社宮ヲ永世神社ト改称シ、彼ノ地主神ヲ本座トシ、八幡大神ヲ相殿トス。現今村社タリ。旧神官梶^{カキ}田氏、ソノ宮司タルコト二十九世トイフ。大祭旧曆九月廿四日(或曰旧曆八月十五日)ナリ。社殿庭坪百九十二坪。山林二反五畝五歩。産子二百十九戸。(明治八年ノ調)

酒殿泉。〈在^二郡東^一。〉

此泉之季秋九月。始變^ニ白色^一味酸氣臭。不^レ能^ニ喫飲^一。孟春正月。變而清冷。人始飲喫。因曰^ニ酒井泉^一。後人改曰^ニ酒殿泉^一。

泉之「之」異本ナシ。

○人始「人」湯本ナシ。

○酒井泉三橋氏曰、本郡飯田村（○基里村飯田）ニシケヌ井ト云アリ。今ノ酒井村（基里村大字酒井西・酒井東）ハシケヌ井ノ辰巳ニアリ。此井【44】、今ハ淵ノ如クニナイミジキ旱ニモ、涸ルコトナシ。雫ノ時ニ此井ヲホセハ、必ス雨降ルトイフ。土人ノ説ニ、此井秋ノ頃ニナレハ、臭ミ出テ飲ムニ堪スト。是全ク酒井泉ナルベシ。田代駅ノ東南二十丁許ニアリ。○或曰【45】、シケヌ井ハ重田ノ池ト云ヲ正トス。而シテ酒井村ハ（此池ノ辰巳）、今日此ハクサ井ニアラスシテ（未位ニアリ）ノイスミト云義ナレハ、昔ハ臭井泉トカキタリシヲ、後人臭ヲ酒ニ誤リシナラン。○或曰【46】、本泉ハ基里村大字飯田字重田池ナリ。其流レ酒井川ニ會フ。

【44】「此井……後人臭ヲ酒ニ誤リシナラン」国本なし。この部分の記述、文意不明。甲本、この部分「**○酒井泉**三橋氏曰、本郡飯田村（今日基里村大字飯田）

ニシケヌ井ト云アリ。今ノ酒井村（今日基里村大字酒井・西酒井東）ハシケヌ井ノ辰巳ニアリ。此井、今ハ淵ノ如クニナレリ。イミジキ旱ニモ涸ル、コトナシ。雫ノ時ニ井ヲホサントスレバ、雨必スフルトイフ。土人ノ説ニ、此井、秋ノ頃ニナレバ臭ミ出テ、飲ムニタヘズト。是全ク酒井泉ナルベシ。田代驛ノ東南二十丁許ニアリ。今日此ハクサキノイツミト云義ナレハ、臭井泉ト書キタリシヲ、後ニ臭ヲ酒ト誤リシナラン」とす。

【45】「○或曰、シケヌ井ハ重田ノ池ト云ヲ正トス。而シテ酒井村ハ（此池ノ辰巳）」国本・甲本なし。

【46】「○或曰、本泉ハ基里村大字飯田字重田池ナリ。其流レ酒井川ニ會フ」国本・甲本なし。

○改曰「改」印本ナシ。竈本・曼本ニ拠テ補フ。（「改」ハ「訛」ノ誤リニテモアルベシ【47】）伊藤氏曰、殿ト云ハ後世ニ故アリテ、殿ヲ立タルヲトニテ負セタルナルヘシ。此泉酒気ナトアシクナルヘシ。土中ヨリ酒泉ノ湧^ッキ出タルコト、古クハ例多キコト【48】

【47】甲本、この部分、分注で「（「改」ハ「訛」ノ誤リカ）」と記す。

【48】以下の記述に脱漏あるか。この部分、国本・甲本なし。

姫社郷。

此郷之中有^レ川。名曰^ニ山途川^一。其源出^ニ郡北山^一。南流而會^ニ御井大川^一。昔者。此川之西有^ニ荒神^一。行^レ路之人多。被^ニ殺害^一半凌半殺。

姫社郷ノ下ニ、方位ノ字ヲ脱スルカ。

○**山途**「途」曼本・湯本・異本「道」ニ作ル。下同シ。此二字印本ニヤ・マ・ト、旁訓ヲ付タレドモ、音訓混淆ナレバヤ・マ・チト訓ベシ。扱今ハヤ・マ・チトモヤ・マ・ト、モ云川ナシ。実地ニ付テ案スルニ、此ハ秋水川ニアタル。其本源ハ基山村大字園部ノ水無山ヨリ出テ、或ハ東シ、或ハ南シ、同村大字長野ヲへ、基里村大字酒井東ニ至リテ、針摺川、筑前・筑紫郡針摺山ヨリ出川ニ入ル。一名ハ加利川。廣サ十三四間ヨリ、六七間ニ至ル。本源ヨリ針摺川ニ入ル所マテ三里許ナリ。支源アリ。基山村大字宮浦ヨリ出テ、国道ノ旁ニ至リテ、本流ニ合ス。支源ヨリ本流ニ合スル所マテ壺里許ナリ。

○**御井大川**此郷ノ對ヒハ、筑後ノ御井郡ナレバ、彼所ニテハ此川ヲ御井ノ大川ト呼馴タルヲ、此方ノ人ドモ、聞馴テ然イヘルナラン。即チ千歳川ナリ。肥筑ノ界ニアルヲ以テ御界川トモイフ。『豊後風土記』日田郡石井郷ニ、郷中有河。名曰阿蘇川。其源出肥後国阿蘇郡。少国之峯。流到此郷。即通玖珠川。此川源ヲ豊後直入郡九重山ニ発スト云。會流一川。名曰日田川。今日日田郡下井手ニテ合流ス。年魚多在。遂過筑前筑後等国。入於西海。(有明海ヲ云) 貝原氏曰、此川ノ源ハ、肥後小国郷・豊後玖珠郡ヨリ出テ、日田(○今日日田郡合流ノ所ヨリ佐賀郡新北村大字為重・石塚渡ニ至二十三里)ヲへ、筑前上座郡志波ノ渡リニ至リテ其水勢盛ナリ。九州第一ノ大河ナリ。今日此川ニ源アリ。一ハ肥後阿蘇郡小国村ニ発シ、一ハ豊後直入郡大船山ニ発シ、相會シテ一トナリ、筑後生葉郡原口村ニ至ル。生葉・竹野・山本・御井郡等ノ地ニテハ、大抵西ニ流レ、御井・三潯郡等ニテハ、西南ニ流ル。本源ヨリ末流マテ五十里アリテ、全国十四大河ノ一ナリトソ。此川ノコトノ書等ニ見エタルハ、『夫木集』ニ、君カタメ限リモアラシ千年川キセキノ波ノイクメクルトモ、『名寄』【49】ニ、我君ノナカレ久シキ千年川波シツカナル世ニツカヘツ、名ニタカキ秋ノナカハノ一夜川コトワリシルクスメル月哉。『名所方角抄』ニ、ソノ一、マ、後ノヨモシラス一夜川ワタルヤ何ノ夢路【50】ナルラン。『八雲御抄』ニ、千年川(筑後)。一夜川(筑後)トアリ。此ハ二川ノ如ク見エテマギラハシ。「久留米旧藩主有馬家ノ文書」【51】ニ、筑後川、改名ニテ被申出候間、其紛無之。則以来筑後川ト、郡中可申

渡旨、將軍家光公被仰出候。去ル年、被申出候得共、島原へ取紛延引罷在候。此段其元へ可申渡之旨、御上意有之候別紙口上書、相添申候以上。寛永十五年八月六日、筑後久留米豊氏臣、有馬主水殿、安藤但馬守、松平若狹守、口上書、筑間川改名弥以来筑後川ト郡中申渡候様、可仕候。委細ハ口上ニテ、可申上候以上トアリトソ。

【49】底本行間に「○弘長元年百有ニ、タノマシナニレシナコリノ一夜川枕サワクミナトアリトモ」の書込あり。国本・甲本なし。

【50】底本行間に「○『隣女和歌集』ニ、タチハタノ契リニタユル一夜川コノアフセコソヤカタエヌレ」の書込あり。国本・甲本なし。

【51】「久留米旧藩主有馬家ノ文書」以下の記述、国本・甲本なし。

○此川「川」印本「門」ニ誤ル。湯本ニ拠テ改ム。御井川ノ西ハ下ナル田村ニテ基里村大字姫方ナリ。

○荒神此ハ下ナル織女神ナリ。今度アラビシヲ以テ然称ヒシナラン。

于_レ時ト_二求崇由_一兆云。令_二筑前国宗像郡人珂是古_一祭_二吾社_一。若合_レ願者。不_レ起_二荒心_一覓_二珂是古_一令_レ祭_二神社_一。珂是胡即捧_レ幡祈祷云。誠有_レ欲_二吾祀_一者。此幡順_レ風飛往墮_二願_レ吾之神邊_一。便即舉_レ幡順_二風放遣_一。于_レ時其幡飛往墮於_二御原郡姫社之社_一。更還飛来落_二此山途川邊之田村_一。珂是古自知_二神之在處_一。

筑前国『和名抄』ニ、筑前。（筑紫乃美和乃久和）マタ筑前国。（太宰府並国府在御笠郡）管十五。（田万八千五百餘町。正公各二十万束。本額七十九万六十三束。雜額三十九万六十三束）怡土【52】。志摩。早良。那珂。蓆田。糟屋。宗像。遠賀。鞍手。麻嘉。穂波。夜須。下座。上座。御笠。マタ「民部式」ニ、筑前国上云々。右為遠国。マタ『伊呂波字類抄』ニ、筑前国本田一萬九千七百五十町。マタ『拾芥抄』ニ、筑前国本田一萬九千七百六拾五町ナドアリ。

【52】国本、「怡土」の下に「（以登）」という訓注を附す。以下、『和名抄』の引用箇所は同じ。

○宗像郡『筑前風土記』ニ、宗像大神。自天降居埤門山之時。以青蕤玉置奥津宮之表。以八坂瓊紫玉置中津宮之表。以八咫鏡置辺津宮之表。以此三表成神体之形。而納置三宮即納隱之。因曰身形郡。後人改曰宗像。マタ『和名抄』ニ、宗像【53】。郡秋。山田。怡土。荒

自。野坂。荒木。海部。席内。深田。蓑生。辛家。小荒。大荒。津丸。(○郷名) マタ『筑前続風土記』二、宗像郡。田畠高五万六千二百五十八石餘。家数四千四百九十八軒ナドアリ。

【53】国本「宗像」の下に「(牟名加多)」という訓注を附す。以下、『和名抄』の引用箇所は同じ。

○珂是胡 「胡」曼本「古」ニ作ル。

○今祭吾社 『古事記』(崇神天皇段) 二、疫病多起。人民死為盡。尔天皇愁歎而。坐神状之夜。大物主大神。顕於御夢曰。是者我之御心。故以ニ意富多々泥故一而。令祭我御前者。神氣不起。国安平。是以馭使。班于四方。求謂意富多々泥古之時。於河内之美努村。見得其人貢進。尔天皇問賜之。汝者誰子也。答曰。僕者大物主大神。娶陶津耳命之女。活玉依毘売生子。名櫛御方命之子。飯肩巢見命之子。建甕槌命之子。僕意富多々泥古白。於是天皇大歡。以詔之天下平人民等。即以意富多々泥古命為神主。而於御諸山拜祭意富美和之大神前トアリ。之ニ似タリ。依テ考フルニ、珂是胡ハ此荒神ニ申アル人ナラン。

○珂是古 「古」異本「胡」ニ作ル。下同シ。

○幡 【54】『古今要覽稿』ニ、幡ハタ征伐ノ具ニテ、軍旅ノ表幟ナリ。其ハタト云ルハ総名ニテ、將軍所載曰毒縣幡。隊長所載曰隊幡。兵士所載曰軍幡トアルハ、戟ノ形ノ如クナ者ニヤ。詳ナルコトハ知ベカラザルナリ。神代ニ伊弉尊ノ神ヲ祭ルニ、鼓吹幡旗ヲ用ヒ、歌舞シテ祭ルト云コトアル。コレ書ニ顕ハル、始ニテ、儀容ニ用フルナリ。征伐ニ用ヒタルハ、神夏磯媛王朝ニ反シカ。天皇ノ使者至ルト聞テ、素幡ヲ舩舳ニ立テ、来リ服セシト云コトアル。是ナリ。サレバ其申来イト古キコト知レタリ。モト征戦ノ用具ナレドモ、元日マタ御即位ニハ殿前ニ、日月像幢、朱雀青竜等ノ幢ヲタツ。或ハ大射ニハ、阿礼幡ト云ヲ、法場ニモ用フルニ、威儀ノ為ナリ。此ヲ「宮衛令」ニ、儀仗ト云テ、軍器ト並ヘ称スルナリ。儀仗ハ礼容ニ容ヒ、軍器ハ征伐ニ用フ。名異ニシテ実同シキ由ミエタリ。法場ニ之ヲ立ルモ、武ノ備ナレハ、カクアルベキナリ。但シ大儀ニ立ル、竜像・蠡幡・鷹像・隊幡ノタクヒハ、戟ノ如クナル者ノ由、『延喜式』注ニ見エ、『本朝軍器考図式』ニ、其図ヲモ載タリ。後世ノハタトハ、同シカラサルナリ。○尚本稿ミルヘシ。

【54】幡の項目、国本・甲本なし。

○欲吾 「欲」湯本・曼本「敬」ニ作ル。

○使即 「使」竈本「便」ニ作ル。

○御原郡 『和名抄』ニ、筑後国御原（美波良）郡。長栖。曰方。坂井。川口。（○郷名）マタ『筑後地鑑』ニ、御原郡三十村ナドアリ。

○姫社 此二字、湯本ナシ。案スルニ、「社」ハ「神」ノ誤リニハ非カ。矢野幸夫氏〔3〕筑後人曰、姫社ハ、今一大崎村ナル岩船社はナリ。『旧事紀』ニ、物部阿遲古連公ハ、水間君等祖トイヒ、「神代紀」ニ、宗像神。此筑紫水沼君等祭神是也トアリ。珂是古モ〔4〕宗像郡ノ人ナレバ則チ水沼君ニシテ、阿遲古ノ祖先ナドニハ非ルカ。斯ル故アル社ナルコトヲ知ル人ナク、ナリハテタルハ如何ニソヤ。依テ明治二年以来、藩廳ヨリ、祭奠ヲ挙ラル、コトニハナリキ。姫方村ノ北八丁許ニ旗崎村○今日今ハ姫方村ノ内ニ入ル。トイフ小丘アリ。又柿子山ニ、山王社アリ。此処旗ヲアゲシ地ニテ、珂是古ノ社ナルヲ、後ニ訛リテ山王社ト称スルナラン。今日、「筑後神名帳」御原郡条ニ、宗形御子天社アリ。珂是古ヲ祭レナラン。

〔3〕伊藤氏ノ阿是古ト阿遲古トハ何人カトイヘリ。

〔4〕伊藤氏曰、『三代実録』十九又廿四ニ、肥前国宗形神ニ神位ヲ授給フコト事ミエタル由アルコトニハアラヌニヤ。尚能考ヘテ西松浦郡貞幹曰、此宗形神ハ現ニ平戸ニマス此地ヲ去ル甚シ。

○田村 此ハ今ノ基里村大字姫方ニテ、彼社ノアル所ナラン。姫神、御原郡ヨリ、山途川ノ西ナル田村ニ往来シテ荒ビシヲ、珂是古ノ祈リニ応シテ、一度ハ從前住ミマシ、所ニ跡ヲ顕シ、又更ニ今マテ荒ビシ田村ニ歸リ、サテ本体ハ織女神ナルコトヲ夢ニ顯シケレハ、ヤガテソノ田村ニモ、社ヲ立テ祭レハナリ。土人曰、本社ハ世ノ轉變ニシタカヒ、祠殿境地モ荒蕪シケレバ、姫方村ノ人等相謀リテ、宇佐八幡宮ノ分魂ヲ奉祀シ、住吉・高良ノ二神ヲ合祭シ、八幡宮ト称シ本ノ姫神ハ、却テ近旁ノ民家ノ側ニ埋没シ、機織神ト云テ、聊ノ石祠ノミ残リタリシヲ、明治維新ノ際、村人協議シ、彼ノ石祠ヲ八幡社内ニ復シ、古名ニカヘシ、姫神社ト称ス。現今村社タリ。例大祭旧曆九月十五日、或曰旧曆七月七日。社地庭坪、百八十坪。山林二段九畝拾三步。産子百三十二戸。（明治八年ノ調）

○處〔55〕諸本「家」ニ作ル。本書ノ序文ノ説ニ拠テ改ム。

〔55〕處の項目、国本・甲本なし。

其夜夢見臥機（謂ニ久都毘枳）。絡塚（謂ニ多々利）。舞遊出来壓警珂是古。於レ是亦識ニ女神。即立レ社祭

レ之。自^レ爾已來行^レ路之人不^レ被^二殺害^一。因曰^二姫社^一。今以為^二郷名^一。

異本此下ニ、「以下脱漏」トアリ。(各郡ノ条末皆然リ。此記モ本記ノ殘闕ナル一徵ナリ)【56】

【56】 国本この下に「臥機」の項目を立て、「**臥機**『和名抄』ニ、『楊氏漢語抄』云、臥機。和名久豆比岐。辨色立成説同。マタ『天土開物』ニ、花機腰機小機等ノ目アリ」と記す。底本・甲本なし。

『和名抄』ニ、臥機久豆比岐【57】。

【57】 国本、この部分に「久都」の項目を立て、「**久都**「都」印本「那」ニ誤ル。曼本・湯本ニ拠テ改ム」と記す。

○**絡塚**「祝詞式」(竜田風神祭)ニ、比売神尔。御服備。金能麻笥。舍櫛云々。其考ニ、「大神宮式」ニ、金銅多々利。是ヲ『令義解』ニ、線柱ト書シヲ思フニ、三寸六分四方ノ物ヲ下居トシテ、ソレニ高一尺一寸六分ナル柱ヲタテタルノミ。(○『和名抄』絡塚多々理ナドアリ)【58】

【58】 国本、この下に「マタ『万葉集』(十二)ニ、撼孀等之續麻之多田有打麻懸ナトアリ」の記述あり。底本・甲本なし。推敲の過程で後に削られたるか。

○**珂是古**「古」異本「胡」ニ作ル。

○**識女**「識」印本「織」ニ作ル。曼本ニ拠テ改ム。女神ノ御宝ニハ、多ソ機具ヲ奉リ、又古クヨリ女ハ機オルコトヲ主トスレバ、今夢ニ機具ヲ舞ハシ、ヲ見テ、女神ナルヲ識ルナリ。

○**立社祭之**此ハ彼ノ初メ荒ビシ山途川ノ西ナル田村ニ現ニアル社ナリ。上ナル姫神社此等ニツキテ考フルニ、此神ハ宗像ノ大神ナラン。故ニ其本所ニマシ、時ヨリ由縁アル。彼ノ郡人或ハ其御裔ナドナル珂是古ヲシテ、其社ヲ祭ラシメンコトヲ請シ、ナラン。

○**殺害**「殺」曼本ナシ。

○**姫社郷**土人曰、今ノ姫方村ノアタリ四五村ヲ、近キ頃マテ姫方郷トイヒタリ。○當社御神領。肥前国姫方莊饗料事。依近年伊勢神左衛門尉重氏。押領訴訟之趣。任出帶證文如元。可沙汰付之田。被成奉書於杉豊後守興長畢。仍執達如件。大永参年三月廿五日。太宰府上座兼公文斎実律師御坊主殿允(判)。但馬守(判)。兵庫助(判)。(○此三人内家ノ土)

養父郡。郷四所。里一十二。烽一所。

郡「戸令」ニヨルニ、本郡四郷ナレバ下郡ナリ。（上条考合スヘシ）大体ハ旧基肄郡ノ西南二位シ、北ハ筑前ニ界シ、東南ハ千歳川ヲ帶ヒ、西ハ旧三根郡ニ接ス。東西二里二十二丁、南北二里三十三丁。米麦・油菜・陶器等ヲ産ス。『続後紀』（承和十五年八月）ニ、肥前国養父郡人。太宰少典從八位上筑紫公文公貞。兄豊後大目太初位下筑紫公文公貞雄等。賜姓忠世宿祢。貫附佐京六條三坊。マタ『寛文印知集』ニ、養父郡。二拾三村。マタ『元禄図』ニ、養父郡。二拾三村。高一萬六百一石四斗七升二合。マタ『貞享四年佐嘉領中鄉村帳』【59】ニ、養父郡。大村十三ヶ村。小村二十八ヶ村。男女四千八十九人。「明治二十一年ノ調」ニヨレハ、本郡四千四百九十戸。二万二千三十九人。田二千四百五十四町九段。畑百九十九町四段ナドアリ。（『宇佐大鏡』ニ、村田別府。田數百三十町。宮召物加地子卅石。副米廿一石三十丁。国半不輸。件別府太宮司公順之私領也。仍譲与女子宇佐氏之間。宇佐氏又譲与女子藤原大子畢。彼大子互為報懸養之恩。譲与大宮司公通畢。為大宮司之私領。子細大略如此。為神領之子細未分明也。是公通立新券請神官判由緒也。○村田ハ下ノ烽址ノアル处）

【59】「マタ『貞享四年佐嘉領中鄉村帳』ニ……畑百九十九町四段ナドアリ。」国本なし。

郷四所『和名抄』ニ、狹山。屋田曰理郷条考合スヘシ。養父（也布。○今此郷ナシ。麓村大字牛原宿ニ養父村アリ。此辺古ノ養父郷ニテ郷家ノ在シ所ナラン）鳥栖（登須。○栖下トアリ。文様ニ作ル）

〇里十二名称所在、詳ラカナラズ。「明治十年ノ調」【60】ニヨレハ、本郡四十四村トナリ、二十二年改革シテ裏木村大字裏木・藤木・眞木・鳥栖、麓村大字宿立・石山浦・牛原、旭村大字島・儀徳・下野トス。

【60】「明治十年ノ調」以下の記述、国本なし。

〇烽一所烽、其址旭村大字江島・儀徳ノ内、村田ノ朝日山ノ頂ニアリ。○或曰今ノ養父郡ノ南ノ方ハ、本ハ三根郡ノ中ナリシヲ、慶長・元和ノ頃、割テ本郡ニ併セ新養父郡トイヒシヲ、今ハ新トハイハヌトゾ。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。此郡百姓舉レ部参集。御狗出而吠之。於此有二産婦一臨見。御狗即吠止。因曰「犬声止國」。於今訛謂ニ養父郡一也。

昔者異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○百姓 「百」印本「佰」ニ作ル。異本抛テ改ム。

○御狗 【61】栗田氏曰、御狗ハ狩獵ノタメニ養ヘル者ナルベシ。ソレハ犬養ノ職アルニテ着シ。「高野山天野神社ノ古文書」ニモ、犬飼ヲツケテ犬ニ匹ヲ神社ニ奉レルコトアリ。

【61】御狗の項目、国本なし。

○於今 「今」印本「此」ニ作ル。下ニ今訛謂狹山郷トアルニ准へ、且竈本・曼本ニ抛テ改ム。

○郡也 「也」字ハ下文ノ例多クハ無シ。異本モナシ。然レバ無キ亦宜カラン。【62】○本郡ニ麓村大字牛原ニ養父アリ。止国ハ即此地ナラン。「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、養父庄二十七町トアリ。

【62】以下の「○本郡ニ麓村大字牛原ニ養父アリ。止国ハ即此地ナラン。「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、養父庄二十七町トアリ」という文、国本なし。「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、養父庄二十七町トアリ」甲本なし。

鳥櫟郷 〈在ニ郡東一。【63】〉

昔者。輕嶋明宮御宇譽田天皇之世。造ニ鳥屋於此郷一。取ニ聚雜鳥一。養馴貢ニ上朝廷一。因曰ニ鳥屋郷一。後人改曰ニ鳥櫟郷一。

【63】「在ニ郡東一。」底本なし。国本・甲本により補う。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ下ノ「者」ナシ。

○輕嶋明宮御宇譽田天皇 『古事記』（応神天皇段）ニ、品陀和氣命。（○応神天皇）坐輕島之明宮治天下也トアリ。輕島ハ大和高市郡ノ地名ナリ。本居翁曰、島ハ必シモ海中ナラネドモ、周レル限りノアル地ヲイフ。明ハ尊称ナリ。

○貢上 「上」湯本「進」ニ作ル。

○鳥屋郷 寄進天満宮安樂寺和歌所、肥前国鳥屋村内。田地捌町同国山浦村。○旧養父郡麓村大字山浦内田地伍町云々。観応元年六月沙弥直猷（判）。マタ「去八日御教書」者。肥前国鳥屋村内田地八町。同国山浦村内田地伍町云々。観応元年六月。左近衛監（清文）。本記

ノ頃ハ鳥屋郷ヲ、鳥櫛郷ト改メタレドモ、又鳥屋村ト云名モ残りタルナラン。

○**鳥櫛郷** 『安樂寺草創日記』ニ、安養院号丈六堂。本尊丈六阿弥陀佛。永保三年。寄進長田莊。（○三養基郡基山村大字小倉ニ長田、マタ田代村大字柚比ニ永田、マタ基里村大字飯田ニ長田アリ。本文ハ何レナラン）四拾町二丈三昧六口承仕一人。領一人。各給田鳥栖莊トアリ。「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」【64】ニ、鳥栖庄。四千五町三反トアリ。今ノ裏木村大字鳥栖ナリ。

【64】「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、鳥栖庄。四千五町三反トアリ。今ノ裏木村大字鳥栖ナリ」国本・甲本なし。

曰理郷。〈在ニ郡南一。〉

昔者。筑後国御井川。渡瀬甚廣人畜難^レ渡。於^レ茲纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。就^ニ生葉山^一。為^ニ船山^一。就^ニ高羅山^一。為^ニ梶山^一。造^ニ備船^一漕^ニ渡人物^一。因曰^ニ曰理郷^一。

曰理「曰」印本「日」ニ、湯本・異本「亘」ニ作ル。本書ノ序文ニ拠テ改ム。【65】

【65】国本、この下に『和名抄』ニ、美濃陸奥出羽越中因幡肥後豊後等ニ曰理ト云地アリ。何レモワタリト訓ヘク聞ユ。カク数所ニ曰理トアレハ、日ハ亘ノ

誤リトモ云難シ。荒木田氏ハ、日ハ日ノ誤リカト云リ。此ハ日ヲワタツノ仮字ニ用ヒシト見ユ。イカハアラン。扱此郷『和名抄』ニナシ。（下ノ青柳氏ノ説考合スヘシ）の記述あり。底本なし。推敲の過程で削られたるか。甲本、荒木田氏説の下に「栗田氏曰、『和名抄』陸奥国曰理郡アリ。郡名部ニハ日ヲ

亘ト書リ。『統紀』ニ、亘理郡トモミエ、郷名ニハ亘理トカク。「神名式」古本ニ、曰理郡トアリ。『統紀』神護景雲三年三月、曰理郡トアリ。互ニ通用セル如クミユレドモ、日ヲワタト訓ムベキ義アラネハ、日ヲ日ト誤リシニテ、亘ハワタルトモ訓スレハ、日ト亘トヲ多く用ヒシ者ナルベシ」という記述あり。

また、国本、頭注に「彌云、日ニ作ル。是ナリ」とあり。

○**昔者** 異本「昔」上ニ「往」字アリテ下ノ「者」ナシ。

○**生葉山** 『日本紀』（景行天皇十八年八月）ニ、到的邑而進食。是日。膳夫等遺盞。故時人号其忘盞处。曰^ニ浮羽^一。今謂^レ的者訛也。昔筑紫俗号盞曰浮羽。同シ事ヲ『筑後風土記』（生葉郡条）ニハ、景行天皇。還都之時。膳司在此村。忘御酒盞。天皇勅曰。惜哉朕之酒盞。俗語云酒盞為宇枳。因曰宇枳波夜郡。後人誤号生葉郡トアリ。『和名抄』ニ、筑後国生葉以久波郡。大石。山北。姫治。物部。椿子。小家。

高西（郷名）ナドアリ【5】【66】。

【5】『筑後志』ニ、高井岳ハ生葉郡小塩村ニアリ。層亦山險絶言フヘカラス。峯ノ中央ヲ以テ豊筑ノ界トス。此地、中世大友親繁ト黒木三池小代ホヒマアリ。時親繁陣ヲ此処ニ営ム。蓋其險ニ拠ルナリ。是ヲ生葉山ト云ヘキカ。

【66】国本、この文の下に「伊藤氏曰、高井岳ハ生葉郡小塩村ニアリ。層亦山險絶トイフヘカラス。峰ノ中央ヲ以テ豊筑ノ界トス。中世大友親繁陣ヲコニ営ム。益其險ニヨルナリ」とあり。甲本、この部分を傍点にて抹消す。

○梶『康熙字典』ニ、梶木抄也トアリテ、柁ノ義ハナシ。案スルニ、此ハ古人ハ舟ノ尾ヲ引キタル状ナレハ、其状ニヨリテ柁ヲ梶ト作リシヲ、後ニ梶ノ舟ヲ木ニ轉シツル者カ。梶ト柁ト通スレハ、舟ト木トハ同シキヲ思フベシト考定メ、後ニ塩尻ヲ見レバ、梶倭字ナリ。但シ『読字彙補』ニ、出シタレバ、専ラ倭字トノミ云ベカラズトアリ。此説ニヨレバ、此ハ西人ノ近代ノ作ナラン。『萬葉集』ニ、梶ヲカチト訓タレバ、彼書編輯ノ頃ヨリ用ヰシカ。又後ノ書寫ノ人ノワザニヤ詳カナラズ。○青柳氏曰、亙理郷ハ、『和名抄』ノ屋田郷ノコトナリ。今モ屋田村アリ。（今日此説ニヨレハ、中古以来屋田郷ノ名廣マリテ、曰理郷ヲ覆ヒタルナラン）御井川ハ古渡ハ、屋田・高田、今日裏木村大字眞木ニアリ。西村ノ間ヲヘテ千栗八幡神社ノ前ヲ流レタリ。今ハ此川アセ埋レテ、古渡廢レタリ。三橋氏曰、水屋村今日基里村大字酒井東ニアリニ、倉所ト云処アリ。此辺ノ貢米ヲ納ムル倉ノアリシ所ナリ。故ニ然ヘリ。古老ノ説ニ、此処ハ古キ渡ノアリシ所ナリ。『和名抄』ニ、亙理郷ナシ。屋田郷アリ。今水屋・高田ノ二村相並フ水屋ハ、基肆郡ニ属ス。古キ書記ニ、屋田トアルハ、屋上ニ水ヲ加ヘ、田上ニ高ヲリヘ、水屋・高田トシテ、郷ノ事ニハ非ザルカ。今日、此考ヘ宜シカルベシ。サレドモ『和名抄』ト合ハザルヲ如何セン。（抄ノ誤リカ）

狹山郷（在二郡南一）。

同天皇行幸之時。在二此山行宮一。徘徊曰。望二四方一。分明。因曰二分明村一。（分明謂二佐夜氣志一。）今訛謂二狹山郷一。

異本此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○**日望**「日」竈本「四」ニ作り、異本「日」下ニ「四」ノ字アリ。此郷ノ所在、詳カナラズ。（郡南トアルニヨレハ、旭村朝日山ヲ云ニハ非サルカ。此山高クシテ四方ヲ望ム可ケレハナリ。烽ヲ置カレシヲ思フヘシ【67】。又日理郷ヲ郡南トアルニヨレハ【68】、其接近ナル旧三根郡北茂安村大字白壁ナル千栗山ノ事ニハ非サルカ。此山ハ行宮ヲモ置クヘク四方ノ眺望モ分明キ所ナリ。又古ハ旧養父郡ノ内ナリケンモ知ルヘカラサレハナリ）

【67】国本、この下に「又此山ヲオキテ本文ニ適フ山アルコトナシ」という記述あり。

【68】（又日理郷ヲ郡南トアルニヨレハ……又古ハ旧養父郡ノ内ナリケンモ知ルヘカラサレハナリ）国本なし。

○**今訛**【69】前後ノ文ニヨレバ、「今訛謂狭山以為郷名」トアルベキ所ナリ。

【69】**今訛**の項目、国本なし。

三根郡。郷六所。里一十七。驛一所。〈小路〉

郡「戸令」ニヨルニ、本郡ハ六郷ナレバ下郡ナリ。大体ハ子位ヨリ辰ニ至ルマテハ、旧養父郡ニ隣リ、辰ヨリ午ニ至ルマテハ千歳川ヲ帯ヒ、西ハ神埼郡ニ接ス。東西一里二丁、南北三里、米・麦・榎・油菜等ヲ産ス。『日本紀』（雄略天皇十五年九月）ニ、身狭村主青將呉所献二鷲。到於筑紫。是鷲為水間三瀦ナリ。君犬所嚙死。（別本云。是鷲嶺縣主泥麻呂犬所嚙。今日領ハ三根ナリ。三瀦トハ只千歳川ヲ阻ツ）マタ『寛文印知集』ニ、三根郡。四拾八村。高式万四千三百三拾五石四升六合【70】。マタ『郷村帳』【71】ニ、三根郡郷六郷。大村六拾ケ村。小村四拾八ケ村。男女一万二千五百三十九人。マタ『元禄図』ニ、三根郡。四拾八村。高二万四千三百三拾五石四斗六升。（○「明治二十一年ノ調」【72】ニヨレバ、本郡二千四百四十戸壹万八千八百六十九口。田一千四百三十七町四段。畑百七十九町五段）ナドアリ。

【70】「高式万四千三百三拾五石四升六合」国本・甲本なし。

【71】「マタ『郷村帳』ニ、三根郡郷六郷。大村六拾ケ村。小村四拾八ケ村。男女一万二千五百三十九人」国本なし。

【72】「○「明治二十一年ノ調」ニヨレバ、本郡二千四百四十戸壹万八千八百六十九口。田一千四百三十七町四段。畑百七十九町五段ナドアリ」国本なし。

○**郷六所**『和名抄』ニ、千栗。（○今日北茂安村大字白壁ニアリ。『本朝世紀』ニ、長保二年三月七日言上異瑞状云々。一坐肥前国八幡大菩薩千栗饗誦事云々。マタ『百練抄』ニ、寛喜二年七月廿三日。右大臣以下参入廣田。千栗両社御体焼亡事。マタ肥前国一宮千栗社大宮司神○等申社壇以下造営事云々。正慶二年十二月二日。大宮司等権大納言判ナトアリ）物部。米多。（面多）財部。葛木。（加都良喜。○今日録南義安村大字天建寺ニ葛木神社アリ。此辺ヲ近世ハ矢股郷トイフ。古ノ葛木郷ナラ

ン。『三代実録』貞觀十五年九月ニ、授肥前正六位上葛城一言主神從五位下トアリ。此神名ヨリナレル郷名ナラン）トアリ。逸シタル一郷ハ漢部（下ニアリ）ナリ。（『宇佐大鏡』ニ、豆津別府畠地宮召物麦地子桑代芋在家門布光納奈良田村。平方村。池上沢村。原新子村山田トアリ。北茂安村大字江口ニ豆津アリ）

○里十七 名称所在、詳ラカナラズ。（『明治十年ノ調』【73】ニヨレハ、本郡三十四村ナリ。二十二年改革シテ中原村大字養原・原・古賀、北茂安村大字東尾・中津・隈江口・白壁、南茂安村大字西島・坂口・天建寺、上峯村大字防所前・半田堤・江迎、三川村大字市武・寄人・東津トス）

【73】『明治十年ノ調』ニヨレハ……三川村大字市武・寄人・東津トス」国本なし。

○駅一所 詳ラカナラズ【74】。（三川村大字寄人ニ続命院村アリ。『続後紀』承和二年十二月ニ、故参議刑部卿從四位上小野朝臣岑守。前為太宰大貳建統命院一処。以備往来舍宿。但不籍公刀恐。不得長存。乃叙本意。具修解文曰。管九州二島之民。或公或私往来。相続其求輕者。暫經歲日。其事重者。竟歲始置客宿於府倉之下。賃寄閭閻之間。若病纏身足手。不隨客舍。督察非養病之処。主家争趣皆必死之人。遂便露道路。曩死風霜縱有時。得痊愈亦以飢寒死者。十而七八矣。見其如此心深救。恤聊建統命院。一処檜皮葺屋七宇。鼎一口墾百町。以救飢病有志無力庶義万一也。隔人遠執檢難周轉。以届人更增踈廢。若遂万因公力。恨心願之徒。已伏望令府監或典一人。乃親觀音寺講師。勾当其事相替之日。一事畢已已上。皆依実勘附。若不加修理。令鉞破損。及非法費用之類。並以官法論。未及上聞。岑守物故其家就大臣。追以陳請勅報曰。思思撫黎甿。不忘鑑寐宇縣寬遠。无聞控告。見此奨納。爰知概速。令所司俾允。所請勾当之官。遷替之日。与奪解由。一准国司トアリ）此所ニモ此院アリ【75】。依テ地名トナリタルニハ非サルカ。

【74】国本、この下に「（今中原駅アレトモ、其ニハ非サルコト上条ニ云シカ如シ）」という分注あり。

【75】「此所ニモ此院アリ。依テ地名トナリタルニハ非サルカ」国本なし。代わりに「本村ハ此ノ続命院ノ在リ所ニヤ。又本文ノ趣ニ效ヒ、本村ニモ同院ヲ立テシヨリ、村ノ名ニ負ヒタルニテモアルベシ」という記述あり。

昔者。此郡與ニ神埼郡一。合為ニ一郡一。然海部直島。請分ニ三根郡一。即縁ニ神埼郡三根村之名一。以為ニ郡名一。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。【76】

【76】国本、この下に「神埼郡」の項目を立て「○神埼郡 下ニ注スヘシ」とあり。底本・甲本なし。

○**海部直**『旧事紀』(三)ニ、天背男命。尾張中島海部直等祖。マタ(五)天照国照彦火明櫛玉饒速日命。六世孫。建田背命。海部直等之祖。マタ火明命十世孫淡夜別命。大海部直等祖。マタ『姓氏録』左京神別ニ、但馬海直。火明命之後也ナドアリ。此等ノ同族ナラン。

○**直島**「島」曼本「鳥」ニ作ル。

○**三根村**伊藤氏曰、神崎郡三根村ノ名ニヨルト云コト聞取り難シ。神崎郡内ヨリ三根村ヲワカチテ三根郡トナシツレハ、ヤガテ其村名ヲ郡名ニモ用ヒタリト云コトナランカトモ思ヒタリシカド、此記ニ神崎郡・三根郡ト云ハ別ニ在テ、三根郡ノ内トモ聞エズ如シクハ、此郡ノ内ニ三根郷ヲ挙タレバ取落シタルニテ、実ハ今三根郡内ニ入タルニヤ。今日此説ニヨリテ尚能考フルニ、神崎郡ニ現ニ三根郷アルコトナシ。然レバ此記ニ神崎郡ノ下ニアル三根郡ハ、モト本郡ノ内ニ在シガ、混ヒデ彼処ニ入レルナラン。尚下(三根郡条)ニ註ス。

物部郷。〈在ニ郡南〉。

此郷之中有ニ神社^一。名曰ニ物部經津主之神^一。曩者。小墾田宮御宇豊御食炊屋姫天皇。令ニ来目皇子^一為ニ將軍^一遣^レ征^ニ伐新羅^一。于^レ時皇子奉^レ勅到ニ於筑紫^一。乃遣ニ物部若宮部^一立ニ社於此村^一。鎮^ニ祭其神^一。因曰ニ物部郷^一。

郡南「南」湯本「西」ニ作ル。

○**物部經津主之神**『古事記』(神世)ニ、伊邪那岐命。拔所御佩之十券劍。斬其子迦具土神之頭云々。着御刀本血。亦走就湯津石村。所^レ成神名云々。建御雷之男神。亦名建布都神トアリ【77】。(栗田氏曰【78】、物部經津主神ト物部ノ字ヲ冠セルハ、經津主ノ神劍ヲ物部ノ氏人ニ賜ヒテ、其祭ヲ主ラメシヨリ専ラ物部氏ノ職トシテ石上神古ヘ神ニ仕フル人ヲ、宮賣ト云フコト大宮売神アリ。大神ヲ祭ラシメシ神宮売氏モアリシヤウニ覺エ、「大神社注進狀」ニ照シテ、若宮部ハ、ワカミヤノメニテ人名ナルベシ)今日此説如何アラン。後考ヲ待ツ。【79】【80】

【77】 国本この後に「社ノ所在詳カナラス」とあり。

【78】 「栗田氏曰……今日此説如何アラン。後考ヲ待ツ」国本なし。

【79】 国本、この下に「之」曼本ナシ」という記述あり。

【80】 国本、この下に「曩者」・「小墾田宮御宇豊御食炊屋姫天皇」・「来目皇子」・「物部」・「若宮部」の項目を立て、

○曩者 「曩」異本「往」ニ作ル。

○小墾田宮御宇豊御食炊屋姫天皇 『古事記』（推古天皇段）ニ、豊御氣炊屋比売命（推古天皇ナリ）坐小治田宮治天下參拾漆歳トアリ。小墾田ハ大和高市郡ノ地名ナリ。

○来目皇子 『日本紀』（用明天皇元年正月）ニ、立容種穴穗部間人皇女皇后。是生四男云々。其二曰来目皇子。マタ（推古天皇十年二月）来目皇子為擊新羅將軍。授諸神部及国造伴造等并軍衆二万五千人。マタ（四月）將軍来目皇子到于筑紫乃進屯島郡（筑前志摩郡ナリ）而聚船舶運軍糧。マタ（六月）来目皇子臥病以不果征討。マタ（十一年二月）来目皇子薨於筑紫。仍馭使以奏上。爰天皇聞之大驚。則召皇太子。蘇我大臣。謂之曰。征新羅大將軍来目皇子薨之。其臨大事而不遂矣。甚悲乎。仍殯于周芳娑婆。乃遣土師連猪手令掌殯事。故猪手連之孫曰娑婆連。其是之縁也。後葬於河内埴生山岡上ナトアリ。此時ノ事ナリ。

○物部 名ヲ逸ス。『姓氏録』（撰津皇別）ニ、物部臣同祖。（本録物部首条ニハ、大春日朝臣同祖トアリ。大春日朝臣条ニハ、出自孝昭天皇子天帶彦国押人命也トアリ）来餅橋大使主命之後也。マタ（左京神別）物部石上同祖。（本録石上朝臣条ニ、神饒速日命之後也）ナトアリ。本氏ハ何レノ方ニカ詳カナラス。

○若宮部 亦名ヲ逸ス。此氏古史等ニ所見ナシ。

とあり。「曩者」・「小墾田宮御宇豊御食炊屋姫天皇」・「来目皇子」・「物部」・「若宮部」の項目は、いずれも甲本にあり。

○社於 「社」曼本ナシ。

○物部郷 郷并ニ神社ノ所在、詳カラズ。（本郷『和名抄』ニ載タルヲ見レハ、其頃マテハ存シタルニヤ）『日本紀』（欽明天皇十五年十二月）ニ、百濟遣下部杵率汶斯干奴。上表曰云々。内臣所將來民。筑紫物部莫奇委沙歌能射火前トアリ。此ニ由アル人ナラン。

漢部郷。〈在ニ郡北〉。

昔者。来目皇子為_レ征_二伐新羅_一。勅_二忍海漢人_一將_レ来_二居此村_一。令_レ造_二兵器_一。因曰_二漢部郷_一。

郡北 「北」印本「南」ニ、湯本「東」ニ作ル。竈本・曼本ニ抛テ改ム。現ニ然アリ【81】。綾部郷綾部村存シテ、近来ニ至ル。綾部村、今ハ中原村大字蓑原ノ中入ル。

○**昔者** 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

【81】「現ニ然アリ」以下の記述、国本なし。

○**忍海漢人** 此ハ大和忍海郡ニ住メル漢人ナルベシ。（『日本紀』・『姓氏録』等ニ、忍海氏ミユレハ、此処モ忍海ハ氏ニテ、漢人名カトモ思ヘト、漢部ト云ニヨレハ然ニ非ス）『日本紀』（神功皇后五年二月）ニ、是時俘人等。今桑原。佐糜。高宮。忍海。凡四邑漢人等之始祖也トアリ。是ナリ。（○『播磨風土記』飾磨郡ニ、漢部里。右称漢部者。讀藝國漢人等到來居於此處。故号漢部。マタ漢部里。所以号漢部者。漢人居此村。以為名トアリ。本文ニ似タルコトナリ）栗田氏曰【82】、丹波桑田郡・安藝郡トモニ漢部郷アリ。漢人ノ居シニ依テ負ヘル地名ナルヘシ。美作苦東郡綾部郷モ義ハ同シカルヘシ。

【82】「栗田氏曰」以下の記述、国本なし。

○**將來** 此下ニ脱字アルベシ。

○**漢部郷** 『源平盛衰記』ニ、平治ノ頃、肥前国住人、日向太郎通良、野心ヲ挾テ朝威ヲ頃ケントスル聞エアリシカバ、可追討ノ由、清盛朝臣ニ被仰下、勅命ヲ蒙テ、筑後守家貞ヲ召テ申含ム。家貞、西府ニ下向シテ通良力城、（○今日白帟城ト云レトソ、漢部村ニアリ【83】）ニ押寄テ度々ノ合戦ニ及フ。城モ究竟ノ城ナリ。主モ勇者ニナリケレハ、輒ク落サリケドモ、月ヲ隔テ重テハ、官兵ハ雲ノコトクニ集リケレバ、賊徒ハ霧ノコトク散ケリ。永暦元年四月ニ、通良以下ノ黨類三百三十五人討死ノヨシ、家貞ガモトヨリ、交名ヲ註シテ申上タレバ、清盛事ノヨシヲ奏聞ス。五月十五日、鳥羽殿ニ御幸アリテ、通良并子息通秀、親良以下ノ首七ツ、御棧敷ノ前ヲワタサレテ、被御覽云々。七條川原ニテ檢非違使、通良等力首ヲ請取テ、大路ヲ渡シテ獄門ノ木ニ挂ラレケリ。今日通良力裔杵島郡白石郷ニ住シ白名ヲ氏トシ、藤津郡嬉野郷ニ遷リ嬉野ヲ氏トシテ今ニ存ス。「豊後弘安凶田帳」ニ、速見郡下。倉成名田十六町。肥前国御家人。綾部小次郎道明跡。後家善阿女子。小田原郎景郷配分為知行。マタ『海東諸国記』ニ、節度使己丑年遣使來朝。納歳遣一二船書称九州節度使源教直。或称九州都元帥。或称九州総管。居肥前州阿也非知綾部ト云。マタ『渋川系図』【6】【84】ニ、満直三男教直探題。文明十一年於綾部卒。マタ『元禄図』ニ、三根郷郡六所ナドアリ。此ハ近世ノ東郷（千栗）・綾部郷・坊所郷・西島郷・矢股郷・下村郷ヲ云ナリ。『肥前古跡詠』ニ、漢部郷。在綾部村。文和年間。探題一色居城。応安四年。今川伊豫守貞世代。任探題以此城為支城居第。仲秋応永之初。

渋川満頼代。今川任探題来居。于此赤星遠江守。東攻満頼。々々逃于博多城。応永二十五年。其子義俊。以將軍義持命任探題来居。于此後称綾部城者是也。「河上社正応五年造宮甲途支配総田数文書」【85】ニ、綾部庄七十町ナドアリ。

【6】曰『太平記』（卅三）延文三年大原合戦ニ、綾部修理亮。『九州記』ニ、漢部某トアルモ、皆三根郡漢部ノ由アリキ聞之。

【83】「今日漢部ニアリ。今ハ漢ヲ綾ニ作ル」この部分、国本は分注の形で記す。

【84】「マタ『渋川系図』ニ、満直三男教直探題。文明十一年於綾部卒」国本なし。

【85】「河上社正応五年造宮甲途支配総田数文書」ニ、綾部庄七十町ナドアリ」国本・甲本なし。

米多郷。〈在_二郡南_一〉

此郷之中有_レ井。名曰_二米多井_一。水味鹹。曩者。海藻生_二於此井之底_一。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。御覽井底之海藻_一。即勅賜_レ名曰_二海藻生井_一。今訛謂_二米多井_一。以為_二郷名_一。

異本、「以下脱漏」トアリ。

○井水 「水」湯本ナシ。

○曩者 異本「往昔」ニ作ル。

○海藻 『箋註和名抄』ニ、『本草』云、海藻（迹岐米俗周和布字【86】。○『本草和名』【87】云、海藻和名之末毛。一名尔岐女。一名於古和布見。『三代実録』・主税寮・大膳職・主水司等式按、『万葉集』稚海藻和海藻和可米。即是『延喜式』亦或用稚海藻字）味苦鹹寒無毒者也。（「廣本」無者也。二字与『千金翼方』・『証類本草』二部中品合。按『食物本草』裙帶菜可充迹岐米）「本朝令」云、滑海藻（阿良米。俗用荒布。○荒布見「大膳職式」）末滑海藻。（加知女。俗用搗布搗末之義也。○滑海藻・末滑海藻並見「賦役令」又按『本朝図経』云、東海。又有一種。海帶似海藻而匏且長登州人取乾之柔韌可以繫束医家用下水速於海藻昆布類。是可以充阿良米。貝原氏曰、加知米。或云、相良米。相良遠江地名。似海藻細狹多皺。文於之為末加之羹。最粘滑搗布見。『伊呂波字類抄』・下総本無「搗末之搗」及「也」字。伊勢廣本同。廣本滑海藻別為一条）マタ『伊呂波字類抄』ニ、海藻。「大膳式」曰。和布。マタ海藻（シマモ）。マタ「祝詞式」ニ、奥津藻菜辺津藻菜。其考ニ、藻ヲハ毛波ト云リ。毛トノミ云ハ略ナリナドアリ。

【86】 国本・甲本、この下に「味苦鹹寒無毒」という記述あり。底本は『延喜式』の下にあり。

【87】 「○『本草和名』云……最粘滑搗布見」 国本なし。

○井之「之」印本ナシ。曼本ニ抛テ補フ。

○米多『古事記』（応神天皇段）ニ、若野毛二股王。娶其母弟百師木伊呂辨。亦名弟日売。直若比売命。生子大郎子。亦名意富々杼王者。筑紫之米多君等之祖也。マタ『旧事紀』（十）ニ、筑紫米多国造。志賀高穴穗朝御世。息長公同祖。稚沼毛二股命孫。都紀女加定賜国造。（本居翁曰、志賀高穴穗朝ト云ハ、二股命ト時世違ヘリ。ミタリコトナリ）マタ『宇佐大鏡』ニ、肥前国米多莊（四至）田数三十四丁。用作三段云々。牛十七箇所。御莊等。或御位田百卅町。（天平勝宝年中。公家之奉寄）御供田十二丁。（同年中同奉寄）或油料莊等也。抑根本者。散在諸郡之間。国使入部検田之時。以公田称御封田。以御封田。号公田之故。且公損。且神事懈怠之故。以見作散在。御封田。令相轉。国領見作荒野差四至各所為一箇神領也。マタ「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」【88】ニ、米多庄。五十七町三反。マタ米多庄。三十四町ナドアリ。上峯村大字防所ノ中ニ、米多アリ。此所ナリ。（近古ハ防所郷アリテ米多郷ナシ）本郡三田川村大字市武ニ、刈目島村アリ。目ハ海藻ニテ、米多郷ニ由アルニハ非ルカ。又或人『九州軍記』等ニ、米多井氏ノ人見エタリシヤウニ覺ユトイヘレハ、此地ニ由アル人ナラン。伊藤氏曰、コヽニ井トアルハ川ノ了ニテ、今日井ノ如クナル者ニハ非サリシニテモアラン。凡テ上古ニハ水ヲクム処ハ江ニテモ川ニテモ、ミナ井トノミ唱ヘタル趣ナレハ、尚弘ク考フヘナリ。「村名帳」ニ、坊所古ノ内ニ江迎村・江越村・市橋村ナトアリ。此江ト云コト彼メタ井ニハアラヌカ。

【88】 「マタ「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ……此江ト云コト彼メタ井ニハアラヌカ」 国本・甲本なし。なお、甲本、「上峯村大字防所ノ中ニ、米多アリ。此所ナリ。（近古ハ防所郷アリテ米多郷ナシ）」の記述はあれども、「本郡三田川村大字市武」以下の記述なし。

神埼郡。郷九所。里二十六。驛一所。烽一所。寺一所。

郡「戸令」ニ、凡郡八里以上。為中郡トアルニヨレバ、本郡九郷（郷ハ里ナリ。上ニ出）ナレバ中郡ナリ。（「職員令」【89】ニ、中郡。大領一人。主政一人。主帳一人）大体ハ亥位ヨリ寅ニ至ルマテハ、筑前ニ界シ、寅ヨリ辰ニ至ル迄ハ旧三根郡ニ界シ、辰ヨリ午ニ至ルマテハ千歳川ヲ帶ヒ、午ヨリ戌ニ至ルマテハ佐賀郡ニツヽキ、戌ヨリ亥ニ至ルマテハ小城郡ニ接ス。米・麦・茶・楮・櫨・油菜等ヲ産ス。『続後紀』（承

和三年十月) 二、肥前国神埼郡空閑地。(○今空閑ヲ俗ニコガト訓ム【90】。則チ古賀ヨリ「御村帳」ニ、本郡口山内ニ、古賀村尾崎郷ニ、西古賀村蒲田郷ニ、下古賀村作用郷ニ、上古賀村等アリ。本文ハ何シノ方ナラン) 六百九十町。為勅旨田。マタ『百練抄』(大治二年五月) 二、神埼莊献鯨珠一顆於院。仍令勘和漢之例。(中原師遠ノ『鯨珠記』アリ。此珠、現ニ三田川村大字由手東妙寺ニ在ト云ハイカ、) マタ『東鑑』ニ、神埼御莊兵糧米等。可停止之旨。以帥中納言。被仰北條殿之間。今日且任府宣。且相尋子細。可致沙汰之由。被示遣天野藤内遠景。其上被申開東(云々)。肥前国神埼莊。可停止武士濫行事。可被仰天野藤内遠景之許(云々)。マタ『宇佐大鏡』ニ、神埼東田數十丁三反。国半不輸。マタ『豫章記』(弘安四年) 二、蒙古襲来云々。河野通有、大力大剛ノ者ナレバ、身命ヲステ戦程ニ、大將ト覺シキ玉冠キタルヲ、虜ニシテ云々。通有、此時ノ恩賞ニ肥前国神埼莊小崎郷(○西郷村大字尾崎) 同加納(城田村大字嘉納) 下東郷、後日ニ拝領。同莊餘殘同荒野、肥後国下久々村以上、三百丁賜之。同當国山崎莊ヲ拝領ス。マタ『安樂寺草創日記』ニ、永保三年。為勅旨寄進觀興寺石動莊。(○今東春村大字石動) 四十町。(在肥前) マタ「河上社正応五年造宮用途支配總田数文書」【91】ニ、神埼郡庄三千町。マタ左辨官下太宰府。応禁斷寺領内殺生狼藉弘通律法。肥前国東妙(○今宝珠山ト号ス) 眞言宗沙法兩寺(○今妙法寺ハ東妙寺ノ旁ニアリ) 事云々。彼莊内為異国征伐。自古奉崇三所大明神。所謂奇稻田姫。(○今大若子命ノ誤リ) 高志白角折神(○今大若子命ハ本体、高志白角折神ハ相殿是也云々) 永仁六年七月十四日。右中辨藤原朝臣(判)。大史小槻宿祢(判)。マタ沙門唯円実。肥前国東妙々法兩寺殺生禁斷事。任今年七月十四日宣旨。同九月七日。関東御下知之旨。禁斷寺領内殺生。可令停止甲乙人等狼藉之状如件。永仁六年十一月廿六日。前上總介平朝臣判。マタ西大寺末寺諸国散在僧尼寺領事。奏聞之處。止武士甲乙人等濫妨。可被抽御祈禱之忠之由。天氣所候也。仍執達如件。元弘三年六月十六日覺律上人(御房) 左少辨判。マタ肥前国神埼莊。鎮守櫛田。高志。官長。詎安(并)。晴氣保。(○小城郡晴田村大字晴氣アリ) 近古此辺ヲ晴氣郷トイフ。内以下。地頭職事。任目錄。當知行不可有相違者。天氣如此悉之以状。元弘三年十一月四日。本居執行館左少辨(判)。マタ肥前国神埼莊。東妙々法兩寺領甲乙人寄附(并)。買得田畠在家。荒野等。當知行。不可有相違。殊可被致御祈禱忠者。天氣如此。仍執達如件。建武元年三月廿三日。唯円上人御房。右少辨(判)。マタ雜訴決斷所牒。筑前宗像社。官幣社大宮司氏長申。肥前国神埼莊内。當知行五町事云々。建武元年三月廿四日。右中辨藤原朝臣(判)。西市正中原朝臣(判)。マタ肥前国神埼莊。東妙々法兩寺領。甲乙人寄附(并)。買得田畠在家。荒野等事。任去月廿三日綸旨當知行。不可有相違候。仍執達如件。建武元年四月十四日。東妙々法寺兩寺市丈平(判)【92】。マタ『洪川家譜』(永享六年正月) 二、満直與少貳于肥前神埼而死。マタ肥前国神埼莊内東妙々法兩寺。當知行之地等。管領不可有相違者。天氣如此。仍

執達如件。正平十三年三月廿三日。東妙寺（長老）。左中辨（判）。マタ肥前国櫛田宮造宮事。任先例可令致沙汰給之由。依仰下候也。仍執達如件。正平十六年二月廿八日。東妙寺長老。沙弥道哲（判）。沙弥道准（判）。マタ肥前国神崎莊。東妙寺雜掌定心等。與櫛田宮莊官小稗善西法代。子息光直相論。當莊賀崎郷（○今ナシ）長歌里神崎阿智大字永歌拾坪。田地老町老段事云々。正平廿四年四月十日。權中納言藤原朝臣（判）。マタ肥前国神崎莊櫛田宮。免田地之事云々。任代々證文之旨。不可有知行相違候。仍為後證之狀如件。貞和五年八月。高志櫛田太宮司殿。宮内少輔（判）。マタ所々本領等事。任文書之理。知行不可有相違之由。一品親王御氣色如此。悉之以狀。天授三年十二月十三日。本告執行（館）。左少將（判）。マタ肥前国東妙寺塔婆事。為勅願之儀。遂修造（一本理ニ作ル）本之功。殊可奉祈天下泰平者。院宣如此。仍執達如件。曆応二年六月一日。良念上人（御房）。按察使維預。マタ肥前国東妙寺。為御祈願所擬無貳之懇志。宜行萬年之宝祚者。天氣如此。仍執達如件。元徳三年四月十三日。唯円上人御房。勘解由次官（判）。五条頼元。マタ肥前国阿弥陀院為御祈禱所。早擬無貳之懇志。宜祈萬年之宝算者。天氣如此。仍執達如件。元徳三年四月廿三日。唯円上人御房。勘解由次官（判）。マタ肥前国神崎上八郷事。任故御所御沙汰之旨。知行不可有相違之由。依仰執達如件。三月十二日。謹上五條左午頭殿。左少將奉。マタ太政官符。伊豫国。応令左衛門少尉越智（○河野氏）通盛為肥前国神崎莊内荒野替領知。當国吉原郷一方地頭領知分事。右正二位行中納言兼大藏卿左京大夫大判事侍從藤原朝臣公明宣。奉勅。宜令件通盛領知者。国宜承知。依宣行之。符到奉行。建長二年十月四日。正五位上行右少辨藤原朝臣（判）。修理東大寺佛長官正四位下行左大史小槻宿祢（判）。マタ讓與肥前国神崎庄小崎郷（并）。餘殘荒野地頭職事。右六郎通將任。先例可令領知之狀如件。曆応三年二月十三日。河野對馬守入道善恵（判）。○『寛文印集』ニ、神崎郡百四拾四箇村。四万九千三百三拾五石式斗七升一合【93】。マタ『元禄図』ニ、神崎郡。百九村。高四万九千三百三拾五石二斗七升老合。「明治廿一年ノ調」【94】ニヨレハ、本郡八千五百八十九戸。四万四千百〇八口。田五千三百六十二丁。畑一千〇〇五丁七段。「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員四万九千百七十九口。マタ「大内家壁書」【95】（上ニアリ）ニ、從山口於御分国中行程日数事云々。肥前国神崎八日。請文廿一日以上。右訴人ノ申狀ニヨリテ召文ヲナサルニトイヘトモ、ヤ、モスレハ合遲参イタツラン日数ヲヘルノ間、シルシヲカルニ者。但御用ニシタカヒ差遣起脚等ハ其時儀ニ望テ、早速ニ往来スヘシ。此壁書之次第若違背セシムル輩ニヲキテハ、可被処罪科之由御評定畢。諸人可有存知之由所被仰出候。仍執達如件。寛正二年六月廿九日。備中守（奉）秀明。左衛門大内（奉）正安。

肥前国神崎。マタ『郷村帳』ニ、本郡郷十九郷。大村百五十六村。小村百八村。男女二万九千四百四十人ナドアリ【96】。（○今『三代実録』

貞觀十五年九月二、授肥前国正六位上白角折神從五位下トアリ。仁比山村大字城原ニアリ。村社ナリ。同村大字の鎮座村社。「日枝神社文書」ニ、当山御祈祷事。奏聞之處。早婦千手千眼之誓約。宜所公家武家之安全者。院宣如此悉之以状。五月十日。仁比山衆徒中權中納言（判）。境野村大字境原鎮座古社「若宮神社文書」ニ、勅宣文祿三年八月廿一日宣旨。肥前国若宮叙正一位。藏人頭右中辨藤原光豐（奉）トアリ）

【89】 底本「職員令」の条文に一部脱文あり。あるいはこれを抹消せしか。国本・甲本により補う。

【90】 「（○今空閑ヲ俗ニコガト訓ム。……本文ハ何シノ方ナラン）」国本なし。

【91】 「マタ「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、神埼郡庄三千町」国本・甲本なし。

【92】 「マタ肥前国神崎莊。鎮守櫛田。高志。官長。詎安（并）。晴氣保。（○小城郡晴田村大字晴氣アリ）近古此辺ヲ晴氣郷トイフ。内以下。地頭職事。任目錄。當知行不可有相違者。天氣如此悉之以状。元弘三年十一月四日。本居執行館左少辨（判）。マタ肥前国神崎莊。東妙々法兩寺領甲乙人寄附（并）。買得田畠在家。荒野等。當知行。不可有相違。殊可被致御祈祷忠者。天氣如此。仍執達如件。建武元年三月廿三日。唯円上人御房。右少辨（判）。マタ雜訴決斷所牒。筑前宗像社。官幣社大官司氏長申。肥前国神崎莊内。當知行五町事云々」国本・甲本、この部分の記事の配列が一致せず。未整理のためか。

【93】 「○『寛文印集』ニ、神埼郡百四拾四箇村。四万九千三百三拾五石式斗七升一合」国本・甲本なし。

【94】 『明治廿一年ノ調』ニヨレハ……マタ『大内家壁書』（上ニアリ）」国本なし。

【95】 底本『大内氏壁書』以下の部分を頭注で記すも、甲本により本文に編入す。

【96】 国本、この下に「南里氏曰、筑後ノ人西牟田永家、弘安四年夷賊征伐ノ功ニヨリテ神崎郡内処々ノ地ヲ賜ハル。安富頼泰モ同功ニヨリ神崎郷竹郷（今日竹村アリ）波杵郡船越村等ノ地トナル。河野通有モ同功アリ。已力領地神崎郡尾崎村ノ大楠ニ蒙古ノ首ヲカケ実檢ス。此首ヲ京ニ送りシカハ、恩賞トシテ肥後ノ内并ニ肥前神崎郡ノ内ニテ数百丁ノ地ヲ賜ハル」とあり。

○郷九所

『和名抄』ニ、蒲田。（加万田）三根。（美祢）神崎。（加牟佐岐。○今ノ神埼町【97】）及ヒ近辺宮処（美也登古呂）トアリ。本記ニ船帆

郷アリ。尚四所ヲ逸ス。九所ノ中ニ上ノ五所ハ郡ノ東南ニアリ。然レハ逸シタルハ西北ノ方ナラン。上ニ引ク『豫章記』ニ、小崎郷。「正応ノ文書」ニ、肥前国神崎莊云々。倉戸郷。（○神埼町大字本ニ倉戸アリ）乙板春里竹村郷。（○西古村大字竹村）利田里。（○同上竹村ニアリ）青木里。藍染里。歌安里。辰太田里。河依里。上條郷岩田村。（○西古村大字尾崎ニアリ）松崎里。（○同上條郷）加納中郷。加崎郷。（○近世マテ存ス）蒲田郷。加納中島里。牟知里。『宇佐大鏡』ニ、三根西郷。又上ノ文書ニ、上八郷ナドアリ。此事ノ中ナルベシ。

【97】「加牟佐岐。○今ノ神埼町」とする部分、国本は「(加無佐支。○今神崎駅ノ東ニツ、キテ、神崎ケ里アリ。此辺ナラン。上ニ引ク『正応二年ノ文書』ニ、神崎東郷横田村トアリ。横田村ハ今ノ駅ノ東北 里ニアリ)」とす。

○里二十六上ニ出ス数里ノ外、名称所在、詳カナラズ。(明治十年ノ調)【98】ニヨレハ、本郡百五十八村ナリ。廿二年改革シテ、神埼村大字神埼・本堀・田道・永歌・枝ケ里、小津西郷村大字横武・姉川・本告・牟田・竹村、尾崎村大字直島・姉黒井・嘉納・記田・下板、境野村大字境原・餘江下、西蓮池村大字蓮池・見島・小松・古賀、千歳村大字渡瀬迎、島崎村柳島、三田川村大字吉田・田手・箱川・豆田、東脊振村大字大曲・石動・三津・松隈、仁比山村大字的村・志波、屋雀・村城・原、脊振村大字廣滝・腹巻・鹿路、三瀬村大字三瀬、藤原江村トシ、廿六年神埼村ヲ町トス。『武鑑』ニ、鍋島家五万二千六百二十五石余在所。肥前佐嘉郡蓮池トアレトモ、小城鹿島ト同ク別ニ官ノ朱章アルニ非ス。佐賀鍋島侯ノ内、證分地ナリシ池ヲ本郡ニ入レタルハ、明治廿〇年ナリ)

【98】「明治十年ノ調」以下の部分、国本なし。

○駅一所【99】神埼町大字田道ケ里ニ駅ケ里アリ。是力。

【99】以下の部分、国本は「今ノ神崎駅ノ東北ニ駅ケ里アリ。是ナラン。郡ノ名義ノ起ル荒神ノ社ハ、今ノ駅ノ櫛田神社ナレハ、郡家ハ此駅ニアリシナルベシ」とす。

○寺一所(僧寺)背振村ノ背振山東門寺(天台宗)ナラン。此ハ『三代実録』(貞觀十二年五月)ニ、授筑前国。当時ハ彼国内ニ入りタリシカ。正六位上背布利神從五位下。○今背振村、鎮座郷社祭ル所、神三女神トアル社ノ座主寺ナリ。古傳ニ、神功皇后征韓ノ祈リノ為ニ此ノ社ヲ立ツ。其後僧傳教弘法・智澄・慈覚等、ミナ此寺ニ於テ求法ス。昔ハ僧房類百アリ。古文書モ多カリシトイフ。何レノ頃ニカ此寺ノ兒子、故アリテ筑前早良郡油山ノ僧房ニ通レ入りシヲ、此寺ヨリ返スベキ田ヲ云トモ、返サ、リシカバ、僧徒怒リテ、油山ノ僧房ヲ焼リ、彼僧マタ此寺ヲ焼ク。此ヨリ此寺衰ヘタリトソ。其後元祿中、肥筑ノ人民ドモ、社傍ノ地ヲ争ヒ、遂ニ幕府ノ判決トナリ、神社并ニ傍地、悉ク肥前ノ中タルコト益確實セリ【100】。

【100】国本、この下に分注の形で「『三代実録』ニ、此山神ヲ筑前国トアルハ、本社肥筑ノ界ニアレハ、筑前侶者トモヨリ授位ヲ清シナトニ依リシナラン」と記す。

昔者。此郡有_二荒神_一。往来之人多被_二殺害_一。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。此神和平。自_レ爾以来

無^ニ更有^レ慄。因曰^ニ神埼郡^一。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○**荒神** 此事、上（基肄郡姫社郷）ニ、山途川之西。有荒神。行路之人。多被殺害。半凌。半殺。于時ト求崇由。マタ下（佐嘉郡）ニ、山之川上。有荒神。往来之人。半生。半殺。大荒田祭。此神郡（○今荒神ノコト、撰津・筑後・播磨風土記等ニモ見ユ）ナドアリ。神埼町大字神埼ニ、

即チ縣社櫛田神社アリ。社傳ニ祭神ハ、彼ノ荒振神ニテ、実ハ大若子命、一名幡主命ナリトイフ。「神名式」ニ、伊勢国多氣郡、マタ朝明郡ニマス櫛田神社ト同ナリ。因テ此処モ櫛田神社ト称ス。此命、垂仁天皇ノ御世ニ死リマシ、ヲ、此地ニ祭リシカ、リ荒ビマシ、ナラン。或曰、『倭姫命世記』ニ、阿佐加乃祢尼坐。而伊豆速布留神。百往人者。五十人取死。卅往人者。廿人取死。如此伊豆速布留。時尔倭比売命。於朝廷大若子乎進上而。彼神乎申上者。種々大御手建物。彼神進屋波志々豆目平奉止。詔遣下給支。于時其神乎。佐加乃山嶺。社作定而。其神乎夜波志々都米上奉天。劳祀支トアルニヨレバ【101】、此命ハ荒振神ヲ和メマシ、神ナリ。然ルニ爰ニハ、却テカク荒ビマスハ、イカナル故ニカアラン。○郡家ハ神埼町大字神埼ノ辺ニアリシナラン。其近旁ニ、駅ヶ里ト云所モアリ【102】。

【101】 国本、この下に「大若子命ハ荒振神ヲ和ソ給ヒシ神ナリ。然ルニ今、却テ荒ヒ給フコトハアルマシト云ハ如何アラン。此ハ其時、此社ニ無礼コトナトノ

アリケンヲ怒リ答メ給ヒテ御綾威ヲカクフルヒ給ヒシ所ニシテ、神意ノ甚モ奇シク測リ知リカタキ所ナリ」とあり。

【102】 「駅ヶ里ト云所モアリ」底本「駅オクケヲモ思フベシ」とあるも、文意不明なるにより、甲本により改む。

三根郷。〈在^ニ郡西^一。〉

此郷。有^レ川。其源出^ニ郡北山^一。南流入^レ海。有^ニ年魚^一。同天皇行幸之時。御船從^ニ其川瀬^一。来御^ニ宿此村^一。天皇勅曰。夜素御寐。甚有^ニ安穩^一。此村可^レ謂^ニ天皇御寐安村^一。因名^ニ御寐^一。今改^ニ寐字^一為^レ根。

此郷現ニ、此郡中ニアルコト無シ。此條三根郡ノ名義ノ起ル所ナレバ、元三根郡ノ中ニアリシガ錯ヒテコ、ニ入ツルナラン。サテ然此川ハ綾部川ニテ、一名ヲ寒水川^{サウツ}トイフ。源ヲ三養基郡麓村大字立石ノ石谷山ニ発ス。天皇筑後ヨリ千歳川ヲ渡リテ、此川ノ末流ノ千歳

川ニ入ルトコロ、南茂安村大字西島辺ニ御宿リマシ。其処ヲ御寐村ト号ケマシ、ガ、遂ニ郷ノ名トナリ、又郡ノ名トモナリタルナリ。然ルトキハ、郷本郡内トスルモ、郡東トセサレバ叶ハズ。又郡西ノ西ハ南ノ誤リカ。下ノ蒲田郷。在郡西トアル西モ南ノ誤リナリ。現地然リ【103】。『和名抄』ニ、本郡ニ三根郷アルモ怪ムベシトカク本文、郡西ノ西ハ東カ南カ、又ハ三根郡ノ内トカ。『和名抄』モ誤リトカセザレハ、此條ハ解シ難シ。『東鑑』寛元四年三月ニ、肥前国御家人。安徳三郎。右馬允政康所領事。任舎兄政尚。政家之例。除所職再安堵下文之外。私領可召上。肥前国三根。西郷刀延名三分之一之由。越前兵庫助奉行。伊藤氏曰、根下ニ郡ヲ省ケルモノナリ。マタ「河上神社天福元年文書」ニ、可早任鎌倉殿。御下文旨。令領知肥前国三根西郷内。正義名田并免田貳町伍段。久乃名田参町伍段云々事。「同元亨二年文書」ニ、肥前国三根西郷久能向島正義名云々。マタ『宇佐大鏡』ニ、三根。西郷。下毛。園田地五丁許。并屋敷（已国半不輸）ナドアリ。

【103】「現地然リ。……「同元亨三年文書」ニ、肥前国三根西郷久能向島正義名云々」国本なし。

○年魚『箋註和名抄』【104】ニ、鮎。『本草』云、鰈魚（上音夷。○「伊勢本」、作音啼。『証類本草』云、音夷。又音題然。『廣韻』云、鰈鮎也。社奚切。又云、鰈鮎塩蔵魚腸以脂切二字音義不同。『説文』云、鰈大鮎也。鰈鮎本作逐夷。故音夷。其字本不同也。此作音啼為。是『本草和名』云、仁謂。音帝然啼題並社奚切。在平声十二音属定母帝在去声十二音属端母。其音不同。則帝当是啼字之壞）「蘇敬註」云、一名鮎魚。（上奴兼半。阿由。『漢語抄』云、銀口魚。又云、細鱗魚。○『証類本草』上品引同奴兼反。与『集韻』一音合。按鰈魚。一名鮎魚。即上文所載鮎也。源君鯨訓奈万豆為允別。鰈鮎為阿由者。誤按皇国從來鮎字訓阿由。「神功紀」云々。谷川氏曰、年魚、後人用鮎字者、本此故事蓋此亦太古故從古魚。然則年魚之鮎字、皇国所製會意字。鰈鮎字作字之原。自異輔仁以其字体偶日誤。訓『本草』鰈魚。一名鮎魚為阿由。源君襲其誤也。又按「神功紀」用細鱗魚与。『漢語抄』合細鱗魚見雁蕩山志銀口魚未聞。『崔禹經』云、白似鱗而小。有白皮無鱗。春生夏長。秋衰冬死。故名年魚也。（○『医心方』引云、鮎魚兒似鱗而。小色白中有白垢大者一二尺。小者七八寸。無鱗。春生夏長。秋衰冬死。此引作有白皮者。恐誤脫。按『食經』所說与『本草』鮎魚迥別而与阿由形状。略似春生冬死亦同。只云、無鱗者不合益。是魚其鱗至細。故云無鱗坎。然則『医心方』鮎魚字当從此所引作年魚。然『本草和名』鰈魚条題鮎引『崔禹』云々。則輔仁所見『食經』亦与『医心方』所引同疑年鮎声近而誤之。『古事記』・『日本紀』・『令』・『式』・『大神宮儀式帳』・『万葉集』皆用年魚字）マタ『槐記抄』ニ、今日アユノ考申上、鰈、アユト訓スルハ誤リナリ。香魚ト書テヨキ由、松岡氏ノ説ナリ。シカレドモ、『卷懷食鏡』ハ、香月牛山ノ作ニテ、先達ノ序文ナリ。然ルニ鰈ヲアユト訓ス。貝原氏ノ『大和本草』ニハ、鰈魚、一名香魚トシテ、『両航雜録』ヲ引テ、一年ノモノ、由見エタリ。中村惕齋力『訓蒙図景』ニハ、年魚ト書タレドモ、出処ナキ由申シアリ。何レトモ面白シ。明日トクト御考アルベキノ由仰ラル。

今日『康熙字典』ニ、鮎『説文』鯢也。『爾雅』・『釈名』註、鮎別名鯢。『江東通』呼鮎為鯢。マタ鯢『正韵』曰、鯢博雅鮎也。『類篇』魚十斤。戦国策鯢冠縫註、鯢大鮎以其皮為冠。マタ鯢『集韵』亦作鯢。『本草』鯢魚。即鯢也。今人皆呼慈音即是。鮎魚『尔雅』翼鯢魚偃額兩目上陳。口方頭大尾小。身滑無鱗^{ウル}。謂之鮎魚。言黏滑也。『正韵』與鯢同大鮎也。『類篇』或作鯢。亦作鯢トアリ。然レバ鮎・鯢・鯢・鯢ミナナマヅノコトニテ年魚ニ非ス。『塵漆埭囊抄』等ニ、鯢ヲアユト訓タルハ誤リナリ。支那ニハ、コノ年魚ニ正ク當ル文字ナシ。『大和本草』ニ、鯢ヲアユト訓メト非ナリ。今日鯢ハエナリ。アユハアイトモ云フ。『日本紀』ニ、年魚トイフ。漢名香魚（『兩航雜錄』）。一名記月魚（同）。鰻（『漳州府志』）。細鱗魚（平陽『雁蕩山志』）。『日本紀』ニ、細鱗魚ト書セリトアルハ、精キ考ヘナリ。谷川士清氏伊勢人力、アユ、『南産志』ニイフ鰻ナリ。俗ニ鮎ヲ訓ハ、『和名抄』ニ、本ツケリ。鮎ハナマツナレドモ、神功皇后ノ年魚ヲモテ占セラセシニ由ルナド云リ。彼柁ニ梶ヲ用ケル如ク、此方ノ製字ニシテ支那ノ鮎トハ異ナリ。此ハ聊ノ事ナレドモ、誤易キコトナレバ、カク辨ヘ正シツ。

【104】『箋註和名抄』ニ……『万葉集』皆用年魚字」とある部分、国本は『和名抄』ニ、『本草』云、鯢魚、「蘇敬注」云、一名鮎。和名安由。『楊氏漢語抄』云、銀口魚。又云、細鱗。『崔禹錫食經』云、貌似鱗而小有白皮。無鱗。春生。夏長。秋衰。冬死。故曰年魚也」とす。

○御寐 「寐」印本「寢」ニ作ル。曼本・竈本、及ヒ下文ニ扨テ改ム。

○安穩 荒木田氏曰、安穩二字、『遊仙窟』訓麻世久、『萬葉集』九、有麻勢久ノ詞可併考。

○今改御字為三 「御字為三」ノ四字ハ、臆度ヲ以補フ。然ラサレバ文理通エザレバナリ【105】。

【105】国本、この下に『東鑑』ニ、肥前国御家人安徳三郎右馬允政康所領事。任舎兄政尚政家之例除所職再安堵下文之外。私領可召上肥前国三根西郷刀延名三分一之由。越前兵庫助奉行トアリ」という記述あり。

船帆郷。〈在^二郡西^一。〉

同天皇巡行之時。諸氏人等舉^二落葉^一。船舉^レ帆参^コ集於三根川之津^一。供^コ奉天皇^一。因曰^二船帆郷^一。又御船沈^二石四顆^一。存^二其津邊^一。此中一顆。〈高六尺径五尺。〉一顆。〈高八尺径五尺。〉無^レ子婦女。就^二此二

石^一。恭禱祈者。必得^レ妊^ニ産^一。一顆^一。〈高四尺徑五尺。〉一顆^一。〈高三尺徑四尺。〉亢旱之時。就^ニ此^一二石零^一。并祈者。必為^ニ雨落^一。

此郷、『和名抄』ニモ本郡ノ中ニ収メタレト誤リナラン。今ハ其名ヲタニ聞カズ。又郡西ニ船ヲ泛ブヘキ川ナシ如シ。此モ郡四ツ西ハ南ノ誤リカ。南ニハ船ヲ泛ブベキ処アリ。此モ三根郡ノ中ナリシガ、錯ヒテ本郡ノ條下ニ入リツルナラン。三根郡上峯村大字堤ニ、船名ト云所アリ。ソコニ零スレバ驗シアリトイフ石アリトソ。此ハ沈石ヲ云カ。然シ石ノアルトコロニ船ノ往来スルハナシ。今船ニテ渡ルベキ川ヨリ、船石ト云所マテハ三里【106】許モ隔リタレバ、然ニハ非シカ。此処ハ山村ナルニ、船石ト云地ハ、イトニツカハシカラヌニ、依テ考フルニ、沈名ハモト、南ノ川辺ニ在シヲ後コ、ニ移セシナラン。扱ソレガ遂ニ地名トナリタルカ。（三養基郡旧三根郡ニ米多村大字防所ニ碇ト云所アリ。此モコ、ニ由アリケナリ）或曰、上ノ破名ハ三養基郡中原村大字原古賀ノ内舟石大満宮ノ境内ニアリ【7】【107】。

【7】『出雲風土記』ニ、楯縫郡是所謂石神者是多伎都比古之命御二見当早生両必令零也トアリ。本文ニ似タリ。

【106】「三里」、国本は「二里」、甲本は「二里」とす。

【107】「扱ソレガ遂ニ地名トナリタルカ。三養基郡旧三根郡ニ米多村大字防所ニ碇ト云所アリ。此モコ、ニ由アリケナリ。或曰、上ノ破名ハ三養基郡中原村大字

原古賀ノ内舟石大満宮ノ境内ニアリ」国本なし。

○落葉船

【108】「落葉」異本ナシ。『古今集』ニ、白波ニ秋ノ木ノ葉ノウカルヘヲアマノ流セル舟カ、トソ見ル。『土佐日記』ニ、ミナ人々ノ舟イツコレヲ見レハ、春ノ海ニ秋ノ木ノ葉ノシモチレルヤウニソアリケル。『大井川行幸和歌』ノ序ニ、秋ノ水ニウカヒテハ流ル、木ノ葉トアヤマタレ。『新拾遺集』ニ、波ノウヘニ、漕ツ、ユケハ、山近之嵐ニ、チレル木ノ葉トヤ見シ。『続拾遺集』ニ、波ノウヘ、ウカフ木ノ葉ト、見エルカナ、漕キハナレユク、アケノソホ舟。『柏玉葉』ニ、雲居ヨリ、オツル木ノ葉ニ、見エツルヤ、川上クタル、ウチノ紫柏舟。『新題林集』ニ、波ノウヘ、一葉ノ舟ニ、ミヲオクモ、釣ノウケナル、ワザトシラスヤ。浦風ノ、サソヒステタル、木ノ葉カト、波ニチリウク、アマノ釣舟。『夫木集』ニ、チリヤスキ、一葉ノ舟ノ、ウチナカラ、サスカ月日ヲ、マタワタリツ。此ハ落葉舟トイフ言葉ドモナリ。（佐渡人萩野由之氏曰【109】、紅葉舟ハ遊舟ナリ。『源氏物語』ニ、紅葉ヲフキカサリタル舟ノカサリ錦ト、見ユル、コエ、ハ、吹出ル、モノ、ネトモ。風ニキホヒテ、オトロ、ハ、シキマテ覚ユ。『新後撰集』神無月ノコロ歌合ノマケワサセサセ給ヒケルトキ、法皇御幸侍ケルニ、紅葉ノ舟ニツクヘキ歌トテツカフ

マツリケル藤原為道、紅葉ノ、アケノソホ舟、ユキヨセヨ、此ヲトマリト、君モ見ルマテ。『新千載集』承保三年十月、大井川逍遙ノ納言隆信ノ歌ニモ、紅葉ノ御舟トヨメル歌アメヨメル歌アリテ、『中古御遊』ナトニハ、主トセサセ給ヘルニヤ。『肥前風土記』ニ景行天皇巡行ノトキ、諸氏人等挙落葉舟挙帆参集於三根川之津ト云コト見エタリ。是モ紅葉舟ナルヘシ。上古ノ遺風ト見ユ。此説イカ、アラン)

【108】国本、「落葉船」の頭注に「落葉船トコミシハ久老ガ文字シラス故ノヨミ人等落乗_レ船トアルヲシラズシテカクヨミシ人アヤマレリ」という記述あり。

【109】「佐渡人萩野由之氏曰……此説イカ、アラン」の部分、国本なし。

○川之「之」印本ナシ。湯本・曼本・異本ニ扨テ補フ。

○沈石【110】『箋註和名抄』ニ、『四声字花』云、海中以石駐舟曰破。(丁定反字。亦作碇。伊加利。○『廣韵』碇石無破字。『集韵』碇破。同碇石『韵會』曰碇鍾舟。石或作碇。即此『訓蒙字會』碇。漢人亦曰鉄猫。『正字通』云、俗書刊誤云。船上鉄(猫)曰猫。即今船首尾四角。又用鉄索貫之。投水中使船不動揺者。按古人□(舟主)舟皆用石。故碇碇字從石。後人用鉄造。有四爪。名曰鉄猫。或曰、猫所以駐舟。則同而其状大異。『万葉集』重石訓同。又單用重字)

【110】沈石の項目、国本なし。

○存其竈本・異本「存」下ニ「乎」アリ。

○高四「四」曼本「八」ニ作ル。

○禰折異本、此二字倒置ス。湯本「禰」ナシ。

○零并「并」異本「並」ニ作ル。

蒲田郷。(在_二郡西_一)

同天皇行幸之時。御_二宿此郷西_一。薦_二御膳_一之時。蠅甚多鳴。其聲大囂。天皇勅云。蠅声甚囂。因曰_二郷郷_一。今謂_二蒲田郷_一訛也。

郡西「西」ハ「南」ノ誤リカ。又ハ「西」上ニ「南」ヲ脱スルカ。現地然リ。

○膳之「之」曼本ナシ。

○**郷訛**【11】「郷」ハ衍ナリ。○『郷村帳』ニ、蒲田郷之分。一下古賀村。一道地村。一蒲田村。一小松村。一見島村。一餘江村。一川

崎村トアリテ、近キ頃マテ郷名存シタリシガ、明治廿二年改革シテ、蒲田村ハ蓮池村大字小松ノ中ニ入ル。「正応二年ノ文書」ニ、弘安四年。蒙古合戦勲功賞。肥前国神崎庄分配事。一人肥後国大野岩崎二郎。田地伍町。蒲田郷加納中島里。牟知里。マタ「東妙寺文書」

【112】ニ、一任章乱章長兼基通貞寄進状。嘉暦三年十月廿五日。武藏修理亮英時。被成下知状畢云々。屋鋪蒲田郷借馬里廿一坪一字云々。

蒲田郷加納用作郷。所新田里畠二段云々。蒲田郷鳥喰里十七坪。屋敷一字云々。蒲田郷下蒲田里三坪。屋敷一字云々。右両寺。東妙法寺当知行公田等坪付注進如件。建武二年六月日。マタ「安富文書」ニ、下 安富孫三郎泰治。可令早領知肥前国神崎。蒲田郷内。中

島同庄内倉郷。藤木田畠屋敷山野。地頭職事。右任嘉元三年七月九日。関東。文嘉暦正中。元徳鎮西度々下知状等。可令領掌之状如件。

貞和七年四月廿日（判）。足利直冬。マタ「深堀文書」ニ、深堀遠江守時清申。肥前国於神崎庄勲功恩賞地事。中郷内箱川。○三田川

村大字箱川三町。蒲田手目結島。○蓮池村大字見島五町。西郷内境。○境野村大字塩原三町。此等下賜次目安堵御判弥為抽忠節粗言上如件。応永十一年八月。マタ『元禄図』ニ、蒲田江村。マタ『西国諸家盛衰記』ニ、蒲田・崎村ナドアリ。

【11】**郷訛**の項目、国本なし。代わりに「○此郷名、今ハ一聚落ノ地ニ存セリ。其江邊ニ近キ所ヲ蒲田津トイヒ、田圃ニアル所ヲ蒲田江村トイフ。『元禄図』

に、蒲田江村トアルハ兩処ヲ合セテ云ナリ。『西国諸家盛衰記』ニ、蒲田崎村トアル蒲田モ兩処ヲ合セタル号ナリ」という文あり。

【112】「マタ「東妙寺文書」ニ……応永十一年八月」国本・甲本なし。

琴木岡。〈高二丈周五十丈。在_二郡南_一。〉

此地平原。元来無_レ岡。大足彦天皇。勅曰此地之形。必可_レ有_レ岡。即令_二郡丁_一起造。此岡造畢之時。登

_レ岡宴賞。興闌之後。豎_二其御琴_一。々化_二為樟_一。〈高五尺周三丈。〉因曰_二琴木岡_一。

郡丁 竈本・湯本・曼本「群下」ニ作ル。

○**興闌** 「闌」湯本「岡」ニ作ル。

○**三丈** 「丈」印本「尺」ニ作ル。曼本・湯本ニ抛テ改ム。或曰、印本ノマ、ニテ可ナラン。後考ヲ待ツ。尚○此岡ノ所在、詳カナラズ。

或曰、境野村大字餘江アリ。ソコニ村社香椎宮アリ。其地高クシテ大水ニモ沈ムコトナシ。則チ岡ノ址ナラン。「東妙寺文書」ニ、神埼郡蒲田社。(○村社出雲大社) 祭供免田(川崎境野村大字餘江ニアリ) 二町(号芦野開) 餘枝(○餘江【113】) 尾方一坪五段二丈。(字号毎木宮ノ脇) 田地等之事。任代々證文等之旨。令停止地頭之違乱社家。知行不可有相違者也。仍状如件。閏十一月五日判。(○或曰、本書ハ六百年前ノ者ナラシ【114】) 【115】(マタ肥前国彼杵庄深堀三郎五郎時明謹言上。欲早任御教書旨。急速馳參致忠節上者。下賜安堵御下文。戸町浦西彼杵郡。地頭職同杉浦。以下同萱木。竹留。同国佐嘉郡高木村。(○高木瀬村大字高木) 内田地。屋敷一分。地頭職同国神崎庄内堺村地頭職。同庄三惠島村地頭職事。右所々者。持明相傳私領也。然早任傍例。賜安堵御下文。為備後證。粗言上如件。貞和六年十月日ナドアリ【116】)

【113】「(○餘江。)」とある箇所、国本は「(○餘江村ニアリ)」とす。

【114】「(○或曰、本書ハ六百年前ノ者ナラシ)」とある箇所、国本は「(○詳ラカナラス)」とす。

【115】国本、この下に「今泉千秋氏(本国人)曰、此書年号ナケレトモ、五百年許ノモノト見エ、毎木宮ニテ香椎宮ヲ云ナラン」という記述あり。

【116】国本、この下に「(マタ深堀遠江守時清申肥前国於神崎庄勲切恩賞地事。中地内箱河三町蒲田江目結島五町西地内境三町。此等下賜次目安堵御判弥為抽忍即粗言上如件。応永十一年八月日ナトアリ。堺村ハ今ノ堺原駅ニテ、三惠島村目結島ハ今ノ見島村ナラン。共ニ餘江村ニ近キ所ナリ)」という記述あり。甲本は「応永十一年八月日ナトアリ」以下の記述なし。

宮處郷。(在ニ郡西南一。)

同天皇行幸之時。於ニ此村一奉_レ造ニ行宮一。因曰ニ宮處郷一。

異本、此下ニ「以下脱漏」トアリ。○此郷、『和名抄』ノ外ハ書等ニ見アタラズ。又然イフ地アルコトナシ。西南ノ字ニヨレハ【117】、此郷ハ蓮池村・境野村等ノ辺ニ當ル。

【117】「西南ノ字ニヨレハ」以下の記述、国本なし。

肥前風土記纂註

中

佐嘉郡。郷六所。里一十九。驛一所。寺一所。

〔郡〕「戸令」ニヨルニ、本郡ハ六郷ナレバ下郡ナリ。大体ハ亥位ヨリ辰ニ至マテハ、神埼郡ニ界シ、辰ヨリ千歳川ヲ帶ヒ、川遂ニ海トナリテ未ニ至ル。未ヨリ亥ニ至マテハ小城郡ニ接シ、米・麦・綿・櫛・油菜等ヲ産ス。『日本紀』（安閑天皇二年五月）ニ、置火国。春日部。屯倉。国府。本郡ニアレハ、屯倉モ同郡力。マタ（宣化天皇元年五月）筑肥豊国屯倉。散在懸隔。マタ『靈異記』ニ、大安寺僧戒明大徳。被任竺紫国府。大国師之時。宝亀七八箇年。此頃。肥前国佐嘉郡大領正七位上佐賀（異本嘉）君〔118〕。児公君。設安居會講戒明法令講八十花嚴。マタ『長秋記』（大治五年七月）ニ、参女院御方。次女房。有被事。别当示権右中辨頭頼云。最勝御庄。肥前国川副。〔119〕（「正元」〔120〕年ノ文書）〔121〕ニ、肥前河副庄トアリ。本郡ノ東南ニアリ。今北川副・西川副・南川副・中川副・東川副・新北大記間ノ七村トス）本数二千石、（此ハ御庄ノ分力。今ハ七村ニテ、凡三万石ト云）也。以是充寺相折相待之处。到来八百石也。マタ『源平盛衰記』（成経帰古条〔122〕）ニ、肥前国鹿瀬庄。（○本郡ナリ。近頃マテハ嘉瀬郷トイフ。今ハ嘉瀬村大字荻野ニ嘉瀬アリハ、私ニハ味木庄トモ云ケリ。今日『平家物語』ニ、十月廿日比ニハ、廣瀬ノ庄ニソ着給フ）件ノ所ハ、舅平宰相ノ知行ナリ。コヽニ暫ク逗留シテ、日来ノ疲レヲモイタハリ給ヘリ。湯アミ、髪スヽキナドセラレケレバ、冬モ深クナリテ、年モ已ニクレ、治承モ三年ニナリニケリ。正月十日比ニ、少將ハ廣瀬庄ヲ出テ、上洛云々。マタ『納富系図』ニ、平教盛、九州ニ於テ肥前安富庄（佐賀）宇土村小城云々。今日此三所、今ハ聞カスヲ知行ス。マタ『伊呂波字類抄』〔123〕ニ、佐嘉国府（○今日国府ハ本郡春日村ニ在シナラン。村ニ国分寺、マタ国分尼寺ノ趾モアリ。「河上神社文治五年ノ文書」ニ、佐嘉郡山田東地川原村者四至云々。南限府大路。マタ「同承安三年ノ文書」ニ、佐嘉郡山田東地川原村云々。南限府大路ナトアリ。大路ハ春日村ノ今ノ往還道ヲ云ナラン）土人、岸川保治曰〔124〕、今尼寺村ノ西ニ井釜ト云所アリ。區域狹カラス。其東北ニ納所ト云所アリ。近古素焼ノ陶器ヲ堀出セリ。井釜ノ南ハシヤウノ内ト云フ。近年マテ石垣ノ址アリタリ。此等ヲ考レハ、国府ハ印鑑社ノ西ノ辺ニアリシナラン。今日井釜ハ居構ナラン。古ノ玄関ノアリシ所力。筑後御井郡国府村ノ国府ノ址ト云处ニ、居構ト云所アルトソ。納所ハ金穀ノ納所ナラン。「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、佐嘉庄四十一町二反。マタ『最鎮記文』〔125〕ニ、御願塔白川院御願。本尊釈迦多宝普賢文珠ニ、天。永保二年帥権中納言藤原資仲承。建応寄附。佐賀庄四十三町三十歩。蛸久庄。（同郡鍋島大字蛸久）八十町。長尾三十町。九禅師在三昧六口。預三人。承仕三人。蛸久長尾修正募米餅二百枚。米二斛四斗。

マタ肥前国高城寺（○本郡春日村）寺領等之事。当知行之地。不可有相違者。天氣如此。悉之以狀。元弘三年八月十一日。一輩（御房）。權左少辨（判）。マタ肥前国高城護国禪寺。勅願之權輿。於長老有可有名位由。天氣如此。仍執達如件。元弘三年十月一日。一輩長老（禪室）。右中辨（判）。マタ肥前国高城護国禪寺。勅願寺。可奉祈天長地久。天氣如此。仍執達如件。元弘三年十月一日。一輩長老禪室。右少辨（判）。マタ肥前国正法護国寺（○本郡高木瀬村）當知行事。彼聞食候畢。僧衆可存其旨者。天氣如此。悉之以狀。元弘三年十一月廿八日。武邊（判）。マタ肥前国正法護国寺領事。任去年元弘三十一年月廿八日論旨（并）正月廿九日国宣寺家知行。不可有相違。仍執達如件。元弘四年二月三日。正法護国寺僧衆（御中）。平（判）。マタ勅願寺肥前国春日山。高城護国禪寺（并）寺領等事。右當寺者。為嚴重勅願上者。可令停止甲乙人等乱入狼藉。若有犯違之輩者。召捕其身可被處罪科也。仍狀如件。建武元年八月日。目代（判）。マタ致御祈禱之由。被聞食了。尤神妙弥可抽懇志者。依將軍宮仰。執達如件。正平四年九月廿四日。正法寺（禪室）。勘解由（判）。マタ當寺。為凶徒令燒失由。被聞食了。先朝勅願之旨。趣頗異他所。被驚思食也。造宮已下事。追念可有其沙汰由。且被相觸禪侶者。將軍宮御氣色如此。仍執達如件。正平七年十一月廿七日。高城寺（禪室）。勘解由次官（判）。マタ注進 一見了（權大夫判）。平一族等申。肥前国高木正法寺。當知行領事。右任元弘三年。安堵論旨国宣（并）所下賜寺領目錄等。無相違。奉去渡寺家候畢。以此旨可有御披露候。恐惶謹言。正平八年十二月三日。進上御奉行所。菅原經家（判）。マタ肥前国正法護国寺。被下安堵論旨之旨。御領知不可有相違之由。国宣候也。仍執達如件。正月廿九日。正法護国寺（僧衆中）。前出雲織幸。マタ『醍醐寺方管領諸門跡等目錄』【126】ニ、三法院々領云々。肥前国佐嘉庄。一醍醐寺座主寺領肥前国山鹿。（○今日此名、肥前ニハ聞及ハス。肥ハ筑ノ誤リカ。筑前ニ山鹿アリ。又前ハ後ノ誤リカ。肥後ニ山鹿アリ）當門跡領諸国所々并醍醐管領諸寺院領等事。任先例役夫之米以下課役所免除也。此上者守護役等向後弥。可停止催促之由。可加下知。早令存知給狀如件。長祿四年七月四日。三宝院殿（判）。（○足利義政）マタ『元祿図』ニ、佐賀郡【8】。百七十二村。高十萬二千七百七十九石一斗九升五合。マタ『鄉村帳』【127】ニ、本郡。郷十四郷。大村二百六十一村。小村二百六十九村。人数七万三千三百六十一人。町大小三十五町。諸町人数一万七千九百九十九人。御城下人数一万三千四百五十一人。御立寺社二千七百二十二人ナドアリ。（明治二十二年ノ調）ニヨレハ、本郡二万六千五百二十八戸。十四万〇九百五十七口。田一万〇六百三十八町。畑一千六百五十六町一段。「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員十三万七千七百八十二口ナリ。『三代実録』貞觀二年二月ニ、進肥前国正六位上上金立神從五位下トアリ。本郡金立村ニアリ。郷社アリ。同書同十二年正月ニ、授肥前国正六位上甘南備神從五位下トアリ。本郡春日村ニアリ。村社）

【8】『寛文印集』佐嘉郡。百七拾式箇村。高拾貳万貳戦七百七拾九石壹斗九升五合。

【118】国本、この下に「佐賀氏、書等ニ見エス。此ハ氏ニハアラテ、地名ヲ取テ其人ノ称号ノナシタルナラン」という記述あり。

【119】国本、この下に「河副郷トイフ。郡ノ東南ニアリ」という記述あり。

【120】「元」底本「五」に誤る。甲本により改む。

【121】「正応五年ノ文書」ニ、肥前何副庄トアリ。本郡ノ東南ニアリ。今北川副・西川副・南川副・中川副・東川副・新北大記間ノ七村トス」国本なし。

【122】「成経婦古条」の箇所、国本は「(治承二年九月成経婦リノ条)」とす。

【123】『伊呂波字類抄』の記述、甲本は『醍醐寺方管領諸門跡等目録』の記述の下にあり。

【124】「土人、岸川保治曰……「河上社正応五年造官用途支配総田数文書」ニ、佐嘉庄四十一町二反」の記述、国本・甲本なし。

【125】国本、『最鎮記文』の引用以下、年次排列に乱れあり。

【126】「一醍醐寺座主寺領肥前国山鹿……長禄四年七月四日。三宝院殿。(判)(○足利義政)」国本なし。

【127】「マタ『郷村帳』ニ……「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員十三万七千七百八十二ロナリ」国本なし。

○郷六所

『和名抄』ニ、城崎(喜佐岐。○今日ハシヤウサキトイフ。春日村大字尼寺ニアリ)巨勢【9】(今近キ頃マテ郷名ヲ存ス。今ハ巨勢村大字高尾・修理

田・東西牛島トナル。或曰、往昔巨勢氏大連某、京師ヨリ来住ス。依テ村名トナル。或曰、今巨勢氏ノ人アルハ、此地ニ住シ人ナリ。或曰、筑後人中牟田永秀、古ノ戦功ニヨリ本郷ノ中ノ中牟田ノ地ヲ賜フ)深溝(布加無曾。○今日右大將ノ下文ニ、下肥前国深溝北郷内。甘南備峯補任地頭職事。散位藤原朝臣宗家。右件所者。当為宗家住職之由云々。早為地頭職。可令沙汰之状如件。以下文治二年八月四日。甘南備峯ハ春日村ニアリ。然レハ本郷ハ城崎ト山田トノ間ニ在シナラン)小津(乎都。○「文始二年

ノ文書」【128】ニ、下肥前国小津東郷内竜造寺田畑。住人可任鎌倉殿御下文旨。以藤原季家為地頭事云々。「河上神社建久七年ノ文書」ニ、佐嘉郡小津深溝南両郷云々。マタ

「同乾元二年ノ文書」ニ、小津東郷末吉名。マタ『葉隠』ニ、小津郷ト申ハ、水ヶ江辺ヨリ只今ノ御城地ニカケ土地八十丁ノ処ニテ、其内ニ竜造寺御坐候。故ニ竜造寺村ト申候。其処ハ只今ノ御城ノ西北ニカハリ、寺ノ旧跡ハ当時鍋島能登殿屋敷ノ東北楠ナド有之辺ノ左右ニテ候由、竜造寺八幡宮ハ寺ノ西脇ニ勧請有之竜造寺村、今ニ佐嘉ト唱ヘ申候小津郷ノコト、旧キ『郷村帳』トモニハ相見可申ヤ。今日此楠ノ東ニ明治二十年縣廳ヲ新築ス。『竜造寺家記』ニ、源為朝勅ヲ承テ、肥後ノ逆徒ヲ退治シテ、東肥前ニ城ヲ築キ、別館ハ高木村ニアリ。藤原季喜同季次等相從フテ功アリ。湯浴ノ地ヲ賜ハル地ハ、佐嘉郡小津東郷ニアリ。今日即チ竜造寺村辺ナリ。小津郷ハ西ハ本庄江ヲ限リ、北ハ神野村ニ至リ、南ハ海ニ至リ、東ハ千歳川【129】ニ及ヒシナラン【130】。『家系事蹟』【131】ニ、文明四年。改小津郷為與賀郷トアレトイカ、アラン。佐嘉城ハ竜造寺村

ニアリ。今ハ其址松原・赤松ノ二町ニ跨ル。文治中藤原季家地頭トナリ、始テコ、ニ館ス。其後裔漸々之ヲ擴張シテ、明治ノ維新ニ至ル）山田（也万多。○下ノ大山田女狭山田女条考合スヘシ）トアリ。尚一所ヲ逸ス。（此ハ新庄郷ナラン。地勢シカリ。鍋島村辺ヲ近頃マテ新庄郷ト云リ）

【9】河上文書、正応五年肥前国庄公造河上宮用途支配総田数所渡田事云々。巨勢庄六百町。村岡良弼氏曰、巨勢氏ノ住リシヨリ名ニ負ケン。『書紀』天智紀ニ、巨勢斐太臣ノ別ニテ両地ヲ取テ復姓トセシ者ナルヘシ。延暦十五年紀ニ、巨勢朝臣人公。『万葉』ニ、筑後人許勢部形見ミユ。此地ニ縁アリシナリ。

【128】「○「文始二年ノ文書」ニ……マタ「同乾元二年ノ文書」ニ、小津東郷末吉名」国本なし。

【129】「千歳川」国本「川副」とす。

【130】国本、この下に「然ラハ小津西郷ハ久保田ノ辺ナルヘシ」の文あり。

【131】『家系事蹟』ニ……後裔漸々之ヲ擴張シテ、明治ノ維新ニ至ル」国本なし。

○里十九「里」上、曼本「一」ノ字アリ。名称所在【132】、下ニ引ク所ノ文書ニ散見スルノミ。（「明治十年ノ調」【133】ニヨレハ、本郡三百五十二

村四町ナリ。二十二年改革シテ、北川副村大字江上・木原・光法・新郷、東川副村大字徳富・大堂・諸富、新北村大字寺井・山領・為重、中川副村大字早津江・村早津江・津福富、大訖間村大字大訖間、南川副村大字大井道・鹿江、西川副村大字南里・西古賀・小々森、本庄村大字本庄・鹿子・袋末・次正里、東與賀村大字下古賀・飯盛・田中、西與賀村大字高太郎・厘外・相応・一本杉、嘉瀬村大字荻野・中原・十五・扇町、久保田村大字久保田・徳万・新田・久富、神野村大字神野・多布施・大財、巨勢村大字高尾・修理・東西牛島、鍋島村大字八戸溝・茨田・鍋島・蛸久・八戸、兵庫村大字淵・藤木・尾町・若宮・西淵・下分・高木・長瀬、春日村大字尼寺・久池井、金立村大字金立・薬師丸・千布・久保、泉村大字上和泉・下和泉・川久保、川上村大字東山田・川上・池上・久留間、松梅村大字松瀬・梅野・名尾。マタ旧城下ヲ佐賀市トシ、後又久池井ヲ廢シ尼寺ニ合ス）井ヲ廢シ尼寺ニ合ス）

【132】「名称所在、下ニ引ク所ノ文書ニ散見スルノミ」の部分、国本は「名称所在詳ラカナラス」とす。

【133】「（「明治十年ノ調」ニヨレハ……マタ旧城下ヲ佐賀市トシ、後又久池井ヲ廢シ尼寺ニ合ス）」国本なし。

○駅一所「兵部式」ニ、本郡ニ駅馬意五疋トアリ。佐意モノニ見エズ。又聞シコトモナシ。（如クハ意ハ嘉ノ誤リニテ、春日村辺ヲ云カ。此辺古ノ

国府ニテ、必ス駅ノアルヘキ所ナリ）

○寺一所此ハ国分寺ナリ。（今ニ春日村大字尼寺ニ存ス。寺ノ西ニ国分尼寺ノ址モアリ。是地名ノ起ル所ナリ）国分寺旧ハ天台宗ナリシヨシ、今ハ曹洞宗ナリ。堂宇ハ僅少ナレドモ、境地宏壮ナリ。数回火災ニカゝリ、古記旧物存スル者ナシ。只時アリテ、林中地底ヨリ堅緻ノ□【厂毛】

片ヲ出スノミ。『政事要略』ニ、詔書傳。四畿内七道諸国々別割取正税四万束。以入国分僧尼兩寺各二万束。每年出挙以其息利。永支造寺用。但云々。老岐島分充肥前国。マタ肥前国分（○男女尼寺ヲ云）一寺。堂資材無実破損云々。前司執狀。無実七重燈塔爐并大破灌頂等。前々以往時之事也。延喜十三年。マタ「主税式」ニ、肥前国正税公廨各廿万束。国分寺領三万三千三百九十四束ナドアリ。當時ノ盛大想フベシ。「河上神社永享五年ノ文書」【134】ニ、国分寺ノ内。平尾。マタ『高城寺記』ニ、北禅寺。宝積寺。大昌寺。新善光寺。国分寺。謂之府中五山ナドアリ。此五址トモニ春日村ニアリ。南里有隣氏【135】本国人曰、尼寺村大昌寺ハ国分尼寺ナリ。国分寺・尼寺、西村ヲ昔ハ府中トイフ。天平五年五月廿八日、国分寺開山妙法禅老尼ハ、光明皇后ナリトソ。（伊勢人）御巫清直氏曰、「天武紀」ニ始テ四方ノ国ニ説經ノコト見エ、マタ詔諸国每家作佛舎。乃置佛像及經以礼拝供奉トアル。即国分寺ノ濫觴ナリ。每家トハ諸国ノ政務ヲ判スル官家ヲ云ナリ。官家ハ所謂ル国府ニシテ、其国府ニ作レル佛舎ハ即国分寺ナリ。今日上ニ引ク如ク、国分寺ハ必ス国府ノ接近ニアルヘキナリ。然ルニ『和名抄』ニ、国府ヲ小城郡トアルハ誤リナリ。後ノモノニ小城ニ国府トアルハ、郡府ヲ然云ヒナンタル者ナラン）

【134】「河上神社永享五年ノ文書」ニ、国分寺ノ内。平尾」国本なし。

【135】「南里有隣氏本国人曰……天平五年五月廿八日、国分寺開山妙法禅老尼ハ、光明皇后ナリトソ」の部分、国本は頭注とす。

昔者。樟樹一株。生^レ於^ニ此村^一。幹枝秀高。莖葉繁茂。朝日之影蔽^ニ杵嶋郡蒲川山^一。暮^レ日之影蔽^ニ養父郡草横山^一也。日本武尊巡幸之時。御^ニ覽樟茂榮^一曰。此国可^レ謂^ニ栄国^一。因曰^ニ栄郡^一。後改号^ニ佐嘉郡^一。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○樟樹 【136】『古今要覽稿』四百五十三ミルヘシ。

【136】樟樹の項目、国本・甲本なし。

○杵嶋郡 下ニ註ス。

○蒲川山 此ハ佐留志村ノ堤尾山ヲ云フカ。方位叶ヘリ。又其近旁、小城郡砥川村ニ、蒲原ト云地アリ。此モ此山ニ由アリゲナリ。

○**草横山** 三橋氏（主人）曰、此ハ今ノ綾部山ヲ云ナルベシ。之ヲ捨テ養父郡ニ高山ト云ベキ者ナシ。此山ハ基肄郡田代駅ノ西南ニ在テ、麓ヨリ頂マテハ二里許ナリ。筑前那珂郡ノ山ニ続キテ、凡テ草山ナリ。方角ナドモ叶ヘリ。（今日綾部山ハ樹木少ク草多クシテ、其形横タハレリ。然レハ草横山ト云ハ、草ノ能生ヘテ横タハリタルト云義ニテ、山ノ名ニハアラシ。或曰【137】、綾部山ハ幡宮ノ北ノ山ヲ野方トモ草山トモ云。又其辺ヲ凡テ横山トモイフ。古ハ多ク草ヲ生シタル処ナリ。是レ草横山ナラン）

【137】「或曰」以下の記述、国本なし。

○**日本武尊巡幸之時**【138】 マタ（景行天皇二十七年十月）ニ、日本武尊令撃熊襲。マタ十二月。到熊襲曰云々。既而從海路還倭ナドアリ。此時ノ事ナリ。然レドモ、本国ニ巡幸ノコトハ史等ニ漏レタリ。

【138】 国本、この下に『日本紀』（景行天皇二年三月）ニ、立播磨稻日大郎姫為皇后。后生二男。第一曰大碓命。第二曰小碓尊云々。是小碓尊。亦名日本童男。亦曰日本武尊」の記述あるも、底本・甲本は削る。

○**栄曰**「曰」竈本・曼本「勅」ニ作ル。

○**栄国** 此ハ殊ナル。樟樹ノ甚茂リタレバ、ソレヲ称ヘテ此ノ名ニ負セテ栄国ト云マシ、ヲ、後人ソノサカエノエヲ省キ、佐嘉ト曰ヘルナリ。土人曰、今ニ鍋島村ノ辺ナル沼溝ヲ浚ユレハ、処トシテ底ニ大樹ノ根ヲ見ルコトアリ。彼ノ樟ナラン。案スルニ、本郡ニ上佐嘉・中佐嘉ト云ハアレドモ、下佐嘉ハナシ。地勢ニヨルニ、下佐嘉ハ今ノ佐賀市ノ辺ナラン。古ハ下佐嘉ト称シヲ、後ニ下ヲ省キシニハ非ルカ【139】。（『豊後風土記』【140】ニ、昔此有洪樟樹。因曰球珠郡トアリ。本文ニ似タリ）

【139】 国本、この下に「明治ノ維新ノ際ヨリ官ノ文書ノコト、ハ、ク佐賀トカクヨリ、私ノ文書モ從ヒテ然カクコト、ナレリ。（佐賀城址ハ市街赤松町ニアリ。

此辺ヨリ古ヘノ竜造寺村ナリ。久寄中ニ藤原季喜、本地ノ地頭トシテ始テ此ニ居ル。其隆信、天正中ニ外郭ヲ径営ス。其後、勝茂、慶長中ニ更ニ之ヲ弘擴シ、明治ニ至ル」の記述あり。

【140】『豊後風土記』ニ、昔此有洪樟樹。因曰球珠郡トアリ。本文ニ似タリ」国本なし。

一云。郡西有^レ川。名曰^ニ佐嘉川^一。年魚有^レ之。其源出^ニ郡北山^一。南流入^レ海之。川上有^ニ荒神^一。往来

之人。半生半殺。於^レ茲縣主等祖。大荒田占問。于^レ時有^ニ土蜘蛛大山田女狹山田女^一。二女子云。取^ニ下田村之土^一。作^ニ人形馬形^一。祭^ニ祀此神^一。必有^ニ応和^一。大荒田即随^ニ其辞^一。祭^ニ此神々^一。歆^ニ此祭^一。遂^レ応和之。於^レ茲大荒田云。此婦如^レ是。実賢女。故以^ニ賢女^一。欲為^ニ国名^一。因曰^ニ賢女郡^一。今謂^ニ佐嘉郡^一訛也。

佐嘉川 此川ハ、神埼郡三瀬村大字三瀬ナル。界塚ヨリ出ルモ水ヲ本源トス。又一源ハ、小城郡北山村大字合瀬ヨリ出テ、三瀬ヲヘテ本流ニ入ル。一源ハ、北山村大字無都呂ヨリ出テ、同村大字中原・栗並ヲヘテ本流ニ入ル。一源ハ、同郡南山村大字市川ヨリ出テ、同村大字苜木・古湯ヲヘテ本流ニ入ル。又一源ハ、神埼郡脊振村脊振山ヨリ出テ、同村大字鹿路・佐賀郡松梅村大字名尾ヲヘ、中間許多ノ小流ヲ合セ、同村大字松瀬ニ至テ本流ニ入ル。其他源多シ。本流川上村大字川上ニ至リ、西ニ一派ヲ分ツ。此流レ、小城郡三日月村ヲヘ、牛津町大字ノ東ニ至リ、国道ヲ横切り、更ニ下リ、芦刈村大字下古賀ニ至リテ海ニ注ク。本流、佐賀郡春日村大字尼寺ニ至テ、東ニ小爪ヲ分ツ。之ヲ一ノ江トイフ。本流、更ニ南シ、又東ニ一派ヲ分ツ。此処ヲ天狗鼻ノ石樋トイフ。下リテ鍋島村大字蛸久・神野村大字多布施ヲヘ、佐賀市ニ入り、迂曲索廻、愈分レ、愈小ニシテ厘外・八田・犬尾等ノ江ニ注ク。本流ハ、鍋島村嘉瀬村ヲヘ、久保田村大字久富ニ至リテ海ニ注ク。界塚ヨリ久富マテ凡ソ十里、水質清潔ニシテ味甘美ナリ。慶長・元和ノ頃、藩主成富兵庫茂安ニ命シ、之ヲ修浚經營セシム。人民ノソノ幸福ヲ蒙ルモノ、歳百年歳万人ナルヲ知ラズ。千歳川ノ長堤モ、此人ノ力ヲ尽シ、所ナリ。（明治二十二年、村里改革ノ際、其幸福ヲ蒙ルモノ其名ヲ以テ村ニ名ツク。依テ茂安村・兵庫村等アリ。又有志者金ヲ義捐シ、一大碑ヲ石樋ノ旁ニ立テ、偉功ヲ朽ニ傳フ）石樋ヨリ上ハ石礫多ク、下ハ白沙ナリ。本流ノ廣サ五六十間ヨリ十許間ニ至リ、深サ一丈ヨリ三四尺ニ至ル。秋冬涸渴ノ時ハ、或ハ徒涉スベクモ、夏霖暴漲ノ時ハ、橋堤ヲ壊ルニ至ル。沿岸ノ植物ハ、松・杉・蘆・竹等ナリ。産物ハ、鮒・鯪・鯉・鰻等ナリ。而テ年魚尤美ナリ。梁ヲ以テシ、鵜ヲ以テシ、或ハ網シ、或ハ釣シテ之ヲ捕ル。

山之「之」印本ナシ。異本ニ抛テ補フ。

○半生半殺 曼本「生半殺半」ニ作ル。

○大山田女狹山田女 此ハ川上村ニ大字東山田アリ。此地ニ住タル人ニテ、大狹ヲ以テ姉妹ヲ分テルナリ。大荒田、シカ占問ヘバ、ヤガ

テ此二女ニ神憑リアリテ、取下田村之土云々ト教ヘ諭シアリシナリ。「永久二年ノ文書」【141】ニ、肥前国佐嘉郡山田郷河上別処山老処。マタ「天福元年ノ文書」ニ、肥前国山田西郷。マタ「二年ノ文書」ニ、肥前国山田東郷内河上別所山老処。マタ「天福元年ノ文書」ニ、肥前国山田西郷。マタ「二年ノ文書」ニ、肥前国山田東郷内河上別所。今名河上山。マタ「元亨三年ノ文書」ニ、山田東郷川原村大楊里。マタ山田東郷十一條高市里。マタ「正平十二年ノ文書」ニ、山田東郷牧田里。マタ河上社雜韋貞房申。肥前国●山田庄内守郷地頭職事。申狀（副○○）如此。被致押妨云々。神領之段。無相違欤。早可被止此妨。若又有子細者。可註申之狀。依仰執達如件。正平十六年十月廿八日。菊池菊童殿。右中將（判）ナドアリ。

【141】「永久二年ノ文書」以下の記述、国本なし。

○**下田村** 此村、川上村ノ東北、松梅村大字梅野ニアリ。

○**人形** 「形」下、湯本「及」アリ。

○**土作馬形** 『日本紀』（雄略天皇九年七月）ニ、寛誉田陵乃見駉馬在於土馬之間。マタ『続紀』（神護景雲三年二月）ニ、以大炊頭從五位下掃部王。左中辨從四位下藤原朝臣雄田麻呂。為伊勢大神使。每社男神服一具。女神服一具。其大神宮及月次社者。加之以馬形并鞍。マタ『大神宮儀式帳』ニ、青毛土馬一疋。（高一尺。鞍之髮金飾）ナドアリテ、古クヨリ祭祀ニ用ヰタリ。栗田氏曰【142】、筑後生葉郡福島正福寺鐘樓ノ礎石ナリシトイフ、石造ノ馬形アリ。又福島城跡ニアル石馬ハ、鞍鐙ノサマ判然タリ。又明治九年十二月武藏埼玉郡上中条村ニ掘出セル土馬アリ。高二尺五寸許。コレニハ銜勒モアリ。鞍鐙泥障尻力ヘ手綱ナドモ悉ク具ハレリ。甚メヅラシ者ナリ。

【142】「栗田氏曰」以下の記述、国本なし。

○**有応** 「有」印本「在」ニ作ル。竈本・曼本ニ抛テ改ム。

又此川上有**石神**。名曰**世田姫**。海神（謂**鰐魚**）。年常逆**流**潛上。到**此神所**。海底小魚多相從之。或人畏**其魚**者無**殃**。或人捕食者有**死**。凡此魚。經**二三日**。還而入**海**。

異本、此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○**石神** 此神、現ニ松梅村大字○○川上川ノ西岸ニアリ。則チ淀姫神社ノ故蹟ナリトイフ。本社モト、此処ヨリ旧座主実相院【143】ノ西ニ遷シ、後又今ノ地ニ遷セリトソ。石神ハ石ヲ以テ神体トナシタルナリ。カ、ルコト古キ世ヨリアリ。『出雲風土記』・『播磨風土記』・『続後紀』・『三代実録』・『神名式』・『百練抄』・『扶桑略記』裡書・『山城志』・『雲根志』・『和訓栞』・『藻塩草』・『金葉集』等ニ見エタリ。(外国ノ書ニモアリ)

【143】 国本「実相院」の下に「(真言宗)」と注す。

○**世田姫** 今ハ専ラ淀姫トイフ。縣社ナリ。『三代実録』(貞觀二年二月)ニ、奉進肥前国從五位下豫等比咩大神從五位上。マタ「神名式」ニ、肥前国佐嘉郡一座(小)。與止日売神社。マタ『増補名所方角抄』ニ、川上、佐嘉郡ノ内ナリ。神所ナリ。マタ神功皇后、卷二、早珠・滿珠ノ二ノ玉ヲハ、肥前国佐嘉郡河上ノ宮(今日川上村ニマス社ナルニ依テシカ云)ニ、納メラレケリトナン。マタ『聖母因縁記』ニ、河上大明神。其名申豊姫。今日豊ハユタト訓ヘシ。即チヨタナリ。マタ『八幡愚童訓』ニ、神功皇后。御妹二人云々。一人成河上大明神。マタ『和爾雅』ニ、河上大明神。今在記云。豊玉姫也。マタ神崎郷庄官等。任院廳御下文。并次第文契等。○○當御庄官僧春海。為肥前国一宮河上座主職事云々。文治二年八月日。権大進源朝臣(判)。マタ肥前国河上一宮【144】。座主増如申。御寄進佐嘉郡。宮原入道。佛念跡田畠事。申状具書如此。混高木肥前入道跡点定云々。所可申無相違者。可止其妨。有子細者。可註申之状。依仰執達如件。正平廿一年十月十三日。久木原新左衛門殿。左小將(判)。マタ肥前国河上社造營事。座主増如重申状如此。先度被仰之处。不事行云々。社頭破損之次第。早速遂檢見。可被註申之状。依仰執達如件。正平廿二年七月廿七日。菊池肥前守殿。左少將(判)。ナドアリ。(本社大祭旧九月十五日、旧座主眞言宗川上山実相院及ヒ支院十二神官二家、女巫六家、産子八百戸アリ。古来朝廷并ニ幕府候ノ寄附地数万石アリシトイフ。旧藩主五百石ノ地ヲ寄ス)

【144】 「マタ肥前国河上一宮」以下の記述、国本なし。

○**海神(謂鰐魚)** 印本「神」下ニ「年常」ノ二字ヲ錯置。国人枝吉經^(種カ)□代ノ説【145】。又異本ニ拠テ改ム。案スルニ【146】、近古ノ書ニ、河上神ヲ神功皇后ノ妹ナリト見ユレド如何アラン。実ハ海神豊玉毘売命ニハ非ルカ。其ハ『古事記』(開化天皇段)ニ、息長帯比売命ノ女弟ヲ靈空津比売命トアリ。靈空比売命ノ一名ヲ、『足羽社記』ニ、玉姬命トアルヲ、海神ノ豊玉毘売命ニ混ヒツル者ナラン。然イフ徴ハ、豊玉毘売命ノ鰐ニ縁由マスコトハ、素リ論ヒナク、本文ニ海神、即鰐魚トモノ、豊玉毘売命ニ由アレバ、カク水流ニ逆上リ、神ノ御許ニ至ハ、又ソノ眷属ノ小魚等モ之ニ從ヒ、且ツ人ノ之ヲ畏ル、者ハ殃ナリ。捕食フ者ハ死ヌコトモアルナリ。此神ヲ靈空津比売命トシ

テハ更ニ縁ナシ。尚別ニ精ク論ヒオキツルモノアリ。土人曰、鯰ハ淀姫ノ御使ヒ者ナリ。故ニ本社ノ産子ドモ之ヲ食ヘバ祟アリ。又本社ニ願ヒノ賽シニ、鯰ヲ画キテ奉ルコトアリ、ト此ハ古ノ鰐ノ事ドモノ今ハ此魚ニ残リタルナラン。（筑前人、臼井浅夫氏曰、筑前嘉摩郡大隈村ニ鰐神社アリ。祭神ハ葺不合命・火々出見命・豊玉姬命ナリ。毎年鰐魚海ヨリ許リ社辺ニ来ル。土人ノ傳ニ、豊玉姬命ハ海神ナレハ、鰐ヲ使トシテ往来セシム。此社ヨリ海マテハ十二里ナリ。其間ヲ恙ナク来レハ、其年豊穰ナリ。如シ中間ニシテ人コレヲ捕レハ、其人殃ニ逢フトソ。或人ノ薩摩ノ旧城下ナル鹿兒島神社ニコトヲ話ツル中ニ曰ク、本社毎年ノ大祭二月・十月ノ十七日ノ夜、鰐魚氏瀬川ニ上ルヲ以テ、河水逆ニ流ルト云傳フ。蓋シ土人、鰐ヲ以テ海神トスルナリ。此等ハ本条ニ思合サル、事ナレハ、因ニコ、ニ附記ス）

【145】「国人枝吉經 □ 代ノ説」 国本・甲本なし。

【146】「案スルニ、近古ノ書ニ、河上神ヲ神功皇后ノ妹ナリト見ユレド如何アラン。実ハ海神豊玉毘売命ニハ非ルカ」の部分、国本は「案スルニ、川上神ヲ神功皇后ノ妹ナリト近古ノ書等ニ見ユレト如何アラン。実ハ海神豊玉毘売命ナルヘシ」とす。甲本は「皇后ノ妹ナリ」という記述より下を傍点にて抹消す。

○此魚 「魚」下ニ曼本・竈本「等」字アリ。

○經二 「經」曼本「住」ニ作ル。【147】

【147】 底本この下に、

『大日本史』志二百、佐嘉氏。景行帝時。有佐嘉県主祖大荒田。光仁帝時。有肥前佐嘉郡大領佐賀君兒公。『日本靈異記』穗公瓦氏。仁賢帝時。有穗公瓦君。

山岡氏。仲哀帝時。有山岡県主。祖熊鰐。孝德帝時。有小乙山岡公宜。『日本書紀』

帝時。有下水君雜物。『太子傳補闕起』有下火氏。聖武帝時。有下火首君麻呂。『東大寺古文書』

という記述あり。国本・甲本なし。いずれの箇所の注釈か不明。

小城郡。郷七所。里二十。駅一所。烽一所。

郡「戸令」ニヨルニ、本郡ハ七ナレバ下郡ナリ。大体ハ北ハ筑前ニ界シ、丑位ヨリ寅ニ至ルマテハ佐賀ニ界シ、正南ハ海ニ臨ミ、杵島郡ニ接シテ申ニ至ル。申ヨリ亥ニ至ルマテハ、則チ松浦郡ト境ヲ交フ。東西四里ニ拾六丁、南北七里拾八丁、米・麦・綿・麻・茶・楮・

柿・石炭等ヲ産ス。『宇佐大鏡』ニ、肥前国小城東西。(田數三百七十一丁八反卅。但宮加地子百起請定宮召物。加地子副米百四十五石九斗三升) 小城東西(六【148】十二反四丈) 小城郡内伴部郷(七十七丁五反二丈) 伴小城西東并伴部郷者。本国領也。而自本領主大監秦時廣之手。與見物。以延久五年。買得津守常見御領之後。於半不輸之神領。辨濟宮物之外。停止他国勤仕神事。進濟宮召加地子副米也。秦時廣沽券云。畠三箇所萱原田村云々。福所村云々。江津村云々。甕調郷云々。伴部郷云々。立券注文云。小城郡甕調郷云々。四條(○三月月村【149】) 大字堀江ニアリ云々。五條(○日村大字樋口ヶ里ニアリ云々【150】) 荒田云々。伴部郷。六條云々。七條云々。荒田云々。右荒増記之件。田富者。自本領主藤井宮時之手。御宝前権檢校僧円昭。令穰得之間。自円昭之手。大宮司公通議得之上宮時。男宮行。又與讓狀畢。仍公通私領也。(是公通立新券諸々神官判由緒也) マタ『今川系図』【151】ニ、伊豫守貞世入道了俊、応安四年各下向肥前小城郡二開府ス。マタ貞世号了俊。応安四年。將軍義満公遣了俊。為九州探題。開府肥前小城郡。今生立ヶ里也。マタ『大平記』(建武三年)ニ、阿蘇大宮司惟直ハ、先日多々良濱ノ合戦ニ深手負タリケルカ。肥前国小杵(○城ノ誤リ)山ニテ自害シタ。マタ『治乱記』(一名『北肥戰誌』)ニ、阿蘇ノ大宮司ハ兄弟三人、郎從二百人、本国ヘ志シ、肥前国小城山ヲ越シ処ニ、千葉大隅守カ所領ノ郷民トモ、雲霞ノ如ク集テ、落人遁サジト、取籠ル阿蘇カ兵之ヲ防テ、山ヨリ大石ヲ數多落シカケ、打破チ通ントス。地下人事トモセズ、千鳥カケニ石ヲヨケ、大宮司カ者ドモ、皆戦ヒ勞レテケレバ、百六十餘人、矢場ニ討シ、大將大宮司惟直、同弟惟成、一所ニ討死ス。其弟惟澄モニヶ所疵ヲ蒙リシガ、當ノ敵十四人、切伏セ慕フ者ヲ追拂ヒ、兄ノ死骸ヲセテ辛々肥後ヘ歸リヌ。(土人曰、惟直、阿蘇山ノミユル所ニテトテ、天山ノ頂ニテ自殺ス。墓ハ晴田村大字晴氣天山神社上宮ノ旁ニアリ) マタ『鎌倉大草紙』【152】ニ、千葉胤貞上洛シテ、吉野ヘ参リ征西將軍ノ宮御下向ノトキ、御供シテ九州ヘ下リ、大隅守ニ補任シ肥前国ヲ知行シケリ。胤貞ノ子法花宗日祐上人モ九州ニ下向シ、肥前国松王山(○今日今ハ松尾山護国寺トイフ。岩松村ニアリ)ヲシテ、総州ノ中山ヲ引テ、末ノ世マデ此所ヲ中山トス。兩寺一寺ト号ス。マタ『花宮三代記』(文中二年三月【153】)ニ、去二月十九日。筑前国兩所没落。同十三日。肥前国小城合戦。御方打勝之由。注進到来。マタ『宗像軍記』ニ、大宮司氏請ヨリ、十一世ノ孫、氏国頃、肥前国晴来村○今ハ晴氣ト書ク。ニテ、水田三百丁ヲ領ス。マタ『寛文印知集』ニ、小城郡。百四拾四箇村。高四万六千四百九石六斗八升合【154】。マタ『元禄図』ニ、小城郡。百四十四村。高四万六千四百九石六斗八升八合。マタ『郷村帳』【155】ニ、小城郡。大村百七十村。小村百二十五村。人数三万八千二百四十三人。(○本書、郷數ヲ逸ス。然レモ書中ニ散見スル所ヲ算フレハ十三郷ナリ。「明治二十一年ノ調」ニヨレハ、本郡一万千〇九十一戸。五万四千百五十八口。田五千八百七十三町八段。畑一千七百九十八町八段。「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員六万八千二百七十七口) マタ『海東諸国

記』二、有小城。在博多南十五里。民居一千餘戸。正兵二百五十餘。總治九州之兵。マタ千葉殿己卯年（○長祿三年ナリ）遣使來朝。居有小城云々。書称肥前州。小城千葉介元胤。約歲遣一船。マタ『源宗傳』【156】戊子年（○応仁二年ナリ）遣使來朝。書称肥前州。上松浦多久。豐前守源宗傳。以宗貞國請接待。居多。有麾下兵。マタ讓与肥前國。小城郡晴氣保。地頭職事。藤氏女。右件庄者。隆果曾祖父尾張少將隆頼。有事縁。自鎌倉故。大將家所充賜也。因茲隆頼讓息男成亮。々々讓息男顯嗣。々々讓子息隆果。四代相承領事。無相違之次第。關東代々御下文。明白也。而藤原氏者為同父一腹味之上。任亡父遺言相副調度證文等。永所令讓渡之狀如件。文永六年八月廿一日。權律師隆果（判）。マタ「河上神社正応五年造宮用途支配總田數文書」【157】二、小城郡七百町。（○元九百町マタ・・・・）三間円通（○三間山円通寺トイフ。岩松村ニアリ）臨濟宗之靈砌者。九州肥前之勝地也。專傳菩薩達磨之心宗。鎮疑不立文字之工夫。茲以帰太上法皇之勅願。祈天下慈民之安全。然者至于慈民三會之下生。可抽衆僧一同之中膽者。依院宣悉之以狀。正安三年七月廿九日。円道寺住持円定上人。御房參議（判）。マタ宗像大官司氏盛申。肥前國晴氣保安光名地頭得分。米參拾六石伍斗六升九合。錢三陸佰九拾貳文事云々。延慶三年十二月六日。前上総介平朝臣（判）。マタ太宰府目代遠宗申。条々一府調進神宗料所。肥前國小城郡東方所課事。右地頭千葉太郎胤貞對捍之間。度々雖被裁許尚以無沙汰云々。諦実不日可辨之旨。重可加催促。若猶不承引者。急可被注進矣云々。以前条々依仰執達如件。正中三年正月廿三日。相模守（判）。武藏守（判）。マタ宗像六郎三郎氏勝○宗像神社大官司代朝秀申。肥前國晴氣保乙久安名内田地貳町五段。檢注年貢濟物等事云々。元徳三年七月二十五日。修理亮平朝臣（判）。マタ依武藏修理亮史時○北条誅伐事。肥前國晴氣保地頭。宗像六郎氏勝云々。元弘三年六月二日。マタ肥前國三間寺知行地事。被聞食畢。僧衆可致其旨者。天氣如此。悉之以狀。元弘四年正月十五日。式部大夫（判）。マタ當知行地事。自元為勅願寺處。被成下重安堵綸旨上者。不可致甲乙人等。狼藉若於違犯之輩者。為処罪科。可令注進交名之狀如件。建武元年八月三日。目代（判）。マタ肥前國小城郡円道寺雜掌○寺領同國小保町内首泉町田地壱町壱段事。小保七郎。致押妨○事实者太無謂早○彼妨於○地者。可自然付寺家之狀事。●●九月廿八日。守護代右馬權頭（判）。マタ筑後國木屋彈正左衛門尉行実申軍忠事。右者八月十八日。為對治肥前國凶徒。御発向之間。自最前令御供。同九月一日。小城々攻合戰。抽軍忠訖云々。然早賜御判為龜鑒言上如件。正平十年十二月一日。一見了（判）。マタ肥前國小城郡。西方地頭職城入道跡三分一。為肥後國守富庄替。可知行之由。依仰執達如件。天授二年十月十三日。阿蘇大官司殿。宮内少輔（判）ナドアリ。（『三代実録』貞觀二年二月二、進肥前國從五位下天山神從五位上トアリ。上宮ハ晴田村大字晴氣ノ天山ニアリ。座主天台宗曼珠院神官二家宮崎トイヒ、円城寺トイフ。支祠アリ。一ハ岩松村大字岩倉ニアリ、一ハ晴氣ニアリ、一

ハ東松浦郡巖木村大字廣瀬ニアリ。共ニ郷社)

【148】 国本「六」の上に「百」あり。

【149】 「(〇三日月村)」 国本なし。

【150】 「(〇日村大字樋口ケ里ニアリ云々)」 国本なし。

【151】 「マタ『今川系図』ニ、伊豫守貞世入道了俊、応安四年各下向肥前小城郡ニ開府ス。マタ貞世号了俊。応安四年。將軍義満公遣了俊。為九州探題。開府肥前小城郡。今生立ケ里也」 国本なし。代わりに「南里氏曰、文永十一年冬、千葉介頼胤蒙古ノ戦ニ疵ヲ蒙リ、明年領知小城ニテ死ス」とあり。

【152】 以下国本、掲出史料の配列順序に異同あり。

【153】 底本「文中三年二月」とす。国本・甲本により改む。

【154】 「高四万六千四百九十六斗八升合」 底本傍書す。甲本は本文にあり。

【155】 「マタ『郷村帳』ニ……「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員六万八百二十七口」 国本なし。

【156】 「マタ『源宗傳』 戊子年……(〇元九百町マタ……)」 国本なし。

【157】 「マタ「河上神社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、小城郡七百町。(〇元九百町マタ……)」 甲本なし。底本「(〇元九百町マタ……)」以下の部分を省略か。

○郷七所

『和名抄』ニ、川上。(加波加美。〇今日、此ハ佐賀郡ノ川上ノ西ノ方幾分カ。当時本郡ニ入タリシナラン) 甕調。(美加都岐。〇『元禄図』ニ、三ヶ月

郷十二時トアリ。伊藤氏曰、此ハ上古ニ土師ノ住テ甕ヲ作り御調ニ奉リシナトニテ負セタル名ナルヘシ。對馬上縣郡ニ玉調郷アリ。似タル名ナリ。今日三ヶ月郷、近頃マテ存。現ニ三日月村アリ。近旁佐賀郡川上村ニ今山アリ。今ニ磁器ヲ製ス。古甕ヲ作りシ名残ナラン) 高来。(多久【158】。〇『海東諸国記』【159】ニ、源宗傳。戊子年。遣使来朝。書称肥前州川上。松浦。多久。豊前守源宗傳宗貞。国請接待居多。有麾下兵トアリ。上松浦トアルハ誤リ。『宇佐大鏡』ニ、高来。別府田数百三十町。宮召加地子。起請田定百町加地子。百名半不輸。件別府本府領之而郷。大江朝臣匡房当官之砌。建立堂舍。今号池中大貳韋是也。始行法華三昧。彼佛堂灯油調度直預承任等。供料当別府并豊前国虫注別府等。永所被寄神領也。伊藤氏曰、此ハ古ノ栲ノ多キ所ナトニテ負セタルナルヘシ。〇今日今ニ多ク麻楮ヲ産ス。又近頃マテ上多久郷・中多久郷・下多久郷等存ス。別府ハ別府駅ニテ、今ハ東多久村ノ大字トナル。豊公征韓ノ時、此駅ヲ通行シ人家ノ衰替セルヲ憐ミ、毎月六回ノ市ヲナサシム。此ヨリ漸隆盛ニ復セリトソ。市ハ今ニ存ス。土人曰、源頼朝遊樂ノ時、多久宗直ト朝夷義秀ト々相撲ヲトラム。宗直勝チテ其褒賞トシテ、全国内ニ於テ多久云地三所ヲ宗直ニ与フ。其中ニテ本所ノ地等廣シ。

宗直依テ此処ニ来住ス。始メ下多久村ニ居リ、後上多久村ニ遷リ、梶峯城ヲ築キ之ニ居ル。其後変遷宗繁ニ至ル。永禄中【160】、竜造寺隆信公之ヲ亡シ、其地ヲ弟長信ニ與ヘ傳ヘテ維新ニ至ル）伴部（登毛。○伊藤氏曰、此ハ古伴部ノ住ミシ。後ニテ名ニ負ヘタル地ナラン）トアリ。尚二所ヲ逸ス。（○「永仁二年ノ文書」【161】ニ、肥前国小城郡西郷内三寺葉師堂免云々トアリ。此モ一ノ郷カ。詳ラカラス。晴氣郷ト云モアリ。此モ古キ者ナラン）

【158】 国本、この下に余白あり。

【159】 国本、以下分注で記す。

【160】 「永禄中、竜造寺隆信公之ヲ亡シ、其地ヲ弟長信ニ與ヘテ維新ニ至ル」という箇所、国本は「永禄年間、龍造寺隆信之ヲ亡シ、弟長信ニ其地ヲ与フ。後長信蓮池ノ小池政光ト城地ヲ交換ス。政光カ異志アルニ及ンテ又之ヲ復ス」とす。

【161】 「○「永仁二年ノ文書」以下の記述、国本なし。代わりに「上ニヒク文永延慶等ノ文書ニ晴氣保トアリ。今ノ晴氣郷是レナリ。又魂ニ、佐保郷アリ。尚一所ヲ逸ス」、頭注に「弼云、尚一所ハ小城郷カ」とあり。

○里二十 名称所在、詳カナラズ。（「明治十年ノ調」【162】ニヨレハ、本郡百三十八村二町ナリ。二十二年改革シテ、小城町大字小城、三日月村大字三ヶ島・長神田・織島・道辺・堀江・金田・樋口・久米・石木・木甲・柳原、牛津村大字牛津・柿樋・瀬勝・乙柳、芦刈村大字三王・崎濱・枝川・永田・道免・下古賀・芦溝、砥川村大字上砥川・下砥川、三里村大字池上・栗原・舟田、東多久村大字別府・納所、南多久村大字下多久・長尾・花祭、多久村大字多久、西多久村大字板屋、北多久村大字多久原・小侍、晴田村大字晴氣・畑田、岩松村大字岩蔵・松尾、南山村大字古湯・畑瀬・市川・荳木・杉山・鎌原・上熊川・内野・下熊川・八反原、北山村大字藤瀬・大野・中原・麻邦・古下・無津呂・古湯・下合瀬・上合瀬・大串・栗並トス。牛津村、後二町トナル）

【162】 「明治十年ノ調」以下の部分、国本なし。国本、この部分に「○『和名抄』ニ小城郡（國府）トアレトモ國府ハ佐賀郡ニアリシコト上（佐嘉郡条）ニイヘルカ如シ。此ハ本郡ニ別府ノ在シヨリ誤リシ者ナラン。別府ハ別府駅ニアリシナリ」という記述あり。

○駅一所 「兵部式」ニ、駅馬。高来五疋トアリ。即チ別府駅、東多久村大字別府ナラン【163】。（高来ハ多久ナレハ、旧ノ多久町ニテ、即多久村大字多久ナランカトモ思ハルレトモ、然ニアラス。別府村ハ別府ノアリシ処ナレハ、駅ニテアリシナラン。サルヲ「兵部式」ニ高来トアルハ、此ノ大名ヲ云ヒシカ）

【163】 「東多久村大字別府ナラン」以下の記述、国本なし。

○烽一所 烽所在詳カナラズ。

昔者。此村有^二土蜘蛛^一。造^レ堡隱之。不^レ從^二皇命^一。日本武尊巡幸之日。皆悉誅之。因号^二小城郡^一。

異本、此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○此村 此ノ郡ノ名ノ起ル所ナレハ、小城町ノ辺リカ。郡家モ此処ニアリシナラン。

○堡 「軍防令」ノ義解ニ、堡高土以為障防賊也トアリ。堡ハ小キ城ノ如キ者ナレハ、ヲキトモ訓ムベシ。〔豊後風土記〕日田郡石井郷ニ、昔者。此村有土蜘蛛之。堡不用石築以ニ似タリ〕

松浦郡。郷一十一所。里二十六。驛五所。烽八所。

〔郡〕「戸令」ニヨルニ、本郡ハ十一郷ナレバ中郡ナリ。大体ハ丑寅ノ位ハ筑前ニ界シ、寅ヨリ卯ニ至ルマテハ小城郡ニ界シ、卯ヨリ辰ニ至ルマテハ杵島郡ニ界シ、辰ヨリ巳ニ至ルマテハ彼杵郡ニ界シ、其餘ハ海ニ面ス。本国第一ノ大郡ナリ。明治十一年、分テ四トシ、唐津地方ヲ東トシ、伊万里地方ヲ西トシ〔164〕、五島地方ヲ南トシ、平戸地方ヲ北トス。麻・麦・豆・甘藷・楮・櫛・塩・石炭・磁器・鯛・鯨・鰯・鮪・鰻・蛇・鯖・海參・鰹・入鹿・鳥賊・石花菜・雜冠草・海苔・鹿角菜・和布等ヲ産ス。『統紀』（天平十二年十一月）ニ、大將軍大野東人等言。捕獲賊藤原廣嗣於肥前国松浦郡值賀島長野村。（○北郡）廣嗣之船。從知駕島發得東風。往四箇日。行見島船上人云。是耽羅島也。于時東風猶扇船留海中。不旨進行。漂蕩已經一日一夜。而西風卒起更吹還船。於是廣嗣自捧駈鈴一口云。我是大忠臣也。神靈充我哉。頼神力。風波暫靜。以鈴投海。然猶風波弥甚。遂着等保知駕島。色都島矣トアリ。然ルヲ『松浦廟宮本緣起』ニハ、藤原廣嗣。遁去肥前国松浦郡值加島。乘竜駒。遙欲移隣朝。向馬於海上。不敢進。即削頭棄畢。乃乘船浮海東風往四箇日。行見島船上人云。是耽羅島也。于時東風猶扇。船留中。不旨進行。漂蕩已經一日一夜。西風卒起更吹還。自捧駈鈴一口。臨海云。我是大忠臣也。豈捨我也。乞頼神力。暴浪暫止。然而黑風弥扇。白浪不平。帆柱之上。種々鳥來居。遂吹着小值嘉島。吹還松浦郡橘浦。（○北郡）其遺体三ケ日。懸靈流電鎮落之所。今鏡宮也。勅使真吉備朝臣。以天平十七年。造立廟殿二字。奉令鎮坐西所廟〔165〕。以即建立神宮知識無怨寺。（○大村大字五反田ニアリ）安置佛經。以彼廿口僧。定置祈願住寺之僧。以持夫六十人。分置宮寺雜掌人。神宮無怨寺。寄置水田四十町。

免田六十町。其次定置鏡尊廟之号トアリ。『統紀』(宝龜六年四月)ニ、授川部酒麻呂外授五位下。酒麻呂肥前国松浦郡人也。勝宝四年。為入唐使。第四拖師帰日。海中順風盛扇。急於船尾失火。其炎覆燼而志。人皆惶遽。不知為計。時酒麻呂廻拖。火乃傍出手。雖燒爛。把拖不動。因遂撲滅以存人物。以功授十階。補當郡員外主帳。至是授五位。マタ(九年十月)遣唐使第三船。到泊肥前国松浦郡橘浦。マタ『統後紀』(承和六年八月)ニ、勅参議太宰権帥正四位下兼左大弁藤原朝臣常嗣。大貳從四位上南淵朝臣永何等。得今月十九日奉狀。知遣唐大使藤原常嗣朝臣等。率七隻船。廻着肥前国松浦郡生属島。(○北郡)與先到録事大神宗雄舶。總是八艘。宜准帰化例。勞来式寛旅思。マタ『三代実録』(貞觀十六年七月)ニ、先是太宰府言。大唐商人崔岌等三十六人。駕船一艘。六月三日。着肥前国松浦郡岸。是日。勅宣准帰化例。安置供給。○支那人ノ来商ハ此頃ヨリノ事ナラン。マタ『旧事紀』(十)ニ、未羅国造。志賀高穴穗朝御世。以穗積臣同祖大水口足尼孫矢田楯吉。定賜国造。案スルニ、『姓氏録』ニ、松津首。豐島首同祖トアリ。上田氏曰、松津、松浦トスベシ〔10〕。○『旧事紀』(十)【166】ニ、松津国造。難波高津朝御世。以物部連祖伊香色雄命孫金連。定賜国造トアリ。津ハ浦ノ誤リナリ。彼紀ニ、松浦国造。マタ未羅国造アリ。此ハ同書ニ、山城国造。マタ山城国造。牟邪志国造。マタ胸刺国造。忍国造。マタ信夫国造。コレヲ同名ニツ、アケタル例ナリ。内山氏ハ松津ハ基肄ノ誤リト云ヒ、度會氏ハ、杵島ノ誤リト云レタレド、共ニ誤リナリ。伴氏曰、上田氏ノ説、諾ヒ難シ。『拾芥抄』ニモ、松津首トアリ。『旧事紀』ニモ、『姓氏録』ノ一本トモニ、悉ク松津トアレバ誤トハ思ハレズ。何国ニカアラシ。地名ト聞エタリ。栗田氏曰、松津ハ肥前ノ地名ナルベシ。今日聞及ハス。金連ハ「天孫本紀」ニ、饒速日命ノ十三世孫。物部金連公。借馬連野間連等祖トミエテ、欽明ノ御世ノ人ナレバ、難波高津御世トアルニ合ハズ。又世数ヲ考フルニ、伊香色雄命ノ七世ノ孫ナレバ、此モ違ヘリ。難波高津ハ志賀高穴穗ノ誤リ。金連ハ金号連ノ誤リナルベシ。今日『分類年代記』ニ、松浦ヲ松津ト誤リタル例モアリ。『日本高僧傳文抄』(要説)ニ、弘法大師。延暦廿三年七月六日。発肥前松浦郡田浦。マタ「承和二年八月ノ太政官符」ニ、応令常住肥前国松浦郡弥勒寺(○北郡田平村ニアリ。万寿山トイフ)真言宗知識僧五人事。右得太宰府解僞。講師。傳燈。大法師。光豐牒僞。依太政官去天平十七年十月十二日。騰勅符。件寺始置僧廿口。施入水田廿町。自今以来。年代遙遠緇死尽。田寺空存。修行跡絶望請度者五人。令修治彼寺。即鎮国家。兼救遊靈者。府依牒狀。謹請官裁者。右大臣宣。宣进心行無変。精進不倦。堪住持佛法。鎮護国家之僧。以令常住。マタ『東大寺要録』ニ、弥勒知識寺。在肥前国松浦郡。マタ『元亨釈書』釈円瑠傳ニ、乘商人李延孝船。至肥州松浦縣。即天安戊寅也。マタ「神名式」ニ、肥前国松浦郡。田島坐神社。(名神大。○『三代実録』貞觀元年正月ニ、授肥前国從五位下田島神從四位下トアリ。東郡呼子村大

字加部島ニアリ。国幣中社ナリ。旧神官平野菖蒲平野三家アリ）マタ『本朝世記』（天慶八年七月）ニ、唐人来着肥前国松浦郡柏島（○今日、東君湊村大字神集島アリ。是ナリ。唐津町ヲ去ル北方三里、周廻一里十一丁、東西十二丁、南北十七丁）太宰府解申請官裁事。言上大唐吳越船。来着肥前国松浦郡柏島状云々。マタ『小右記』（寛仁三年正月）ニ、前肥前守遠（○松浦党ナリ）下同申文事云ニ、前肥前介源知賊徒（○刀伊）還却之間。於肥前国松浦郡合戦之間。多射賊徒。又生捕進一人。マタ『朝野群載』（寛仁三年四月）ニ、刀伊（○今日、『類聚大補任』【167】ニ、刀伊国一名蒙古国。常陸人青山延于氏曰、『小右記』以女真称刀伊。然載高麗牒状云。女真未知。其称刀伊。以何故『右中記』載刀伊『陣法与文献通考』女真考曰。則刀伊為女真無疑）賊徒。至肥前国松浦郡。攻劫村閭。爰彼国前介源知。率郡内兵士。合戦中矢者数十人。生得者一人。（○上条ト同時）マタ『扶桑略記』（延久四年三月）ニ、大安寺阿闍梨成尋。於肥前国松浦壁島。（○今、加部島ナリ。呼子村ヲ去ル十丁、周廻二里二丁三十三間、東西十六丁、南北二十二丁）乗唐人一船頭。曾聚之舶。マタ前『太平記』ニ、左馬権頭義家ノ請ニ依テ、安部宗任ヲ松浦ニ下シテ領知ヲ賜フ。是ヨリ先キ、渡辺綱力孫小源二、正彼処ニ住居セリ。サレバ正・宗任、二人カ子孫、松浦黨トテ繁昌セリ。（今日正カ裔ヲ上松浦党、宗任カ裔ヲ下松浦党ト云）マタ『嚴密上人行状記』【168】ニ、嘉保二年云々。其比異国凶賊、本朝ヲ襲ントシテ、兵船数十艘ニ取乗、肥前ノ国松浦ノ澳ニ挂テ、枝船ヲ下シ、人馬共ニ込来、渚ニ下テ中国ニ攻入ントス。鎮西ノ武士、此由ヲ聞テ各自ニ蟻集ス。中ニモ菊池・大友・宍戸・松浦黨命ヲ賤シテ懸合ケル。伊佐平次兼元ハ元来、精兵ノ強弓、矢次早クシテ手垂ナレバ、陣面ニカケ出テ、術ヲ尽シテ射ケル。マタ『明月記』（嘉祿二年十月）ニ、高麗合戦一定云々。鎮西凶徒号松浦党等。構数十艘兵船。行彼国之別島。合戦滅亡民家。掠取資財。（○『吉記』之ニ同シ）マタ『東鑑』（寛元三年十二月）ニ、松浦執行源授。被召竈其身。上野入道日阿所領守護也。是與霍田五郎源馴。就肥前国松浦庄西郷内佐里村（○東郡相知村大字佐里）壱岐泊牛牧等相論事。マタ（文治元年三月）於長門国赤間関。壇浦海上。源平相逢云々。平家以松浦黨為將軍。（○『平家物語』之ニ同シ）マタ『源平盛衰記』（治承五年二月）ニ、宇佐大官司公通力脚力トテ、六波羅ニ着状ヲ披ニ云、九国住人云々。松浦黨ヲ始トシテ併謀叛ヲ発シ、東国ノ頼朝ニ與力シテ、西府ノ下知ニ不随ト申タリ。平家ノ人ニ手ヲ打テ、コハイカナルベキソ。東国ノ乱ヲコリ歎テ、西国ハ手武者ナレバ、催上テ官兵ニ差遣サント思ヒツルニ、承平ニ將門、天慶ニ純友、東西ニ鼻ヲ並テ乱逆セシニ、少モ不違コト哉トテ、騒キ迷ヒ給ヘハ、肥後守貞能、是ハ僻事ニテゾ候ラン。加様ノトキハ虚言多キコトナリ。東国・北国ノ輩ハ誠ニ義仲・頼朝ニ相從フコトモ侍ルラン。西海ノ奴原ハ、平家大恩者共ナリ。争力君ヲバ背進スベキ貞能、罷下テ誠鎮侍ルベシト憑モシゲニソ申ケル。マタ（寿永二年八月）平家ハ筑前国御笠郡太宰府ニ着給ヘリ。松浦黨ヲ始トシテ奉守護主上如形。被造皇后タリ。マタ『本朝鍛冶系図』ニ、

家重。後鳥羽御宇。建久行平門人。後ハ當国平戸住。マタ『太平記』(文永三年八月)ニ、大元ノ兵船、五島ヨリ東博多(○筑前ノ浦ニ云々)上松浦下松浦ノ者、共僅千餘人勢ニテ、夜討ニソシタリケル。マタ元弘二年、筑紫人ニ松浦五郎(○松浦党)ト云ケル武士云々。マタ『八幡愚童訓』ニ、(文永十一年十一月)蒙古船ヨリ下リ云々。松浦黨多ク討レヌ。マタ『日蓮註画贊』ニ、文永十一年十月十四日。蒙古押寄老岐島。守護代平内左衛門景隆等。構城郭。雖禦戰。蒙古乱入間。景隆自殺云々。肥前国松浦黨数百人。或伐或虜。此国百姓男女等。如老岐對馬。マタ『八幡愚童記』ニ、文永十一年十月十六日、十七日、蒙古兵船ツク。平戸能古(○筑前早良郡)鷹島(北松浦郡)辺ノ男女多ク捕ラル。松浦黨敗北ス。マタ『高祖遺文録』ニ、玉舍城事、去文永十一年十月ニ、蒙古国ヨリ筑紫ニ寄セニ有シニ、對馬ノ者カタメテアリシ。総馬尉等逃ケレハ、百姓等ハ男ヲハ、或ハ殺シ、或ハ生取ニシ、女ヲハ或ハ取集テ手ヲトホシテ船ニ結付、或生取ニス。一人モ助カル者ナシ。老岐ニヨセテモ又如是。船オシヨセテ有ケルニハ、奉行入道豊ニ司ハ逃テ落ヌ。松浦黨ハ数百人打レ、或ハ生取ニセラレシカバ、寄タリケル浦々ノ百姓共老岐・對馬ノ如シ。マタ將軍家政所下。肥前国惠利龜丸補任地頭職事。右依亡父山代弥三郎諧。去年蒙古合戰勲功賞。所被充行也。者早守先例。可致沙汰之状。所仰如件。以下建治元年十月廿九日。案主菅野知家事。令左衛門少尉藤原別當相模守平朝臣(判)。武藏守平朝臣(判)。マタ肥前国御家人山代又三郎栄申。度々合戰證人事。申状遣之任見知実正。以誓状詞。可令申給候也。依執達如件。弘安四年八月十日。舟原三郎殿。河上又次郎殿。御厨預所源右衛門太郎兵衛尉殿。益田大夫殿。志佐小次郎殿。空閑三郎兵衛殿。平判○貞時。マタ『松浦大系図』ニ、諧生榮。賜肥前国惠利村地頭職。依父軍忠也。弘安四年蒙古合戰于。老岐島山代栄抽功。被創賜肥前国神崎田地十町。屋敷畠地。又為惠利村替賜筑後国八院○三瀨郡。田地十三町。屋敷二十三箇所。牟田園九箇所。マタ『蒙古紀寇』ニ、方斯之時。松浦氏族黨。已繁衍分為十家。松浦。波多。石志。神田。佐志。相知。有田。大河野。峯。山代。八並。值賀。經指。鷹島。窪田。鴨打。木島。黒川。清水。吉永。牛方。志佑。吉野。宇久。早岐。御厨。小佐二、伊万里。津吉。諸氏世謂之松浦黨。以為西方之巨族。皆居西肥老岐之間。蒙古來寇之時。各當其衝。マタ『大田道灌記』【169】ニ、元祖ノ世ニ、日本ヲ攻ントテ大勢渡ル。先陣十萬餘人、肥前国平壺島(○平戸)ニ陣ヲトル。九国ノ武士、松浦、原田、菊池等三萬餘騎ニテ押寄ス【170】。マタ『入唐五家傳』「頭陀親王入唐略記」ニ、左右自波渡。着小島。(名曰斑島。○東郡名子屋村大字馬渡島郡ノ西ニアリ。東西二十六町、南北十八丁、周廻二里三十丁)更移肥前国松浦郡栢島。マタ『拾芥抄』ニ、八所御靈云々。藤大夫藤原廣嗣。筑紫鏡宮也。坐肥前国松浦郡。(○『諸神記』周廻二里三十丁)更移肥前国松浦郡栢島。マタ『海陸吟』(僧忽海)ニ、博多ヨリ生松原ヲスキ、原田(○糸島郡)ト云所ニ留リテ、翌日松浦ノ地ニ渡。マタ『元

禄図』二、松浦郡。三百九十村。高十二万六千四百五十四石八升六合。(明治二十一年ノ調)【171】ニヨレハ、東郡一万六千二百六十六戸。八万六千四百九十九口。田六千四百九十一町八段。畑五千七百七十二町四段。「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員九万五千五百口。西郡「二十一年ノ調」ニヨレハ、一万二千〇三十九戸。六万九百三十口。田四千三百九十六町九段。畑三千五百五十二町四段。「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員六万六千六百九十口。マタ『尊卑分脉』ニ、渡辺直居肥前古称松浦大夫)マタ『松浦紀』ニ、波多一族旗下。窪田越前守岩屋獅子城。(○東郡嚴木村大字波瀨ニアリ。或曰、治承中、源披コレヲ築ク)窪田因幡守大川野曰、有城(○西郡大川野村大字大川野ニアリ)黒川左源大夫、黒川姥城(○同黒川村ニ大字大黒川小黒川アリ。何ノ方ニアラン)清水伊豆守、石志清水館(○東郡鬼塚村大字石志)峯丹後守、西川村下郷峯館(○西郡大川村大字川西)田代日向守、田代亀井館(○同大岳村大字田代)同使番八並武藏守、伊岐佐村住(○東郡久里村大字伊岐佐)【172】マタ『松浦系図』ニ、源定、後堀川院ニ仕フ。元仁二年八月。本知所帶等事。賜右大將家御下文。文曆二年。所帶安堵。被下後將軍家御下知。マタ同異本【173】ニ、源綱四代之嫡孫。源大夫判官。久安元年。初而於松浦下向御厨庄。(○北郡)村岡氏曰、御厨ハ伊勢神宮ノ御領ト聞ユレト、『神鳳抄』二人見エス。或ハ宇佐宮ノ神領七百五十丁。子孫多称松浦黨。マタ『渡辺系図』ニ、綱子久子直正此二人、肥前松浦ニ住ス。マタ『波多系図』ニ、渡辺綱。正暦年中。從源賴光。任肥前松浦。有年其孫久。下肥前松浦。居御厨庄加治屋城(○北郡。久孫直御厨城主)マタ『相知系図』ニ、源直。子孫嫡家代々松浦執行也。今福。有田。大川野。峯。值賀。楠久。森田。鷹島。志佐。作世保等祖也。其子持分。上松浦領之居波多郷。鬼子岳城(○東郡北波多村大字岸山)久安元年、源久之ヲ築クト云。持子孫鴨打・木島・波多津等祖也。○一本ニ持之子親築波多城。マタ『山代系図』【174】ニ、源圀(子)固(子)廣(子)諧(子)學(子)弘。マタ景勝光院(『拾芥抄』ニ、最勝光院号法勝寺建春門院建ト殿趾京都東福寺界内ニアリ)【175】注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事云々。一肥前松(前)浦(カ)庄家領管三品。本年貢米五十石。綾被物一重。七月御八講料近年所濟代錢二十貫文。但文永七年以來。寄事於蒙古人。令無所濟。而弘安三年。十五貫文濟之。近年一向無之云々。右就所見注進如件。凡近年背先例不被成。返抄於執事公文間御年貢濟否事。委不存知之。正中二年三月日。公文左衛門少尉大江(判)。マタ最勝光院所司等謹言上。欲早被經御奏聞被成。下綸旨於武家申成。波羅御施行於鎮西嚴密被經御沙汰。當寺領肥前国松浦庄地頭事。正中元年以來。柳留本家寺用米其咎不輕事。云々。元徳三年四月。マタ最勝光院領。肥前国松浦庄事。寺用地頭等柳留事。所司等申狀如此。子細見狀候坎。急被下綸旨於武家候之様。可有申御沙汰候哉。恐惶謹言。七月廿一日。謹上藏人辨殿。權大僧都潤惠。マタ最勝光院領肥前国松浦庄地頭事。寺用柳留事。潤惠狀(副具書)如此。可尋沙汰之由。可被仰遣武家綸旨天氣所候也。仍言上如此。宣明誠上頓首謹言。元徳三年七月二十七日。春宮大夫殿。左

少辨宣明。マタ就綸旨。肥前国松浦相知小次郎入道蓮賀并子息孫太郎秀（○上ノ『相知系図』ハ此ノ家ノ物カ）令馳走御方去五月廿五日。抽英時誅伐之軍忠候畢。仍自今月三日。令在京候。以此旨可有御披露候。恐惶謹言。元弘三年七月八日。進上御奉行所。沙弥蓮賀（上）。マタ太政官符【176】。太宰府応令字山代龜雀丸領知管肥前国宇野御厨内山代（○西郡二旧山代郷アリ。今ハ東山代村西山代村トナル）多久島。船木東島等地頭職。父源正領知事。事右從二位行權中納言兼春宮大夫左衛門督大学頭藤原朝臣実世正奉勅。宜令件龜雀丸。如元領知者。府宜承知。依宣行之。符到奉行。建武二年十月七日。修理左宮城使從四位（マ）行左中辨兼春宮亮藤原朝臣。修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿祢（判）。マタ足利尊氏同直義以下輩。有返逆之企候間。所誅罰也。松浦小次郎入道蓮賀令存（マ）鎌倉可致軍忠者。天氣如此悉之以狀。十一月右中將（判）。マタ寺領事。全知行可被致御祈禱精誠也。仍執達如件。正平十五年九月廿八日。松浦相知（○東郡相知村大字相知）妙音寺（禪室）勘解由次官（判）。マタ「応仁二年戊子入明記」【177】ニ、警固（○遣明使警固）一上松浦一族中。一松浦耄岐守（喚子）。一下松浦（日前）。一奈留方。一佐志（志佐同前）。一大島方。一字久大和方。一平戸。松浦肥前守方云々。マタ『万葉集』（五）ニ、松浦仙媛歌。伎弥手麻都。々々良乃于良能。越等壳良波等已。與能久尔能。阿麻越等壳可毛。毛々可斯母。由加奴麻都良遲。家布由伎弓。阿須波吉奈武遠。奈尔可佐夜礼留。（十五）肥前国松浦郡柏（○一本「狗」マタ「拍」ニ誤ル）島亭舶泊之後。遙望海浪各働旅心作歌。可敵里伎弓。見牟等於毛比之。和我夜度能。安伎波疑須々伎。知里尔家武可聞。安米都知能。可未手許比都々。安礼麻多武。波夜伎万世伎美。麻多婆久流思母。伎美手於毛。比安我古非万久。波安良多麻乃。多都追奇其等尔。與久流日毛安良自。秋夜手奈我。美尔可安良武。奈曾許己波。伊能祢良要奴毛。比等里奴礼婆。可多良思比壳。御船波弓家牟。松浦乃宇美。伊母我麻都敵伎。月者倍尔都々。（本居翁曰、此二由ハ新羅ヨリ還坐ス時モ御舟此浦ニ泊シナルヘシ。此ヨリ筑前ニ到坐テ御子ヲ産給ヘリシナリ。之ニ准ヘテ思フニ、初二新羅ヘ御舟発アリシモ此浦ニソアリケニ、初二御舟発アリシ地モ泊シ地モ何処トイフコトハ、『古事記』ニモ『書紀』ニモ見エサルヲ、『万葉』ニカク此浦ニ御舟泊ツル由ヨメルハ、然語傳ヘタルコトアリシナルヘシ。古韓国ヘ渡ニハ、多ク此浦ヨリ舟関セシニヤ。『万葉』五ニ見エタル佐用姫カ故事ナト思フヘシ）多婢奈礼婆、於毛比多要弓毛、安里都礼杼、伊敵尔安流伊毛、之於母比我奈思。母安思必奇、能山等妣古由留、可里我祢婆、美也故尔由加波、伊毛尔安比弓許祢。『新古今集』ニ、誰トシモシラ又別ノ悲キハ松浦ノ方キヲ出ル舟人。『新勅撰集』ニ、唐ノ山、人イマハ、惜ムラン、松浦ノ沖ノ、アケカタノ月。霞シク、松浦ノ沖ニ、ユキイテテ、唐マテノ春ヲミルカナ。明ハマタ、波ニヤイラン、松浦カタ、月ヨリホカニ、山ノ端モナシ。『続古今集』ニ、立帰ル、ツキヒヤイツラ、松浦カタ、（○異本、フネ）行ヘヲ波ノ、チヘニ阻テテ。『風雅集』ニ、松浦カタ、唐力ケテ、見渡セハ、サカヒハヤヘノ、

霞ナリケリ。『新続古今集』ニ、松浦カタ、唐カケテ、ミワタセハ、波路モヤヘノ、末ノ白雲。『玉葉』ニ、霞ユク、波路ノ舟モ、ホノカナリ、松浦ノ沖ノ、ハルノ曙。月ノ入ル、松浦ノ山ハ、アケソメテ、軒端ヲワタル、アカツキノ空。『続後撰』ニ、アラタマノ、年ノヲナカク、松浦舟、イクヨニナリヌ、波路ヘタテ。『夫木集』ニ、漕出テ、松浦ノウミヲ、ナカメツ、月ニナレタル、秋ノサヨ姫。松浦カタ、袖ノミナトニ、ユキヨセン、唐舟ノ、トマリ求メハ。唐ノ、シホケハルカニ、松浦カタ、西ニ山ナキ、月ヲ見ルカナ。春霞、マツラノ山ハ、ヨキテタテ、行手ニモ見シ、妹カ袖フリ。『西行法師集』ニ、松浦カタ、コレヨリ西ニ、山モナシ、月ノイリノヤ、限リナルラン。(○東郡ニ入野村大字入野アリ)『名寄集』ニ、今モナホ、松浦ノ海ヲ、見ワタセハ、早速サカル、舟路カナシモ。『隆信集』ニ、松浦カタ、コハヨニ知ラヌ、浮寝カナ、袖モ枕モ、波ハカケツ。アフトシモ、知ラヌ別レノ、カナシキハ、松浦ノ沖ヲ、イツル舟入。『月清集』【178】「八幡若宮撰歌合」ニモミユニ、故郷ヲ、イノチアラハト、松浦カタ、カヘル、人ヲ、ユラ波ノ空。『長尾集』ニ、松浦カタ、メクル霞ニ、ユク雁ノ、ツハサノ波ニ、春風ソフク。『玉葉』ニ、松浦カタ、ヤヘノ汐路ノ、秋風ハ、モロコシヨリヤ、吹初ムラン。『家定集』ニ、タラチメヤ、ヌモロコシニ、松浦舟、コトシモクレヌ、心ツクシニ。『壬二集』ニ、松浦カタ、ケフハイクヒソ、波ノ上ニ、マタ目ニカ、ル、山ノ端モナシ。『陀隨集』ニ、松浦カタ、ヨセツル波モ、モロコシノ、海ヨリトコソ、珍シキカナ。『幽斎集』ニ、サヨヒメノ、袖カト見レハ、松浦山、スソノニナヒク、尾花ナリケリ。『新三玉集』ニ、松浦カタ、雲ナヘタテソ、外ニ見ヌ、唐舟モ、ウカフ海原。『似雲集』ニ、松浦カタ、ソラモ波路モ、ヒトツニテ、沈ム入日ニ、カキリヲソ見ル。モロコシノ、山コソ見エネ、松浦カタ、入日ニ海ノ、ハテハシラレテ。『魏志』(倭人傳)ニ、末羅(○松浦ナリ)国有四千餘戸。濱山海居草木茂盛。不見前人。好捕魚鮑。水無深淺。皆沈没取之。マタ『海東諸国記』ニ、肥前州有上下松浦海賊所居。前朝之李寇我辺者。松浦與一岐對馬島之人率多。又有五島。日本人往中国者。待風之地。(マタ源義乙酉年遣使来朝。書称呼子一岐守源義約歳遣一二船。小二殿管下。居呼子。有麾下兵称呼子殿。マタ源納。乙亥年遣使来朝。書称肥前州。上松浦波多島。源納受国書。約歳遣一二殿。管下居波多島。人戸不過十餘。マタ源永。丙子年遣使来朝。書称肥前州。上松浦鴨打。源永受国書約歳遣一二船。小二殿。管下居鴨打有麾下兵書称鴨打殿。マタ藤原次郎。丙子年遣使来朝。書称肥前州。上松浦九沙島主藤原次郎。約歳遣一船。マタ源祐位。丁丑年遣使来朝。書称肥前州。上松浦那護野宝泉寺源祐位。約歳遣一船。僧居宝泉寺。マタ源盛。丁丑年遣使来朝。書称肥前州。上松浦丹後太守源盛。受国書約歳遣一船。小二殿管下有麾下兵。マタ源徳。丙子年遣使来朝。書称肥前州。上松浦神田能登守源徳。受国書約歳遣一船。マタ源次郎。乙丑年遣使来朝。書称肥前州。上松浦佐志源次郎。受国書約歳遣一船。小二殿管下能武等有麾下兵称佐志殿。マタ義永。丙子年遣使来朝。書称肥前州。上松浦九沙島主藤原朝臣。筑後守義永。受国書約歳遣一船。マタ源義。乙亥年遣使来朝。書

称肥前州下松浦一岐州太守志佐源義。約歳遣一二船。小二殿管下能武等有麾下兵。称志佐殿。マタ源満。丁丑年遣使来朝。書称肥前州下松浦三栗野太守源満。約歳遣一船。小二殿管下有麾下兵在三栗野。マタ源吉。乙丑年始遣使来朝。書称肥前州下松浦山城太守源吉。受国書約歳遣一船。マタ源勝。乙亥年遣使来朝。書称五島宇久守源勝。受国書約歳遣一二船。丁丑年以刷還我漂流人。特加一船。居宇久島。総治五島。有麾下兵。マタ少弼弘。丁丑年遣使来朝。書称肥前州田平島鎮源朝臣彈正少弼弘。約歳一二船。有麾下兵。マタ源義。丙子年始遣使来朝。書称肥前州平戸寓鎮肥前州太守源義。受国書約歳遣一船。少弼弘弟有麾下兵居平戸。マタ藤原頼永。丙戌年遣寿蘭書記来朝。書称肥前州上松浦郡久野藤原頼永寿蘭。受書契礼物。傳于国王事見上。山城州細川勝氏。居那久野。マタ源承。戊子年遣使来朝。書称肥前州上松浦波多下野守源承。以宗貞国請接待。居波多有麾下兵。マタ源貞。丁亥年遣使来賀觀音現像。書称肥前州下松浦大島太守源朝臣貞。居大島麾下兵。マタ源義。丁亥年遣使来賀觀音現像。書称肥前州下松浦一岐崎太守源義。有麾下兵。マタ貞茂。己丑年遣使来朝。書称五島倬太島太守源朝臣貞茂。以宗貞国請接待。居五島源勝管下微者。マタ源茂。丁亥年遣使来賀。而花舍利。書称五島玉浦守源朝臣茂。居五島源勝管下微者。マタ源貞。丁亥年遣使来賀觀音現像。書称五島太守源貞。居五島源勝管下微者。マタ藤原盛。己丑年遣使来朝。書称五島日島太守藤原朝臣盛。以宗貞国請接待。居五島源勝管下微者。マタ源豊久。辛卯年遣使来朝。書称平戸寓鎮肥前州太守源豊久。先父義松。己丑（○文明元年ナリ）春逝去。又送義松所受国書。而請受新国書。今乃給送）ナドアリ。（○『日本沙路記』ニ、唐津ヨリ柏島へ三里。此間ニ柏島ト云泊アリ。柏ノ入口面梶ニ付テ入ル。何風ニテモヨシ。柏島ヨリ名子屋マテ三里。其間ニ土器崎アリ。名子屋ノ入口ニ甕島アリ。下レハ面梶ニ持テ入ル。何風ニテモヨシ。但シ西風ハ強ク当ル。面梶ニ壁島アリ。此ニモヒヨリニ依テカハル上ヨリ直ニ乗時ハ、オントウノ島此ヨリ一里。其ニ瀬アリ。瀬ヲ嫌ヘハオントウニツク。オントウノ下ニ松島頭アリ。此ニハトクノ岬アリ。汐行アシハ。之ヲ嫌ヘハ沖ヲ高クノル。呼子ヨリ名子屋ヘ一里、名子屋ヨリアワラヘ六里、アワラヨリ平戸ヘ八里、名子屋・平戸ノ間、小豆島アリ。此ヨリ平戸ヘ三里、平戸ノ入口ニタスキノ湊アリ。西風ハ、エノ風、北風アナシニヨシ。同処入口ニ裸島アリ。北ニツキテ瀬アリ。瀬ト裸島トノ間ヲノル平戸ノ口ニ、クロク島アリ。此島平戸ヘ入ハ取梶ニモツキテ入ナリ。但シ平戸ノ入口、東受ナリ。泊ハ何風ニテモヨシ。平戸ヨリカシチヘ三里、出口ニナンシヤウタウノ鼻アリ。此ヨリ一丁沖ニ瀬ニアリ。下レハ面梶ニモチテ通ル取梶ノ方ニ田平村アリ。下唐津ヘ五里、カシチヨリ九十九島ヘ○里九十九島ヨリ牛力頭ヘ三里、牛力頭ヨリ今切ヘ三里沖ニ黒島アリ）

【10】東。栗田氏ノ本ニハ、松浦首豊島連同祖トアリシ。豊島連ヨリワカレシ氏トミユレト、『和名抄』ニ松浦此ミアタラス。常陸国鹿島郡松浦、肥前国松浦郡ナトアレト、ソレハアルヘカラス。一諸本ニ、松津トモアリ。

【164】国本、この下に「（或曰、此辺本ハ杵島郡ノ中ナリシヲ、元和ノ頃割テ本郡ニ併セタリ）」という記述あり。

【165】国本、この下に「（○第一所ハ神功皇后、第二ハ藤原廣嗣。現ニ郷社ナリ）」底本「現ニ郷社ナリ」という記述あり。

【166】「○『旧事紀』（十）ニ……今日『分類年代記』ニ、松浦ヲ松津ト誤リタル例モアリ」の部分の記述、国本なし。

【167】「(○今日、『類聚大補任』ニ……(○上条ト同時)」の部分の記述、国本なし。

【168】「マタ『厳密上人行状記』ニ……伊佐平次兼元ハ元来、精兵ノ強弓、矢次早クシテ手垂ナレバ、陣面ニカケ出テ、術ヲ尽シテ射ケル」の部分の記述、国本なし。

【169】国本、この部分の頭注に「マタ『宇都宮系図』ニ、弘安四年五月、蒙古以十万兵為日本兵。船六万艘着肥前平戸嶋」とあり。

【170】国本、この下に「南里氏曰、文永十一年冬、松浦山代ノ弥三郎階(今日山代郡ニアリ)蒙古ノ戦ニ討死ス。文永弘安ノ夷賊退治ノ戦功ニ依テ、山鹿安宗へ惟康親王ヨリ松浦六十餘丁ヲ賜フ」とあり。

【171】「明治二十一年ノ調」……マタ『尊卑分脉』ニ、渡辺直居肥前古称松浦大夫」国本なし。

【172】国本、この下に「マタ『松浦系図』ニ、阿部宗任。康平五年。從奥州肥前國松浦郡遠流源義家依奏聞。寛治二年。奉勅命松浦郡合彼杵庄壱岐嶋。充給從宗任累代松浦党相続也」とあり。

【173】「マタ同異本ニ……マタ『渡辺系図』ニ、綱子久子直正此二人、肥前松浦ニ住ス」国本なし。

【174】「マタ『山代系図』ニ、源圀(子)固(子)廣(子)諧(子)學(子)弘」国本なし。

【175】「『拾芥抄』ニ、最勝光院号法勝寺建春門院建ト殿趾京都東福寺界内ニアリ」国本・甲本なし。

【176】「マタ太政官符……修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿祢(判)」国本なし。

【177】「マタ「応仁二年戊子入明記」ニ……松浦肥前守方云々」国本なし。甲本は頭注にて記す。

【178】甲本、『月清集』の上に二枚の附箋を貼付す。底本は頭注にて記す。

最勝四天王院障子和歌。

- ・ 松ら山、波にちかつく、冬のよの、月なへたてそ、八重の塩風。
- ・ 唐錦、さらにみよとや、松ら山、のこる紅葉も、枝に一村。
- ・ 木のまはり、嵐に月を、松らかた、しくる、波に、渡る舟人。
- ・ もろこしの、秋をや今は、松ら山、ひれふる嶋に、霜まよふ也。
- ・ 白妙の、ひれふる雪を、嶋たかミ、松らの沖の、遠つ舟人。

- ・ たらちめや、また唐の、松ら舟、ことしも暮ぬ、心つくしに。
- ・ まてしはし、ミ山おろしの、しくる也、松らの沖を、いつる舟人。
- ・ 宮こにハ、春をかけてや、松ら舟、年立かへる、波にまかせて。
- ・ 松ら山、霜ふきむすふ、塩風に、唐国さへや、月に澄むらん。
- ・ 唐人の、たのめし秋ハ、過ぬとも、松らの沖に、雲なへたてそ。

内裏名所百首。建保三年。松浦山。

- ・ 夏山や、松浦か沖の、西の海、そなたの風に、秋のミえつゝ。
- ・ 夏衣、ひれふる山の、追風に、袂や軽き、松浦さよ姫。
- ・ 蟬の羽の、衣に秋を、松浦かた、ふれふる山の、暮そ涼き。
- ・ さよ姫の、ふれふる袖も、やゝすゝし、秋を松浦の、山ノ下風。
- ・ 夏かけに、秋をまつらの、山のセミ、染残す枝の、露に鳴也。
- ・ くる秋を、そなたの空に、まつら山、まつに涼しき、風も明なん。
- ・ たのめても、またとほ海に、まつら山、秋もやきなん、天の川波。
- ・ 天つ空、たな引雲の、西にある、秋をまつらの、山のはの月。
- ・ 松らかた、ひれふる山の、時鳥、ありても声の、遠さかり行。
- ・ 時鳥、もろこし迄も、松浦山、なミのはるかの、露に鳴也。
- ・ 松浦かた、木のまの月を、残しても、唐舟の、よるそ涼き。
- ・ けふハ又、こゑ六月の、時鳥、松らの山の、明方の空。

○郷二十一

『和名抄』二、庇羅。（『後紀』延暦二十四年七月二、太宰府言。遣唐使第三船。今月四日。発自肥前国松浦郡庇良島。指遠値嘉島。マタ『三代実録』貞

観十八年三月二、参議太宰権帥従三位在原朝臣行平起請云々。請令肥前国松浦郡庇羅。値嘉両郷。更建二郡。号上近。下近。置値嘉島。マタ『元亨积書』积栄西傳二、乗楊

三綱船平戸島葦浦。マタ『和漢三才図會』ニ、平戸南北長十里餘。北至老岐国海上十三里。良至名古屋十二里。已方至長崎三十五里。西至宇久島七里餘。マタ『登壇必究』ニ、肥前国平戸津。マタ『図書編』日本国序ニ、肥前西縣海為平戸。東西海面十里。西北至博多。海面四百五十里。平戸之西為五島。平戸名尾蘭島。今日西北ノ西ハ東ニ改ムヘシ。伊藤氏曰、此ハ島形ノ平ナルナトニテ負セタルナルヘシ。本居翁曰、平戸ト云ハ、カノ庇羅此ヨリ出タルナルヘシ。案スルニ、庇羅此ハ今ノ平戸ノ名ヨリ起レルカ。庇羅ヲ本ニテ平戸ト云カ。本末サタカニ知難ケレト此名ト定リテノ後ハ、平戸一島ノミニモ非ス。マノ辺リノ小島マテ渉ル名ナレハ、平戸トハ聊異ナリ。今日平戸ニ田平村アリ。是庇羅此ノ名ノ起レル所ナラン。サレハ庇羅ハ田平ノ田ノ省カリツルナラン。大沼（於奴。○伊藤氏曰、此ハ沼ノアル処ニテ、名ニ負ヒタルナラン。又大野ノ義カ『元禄図』ニ、本郡ニ大野アリ。今日東郡久里村大字大野アリ。此辺カ。然ラハ打開ケタル地ニテ、大野ノ義ナリ。或曰、近古ノ書ニハ此辺ヲ相知庄ト云リ。今ノ相知村辺マテハ此地ノ中ナリケン）**值嘉、此ハ下ニアル值嘉島ナリ。生佐**（伊伎佐。○『松浦古来略記』ニ、八並吉慶伊吉佐村三百石。マタ『寛知集』ニ、本郡ニ伊吉佐村アリ。是ナラン。『扶桑紀勝』ニ、本郡伊岐佐村ニ大竜アリ。唐津ノ南三里ニシテ、長崎ヘユク道ノ徳須恵駅ヨリ南一里半ニアリ。今日東郡久里村大字伊岐佐【179】、マタ北波多村大字徳須恵アリ）**久利**（東郡久里村大字久里アリ。尚下ニモ見ユ）**トアリ。尚六所ヲ逸ス。今日「河上神社正応年中ノ文書」【180】ニ、松浦南郷庄見ユ。東京人村岡良弼氏曰、『和名抄』ニ、松浦郡ニ松浦郷ナキハ、郡名ト同シケレハ、例ニ依テ省ケルナリ。今東松浦郡ニ松浦川アリ。唐津ニ至テ海ニ入ル。此辺リノ郷域ナルヘシ。『東鑑』寛元三年ニ、松浦庄西郷佐里村、コノ文書ニ院ノ御領松浦庄東郷トモミエテ、南郷【181】【182】ノ外ニ東西北ノ三郷アリシト知ラル。（○「明治十年ノ調」ニヨレハ、東郡七百九十九村七町ナリ。二十二年改革シテ、東郡ヲ唐津町大字唐津町、東村、満島村大字満島・高島、鏡村大字鏡・半田・宇木、濱崎村大字濱崎・横田上・横田下・東山田・山瀬、大村大字南山・五反田・岡口・谷口・淵上・平原・鳥巢、七山村大字滝川・木浦・仁部・荒川・馬川・池原・藤川・白木、蔽木村大字蔽木・廣瀬・浦川内・中島・牧瀬・々戸・木場・波瀬・巻木・岩屋・本山・天川・廣川・鳥越・平之・星領、相知村大字相知・鷹長・部田・櫛町・功田頭・湯屋・横枕・千束・中山、々浦村大字小加倉・有浦下・有浦上・長倉・諸浦・新田・轟木・牟田形・大串・新田、値賀村大字今値賀・川内・普恩寺・平尾・濱野浦・大園・石田・飯屋、名古屋村大字名古・賀串・彼戸・加唐・馬渡、呼子村大字呼子・大友・小友・殿浦・加部島・小川、湊村大名湊・相賀・神集・屋形石・横野・中里、打上村大字打上・菖蒲・赤木・石室・丸田・加倉・岩野・高野・塩雀・中野・八床・横竹、佐志村大字唐房・佐志・浦嶋・川枝・去木ト以東西八里十四丁、南北五里十六丁。西郡ヲ伊万里町大字伊万里・三本松・濱浦、牧島村大字木須・脇田・松島・瀬戸、黒川村大字大黒川・福田・塩屋・小黒川・黒塩・椿原・清水・横野・立目・牟田・花房畑・川内・長尾・真手野、大岳村大字畑津・辻馬・蛤浮・新田・内野・煤屋・中山・井野・尾筒・井板・木主・屋津留・田代・木場、南波多村大字井手野・高瀬・大曲・古里・重橋・谷口・水留・大川原・古川・小麦原・府招・笠椎・原屋敷、大川村大字大川・野・山口・東田代・川原・川西・駒鳴・立川、松原村大字今岳・町裏・新田・陣内・三本松、大川内村大字大川内、有田町大字有田・四山、新村大字新村、曲川村大字曲川、大山村大字大木・山谷、二里村**

大字大里・中谷・八谷、東山代村大字里・東大久保・浦川内・大久保・脇野・天神・長濱・日尾・滝川、内川村内野、西山代村大字久原・峯、楠久村大字楠久・津福・川内城・立岩・東分・西分・西大久保トス。『武鑑』ニ、小笠原家六万石。居城肥前松浦郡。唐津松浦家六万七千七百石。居城同郡平戸。当国平戸并老岐国差出之高。同家一万石在所同郡平戸。新田五島家一万二千六百石。居城同郡五島福江トアリ)

【179】「今日東郡久里村大字伊岐佐、マタ北波多村大字徳須恵アリ」国本なし。

【180】「今日「河上神社正応年中ノ文書」ニ」以下の記述、国本なし。

【181】底本この下に、

崎・牟田部・久保・佐里・山下、久里村大字伊岐○黒岩・大野・双水・夕日・久里・柏崎・中原・々西・原、鬼塚村大字養母・田和・多田・千々賀・山田・畑島・山本・橋本・石志、北波多村大字徳須恵・大杉・岸山・稗田・志氣・行合・野田・中竹・有山彦・下平野・上平野・成淵、唐津村大字唐田・大石・妙見・大島・神田・見借・竹木場・唐川・菅・牟田重・川内、切木村大字切木・赤坂・湯野・浦杉・野浦・中浦・大浦・満越・瓜ヶ坂・万賀里川・仁田・野尾座・川内・湯野尾・大尾・大良・後川内・梨川内、入野村大字入野・大頭・星賀・向・納所・雀牧・寺浦・梅崎・新木場・上ヶ倉・田野・高串・有」という記述あるも、前後の文と不整合なるにより削る。

【182】底本、この下に小字で、

古牧考 村岡良弼

肥前国鹿島馬牧案ニ、本州凡ソ六牧三十。平戸ノ属島ニアリ。故ニ『太宰管内志』ニ、コノ鹿島牧ヲ平戸ノ獅子村鹿ヲ、古ヘシント云ナルベシト云ヘリ。サレト確証ナシ。『武鑑』ニ、藤津郡鹿島城アリ。鍋島侯ノ支封タリ。或ハ此地ナ止力。猶考フヘシ。崇神帝ノ時、建借馬命東夷ヲ平ゲシ事、『常陸風土記』ニ見ユ。ソノ時杵島曲歌フテ賊ヲ誅殺ストアル。

杵島ハ本州ノ郡名ナレハ、コレ其土ナルヘシ。

庇羅馬牧 『和名抄』ニ、松浦郡庇羅郷トアリ、ヒラト読ヘシ。

『太宰管内志』ニ、庇羅ハ今ノ平戸島アリ。庇羅郷始テ貞観十八年紀『三代実録』ニ見エ、平戸島『元亨釈書』榮西傳ニ見ユ。『武鑑』ニ平戸城アリ。松浦侯世々コヽニ在城シ『図書編』ニ□蘭島ト訳タリ。

兼テ老岐国ヲ領ス。

生属馬牧 生属ハイケヅキト読ムヘシ。今ノ松浦郡生月島（周凡七里）是ナリ。

承和三年紀（『統日後紀』）ニ、遣唐使藤原常嗣回者松浦郡生属島。

『海東諸国記』ニ、一伎都奇ト訳シ。『太平記』（新田義貞九州発向条）ニ、伊支津木島アリ。亦此地、此地ノ人ナルヘシ。

柏島牛牧 『本朝世記』ニ、天慶八年。唐人来着松浦柏島。今中通島ニ属シテ柏島アリ。（所謂五島内ナリ）コレナルヘシ。『太宰管内志』ニハ、神集島カシトス。未タ孰レカ是ナルヲ知ラス。

樫野牛牧 『太宰管内志』ニ、樫野ハ能加伎乃ト読ムヘシ。『玉倫』ニ、樫野本出交趾子如難文进呉都。賦注ニ、君樫野属之。『本草和名』ニ、君遷子佐留可伎信濃甚多。『本朝食鑑』ニ、君遷俗ニ葡萄柿。或ハ猿柳トイフ。筑紫ノ俗山杼。マタ野杼トモ呼ト。

今松浦郡ニ野杼島アリ。亦中通島ニ属セリ。是ソノ地ナリ。

早崎牛牧 今高来郡ニ早崎村アリ。海中ニ盤曲シテ放牧ニ宜シキ所ナリ。天草島ノ大島崎ト相對ヒテ、ソノ間ヲ早崎ノ海峡ト云。

とあり。

○里二十六 下ニ賀周里アルノミ。其餘ハ名称所在詳ラカナラス。「六」曼本「二」ニ作ル。

○駅五所 下ニ逢鹿・登望ノ二駅アリ。尚三所ヲ逸ス。（三所ハ嚴木辺ヨリ唐津町辺マテノ内ナラン。地勢然リ）

○烽八所 下ニ褶振峯ニ一所。值嘉島二三所トアリ。尚四所ヲ逸ス。（多クハ褶振峯ヨリ值嘉島マテノ間ニ在シナラン。地勢然リ）本郡ハ外人出入ノ要地ナレバ、他郡ニ比スレバ烽数多シ【183】。○西川須賀雄氏（○本国人、余カ学友）曰【184】、松浦郡唐津ノ西ニ、加唐島（○今名児屋村大字加唐アリ）何バカリノ島ニモアラヌ。故ニ世ニ取立テ云人モナキハ、此島ノ為ニ遺恨ト云ベシ。「雄略紀」（五年）ニ、百濟加須利君（益鹵王）也。飛聞地津媛所燔殺而等。議曰。昔貢女人為采女。而既無礼。失我國名。自今以後。不合貢女。乃告其弟軍君岷支君也曰。汝宜往日本事天皇。軍君對曰。願賜君婦而後奉遣。加須利君。則以孕婦。既嫁與孕婦果如。加須利君言。於筑紫各羅島産兒。仍名此兒曰島君。是為武寧王。百濟人呼此島曰主島トアル。各羅ハ加唐島【11】（○今日東西十三丁、南北三十丁、周廻三里五丁。名子屋灣ノロニアリ）ナルコト疑ナシ。紀ニハカハラト訓ヲ付タレト、各ハカ、ノ仮字ニ用ヒタルコト、美濃ノ郡名、各務ヲカ、ムト呼カ如シ。此島ハ筑紫ノハテナル孤島ニハアレド、カク紀サレ、シカモ武寧王カ生レシ地ナルヲ、更ニ取立テ云人モナキハ、此島ノ面伏セト云ベクナン。或曰、各羅ヲカ、ラト訓タルハ、サルコトニモアルベケレト、本ニハカハラト訓リ。カラハトシタルハアラズ。此地、名「武烈紀」ニモ見エテ、カワラト

仮字ツケタリ。カクヲカワニ用ルカ。此事、字音轉用例ニモ云レタリ。

【11】『元祿図』松浦郡加々良島。長三十一町、横三十三丁十二間。

【183】国本、この下に「○「兵部式」ニ、肥前國值賀島馬」という記述あり。

【184】「○西川須賀雄氏（○本国人、余カ学友）曰」以下の記述、国本なし。

昔者。氣長足姫尊。欲^レ征^二伐新羅^一。行^レ於^二此郡^一而。進食於^二玉島小河之側^一。於^レ茲皇后。勾^レ針為^レ鉤。飯粒為^レ餌。裳糸為^レ緡。登^二河中之石上^一。捧^レ鉤祝曰。朕欲^下征^二伐新羅^一求^中彼財宝^上。其事功成凱旋者。細鱗之魚吞^二朕鉤緡^一。既而投^レ鉤片時。果得^二其魚^一。皇后曰。甚希見物。〈希見豆羅謂^二梅志^一。〉因曰^二希見国^一。今訛謂^二松浦郡^一。所以此国婦女。孟夏四月常以^レ針釣^二年魚^一。男夫雖^レ釣。不^レ能^レ獲^レ之。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○氣長足姫尊 『古事記』（仲哀天皇段）ニ、此天皇。娶息長帯比売命。是大后。（○神功皇后云々トアリ）

○玉島小河 東郡大村大字洲上ニアリ【185】。本居翁曰、玉島里、名ノヨシ知難シ。『土佐風土記』ニ、吾川郡玉島。或説云、神功皇后。

巡国之時。御舩泊之。皇后下島休息。磯際得一白石。因如難卵。皇后安于御掌。光明四出。皇后大喜。詔左右曰。是海神所賜白眞珠也。

故以為島名トアルニ准ヘテ思フニ、此所モサル類ノ由縁ナドアリテヤ名ケ、ン。『八雲御抄』ニ、マツラ河（肥前松浦川玉島ノ浦トヨメリ）タマシマ河（同。『万葉』松浦ナルアユツル玉島同。 万 マツラ也）マタ『九州ノ道ノ記』（豊臣勝俊）ニ、玉島川・松浦川何モヤカテ海ニ流レテ

ソ侍ル。マタ『増補名所方角抄』ニ、玉島川、皇后ノ年魚釣給フ川ナリ。アカリ給フ石、今ニアリ。此石ヨリ三町許ハ、今モ鮎ヲ釣ナリ。此川ハ草野ノ大川ト云ナリ。マタ『和漢三才図會』ニ、浮島與玉島川。中間一里許有松原。神功皇后到此处。携釣竿云々。其玉座在于今。此石近所年魚多有。而女釣之多得。男釣之難得。山上憶良来此川上見釣鱗。（○鱗ハ年魚ニ非ス）乙女有贈答和歌詳于『歌林良材集』（○玉島川ニ属ス深処ハ一丈【186】、浅処ハ一尺、廣処ハ六十間、狹処ハ二十間、水質清淡、流急ナリ。舟筏通セス）マタ『万葉集』（五）ニ、遊淤松浦河序。

余以暫往松浦之縣逍遙。聊臨玉島之潭云々。多麻之未能、許能可波加美尔、伊返阿礼騰、吉美手夜佐之美、阿良波佐受阿利吉。麻都良河波、可波能世比可利、阿由都流等、多々勢流伊毛河、毛能須蘇奴例奴。麻都良奈流、多麻之麻河波尔、阿由都流等、多々世流古良何、伊幣遲斯良受毛。等富都比等、末都良能加波尔、和可由都流、伊毛我多毛等乎、和礼許曾末加米。和加由都流、麻都良能可波能、可波奈美能、奈美迹之母波婆、和礼故飛米夜母。波流佐礼婆、和伎霸能佐刀能、加波度尔波、阿由故佐婆斯留、吉美麻知我弓尔。麻都良我波、奈々勢能與騰波、與等武等毛、和礼與騰麻受、吉美遠志麻多武。麻都良阿波、々々能世波夜美、久礼奈為能、母能須蘇奴例弓、阿由可都流良武。比等末奈能、美良武麻都良能、多麻志末乎、美受弓夜和礼波、故飛都々遠良武。麻都良河波、多麻斯麻能有良尔、和可由都流、伊毛良遠美良牟、比等能等母斯佐。『続古今集』二、玉島ヤ、ヒ島守カ、コトシユク、川瀬ホノ、ク、春ノミカ月。『新千載集』二、玉島ヤ、ユフナミ高ク、ナリニケリ、此川上ニ、嵐フ克蘭。『続千載集』二、梅カ、ヤ、マツウツルラ、影清ミ、玉島川ノ、ミツノ鏡ニ。『新統古今集』二、松浦山、ユフコエクレハ、玉島ノ、里ノツ、キニ、立烟カナ。玉島ヤ、川瀬ノナミノ、音ハシテ、霞ニウカフ、春ノ月影。『夫木集』二、シラセハヤ、玉島川ノ、神ヒチテ、ナ、セノ淀ニ、オモフ心ヲ。『風雅集』二、玉島ヤ、オチクル鮎ノ、川柳、シタバヨリチル、秋風ソフク。『万代集』【187】ニ、玉島ノ、川ヨトサラス、タツキリノ、底マテ波ノ、岩タ、クナリ。『国冬集』ニ、ヲトメコカ、此川神ノ、イヘットニ、玉島桜、ヲリテユクナリ。『家房集』二、玉島ノ、ホリエヲカケテ、霞ムナリ、風ヲマツラノ、波ノ上ノ月。『六家集』二、ヒカリナス、玉島川ノ、月清ミ、ヲトメカコロモ、袖サヘリテル。『六家集拾遺』二、命タニ、アラハアフセヲ、松浦川、カヘラヌ波モ、ヨトメトソ思フ。『類題集』二、若菜ツム、ヲトメカ袖モ、玉島ノ、ハルノ光リニ、ホフ川波。『草菴集』二、玉島ヤ、イクセノヨトニ、カスムラン、川上トホシ、春ノアケホノ。『行家集』二、若鮎ツル、カミヨモトホシ、玉島ヤ、松浦ノカハノ、ムカシ思ヘハ。『新三玉集』二、アラハサヌ、家路モソレト、玉島ヤ、カハカミトホク、晴ル、朝露。玉島ヤ、梅カ、ナラヌ、春風ニ、イヘチユカシキ、川上ノ月【188】。青柳氏曰、此川ノ源ニアリ。玉島ノ神功社ノ上ニテ合テ一ナル。カクテ南ヨリ来ル水ハ、平原村（○大村大字平原）ノ山ヨリ出テ、東ヨリ来ル水ハ七山村ヨリ出ルナリ。此川ノ鮎他ニ異ニシテ、口ニ金糸ヲマトフ。味甚美ナリ。川ハ大河ニアラズ。下流ハ濱崎駅ノ東ニ出テ海ニイル。濱崎ヨリ南玉島ニ一里アリ。筑前深江駅ヨリ三里餘ナリ。今日此川源ハ七山村荒川山ヨリ出テ西北ニ向ヒ、大村大字五反田ヲヘ、濱崎ニ至リ海ニイル。又一源ハ七山村滝川山ヨリ出テ、仁部山ニ至テ本流ニイル。又一源ハ大村平原山ヨリ出テ、玉島ニ至テ本流ニイル。古ハ松浦川ハ久里村ヨリ東ニ分派シ、鏡村鏡神社ノ傍ヨリ濱崎ニ至テ玉島河ニ

アヒ、海ニ入リシトソ。故ニ中古ノ書等ニ、松浦川ト玉島川トヲ混ヒタル者多シ。（尚栗川条ニ云ヲ考合スヘシ）

【185】「東郡大村大字洲上ニアリ」国本なし。

【186】「○玉島川ニ属ス深处ハ一丈、浅処ハ一尺、廣処ハ六十間、狹処ハ二十間、水質清淡、流急ナリ。舟筏通セス」国本なし。

【187】『万代集』ニ、玉島ノ、川ヨトサラス、タツキリノ、底マテ波ノ、岩タヽクナリ」国本なし。甲本は頭注に記す。

【188】底本、この下に別紙で、

内裏名所百首 建保三年十月十四日 玉島河

- ・玉島や 川せの波の 音はして 霞にうかふ 春の月かけ
- ・若鮎つる 袖も霞に まかふ迄 玉島川に 春はきにけり
- ・梅か香や 先うつるらん かけ清き 玉島川の 水のかゞみに
- ・松山なる 玉島川の 春霞 詠し□□□ へたてきにけり
- ・いつしかと 氷のゐせき もとすゝし 玉島川の せゝの春風
- ・いくちよの 光やはねて かよふらん 玉島川の 春の月かけ
- ・玉島や 新島守か ことしゆく 川せほのゝく 春のみか月
- ・波清き 玉島川に うつりきて 春の光も 色にみえける
- ・玉島の 此川上も 白波の しとすすめる タくれの空
- ・石はしる 玉島川の 清きせに 春の光を ちと□月影
- ・のとかなる 春の光や みかくらん 玉島川の 波もきこえず
- ・緑なる 春の光そ くもりなき 玉島川に うつる月影

とあり。国本・甲本なし。

○緡『説文』ニ、釣魚繁也。マタ『品字義』ニ、緡釣論也。マタ『詩召南』ニ、其釣誰何維糸維緡ナドアリ。魚ヲ釣ルニ用ヰル糸ナリ。

○河中之石上「上」曼本ナシ。『古事記』ニハ、此処ヲ挙、其河中之磯トアリ。本居翁曰、此処『書紀』ニ、石上ト書レ、『万葉』ノ歌

ニモ伊志トアレハ、石ナルベキヲ礧ト書ルハ、古ハ石ヲ伊蘇トモ云リト聞エテ、イソノカミヲ石上トカキ、『万葉』ナドニモ礧ヲ通ハシテ石トモ書ルコト多シ。サレバ此礧ハ借字ニテ、石ニソアリケン。『万葉』ニ、タラシ姫神ノミコトノ魚ツラヘト、御立タシセリシ石ヲ誰ミキ。(キハシノ誤リカ)或曰、今玉島川ノ岸ニ石アリ。方七尺許リナリ。俗ニ紫石トイヘリ。此太后ノ釣シ給ヒシ処ナリト語傳フ。又或ハ、此紫石ノ在所ヲ、浮島ト云処ト、玉島川トノ間ノ松原ニ在トイフ。方五尺許ト云リ【189】。『雲根志』ニ、浮島ト玉島川トノ間ノ松原ニ大石アリ。傳云、神功皇后三韓退治ノ時、此石上ニ立テ詔ハク云々。伊藤氏曰、玉島ノ南ノ岡ニ神功社アリ。此辺ノ川中ニ、皇后ノ上リ給ヒシ石トイフ者、近頃マテアリシヲ、今ハ沙ニ埋レタリシ由云リ。人家ハ川ノ東西、山ノ麓ニアリ。川ハ玉島ヨリ半里許北ニナガレテ濱崎駅ノ東ノ渡口ヨリ海ニイル。潮満ツトキハ、渡口ヨリ十丁許ハ舟モ登ルベシ。ソレヨリ上ハ山川ニテ、水モ多カラズ。

【189】 国本、この下に「今モ此石上ニテ女ノ釣スレハ鮎ヲ多クウルヲ、男ノ釣レハ、ウルコトナシト云リ」とあり。甲本この部分を傍点にて抹消す。

○釣 繒 「釣」 曼本「釣」ニ作ル。

○羅志 「志」 湯本ナシ。

○此国婦女 本居翁曰、此ハ太后ノ故事ヲ思テ、殊更ニ然為ルコトノアリシナルベシ。只何トナク其比鮎ヲ釣ルトニハ非ス。四月上旬ノ比、鮎ツルコトハ珍シカラズ。何処ニモ常ノ事ナレハナリ。今世ニモ此事遺リテアリヤ。国人ニ尋ヌベシ。(○今日此事今ハナシ【190】)

【190】 (○今日此事今ハナシ) この部分、国本なし。甲本は「(今日此事何レノ比ヨリカ絶ケン。今ハサルコトナシ)」とす。

○孟夏四月 『古事記』ニハ、四月之上旬トアリ。本居翁曰、四月之上旬ハ、ウツキノハシメノコロト訓ベシ。又ツキタチノコロトモ訓ベシ。今日『日本紀』ニハ、四月上旬トアリテ上旬ヲ、カムノトウカト訓リ。

○以針 荒木田氏曰、「以」疑「勾」誤乎。

○雖釣 「雖」 原本「羅」ニ誤ル。今之ヲ改ム。

○能羅 原本「羅」ニ、曼本「得」ニ作ル。恐クハ「獲」ノ誤リナラン。○矢野玄道氏(伊豫人)曰、松浦ノ名号、當初希見トイヒシハ、玉島川ノ辺リヨリイデハ、唐津領内ノ間ナリシヲ、郡ヲオクトキニ庇羅・値嘉ヲモ此郡ニ入レタル者ト見エタリ。○本条ノコト、『古事記』(仲哀天皇段)ニハ、太后到坐。(本居翁曰、到坐ハ『書紀』ニヨレハ、初御船登ノ時ニハアラス。又置坐テ御船泊シ時ニモ非ス。御船登ヨリ前ニ、別ニ筑前ヨリ筑後ヲヘテ、此地ニ幸シコトノアリシナリ。サルヲ此ニ記シタルハ、前事ヲ追テ別ニ記セル者ソ)筑紫末羅縣之玉島里。初御食其河辺之時。當四月之上旬。

尔坐其河中之磯。拔取御裳之糸。以飯粒為餌。釣其河之年魚。（其河名謂小河。亦其磯名謂勝間比壳也。○〔12〕本居翁曰〔191〕、勝間比壳ノ名義ハ、『書紀』ニ、此時皇后祈ヒ給ヒシコトアリツレハ、其意モテ新羅へ勝給ヘル由ニテ、後ニ名ケタルニヤアラン。間ハ処ノ意カ。比壳トハ尊トハ尊ニテ稱ヘタルナラン。○或曰〔192〕、垂綸石ハ玉島川ニアリ。元禄中ノ洪水ニテ河底ニ埋没ス。御立石マテ紫臺石ト云）故四月上旬之時。女人拔裳糸。以飯粒為餌。釣年魚。至于今不絶也。マタ『日本紀』神功皇后条ニハ、夏四月壬寅朔甲辰。北到火前国松浦縣。而進食於玉島里小河之側。於是皇后勾針為釣。取粒為餌。抽取裳糸為緒。登河中石上。而投鈎祈之曰。朕西欲求財国。若有成事者。河魚飲鈎。因以举竿。乃獲細鱗魚。時皇后曰。希見物也。（希見此云。梅豆邏志）故時人号其処。曰梅豆羅国。今謂松浦訛焉。是以其国女人。每當四月上旬。以鈎投河中。捕年魚。於今不絶。唯男夫雖釣。不能獲魚ナドアリ。

〔12〕『書紀通証』玉島河岸有大石。方七尺許。俗名紫石。傳云。皇后重釣之處。

〔191〕底本、本居說・『日本書紀』の引用に重複あり。国本により整理す。

〔192〕（○或曰、垂綸石ハ玉島川ニアリ。元禄中ノ洪水ニテ河底ニ埋没ス。御立石マテ紫臺石ト云）国本なし。

鏡渡。〈在ニ郡北ニ〉

昔者。檜隈廬入野宮御宇武少廣国押楯天皇之世。遣ニ大伴狹手彦連一。鎮ニ任那之国一。兼救ニ百濟之国一。奉レ命到来至レ於ニ此村一。即娉ニ篠原村（篠謂ニ志奴一）弟日姫子一成レ婚。〈日下部君等祖也〉容貌美麗。特絶ニ人間一。分別之日。取レ鏡與レ婦婦含レ悲啼渡ニ栗川一。所レ與之鏡緒絶沈レ川。因名ニ鏡渡一。此一條、『童蒙抄』『袖中抄』等ニモ引ク所ナリ。而シテ文字少シツ、異ナル所アリ。而シテ文字少シツ、異ナル所アリ。

○昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○檜隈廬入野宮 『古事記』（宣化天皇段）ニ、建小廣国押楯命。（○宣化天皇）坐檜杵之廬入野宮治天下也トアリ。檜隈ハ大和高市郡ノ地名ナリ。廬入野ハ檜隈ノ中ノ地名ナルカ。宮号トナリタルナリ。

○大伴狹手彦連 『日本紀』（宣化天皇二年十月）ニ、以新羅寇於任那。詔大伴金村大連。遣其子磐典狹手彦。以助任那。是時磐留筑紫。執

其国政。以備三韓。狹手彦往鎮任那加救百濟。マタ『三代実録』（貞觀三年八月）ニ、左京人外從五位下伴大田宿祢常雄云々。先是。正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿祢善男等奏言。常雄欸僞。謹稽家牒。伴大田宿祢同祖。金村大連公等三子。狹手彦後也。狹手彦。宣化天皇世。奉使任那。征新羅。復任那兼助百濟云々ナドアリ。此時ノ事ナリ。（○今日『姓氏録』左京神別ニ、大伴連道臣命十世孫佐弓彦之後也。『大伴系図』【193】ニ、金村ノ子三人アリ。長ヲ盤トイヒ、仲ヲ昨子トイヒ、末ヲ狹手彦ト云）

【193】（『大伴系図』ニ、金村ノ子三人アリ。長ヲ盤トイヒ、仲ヲ昨子トイヒ、末ヲ狹手彦ト云） 国本・甲本なし。

○**任那** 『日本紀』（崇神天皇六十五年七月）ニ、任那者。去筑紫國二千餘里。北阻海以在鷄林之西南。（『大日本史』注【194】ニ、『東國通鑑』曰牛頭者任那加良人也。因知意富加羅者大加那而為任那無疑也トアリ）

【194】『大日本史』注 以下の記述、国本なし。甲本は頭注にて記す。

○**百濟** 本居翁曰、百濟ヲ「繼體紀」ニ、扶余トモ、「雄略紀」ニ、尉礼トモアリ。扶余ハ別ニ一國ナリシヲ、百濟ハ扶余別種トアレバ、百濟ノ名ニモセシナルベシ。百濟王ノ姓ハ多ク餘トイヘルヲ、『唐書』ニハ、夫餘トイヘレバ、此モ是国ヲ取レルニコソ、尉礼ヲ、クダラトコソ訓ベケレ。『東國通鑑』ニ、尉礼ハ百濟ノ旧名ナルヨシ云リ。百濟ハ『後漢書』ニ、伯濟トアル國ナルベシ。『魏志』ニ、馬韓五十餘國ノ中ニ伯濟アリ。新羅ノ西ニアリテ、皇国ヘハ新羅ヨリ参ルヨリモ遠シ。

○**篠原村** 土人曰、此村今ノ久里村大字中原・西原・原等ノ内ナラン。【195】

【195】 国本、この下に「（今日小城郡ト東松浦郡トノ間ニテ、小城ノ方ノ小侍ノ中ニ篠原嶺トテ、小高キ処アリ。是ニハ非サルカ）」の分注あり。甲本、この部分を傍点にて抹消す。

○**弟日姫子** 下（賀周里条）ニ、纏向日代宮御宇天皇。巡國之時。遣陪從大屋田子（日下部等祖也）君トアリ。此ノ弟日姫子ヲ日下部君等祖也トアレバ、彼大屋田子ノ同族ナドノ古キ家ニテ、勢モアリシナラン。或曰、東郡巖木村大字中島ニ、篠原ト云処アリ。其処ニ長者ノ宅跡アリ。泉水築山ナドノ趾モ少シ遺レリ。弟日姫子ハ此ノ長者ノ女ナリトゾ。（賀周里条考合スヘシ）

○**日下部君** 『姓氏録』【196】ニ、日下部宿祢。開化天皇々子彦坐命之後也。日下連。孝元天皇々子大彦命男。鈕鍬命之後也。日下部。火蘭降命之後也。日下部。神饒速日命孫。比古由支命之後也。日下部首。天日和伎命六世孫。保都祢命之後也トアリ。弟日姫子ハ、何レノ後ニカ。「仁治三年ノ文書」ニ、筑前國。怡土莊（○糸島郡）内。篠原。安恒両村之事。右両村肥前國。佐志九郎増。（○松浦党）申者妻

女。草部代相為相伝私領云々トアリ。東郡ニ佐志村大字佐志アリ。賀周里ニ近シ。草郡ハ日下部ニテ、此モ弟日姫子ノ同族ノ裔ノ此頃マテ存シタリシナラン。『東大寺正倉院文書』『豊後國天平九年正税帳』【197】ニ、大領外正七位上勲九等日下部連吉島。少領外從七位上勲十等日下部君大國。主帳外少初位上勲十等日下部君。マタ『三代実録』（貞觀十八年九月）ニ、肥後國合志郡擬大領日下部辰吉ナトアリ。日族近ク住吉シタルニハアラサルカ。

【196】 国本・甲本、『姓氏録』の下に「(山城攝津等皇別)」という分注あり。

【197】 『東大寺正倉院文書』『豊後國天平九年正税帳』以下の記述、国本なし。甲本は分注の形で記す。

○栗川鏡渡 栗ハ『和名抄』ナル久利郷ナリ。今久里村大字久里アリ。此辺リヲ三百年前ノ文書ニハ、草野莊ト云シトソ。『祇園執行日記』【198】貞和二年ニ、鎮西探題一色入道竈手肥前國草野城。マタ「河上神社至徳元年文書」ニ、草野駿河入道アリ。『東鑑』ニ、文治年中筑後ノ草野永平力鏡宮ノ神官タリシコトミユ。其領所ナレハ草野莊ト云シニテ、本ハ久利庄ナリケン。松浦川、久里村ノ旁ヲ流レタル処ヲ、栗川ト云シカ。(千歳川ヲ御井郡ニ傍テ流ル、処ニテハ、御井川ト云カ如シ)『八雲御抄』ニ、ナ、セノ淀(松浦川アスヤ川)【199】何レニモアリ。マタ『九州ノ道ノ記』(豊臣勝俊)ニ、松浦川ハ七瀬ノヨト、ヨメルニ違ハズ。イト大ナル川ニテソアリケル。マタ『名所小鏡』ニ、鏡宮ヨリ十丁許西ノ方、南ヨリ北ニ流レ入タル潮入ノ大川ニ瀬アリ。松浦川、マタ鏡渡トモ、栗屋川(今日屋ハ衍)トモ世俗ニハ云ナリ。『千載集』ニ、浅カラズ。頼ミタル男ノ心ナラズ。肥前國ニマカリテ侍リケルガ、便ニツケテ文ヲオコセテ侍リケル返事、紫式部アヒミント思フ心ハ、マツラナル鏡ノ神ヤカケテシルラン。沈メケン鏡ノカケヤコレナラン。松浦ノ川ノ秋ノヨノ月。『夫木抄』ニ、松浦川アユツルセニモ水清シニゴラヌ末ニサナヘトルナリ【200】。青柳氏曰、鏡川ハ鏡宮ノ西ニアル大河ナリ。(今日即チ久里川ナリ。鏡宮ノ西ヲ流ル)【201】。今日、此川ノコト上ニ引タル説ドモニテ、大概ハ明カナレドモ、尚余カ見ツル所トヲ交ヘ、更ニ精ク之ヲ云ン。此川、本源ハ杵島郡中通村黒髪山ヨリ出テ東北ニ流レ、同村大字鳥海^{トリ}、西松浦郡松浦村大字桃川、大川村大字大川野ヲヘ、東松浦郡相知村大字久保ヲヘ、鬼塚村大字橋本ニ至ル。之ヲ甲流トス。一源ハ、杵島郡住吉村大字宮野ヨリ出テ、同村大字大野ヲヘ、武内村大字真手野ニ至リ甲流ニ入ル。又一源ハ、杵島郡若木村大字川古ヨリ出テ、同村大字本部ヲヘテ甲流ニ入ル。又一源ハ、小城郡晴田村天山ヨリ出テ、東松浦郡厳木村大字牧瀬・厳木ヲヘテ、相知村大字山崎ニ至リテ甲流ニ入ル。乙流ノ源ハ、西松浦郡南波多村大字府招ノ椎峯ヨリ出テ東北ニ流レ、北波多村大字徳須恵ヲヘ、鬼塚村大字橋本ニ至リテ甲流ニ合ス。一源ハ、西松浦郡黒川村大字畑川内ヨリ出テ、南波多村大字重橋ヲヘ、

同村大字水留ニ至リテ乙流ニ入ル。一源ハ、西松浦郡大岳村大字木場ヨリ出テ、同村大字板木ヲへ、東松浦郡北波多村大字行合野ニ至リテ乙流ニ入ル。其餘支源尚多シ。甲乙源ノ流橋本村ニ至リ、合シ流シ北下シ、唐津町ニ至リテ海ニ注ク。黒髪山ヨリ唐津町ニ至ルマデ十里許ナリ。鏡渡ノ処ハ川幅二百二十間、大抵上流ハ小石ニテ下流ハ沙ナリ。深サ一丈ヨリ四五尺ニ至ル。夏霖ノ時ハ、暴漲堤防ヲ壊ルニ至ル。水質澄クシテ味甘シ。沿岸ノ植物ハ、松・杉・竹・葦、水中ノ産物ハ、年魚・鮒・鯉・鰻等ナリ。土人曰、古ハ此川鏡渡ノ辺ヨリ西ニ折レ、鬼塚村大字和多田ヲ穿チ、唐津町魚屋橋ニ出テ、旧城二丸ノ前ヨリ海ニ入ル。今ノ本丸址ト満島村大字満島トノ間ノ入海ハ、元陸地ナリシヲ、慶長中、寺沢侯築城ノ時、新ニ之ヲ堀切りシヨリ、今ハ此処本流トナリ、二丸前ハ浅クナレリ。今ニ二丸前ノ流ヲ限リテ、東ハ此川ヲ阻テ、満島村ニ連リ、鏡神社ノ産子ニテ、其西ノミソ唐津神社ノ産子ナル。

【198】『祇園執行日記』貞和二年ニ、鎮西探題一色入道兼手肥前國草野城。マタ「河上神社至徳元年文書」ニ、草野駿河入道アリ」の部分、甲本は頭注にて記す。

【199】「アスヤ川」、国本「カスカ川」とす。甲本は「アスヤ川」

【200】国本・甲本、この後に『夫木抄』ニ、松浦川アユツルセニモ水清シニゴラヌ末ニサナヘトルナリ」という記述あり。

【201】「鏡宮ノ西ヲ流ル」国本なし。

○鏡緒絶沈川 『童蒙抄』ニ、引ケル此所ノ文ニハ、栗川ヲワタリ與フル所ノ鏡ヲ抱テ川ニ沈ミヌ。コヽヲ鏡渡ト云トアリ【13】。【202】

緒ヲ貫鏡渡ノ東ニ鏡村大字鏡アリ。ソコニ鏡神社アリ。郷社ナリ。此社ノコト、『鏡廣宮本縁起』・『源氏物語』・『伊呂波字類抄』・『扶桑略記』・『古今著聞集』・『百練抄』・『東鑑』・『梅松論』・『源平盛衰記』・『元亨釈書』等ニ見エタリ)

【13】『宝鏡秘考抄録』組鏡ノ古ク物ニミエタルハ、『肥前風土記』ニ鏡渡ノ故事ヲ記シテ云ク。桧隈盧入野宮御宇武廣押楯天皇云々。鏡緒絶沈云々云々トアルハ、組鏡ナリケン。サレト田口舍人夜行ニ鏡ノ柄ヲ緒モテ結堅メ、領ニ挂テ鬼ヲオソレシムル。料ニ物スルハ、イトノ古キ由アル習シト思ル、ニ付テハ、カノ鏡緒云々モ必紐ナラントモ思定メカタシ。ソノ□キテハ『万葉』(十五)ニ、ミエタル歌ヲオキテ、古ク畑鏡ノ事物ニハ見当ラス。

【202】甲本、この部分に「古鏡ハ多ク裡面ニ鈕アリテ」という記述あり。国本、以下の分注なし。

褶振峯。〈在「郡東」。峰冢名曰「褶振峯」〉

大伴佐手彦連。發^レ船渡^ニ任那^一之時。弟日姫子。登^レ此用^レ褶振招。因名^ニ褶振峯^一。然弟日姫子。與^ニ狭手彦連^一相分。經^ニ五日^一之後。有^レ人每^レ夜来。與^レ婦共寢至^レ曉早歸。容止形貌似^ニ狭手彦^一。婦抱^ニ其恠^一。不^レ得^ニ忍默^一。窃用^ニ續麻^一繫^ニ其人欄^一。随^レ麻尋往。到^ニ此峯頭之沼邊^一。有^ニ寢蛇^一身人而沈^ニ沼底^一。頭蛇而臥^ニ沼壅^一。忽化^ニ為人^一。即歌曰。志努波羅能。意登比賣能古表。佐比登由母。為祢弓牟志太夜。伊幣尔久太佐牟也。

峰冢名曰褶振峰此七字衍ナラン。「峰」湯本「烽」ニ作ル。因テ案スルニ、名曰ハ在ノ誤リニテ、烽冢在褶振峰ナランカ。然シ文章穩力ナラズ。

○**褶**ヒレト訓ベシ。本居翁曰、ヒレハ振手ノ約リタル名ニテ、何ニマレ、打振物ヲ云。サレバ魚ノ鰭モ水中ヲユクトテ、振物服ノ領巾モ本ハ振ム料ニテ、皆本ハ一意ニ名付タルモノソ。今日、褶ハ「衣服令」ニ、皇太子礼服云々。深紫紗褶トアリテ、義解ニ、褶者所以加袴上。故俗云袴褶也。『箋註和名抄』【203】ニ、『揚氏漢語抄』云。背子婦人表衣。以錦為之領巾。（『日本紀私記』云。比礼○領巾見崇神十年紀。案錢安道小女數。歲以領巾乞詩。於李巨山見春。諸紀聞益。即比按比礼見。『古事記』雄略条及「欽明紀」歌・「大祓大殿祝詞」『万葉』五・「大神宮儀式帳」『北山抄』等領巾又見。『万葉』十三・「縫殿寮式」又「履中紀」人名有刺領巾。「天武紀」作肩巾。『統紀』慶雲二年紀・同天武紀訓注、肩巾此云比例。『北山抄』陪膳女藏人比例科羅事）婦人項上飾也。（○方言帛袂謂之被巾注婦人領巾也。王念孫曰、帛猶屬也。離騷王注被也。袂猶表也。表謂領也。被巾所以扞領。故有帛袂稱）『播磨風土記』ニ、ヒラミ。『日本紀』ニ、ヒラオヒ。又ヒラヒトアリテ、褶ニヒラミ加裳上者也ト旁注セリ。『字鏡』ニ、ウハモ、ヒラモ、ハカマ、ウハミ、オヨヒキ。『塵添璫囊抄』ニ、ウハミ。『書紀通證』ニ、褶訓比良比。又比良於比。『催馬樂』云。宇波母毛取着弓。『梁塵抄』宇波母。又云。志比良。又見源氏證トアリ。『礼記』ノ註ニ、衣有表裏而無着也。『喪大記』ノ註ニ、褶袷也。『類篇』ニ、袴褶騎服。『晋書』ニ、黑袴褶ナドアリテ、領巾ノ義ハナシ。然シヒレト訓シコトモ、古キコト、見エテ、『播磨風土記』ニ、褶ヲヒレト訓ミタリ【204】。『伊呂波字類抄』ニ、領巾ヒレナドアリ。ヒレヲ領巾・肩巾トカクハ、領モシクハ肩ニカクル巾ナレハナリ。『古事記』ニ、宇豆良登理。比礼登理加氣弓トアリ。領巾ヲフリテ人ヲ招クコトハ、同書ニ、柯羅俱尔能。基能陪你陀致底。於譜磨故幡。比例甫囉須母。耶魔等陞武岐底トアリ。其色ハ種々アリシト見エテ、「四時祭式」ニ、褶一条（緋帛）【205】。マタ『万葉集』ニ、袴領巾乃白。マタ細比礼乃鷺トモア

リ。○『紫式部日記』ニ、ヒレ裙帶ハ、浮線綾ヲ施檀ニ染タリナトアリ。又長キモ短キモアリシト見エテ、「四時祭式」ニ、褶一条（四丈）褶一条（一丈五尺）【206】。「縫殿式」ニ、領巾四条。料三丈六尺。『北山抄』ニ、比札料。人別一丈三尺。『大神宮儀式帳』ニ、生絹御比札八端。（須蘇長各五尺。弘二幅）『外宮儀式帳』ニ、生絶比札四具。（長各二尺五寸。廣随幅）ナドアリ【207】。『伊呂波字類抄』ニ、領巾ヒレ婦人頂上飾也。『枕冊子』ニ、采女ノ装束ニ比札ヲ挂タルコト見ユレハ、礼服ナルベキヲ、『万葉集』ニ、濱葉摘海部処女等纓有領巾文光蟹トアレハ然ノミニ非ス。『遊山窟』ニ、単曰領巾。複曰帔子。春着領巾。秋着帔子トアレハ、兩種アリシナリ。『日本紀』（天武天皇十一年三月）ニ、詔曰。膳夫采女等之手櫛肩巾。並莫服トアレハ、一度ハ止メラレタリ。サレト『続紀』（慶雲二年四月）ニ、先是。諸国采女肩巾田依令停之。至是復旧焉。マタ『万葉集』・「縫殿式」等ノ趣ニ依ハ、後又行ハレシコト炳シ。『楊子方言』【208】ニ、幫陳魏之間。謂之帔。マタ『類篇』ニ、破関東人呼裙也トアルニ依ハ、此ハ俗ニイフ前垂ノ如キ物ニテ、領巾ニハ非サルカ如クナレドモ、『玉篇』ニ、帔在肩背也。マタ『釈名』ニ、帔披也。披之肩背不及下也。マタ帔褙子也。省作背以其覆肩背也。マタ「四時祭式」ニ、領巾ハ別ニアリテ、帔アリテ其傍ニ巾也。又云、被ウチカケト記シタレハ、元来領巾ニ似タル物ナル故ニ、本文ニモ仮用ヒタルナラン。伴氏曰、帔ヲウチカケキヌ、ムシナキリカフムリ、ト訓ム。『夫木集』ニ、『歌林拾葉』ヲ引テ、夏深ミ、ムシノタレキヌ、結ヒアケテ、通リワツラフ。野ヘノ旅人。トアルムシノタレキヌハ、『伊呂波字類抄』ニ、縹ムシ、女笠也トアル物ニテ、古画ニ、女ノ笠ニ、肩ノアタリマテ絹ヲタレ回ラシ付タルカ多クアリ。是ナルベシ。能登人ノ言ニ、寒ヲシノカン料ニ、手拭ヲ被ルコトヲ、ムシヲ被ルト云ク。何故ニサハ云リト問タリケレハ、頭ヲ蒸シ暖ムレハナリト云リ。ソハ如何アラン。何レニテモ頭ニ被ルヲムシト云ルハ此ノ所謂ル。ムシノ古言ノ遺レルナリ。『名義抄』ニ、帔ヲウチカケキヌ、ムシ、トアルヲモ考フベシ。『山家集』ニ、之ムマノ、アナユキコトハ、アラシカシ、ムシ垂イタノ、運フ歩ミハ。後世継ニ、ムシタレタルハ、様ヨクタミエケン。『新六帖』ニ、ムシタル、此東少女カスキ影ニナコソ覺エテ、ユキ別レヌルナドアリ。帔ト領巾トハ似タル者ナレハ、帔ヲ領巾ニ借用セタルナリ。又近キ比、『古今要覽稿』ヲ見下ノ如ク抄録ス。屋代詮丈按ニ、帔ヲ「延喜縫殿式」ニ、ヒレト訓タリト此書一定シ難シ。諸本區々ニシテ、或ハヒレ、或ハウチカケナト訓メリ。尚考フルニ、爰ニ引ル『玉篇』ニ、帔ハ在背肩トミエタル如ク。古クカラギヌト云ル物ノ類ニシテ、装束シタル上ニ打挂ケ着タル者ナリ。サルニ依テ其形容ハ領巾ト全ク同シ様ナル物故ニ、フト誤テヒレト訓タルカ。ハテハシカ皆心得テ『東宮切韻』等ニモ、領巾也トイヒ、『肥前風土記』ニモ、帔ヲ正ク領巾ニカリテ書ルナルベシ。『類聚雜要』・『雅亮装束抄』等ニ、所謂鏡ノヒレト同クシテ用ハナサ

又物ナルカ。其形容ヨリシテ名付シ物ナルコトシラレタリ。又『遊仙窟』注ニ、春著領巾。秋著帔巾。婦人頭飾也ト云ルモ、此注ノミニシテ、外ニ領巾・帔巾ト春秋ノケチメアルコト、曾テ所見ナシ。又按ニ、「祝詞考」ニ、領巾ハ、女ノ挂ル物ナリ。マタハ手櫛挂ル。伴ノ男トムカヘ云ルニテ、凡大御食ニ仕ル采女ヲ專ラ指テ云コトハ、昔ヨリ誰モ々々云ルコトナレド然ラズ。「履中卷」ニ、隼人刺領巾。又「隼人式」ニ、領巾横刀ト並ヘ云ルニテ、隼人ハ領巾ヲ挂シコト明カナリ。隼人ノミナラス、外ノ武官モ挂タルナランヲ常ノ事ナレハ、毎々ニ載ヌナルベシ。領巾ハ飾ノミナラデ、用キナセシ者ナルコトハ、上モ云ル如クナレハ、警衛ノ士ハ必常ニ領巾ヲ挂テ居タラシハ、サモアルベキコトナリ。思ニ「祝詞考」・「大祓後釈」共ニ云ル、領巾懸流伴雄。手櫛懸流伊緒ハ、靱負流伴緒。太刀帶伴緒ニ對ヘ云ルナリ。シテ男ハ緒ナリ。或ハ長ナリナド云ルハイタリ經タル説ナリ。イカハトナレハ領巾ハ婦人ナラテ挂マシキ者ナランニハ、仮字モ多キヲ、イカテ分テ男ノ字ヲ借テ書クベキ。フルクハ男女共通ハシテ挂シ物ナルコト、上ニシルセル如シ。以上必要ナラヌ事ナレド、筆ノスサヒニ思ヒ出ルマ、ニ記シオク。

【203】『箋註和名抄』ニ……故有帛袷称「国本なし」。

【204】国本、この後に『日本紀』ニ領巾ヲヒレト訓シ、マタ肩巾、此云比例」とあり。

【205】「四時祭式」ニ、褶一条（緋帛）「国本なし。甲本はあり」。

【206】「四時祭式」ニ、褶一条（四丈）褶一条（一丈五尺）「国本なし。甲本はあり」。

【207】国本、この後に『和名抄』ニ、領巾婦人頂上飾也」とあり。

【208】『楊氏方言』以下の記述、国本・甲本なし。

○褶振峰

此山ヲ鏡山トモイフ【209】。鏡村ノ東ニアリ。高サ百五拾間、周廻二里、頂上ハ平垣ニシテ東西五丁、南北三丁餘。『古今著聞集』ニ、我国ノ松浦佐用姫トイフハ、大伴狹手麻呂カ女ナリ。（今日女トハ妻ヲ云）男命（今日此ハ武少廣国押楯命ヲ指ス）ノ御使ニ、唐ニワタルニ、已ニ舟ニ乗テユクトキ、其別ヲ惜テ高キ嶺ニノボリテ、遙ニハナレ行ヲ見カナシミニ、堪ズシテ領巾ヲヌイテ招ク。見ルモノ涙ヲ流シケリ。ソレヨリ此山ヲ領巾磨ノ嶺トイフ【210】。マタ『源平盛衰記』ニ、昔大伴狹手彦力遣唐使ニサ、レテ、肥前国松浦カタヨリ舟ニ乗り、コキ出タリケルニ、夫ノ別ヲ慕ヒツ、松浦サヨ姫カ領巾磨ノ嶺ニノボリテ、唐船ヲマネキツ、悶焦ケン云々。マタ『十訓抄』ニ、我国ノ松浦佐用姫トイフハ、大伴狹手彦力妻ナリ。男帝ノ御使ニ唐ヘワタルニ捨テ舟ニノリテ行トキ、ソノ別ヲ惜テ高キ山ノ

峯ニノボリテ、遙ニ離別ヲミテ悲ニタヘズシテ、領巾ヲ脱テ招ク。ミル人涙ヲ流シケルヨリ、此山ヲ領巾磨峯ト云。マタ『八雲御抄』ニ、ウナハラノ沖ユク舟ヲ帰レトカヒレフラシケン。松浦サヨ姫、昔大伴佐堤比古郎子。特被朝命奉使藩国。サヨ姫別ヲ惜ミテ松浦ノ峰ニノホリテ、遙ニ難去舟ヲマネキテ、魂ヲケシ涙ヲ流シ、ナリ。『肥前国風土記』曰、昔武小廣国押楯天皇ノ世ニ、大伴狹手彦連、任那ノ国ヲ鎮メカネテ、百濟国ヲ救シカ為ニ、詔ヲ承テ此村ニ至リキヌ。則篠原村弟日姫子ヲ娉シツ。其意千人ニ勝レタリケリ。別レタル日、鏡ヲトリテ婦ニ與フ。婦別カナシミテ、追テ栗川ヲワタル時、カノ鏡川ニシツミヌ。狹手彦連舟ヲ出シテサルトキ、弟日姫子、山ニ上テ袖ヲフリ招ク。依之テヒレフル山ナリ。マタ(山部)マツラ(肥前異名山万ヒレフル山)マタ『遊方名所略』ニ、『古今和歌集抄』崇峻(○宣化ノ誤)天皇御宇。大伴扭彦。為三韓征伐。赴異朝。族泊播州佐用郡佐用邑。而經他日。於茲有姉妹二女。為扭彦之妾。寵遇過常。既及其朝。欲渡於三韓。二妾悲別追蹤。肥前国登松浦山。見夫載舟出。不堪追念。振衣招夫。然夫無及。二妾立死。姉郡化石。妹投河水云々。巾振山。西南五里許。有号喚名。(○名ハ子ノ誤リ)処海島也。(今日○喚子ハ島ニ非ス。彼化石ト云者ハ喚子ノ向ナル加部島ニアリ)十町許傍。有望夫石及神社(○田島神社ノ境内ニアリ。石ヲ以テ神体トシ、社ヲ立テ之ヲ祭ル)即佐用姫所化。故名望夫神。則其靈也。マタ『太平記』ニ、松浦佐用嬢ハ玉島山(○今日はハ誤リ)ニ、ヒレフリテ澳行ク船ヲ招シ云々。マタ『峰相記』ニ、松浦佐用媛。大伴佐堤彦妻也。佐堤彦渡唐遂不歸。而死于此地。故祭為神。マタ『シラ、物語』ニ、【211】帝ノ使二唐ヘワタルニ、捨テ舟ニ登リテハルカニ離行ヲ見テ、哀ミニ堪スシテ領巾ヲ拔テ、招キケルヨリ、此山ヲ領巾磨峯ト云。マタ『灯菴袖下抄』ニ、松浦佐用姫トイフハ、狹手彦大臣ヲ、其時ノミヤト、唐土ニ御使ニ遣シ給ヒケルニ、都ヨリ佐用姫ヲ唐マテツレユカントテ見シケルカ。イカ、思ヒケン。捨行ケレバ佐用姫空クヤミヌ。船ノ見ユル限リ、コヒ慕ヒケレドモ、カヒナケレバ、高山ニ登リテ袖モテ招ク。船力クレテ後ヤガテ石トナリヌ。此名ノカタチ女ノ衣ヲカツキテ臥タル体ナリ。マタ『衆妙集』【212】ニ、松浦カタ、ユク舟遠キ、追風ニ、ヒレフル山ノ、昔ヲソオモフ。マタ『九州ノ道ノ記』(豊臣勝俊)ニ、松浦佐用姫力、ヒレフリシヨリ名ニ云レケン。山モ近キホトニ見エテ、イトオカシキサマナリ。マタ『和漢三才図會』ニ、佐用姫社。在松浦郡。社領百石。(○初メ豊臣氏之ヲ寄ス。徳川氏之ヲ承ケ明治ノ維新ニ至ル)佐用姫。播州佐用郡人女云々。蓋佐用姫。唯非恋夫死。而其靈有奇異而然乎。未考其詳説。マタ『増補名所方角抄』ニ、松浦山ヲ巾振山トモ、野辺トモ、岳トモ云リ。マタ『唐津名所記』ニ、松浦山ヲ巾振山トモイフ。此山ヨリ未申呼子トイフ浦里アリ。此里ノ向ヒニ加部島アリ。佐用姫ノ社アリ。望夫石アリ。マタ『万葉集』(五)ニ、大伴佐堤比古郎子。特被朝命奉使藩国。艤棹言歸。稍赴蒼波妾也。松浦佐用嬢面。嗟比別易。難彼會

難。即登高山之嶺。遙離去之舩帳。然斷肝黯然消魂。遂脫領巾磨之。傍者莫不流涕。因号此山。曰領巾磨之嶺也。乃作歌曰、得保都必等、麻通良佐用比米、都麻胡非尔、比例布利布利之用利、於返流夜麻能奈。夜麻能奈等、伊賓都夏等可母、佐用比壳何、許能野麻能閑仁、必例遠布利家無。余呂豆余尔、可多利都夏等之、許能多氣仁、比例布利家良之、麻通羅佐用嬪面。宇奈波良能、意吉由久布祢遠、可弊礼等加、比布良斯家武、麻都羅佐欲比壳。由久布祢遠、布利等騰尾加祢、伊加婆加利、故保斯苦阿利家武、麻都良佐欲比壳。三島王、後追和松浦佐用嬪面歌、於登尔吉伎、目尔波伊麻太見、受佐容比壳、我必礼布理伎等、敷吉民万通良揚滿。佐用姫ノコトノ書ニ見エタルハ此集ヲ始メトス。此ハ弟日姫子ノ事ヲ訛傳ヘタルナラン。又狹手彦、任那ニ赴ク時ヤ、モトヨリ播摩佐用郡ノ佐用姫ヲ携ヘ来リ。又更ニ弟日姫子ヲ聘ヒシカ。然シ領巾ヲ振シハ、弟日姫子ノ事ナルハ、本記ノ文ニテ明カナリ。サレド弟日姫子ノ名ハ傳ハラズ。佐用姫ノ名ノミ傳ハリ、領巾振シコトモ遂ニ佐用姫ノ事トナリタルガ、然ルヲ事ノ本ヲヨクモ正サズ、詠ツル歌ノ『万葉集』ニ入リシヨリ、後世此歌ヲ拠所トシテ、繼々ニ詠ミイテ、遂ニ其実ヲ失ヒタリ。『袖中抄』ニ、『筑前風土記』ヲ引テ曰、狹手彦連舟ニノリテ、海ニト、マリテ、渡ルコトヲ得難シ。コ、ニ石勝推量シテ曰ク、此舟ノユカサルコトハ、海神ノ心ナリ。其神ハナハダ狹手彦連力キテユク所ノ妾、那古君ヲタフ。之ヲト、メハ渡ルベシ。于時彦連、妾トヒナケク。皇命ヲカ、ン事ヲ畏レテ、ウツクシ姫ヲタチテコモノ上ニノセテ、波ニハナチ從フトアリ。那古君トハ奇シキ名ナリ。佐用姫ヲ訛リタルカ。又此ハ橘姫ノ故事ヲサヘ取交ヘツル。作傳ヘニテモアラシカ。『枕草子』【213】ニ、五月ノ節ノアヤメノ藏人、サウブノカヅラ、アカヒモノ色ニハアラヌヲ、領巾裙帶ナリトシテ、藥玉ヲミユタチ、上達部ナドノ立ナミ給ヘルニ奉ルモ、イミシフナメカシ。又采女人、馬ニ上テ引出メリ。青スリ濃ノ裳裙帶、領巾ナドノ風ニ吹ヤラレタル。イトヲカシ。『落窪物語』ニ、今ハトテ島コトハナレ行舟モヒレフル神ヲミルソ悲シキ。『続古今集』ニ、忘ルナヨ、契リシ末ヲ。松浦カタ、ヒレフル山ハ、阻テハテ、モ。『千載集』ニ、木ノマヨリ、ヒレフル神ヲ、ヨリニミテ、イカ、ハスヘキ、松浦サヨ姫。【14】『定家集』ニ、蟬ノハノ、衣ニ秋ヲ、マツラカタ、ヒレフル山ノ、暮ソ涼キ。『北院御室集』ニ、惜ミ兼、ヒレフル迄モ、シタハシキ、松浦ノ山ノ、在明ノ月。『菅家玉房集』ニ、サヨ姫ノ、袖カトミエテ、松浦山、禁ヲハナレ、誰招クラン。『拾玉集』ニ、暮テ行、霞ノ袖ニ、春挂テ、ヒレフリ反セ、松浦サヨ姫。『知家集』ニ、松浦カタ、ヒレフル山ノ、時鳥、アリテモ声ノ、遠サカリ行。『北条貞時集』ニ、ヒレフリシ、昔ノ人ノ、仰モ、写ル鏡ノ、山ノハノ月。『宗尊親王集』ニ、松浦川、ソオト高シ、サヨヒメノ、ヒレフル山ノ、五月雨ノ比。『衆妙集』【214】□ニ、松浦カタ、行舟トホキ、追風ニ、ヒレフル山ノ、昔ヲソ思。○伊藤氏曰、褶振峯ハ、

古ニ烽冢ノアリシ処ナリ。濱崎駅ノ南ニアリ。高七八丁ナレトモ、海辺トイヒ、他山ニツ、カサレハ、聳エテミユ。頂ハ廣平ナリ。東西四百間、南北二百間許アルベシ。此処ヨリミレハ、西北ノ海ニ高島（○満島村大字高島）・柏島・大島（○唐津村大字大島）・小川島（○呼子村大字小川島）・加唐島、筑前ノ姫島、壱岐對馬マテモミユ。唐津城ハ、西方一里ニシテ、甚近クミユ。呼子ノ山、馬渡島ナドモミユ。東一里ニ玉島里アリ。虹松原ハ、北ニ当リテ汀マテハ山ヨリ直径八九丁モアルベシ。鏡宮ハ西禁ニアリテ、山ト宮トノ間三丁許モアルベシ。○『緩草小言』【215】曰、松浦佐用姫ノ石ニ化シタルト云アリ。彼西土ニモ啓母石トイフアリ。応郡郭璞。皆云啓母塗山氏。所化歷代崇祀見。「漢武帝紀」ト突通ノ注ニアリ。因テ『漢書』ヲ檢スルニ、元封元年ニ見エタリ。又「九域志」昔有人適楚。不還其妻。登山望夫化為石。在当塗縣。ト愈愚隨筆ニ引ケリ。○今日此ナドノコトヨリ望夫石トイフコトヲ附会捏造セシナラン。

【209】「此山ヲ鏡山トモイフ。鏡村ノ東ニアリ。高サ百五拾間、周廻二里、頂上ハ平坦ニシテ東西五丁、南北三丁餘」国本なし。

【210】国本、この下に「今日此処ニ松浦佐用姫トアルハ、弟日姫子ヲ訛リタルナリ」の分注あり。甲本この部分を傍点にて抹消す。

【211】国本・甲本、この下に「吾國ノ松浦佐夜姫トイフハ、大伴ノ狭手丸カ妻ナリ。男」という記述あり。

【212】「マタ『衆妙集』ニ、松浦カタ、ユク舟遠キ、追風ニ、ヒレフル山ノ、昔ヲソオモフ」国本なし。

【213】『枕草子』ニ……領巾ナドノ風ニ吹ヤラレタル。イトヲカシ」国本・甲本なし。

【214】『衆妙集』ニ、松浦カタ、行舟トホキ、追風ニ、ヒレフル山ノ、昔ヲソ思」国本・甲本なし。底本、【212】の『衆妙抄』の記述と重複か。

【215】国本・甲本、『緩草小言』以下の記述なし。

【14】『有家歌集』白妙ノソテフル○ヲ峯高ミ松浦ノ沖ノ遠ツ舟人。

○相分 「分」曼本「別」ニ作ル。

○夜来 「来」異本ナシ。

○欄 『和名抄』ニ、【216】『楊氏漢語抄』云、欄袷。須曾豆介乃古路毛トアリ。此義ヲ取テ本記印本ニハスソト訓ヲ付タルカ。

【216】国本、この下に『唐韵』云、欄形也トアリテ、訓ハナシ」とあるも、甲本なし。

○身人而沈沼底頭蛇臥沼壘 【217】此ハ弟日姫子ニ毎夜ニ通ヒシ蛇ノナリタル在状ナリ。文意詳ラカナラズ。

【217】○身人而沈沼底頭蛇臥沼壘の項目、国本なし。

○志努波羅能　ハ篠原乃ニテ地名。

○意登比売能古表　「表」曼本「素」ニ作ルハ如何アラン。弟日姫乃子乎ナリ。

○佐比登由母　真一夜母ナリ。

○為祢弓牟志太夜　荒木田氏曰、志太者節也。『万葉』(十四)ニ、阿抱思太毛。安波乃敝思太毛云云。於毛可多能。和須礼牟之太波云々。猶有物語詞云。左太過人。蓋左太者。志太之轉語乎トアル如ク率寝テム。時節ト云コトナリ。夜ハ助字【218】。

【218】「夜ハ助字。」国本・甲本なし。

○伊幣尔久太佐牟　家尔降之波為之ナリ。一首ノ意ハ、篠原村ノ愛シキ弟日姫子ヲ一夜ニテモ率テ寝シ時節ノアリシ事ナレバ、決シテ此人ヲタヽ、其家ニ遣ハセジ。必々コヽニテ共ニ死テ、来世マデ永ク夫婦ノ契リヲ結ントナリ。

○也　此ハ助字ナリ。然シカヽル処ニハナキゾ宜シキ。○此下ニ脱文アラン【219】。然ラサレバ下分ニ連続セズ。

【219】「○此下ニ脱文アラン。然ラサレバ下分ニ連続セズ」国本・甲本なし。

于レ時。弟日姫子之従女。走告ニ親族一。親族発レ衆昇而看レ之蛇并。弟日姫子並亡不レ存。於レ茲見ニ其沼底一。但有ニ人屍一。各謂ニ弟日女子之骨一。即就ニ此峯南一造レ墓治置。其墓見在。

下ノ親族　湯本ナシ。

○蛇并　「并」異本「並」ニ作ル。

○並亡　「並」異本ナシ。

○其沼　「其」曼本ナシ。

○日女　「女」上文「姫」ニ作ル【220】。

【220】国本、「女」上文ニ據ハ姫ノ誤リナリ」とし、甲本「女」上文ニヨレハ、「姫」ノ誤」とす。

○其墓見在　青柳氏曰、玉葛ノ穴トイフ者アリ。ソハ鏡社ノ南五丁許ニシテ、褶振山ノ西南ノ麓ニテ、官道ヨリ近ク、山ノ尾ニ丸岡アリ。

左右上下ハ畑ナリ。岡ノ上、土ヲ築テ三尺許ノ切石ヲスエタリ。石ノ西ニ穴アリ。ノゾキ見レバ内ハ六七尺ニ石ヲタミテ、ヨノツネノ冢ナリ。其穴石天井石ノ落タル者ナリ。此モ乱世ニ發セシ者ニテ、中ニハ一物モナシ。『風土記』ニ、山南ニ在トアルニ叶ヘリ。是弟日姫子カ冢ナルベシ。扱後ニハ『源氏物語』玉葛ノコトヲノミ傳ヘテ、弟日ノ事ハ、イトモ古キ事ナレバ、語傳ヘサルナルベシ。然レドモ素リ古ノ名アル女ノ冢トハ傳ヘケンヲ、傳會シテ玉葛冢ト傳ヘタルカ。後ニ冢ニ穴ノデキシヨリ、又冢ト云コトヲ失ヒテ、玉葛ノ穴ト云カ。伊藤氏曰、摺振峰ノ西北ノ出崎ニホジヨジノ松トテ、二株アリ。此ハ佐用姫今日弟日姫子ナラン。ノ墓ノシルシニ植タル松ニテ、ホジヨジハ墓所ト云コトナラン。又烽冢ノ音ヲ訛リテカク唱ヘタルカ。青柳翁ハ、望所ノ松ナラント云レシ。『書紀』ナドニ望ヲホセルト訓リ。此考モシタシク聞ユ。此松ノ在所ハ、少シ土ヲ築上デ冢ノ如クニセリ。

松浦縣。々東三十里。有^ニ帔搖岑^一。〈帔搖比礼府離。〉最頂有^レ沼。計可半町。俗傳云。昔者檜前天皇之世。遣^ニ大伴紗手彦^一。鎮^ニ任那国^一。于^レ時奉^レ命經^ニ過此處^一。於^レ是。篠原村。〈篠資農也。〉有^ニ娘子^一。名曰^ニ乙等比賣^一。容貌端正。孤為国色。紗手比古。便娉成^レ婚。離別之日。乙等比売。登^ニ望此岑^一。举^レ帔招。因以為^レ名。【221】

【221】底本、本文の下に小字で、

○栗田氏曰、『詞林采葉抄』ニハ、此文ヲ引テ、昔武少廣国押楯天皇世大伴ノ狭手彦連任那国静百济国ヲ清シカタメニ承勅比村ニ至テ即篠原村ニテ弟日姫子ヲ聘トシテ別去日鏡ヲ取テ婦ニ与フ。妾別レ悲テ玉島河ヲ渡ル時、彼鏡ヲ懷キテ川底ニ沈ヌ。コヽニ鏡ノ渡ト云トアリ。

又曰、『童蒙抄』ニハ、此紗手彦ノコト少シ。差ヒタリトモ見エタルハ本文ニ同シキヲ仮名ニ改メタルノミナリ。

という記述あるも、国本・甲本なし。

此条『仙覚万葉抄』オヨビ、『釈日本紀』等ニ、『肥前風土記』トテ引タリ。カヽル本モアリシニヤ。姑ク此處ニ附載ス。

○縣本居翁曰、縣ハ上リ田ニテ、朝廷ノ御料フ陸田物ヲ作りテ貢ル地ナルガ、其二准ヘテ諸国ニアル御料フ地ヲモ云。漢字ヲ用フル世ニナリテ、縣字ヲ当テ書ナラヒ、稍後ニハ必シモ御料フ地ナラネトモ、漢ニテ縣ト云ニ当ルホトノ地ヲハ縣ト云コトニナレルナリ。今

日此処ハ郡ト云ベキ所ナルニ、此字ヲ当たり。

○**縣東**「縣」異本「之」ニ作ル、ノ轉セシナラン。

○**三十里**此ハ郡家ヨリ起程【222】シテ許リシナルベシ。然レドモ此岑ヨリ西三十里、即チ今ノ道程三里ナレバ、**値賀村**【223】辺ニテ、偏僻ノ海岸ナレハ、郡家ヲオクベキ処ニアラズ。サレドモ外ニ考フベキタツキナシ。扱本文、鏡渡ヲ郡ノ北トシ、褶振峯ヲ郡ノ東トアルニ依テ考フルニ、郡家ハ今ノ久里村・鬼塚村ナドニハアラサリシカ。然レハ下ノ賀周里逢鹿駅等ノ方角モソレニテ能叶ヘリ。久里村・鬼塚村ハ打開ケタル地ニテ、往来ナドノ便リ宜キ所ナリ。然レドモ三十里トアルニ合ハズ。如シクハ十八衍ニテ三里ナランカ。然ルトキハ能叶ヘリ。此説イカ、アラン。後考ヲ待ツ。【224】

【222】「起程」国本は「程起」とす。

【223】「値賀村」国本は「刈屋村」とす。

【224】国本・甲本、この下に**破**という項目を立て、

○**破**上ニヒク『遊仙窟』ニ、複曰帳子トアレハ、帳ハ複ネタル領巾ナラント思ヘトモ、『楊子方言』ニ帛陳魏之間。謂之帳。マタ『類篇』ニ、帛関東人呼裙トアルニ由レハ、俗ニイフ前垂レノコトニテ、領巾ノ類ニハ非サルカ如クナレト、『三篇』ニ帛在肩背也。マタ『釈名』ニ、帛披也。披之肩背不及下也。マタ帛褙子也。省作背。以其覆肩背也。マタ「四時祭式」ニ、領巾ハ別ニアリテ帛字ノ旁ニ巾也。又云、被ウチカケト記シタルナトニ由ハ、領巾ニ似タル物ナル故ニ本文ニモ仮用ヒタルナラン。伴氏曰、帛ヲウチカケ、キヌ、ムシ、ナキリカフムリト訓ム。『夫木集』ニ、『歌林拾葉』ヲ引テ、夏深ミ、ムシノタレキヌ、結ヒアケテ、通りワツラフ、野ヘノ旅人トアルムシノタレキヌハ、『伊呂波字類抄』ニ、縹ムシ、女笠也トアル物ニテ古画ニ女ノ笠ニ肩ノアタリマテ絹ヲタレ回ラシ付タルカ多クアリ。是ナルヘシ。能登人ノ言ニ、寒ヲシノカン料ニ、手拭ヲ被ルコトヲ、ムシヲ被ルト云リ。何故ニサハ云ソト問タリケレハ、頭ヲ蒸シ暖ムレハナリト云リ。ソハ如何アラン。何レニテモ頭ニ被ルヲムシト云ルハ、此ノ所謂ルムシノ古言ノ遺レルナリ。『名義抄』ニ、帛ヲ、ワチカケ、キヌ、ムシトアルヲモ考フヘシ。『山家集』ニ、ミクマノ、アナユキコトハ、アラシカシ、ムシタレイタノ、運フアユミハ。『続世継』ニ、ムシタレタルハ、サマヨリヤミエケン。『新六帖』ニ、ムシタル、東少女カスキカケニナコリ覚エテ行ワカレヌル。(今日此モ領巾ニ似タル者ナレハ、借用ヒタルナラン)

と記す。この部分、底本は褶振峯の条の**褶**の項目に配置す。

○乙等比売【225】此ハ弟日姫子ヲ省キテ云ツルモノナリ。栗田氏曰、那古君ヲ『万葉緯』ニ字ハ那古君トアリ。狹手彦ノキテ行シ妾ノ名ナリ。『肥前風土記』ナル帔搖岑ノ条ト合見ルヘシ。此那古君ハ佐用姫ノコト、聞ユルヲ、『肥前風土記』ニ、乙等比売トアリ。何レヨシトモ定難ケレト、『万葉』ノ歌ニ依ハ、肥前ナル乙等比売ハ佐用姫ニテ此ナルハ、那古君ト云ナル。又一ノ妾ヲキテユケルナルヘシ。

【225】乙等比売の項目、国本は「此ハ弟日姫子ヲ訛リ傳ヘタル者ナラン」、甲本は「此ハ弟日姫子ヲ省キテ云ヒタルモノナリ」とす。

○因以為名 斎藤彦丸氏（江戸人）曰、大伴紗為彦ヲ唐ヘコトムケニ遣ハサレシコト、『書紀』ニアリ。妾佐用姫ワカレヲ惜ミテ、ヒレ振シコト『万葉』ニモ『肥前風土記』ニモアリ。（今日「風土記」ニハ、佐用姫ノ事ハナシ）夫ヲシタヒテ石ト成シコトハ抛ナシ。案スルニ、「風土記」ニ、挙帔招因以為名トアルハ、帔ヲ挙テフリシ故ニ、其山ヲ帔振峰ト号シ由ナリ。為名トイフ二字ヲ為石ト見誤リ、慕夫石ノ故事ヲ作りシナルベシ。今日此考宜シ【226】。因テ本文ノ石字ヲ名ト改メツ。慕夫石ノコトハ『述異記』・『世説』・『神異怪』・『大明一統志』・『五雜俎』等ニ見エタリ。

【226】「今日此考宜シ」以下の記述、国本なし。

賀周里。〈在二郡西北一〉。

昔者。此里有二土蜘蛛一。名曰二海松樞媛一。纏向日代宮御宇天皇。巡国之時。遣二陪從大屋田子一〈日下部君等祖也〉。誅滅時。霞四含不レ見物色。因曰二霞里一。今謂二賀周里一訛之也。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○海松樞媛 唐津村大字見貸^{ミルカシ}アリ。此媛此地ニ住ミ地ノ名ヲ其名ニ負ヒタルナラン。扱見貸^{ミルカシ}ト賀周トハ、接近ノ地ナラン。此辺リ古ノ官道ナリ。『松浦廟宮本縁起』ニ、吉備真備云々。以天平勝宝六年。拜任太宰都督。即經奏聞。定行廟宮春秋二季千卷金剛般若説經。并最勝會。弥勒會等。其科買取大領田十五町。施入（在当郡見留加志之莊是也）トアリ【227】。

【227】国本、この下に「是二田ハ此時已ニ見貸ニ復シタリト知ラル」という記述あり。

○巡国 「国」異本「狩」ニ作ル。

○**大屋田子**此人、弟日姫子ト同姓ナルニ付テ考フレハ【228】、其一族ニテ此辺ニ住メル者ナリナラン。(○『和名抄』ニ、養父郡屋田アリ。此ニ由アル人ニハ非サルカ)

【228】国本、以下の部分「此人此時ノマ、此地ニスミ、其子孫等ノ篠原村ニアリテ富ミ榮エタリシ故ニ、今ニ長者トハ云ナラン。偕其家ノ女ナレハ、狭手彦カ娉セシナルヘシトニ從女發衆ナトアルヲ見テモ思フヘシ。」、甲本は「此邊ニスミテ富榮エル家ナリケン」とす。

○**訛之**「之」湯本ナシ。○「兵部式」ニ、駟馬賀周五疋トアリ。此頃ハ駟ニテアリシナリ。此地名、今ハナシ。近古平戸港ヲ廢シ、長崎港ヲ開キシヨリ、此辺ノ道モ廢レ駟モ絶ニケン【229】。

【229】国本、この下に「偕上ニ引ク『松浦廟宮本縁起』ニヨレハ、天平勝宝六年ノ頃、已ニ見留加志ノ号アリシニ、此ニ又賀周トアルハ疑フヘシ。地ニ兩名アルカ。又ハ見貸ト賀周トハ接近ノ地ニテ、一村ノ如クアリシカ。但今ハ賀周ト云地ハナシ」という記述あり。底本・甲本なし。

逢鹿驛。(在ニ郡西北。)

曩者。氣長足姫尊。欲レ征ニ伐新羅。行幸之時。於ニ此道路一有レ鹿遇之。因名ニ遇鹿驛。々東海。有ニ蛇。螺。鯛。海藻。海松等。

曩者異本「往昔」ニ作ル。

○**遇鹿驛**【230】「兵部式」ニ、駟馬逢鹿五疋トアリ。『元禄図』ニ、相賀村○今日湊村大字相賀アリ。是ナリ。逢鹿ハ見貸ヨリ二里餘リ。マタ逢鹿ヨリ登望マテ二里餘ナリ。旧藩ノ時ハ、此処ニ遠見番所アリシトゾ。村内ニ相賀崎アリ。海上二十五丁ヲ阻テ神集島ト相對ス。

【230】○**遇鹿驛**の項目、国本・甲本なし。

○**蛇**『康熙字典』ニ、『後漢書』伏隆傳注。蝮似蛤偏著。石廬志蝮無鱗有殼。一面附石。細孔離々。或七或九。『集韻』ニ、會一說。石決明藥旁有七空者良。マタ蛇直音白交切。『字彙補』音瓢義未詳トアリテ蝮ト蛇トハ異物ナリ。『本草綱目』ニモ、蝮・蛇同物ノ明文ナシ。『新撰字鏡』ニ、蝮伊加トアルハ奇シ。『箋註和名抄』ニ、『四声字苑』云、蝮(蒲角反与電同【231】。今案一音『伏見本草音義』○按蒲角反与。『廣韻』合而『本草和名』引、仁謂音蒲角反。不載伏音則。此似当云音伏。今案一音蒲角反与電同。見本音義)魚名。似蛤偏着。石。肉乾可食出青州海中矣。(○

按『説文』鰻魚名『後漢書』伏隆傳注引郭璞注三蒼云、鰻似蛤偏着石。『四声字苑』盖本於此『本草』云、生南海今注云、石決明生『廣州海畔図経』云、今出膠州膠人言鰻生海水中乱石上一面附石取者。必泗水持鉄鏟。入鏟驟觸鰻。不及覺。則可得一再觸。則粘石上。雖星碎其殼。亦膠結不脱。』『本草』云、鰻一名鰻。鰻（音均阿波比。○『千金翼方』・『証類本草』上品有鮑魚不載一名。按『説文』【232】、鮑鰻魚也。『史記』秦始皇帝崩。秘之棺。載輻涼車中會暑臭載鮑魚以乱之者。非阿波比。『千金翼方』『証類本草』上品有石決。明陶隱居云、是鰻魚甲。『本草和名』云、和名、阿波比為允。按有誤以鮑為鰻為鰻者。『医心方』石決明条引『崔禹食経』云、鰻為眞。或作鮑。亦為誤。『江鄰義雜志』云、鰻魚又詭作鮑非也。『五雜俎』云、鰻音撲入声。今人詭作鮑非也。『香祖筆記』云、鰻魚產青菜海上。今京師以此物。饒遣率作鮑魚。則詭為秦始皇輻涼車中物。可笑皇國。俗有作鮑者。『新撰字鏡』云、鰻。阿波比。『伊呂波字類抄』云、鮑鰻俗同是也。今俗亦用是字輔仁。既訓石決明為阿波比。又以有作鮑者誤認。『本草』鮑魚為鰻。魚亦訓為阿波比。源君襲其誤混鮑鰻為一。遂言鮑魚。一名鰻魚。其實『本草』鮑魚鰻魚。鰻魚迥別無有所引文）

『崔禹食経』云、石決明（和名同上。○訓阿波比。依輔仁【233】）食之心目聡了。亦附石生故以名之。（○『本草和名』【234】引、故以名之作。故名決明。『医心方』引、作食之利。九竅心目聡了。故有決明之名。亦附石生。故呼石決明耳。文義更詳明案。『本草』云、石決明主目障翳痛青盲。陶注、是鰻魚甲附。石生与此義同）マタ『新撰字鏡』ニ、鰻。阿波比。蛤。於不。又。阿波比。阿波比。万氏。又阿波比トアリテ、大同小異ノ物ト見ユ。『東雅』ニ、『本草』ニ、石決明。一名鰻玉トミエテ、『図経』ニハ、鰻與決明相近也トミエ、『東壁本草』ニ、石決明。形長如小蚌。而扁。鰻魚ナド見エタリ。此等ノ説ニヨルニ、鰻ハ今云アハヒ、決明ハ今云トコアシト見エシヲ、古ニハ凡テアハヒト云シト見エタリ。案スルニ、鮑字ハ、モト鮑魚ナルヲ、鰻ノ一名トセシハ、『和名抄』ニ、引用ヒシ所ハ何レノ『本草』ニヤアリヌラン。『陳藏器本草』ニ、鈔魚。一名鮫。一名鰻ト云シヲハ、『通雅』・『正字通』并ニ其非ヲ辨シタリキ。『和名抄』ニモ、『藏器本草』ヲ用ヒシコト、モ見エタレバ、『藏器』當時傳ヘシ所ノ『本草』ニ、鮫或ハ鮑ニヤ作りタルラン。谷川氏曰、アハヒ。上総ニ、カヒツケト云貝ツキナルベシ。蝦夷ニアヒヒト云、其肉アハ、シクテ、乾テノ用多ケレバ名クルナルベシ。『和名抄』ニ、『本草』ヲ引テ、鮑トモ見エタレド、鮑ハ漬魚ナレバ訝シ。『訓蒙字彙』ニ、殻ヲ石決明トイヒ、実ヲ鮑魚トイフニヨレバ、朝鮮ノ方言ナルベシ。（今日『海東諸国記』ニ、全鮑一百五十介トアリ。考合スベシ）ナド、精シキ論ヒアレドモ、皇国ニテハ鰻ト鰻トヲ同物ニシテ、アハヒト呼慣ヘリ。『本草綱目啓蒙』【235】ニ、石決。アハヒ。一名朱子房懷寄令史海蚌殼。石厥明トコブシハ鰻魚ナリ。陶弘景蘇恭ハ、石決明、鰻魚ヲ以テ一物トス非ナリ。蘇頌・李時珍ハ、兩種二類トス可ナリ。『蝦夷志』ニ、鰻魚。石決明。一類。兩種。其形小大。亦自不同。或以石決明。為鰻魚疑非。○今日徳川幕府支那貿易物ノ内ニ、乾鰻煎海鼠鯉節アリ。其出所ノ地名中ニ、大村・島原・五島・平戸・佐嘉・唐津ヲノス。「明治廿四年ノ調」ニ、佐賀縣乾鮑

百三十八貫トアリ。

【231】「蒲角反与電同……今案一音蒲角反与電同見本音義」 国本なし。

【232】「○按『説文』……其実『本草』鮑魚鰻魚。鰻魚迥別無有所引文」 国本なし。

【233】「○訓阿波比。依輔仁」 国本なし。

【234】「○『本草和名』引……陶注、是鰻魚甲附。石生与此義同」 国本なし。

【235】『本草綱目啓蒙』以下の記述、国本なし。

○**螺**『箋註和名抄』【236】ニ、『崔禹食経』云、榮螺子（佐々衣。○下総本作「佐大衣」。伊勢廣本同。『本草和名』榮螺子在甲贏子条下別無。和名）似蛤而

円者也。（○按『本草和名』甲贏子条、下云榮螺子胡垺反板螺性味。相似一名鮓呼甘反。似蛤而円出崔。按鮓即下条所載鮓。故云似蛤而円榮螺子板。螺雖未詳。然二物以螺名。則非蛤類可知也。蓋『本草和名』一名上傳写其誤字。蓋源君所見本亦脱。故誤以鮓為榮螺子之一名。遂以似蛤而円形榮螺子也。榮螺子於他書無見。其形不能詳。『本草和名』亦不載。和名源君定為佐左衣当以甲贏子衣。充前条詳之。嶧山君『寧波府志』舉螺可以充佐左衣也）本居翁曰、細螺シタ、ミナリ。『和名抄』ニ云々【237】。

『万葉』ニ、机之島能小螺乎。伊拾持来而石以都追伎破夫利。「大嘗祭式」ニ、細螺二十柑トアリ。『伊呂波字類抄』ニハ、小卒螺（ニシ）。蓼螺子（同。○今日、同書ニ小贏子シタ、シ。細螺同玉蓋シタ、ミノフタトモアリ）『拾遺集』ニ、東ニテ、アヤシナハレタル、人ノ子ハ、シタ、ミテコソ、物ハイヒケン。谷川氏曰、細螺ハ吐覗ヲツダミト云ニトレバ、舌吐ノ意ナルベシ。今キシヤゴ、又チンヤゴト云者ナリ。玉蓋ハ『本草』ニ、相思子トイヘル物ニテ、今俗ニ酣貝トイヘリ。或曰、シタ、ミハ榮螺ノ如クニシテ角ナキ物ナリ。シヤコトハ異ナリ。荒木田氏曰、志摩ニテ今モシタ、ミト云。尻高トモ云リ。フクダミト云者アリ。此名ト合セテ思フニ、シタ、ミハ此類ノ総名力。

【236】『箋註和名抄』ニ……『寧波府志』舉螺可以充佐左衣也」 国本なし。

【237】国本、この下に「崔禹錫食経」云、小贏子貌似甲贏而細小口。有玉蓋者也。『楊氏漢語抄』云、細螺之太々美。又玉蓋和名之太々美乃不太」という記述あり。

○**鯛**『箋註和名抄』【238】ニ、『崔禹食経』云、鯛（都条反多比。○『本草和名』『新撰字鏡』『万葉集』同訓。『新撰字鏡』鱧又訓太比）味甘冷無毒。貌似鯽而紅鰭者也。（○『医心方』引無毒下猶有若干字紅鰭下有堅鱗二字無者也。『説文』鯛骨端脆也。非此義。『玉篇』『廣韵』並云魚名。是蓋崔氏所云者。又案崔氏狀鯛云。似鯽而紅鱗。其為太比無疑。西土後世所謂棘鰭。即是閩中海。錯疏棘鰭似鯽而大其鰭如棘紅。紫嶺表録異名古鰭。泉州謂之髻鰭。又名奇鰭）トアリ。本居翁曰、「仲

哀紀」ニ、海鯽魚トアルト、『和名抄』ニ、海鯽魚、知奴トアルヲ合セテ見レバ、赤海鯽魚ハ鯛ナルコト決シ。知奴ハ鯛ト色灰^ク色^ロキ物ニテ、黒鯛ノ類ナリ。『和名抄』ニ、知奴ト久呂多比トハ別ナレド遠カラヌ物ナリ。常ノ鯛ハ、知奴ト形全ク同クテ、色赤キ故ニ、赤海鯽魚ト書ルナリ。「仲哀紀」ナルハ、色ノ赤キ黒キヲ一ニシテ、海鯽魚ヲ鯛ニ當タル者ナリ【239】。

【238】『箋註和名抄』ニ……又名奇鬣トアリ」 国本なし。

【239】 国本、この下に「鯛ハ『和名抄』ニハ『崔禹錫食經』云、鯛味甘冷無毒。貌似鯽而紅鰭者也。和名、多比ト見エ、鏡ニモ鯛、太比トアリ。『東雅』

ニ鯛、古ハアカメト云シヲ、後ニハタヒト云シナリ。アカメト云シハ、即赤鯛也。メトハ古ノ俗禽魚類ヲ呼シコトハ、三韓ノ方言ニ依ルト見エタリ」とあり。

○海藻【240】『古今要覽稿』四百六十四見ルベシ。

【240】『海藻』の項目、国本・甲本なし。

○海松『箋註和名抄』ニ、『崔禹食經』云、水松（美流。『楊氏漢語抄』【241】云、海松式文用之。○美流見『万葉』『本草和名』水松引陶在海藻条別無和名。海

松見、延喜臨時大嘗祭・凶書寮・玄蕃寮・民部省・主計寮・大藏省・宮内省・大膳職・内膳司・主膳監等式。又見「賦役令」『万葉』・廣本・式文、作「俗」）状如松而無葉者也。○廣本無「者也」二字。按『証類本草』海藻条引陶隱居云、又有水松状如。松崔氏盖本之。マタ『伊呂波字類抄』ニ、海松。

（ミル）水松同。（○似松無葉也）マタ『万葉集』ニ、深海松。俣海松。（○或曰、海松ハミルニ非ス）『土佐日記』ニ、オホツカナケフハ子ノ日カアマナラハ海松（○或曰、黒珊瑚ノ類）ヲタニヒカマシモノヲ『躬恒集』ニ、玉匣フタミノ浦ニスムアマノワタラヒ草ハ海松ナリケリ。『続古今集』ニ、動キナキ、イハホニネサス、海松ノ。チトセヲ誰ニ、波ノヨスラン。『夫木集』ニ、ナタノ浦ノ、シホニナツサフ、海松ヲ、ミキハノ波ソ、年ハコエケル。遥ナル、子ノ日カサキニ、スムアマハ、海松ヲノミ、引ヤヨスラン。波ノ上ニ、ヨルベヲタトル、ウキミルノ、ウキコトシラテ、過スヨモカナ。ナドアリ。【242】

【241】『楊氏漢語抄』云……按『証類本草』海藻条引陶隱居云、又有水松状如。松崔氏盖本之」 国本なし。

【242】 国本、この下の記述、

○「兵部式」ニ、駅馬逢鹿五疋トアリ。『元禄図』ニ相賀村アリ。是ナリ。逢鹿ハ見貸村ヨリ二里餘リナリ。此登望村マテ二里餘リナリ。（旧藩ノ時ハ此処ニ遠見番所アリシトソ）

という記述あり。この武部分、甲本は、

○「兵部式」ニ、驛馬逢鹿五疋トアリ。『元禄図』ニ、相賀村（湊村大字相賀）アリ。是ナリ。逢鹿ハ見貸ヨリ二里餘リナリ。逢鹿ヨリ登望マテ二里餘リナリ。（旧藩ノ時ハ逢鹿村ニ遠見番所アリシトソ。本村ニ相賀崎アリ。海上二十五丁ヲ阻テ神集島ト相對ス）とす。

登望驛。〈在二郡西一〉。

昔者。氣長足姫尊。到_レ於_二此_一處_一。留_レ為_二雄_一装_一。御臂之韞。落_レ於_二此_一村_一。因号_二韞_一驛_一。々東西之海。

有_二炮_一。螺。鯛。雜魚。海藻。海松等_一。

異本、此一條ナシ。

○昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○到_レ於_二「於」曼本ナシ。

○雄装 英彦山神社（豊前）ニ、神功皇后ノ二面兜トイフモノアリトテ、其状ヲ板ニ彫リ摺物ニシテ世ニ播ス者アリ。（○余モ見シコトアリ）此ハ婦人ニマセハ、征韓ノトキ彼国人等力見奉リテ畏コマザラン。故ニ大丈夫ノ御装ヲナシマシ、物ナリトソ。此モ雄装ノ一ナリ。（筑後人船曳鉄門氏曰、此兜モトハ高良神社ニアリシヲ、天正中竜造寺氏、カノ座主僧ト戦シトキ、之ヲ分捕シテ英彦山神社ニ奉納セシトソ。今日此事云傳ヘタル事モ曾テナシ）三善清行カ「異見封事」ニ、本朝戎器強弩為神云々。『古語相傳』云、此器。神功皇后。奇巧妙思別所製作也。故大唐雖有弩名。曾不如此器之勁利也。江戸人春田永年氏曰【243】、『書紀』ニ載ル所ノ高麗貢獻スル弩ハ隋ノ物ニテ、大友皇子弩ヲ列シ、乱発シ矢下ル雨ノ如シト云ハ、国制ナルヘシ。マタ『北窓瑣談』ニ、河内国坪井宮ノ社務多田修理【244】。古器物ヲ多ク所持セリ。神功皇后ノ鉾モアリ。其鉾長刀ノ如クニシテ、ヒジ坪ノ如キ金物アリテ、柄ノ旁ニ身ヲ付タル者ナリ。【245】今日全モサル物ヲ見シコトアリ。『古今要覧稿』ニ、筑紫長刀ト云ハ、何人ノ作り初タル者ニヤ。タシカニ記セシ者モ見エス。河内壺井八幡ニ、神功皇后ノ御物ナリトテ傳ル者ヲ、或人見テ当麻ノ行事ニヤアルヘキト云レハ、筑紫鍛冶ニ限リテ作レルカ。故ニモマジキナリ。辻山城力家ニ、先祖左近太郎政貞カ持タル者ト

テ有ハ、櫛ヲ容ル、処フタツアリテ、形大ニ異ナリト雖、ソノ筑紫長刀ト云傳タレハ、同物ナルベシ。或ハ長刀ヨリ短クテ、此方アルヲ手梓ト云トアルハ〇〇藏ノ者ノ如キ云ルニヤ。『本朝軍器考』云、筑紫長刀ト云物ハ、其制少シク異ナルナリ。此モ古ヨリアル物ニヤ。詳カナルコトハ知ズ。『伊勢平藏考武器』云、辻山城家藏先祖辻左近之代ヨリ持来ル由、筑紫長刀、長サ五尺八寸、内身ノ込ニ入コト九寸ニツノ込ニ入所少シ。平削リ。鉄ノ目釘ヲ打。目釘ノ裏ノ餘リ、打返シテアリ。上ノ込ヨリ上へ柄一寸許餘リ出ル柄ハ櫛木ナリ。小笠原家書云、長刀ヨリ短ウノクビ有之ハ、手ホコト云。此等ノ物、ミナ征韓ノ時ノ製ナラン。

【243】「江戸人春田永年氏曰、『書紀』ニ載ル所ノ高麗貢獻スル弩ハ隋ノ物ニテ、大友皇子弩ヲ列シ、乱発シ矢下ル雨ノ如シト云ハ、国制ナルヘシ」国本・甲本なし。

【244】底本「修理」の右傍に「〇下ニアリ」とあり、頭注に、

△下ニアリ

貞幹

大和国天安寺八幡宮ニ、神功皇后ノ矢トイフモノアリト云。

と記す。

【245】国本、以下の記述なし。代わりに「(今日此物ヲ二三ミタルコトト云アリ。或曰、俗ニ之ヲ筑紫薙カトソ)」とあり。この部分、甲本は分注で「(今日此ニ似タル物ヲ余モ見シコトアリ)」と記す。

○鞆

『古事記』(神世)ニ、伊都之竹鞆。本居翁曰、「大神宮式」ニ、鞆二十四枚。(以鹿皮縫之胡粉。塗以墨画之納。檜麻箭二合経一尺六寸五分。深一尺四寸。着緒一処。用紫草。長各一尺七寸。廣二分)「兵庫寮式」ニ、熊草一條。鞆料。(長九寸。廣五寸)牛革一條。鞆手料。(長五寸。廣二寸)トミユ。此ハ天皇御射ノ料ナリ。『万葉』ニ、丈夫乃。鞆乃音為奈利トヨメリ。師云、鞆ハ射ルニ左臂ニ着ルモノニシテ、形ハ『吉部秘訓抄』ニモ見エ、着タル様ハ古画ニミユトイヘリ。何ノ料ニ着ルモノソト云ニ、古歌ナドニモ鞆ニハ、ミナ音ヲイヘルヲ思ヘバ、此物ニ弓弦ノフレテ鳴ル音ヲ、高カラシメン為ナリ。音ヲ以テ威スコト、鳴鏑ナドモ同シ。此物ヲ作ルヲハ、張トイヒシニヤ。『続紀』ニ、其工人ヲ鞆張トイヘリ。抑鞆ハ音物ノ省リタル名ニテ、高鞆ハ高音物ナリ。栗田氏曰【246】、伴信友ノ鞆ノコトヲ云ルヲ見タルコトアリ。ソレニハ鞆ハ左手ニ巻テ、其高キトコロ臂ノ内方ニアリテ、弦ニサワリテ音ヲ発スベキ為ナリト云リ。此ハ『吉部秘訓』ノ図トハ違ヒタレ

バ、『秘訓』ニハ臂ノ外辺ニ軀ヲツケタリ。イカ、ト思ヘリシニ、友人大沢清臣カ上野ニユキテ、古墓中ニ土偶人ノ左手ニ軀ヲツケタルヲ得テ、写シ贈リタルヲ見テ、始テ疑團氷釈シ、信友ノ考ノ、実ニアタレル事ヲ知リヌ。今日上ニ引ク賀茂氏ノ説【247】ハ、栗田氏ハ未タ知ラサリシニヤ。『古今要覽稿』軀条合考ヘシ【15】。○「兵部式」ニ、馭馬登望駅五疋トアリ。呼子村ニ、大字大友・小友アリ。是ナリ。（明治十七年三月工部省ノ布達ニ、佐賀縣下肥前国東松浦郡小友村ヨリ長崎縣下壱岐国石田郡郷ノ浦、同縣下對馬国下縣郡嚴原小茂田村ヲ經テ、朝鮮国釜山浦ヘ海底電信線設置候条、別紙図面ニ記載ノ距離内ニ於テ、艀艦投錨漁業採藻等之ヲ禁止ストアリ此処ノ事ナリ）

【246】「栗田氏曰……『古今要覽稿』軀条合考ヘシ。」国本なし。甲本は『古今要覽稿』軀条合考ヘシ」という記述なし。

【247】「今日上ニ引ク賀茂氏ノ説……『古今要覽稿』軀条合考ヘシ」甲本なし。

【15】『古今要覽稿』丸木条

『本朝軍器考』云、今モ世ニ遺レル物ハ大和国大安寺八幡宮ノ神宝ニ、神功皇后ト云モノハ、ソノ長サ七尺許云々。多羅樹ノ御号トイヒツタヘテ、終ニ多羅樹ノ枝ニテ作リシモノナムナト云説モイデキシナリ。△―

大家島。〈在ニ郡西一〉。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡幸之時。此村有ニ土蜘蛛一。名曰ニ大身一。拒ニ皇命一不肯ニ降伏一。天皇勅命誅滅。自レ尔以来。白水郎等。就レ於ニ此島一。造レ宅居之。因曰ニ大家島一。々南有レ窟。有ニ鐘乳及木蘭一。廻縁之海。蛸。螺。鯛。雜魚。及海藻。海松多之。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○名曰 一曰 湯本ナシ。

○白水郎 【248】 漁人ナリ。

【248】 国本、以下の部分『和名抄』ニ、辨色立成云、白水郎、和名阿万。今按『日本紀』云、用漁人二字。一云用漁人二字トアリ」とす。

○大家島 或曰、平戸近旁ニ大家トイフ島アリ。ソレカ。或曰、平戸近旁ニ大島ト云アリ。ソレナラン。或曰、名子屋村ニ大字馬渡島ア

リ。ソレナラン【249】。

【249】「或曰、名子屋村ニ大字馬渡島アリ。ソレナラン」国本なし。甲本、この記述あり。なお、甲本この下に分注で「（今日郡西トアルニヨレハ、北郡ニアルヘシ。然レトモ未タ考ヘス）」と記すも抹消す。

○鍾乳『箋註和名抄』ニ、『新抄本草』云、石鍾乳。和名以之乃知。『三代実録』貞観元年二月【250】。於備中国。採石鍾乳時玆曰、石之津気。鍾衆成乳滴。溜成石。故名石鍾乳。呉普云、鍾乳一名霊中生。山谷陰処岸下。溜汁成如乳汁。黄白色空中相通。陶註云、通輕薄如鶯翎管。碎之如爪。甲中無雁齒。光明者為善。長挺乃有一二尺者。色黄以苦酒洗刷。則白。蘇註云、陶云、鍾乳一二尺者。謬説。『本草図経』云、長者六七寸。色白微紅。マタ『本草綱目』（薬名同名）ニ、石花瑠枝葉鳥蘇鍾乳石汁。石鍾乳（本經上品）『釈名』留公乳（『別録』。霊中（『呉普』。蘆石（『別録』。鶯管石（『細目』。夏石（『別録』。黄石沙（『薬性』。時玆曰云々【251】。（上ニ引ク）ソノ『啓蒙』ニ、石鍾乳ツラ、イシ。イシノツラ、イシノヨダレ。イシノチ、【252】。一名公乳【253】。石乳【254】。滴乳石【255】。山中洞穴ノ中ニ生ス。乳水滴リ垂凝テ氷柱ノ形ノ如シ。大小アリ。大ナル者ハ柱ノ如ク臼ノ如シ。小ナル者ハ筆管ノ如シ。白色或ハ黄色ヲ帶、赤色ヲ帶ルアリ。透明ニシテ馬腦ノ如キヲ上トス。中空ク管ノ如キアリ。中実スル者アリ。中空ナル者ヲ鶯管石ト云。

【250】『三代ノ実録』貞観元年二月……『本草図経』云、長者六七寸。色白微紅』の部分、国本なし。

【251】「云々」の部分、国本は「石之津気鍾衆成乳滴溜成石。故名石鍾乳蘆石鶯管象。其空中之也。普曰生大山谷陰処岸下溜汁所成如乳汁。黄白色空中相通二月三月采陰乾」とあるも、甲本この部分を傍点にて抹消す。

【252】国本、この下に「（○土州）」とあり。底本・甲本なし、

【253】国本、この下に「『事物異名』」とあり。底本・甲本なし。

【254】国本、この下に「『証治準繩』」とあり。底本・甲本なし。

【255】国本、この下に「（外科正宗）」とあり。底本・甲本なし。

○木蘭『和名抄』ニ、『本草』云、木蘭一名林蘭（毛久良迹）。【256】マタ『本草綱目啓蒙』ニ、木蘭モクレンゲ。シモクレン。一名生庭（『名物法言』。女郎花（『粧樓記』。庭院ニ多ク栽叢生ス。木高サ八九尺。葉大ニシテ、柿葉ノ如ク末廣シ。長サ七八寸。光沢アリ。春新葉ヲ互生シ、初夏枝上コトニ一花ヲ開ク。七八辨。形蓮ノ如ク。辨狭クシテ、外ハ深紫色内ハ白色微紫香氣アリテ、瑞香ノ如シ。中二寸許

ノ心アリ。形筆頭ノ如ク。紫刺乱布ス。『汝南圃史』ニ、如小浮屠ト云。周辺ニ黄薤アリ。唐山ニハ白花。黄色モアリト云。

【256】 甲本、底本に同じ。国本、以下の記述なくして、代わりに、

マタ『伊呂波字類抄』ニ、木蘭（モクラン）、林蘭（同）ナトアリテ、和名詳ラカナラス。『令義解』ニ、木蘭者。黄櫨也。マタ同シ『釈名』ニ、木蘭者。

黄櫨葡萄等色。是尺似緑而鈍不明也。マタ『釈氏要覧』ニ、律有三種。壞色謂青黒木蘭。マタ『一夕抄』ニ、木蘭。即樹皮苾芻。マタ『六物図』ニ、木

蘭皮染赤黒色ナトアルニ由ハ、染用ノ具ナルコト明シ。尚『本草綱目』同啓蒙等ニ詳論アリ。「典藥寮式」ニ、諸國進年料。雜藥太宰府十一種云々。木

蘭皮百五十斤トアリ。物産ナレハ、此所ヨリモ進ツリシラン

という記述あり。

肥前風土記纂註

下

値嘉島。〈在二郡西南之海中一。有二烽冢三所一。〉

昔者。同天皇巡幸之時。在二志式島之行宮一。御覽西海一。々中有レ島。烟氣多覆。勅遣二陪從阿曇連百足一。令レ察レ之。島有二八十餘一。就中二島。々別有レ人。第一島名。小近。土蜘蛛大耳居レ之。第二島名大近。土蜘蛛垂耳居。自餘之島。並人不レ在。於茲百足。獲二大耳等一。奏聞。天皇勅且レ令二誅殺一。時大耳等叩頭陳聞曰。大耳等之罪。実當二極刑一。雖レ被二戮殺一。不レ足レ塞レ罪。若降二恩情一。得二再生一者。奉レ造二御贄一。恒貢二御膳一。即取二木皮一。作二長炮。鞭炮。短炮。陰炮。羽割炮等之樣一。獻レ於二御所一。

〔『新日本紀』十五【257】ニ、値嘉島。血鹿島。肥前国也。彼国有値嘉郷。案風土記曰。更勅云。此島雖遠猶見如近。可謂近島。因曰値嘉島。或有一百餘近島。或有八十餘近島。〕

【257】『新日本紀』十五以下の記述、国本・甲本なし。

値嘉島「島」曼本「郷」ニ作ル。小値嘉ニテ【258】『和名抄』ナル値賀郷ナラン【259】。

【258】底本、「スコシ大キニカリヘレ」の傍書あり。文意不明により削る。

【259】「小値嘉ニテ『和名抄』ナル値賀郷ナラン」国本なし。

○烽冢「冢」印本「家」ニ作ル。荒木田氏ハ疑冢誤乎トイヒ、湯本「冢」ニ作ルニ拠テ改ム。冢ノ所在詳カナラズ。

○昔者異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○志式島【16】「神名式」ニ、肥前国松浦郡小志々伎神社トアリ。（○『三代実録』貞観二年二月ニ、進肥前國從五位下志々伎神從五位上。マタ「志々伎文書」ニ、当國廳宣併志自支見在無実可令住進之由。被院宣畢云々。弘安七年十一月十八日。大宮司源家秀ナトアリ。是ナリ）現今縣在北郡志式村ニアリ。伊藤氏曰、『図書編』（日本国図）ニ、志々岐平戸津トアル。志岐ハ、此島ノコトナリ。志々岐山トイフ。又五竜山ト云モ、此山ノ事ナリ。○明

治十年四月、工部省ノ布達ニ、伏瀬村、礁標、肥前平戸島、南岬ノ南東、並ニ平戸海峡、南口ノ南、凡六里ノ位置ニアリ。平戸島ノ南端ナル志自伎山ノ嶺ハ、北三拾二度拾五分。西黒島ノ西端ナル大樹ハ北四拾度拾五分。東右ハ諫礁ヨリ起算セル眞方位ナリ。平戸島ハ、周廻凡四拾三里二拾間、東北ヨリ西南ニ横タハリ、南北ニ長ク、東西二里十二丁、南北七里三十丁。人家三千七百、港口ハ東西四丁、南北一丁半、深三仞、南ニ向ヘリ。其西南ニ、志自伎山アリ。山ノ一角、海ニ斗出スル者ヲ、志自伎ノ鼻トイフ。此処西海ヲ御覽スルニ、甚善キ所ナレハ、行宮ヲ置マシ、ナラン。平戸ヨリ浦志々伎マテ七里十丁。

〔16〕青柳氏曰、近島海鮑鰯多シ。海人ミナ男子ニシテ、ヨク潜ス。此郡ノ海人ノ了ハ『魏志』倭人伝ニ、末盧国有四千餘戸。浜山海居草木茂盛行不見前。人好捕魚鰯。水無威皆沈取之ナトミエタリ。

○勅遣「遣」竈本・曼本ナシ。

○阿曇連百足〔260〕『古事記』（神世）ニ、三柱綿見神者。阿曇連等之祖神。以伊都久神也。故阿曇連等。其綿津見神之子。宇都志日金折命之子孫也トアリ〔261〕。（栗田氏曰、『記伝』ニ、高橋朝臣ト阿曇連ト世々御膳ノ事ニ與ル。考フルニ、『肥前風土記』松浦郡值嘉島ノ下云々。〈今日本文ナリ〉連百足ナルニ御膳ヲ造奉リテ、御膳貢ラント云ルニ依シソ信ヒヨリソ高橋朝臣ト並ヒテ膳職ニ仕奉リ、高シ事モ亦推シテ、田ヲ阿曇連ハイカナル由トモ物ニ見エストアルヲ、己レトアルヲ思フヘシ。此時島人ノ俗ヲミソタルハ阿曇テ罪赦サレシヤハ阿曇連百足ヲシテ其御物ヲ掌ラ橋ハ志摩ノ御膳ヲ奉リ阿曇ハ值嘉島ノ御膳ヲ知リケ知ルベキナリ）

〔260〕以下の部分、国本なし。代わりに『姓氏録』（河内神別）ニ、安曇連綿積神児高見命之後也。マタ（未定雑姓）安曇連于都斯日金折（此三字、印本「奈賀」ニ作ル。『古事記』ニ拠テ改ム）命之後也ナトアリ。百足ハ何レノ氏人ニカ詳カナラス。『播磨風土記』ニ、難波長柄豊前天皇ノ世云々。阿曇連百足トアリ。同名異人ナリ」とあり。

〔261〕底本、この下の「百足ハ此ノ氏人ナラン」を傍点にて抹消す。

○令察「令」上、竈本・曼本「遣」字アリ。

○中二島々「島々」二字、異本「処」ニ作ル。

○小近大近『古事記』（神世）ニ、知訶島名。謂天之忍男トアリ。此ハ大近小近何レノ中ナラン。小近ハ北郡ニ遠值嘉島^{ヲチカ}アリ。是ナラン。大近ハ、南郡ニ宇久・中通・奈留・久賀・福江ノ五島アリ。是ナラン。『日本紀』（敏達天皇十二年十月）ニ、恩率参官副罷國時云々。発途於血鹿。マタ（天武天皇四年四月）三位麻績王。有罪云々。一子流血鹿島。マタ（六年五月）新羅人阿食朴刺破從人三口僧三人。漂着於血鹿

島。マタ『統紀』(天平十二年十一月)二、大將軍東人等言云々。捕獲賊廣嗣。於肥前國松浦郡值嘉島。長野村云々。申云。廣嗣之船。從知駕島去。遂着等保知駕島。(○大近)色都島矣。マタ『後紀』(延曆二十四年六月)二、遣唐使第一船。到泊對馬國。下縣郡大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上奏言。臣葛野麻呂等。去年七月六日。發從肥前國松浦郡田浦。(○南郡)四船入海云々。遣唐使第二船。判官正六位上管原朝臣清公。未到肥前國松浦郡值嘉島。附駙上奏。マタ(弘仁四年三月)太宰府言。肥前國司。今月四日解僞。基肆軍團校尉眞弓等。去二月二十九日解僞。新羅一百十人。駕五艘船着小近島。與土民相戰。即打殺九人。捕獲一百一人者。マタ『統後紀』(承和三年七月)二、勅符。太宰大貳藤原朝臣廣敏等。得今月十日飛駙奏。知遣唐使第一第四船廻着肥前國之狀。使等不利西駙漂廻嘗艱。宣安置府館。迄于更發。依旧供億。又按等奏。兩舶摧殘。更須改營。府宜便修理。令得渡海。其匠手者復將挾遣。又第二第三兩舶。疑亦或廻着。值嘉島涯畔可着船處。為置斥候。以備接援。如有漂着。丞以上奏。マタ『三代実録』(貞觀十八年三月)二、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平。起請二事云々。其二事。請合肥前國松浦郡。庇羅。值嘉兩鄉。更建二郡。号上近。下近。置值嘉島云々。今件二鄉。地勢曠遠。戸口殷阜。又土產所出物多奇異。而徒委郡司。恣令聚斂。彼土之民。厭私求之苛。切欲貢輸於公家。總是國司難巡。檢鄉長少權勢之所致也。加之地居海中境隣異俗。大唐新羅人來者。本朝入唐使等。莫不經歷此島。府頭人民申云。去貞觀十一年。新羅人掠奪貢船。絹綿等日。其賊同經件島來。以此觀之。此地是當國樞轄之地。宣挾令長以慎防禦。又去年或人民等申云。唐人等必先到此島。多採香藥。以加貨物。不令此間人民觀其物。又其海濱多奇石。或鍛練得銀。或琢磨似玉。唐人等好取其石。不曉土人。以此言之。不委以其人之弊。大都皆如此者也。望請。合併二鄉。更建二郡。号上近下近。便為值嘉島。新置島司郡領。任土貢。但其俸料舉定正稅公廩之間。令兼任肥前國權官。於是。公卿奏議曰。臣聞。聖人濟世以便物。為先明王馭民。以制宜為貢。今行平所請上件二條漸欲省風浪。運漕之費。存封疆任土之規。有以詳矣。臣等伏以商量。營水田充年糧事。頗乖仍舊謀合權宜。請試許。二年先明息耗分兩鄉一島事。謂苟利公豈期膠柱。請隨其所陳將以改置。謹錄事狀。伏聽天裁。奏可〔17〕。(上近下近ノ郡名、書等ニ見エサレハ、此請願許可アリシモ、遂ニ行ナハレサリシナラン)マタ『貞觀儀式』二、四方之界。西方遠值嘉〔18〕。マタ『入唐五家傳』(安詳寺惠運)二、承和九年五月。端午日。即出去觀音寺。在太宰府博多津頭。始上船到於肥前國松浦郡遠值嘉島。(○遠ハ遠丘ノ遠ニテ此ハ南部ヲ云)那留浦。マタ『延曆寺座主円珍伝』二、至仁壽二年。值唐國商人飲良暉交関船來。三年七月十七日。上船到值嘉島。停泊鳴(○那留)浦。マタ『詞林采葉抄』二、藤原廣嗣、軍ヲ引テ知賀島ヨリ竜駒ニ鞭ウチテ、海ヲワタル。馬前マズ怒ヲナシテ竜駒ノ切テ、舟ニ乗テ國ヲ指テユクニ、逆風吹返ス。トキニ松浦ノ橘ノ島ニイタル。官軍トリ

コメテ之ヲ対ツ。マタ『八雲御抄』ニ、チカノ島（肥前）。マタ『元禄図』ニ、松浦郡値賀村。マタ『肥耄名蹟考證』ニ、智可島（今日五島ヲ指ス）。在郡西南海中。去平戸二千許里。マタ『名所方角抄』ニ、近浦ハ上松浦（今日北郡ヲ云カ）ニアリ。マタ『万葉集』（五）ニ、阿庭可遠志（本居翁曰、智可ノ枕言）智可能岬（今日一本岬ニ誤ル）欲利。『後拾遺集』ニ、近浦ニ波ヨセカリル、コミチシテ、ヒルマナリテモ、暮シツル哉。『新後撰集』ニ、ヤヒナシヤ、ミルメハカリヲ、契チニテ、尚袖ヌルニ、近ノ浦風。『新六帖』ニ、近ノ浦ニ、ヤリ塩ケフリ、春ハマタ、ヒトツ霞ト、ナリニケルカナ。『名寄』ニ、アカツキノ、近ノ浦風、オトサエテ、友ナシ千島、ナシニナクナリ。モロコシモ、近ノ浦ワノ、ヨルノ夢、オモハヌ方ソ、遠ツ舟人。『後一條入道関白家集』ニ、面影ノ、サキタツ月ニ、ネヲソハテ、別レハ近ノ、島ソカナシキ。白波ノ、カ、レル山ヲ、ミワタセハ、近ノ島ニハ、アラヌナリケリ。マタ『記略』（長徳四年九月）【262】ニ、太宰府言上。下知貴駕島。（○貴ハ行）追捕南蛮田。マタ下値賀五島公文所。可早任先例預所并関東御下知等旨。以山代（○西郡）地頭。固（○松浦党）為値賀五島総追捕使。直人身相副御綿御使令致御年貢已下。所出物沙汰事云々。安貞二年七月三日。平田翁曰、値嘉島ハ今ノ五島、平戸ナドノ島々ヲ総称ナルベシ【263】。其故ハ、此島歴史ニシエテ「清和紀」貞観十八年ノ文ニテモ大ナル島ト聞エ、在所モ能叶ヒ、風土記ニ、数多クヤル由イヘルモ、能叶ヘレバナリ。五島・平戸へ、肥前ノ西北ノ海ヨリ南ヘ遙ニ聯ナリテ、多クノ島ニアリ。今モ松浦郡ニ属リ。平戸ト云ハ、カノ庇羅郷ヨリ出タル名ナルベシ【19】。青柳氏曰、平戸ノ西南ニ、大島五アリ。因テ五島トイフ。古ノ大近ナリ【264】。小島数十。ソノ左右ニ連レリ。凡テ田畠少ク人家海浜ニアリテ、漁夫ノミナリ。海深クシテ諸漁ニ便リヨシ。山ハ岩石聳テ平地少シトイヘドモ、諸木繁茂シテ薪樵スルニ堪タリ。因テ浦々モ富テ民家多シ。足利家衰乱ノ頃ハ海賊ドモ多ク、此島ニ集リテ度々明國ヲ犯セシコト、彼國ノ書等ニ見エタリ。『武備志』ニ、肥前懸海為平戸。平戸之西為五島【265】。マタ『海東諸国記』ニ、源勝（○松浦党）乙亥年。遣使来朝。書称五島。宇久守。源勝。受国書約歳遣一二船。丁丑年。以刷還我漂流人。特加一船。居宇久島総治五島有麾下兵。（○同書ニ本島ノ人此外ニモ見エタリ）ナドアリ。

【262】「マタ『記略』（長徳四年九月）ニ……安貞二年七月三日」国本なし。

【263】国本、この下に「（今日、此説イカ、アラン。抑知訶ト云名ハ、平戸ノ志々伎ヨリ御覽シテノ名ナレハ、五島ヲノミ云テ、平戸ニハカ、ル理ナシ）」という分注あり。

【264】国本、この下に「（今日、此説イカ、アラン。大近ノミニ非ス。小近ヲモイヘリ）」という分注あり。

【265】 国本、この下に「(五島ハ宇久・中通・奈留・久賀・福江ナリ)」という分注あり。

【17】 「主税式」 肥前云々等国。毎年穀二千石漕送對馬島。以充島司及防人等糧。其部領船賃挾抄水手功糧並用正税。マタ凡壹岐島々分寺法令布施供養料。稻一万二千七十一束把一分五毫。太宰府以管内諸国正税通計以充行。肥前国二千七百六十六束トアルヲ以テ行手ノ請ノ行ハレサルヲ知ヘシ。

【18】 『拾芥抄』

本朝四方隅追難祭文追疫鬼云。東方陸奥西方逮值賀。

肥前島ニカ。

【19】 伊藤氏

ヲチカハ平戸志式、其外近辺ノ島々ニワタレル名ナルヘシ。

重テ按ニ、上松浦ニチカ、河内村・チカ村ナトアリ。之ナルベシ。

○**雖被** 「雖」 竈本・湯本・曼本「萬」ニ作ル。

○**奉造御贄恒貢御膳** 此ハ其罪ヲ贖シカ為ニ御贄ヲ貢シ奉リシナリ。「職員令」ニ、宮内省。卿一人。掌出納諸国調雜物云々。諸方口味事。マタ大膳大夫一人。掌諸国調雜物云々事。マタ「宮内省式」ニ、諸国例貢御贄云々。太宰云々。右諸国御贄。並依前件。省即檢領各付所司。例貢御贄直進内裏。其甲斐。信濃。太宰等。返抄申官行下。自餘諸国少与返抄。太宰府云々。右依前檢隨到。檢収附内膳司。マタ「内膳式」ニ、年料云々。太宰府。(御取鯨四百五拾九斤五匁。薄鯨八百五十五斤十五匁。火焼鯨三百三十五斤四匁。已上調物鮓鮓一百七十八斤五匁。鯨一百八斤三匁。腹漬鯨二百九十六斤九匁。甘腐鯨九十八斤二匁。以上中男作物鮓年二百二十三斤六匁。煮塩年魚八百三十九斤二十匁。内子鮓年魚三十六斤一匁。以上梁作鯛醬四斗八升二匁。寒醢二斗三升一匁。蒜房漬一石五斗七升六匁。以上厨作雉腊二裏六十匁別三翼。右諸国所貢並依前年仍収贄殿擬供。マタ「主計式」ニ、肥前国調云々。薄鯨。マタ中男作物絹鯨)トアリ。此度ノ造貢ナド遂ニ恒例トナリシニテモアルベシ【266】。『後紀』(大同元年五月)ニ、停諸国雜贄腹赤魚。木蓮子等。以息民肩也。トアレドモ、『西宮記』ニ、贄殿在内膳中太宰府。及諸国所進御供納供御トアレバ、復貢獻セシナラン。

【266】 「此度ノ造貢ナド遂ニ恒例トナリシニテモアルベシ」という記述、国本なし。

○**取木皮作云々等之様** 此ハマヅ木皮ヲトリ、種々ノ蛇等ノ様ヲツクリ、見本トナセシナリ。

○**長蛇** 蛇ヲ打延シテ長クナシツル物ナリ。「主計式」ニ、肥前国調云々。長鯨二十四斤トアリ。今ニ南郡富江村等ノ人、コレヲ製スト

ソ。谷川氏曰、『野槌』ニ、ウチ鰻ハノシ鰻ナリト云リ。朝鮮人引鰻ト書リ。今日「主計式」ニ、都々伎鰻アリ。都々伎ハ打敲ニテ、則チ長クナシツル鰻ナリ。

○**鞭炮** 鞭ノ状ニ製シツル者カ。「主計式」ニモ鞭炮ト見エタリ。

○**短炮** 此ハ長炮ニ對ヘタル名ナリ。「内膳式」ニ、太宰府。短鰻五百十八斤十二裹云々。右諸国所貢。並依前件。マタ「主計式」に、肥前国調云々。短鰻五百三十四斤ナドアリ。

○**陰炮** 陰乾シツル炮ナリ。「内膳式」ニ、陰炮八十六斤三裹。マタ「主計式」ニ、陰炮ナドアリ。

○**羽割炮** 鳥ノ羽ノ如ク小ク割テ重ネタル者ナリ。「主計式」ニ、肥前国調云々。羽割鰻二十四斤ナドアリ。此等何レノ頃マテ貢調シケルカ。『書紀』ノ徴スベキナシ。

於レ茲天皇。垂ニ恩赦一放。更勅云。此島雖レ遠。猶見レ如レ近。可レ謂ニ近島一。因曰ニ值嘉島一。則有ニ檳榔。木蘭。柰子。木蓮子。黒葛。篁。篠。木綿。荷。莧一。海則有ニ炮。螺。鯛。鯖。雜魚。海藻。海松。雜海菜一。彼白水郎富レ於ニ馬牛一。或有ニ一百餘近島一。或有ニ八十餘近島一。西有ニ泊レ船之停ニ處一。〈一処名曰ニ相子田停一。応レ泊ニ二十餘船一。一処名曰ニ川原浦一。応レ泊ニ二十餘船一。〉遣レ唐之使。從ニ此停一發。到ニ美彌良久之濟一。〈即川原浦之西濟是也。〉從レ此發レ船指レ西度之。此島白水郎。容貌似ニ隼人一。恒好ニ騎射一。其言語異ニ俗人一也。

異本、此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○**如近** 「如」湯本・異本ナシ。

○**值嘉島** 【267】此ハ小值賀ヲイヘルニテ、值賀トイフ名ハ小值賀ヲ本ニテ、大值賀ト云名モイデキシナラン。

【267】 国本、この部分「大近・小近ヲ総テ称ヘル名ナリ。上（大近・小近ノ注）ニ出」とす。甲本この部分を傍点にて抹消す。

○**檳榔**「内蔵寮式」ニ、諸国年料供進。檳榔。馬蓑六十領云々。右太宰府所進。マタ「典藥寮式」ニ、諸国進年料雜藥。太宰府云々。檳榔子廿斤ナドアリ。此処ノ供進モ此中ニアリシナルベシ。『箋註和名抄』【268】ニ、『兼名苑』註云、檳榔（賓郎二音此間音旻朗○『本草和名』云、和名阿知未佐）葉聚樹端。有十餘一房數百子者也。『本草』云、檳榔子。一名蒟子。（上音納。○『千金翼方』『証類本草』中品有檳榔子。不載。一名『證類本草』引陶隱居云、小者南人名蒟子。則知蒟之名出陶注也。又依陶注蒟子。是檳榔子之小者。非檳榔子。之別名源君引為一名誤按阿知未佐。蓋蒲葵之和名檳榔棕欄蒲葵。其狀相似故多誤。上林賦李善注引『仙藥錄』云、檳榔一名棕。又混檳榔棕為一物。故輔仁以阿知未佐。訓檳榔。『統紀』檳榔扇。「齋宮式」檳榔葉及檳榔毛車皆謂蒲葵。今俗亦呼蒲葵為毘良宇。對馬呼吳波源君。蓋知其不同。故不從輔仁所訓也）マタ『本草綱目』ニ、檳榔（『別錄』中品）。『積名』賓門（李当之葉對）仁頻洗瘴丹。時珍曰、檳榔。皆貴容之稱。南方草木狀言。交廣人。凡貴勝旅客。必先呈此果。若邂逅不役。用役。用相慊恨。則檳榔名義蓋取于此。炮炙論謂。尖者為檳。円者為榔。雷氏言。尖長而有紫文者。名檳円。大而矮者名榔々力大。而檳力小。以作鷄心狀正穩心不虛。破之作錦文者。為佳尔。嶺南人噉之。以當果食。言南方地濕不食此。無以祛瘴癘也。生食其味苦澁。時珍曰、檳榔樹初生。若筍竿積硬引莖直上。莖幹頗似桃椰子。而有節。旁有枝柯條從心生端頂。有葉。如甘蕉條派開破風至。則如羽扇掃天之狀。三月葉中腫起一房。因自折裂出穗。凡數百顆。大和桃李。又生刺重累子于下。以護衛其実。五月成熟。剥去其皮。煮其肉。而乾之。皮皆筋糸与大腹皮同也。其『啓蒙』ニ、檳榔。一名棕然（『通雅』）。仁榔（『類書纂要』）。和産ナシ。子ハ多ク舶来アリ。時珍ノ説ニ、形状ヲ説クコト詳ラカナレドモ、『廣東新語』ニ、尤尽セリ。『廣東新語』曰、実未熟者。曰板榔。青々皮殻也。以檳榔肉兼食之。味厚而芳瓊。人最嗜之。熟者曰。檳榔。肉。亦曰。玉子。則廉欽新會及西粵交趾人嗜之。熟而乾焦。連殼者曰棗子。檳榔則高雷。陽江陽春人嗜之。以塩漬者曰。檳榔鹹則廣則肇慶人嗜之日曝。既乾心小如香附者。曰乾檳榔。則惠潮東莞順德人嗜之。谷川氏曰、『花曆百詠』曰、檳榔賓子与郎。皆貴客之稱。土人遇客。必薦故名。『正字通』曰、六朝時。江東皆好檳榔。豫章王嶷遺言。惟陳乾飯檳榔。任昉母性嗜檳榔。劉穆之以金梓盛檳榔。宋蘇軾謂紅潮発類醉檳榔。朱喜謂収得檳榔為祛痰。然則食檳榔者。非獨廣東也。本居翁曰【269】、『伊呂波字類抄』ニ、檳榔、ヒリヤウ（今日同書ニ檳榔子ヒラウシ蒟子同トモアリ）トアリ。『統紀』ニ、檳榔扇。「齋宮式」ニ、檳榔葉二枚戸坐ナド見ユ。又檳榔毛車トアリ。（今日内膳司二年料檳榔葉二十八枚八枚扇涼御飯料二十枚扇雜膳火料トアリ）或ビリヤウ毛ノ車ナドノビリヤウハ、蒲葵ト云物ナリ。其ヲビリヤウト云ハ、比閩ノ音ナリ。比閩ハ今云シユロノ木ニテ、檳榔ニ非ルヲ古ニモ誤リテ、シユロノ木ヲ蒲葵トセン事アリシニ依テ、此国ニテモ蒲葵ヲ比閩トシテ、ビリヤウトイフ。檳榔字ヲ用ヒ来レルナリト云。此説サモアルベシ。然レドモ、ビリヤウヲ比閩ノ音ト云ルハ非ス。ビリヤウ

ハ、ビラウトモ云ハ、即檳榔ノ字音ナリ。古ニアチマサト云シ物ハ檳榔字ヲハ當レドモ、実ハ檳榔カ蒲葵カ定メ難ケレドモ、中昔ニ檳榔毛車ナド云シ。檳榔モ蒲葵ト聞ユレハ、アチマサモ蒲葵ナランカ。薩摩ニ檳榔島アリテ、其処ニアルモ蒲葵ナリト云リ。檳榔ト棕櫚ト蒲葵トハ大カタ似タルモノニテ【270】、已ニ漢国ニテモマキレツル事アレハ、況テ此方ニテ古ソノ漢名ヲ當シハ、マギレケン事宜ナリ。土佐ノ海ニモ、ビラウ島ト云アリテ、山ハ悉クビラウノ木生タリト云リ。（今日今ニ浦志々伎村ニハ眞ノ檳榔ヲ産ストソ）

【268】『箋註和名抄』ニ……「斎宮式」檳榔葉及檳榔毛車皆謂蒲葵。今俗亦呼蒲葵為毘良宇。對馬呼毘良源君。蓋知其不同。故不從輔仁所訓也」国本なし。

【269】国本、「本居翁曰」の部分『和名抄』ニ、『兼名苑』云、檳榔葉衆樹端有十餘房。一房數百子也者。『本草』云、椰子、一名蒟子トアリテ、和名ハ見エス」とす。

【270】国本この下に「（今日『伊呂波字類抄』ニハ併欄蒲葵已上同トアリ。）とあり。底本・甲本なし。

梔子『日本紀』（天武天皇十年八月）ニ、支子。マタ『新撰字鏡』ニ、支子。（久知奈之）マタ『箋註和名抄』ニ、『唐韵』云梔。（音支医家書等。

用支子二字。久知奈之。○今所傳漢唐諸医書。皆作梔子而。『医心方』【271】引之皆作支字。蓋彼所拠皇国古傳本。与源君所見同。又史漢司馬相如傳注・謝靈運山居賦自注・『太平御覽』引吳普『本草』並作「支子」。「天武紀」『新撰字鏡』「大膳職式目」皆同。昌平本・下總本有「和名」二字。『本草和名抄』『新撰字鏡』日訓）梔子木実。可深黄色者也。（○『廣韵』無色者也。三字『説文』梔黃木可染者。今本『説文』梔作梔誤。陶弘景曰、以七稜者為良經霜乃取之。今皆入染用。『図経』云、梔子木高七八尺。葉似李而厚硬。又似樗蒲子。二三月生白花。々皆六出。甚芬香。俗説即西域詹蔔也。夏秋結実。如訶子狀。生青熟黃中仁深紅。昌平本無下「梔」字。々々在注上那波本亦無下梔字木三字。並非）マタ『本草綱目』ニ、梔子（『本經』中品）『釈名』木丹（『本經』）。越桃（『別録』）。鮮支（『綱目』）。花名薔蔔。時珍曰、梔

酒器也。梔子象之故名。俗作梔。『司馬相如賦』云、鮮支黃櫨註曰、鮮支即支子也。佛書称其花為薔蔔。謝靈運謂之林蘭。曾端伯呼為禪友。或曰薔蔔金色非梔子也。弘景曰、兩三種小異以七稜者。為良經霜乃取入深家用于藥甚希。『史記』貨殖傳云、苴茜千石與千戸侯等。言穫利博也。入藥用山梔子。方書所謂越桃也。皮薄而円小。刺房七稜者為佳。其大而長者炮炙論。謂之狀尸梔子。入藥無力。時珍曰、梔子葉如兔耳。厚而深緑。春榮秋瘁。入夏開花。大如酒盃。白辨黃藥。隨即結実。薄皮細子有鬚。霜後収之。其啓蒙ニ、梔子。一名染梔子花（『群芳譜』）。大梔子（『本草原始』）。色梔（同上）。肥梔（『本經逢原』）。黃梔花（『寧波府志』）。玉甌（『事物紺珠』）。白玉花（『名花譜』）。伏梔子（『本草彙言』）。山梔子。一名黃香影子（『綴耕録』）。建梔（『本經逢原』）。楮桃（『品字義』）。芝止（『採取月令』）。枝子（『保赤全書』）。山枝仁（『幼科發揮』）。人家ニ多ク裁テ花ヲ賞シ【272】、又離ニ作ル。高サ丈許葉形長クシテ、末濶ク硬深緑色、枝葉對生ス。初夏花ヲ開ク。白色

六辨ニシテ厚ク香氣アリ。内ニ黄蘗アリ。後実ヲ結フ。形榧子ノ如クニシテ長大ナリ。堅ニ稜アリテ高く出、七稜ヨリ九稜ニ至ルヲ上トスト云。六稜ノ者多シ。生ハ綠色、熟スレバ黄ナリ。外皮薄シテ内ニ紅内及白子アリ。採テ保家ハ用トシ、黄色ヲ染薬用ニ入ル、モノハ、山梔子ナリ。山中ノ自生ニシテ葉実トモニ小く、木ハ大ニシテ丈餘ニ至ル。一種四季花サク者アリナドアリ。谷川氏曰【273】、『正字通』黄支。即今支子。或曰【274】、クチナシ。茜草科、詳名ガルデニア。フロリタ黄色ノ染料トス。又薬用トス。此花ヲ醋味噌ニテ食ハ味美ナリ。之ヲ乾貯フベシ。梅醋ニ紫蘇ヲ和シ、ソレニ漬レハ紅ニ染ミ下物トナスベシ。支那ニテモ此ヲ梅醬蜜糖ニテ製ス。

【271】「『医心方』引之皆作支字……々々在注上那波本亦無下梔字木三字。並非」国本なし。

【272】「人家ニ多ク裁テ花ヲ賞シ……一種四季花サク者アリナドアリ」国本、この部分に一部省略の箇所あり。

【273】「谷川氏曰」以下の部分、国本は梔子の項目の冒頭にある『新撰字鏡』の記述の下にあり。

【274】「或曰」国本は「伊藤圭介氏（東京人）曰」とするも、甲本この部分を傍点にて抹消す。

○木蓮子

「宮内省式」ニ、諸国例貢。御贄云々。太宰木蓮子。（○此処ノモ此ニアルヘシ）マタ『箋註和名抄』ニ、『崔禹食經』云、木蓮子。

（以多比。○『本草和名』【275】・『医心方』並引『崔禹』載之。『本草拾遺』云、薛荔實縁。樹木三三十五年。漸大枝葉繁茂。円長二三寸厚如石。韋生子。似蓮房中有細子一年一熟。一名木蓮。打破有白汁。停久如染。『本草図経』絡石条云、薛荔与此極相類。但莖葉鹿大如藤状。木蓮更大如結石。其実如蓮房李。時珍曰、木蓮延樹木垣牆而。生四年不凋。厚葉堅強大。于絡石不花。而実々大如盃。激似蓮蓬。而稍長正如無。花果之生者。六七月実内而空紅。八月後則滿腹細子。大如稗子。一子一鬚。其味激瀉。其故輕虚鳥兒童兒皆食之。充以太比為允）『本草』云、折傷木。（○『千金翼方』・『証類本草』木部中品載之。蘇敬曰、折傷木藤。生繞樹。上葉似芮草葉。而光厚。『本草和名』果部載崔子木蓮子訓以多比木部載。『本草』折傷木亦訓以多子比。蓋輔仁不能詳定存疑於二物也。源君以其所訓同合為一者誤。『新撰字鏡』折傷木伊太比。一云木蓮子其誤亦同）マタ『伊呂波字類抄』ニ、木蓮子。（菓子類）マタ『本草綱目』ニ、木蓮。『釈名』薛荔（『拾遺』）。木饅頭。綱鬼饅頭。時珍曰、木蓮饅頭。象其実形也。『山海經』作草荔。『藏器』曰、薛荔實縁。樹木三三十五年。漸大枝葉繁茂。葉長二三寸厚若石。韋生子。似蓮房。打破有白汁。停久如漆。中有細子。一年一熟子。亦入薬。来無時。頌曰、薛荔絡。石極相類。莖葉粗大如藤状。木蓮。更大于絡石。其実蓮房。ソノ啓蒙ニ、木蓮イタミ（『日本紀』）、イタビ、イタビカヅラ、イヌタブ、キマンデウ、チ、デヨ（江州。）一名木蓮蓬（『本草集言』）。石蓮蓬（『物理小識』）。羊兒藤（『侯赤全書』）。桑上羊兒藤（『円溪纂要』）。爬城草（『南寧社志』）。無花果（『本草』洞詮イチバクト同名）。肥前ニテクヒイビ（今日イタブトモ云）ト云。（木蓮ニ同名アリ。此條ハ木蓮房ノ略ナリ。実ノ形ヲ以テ名ツク。木芙蓉、木蘭ニモ木蓮ノ名アリ。此ハ花ノ形ヲ以テ名クルナリ）

ナドアリ。

【275】(一〇『本草和名』『医心方』並引……『新撰字鏡』折傷木伊太比。一云木蓮子其誤亦同) 国本なし。

○**黒葛**『古事記』(景行天皇段) 二、都豆良。マタ『箋註和名抄』二、蘇敬曰、葛穀。一名鹿豆。(葛音割久須加豆良乃美) 葛実名也。(一〇『證類

本草』【276】草部中品葛根条引曰、葛穀即是美尔無。鹿豆之名『本草和名』亦不載。是名按『本草』葛根条有一名鹿藿之名。而草部下品別有鹿藿陶。隱居云、方葉不獲用人。亦罕識葛根之苗。又名鹿藿。唐本注云、此草所在有之苗。似豌豆有蔓。而長大人取以為菜。亦微有豆氣名為鹿豆也。是葛根苗之鹿藿与。下品之鹿藿同名異物。故隱於下品。鹿藿条云、葛根苗又名鹿藿以示二物同名。而其美不日也。輔仁謬解陶注謂下品。鹿藿即是葛根名之一名之一名訓為久須加都良乃波衣。源君襲其誤以葛根苗之鹿藿下品之鹿藿為一物。故以下品鹿藿之一名鹿豆為葛根苗鹿藿之一名然鹿豆不宜以名苗。故亦改為葛穀之一名也) 葛脰(音豆久須加都良乃称。一〇『本草和名』云、葛根久須乃称。『図經』云、春生苗引藤蔓長一二大紫色。葉頗似楸葉而青。七月着花似豌豆花不結実。根形如手臂。紫黑色。今人多以作粉食之。其益人) 葛根入地五六寸名也。(一〇『證類本草』引云、其根入土五六寸已上者。名葛脰。『本草和名』引、作根入土五六寸者也。下総本無葛根之葛字。似是) マタ『新撰字鏡』二、葛(加豆良)【277】。マタ『本草綱目啓蒙』【278】二、葛クズ、クスカヅ、イノコノカネ、一名志根松。葛々藤根・土瓜・絺綌草、山野トモニ多ク自生アリテ甚繁延ス。其葉互生ス。円尖ナル。三葉一蒂ニシテ眉児豆ノ葉ニ似テ大ナリ。梢葉ハ毎葉三尖ニシテ小豆葉ノ形ノ如シ。蔓ト共ニ褐毛多シ。肥タル者ハ葉大サ尺ニ過。平田翁曰、葛ハツタトモ、ツラトモ通ハシ云リ。神楽歌ニ、ミヤマノコツ、ラトアリ、『神楽註秘抄』二、ツ、ラハ葛ナリトアレハ、ツ、ラト云ベシ。黒葛ヲ『伊呂波字類抄』二、『本朝式』ヲ引テ、『延喜式』ナドノ古訓モ然アリ。『冠辞考』二、古ハツヌト云リ。蘿這石ナリ。石綱ノ又若変トヨメルハ、石蘿ノ這別レテハ、マタ這返ル意ノ連ナリトアレハ、ツヌトモ云ベシ。顕宗天皇ノ室寿ニモ取結縄葛者。此家君御寿之堅也。トアレバ凡テイトノ上代ノ家造ハイヅコモ、イツコモ葛ヲ以テ結固ムル物ナリ。故ニ宮室ヲ賀スルニモ、先右ノ如ク葛根ト云ナリ。綱ヲツナト云モ葛蘿ノ類ヲ用キシ故ナリ。

【276】(一〇『證類本草』草部中品葛根条引曰……『本草和名』引、作根入土五六寸者也。下総本無葛根之葛字。似是) 国本なし。

【277】底本この右傍に「マタ『万葉』十四二、波麻都豆良。マタ『安蘇記』麻都豆良。マタ『古今集』二、アツサユミ、弓引野ノツ、良。マタ『宇津保物語』二、青ツ、ラ。マタ『拾遺進』二、野ヲミレハ、春メキニケリ青ツ、ラ」と小字の書込みあり。挿入箇所不明により本文に入れず。

【278】『本草綱目啓蒙』二……肥タル者ハ葉大サ尺ニ過) 国本なし。甲本は頭注にて記す。

○**篁**『箋註和名抄』【279】二、孫愔『切韻』云、篁(音皇太加无良。俗云太加波良) 竹藁也。(『廣韻』作「竹与」。此不同。按竹叢之訓見『漢書』嚴助伝注引

服斐) トアリ。

【279】『箋註和名抄』この箇所、国本は『和名抄』とす。

○篠 『箋註和名抄』【280】ニ、篠蔣魴『切韻』云、篠 (先鳥反之。乃小竹散シ。○『古事記』景行天皇条歌、阿佐士怒。「神功紀」小竹此云之努。本居氏曰、古皆云之奴。不云之乃。後人謂之志乃者与野角忍等。後轉奴為乃同。但『万葉』用四能字。其他希見。又云、志奴謂其枝柔軟靡隨者之總名。『万葉』云、旗須為寸四能乎押靡謂芒也。葦乃菜屋謂葦也。之乃為靡隨之總稱。後篠竹事。是名也。志奴与志奈布同。廣本小竹散々作。一云、佐々。俗用小竹二字。謂之佐々十四字。按『古事記』云、小竹葉分註云、訓小竹云佐々。『万葉』亦小竹之葉訓佐々乃波。則小竹二字。謂之佐々者非。後俗之所為也。本居氏又曰、「神樂帳」小竹為樂。蓋因天照大神隱岩屋戸時。天宇受売命。手草借天香山之小竹葉之故事也。振小竹其音佐々。故名小竹為佐々也。『万葉』佐々那美用神樂声浪字。省作神樂浪。又省作樂浪。又但馬氣多郡樂前郷。読佐々乃久万皆可證佐々之名出神樂也。為細小得名者非是) 細々小竹也。(○廣本無小字。『尔雅』云、篠箭。『說文』作筱箭。属小竹也。王念孫曰、篠之為言猶少也) トアリ。

【280】国本、『箋註和名抄』の記述なく、代わりに『和名抄』ニ篠蔣魴『切韻』云、篠和名之乃細々竹也トアリ」という記述あり。

○木綿 古ハ穀ヲユフト訓ミ、穀ヲ以テ織リタル者ヲユフト云フ。穀ト木綿ト似タル者ナレバ、ユフニ木綿ヲ借用キタルテ、此記ノ頃、眞ノ木綿ハ未タ世ニアラズ【281】。「神代紀」ニ、天日鷲所作木綿。マタ『古語拾遺』ニ、令天日鷲神。造木綿。津咋見神。穀木種殖之。以作白和幣(是木綿也)云々。天日鷲命之孫【282】。造木綿及麻。並織布云々。仍令天富命。率日鷲命之孫。求肥饒地。遣阿波国殖穀麻種。其裔。今在彼国。當大嘗之年。貢木綿麻布及種々物。所以郡名為麻殖之縁也。天富命。更求沃壤。分阿波裔部率往東土播殖麻穀好麻所生。故謂之総国穀木所生。故謂之結城郡。マタ『続紀』【283】(神護景雲三年三月)ニ、始毎年運太宰府綿廿万屯。(今日此処ノモ此中ニ在ヘシ。此モ穀ヲ以テ織リタルナラン)以輸京庫。マタ(天平元年九月)仰太宰府令進調綿一十万屯【284】。マタ「民部式」ニ、凡太宰府毎年貢綿使云々。マタ「主計式」ニ、肥前国。綿油十八疋云々。自餘絹糸綿席。マタ庸綿米。マタ「雜式」ニ、凡太宰貢綿穀船者。扱買勝載二百五十石以上。三百石以下。不着桹進上。マタ『箋註和名抄』【285】ニ、『本草經註』云、木綿(由布。○昌平本・下總本有和名二字)折之多白糸者也。(○「刺」板本無「經」字。「綿」作「棉杜」。一名兼良公令抄云、木綿造紙之木低麻也。抛以上諸書所言可證由不用穀木皮作之。是物無漢名可充其以木皮造。故「神代紀」用木綿字非用杜仲。一名木綿字。又非古員終之木綿。源君引杜仲。一名木綿。訓由布者誤。『古語拾遺』云、穀木作木綿。『豊後風土記』云、桹樹造木綿。則知穀桹同一物。『說文』云、穀楮也。又『栽柠字』云、楮或从宁。『本草』云、柠夷一名穀夷。又知穀或名柠。以此考之桹。盖柠之異文。『說文』柠字或从緒省作柠。然則柠。亦応作桹而筆畫繁縟省ハ作桹也。由不以穀木皮作之状。与柠綏相似。故古人借柠字充之然柠綏績柠皮造之。由不績穀皮造之。其不同。故変貯旁糸從木作柠。或作柠。故柠亦作桹。後省

作杼。是二攷未能自定。岡部氏曰、栲草書楮字之壞。本居氏曰、皇國製字皆未。是按由不以穀木皮作綾以供祭祀者。其造法与。今人漚麻去粗皮作綾全同。謂之由不者。蓋由手之輔由手之為言齋綾也。以供祭祀故云齋猶祭器有由者。謂之手同。以穀皮所造之手織。成之布曰多倍。「雄略紀」所言多倍能婆伽摩。又和妙・荒妙・白妙皆是也。多倍以穀皮所造之綾織成者。故或即用栲字是由。不多倍以未織成。已織成為別。本居氏不知由不為供祭祀之綾誤。為織成之物。故詳辨之。今信濃甲斐伊豆上総之間鄙人。以穀皮織布。呼多不。蓋多倍之轉。又『毛詩』雀鳴篇正義引、陸機疏云、荆揚人謂之楮中州人謂之楮。今江南人異續其皮以為布。然則西土亦有物）ナドアリ。

【281】「古ハ穀ヲユフト訓ミ、穀ヲ以テ織リタル者ヲユフト云フ。穀ト木綿ト似タル者ナレバ、ユフニ木綿ヲ借用キタルテ、此記ノ頃、眞ノ木綿ハ未タ世ニアラズ」国本なし。

【282】「天日鷲命之孫……故謂之総国穀木所生。故謂之結城郡」国本は頭注にて記す。

【283】国本『続日本紀』の上に「○『姓氏録』（左京諸蕃。太秦公宿祢）ニ、仁德天皇詔曰秦王所献糸綿絹帛朕服用柔軟温暖云々タルニ由ハ、後ニ彼国ヨリ貢獻セシ物モアルナリ。『統紀』（延暦十八年七月）ニ、有一人乘小舩。漂着参河国。自謂天竺人。閱其實物。有如草実者。謂之綿種トアレハ、亦此時モ来リシナリ」という記述あり。

【284】国本この下に『万葉集』（三）ニ、白縫築紫乃綿者身着而未者伎祢抒暖所見」という記述あり。

【285】国本『箋註和名抄』以下の記述なし。代わりに、

『政事要略』ニ、太政官符民部省。応行雜事。云々。一応定諸国地子交易絹綿調布商布鐵鍬等價數事云々。肥前国絹廿疋直。千六百束。疋別八十束。綿五百屯直。五十束云々。以前条事所定如件者。宜承知依宣行之。符到奉行。延喜十四年八月八日。右中辨藤原朝臣。右少史錦宿祢ナトアリ。本国ニ産スル物上品ニシテ、且多リシコト見ルヘシ。永祿・天正ノ頃、更ニ又種子ヲ輸入シ、大ニ全国ニ播施セシナリ。『和名抄』ニ、木綿『本草』注云、木綿和名由布折之多白糸者也。マタ『伊呂波字類抄』ニ、綿ワタ、絮似綿龜惡也。絮續（已上同）。マタ『本草綱目』ニ、木綿釈名古貝（綱目）。古終、時珍曰、木綿有二種。似木者名古貝、似草者名古終。『梵書』謂之睽婆。又曰迦羅婆劫。又曰此種出南番宋未始入江南。今則編及江北与中州矣。不蚕而綿。不麻而布。利被天下其益大哉。又『南越志』言、南○諸蛮不養蚕。惟授婆羅木子中白絮紉。為糸織為幅。名婆羅篋段。其『啓蒙』ニ、木綿ハンヤ、一名攀桂花（『明一統志』。板枝花（『類書纂要』板攀略字）。規貝（『通雅』。綿樹（『潜確類書』。瓊枝（『群芳譜』。迦婆羅（『正字通』。草綿キワタトウワタ。一名棉（『群芳譜』。家貝（『通雅』。綿花（『秘傳花鏡』。木綿草（『書隱叢說』。子花（『東西洋考』。古貝花（同）。無縫花（『河内府志』ナトアリ。

という記述あり。

○荷【286】『箋註和名抄』ニ、『尔雅』云、荷芙蕖（符美音同蕖。音渠。○所引釈草文下皆同。伊勢廣本「符」作「荷」。並与『廣韵』同）郭璞云、芙蓉（音容）江東呼為荷也。（『原書』芙蓉上有別名二字。呼為荷也。作呼荷二字）マタ『本草綱目啓蒙』ニ、蓮藕ハחסノネハスノネ、ハス苗名ツクキクサ、ミツキクサ、ツマナシクサ、ミタヘクサ、イケミクサ、ツレナシクサ、ハチス。藕一名、玲瓏玉、華井舩、舎楼伽、元旁、華井舩、両草氷舩、氷房、蒙牙玉、節蓮末、雪藕玉、臂竜、襖宝、玉臂、兄、藕菜、春宿根ヨリ新葉ヲ生ス。初出ノ葉ハ形小ナリ。ゼニハト云。コレヲ荷錢トナツク。其次ニイツル葉ハ稍大ニシテ水面ニ浮フヲミツバト云。コレヲ藕荷ト云。ソノ次ニ出ル葉ハ莖長クシテ、水上ニイツルヲタチバト云。コレヲ芡荷ト云コトハ藕ノ節ニ、両對シテ莖ヲ出ス。ソノ一ハ葉、ソノ一ハ花ナリ。故ニタチ葉イツレバ、必花サク。花ニ紅白アリ。ミナ炎天ニヒラク。紅白一処ニ栽レバ、白キモノ必枯。芙蓉ハモト蓮ノ一名ナリ。今ニテハ木芙蓉ヲモ略シテ芙蓉ト云々。故ニ蓮ヲ水芙蓉、草芙蓉ト称シテ分ツナドアリ。『古今要覽稿』四百六十二ミルヘシ。

【286】○荷の項目、国本は「荷『和名抄』ニ、荷『尔雅』云、芙蕖郭璞注云、芙蓉江東呼為荷トアリ」とす。『古今要覽稿』以下の記述、国本・甲本なし。

○莧『箋註和名抄』ニ、『本草』云、莧【287】（音寛去声比由【288】。○伊勢廣本作「寛」。之去声与。『類聚名義抄』合。名波本作音現。『廣韵』莧侯欄切在去声三十一欄。寛苦官切。在平声二十六柜。則云、音寛去声二十三霰並其音不同比由依輔仁『新撰字鏡』黃同訓。新井氏曰、疑似味甘寒名比由。今俗譌呼比也字）味甘寒無毒者也。（○『千金翼方』『證類本草』上品云、莧実味甘寒。大寒無毒者也。二字与比同。『説文』莧菜也。『本草』又云、葉如籃。李時珍曰、三月撒種。六月以後不堪食。老則抽莖如人長。開細花成穗。々中細子扁而。光黒子青稍子雉冠子無別）『伊呂波字類抄』ニ、莧（ヒユ）『本草綱目』ニ、莧（上品）『本經』時珍曰、埤雅云、莧之莖葉。皆高大而易見。故其字從見。指事也。別録曰、莧実一名莫寒。細莧亦同。李當之曰、莧実即莧菜也。弘景曰、莧実。當是白莧。所以云細莧。亦同。保昇曰、莧凡六種。赤莧、白莧、人莧、紫莧、五色莧、馬莧也。惟人曰、二莧、実可入藥用。頌曰、人莧、白莧俱大寒。亦謂之糖莧。又謂之胡莧。或謂之細莧。但大者為白莧。小者為人莧耳。其子霜後方熟細。而色黒紫莧莖葉通紫赤莧。亦謂之花莧莖葉深赤。五色莧。今亦稀。有細莧。俗謂之野莧。ソノ『啓蒙』【289】ニ、ヒヤウ、ヒヨ、ヒイ、カラヒイ、ヒイナヒヤウ、アカザハビヤウ、ヒヤウイマヒユ、トウビユ、トウノヒユ。一名人杏菜苳苳非廩子【290】。莧ハ総名ナリ。數種アリ。食品ノ者ハ人莧、白莧ナリ。故ニ単ニ莧ト云ハ、之ヲサス。人莧、白莧同物ニシテ、大小ニテ名ヲ異ニス。即今俗ニ、ヒヤウト呼モノナリ。春種ヲ下ス。苗鶏冠ニ似テ紅ナラズ。葉モ亦相似テ円ニシテ光リ互生ス。秋ニ至リ、高サ四五尺、葉間コトニ穗ヲナシ、花ヲ開ク。極テ細小ナリ。

後小黑子ヲ結ブ。光アリテ鶏冠子ノ如シ。熟シテ苗根共枯。ナドアリ。『古今要覽集稿』【291】四百五十見ルヘシ。

【287】『箋註和名抄』ニ、『本草』云、莧。」とある箇所、国本は『和名抄』ニ、『本草』云、莧」とす。

【288】「音寛去声比由……光黒子青稍子雉冠子無別」国本なし。

【289】『啓蒙』の部分の記述、国本「ヒヤウ（俗名）、ヒヨ（筑州・江州）、ヒイ（備前・雲州）」など、呼称の下に地域名などの記載あれども、底本は省略す。

【290】国本、以下の部分の記述、

圭介氏曰、ヒユ東国ヒヤウ。詳名アマラントス。メランコリクス。アルヒユハ数種ノ莧ノ総名ニシテ、人莧（一名白莧）ヲ食品トス。春月種子ヲ下シテ生ス。一種オホバアカヒユアリ。赤莧ハ昔時染料ニ用ヒタル者ナリ。ハナヒユハ雑色相交リテ五色莧ナリ。莧類其葉食フヘシ。イヌヒユハ細莧ナリ。下品ナレトモ随地自生多ク高七八寸。葉亦小ニシテ須凹シ、夏秋ノ際二三寸ノ穂ヲナシ、細小花ヲ着ク。此種葉ノ紅色ノ者ナリ。東濃ニテベニクサト呼フ。共ニ食用トナスヘシ。

とす。

【291】『古今要覽集稿』四百五十見ルヘシ。」国本・甲本なし。

○荷莧 湯本「莧」下ニ「其」アリ。

○鯖 『箋註和名抄』ニ、『崔禹食經』云、鯖（音昔阿手佐波。○『本草和名』云、和名佐波。『新撰字鏡』 藪鮑皆同訓。「天平九年官符」有鯖亦似謂佐婆）味咸無毒。口尖背蒼（○『医心方』引「口」上有「狼似鱧小」四字。下総本「蒼」下有「者也」二字。廣本同。『医心方』引亦同。按鯖未詳。嶺山君曰、佐波雜字湧青花魚。即是【292】）

【292】「廣本同。『医心方』引亦同。按鯖未詳。嶺山君曰、佐波雜字湧青花魚。即是」国本なし。

○富於馬牛 「富」印本「當」ニ作ル。曼本ニ抛テ改ム。「兵部式」ニ、肥前国値嘉島馬牧。庇羅島馬牧。生属島馬牧。柏島牛牧。櫛【293】

野島牛牧。早崎牛牧。（○以上本郡）トアリ、古ハ牛馬ニ富メリシコト知ルジシ。或曰、宇久島ハ五島列島ノ尤北ニアリ。平戸ト相接ス島ノ東岸ニ平村アリ。平坦ナル村落ナリ。今モ山野ニ放牛ヲ見タル。又小値嘉島、雜草青々タリ。山腹ニ数十ノ放牛ヲ望ムト今ニ其富メルヲ知ルベシ。

【293】底本・甲本、「櫓」の右傍に「コカキ・イカキ」、左傍に「ノカキ」というルビあり

○相子之【294】「之」曼本「田」作ル【20】『続紀』（宝龜七年閏八月）ニ、遣唐使船到肥前国松浦郡合蚕田浦（此ハ福江ト奈留トノ間ナル久賀島ノ南ニアリテ奈留ノ相浦ヲサル遠カラス）積月餘日。不得信風トアル。合蚕田浦ハ、此停ヲ云トスレバ、曼本ニ拠テ之ヲ田ニ改ムベシ。青柳氏カ、五島ノ中ニ相子浦アリトイフ。相子浦、コノ相子ノ停ニ當ラハ、彼ノ文字印本ノマヽナルベシ。二ノ中何レナラン。後考ヲ待ツ。或曰【295】、相子停ハ、今相津ト云処アリ。是ナラン。本文ノ近島西有泊船之停二処。一処名曰相子停。一処名曰川原浦云々。美弥良久之濟。即川原浦之西濟是也。トアルニ、能當レリ。又曰、相子浦ハ福江ノ東北ナル奈留ノ相浦ナルベシ。

【20】伊藤氏 田浦

□海廣伝肥前国松浦郡田浦。『図書編』肥前国津奴鳥刺ナトアリ。『九州図』ヲ按スルニ、五島深江東北ニ田浦アリ。相子ノ内ノ田ノ浦カ。元ヨリ相子浦トハ別処ナルニヤ。『元禄図』ニ、松浦郡田浦村アリ。古キ書ニモ見エ、又唐人モヨクシル処ナレハ、唐ニアヨフ舟ノ泊ル処ト聞ニタリ。

【294】「○相子之」の項目、国本は「○相子之停」とす。

【295】「或曰、相子停ハ……又曰、相子浦ハ福江ノ東北ナル奈留ノ相浦ナルベシ」国本なし。

○二十餘船 「二十」曼本・異本ナシ。「餘」曼本ナシ。

○川原浦【296】或曰、福江ノ西北ニアリテ、美弥良久埼ニ隣リ。今ニ泊船ノ処アリ。

【296】「○川原浦」の記述、国本は相子之停の末尾に記す。

○浦心 「心」曼本・湯本・異本ナシ。

○遣唐之使從此停発 本文此下ニ「脱漏」トアレバ能知リ難ケレド、按スルニ本郡登望駅ヨリ外ニ西南ニ駅所ノナキヲ以テ見レバ、當時外国へ航スル者ハ、登望駅ヲ発シ、平戸ヲへ美弥良久ニ至リ出船シ、又外国ヨリスル者モ、先ツ美弥良久ニツキ、平戸ヲへ登望駅ニ至リシナラン。

○美弥良久 「弥」印本「弥」ニ作ル。異本ニ拠テ改ム。『続後紀』（承和四年七月）ニ、太宰府馳傳言。遣唐三箇船。共指松浦郡。旻樂埼。（○或曰【297】、美弥良久ヲ書等ニ美弥良久ニ改メタレト、旻ハ音珉ナレハ、ミネト轉シ用サルヘキ例ニシテ、ミヽト轉スヘキ例ニ非ス。此説イカハ。後考ヲ待）発行。

第一。第四船。忽遇逆風。流着壱岐島。第二船。左右方便漂着值嘉島。マタ『万葉集』（十六）ニ、神龜年中。太宰府。差筑前国。宗像

郡之百姓。宗形部津麻呂。充對馬送粮舩施師也云々。自肥前松浦縣美弥良久埼。發舩。直射對馬渡海。マタ「延暦寺座主円珍傳」ニ、傍山行至本國西界。肥前國松浦縣管旻美樂埼。マタ『坤元儀』ニ、肥前國近ノ島、此島ニヒ、ラゴノ埼ト云処アリ。マタ『九州図』ニ、五島深江ノ西海中ニ、三井樂アリ。マタ『袖中抄』ニ、ミ、ラクノ我曰ノ本ノ島ナラバ、ケフモミカケニ逢マシモノヲ。マタ『蜻蛉日記』ニ、何レノ國トカヤ云々。ラクノ島トカノナン云ナル。ナドアリ。今現ニ南郡ノ西南ニ、三井樂村アリ。即チ美弥良久埼ナリ〔21〕。

〔21〕 青柳氏

旻樂埼ハ五島深江ノ沖ニアリ。サテ深江ハ五島ノ西南ナルカ。此辺ノ海人トモ沖ニ出テ縄ヲハエテ、諸魚ヲトル。其縄フル綱代ハ、唐ノ南海普陀山ノ見出ル処ニシテ、其魚スル処ナリト語レリ。イカナル高山ニモセヨ、遙ニ見ル地ナランニハ、其遠サ思ヒハカルヘシ。

【297】「（○或曰……此説イカ、後考ヲ待）」國本なし。甲本「（此説イカ、後考ヲ待）」の部分、「（美祢ノ方正カランカ。疑ヲ存ス）」とす。

【298】甲本この下に分注の形で「ヒハラク。ミ、ラク。ミキラクナド、ミナ訛リ」という記述あり。底本・國本なし。

○之濟「濟」曼本「崎」ニ作ル。註モ同シ。

○此島白水郎本島ハ皇國ノ西南ノ極ミニアリテ、其處ニスム白水郎ノ勇猛ナルコトハ薩摩大隅ニ住ム隼人ニ似タリ。又常ニ騎斜スルコトヲ好ミ、且絶海孤島ノ者ナレバ、其言語卑陋ニシテ聞取リカタク、尋常ノ人トハ大ニ異ナリトナリ。

○隼人「職員令」隼人司ノ義解ニ、隼人者。分番上下。一年為限。其下番在家者。差課レ科役及簡点。兵士一如凡人トアル如ク、當時薩摩等ノ人ノ猛キ者ヲ簡ミテ、朝廷ヲ守ラシメシ者等ナリ。⑥『太宰管内志』【299】曰、平戸ノ西南ニ大島五ツアリ。因テ後世五島ト云。則古ノ大近ナリ。小近島數十。其左右ニ連レリ。凡テ田畑ナリ。人家海辺ニ在テ漁夫ノミナリ。海深シテ諸リ便リヨシ。山ハ岩石聳テ平地少シト雖モ、諸モ諸木繁茂シテ薪樵スルニ堪タリ。因テ浦々モ富テ民家多シ。足利家衰乱ノ比ハ、海賊トモ多ク、此島ニ集テ度々明國ヲ侵セシコト、彼國ノ書トモニミエタリ。此島ハ皇國ノ西ノ極ニテ、彼國トハ海水一帯ヲ阻タルノミニシテ、甚近ト云。五島則古ノ值嘉島ナレハ別ニ挙ク可ニアラネト、後世值嘉ノ内ヲ分テ種々名モアルコトナレハ、今ノ唱ニ因テ又一ノ件トス。

【299】「⑥『太宰管内志』曰……今ノ唱ニ因テ又一ノ件トス」國本・甲本なし。

杵島郡。郷四所。里一十三。驛一所。

〔**戸令**〕ニヨルニ、本郡ハ四郷ナレバ下郡ナリ。大体ハ子位ヨリ知ニ至ルマデハ小城郡ニ界シ、知ヨリ已ニ至ルマデハ海ニ臨ミ、已ヨリ申ニ至ルマデハ藤津郡ニ界シ、彼杵郡ノ界少シク、之ヲ承ケ松浦郡トナリテ子ニ至ル。米・麦・綿・茶・櫛・油菜等ヲ産ス。○『日本紀』（景行天皇十八年七月）ニ、到筑紫後国御木。（○三池郡）居於高田行宮。時有僵樹。長九百七十丈焉云々。有一老夫曰。是樹者^{クスキ}歷木也。嘗未僵之先。當朝日暉則隱杵島山。當夕日暉覆阿蘇山（○肥後）也〔**22**〕。マタ上文（佐嘉郡条）ニ、昔者樟樹一株。生於此村。幹枝秀高。莖繁茂朝日之影。蔽杵島郡蒲川山。マタ『三代実録』（貞觀十二年六月）ニ、先是太宰府言。肥前国杵島郡兵庫震動鼓鳴二声ナドアリ〔**23**〕。（今日『三代実録』貞觀三年八月ニ、授肥前国正六位上堤雄神從五位下トアリ。本郡佐留志村ニアリ。現今郷社。同書貞觀三年八月ニ、授肥前国正六位上稻佐神從五位下トアリ。本郡錦江村ニアリ。現今郷社）

〔**22**〕青柳氏曰、筑後、御木ノ西海ニ出テ、東西ヲ領テ両国ノ形勢ヲ考ルニ、東方遙ニ阿蘇山聳エ、西方海ヲ阻テ多良岳ニ向ヘリ。杵島山ト云ルハ何レナラン。阿蘇ニ並フハカリノ山トテハ、外ニアルコトナシ。風土記ニモ高山ノ由ミエタレドモ、爰ヨリ打見ルニ、サハカリノ高嶺モエネハ、此モ風土記ニ多良之峯トアルカタヤ叶ヌヘキ。此峯ハ海中ニ差出テ、直ニ御木ニ向ヒタル高山ナレハ、マカフヘキニモ非ヌ。地勢シサレトモ、同書ニ肥後ノ荒仇山ト云ルモ、又何レナラン。彼国ノ山ニテ見放レモ、大ト思計リノ山モ阿蘇山ノ外ニハナシ。今日下藤津郡託羅郷条見合スヘシ。

〔**23**〕『出雲風土記』ニ、意宇軍團即属郡家熊谷軍團飯石郡家東北廿九里一百八十步神門軍團郡家正東七里トアリ。之ニ依ハ兵庫モ郡家ノ近傍ニアリシナラン。○郷四所『和名抄』ニ、多駄。杵島（喜之万。今日『公卿補任』ニ、仁安二年前太政大臣從一位平清盛上表辭太政大臣。并兵仗云。肥前国杵島郷云。二等為大功田。傳子孫トアリ。「天曆五年ノ文書」ニ、肥前国杵島西郷五所社内武雄宮云々トアルニヨレハ、武雄村辺ハ西郷ニテ成瀬村辺ハ東郷ナリナラン。「仁平二年ノ文書」ニ、肥前国杵島北辺大町宮御領福面村ト云コトモアリ）能伊、島見（志万美。○今日『竹崎五郎画図』ニ、文永十一年筑前ニテ蒙古ト戦ヒノ処ニ肥前国御家人白石六郎通泰、其勢百餘云々トアリ。通泰、本氏ハ日向ニテ、『源平盛衰記』ニミエタル通良カ裔ナリ。通泰、當時本郡白石郷ニ住シ白石ヲ氏トス。白石郷、近古三万石ノ地トイフ古ノ何郷タルヲ知ラス〔**300**〕）トアリ。

〔**300**〕国本、この下に続けて「（或曰、上ニ見エタル杵島東郷ノ中ナリ）」とあり。甲本この部分の本文を残したまま傍点にて抹消す。

○里一十三「一」湯本「二」ニ作ル。名称所在詳カナラズ〔**24**〕。『郷村帳』〔**301**〕ニ、本郡。大村百五十四村。小村百三十七村。人数四

万六千六百十二人（郷十一所）トアリ。（明治十年ノ調）ニヨレハ、本郡百六十九村。マタ「同二十一年ノ調」ニヨレハ、本郡一万五千八百十三戸。八万三千百六十一口。田八千五百三十五町九段。畑二千八百七十九町七段。「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員九万九千九百八十八口。二十二年改革シテ武雄町大字武雄村ノ内字柄崎、下西山ノ内、竹下・北ノ浦、富岡村ノ内、富岡・八並、武雄村大字武雄・富岡、永島村ノ内、字永雀・花島・溝ノ上、朝日村大字甘久・中野、芦原村ノ内字射場ノ元、片白村ノ内字下朝追、長谷ノ内武内村大字三間坂・真手野、住吉村大字大野、中通村大字鳥坂・犬走、三間坂村ノ内字三間阪・西川、登村大字小田・志神・六東川、登村大字永野・袴野、橋村大字大日・片白、永島村ノ内字成瀬、橋下村大字大渡・芦原、須古村大字堤・馬洗・湯崎・北小田・下小田、山口村大字山口・八丁、佐留志村大字佐留志総領分、六角村大字東郷・今泉・甘治、福吉村ノ内大字大戸、分ノ内、福治村大字福田・福吉・甘治村ノ内、字甘治・北甘治、福富村大字福富々々下分、北有明村大字仁ヶ里・辺田・々野、上竜王村大字深浦・坂田トス）

〔24〕『寛文印知集』

杵島郡百拾四箇村。高六万七千四百三拾六石三斗六升壹合。

【301】『郷村帳』ニ……上竜王村大字深浦・坂田トス」国本なし。

○**駅一所**「兵部式」ニ、駅馬。杵島五疋トアリ。『道中行程細見記』ニ、成瀬駅アリ是ナリ【302】。今ノ橋村大字成瀬ナリ【303】。

【302】国本、以下の記述なく、「成瀬ハ杵島東郷ナルコト、上ニ云ヘルカ如シ」という文あり。

【303】甲本、この下に「今ノ橋村大字成瀬ナリ」という記述あり。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡幸之時。御船泊^ニ此郡盤田杵之村^一。于^レ時。從^ニ船狀哉之穴^一冷水自出。
「一云。船泊之处。」自成^ニ一島^一。天皇御覽詔^ニ群臣等^一曰。此郡。可^レ謂狀哉島郡^一。今謂^ニ杵嶋郡^一訛之也。
郡西有^ニ湯泉出之巖^一岸峻極人跡罕及也。

昔者異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○**盤田杵**【304】此ハ、イハタキト訓ム。今訛リテ、ウハタキト呼テ上滝トカキ、又ハタキト云フ。朝日村大字甘久ニアリ。今ハ船ノ泊ル処ヲ去ルコト稍遠シ。

【304】○**盤田杵**の項目、国本は「○**盤田杵**」イハタキト訓ム。今ハウハタキ（イトウトハ通フ）ト呼テ、上滝トカク。（郷ニ上滝村アリ）とす。

○**戕戔** 異本「牂戎」ニ作ル。下同シ。此ハ牂牁ヲ誤シ者ナリ。『出雲風土記』ニ、堅立加志者。石見国與出雲国之堺。有名佐比売山是也。マタ固堅立加志者。有伯耆国大神岳是也【305】トアリ、本文ニ似タリ。『箋註和名抄』【306】ニ、『唐韵』云、戕柯（藏柯二音、『楊氏漢語抄』云、加之今舟人。亦植篙於水中以繫舟。謂之加之手不留。江戸俗謂涯崖。可以繫舟之处。為加之益此轉也）所以繫舟也。（○『廣韵』同。『玉篇』作「戕柯」。云繫船大杙也。戕柯船杙也。『華陽国志』云、楚頃襄王特遣莊躡伐夜郎軍。至且蘭極船於岸。而步戰既城夜郎。以且蘭有楸船牂柯处。乃改其為レ名牂柯。『史記』・『後漢書』作「牂柯」。柯字連上字變木從片也。後又假戕字作柯也。『竜龕手鑑』我戕柯也。俗正作戕。『魏志』常林傳注引『魏略』云、是使朱然諸葛璋攻国樊城。遣船兵於山東斫牂柯。王念孫曰、牂者長大牂々然也。柯亦長大之名猶大枝謂之柯也）マタ『万葉集』（七）ニ、舟尽志可振立而。谷川氏曰、牂柯ヲ今カセトモ云。マタ短木ヲ岸ニ

ウツヲ、地カセトイフ。政為ノ歌ニモカセト詠リ。内山氏曰、戕戔ハ舟ヲツナク杙ヲイフ。今モ遠江引佐江ノ海人ハ杙立ヲカシフルト云。平田翁曰、戕柯、マタ楫ナドヲ作ルニ、櫃木ホド良ハナケレバ、今モ彼木ヲ以テ作ルナリ。然レバ櫃ラフ名ハ、モト戕柯ヲ作レル故ニ負ヘル名ニハアラザルカ。ソハ弓ニ作ル木ヲ真弓木トイフ。矢ニ作ル木ヲ柳ト云ヲ思ヒ合スベシ。

【305】「マタ固堅立加志者。有伯耆国大神岳是也」国本・甲本なし。

【306】『箋註和名抄』ニ……王念孫曰、牂者長大牂々然也。柯亦長大之名猶大枝謂之柯也。」国本、この部分を『和名抄』ニ、戕『唐韵』云、戕戔。『漢語抄』

云、加之所以繫舟。マタ『前漢書』ノ注ニ、牂柯係船杙也」とす。

○**冷水自** 「冷」印本「洽」ニ誤リ、「自」曼本「曰」ニ作ル。

○**一云** 「一云云々」六字曼本・異本大書ス。

○**之処** 「処」異本「所」ニ作ル。

○**郡西** 郡家ハ成瀬村辺ニ在シナラン。武雄町大字柄崎ハ成瀬村ヨリ一里許リ西ナリ。此处ニ温泉アリ。下ニ云モノ是ナリ。功效尤着ク。名声亦高シ。

○**温泉** 平田翁曰、『和名抄』ニ、温泉和名由トアレド、イデユト訓ベシ。泉ハ出水ノ義ナルニ、對ヘテ出湯ノ義ナリ。タ、ニユト訓ヨリハ語ノ調モヨロシ。歌ニハ出湯ト詠ナラヘリ。今日『海東諸国記』ニ、肥前有温井二所トアルハ、何レヲ云ニカ。此处及ヒ藤津郡嬉野村ノ温泉、南高来郡島原村ノ温泉等、今ハ尤モ世ニ名アリ。小城郡南山村大字古湯ノハ之ニ次ク。『古今集』ニ、源ノサネカ筑紫ヘユ

ア・ミ・ン・ト・テ、マカリケル時ニ、山崎ニテ別レヲシミケル所ニテヨメル、シロメ命タニ心ニカナフモノナラハ何カ別レノ哀シカラマシ。
トアルハ何処ナルラン。筑紫ニハ温泉多ケレバ、ソウトハ決メ知リガタシ。『箋註和名抄』【307】ニ、『宜都山川記』曰、假阿山縣有温泉
(一云、湯泉。和名由。○温泉出『文選』東都賦、『抱朴子』暢玄篇、「舒明紀」「孝德紀」「齊明紀」温湯同訓温泉。其媛如湯故云由。或云、以天由出湯也)百疾久病。

入此水多愈矣。(○『初学記』・『太平御覽』並云、表山松『宜都山川記』今無傳本。『新唐書』・有李氏『宜都山川記』一卷未知是否。『初学記』引作假山縣有温泉。注大
谿夏□煖冬。則大熱上。常有霧氣。百病久疾。入此水多愈。此節是文也。水經夷水出巴郡魚復縣・江東南過假山縣南注云、大鷄南北夾岸雄温泉。對注夏煖冬熱。上常有霧
氣瘍疾百病。俗者多愈。即其事也。『説文』温水出隄。為涪南入黔水。非此義。『説文』又有显字云仁也。轉為显煖字。後人從水作温也。与温水字自別)マタ『本草綱目』

ニ、温湯『藏器』曰、下有硫黃。即令水熱猶有硫黃臭。硫黃主諸瘡。故水亦宜其熱處。可燂豬羊熟鷄子也。時珍曰、『漁隱叢話』云、温
泉多作硫黃氣。俗之則襲人肌膚。ソノ『啓蒙』ニ、温湯イデユヲンセン。一名陰火泉。湯液喧波湯。マタ『武雄温泉調査記』【308】ニ、
泉質炭酸無色透明ニシテ少ク、硫化水素臭ヲ放チ、極微ノ鹹味アリ。其反応ハ弱重児加理性ニシテ、煮沸スレバ其性ヲ加フ。含有スル
所ノ各成分、左ノ如シ。重炭酸那篤留母、格魯児加留母、硅酸硫化水素、温度百十八度。両前ハ温ヲ加フ。土人以テ両兆トス。(或曰【309】、
今ノ武雄温泉ハ武雄町ニアリ。日夜湧出ノ量八百四拾石。主治ハ慢性頑固皮膚病、マタ慢性梅毒、マタ慢性膀胱加答児等ナリ。肥前国柄崎温泉 定条々
一湯治上下時地下人非分義申懸猥之族於有之者。可為曲事。一湯入之輩宿賃人別五文。充毎日可出之事。一薪柴等可取之屋敷廻其外御用木者一切不可伐之事。右条々
若違犯之輩於有之者。右地下人相拘可注進送可。被御成敗者也。天正二十年六月十八日 印○ 豊公ナリ)

【307】『箋註和名抄』ニ……『説文』又有显字云仁也。轉為显煖字後人從水作温也。与温水字自別) 国本なし。

【308】『武雄温泉調査記』、国本は「明治十九年或人ノ『柄崎温泉調査記』」とす。

【309】(或曰、今ノ武雄温泉ハ武雄町ニアリ。……天正二十年六月十八日 印○ 豊公ナリ) 国本なし。甲本「肥前国柄崎温泉……天正二十年六月十八日 印

○ 豊公ナリ」の部分なし。

○岸峻 「岸」湯本ナシ。武雄温泉ノ旁ニ蓬萊山、マタ白竜峰等アリ。其高サ二三十丈ナリ。巖岸峻極トアルハ之ヲ云ナラン。

孃子山。〈在二郡東北一〉。

同天皇行幸之時。土蜘蛛八十女。又在^二此山頂^一常捍^二皇命^一。不肯^二降服^一。於^レ茲遣^レ兵滅。因曰^二孃子山^一。

異本此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○**孃子** 印本ニハ、コト訓ヲ付タレド、如何アラン。『新撰字鏡』ニ、孃（乎美奈）、阿孃（波々）トアリ、字書等ニモ孃ヲハ、又ヲミナト両様ニ訓タリ。『輟耕録』ニ、娘子俗書也。古無之。當從孃。今乃通為婦女之称。故子謂母曰娘。而世謂穩婆曰老娘。女巫曰師娘。娼婦曰花娘。南方謂婦女之無行者。亦曰夫娘。謂夫人之卑賤者。曰某娘。曰幾娘。鄙之婆娘トアリテ、孃ト娘トハ同義ニシテ、ハハト訓マヌニハ非サレドモ、此処ニテハヲミナト訓ムカタ宜シカラン。子ハ添ヘタル字ノミ。元來八十女云々ト云ヨリ起レル名ナレバ、ハハコト訓テハ義叶ヒカタシナラン^{上ニアリ}【25】【310】。（今日西多久村大字板屋ニアリ【311】）後世、郡界ノ變リツル者ト聞ユ。栗田氏曰、『和名抄』ニ、信濃国小縣郡童女（乎無奈）。『靈異記』ニ、信濃国小縣郡孃里トアル。即ヲムナ郷ナリ【312】。伊藤氏ノ女山ト云説アタル。ヲムナ又オミナナド訓ムベシ。『常陸風土記』鹿島郡ニ、童女松原トアルヲモ考合スベシ【313】。

【25】伊藤氏曰、『肥湯古跡記』ニ、多久ノ女山ハ鈴鹿御前ノ靈ナリ。則山ノ姿、女ノ髪ノユリカレノタル形ニ似タリ。

肥前国会天山ノ西三里許ニ、男山・女山トテアリ。天山ヨリハ遙ニ低シ。佐嘉ヨリ唐津ニユク人、天山ヲ東ニミ、男山・女山ヲ西ニミテ通ルナリ。

【310】 国本・甲本、この下に「伊藤氏曰、小城郡多久郷ニ女山アリ。是ナラン」という記述あり。

【311】 「今日西多久村大字板屋ニアリ」 国本なし。

【312】 「栗田氏曰、『和名抄』ニ、信濃国小縣郡童女（乎無奈）。『靈異記』ニ、信濃国小縣郡孃里トアル。即ヲムナ郷ナリ」 国本なし。

【313】 『常陸風土記』鹿島郡ニ、童女松原トアルヲモ考合スベシ」 国本なし。

○**東北** 孃子山トシテ郡家ヲ成瀬村辺ニアリト定ムルトキハ、東北ハ方角タガヘリ。女山ハ成瀬村ノ北、マタハ西北トハ云ベケレドモ、東北トハ云難シ。然レバ本文東ハ西ノ誤リカ。

○**八十女** 此ハ人ノ名ナラン。八十人ノ女ト云コトニハ非ザラシ。

○**山頂** 「頂」「頭」ニ作ル。

縣南二里【314】。有二孤山^一。從^レ坤指^レ艮。三峯相連。是名曰^二杵島山^一。坤者曰^二比古神^一。中者曰^二比賣神^一。艮者曰^二御子神^一。へ一名軍神。動則兵興矣。郷閭士女。提^レ酒抱^レ琴每^レ歲春秋。携^レ手登望。樂飲歌舞。曲盡而歸。歌詞云。阿羅札符縷。耆資麼加多愷塢。嗟峨紫彌刀。區縫刀理我禰弓。伊謀我提塢刀縷。是杵島曲。

此條【315】、『仙覺萬葉抄』及ヒ松浦郡ニ引ク、松浦云々ノ件ノ如シ。

【314】 国本・甲本、『仙覺萬葉集注釈』所引の逸文を娘子山の条の上に配置す。

【315】 国本、以下の記述を『仙覺萬葉抄』及ヒ『釈日本紀』第二『肥前風土記』トテ引タリ。カハル本モアリシニヤ」とす。甲本では『仙覺萬葉抄』及ヒ『釋日本紀』等ニ、『肥前風土記』トテ引タリ。カハル本モアリシニヤ。奇シ」とす。

○南二里 郡家ヲ試ニ成瀬村辺トシ、ソレヨリ南二里【316】ニ一孤山云々ハ今ハアルコトナシ。

○一孤山從坤指艮 成瀬村ノ東南ニ一帯ノ蜿蜒トシテ、乾ヨリ巽ヲサシテ横タハル山アリ。之ヲ横山トイフ。從坤指艮。マタ孤山三峯云々ニ叶ハズ。本文恐ラクハ誤リナラン。(郡家ヲ成瀬村辺ニアラストスルモ、此近旁ニ孤山三峯モナシ【317】)

【316】 国本・甲本、この下に「(今ノ十二丁)」という分注あり。

【317】 「郡家ヲ成瀬村辺ニアラストスルモ、此近旁ニ孤山三峯モナシ」 国本なし。

○軍神【318】 上ニ引ク『三代実録』ニ、兵庫震動トアルヲ考合スレバ、此軍神ノ怒リマストキハ兵庫ノ震動シ、兵庫震動スレバ兵興ツコトアルナリ。

【318】 ○軍神 の項目、国本は「○軍神」此ハ山城国ナル將軍塚ノ類ナルヘシ。上ニ引ク『三代實録』ニ、兵庫震動トアルヲ合セ考フレハ、此軍神ハ兵庫ノ守護神トシテ其辺ニアリシナラン。依テ軍神ノ怒リシトキハ兵庫モ震動セシナラン。(武雄神社ノ古文書ニ、ソノ神官ニ武庫氏アリ。此兵庫ノ官人ノ裔ナラン)とす。甲本は「上ニ引ク」という記述の上に「此ハ山城国ナル將軍塚ノ類ナルベシ」という一文あり。

○樂飲 一本此二字倒置ス。

○而帰「而」一本ナシ。

○阿羅礼符縷ハ霰降ルニテ者資麼ニカ、ル枕言。(者資麼ト加資麼【319】)

【319】「(者資麼ト加資麼)」国本・甲本なし。

○者資麼加多愷塙ハ杵島加岳手ナリ。者ハ加ニ通ヒテ加資麼ハ囂マニテ霰ノ降音ノカシマシト云カケ轉シテ杵島ニ続ケツルナリ。

○嵯峨紫弥刀ハ陰シサ、トナリ。『新撰字鏡』ニ、嵯峨高山之貌。佐加志。マタ則男山峻嶮之貌。佐加志。マタ嶮峴。佐加志峨也。嶮也ナドアリ。此等ノ字義ナリ。

○區縫刀理我祢尼ハ取草不得テナリ。此岳ノ陰シサニ草ヲモ取リテモ登リ得ズトナリ。

○伊謀我堤塙刀婆ハ妹之手取留ナリ。山路ノ草ハトリ得ヌ者カラ、妹カ手ヲ取リテ行クトナリ。一首ノ義ハ此ノ杵島カ岳ニ登ルニ、某坂路ノイト、嶮シクテ、登リ得ズ。路ノ旁リノ草タニ取リカヌレバ、妹カ手ヲ取リツ、助ケラレテ登リ往クトナリ。此歌ハ『古事記』(仁德天皇段)ニ、波斯多尼能。久良波斯夜麻表。佐賀志美登。伊迦伎加泥氏。和賀氏登良須母。マタ波斯多尼能。久良波斯夜麻波。佐賀斯初杼。伊毛登能煩礼波。佐賀斯玖母阿良受ナドアルニ、能似タリ。『万葉集』(三)ニ、霰零。吉志美我高嶺乎。陰跡草取可奈和。妹手乎取トアルハ、本文ヲ誤リテ仙柘枝歌トナセルナリ。(荒木田氏曰、可奈和ハ可祢手ヲ誤レルナリ。今日和ヲ手トハ誤ルヘキニ非レハ、此ハモトニナリシヲ、和ニ誤リシカ。字体能似タリ)

○杵島曲「曲」下一本ニ「也」字アリ。栗田氏曰、『常陸風土記』ニ、建借間命。連船編棧差雲益。張虹旌天之鳥琴。天之鳥笛。隨波遂潮。杵島唱歌。七日七夜。遊樂歌舞云々トアリ【320】。建借間命ハ火国造建緒組ノ子ニテ、其支派ナル族ナラン。杵島唱歌ノ『肥前風土記』云々。(今日ノ本文ノ歌)是杵島曲也トアル歌ナリ。ソレヲシモ唱ヘタルハ元肥前人ニテ、ヨク其歌ヲ知レル故ニヤアラン。

【320】国本、以下の部分、「西野宣明氏(常陸人)曰、杵島曲者起肥前国杵島郡杵島岳也。『万葉抄』所引『肥前風土記』曰、郷閭士女云々。(即本文ナリ)由此觀之其事。相似益今世俗所哥舞之調云々トアレト、此杵島唱歌ハ本文ヲサスニ非シト覺ユ」とす。

藤津郡。郷四所。里九。驛一所。烽一所。

郡「戸令」ニ由ニ、本郡ハ四郷ナレバ下郡ナリ。大体ハ子位ヨリ已ニ至ルマデハ海ニ臨ミ、已ヨリ午ニ至ルマデハ高来郡ニ界シ、午ヨ

リ戌ニ至ルマデハ彼杵郡ニ界シ、戌ヨリ子ニ至ルマデハ松浦郡ニ接ス。麦・綿・藍・茶・楮・磁土等ヲ産ス。『旧事紀』(十)ニ、葛津立
国造。志賀高穴穗朝御世。紀直同祖。大名草彦命児若彦命定賜国造。(今日葛津ハ藤津ナリ。『大日本史』注ニ、本文ノ事ヲ論シテ云、疑直之訛。蓋国造
有賜直姓者也トアレト如何アラン。立ハ衍ナルヘシ。又同注ニ、清和帝時。有前藤津郡領葛津貞津。或国造之裔也) マタ『宇佐大鏡』ニ、宇佐宮御領肥前国藤
津郡桑垣貳箇所云々。彼所為遼遠之間。依不叶神事。以天喜二年八月廿五日。相轉之状云。件藤津雖為官領。依為遠国用途之間。不
便官用。自以罕輦。仍尋便宜。以近郡日田郡(○豊後)散位太蔵朝臣永明。進符桑垣。限永年相轉申既畢者。マタ『新撰往生者傳』(竹林
寺顯意)ニ、上人顯意云々。到肥前州藤津郡八本木村。マタ『元亨釈書』【321】ニ、釈覺鑊姓平氏。肥之前州人。將門之属胤也。景代武略。
其父負勇名。郷黨蔽畏。(別傳云、柏原天皇裔相馬氏。純朝末葉伊佐平次兼元。○異賊欲襲本朝。到肥州松浦。澳異勢兵剛。而吾兵尽慮处。平吹兼元出陣術。異兵辟
易。此勢軍破。陳敗北等云々。主上有御感。補太宰少貳云々) マタ『紀州根来寺血脉』【322】ニ、肥前国府智津莊。総追捕使伊佐平次兼元(或云兼平)
云々。マタ『密厳上人行状記』ニ、抑當国府知津莊ハ、元来仁和寺成就院ノ大僧正御房ノ領知ナリ。本家ノ弟子慶照房入守代官トシテ
下向セシ折カラ、御庄内ニ一字ノ山寺ヲ構エヘ云々【26】。マタ『武鑑』【323】ニ、鍋島家二万石。在所肥前藤津郡鹿島ナドアリ。(今日『三
代実録』貞觀三年八月ニ、授肥前国正六位上円生神從五位下トアリ。本郡塩田村ニアリ。現今郷社)

【26】「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、藤津庄六百町。○厳

【321】「マタ『元亨釈書』ニ……主上有御感補太宰少貳云々」国本なし。

【322】「マタ『紀州根来寺血脉』ニ、肥前国府智津莊。総追捕使伊佐平次兼元(或云兼平)云々」国本は『密厳上人行状記』の下に記す。

【323】「マタ『武鑑』ニ、鍋島家二万石。在所肥前藤津郡鹿島ナドアリ」国本なし。

○郷四所 『和名抄』ニ、塩田(之保田)能美託羅トアリ。尚一所ヲ逸ス。

○里九名称所在詳カナラズ【27】。『寛文印知集』【324】藤津郡七拾九箇村高三万七百五拾石八斗四合。『郷村帳』【325】ニ、本郡郷数六郷。
大村百村。小村八十一村。人数三万五千五百六人。(明治十年ノ調)ニヨレハ、本郡百十六村一町ナリ。同二十一年、一万二千〇六十八戸。六万五千四百六
十口。田三千九百十六町三段。畑三千二百二十三町。「三十一年ノ調」ニヨレハ、人員六万八千七百九十九口。二十二年改革シテ南鹿島村大字高津・原・重ノ木・納富・分能、
古見村大字山浦・三河内、八本木村大字八本木、古枝村大字古枝、七浦村大字音成・飯田、多良村大字多良・糸岐、大浦村大字大浦、北鹿島村大字中村・常廣・井手・森、
五町田村大字大五町田・真崎・谷所、久間村大字久間、塩田村大字馬場・下大草野、西嬉野村大字下宿・不動山、東嬉野村大字下野・岩屋・川内、吉田村大字吉田トス)

【27】『海東諸国記』ニ、源信吉^{改仁二年ナリ}戊子年遣使来賀。観音現像書称肥前州風島津大守源信吉。○風ハ鹿ヲ訛リタルカ。

【324】『寛文印知集』藤津郡七拾九箇村高三万七百五拾石八斗四合」国本・甲本なし。

【325】『郷村帳』ニ……東嬉野村大字下野・岩屋・川内、吉田村大字吉田トス」国本なし。

○**駅一所**「兵部式」ニ、駅馬塩田五疋トアリ。是ナリ。『道中行程細見記』ニ、塩田・嬉野ノ二駅ミエタリ。此頃ハシカリシナラン。

○**烽一所**詳カナラズ。

昔者。日本武尊行幸之時。到^レ於^ニ此津^一。日没^ニ西山^一。御船泊之。明旦遊覧。繫^三船纜於^ニ大藤^一。因^ニ藤津郡^一。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○**巡幸**「巡」竈本・曼本「行」ニ作り、「幸」異本「行」ニ作ル。

○**此津**此ハ何処ナラン。詳カナラネド、本記ニ四郷トアリテ、『和名抄』ニ、三郷アリ。是レ一所ヲ逸セリ。其逸セル所ハ郡ノ名義ノ起ル所ニテ、今ノ七浦村ノ辺カ。然イフ由ハ、是時御船ノ泊シハ此処ナラント思ハルレバナリ。本記ニ塩田川ヲ郡ノ北トシ、羅託郷ヲ郡ノ東トアルニ付テ考フレバ、郡家ハ南鹿島村・古枝村ノ辺リニアリシナルベシ【28】。上ニ引ク『密厳上人行状記』ニ、府知津莊トアルモ、是ナラン【326】。（本国人今泉千秋氏曰、南鹿島村大字納富分ニ、藤森ト云所アリ。今ニ大藤アリ。是レ御船ヲ繫キシ処ニハアラサルカ）

【28】鹿島

通志曰、藤裏津村大路傍有一岑蔚。称藤裏所祭神也。今也荒廃叢祠偉存焉。年代久矣。考其詳唯傳以有此裏。名郡曰藤津。八年琴路社末社記曰、藤森大明神。旁書ニ、藤津郡根源森也。

【326】「上ニ引ク『密厳上人行状記』ニ、府知津莊トアルモ、是ナラン」国本なし。

○**船纜**「纜」湯本「覧」ニ作ル。

○**藤**『和名抄』ニ、『尔雅』註云、「藟」字亦作「藁」。『和名抄』布知、藤也。似葛而大トアリ。

能美郷。〈在_二郡東_一。〉

昔者。纏向日代宮御宇天皇。行幸之時。此里有_二土蜘蛛三人_一。〈兄名大白。次名中白。弟名小白。〉此人等造堡隱居。拒_二皇命_一不_レ肯_二降服_一。尔時遣_二陪從紀直等祖釋日子_一。以令_二誅滅_一。於_レ茲大白等三人。但叩頭陳_二己罪過_一。共乞_三更奉_二主人_一。因曰_二能美郷_一。

昔者 異本「昔」上_二「往」字アリテ「者」ナシ。

小白 「小」曼本・異本「少」ニ作ル。

○**天白中白小白** 『日本紀』（景行天皇十二年十月）ニ、到速見邑云々。有_二土蜘蛛_一。一曰青。二曰白。トアリ。此白ハ此处ノ三白ヲスベテ云ニヤトモ思ハルレド、速見ハ豊前国ニテ、土地懸隔ナレバ然ニハアラジ。

○**拒皇命** 此三字、竈本・曼本・湯本ナシ。異本「皇」字ナシ。

○**降服** 「服」異本「伏」ニ作ル。

○**紀直等祖釋日子** 『姓氏錄』（河内神別）ニ、紀直。神魂命五世孫。天道根命之後也。『紀伊夫野社記』【327】ニ、美麻貴天皇御世。豐耳之七世祖。坐志天道根命云々。マタ（和泉神別）紀直。神魂命子。天御食持命之後也。マタ『旧事紀』（一）ニ、天御食持命（紀伊直等祖）。マタ『統紀』（神龜元年十月）ニ、紀伊国名草郡大領外從八位上紀直刀。栗田直摩祖為国造。マタ（延暦九年五月）紀直五百反為紀国造。マタ『紀伊国造系図』ニ、垂仁天皇御宇十六年。兩大神【328】以夢告于大名草命。鎮座于今之名草宮地也ナドアリ【329】。マタ「神代系紀」ニ、神皇產靈神兒天御食持命紀直等祖。栗田氏曰、葛津ノ国造ノ若彦命ハ、紀国造ノ同族ニテ、此ノ釋日子ト同人ニテ、此時土蜘蛛ヲ誅滅セシ功ニヨリテ國造ニ定賜ヒシナルベシ。

【327】『紀伊夫野社記』ニ、美麻貴天皇御世。豐耳之七世祖。坐志天道根命云々 国本・甲本なし。

【328】底本、「大神」の左傍に「マタ」「神代系紀」ニ、神皇產靈神兒天御食持命紀直等祖」と記す。

【329】国本、この下に「釋日子ハ此同族ナルヘシ」という記述あり。

○**以令** 此二字、印本倒置ス。今之ヲ改ム。「令」曼本・湯本ナシ。

○**乞更** 印本「更」下ニ「入」アリ。湯本ニ抛テ削ル。○郡家【330】ヲ南鹿島村辺ニ在シトスレバ、本郷ハ其東トアレバ、今ノ能古見村ハ位置タガヘリ。東字ハ誤リナラン。

【330】「○郡家」以下の記述、国本は「○郡家ヲ高津原村辺ニアリトスル時ハ、本郷ハ其東ナレハ、八本木村・常廣村等ノ辺ナルヘシ」とす。甲本、この部

分の記述、「○郡家ヲ南香島村邊ニアリシトスル時ハ、本郷ハ其東トアレハ、北鹿島村ノ邊ナルベシ。（今、能古美村アリ。此ヲ能美郷トスレハ、位置タカヘリ）」とす。

託羅郷。〈在_二郡南_一臨_レ海。〉

同天皇行幸之時。到_レ於_二此郷_一。御覽。海物豐多。勅曰地勢雖_レ少_二食物_一豐足。可_レ謂_二豐足村_一。今謂_二託羅郷_一訛之也。

（考フルニ、東方遙ニ阿蘇山・阿蘇ニナラフハカリノ山【331】）

【331】 底本、この注の上に十一字分の空白あり。なお、国本・甲本この注なし。

託羅郷 『筑後風土記』（三毛郡）ニ、昔者棟木一株。生於郡家南。其高九百七十丈。朝日之影。蔽肥前国藤津郡多良之峰。葛日之影。蔽肥後国山鹿郡。（○鹿本郡）荒爪之山云々。因曰御木国。後人訛曰_二三毛_一。今以為郡名トアリ。『日本紀』（景行天皇十八年七月）ニ、此事ヲ云所ニ、此ノ藤津郡多良之峰ヲ杵島山トスルハ如何アラン。杵島郡ニハ然イフハカリノ高山アルコトナシ。又地モ少シ。北ニカタヨリタリ。多良峰ハ此辺リノ高山ニテ、本郡オヨヒ彼杵・高来ノ二郡ニ跨リ、又方位モ叶ヒ、其麓ノ多良村ハ海ニ臨ミタル地ニテ、実ニ海物ノ豐足ナルコト、今ニ本文ノ如シ。此辺リ、即チ託羅郷ナリ。山頂ニ多良岳神社アリ。和銅年中ノ創建ト云。

○郡東 【332】「東」ハ「南」ノ誤リナラン。実地然リ。（下文ノ郡西南託羅之峯トアルモ思フベシ）

【332】 国本、以下の記述なく、「上ニ能美郷ヲ郡東トシ、コヽニ又東トアルハ訝カシ。此ハ東南ニテ南ヲ脱セシナラン。地形亦叶ヘリ」なる文あり。甲本は国会本の「東南ニテ南ヲ脱セシ」の部分の傍点で抹消し、「南ノ誤リ。」とし、「地形亦叶ヘリ」の部分を「地形然リ」とす。

○**豊多** 「豊」湯本ナシ。

鹽田川。〈在_二郡北_一〉

此川之源。出_二郡西南託羅之峰_一。東流入_レ海。潮満之時逆流。潮満流勢太高。因曰_二潮高満川_一。今訛謂_二鹽田川_一。々源有_レ淵。深_二許丈_一。石壁嶮峻。周匝如_レ垣。年魚多在。東邊有_二湯泉_一。能愈_二人病_一。異本此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○**此川** 或曰、此川、本源ハ多良山（即チ託羅山）ヨリ出テ、吉田村ヲヘ東北ニ流レ、東嬉野村塩田山ヲヘ、北鹿島村大字常廣ニ至リテ海ニ入ル。其間六里【333】許リ。支源アリ。西嬉野村大字不動山ヨリ出テ、裏淵トナリ、東嬉野村ニ至リテ本流ニ合ス。或曰【334】、源ヲ東彼杵郡波佐美山、マタ本不動山村ニ発シ合流、東下シ多良山ノ西ニ発スル一水ヲ入レ、塩田村ニ至ル。或曰、塩田川ハ二等ナリ。深処ハ四間餘、浅処ハ二三尺餘。廣処ハ三拾間、狹処ハ七八間。緩流ニシテ水質清淡ナリ。舟筏ヲ通セスト雖モ、灌漑ニ必要ナリ。源ヲ西嬉野村靈空藏岳ヨリ発シ、兜山川等数流ヲ合シ、下宿村ヲ回り、吉田川ヲ入レ、大草野村ニ至リ、小田志川ヲ入レ、東流シ塩田村・五丁田村ノ界ニ至リ、下流シ常廣村ニ至リ、江トナリ、遂ニ海ニ入ル。余足跡未タ本川ハ上下ヲ極メズ。上説ノ如何ナルヲ知ラズ。

【333】 底本・甲本は「六里」に作るも、国本は「七里」とす。

【334】 国本、以下の記述なし。

○**逆流潮満** 「潮満」湯本「漸細」ニ作ル。

○**流勢** 「流」湯本「潮」ニ作ル。

○**太高** 「太」印本「大」ニ作ル。曼本・湯本ニ扨テ改ム。

○**塩田** 「兵部式」ニ、駄馬塩田五疋トアリ。『東鑑』（承久ノ頃）ニ、潮田四郎太郎。潮田六郎ナドアリ。此処ニ由アル人ニハ非サルカ【335】。（或曰、伊勢・紀伊等ニモ潮田氏ノ人アリ）【336】『夫木集』【337】ニ、中務卿ミユ。岩高キ塩田ノ川ニ舟ウケテサシノホリタル月ヲ見ル哉。

【335】 甲本、以下の記述なし。

【336】 国本、この下に「南里氏曰、壽永五年奥州ノ人中村家光、奥州ノ戦功ニヨリ佐嘉郡大財村并二本郡塩田村ノ地頭ヲ賜フト云コトアリ」とあり、頭注に「弼

云、『地誌目録』・『肥前舊事』三冊、(写本) 南里居易撰、南里氏盖是」とあるも、底本・甲本なし。

【337】 『夫木集』ニ、中務卿ミユ。岩高キ塩田ノ川ニ舟ウケテサシノホリタル月ヲ見ル哉」国本なし。

○川源 「川」 曼本ナシ。

○有淵 轟淵ヲ云カ。西嬉野村下宿ノ西ニアリ【338】。

【338】 「西嬉野村下宿ノ西ニアリ」 甲本なし。国本、この部分に「 村」とのみあり。

○二許 「二」 湯本 「三」 ニ作ル。渋江公芳氏曰、本文「二」上ニ「十」字ヲ脱スルナラン。現地然リ。

○年魚 或曰、松浦川・佐賀川等ノ年魚ハ口物ニ金糸ヲマトヒ、本川ノハ銀糸ヲ纏フ。

○温泉 「湯」 異本「温」ニ作ル。今ノ泉ハ西嬉野村ニアリ。或曰【339】、泉ノ温度ハ摂氏ノ九十五度。岩石ノ間ヨリ出ヅ。其量ハ一分時間、一一二五九許。瓦斯球ヲ上騰ス。泉質ハ重炭酸遭達及ヒ、重炭酸石灰質。主治ハ黴毒。マタ打撲創傷、痛風、倭麻質、斯麻痺不遂、筋肉挛縮、鑛物中毒等ナリ。新温泉アリ。旧泉ヲ去ル二丁餘川ノ左岸ニアリ。近来之ヲ修造ス。其事詳カニ、谷口中秋氏(本郡人)ノ記スル所ノ石碑ニ見エタリ。

【339】 「或曰……谷口中秋氏(本郡人)ノ記スル所ノ石碑ニ見エタリ。」 国本なし。代わりに「功効声誉柄崎泉ノ如シ」とあり。

彼杵郡。郷四所。里四。驛二所。烽三所。

郡「戸令」ニ由ニ、本郡四郷ナレバ下郡ナリ。大体ハ戊亥ノ位ヨリ丑ニ至ルマデハ松浦郡ニ界シ、杵島郡ノ界少ク、コレヲ承テ藤津郡ニ轉ス。藤津郡コレヲ承テ寅ニ至ル。寅ヨリ午ニ至ルマデハ高来郡ニ界シ、其餘ハ海ニノゾム。綿・麻・藍・茶・楮・櫨・鮑・烏賊・海參・鯉・鰻・石花菜・塩等ヲ産ス。(明治十一年、本郡ヲ分テニトシ、大村地方ヲ東トシ、長崎地方ヲ西トス)『紀州根来寺血脉』ニ、伊佐平次兼元杵木黨也。(今日杵木ハ彼杵。或ハ彼木ノ誤リ)マタ『大傳法院本願上人傳』ニ、伊佐氏。是杵木黨也。マタ『海東諸国記』ニ、清男。己丑年。遣使来朝。書称肥前州彼杵郡。彼杵遠江清原朝臣清男。以宗貞国請接待。マタ源重俊【340】。丁亥年。遣使来賀。舍利分身。書称肥前州大村太守源重俊。居大村能武等有麾下兵。マタ可被参御方之由【341】。承候目出候。就其重等榮次茅承候。令旨可取進候。其時御所領所々

同可申沙汰候。恐々謹言。十月廿九日。彼杵郡一揆人々御中。武朝（判）（菊池力）マタ『寛知集』ニ、彼杵郡六十八村ナドアリ。（本国人関真先氏曰、本郡ノ松原村ヲ古ハ郡村トイフ。郡家ノ在所力）

【340】底本「重俊」の左傍に「マタ「河上社正応五年造宮用途支配総田数文書」ニ、彼杵庄四百十二町五段。」という記述あるも、国本・甲本この傍注なし。

【341】「マタ可被参御方之由……彼杵郡一揆人々御中。武朝（判）池（菊力）」国本なし。

○郷四所

『和名抄』ニ、大村（於保無良。○『大和物語』首書ニ、橘良利古、今作者肥前国藤津郡大村人也。出家号寛蓮。為宇多院殿上法師園基之堪能也。因為某聖大徳。延喜十三年五月五日。某聖奉勅作某式献之。藤津ハ彼杵ノ誤リカ。又藤津郡【342】村大字大□方村アリ。此ニハアラサルカ。「大村覚書」ニ、純友子諸純子直澄。

依一条院勅正暦五年純反ノ靈ヲ御靈ノ神ニ祭ラレ、直澄ヲ遠江權守ニ任シ、肥前国藤津・彼杵・高来三郡ノ領主トナリ給フ。依テ彼杵郡大村ニ住ス。或曰、大村ハ一名ヲ鯛浦トイフ。沿海殆八十里、連山累環シテ湖ノ如シ。西北ニ針尾島アリ。湾口ヲ擁シ、僅ニ潮信ヲ通ス。南ヲ伊浦瀬戸トイヒ、北ヲ針尾瀬戸トイフ。両峽並ニ狭ク且浅ク、潮退チハ舟行不便ナリ）彼杵（曾乃喜。○「光明峯寺関白道長建長二年処分記」【343】ニ、家領肥前国彼杵庄。マタ奉寄進東寺肥前国彼杵庄目宇村内千松寺事。右寺者。当

村地頭兵頭助平幸純先祖草創之寺院也云々。元弘三年三月廿一日。目或ハ由ニ作ル。マタ深堀弥五郎政綱謹言上【344】。下賜安堵国宣。備後代亀鏡肥前国彼杵庄戸浦。八内高濱地頭職事副進云々。右彼高濱地頭職者。政綱重代相傳当知行。無相違之地也。然早依傍例。且任当知行之実。下賜安堵国宣。欲備後代亀鏡矣。仍謹言上如件。建武元年六月日件地頭職任宣旨状。当知行不可有相違矣。判（二条師基）マタ深堀平五郎入道明願謹言上。欲早下賜。安堵国備後代亀鏡。肥前国彼杵庄戸八浦内切杭間事。副進

云々。右被切杭地頭職者。明願重代相傳。当知行無相違地也。然早且依傍例且任当知行之实。下賜安堵国宣。欲備後代亀鏡矣。仍恐惶謹言上如件。建武元年六月日件地頭職任宣旨状。当知行不可有相違矣。判（同上）。マタ肥前国彼杵庄領家職（三条中納言入道跡）事。為今度忠節之賞。所被充行也者。依征西將軍仰執達如件。元中二年正月十三日。阿蘇大宮司。侍從（判館）。（○館或ハ殿ニ作ル）本国人久米邦武氏曰【345】、彼杵庄ハ全部二十餘里ニ延表シテ東福寺領タリ。『博多日記』ニ見ユ。必九条家ノ寄附ナラン）トアリ、此ヲ本記ノ二ニ加フレハ四郷トナル【346】。

【342】「又藤津郡 村大字大□方村アリ。此ニハアラサルカ」国本・甲本なし。

【343】「「光明峯寺関白道長建長二年処分記」ニ、家領肥前国彼杵庄」の記述、国本、頭注にて記す。

【344】「マタ深堀弥五郎政綱謹言上……建武元年六月 日 件地頭職任宣旨状。当知行不可有相違矣。判（同上）」国本なし。

【345】「本国人久米邦武氏曰、彼杵庄ハ全部二十餘里ニ延表シテ東福寺領タリ。『博多日記』ニ見ユ。必九条家ノ寄附ナラン」国本なし。

【346】「此ヲ本記ノ二ニ加フレハ四郷トナル」この部分の記述、国本・甲本は「二郷ヲ逸シ、本記ハ浮穴・周賀アリテ、二郷ヲ逸ス。今、二書ヲ併セテ四所トシ、

始テ全キヲ得タリ」とす。

○**里四** 下ニ健村里アリ。尚三所ヲ免ス。(「明治十年ノ調」ニヨレハ、本郡五百十村九町ナリ【347】)

【347】「(「明治十年ノ調」ニヨレハ、本郡五百十村九町ナリ。)」国本なし。

○**駅二所** 「兵部式」ニ、駅馬。大村。新分。船越(今日「正和三年ノ文書」【348】ニ、肥前国伊佐早庄雜掌申当庄船越村云々。諫早・船越ハ北高来郡ナリ)各五疋トアリ。此頃ハ一所ヲ増スカ。本記ニ二所トアルハ、式ノ三所ノ中ノ何レナラン。『道中行程細見記』ニ、彼杵・大村・諫早ノ三駅アリ。船越村ハ諫早ノ西ニアリ。式ノ頃ハ此処官道ニテ、ソコニ駅ヲオキ、後ニ道筋ノ変ルニ從ヒ船越ヲ廢シ、諫早ニ遷セシカ。諫早ハ則チ永昌村ナリ。又式ニハ新分アリテ、彼杵ナク、『細見記』ニハ、彼杵アリテ新分ナシ。此モ後ニ置易シカ。或曰、大村駅ノ東南ニ新分村アリ。今ノ官道ノ西ニシテ海ニ近シト如シ。然ラバ古ハ官道、今ト異ナリ。依テ新分ヲ駅トセシナラン【349】。『武鑑』【350】ニ、大村家二万七千九百七十石餘。居城肥前国彼杵郡大村。○長久保玄珠氏曰、長崎ハ肥前彼杵郡ニテ、福富浦トモ瓊浦トモノフ。平重盛ノ孫某、北條氏ノ家宰トナリ、伊豆・長崎ヲ領シ、長崎ヲ氏トス。元弘ノ乱ニ其ノ後為基、西海ニ流落シ、此地ニ居リ、子孫其地ノ領主トナリ、氏ヲ地名トス。為基、八世甚右衛門領主タリシヲ、豊公、九州征伐ノ時、没収セラレ、後ニ公領トナル。元龜二年マデハ只六町アリシカ。元禄ノ頃ヨリ八十町、一万六十戸トナル。町年寄八人アリ。奉行二人、立山ノ官舎ニアリ。○明治廿三年、第三鎮守府ヲ定ム。府ハ東彼杵郡佐世保港ニアリ。其區畫ハ筑前・豊前国界ヨリ九州西海ニソヒ、日向国南那珂・南諸縣郡界ニ至ル。海岸面オヨビ壹岐・對馬・沖繩・諸島ノ海岸、海面ナリ。常備兵二百五十八人。海兵團千五十八人。【351】

【348】「今日「正和三年ノ文書」ニ、肥前国伊佐早庄雜掌申当庄船越村云々。諫早・船越ハ北高来郡ナリ」国本、この分注なし。甲本は「(諫早・船越ハ北高来郡ナリ)」の部分なし。

【349】甲本、この下に「又、諫早・船越・永昌ハ、高来郡ノ中ニハ非サルカ。実地ニ付テ能正スヘシ」とあり。

【350】国本、『武鑑』以下の記述なし。

【351】国本、この下に「○**燦三所** 詳カナラス」という記述あり。底本・甲本、この項目なし。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。誅ニ滅球磨噲。凱旋之時。天皇在ニ豊前国宇佐海濱行宮。勅ニ陪從神代

直^一。遣^二此郡速来村^一捕^二土蜘蛛^一。於^レ茲有^レ人。名曰^二速来津姫^一。此婦女申云。妾弟名曰^二健津三間^一。住^二健村之里^一。此人^有美玉^一。名曰^二石上神之木蓮子玉^一。愛而固藏。不^レ肯示^レ他。神代直尋^二覓之^一。超^レ山逃走落^二石岑^一。〈郡以北之山。〉即逐及捕獲推^二問虛実^一。健津三間云。実有^二二色之玉^一。一者曰^二石上神木蓮子玉^一。一者曰^二白珠^一。雖^レ比^二礪碓^一願以献之。

昔者異本「昔」上^二「往」字アリテ「者」ナシ。

凱旋此二字、印本ナシ。曼本ニ抛テ補フ。

○豊前国宇佐「民部式」ニ、豊前国上云々。右為遠国。マタ『和名抄』ニ、豊前国（登与久尔乃美知仍久知）、マタ豊前国（国府在高都郡）管八。（田万三千二百餘町。正公各二十万束。本額六十万九千八百二十八束。雜額二十万九千八百二十八束）田河。企救（岐久）。京都（美夜古）。仲津。築城（豆伊岐）。上毛（加牟豆美介）。下毛。宇佐。マタ『海東諸国記』ニ、豊前州。郡八。水田一万三千二百七十八町二段ナドアリ。

○宇佐海濱行宮宇佐海ハ下ニヒク関氏ノ説ノゴトク、宇土濱ノ誤リナルベシ。豊前国ノ三字ハ、宇土ヲ宇佐ニ誤リタルヲ知ラズ。後人ノ叨ニ書添ヘツル者ナラン。

○神代直下（高来郡条）ニ註スベシ。

○速来村下ニ註スベシ。

○速来津姫速来村ニ住ミ、其名村ヲ我名ニ負ヒタルカ。又此姫ノ名ヲ地名ニ負セタルカ。詳ラカナラズ。津ハ之ニ通フ助字。

○健津三間「健」ハ住村ノ名ニテ、「三間」ハ其人ノ名ナラン。「津」ハ上ニ同シ。

○健村之里所在詳カナラズ。

○美玉【352】『箋註和名抄』ニ、『四声字苑』云、玉（語欲反白玉。和名之良太麻。○玉崑山藍田所出之物。皇国不産。故玉帶音読。不曰多麻乃帶。古所云。之良多麻。盖皆真珠非白玉也）宝石也。（○『説文』玉石之美。有五德象三玉之連一其貫也）『兼名苑』云、球琳（求林二音）琅玕（郎干二音）琨瑒（昆遙二音）琬琰（遠掩二音）皆美玉名也。（○『本草和名』玉石部下云、青琅玕。一名瑜。一名璐。一名球路。一名球琳。一名琬琰。一名琨瑒。已上五名出。『兼名苑』按球琳・琅玕・琬琰並見『尚書』禹貢琬琰見。『尚書』願命。『兼名苑』盖本於此則作琬琰似誤倒。然貞都賦有琬琰。則琬琰。或可謂琬琰也。又按『淮南子』墜形訓註云、球琳琅玕皆

美玉也。「禹貢」「孔傳」云、瑤琨皆美玉。『淮南子』說山訓註云、琬琰美玉也。故云皆美玉也。又是五字蓋『兼名苑』註文『說文』球玉聲也。琳美玉也。琅玕似珠者。瑤玉之美者。琨石之美者。琬圭有琬者。琰璧上起美色也。トアリ。

【352】○美玉の項目、国本なし。

○石上神之木蓮子玉 此ハ石上神ノ社ニアリシ木蓮子ノ化タル玉ト云コトカ。又ハ形ノ木蓮子ニ似タル玉ト云コトニテモアルベシ。(関氏曰、藤津郡多良山ノ北高来郡ニツ、キタル山ヲ石岑トイフ。其頂ニ岩上神社アリ。此玉ソノ岩上神ニ由アリケナリ)

○不肯 「肯」曼本ナシ。

○覓之 「覓」曼本・異本「不見」ニ作ル。

○超山 此二字、曼本「起而」ニ作ル。

○逃走 「走」曼本ナシ。

○郡以 曼本「郡」上ニ「峯」アリ。

○之山 「之」曼本「支」ニ作ル。

○即逐 「逐」曼本・湯本「遂」ニ作ル。

○健津 「津」印本ナシ。上文及ヒ曼本ニ抛テ補フ。

○色之 「之」異本ナシ。

○子玉 「玉」異本ナシ。

○白珠 【353】『箋註和名抄』ニ、珠。『白虎通』云、海出明珠。(『日本紀私記』云、真珠之良太麻。○『說文』珠□中陰精也。『本草図経』所載生於珠牡。々々蚌類也者。珠牡俗謂珠母。『六帖詠』海士歌僧西行歌所詠阿古也是也。故『宇治拾遺物語』謂之阿古也乃太麻。今俗真珠。音読謂鰩魚中得中。為鰩之真珠。々々見「允恭紀」。按「允恭紀」所載真珠鰩魚中所得見。『書紀』武烈御歌云、阿波寐之羅陀魔。『万葉』所詠鰩珠皆是陶。弘景云、石決明是鰩魚甲内。亦含珠者是也。真珠見「雜式」。又『大神宮儀式』「内藏式」「民部式」「万葉」又『大安寺資財帳』所云、白玉即是)トアリ。

【353】○白珠の項目、国本なし。

○礪硃 『集韻』ニ、礪黒砥石。マタ『山海經』ニ、京山有玄礪。マタ『廣韻』ニ、硃同珠。マタ『山海經』ニ、會稽山多硃石。マタ『子

靈賦』ニ、硨磲。硨（硨磲石次玉赤地白采葱篋不分）ナドアリテ、共ニ石ノコトナリ。此ハ木蓮子玉、白珠ハ甚貴タキ上品ノ物ナルヲ、礪硨ニ比スト云ハ謙辞。

亦申云。有^レ人名曰^ニ篋築^一。住^ニ川岸之村^一。此人有^ニ美玉^一。愛之固秘定無^レ服^レ命。於^レ茲神代直迫而捕獲問^レ之。篋築云。実有^レ之。以^レ貢^レ於^レ御。不^ニ敢愛惜^一。神代直。捧^ニ此三色之玉^一。還獻^レ於^レ御。于^レ時天皇勅曰。此国可^レ謂^ニ具足玉国^一。今謂^ニ彼杵郡^一訛之也。

篋築此ハ人ノ名ニテ、其姓ヲ逸ス。関氏曰、篋ハ篋ノ誤リカ。篋築ハヤナト訓ムベシ。即チ梁ナリ。長崎ノ浦上川ヲ梁川トモ云フ。此ニ由アル人ナラン。

川岸之村此ハ上ノ健村之里ノ例ニヨラバ、川岸ハ村名ナルベシ。川ノ岸ニアル村ニハ非ズ。今浦上村ニ川原ト云所アリ。其辺リ【354】ニハアラザルカ。

【354】「其辺リ」、国本はこの部分を「其近キ辺リ」とし、甲本はこの部分を傍点にて抹消す。

○固秘此二字、曼本・湯本「罔極」ニ作ル。

○貢於御「職員令」ニ、内蔵寮。頭一人。義解ニ、掌金銀珠玉宝器云々。諸蕃貢獻云々。年料供進。御服。及別勅用物事。マタ「雜令」ニ、凡知山沢。有異宝異木。及金玉銀彩雜物処。堪供国用者。皆申太政官奏聞ナドアリテ、異宝ハ御許ニ貢ルベキ定メアリ。本居翁曰、『古事記』ニ、息長帯比売命。懷妊臨産。即為鎮御腹取石トアル石ハ、『万葉』ニ、筑前国怡土郡（○糸島郡【355】）深江村子負原。臨海丘上。有二石。並橢円状如鶏子。其美好者。不可勝論。所謂經尺壁是也。或云。此二石者。肥前国彼杵郡平敷之石。當占而取之トアル石ナリ【29】。或曰、平敷（平宿トモ云々）ハ、長崎ニ近キ浦上村平野宿ニテ、今モ赤石白石ノヨキガ多ク出ルヲ、火打石トモ緒結トモナス。今日、『万葉集』（二十）ニ、知々波々江。己波比尼麻多祢。豆久志奈流。美豆久白玉。等里泥久麻尼爾トアルモ、筑紫ニ水漬ク白玉ノアルニ依テ、詠出ツルモノニテ、則チ此辺リヨリ玉ノ多ク出シテ云ナルベシ。水漬ク白玉ハ真珠ノコトニテ、此物古クヨリ大村ノ海ニイデ、名高クモテハヤシテ、カク詠シニヤアラン。『本草綱目啓蒙』ニ、真珠カヒノタマ、アコヤノタマ、シンカヒノタマ。一名

蚌胎。『事物異名』 明月。玫瑰。摩尼。速不。〔共ニ同上蒙古ノ名〕 李藏珎。〔『水族加思簿』〕 神胎。〔『廣東新語』〕 珍珠児。〔『訓蒙字會』〕 𧄸思佛。〔『東西洋考』 呂宋名〕 谷蝦羅以。〔同上下港名〕 従前伊勢真珠ヲ上品トシ、尾張真珠ヲ下品トス。今ハ大村〔肥前〕真珠ヲ上品トシ、伊勢真珠ヲ次トス。凡ソ真珠ハ銀色ニシテ光沢アリ。微ク透トホリテ瑪瑙ノ如クナル者、真珠ナリ。其微青ヲ帯ル者ハ最上ナリ。形正円ナル者ヲ真トス。又金色ナル者アリ。大村ニテキンズキト云。又ヨメノタマ〔志州〕ト呼者アリ。一名ヒサガヒノタマ。〔同上〕伊勢真珠ニ、異ナラス。形ハ正円ナラズシテ、微シ長シ。大村ニハ大サ六七分ナルモアリ。外面粗糙ニシテ蛎房ノ如シ。殻縁甚薄クシテ紙ノ如シ。質薄クシテ外面蛎房ノ色ノ如ク。裏面ハ白色ニシテ青微紫ヲ帯ツ。大村ノ産ハ青多ク、磨蛎スル者ハ薄縁、自ラ落用テ、小櫟ニ代雅趣アリ。生ナル者ハ、殻外ニ五七分許ノ小者ヲ負フ。其磨蛎スル者、浅青黒色ニシテ黒斑アリ。マタ『雲根志』ニ、大村海辺専ラ真珠ヲトル。本邦最上ナリ。其色、瑠璃ニシテ大サ厘ヨリ分ニ至ルカ。科目ヲ貴シトス。アコヤ貝ヨリ出ルト、真珠ハ本邦諸州ヨリ出スト雖モ、此所ノ真珠トリヤウ大ニ奇説アリ。晴天ニシテ風波閑ナル日、小舟ヲ従ベテ、海底ヲ伺フニ、アコヤ貝、夥クアリ。其貝ヨリ真珠出テ潮ノ中ニ遊フ。之ヲ見テ棹ヲ海底ニ下セバ、驚テ真珠親貝ノ中ヘ逃隠ル。其時、彼親貝ヲトルニ、究メテ真珠アリト、筑後柳川君山坊ノ所説ナリ。本朝鑛石ヲ出ス所ヲ考ルニ、肥前国大村朝追岳云々。肥前ノ平敷ニ至リテ、彼ノ鎮懷石ノ類ヲ尋ヌルニ、マヽ此ニアリ。常ノ石ニ異ナリ、長崎ノ玉工、之ヲ取テ種々細工ニ用フルニ、甚美ナリ。

『退私録』〔抄録〕【30】曰【356】、大村ヨリ真珠出ルト云。是ヲ尋ネシニ、今ハ海ヨリ出ルニ非ス。岡ナリ。其岡悉ク蜉蚶ノカラナリ。ソレヲ掘テ取出スナリ。毎年取ニアラス。一年ヲ阻テトルカ。一年ニ千両ツ、守護ヘ献ス。或云、アコヤ貝ノ珠ナリ。アコヤ、又ヰカイトモ申。昔ハ勢州ヨリモ出シトミエタリ。『山家集』ニ、越後ヘワタリタリケルニ、井貝ト申蛤ニ、アコヤノムネト侍ナリ。ソレヲ取タルカラヲ高クツミ立タリケルヲ、西行アコヤトル井貝ノカラヲツミ置テ宝ノ跡ヲミスルナリケリ。

唐人之ヲ雲南石ト号シテ、大ニ賞スト云。今日、此等ヲ考合セテ、此郡ニ玉石ノ具足セルコトヲ知ルベシ。

【355】〔〇糸島郡〕 国本・甲本なし。

【356】『退私録』〔抄録〕 曰……西行アコヤトル井貝ノカラヲツミ置テ宝ノ跡ヲミスルナリケリ 国本・甲本なし。

【29】青柳氏曰、長崎ノ北時津ニ至ル道ニ、平野村アリ。是昔ノ平敷ナリトイフ。此東方山間ノ田ノ底ヨリ赤キ燧石イツ。好土之ヲ取テ、鎮懷石ナリト云ハ、口ニ堪タリ。彼石ハ如雉子ト『万葉』ニミエタレハ、白玉ノ類トミユ。今ノ燧石ハ土下ニ敷タル磐石ナルヲ割テ取タル物ニテ、其類ナリトモ云云カタン。サ

レト平敷ハ今ノ平野ナラント云説ハサモアルヘキカ。

【30】『柳園隨筆抄録』曰、速來、今ハ早岐領ナリ。漁家多シ。□ハ今ハ針尾ノ迫門ト云。此入海ハ彼杵郡ニ長崎ニ通フ道ニシテ、時津渡ノ海口、海口ハ針尾トテ大ナル島アリ。海潮ヲ塩タルカ如シ。島ノ南北、瀬戸ト成テ、潮汐左右ヨリ進退ス。其門甚狹シ。故ニ潮怒激シテ、其音冷シ。島ノ東ニ人家アリ。鯛浦ト云。此入海ノ兩岸ニ浦々多シ。南東ハ早岐、次ニ久津浦、此浦ニ、アコヤ貝捕テ真珠ヲトル。此入海ノ浦々真珠ヲ取モノ多シ。

浮穴郷。〈在二郡北一。〉

同天皇。在二宇佐濱行宮一。詔二神代直一曰。朕歷巡諸国一。既至二平治一。未レ被二朕治一。有二異徒一乎。神代直奏云。波烟之起村。未二猶被一治。即勅レ直遣二此村一。有二土蜘蛛一。名曰二浮穴沫媛一。捍二皇命一。甚無レ禮。即誅レ之。因曰二浮穴郷一。

宇佐濱行宮 異本「佐」下ニ「海」字アリ。関氏曰、宇佐濱ハ宇土濱ノ誤リナルベシ。『和漢三才図會』ニ、景行天皇云々。宇土濱海人。猷腹赤魚。マタ『熊本地志』ニ、宇土郡三角岳ハ、海濱ニ聳エ、葦北、八代、飽田、玉名オヨヒ、肥前島原ノ海、一目ニ尽スベシトアレバ、景行天皇、此岳ニ登リマシ、ヨリ、御供ナル神代直ヲ召テ問給ヒシニ、神代直波烟ノサマヲ見テ、御答申上シナラン。三角ノ向ハ、本国高来郡神代村、彼杵郡有喜村、矢上村、日見村、阿知村ナドナレバ、神代直マタ浮穴沫媛ナドニ由アル名ナリ。御供ニ神代野宿称アリ。島原ニ大野村アリ。神代村ニ近シ。大神ト云山アリ。三江村ノ中ナルベシ。（今日宇佐ヲ本ノマ、ニシテ豊前トセハ、其行宮ヨリ波烟ノ見ユルコトアラシヤ【357】）

【357】「今日宇佐ヲ本ノマ、ニシテ豊前トセハ、其行宮ヨリ波烟ノ見ユルコトアラシヤ」国本この文なく、甲本は頭注にて記す。

○波烟 「波」曼本「彼」ニ作ル。

○浮穴沫媛 『姓氏録』（左京神別）ニ、浮穴連。移受牟受比命五世孫。弟意孫連之後也。マタ（河内神別）浮穴直。移受牟受比命之後也。ナドアリ。此同族ニハ非ザルカ。「民部式」ニ、浮穴ニウケナト訓ヲ付タリ。此処モシカ訓ムベキカ。伊藤氏曰、浮穴郷ノ所在、定カナラザレド、本文ニ彼杵郡郷四所トアリテ、浮穴・周賀ノ二郷ノミヲアケ、『和名抄』ニ大村・彼杵ノ二郷ノミヲ挙タルニ由テ思ヘバ、郡

中ヲ四分ニシ、南ヲ浮穴トシ、西ヲ周賀トシ、北ヲ大村トシ、東ヲ彼杵トシタルカト見ユ。『道中行程細見記』ヲ按スルニ、長崎ヨリ東南ニ去ルコト二里ニシテ、アワト云所アリ。此ヨリ島原ノ小濱ニ海上八里アリ。此アワモ正ク沫媛ニ由アリテ負ヒタリト聞ユ。関氏曰、浮穴郷ハ有喜村辺ヨリ矢上村・日見村・阿和村ナドヲ云ルナリ。浮穴郷ハ郡家ヨリ北ニハアラテ、東北ナレバ、東字ヲ脱セシカ。若クハ大凡ニ北ト云ルニテモアルベシ。

○因曰「因」印本ナシ。荒木田氏カ曰、「之」上脱「因」字乎ト云ニ拠テ補フ。

周賀郷。〈在二郡西南一。〉

昔者。氣長足姫尊。欲レ征コ伐新羅一行幸之時。御船繫ニ此郷東北之海一。艫舳之狀戢化コ而一為礧一。高二十餘丈。周十餘丈。相去十餘町。突出嵯峨草木不レ生。加以陪從之船。遭レ風漂レ波。於レ茲有ニ土蜘蛛一。名ニ鬱比表麻呂一救コ濟其船一。因名曰ニ救郷一。今謂ニ周賀郷一訛之也。

昔者 異本「昔」上ニ「往」字アリテ「者」ナシ。

○戢戢 二字、異本・曼本「牂牁」ニ作ル。

○二十 「二」湯本「一」ニ作ル。

○突出 「出」曼本・湯本「而」ニ作ル。

○漂波 「波」曼本「没」ニ作ル。

○蛛名 「名」曼本「石」ニ作ル。異本ナシ。

○鬱比表麻呂 栗田氏曰【358】、現古君ハ現古君ニテ、「応神紀」ニ、荒田別巫別トアル同人ニハ非ルカ。若然ラハ巫別ハカムナキ別ニテハアラン。カムノコ別ト訓ベシ。村岡良弼氏（東京人）曰、現古ノ「古」ハ「占」ノ誤リニテ、現占ハ佐和良ト訓ベシ。本ハ曾波宇良ナルヲ、波宇ノ切ハ和ニテ曾ト佐ト音通フカラニ、即チ佐和良トハ呼ナリ。『和名抄』ニ、筑前国早良（佐和良）郡早良郷アリ。此地ニ因テ現占君トハ名ニ命セケン。関氏曰、『姓氏録』撰津皇別韓矢田部条ニ、現比（印本ナシ）古君ト云アリ。神功皇后ノ命ヲウケ、海中ニ

アル韓蘇使主等ヲ率来リシコトアリ。此ノ鬱比袁麻呂モ「袁」ハ「古」ノ誤リニテ、本人ト同シカラン。又「比」下ニ「古」ヲ脱セルニテ、鬱比古・袁麻呂ナラン。サレバ二人ニテ鬱比古ト袁麻呂ナルベシ。烏麻呂トイヘル海人ヲ、西海ニ国アリヤト皇后ミセニ、遣ハサレシコトモアリ。烏ト袁トハ同音ナリ。

【358】「栗田氏曰……此地ニ因テ現古君トハ名ニ命セケン。」国本・甲本なし。国本、代わりに「此ハ名ニテ、姓ヲ脱セシナラン。又鬱比ハ姓ニテ袁麻呂ハ名カ。

詳カナラス」という記述あり。

○救済「救」曼本・湯本「極」ニ作ル。○青柳氏曰、本郡松島ノ迫門ヲイテ、長崎ニ至ル所ニ沖ノ相撲洋ト云アリ。其沖ニ高サ十餘丈ノ崕ニツ立チタリ。之ヲ沖相撲地相撲トイフ。其状甚奇ナリ。南北相對シ屹立タル状、猛夫ノカヲ争フ勢ニ似タリ。因テ俗ニ相撲石トイフ。此辺リ深サ三十尋アリトイフ。此地方ニ雪浦・幸浦ナドアリ。周賀郷ハ此辺ナルベシ。幸浦トイフモ由アリケニ聞ユ。神功皇后ノ戕戕ノ化シテ磯トナレリト云ハ、此相撲石ノコトナルベシ。郡西南トアルモ能叶ヘリ。地相撲ハ高サ二十間モアルベシ。周リモ同シ。地相撲ノ頂ニ大木ノ密柑アリ。『道中行程細見記』ニ、日本相撲唐相撲ト記セリ。此事『江海風帆草』ニモミエタリ【359】。関氏曰、周賀郷ハ郡ノ西南ニ在トアルヲ地図ニオスニ、郡家ヨリ西南ハ長崎ヲ除テ外ニアルコトナシ。地図ニ長崎ノ福田浦ノ前ニ神樂相撲トイフ島アリ。ヒク島・母島・松島ト次第セリ。又港口ニ小菅ト云所アリ。是ハ小周賀ナルベシ。鎮慎石ノイテシ平宿村ニ姿井ト云カアル由、『長崎古名獨詠』ニ見ユ如クハ、周賀田井ナラン。本文ニ皇后ノ舩、此郷ノ東北ノ海ニ繫クトアリ。野母・樺島マテモ周賀郷ノ内ナレバ、長崎港ヲ東北ノ海トイヘル當レリ。

【359】「此事『江海風帆草』ニモミエタリ」国本・甲本なし。

速来門。〈在ニ郡西北〉。

此門之潮之来者。東潮落者西涌登。涌響同ニ雷音。因曰ニ速来門。又有ニ杉木。本者著レ地。末者沈レ海。海藻早生。以擬ニ貢上。

異本此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○速来 「速」印本「連」ニ誤ル。湯本ニ拠テ改ム。下同シ。

○西浦 湯本「潮」ニ作ル。

○登浦 此二字、異本ナシ。

○杉木 「杉」異本「松」ニ作ル。

○早生 「早」印本「草」ニ作ル。竈本・湯本・異本ニ拠テ改ム。

○擬貢上 此ハ早生シテ珍シキ物ナレバトテ、海藻ノ微物ナレドモ、遠路ワイハズ。貢上ニ擬ヘシナラン。青柳氏曰、速来、今ハ早岐ト書リ。(今日現ニハヤキトモ、ハイキトモ唱フ。印本ニハヤクト訓タルハ誤リナリ。潮ノ速キヨリ地名ニ負ヒタルナリ) 此ハ平戸領ナリ。漁家多シ。門ハ今ハ針尾迫門トイフ。此入海ハ彼杵ヨリ長崎ニ通フ道ニシテ、時津ノ海口ナリ。其口ニ針尾トテ大ナル島アリ。潮ヲ堰タルカ如シ。島ノ南北、迫門トナリテ、潮左右ヨリ進退ス。其門甚狭シ。ユエニ潮怒激シテ其音冷マシ島ノ東南ニ人家アリ。鯛浦トイフ。此入海ノ両岸ニ浦々多シ。南東ニ速来ツキニ、久津浦(此浦ニアコヤ貝ヲトリテ真珠ヲトル。此貝玉ノ多キハ、一ツノ内ニ三モ四モアリ。凡テ貝コトニ至アリ。他国ニモ此貝アレトモ、此処ナルニハ及ハス) 次ニ小串浦ノ南崎ヲ大山崎トイフ。遠方ヨリ之ヲ望メハ、松山三峰アリテ、海ニ差出タリ。此向ヲ霧島トイフ。此間壱里半、次ハ川棚村、次ハ彼杵村ナリ。此ヨリ時津ニ七里ナリ。是レ入海ノ甚廣キ処ナリ。此ヨリ長崎ヘ陸三里(今日此間ニ浦上村・平敷村アリ) アリ。速来ヨリ東ニ入テ三里ノ間、迫門ナリ。其狭キ所ハ二十間【360】ニスギス。

【360】 底本・甲本「二十間」に作るも、国本「三十間」とす。

高来郡。郷九所。里二十一。驛四所。烽五所。

郡 「戸令」ニ由ニ、本郡九郷ナレバ中郡ナリ。大体ハ申位ヨリ亥ニ至ルマデハ彼杵郡ニ界シ、亥ヨリ子ニ至ルマデハ藤津郡ニ界シ、其餘ハ海ニ面ス【361】。(明治十一年、分テ二トシ、島原地方ヲ南郡トシ、諫早地方ヲ北郡トス。牛・馬・硫黄・藍・茶・甘蔗・楮・麦・鮑・鳥賊・鱧・鰻・海參・石花菜等ヲ産ス) 『宇佐大鏡』ヲ高来郡油山十二箇所云々。一所岡山云々。一所栗栖山云々。一所少戸山云々。一所大河山云々。一所楠村山云々。一所野上山云々。一所新戸山。本領新領云々。一所谷山云々。已上。保安三年立券定。(但不注載畠地芋桑等也。大治二年七月 日。府国官使立券。同前) 国符載所々名。一所谷上山。一所野上山。一所大河山。一所子戸山。一所岡山。一所小家山。一所浦山。一所千石山。一

所伊福山。一所栗栖山。一所新戸大神山。已上十箇所。皆四至有限。但當時無宇竈神領云々。於自餘者。所被押妨御室御領也。件油山十二箇所。為宇多院七内親王家御領之間。以去延喜十年二月十三日。所被施入當宮也。施入狀云。家符肥前国油山司等可隨。自今以後八幡宇佐宮進退事。右油山彼宮灯分。令奉給已畢。仍所仰如件。山司宜承知。自今以後隨彼宮進退。不可疎略。故符別當散位源朝臣。応和三年二月十二日。マタ『鎮西志』(天慶三年)ニ、藤原純友。少焉留肥前国高来島(○島原ヲ云)取行兵馬之糧糧。マタ『東鑑』(寛元四年三月)ニ、彼行臨時詳定。有間左衛門尉朝澄進置懸物置書為明石左近將監(兼綱)奉行有沙汰串山郷事也。而彼郷者。朝澄一期之後。可傳領之旨。本主養母尼令遺言上者。可被置朝澄押書之由。越中七郎左衛門次郎政員。雖訴申之。不能其沙汰(云々)マタ『寛知集』ニ、高来郡百五村。マタ『元禄図』ニ、高来七十四村。高五万九千二百二十石八斗四升二合。(今日「明治九年ノ調」【362】ニヨレハ、本郡山林ヲ除ク外、土地一万六千二十一丁二反。○『催馬楽』ニサシクシハナマリセツアリシカト、タケクノジョウノ朝ニトリヨウサリシハ、高来串ニテ本郡串山ノコトニハ非ルカ)ナドアリ【363】。

【361】 国本・甲本、この下に「牛馬・硫黄・明礬・藍・茶・甘蔗・楮・櫛・麦・鮑・烏賊・鱧・鱒・海參・石花菜等ヲ産ス」という記述あり。この記述、底本では「明治十一年、分テ二トシ、島原地方ヲ南郡トシ、諫早地方ヲ北郡トス」の文の下にあり。

【362】 「今日「明治九年ノ調」ニヨレハ、本郡山林ヲ除ク外、土地一万六千二十一丁二反」 国本なし。甲本は「明治十一年、分テ二トシ、島原地方ヲ南トシ、諫早地方ヲ北トス。南ハ東西五里、南北八里」の下に置く。

【363】 国本、この下に「南里氏曰、源頼朝ノ時、小山景廣高来福田村ノ地頭ヲ賜ハリテ下向ス。景廣カ弟左衛門五郎伊佐早田結村ノ地頭ヲ賜フ。又正応五年安富頼清、北条貞時ノ下文ヲ以テ下向シ、深江入道蓮忍カ高来東郷深江浦ヲ賜フ」という記述あり。

○郷九所 『和名抄』ニ、山田。(也万多。○『九州図』ニ、本郡東北ニ山田アリ。今山田地五村ト云) 新居。(尔比草。○上田氏曰、本郡ニ荒井村アリ。是ナラ

ン。今日此説イカ、アラン。或曰、野井村アリト。是ナラン) 神代。(加無之呂。○今ハヤウシロト云。『太平記』ニ、菊池日ヲヘテ肥前ニ乱入シケルニ、高来熊代加瀬草野ノ者トモ、菊池カ兵ニ降参トアリ。熊代ハ神代ニテ、此比ハ神代ヲクマシロト呼シナラン。神代、今ハ二村ニ分ツ。上ノ神代直ハ此処ニ由アル人ナラン。「河上社正応五年造宮用度支配総田数文書」【364】ニ、髪白莊四十町トアルハ此処ヲ云ナラン。筑後御井郡ニ、神代郷神代村アリ。此神代ハクマシロト唱フ)【365】 野鳥。(乃登利。○或曰、此四郷ハ連続シテ北ニアリ。十二村トナル。逸スル所ノ五郷ハ東西南ニアルヘシ) トアリ。尚五所ヲ逸ス。「天福二年ノ文書」【366】ニ、肥前国高来西郷。三郎丸名内伊福。「正応五年」【367】ノ文書ニ、肥前国高来郡東郷有間莊(○南郡)内深江分。「宇佐文書」(正中二年)ニ、肥前国高来西郷

三郎丸永吉名云々。マタ肥後石貫村「廣福寺文書」(文中二年)ニ、平澄隆。肥前高来東郷大黒村ナドアルニ由ハ、高来郷ト云モアリシナラン。

【364】「河上社正応五年造宮用度支配総田数文書」ニ、……此神代ハクマシロト唱フ」国本・甲本なし。

【365】国本、この下に分注で「上ニ高来東郷トアルヲ見レハ、高来郷ト云カアリシナラン。是レ郡ノ名義ノ起ル所ナラン」とあり。甲本、この分を大字で記し、さらにその下に「而シテ郡ノ東ニアリシナラン」という記述あり。

【366】「天福二年ノ文書」ニ……肥前高来東郷大黒村ナドアルニ由ハ、高来郷ト云モアリシナラン」国本なし。甲本は「宇佐文書」以下を頭注にて記す。

【367】「正応五年ノ文書」、甲本は「正応元年ノ文書」とす。

〇三十一

【368】「二」湯本「一」ニ作ル。名称所在詳カナラズ。(「明治十年ノ調」ニヨレハ、本郡二百八十一村六町ナリ【368】)

【368】「(明治十年ノ調」ニヨレハ、本郡二百八十一村六町ナリ」国本なし。

〇四所

「兵部式」ニ、駅馬。山田。(長崎ノ人坂本秋郷氏曰、日本郡會津村ヨリ南ニツ、キテ山田村アリ。是ナリ。今日此処山田郷ニハアラサルカ)野鳥(坂本氏曰、千々岩村ヨリ温泉岳ノ北ヲ通り、島原旧城下ニ出ル道ニ千々岩村ヲハナル、ニ里許ニシテ坂路アリ。之ヲ野鳥坂トイフ。野鳥駅ハ是ナラン。今日此処モ野鳥ノ郷ナラン。或曰、千々岩村ノ中ニ野鳥ト処アリ。是ナルヘシ)各五疋トアリ。式ノ頃ハ二所ヲ減セシカ。『道中行程細見記』ニハ、矢上・日見・一瀬ノ三駅アリ。此ハ近來置タルナリ【369】。

【369】「此ハ近來置タルナリ」国本・甲本なし。

〇烽五所

詳カナラズ。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。在ニ肥後国玉名郡一。長渚濱之行宮覽ニ此郡山一曰。彼山之形。似レ於ニ別島一。属レ陸之山坎。別在之島坎。朕欲レ知レ之。仍勅ニ神大野宿禰一。遣レ看之。往ニ到此郡一。爰有レ人迎來曰。僕者此山神。名高来津彦。聞ニ天皇使之来一奉レ迎而已。因曰ニ高来郡一。

昔者 異本「昔」上ニ「往」アリテ「者」ナシ。

○**玉名郡** 『和名抄』ニ、肥後国玉名（多万伊奈）郡。日置。為大。石津。下宅。宗部。大町。大水。江田（○郷名【370】）マタ『日本紀』（景行天皇十八年六月）ニ、自高来縣。（○本郡）渡玉杵名邑（玉杵名ヲ『和名抄』ノ頃ハ多万伊奈トイフ。即チ玉名）マタ『宇佐大鏡』ニ、玉名郡伊倉別府ナドアリ。

【370】「○郷名」の部分、国本・甲本「○玉名村ナリ」とす。

○**長渚濱** 『熊本地志』【371】ニ、玉名郡築地村ハ景行天皇西巡ノ時、行宮ヲ設ケシ所ナリ。マタ長洲町ハ長洲ノ海ニ瀕ス。吉山真内氏（肥後人）曰、『書紀』・風土記等ニ見エタル長渚濱ハ、小代山ノ南ノ麓ノ海ニ沿タル処ヲ説タル名ニテ、今ノ長渚ノミニ非ズ。

【371】国本・甲本、『熊本地志』の上に吉山氏の説の下に記す。

○**之形** 「形」異本「状」ニ作ル。

○**神大野宿禰** 『姓氏録』【372】（大和神別）ニ、大神朝臣。素佐能雄命六世孫。大国主（○大物主ノ誤リ。下同シ）命之後也。マタ（撰津神別）神人大国主命五世孫。大田々根子命之後也。マタ（河内神別）神人御手代首同祖。阿比良命之後也。（○今日大和神別ニ御手代首天御中主命十世孫天諸神命之後也【373】）ナドアリ。此等ノ同族ナラン。本居翁曰、美和大神ヲ殊ニ崇奉ラレテ、タヽニ大神トノミ申セハ、此神ノ事ナリシカラ、遂ニ其字ヲ大美和トイフニ、用ルコトナ【374】レリケン。サル俣ニ大ヲ省キテ云ニモ、神字ヲ用ヒシナリ。此姓タヽ神トモ大神トモ云テ、大テフ言ハ有無シ定マラサリシニヤ。『書紀』ニ出タルモ、所々定マレルコトナシ。今日上ニ引ク『宇佐大鏡』ニ、本郡ニ新戸大神山アリ。此人ノ住シヨリ地ノ名ニ負タルカ。又此人コヽニ由アリテ、氏ニ負タルカ。詳カナラズ。南郡ニ大野村アリ。此モ此人ニ由アリゲナリ。

【372】国本、『姓氏録』の上に「神大野ハ復姓力。又ハ神ハ氏ニテ大野宿禰ハ名カ」とあり。甲本この部分を傍点にて抹消す。

【373】「○今日大和神別ニ御手代首天御中主命十世孫天諸神命之後也」国本なし。

【374】底本、「ナ」の右傍に「（○大字）」とあり。

○**此山神** 【375】高来郷ノ山ニ鎮マリマス神ノ現シ人ニナリテ、出来リシナラン。

【375】国本、「山神」を「大神」に作り、下に「此ハコヽニ鎮リマス神ノ現シ人ナリテ、出来給ヘルナリ」と記す。

○**津彦** 「彦」印本「座」ニ、異本「摩」ニ誤ル。湯本ニ拠テ改ム。

土齒池。〈俗言^レ岸為^二比遲波^一。在^二郡西北^一。〉

此池東之海邊有^レ岸。高百餘丈。長三百餘丈。西海波濤常以濯滌。緣^二土人辭^一。号曰^二土齒池^一。々堤長六百餘丈。廣五十餘丈。高二丈餘。池裡縱橫二十餘町許。潮來之常突入。荷菱多生。秋七八月。荷根甚甘。季秋九月。香味共變。不^レ中用也。

土齒池『九州図』**【376】**曰、高来郡西北千々岩。マタ『村名帳』ニ、高来郡千々村。マタ或曰、土齒池ハ千々岩村ノ北ニアリ。今ハ新田トナル。其海岸ノ堤、幅三十間、高サ五間、長サ拾丁。堤ニ老松アリ。清水常ニ湛ヘ、海潮堤外ヲ洗フ。又曰、島原ニ千々岩村アリ。長崎ヲサル有喜村通り九里餘ナリ。ソコノ田地、古ノ池ノ跡ナリ。又曰、此池ハ為石村ノ川原ノ池ノコトナルベシ。今ハ西彼杵郡ニ属スレドモ、古ハ本郡ノ内ナリケン。今日カク説々アリテ、詳ラカナラズ。後考ヲ待ツ。

【376】『九州図』曰、高来郡西北千々岩。マタ『村名帳』ニ、高来郡千々村。マタ「国本・甲本なし」。

○俗言岸為比遲波関氏曰、比遲波ハ土端ナルベシ。土ヲ比遲ト云ハ古言ナリ。今モ島原ノ海辺ニ土黒村アリ。ヒヂクロ村トイフ。千々岩山ノツゞキニ、池上村・池平山ナドアリ。共ニ此池ニ由アラン**【31】**。

【31】淀姫神社注進状正応五年田所ノ事ニ、千々岩庄三十町トアリ。

○号曰「号」湯本ナシ。

○菱『新撰字鏡』ニ、菱（陵也。比志）。菱（水中菜也。比志）。（比志）。マタ『伊呂波字類抄』ニ、菱子（ヒシ）。菱（揚玄作「菱」）。操菱実。

菱（並作「菱」）。菱。菰首（出陶景注）。菱（亦作「菱」）。蕨櫛。猪鼻。水栗薺苳（已上四名出『兼名苑』已上ヒシ）。マタ『箋註和名抄』**【377】**ニ、

『説文』云、菱（音陵比之。○『本草和名』『新撰字鏡』曰訓比斯）秦謂之薺苳。（皆后二音）楚謂之菱（音歧字亦作「菱」。○『原書』艸部「菱」作「菱」。『玉篇』亦作「菱」。『原書』「菱」作「支」。『説文』又云、菱薺也。菱杜林説菱从多蜀。『本図経』云、生水中葉浮水上。其花黄白色。实有二種一。四角一兩角。『本草図経』云、

花落而実生漸向水中乃熟。又有嫩皮而紫色者。謂之浮菱食尤美。李時珍曰、三月生蔓延引。葉浮水上扁而有尖光面如鏡。葉下之莖有。股如蝦股一莖一葉。両々相差如蝶翅状。五六月開小白花。背日而生昼合夜炕随月轉移。其实有数種。或三角四角。或兩角無角。野菱自生湖中。葉実俱小其角硬直刺人。其色孃生青老黒。下総本「歧」作「岐」。那波

本同。伊勢廣本作「伎」。『廣韻』岐・岐・伎、並巨支切在平声五支伎。又渠綺切在上声四紙而菱奇寄切在去声五寘。其音皆不同。マタ『本草綱目』二、水栗。芡実。萍蓬。草根。其『啓蒙』【378】ニ、芡実ミスモクサ。一名翻鷄。紫角。子陵。胡速児。菱角。水菱。蟾蜍股。末栗実。菱栗花。一名水客。穿萍。水沢中ニ多ク生ス。根ハ水底ニアリテ、水面ノ叢生ス。形扁ニシテ蛭蝶ノ翅ノ如ク厚クシテ光アリ。ソノ莖フクレテ蝦蟆ノ股ノ如シ。夏花ヲ開キ実ヲ結ブ。形三角四角アルイハ両角アリ。其角ミナ尖リテ、人ヲサス。初緑秋ニイタリ、熟スレハ黒色、煮テ白肉ヲトリテ食フ。之ヲユデビシト云。谷川氏曰、ヒシ、菱子ヲ訓セリ。蒺 モ訓リ。ヒシ蔓トモ云リ。菱ニ兩種アリ。少ナルヲ黒菱トイフ。稜硬ヨク人ヲ刺ス。大ナルハ稜脆シ。参河岩堀ノ菱ハ二稜ナリ。（今日大ナルハ稜脆シトハ奇シ。本国ノ産ハ大ナルハ稜硬シ。又鬼菱ト云モノアリ。形大ニシテ稜左硬シ。是レ鬼ノ名ノ出ル所以ナリ）或曰【379】、ヒシ、柳葉科。古歌ミスモクサ。詳名トラバビスヒオサロクスブ。生食或ハ熟食ス。味甘淡ニシテ香シ。之ヲ煮レハ汁水渋シ。支那ノ貧民ハ之ヲ以テ飯ニ代フ。（○今日『古今要覧稿』【380】四百五十九ミルヘシ）

【377】「マタ『箋註和名抄』ニ……又渠綺切在上声四紙而菱奇寄切在去声五寘。其音皆不同」国本なし。

【378】「其『啓蒙』ニ……初緑秋ニイタリ、熟スレハ黒色、煮テ白肉ヲトリテ食フ。之ヲユデビシト云」国本なし。甲本は頭注にて記す。

【379】「或曰「国本「圭介氏曰」とす。甲本「圭介氏」の部分の傍点にて抹消し、「或」に訂正す。

【380】「（○今日『古今要覧稿』四百五十九ミルヘシ）」国本・甲本なし。

峰湯泉。〈在二郡南一〉。

此湯泉之源。出二郡南高来峰西南之峰一。流レ於レ東。流之勢甚多熱異ニ餘湯一。但和二冷水一。乃得ニ沐浴一。其味酸。有ニ流黄。白土。及松一。々其葉細有レ子。大如ニ小豆一。令レ得レ嚙。異本、此下ニ「以下脱漏」トアリ。

○温泉『三代実録』（貞観二年二月）ニ、進肥前国。從五位下温泉神從五位上。トアリ。（祭ル所ハ大名持命ナリ【381】。南郡小濱村ニアリ。土人此祭【382】神ヲ国魂神ト云由ナルハ誤リ）此泉ヲ守ル神ナリト云フ。『和漢三才図會』ニ、温泉岳。在高来郡。五十町上。有普賢岳。往昔有大伽藍。号日本山大乘院満明密寺云々。方一里中。称地獄穴。（○熱湯ヲ云）数十箇処。両処相並。高五六尺。其流水稍熱如湯。之小川中。每小魚多

遊行。亦奇也。凡一山地皆熱温透鞋。跣者難行也。麓温泉多有。浴湯人不絶。マタ『伽藍開基記』ニ、西海道九州肥前国高来郡。有山号温泉巋然深秀。高隣雲漢下臨大海。懸崖壁立。其中有種々地獄。多至百餘。如經所説（○此ハ妄誕）或有大火熾然有烟燄。或有沸湯。或有寒水涌沸。マタ『鎮西志』ニ、神龜九年。行基開温泉山建寺。亦置藏經号満明寺。是也。山頂大焦熱々湯々沸出硫烟。熾々裏山。故謂之温泉地獄。マタ『塔志隨筆』ニ、温泉岳高サ六里。（今日六丁一里トスルカ）〔32〕青柳氏曰、諫早東南七里ニ、高来峰アリ。肥後・筑後ノ西ノ海中ニ孤立シ、隣国ヨリ能見ユル山ナリ。其最高キヲ普賢山トイフ。是高来峰ナリ。盤根十餘里ニ涉レリ。此山凡テ硫黄ノ氣強クシテ伏火アリ。天明中ニ伏火大ニ起リ、山川震動スルコト数日ナリシカ。四月朔日、前山遂ニ崩烈シテ、海中ニ陥リ人家・田園悉流失テ死スル者、数千人、旅船ノコヽニ泊リシモノ覆滅スル数ヲ知ラズ。此時海中ニ二島涌出タリ。其餘波、肥後ニオヨビ、宇土・玉名ノ諸郡、津波ニ押流サレテ死スル者、数千人。田畠斥鹵トナル。数里誠ニ希有ナル變遷ナリ。或曰、温泉岳、高サ四千五百尺、周四十二里、村落其麓ヲ繞リテ海ニ臨ム。岳ノ南ナルモノハ、鷹岩トイフ。北ナルハ吾妻岳、東ナルハ眉山、西ナルハ九千峯・絹傘山ナリ。寛政四年、山頂熱沙ヲ噴騰シ、遂ニサケテ海ニ迸リ、地勢一變シ、百許ノ島嶼ヲ現出シ、相擁シテ島原港ヲナセリ。温泉二所アリ。岳ノ半腹ニアルモノハ温泉トイフ。疥癬全創ニ適シ、西ノ麓ニアルモノハ小濱湯トイフ。痛風・倭麻ニ宜シ。

〔32〕 増 （補心）

『西遊記』

肥前国雲仙岳ハ西国ノ名山ナリ。唐船ナシノ長崎ヘワタルニモ大洋ノ中ニテ、比雲仙岳ヲメアテトスル由シ。

〔381〕 国本、以下の分注なし。

〔382〕 「国魂神ト云由ナルハ誤リ」 甲本により補う。

○其味 「其」印本「甚」ニ作ル。竈本・曼本ニ拠テ改ム。

○流黄 『箋註和名抄』〔383〕ニ、流黄。『本草』疏云、石流黄。（和名、由乃阿和。俗云、由王。○和名、由乃阿和。依輔仁所訓。山田本「和」作「波」。案由乃阿和、温泉泡也。作「波」誤。『医心方』亦作和今本『々草和名』作由乃阿和。『医心方』又訓由和字。按由王、即由阿和之轉。契沖以為流黄之訛音非是）礬石液也。

又有石流丹。益石流黄類也。（○本黄疏獨。『本草和名』引是書今無。傳本・山田本・曲直瀬本「流」作「硫」与『千金翼方』『證類本草』合。『玉篇』亦云、硫黄葉名然。『説文』無「硫」字。『新修本草』『々々和名』作「流」。則從石者。係後人所改。「典藥式」・古本作「流」。李時珍曰、硫黄稟性。純陽火石之精氣。而結成性質。通流色

賦中黄。故云硫黄。李說本於大服。鍊靈妙法見。『證類本草』・廣本「礬」作「焚」。似是礬石液也。四字『本草』本条文見。『新修本草』原君併引。為疏文誤石液丹。以下乃疏文『抱朴子』仙藥篇、石硫丹石之赤精益石硫黄之類也。疏文益本之諸古本石硫丹。誤石硫黄。無石黄之石字。『類聚名義抄』同。廣本又有以下十一字。皆無石硫丹。誤作石硫黄。其義不可通。故浅人刪下石字。亦不通。於是廣本、遂刪去此十一字也。今依『伊呂波字類抄』引此改与。『抱朴子』合。小野蘭山曰、今俗呼鷹目申王者石硫黄呼鷓鴣由。王者石硫丹也。マタ『伊呂波字類抄』ニ、硫黄（ユノマク・ユワウ）。石（今日一本ナシ）。流黄（ユワウ）。マタ『塵添壺囊抄』ニ、流黄（ユノアワ・イワウ）。流磺（同）。マタ『本草綱目』ニ、黄牙。金硫黄。金牙石。石硫黄（『本經』中品）。『釈名』硫黄（『吳普』）。黄礞砂（『葉性』）。黄牙。陽侯（『綱目』）。將軍。時珍曰、云々。硫黄含其猛毒為七十二石之將。故藥品中号為將軍。外家謂之陽侯。亦曰、黄牙。又曰、黄礞砂。別録曰、石硫黄礬液也。時珍曰、凡産石硫黄之处。必有温泉。作硫黄氣云々。倭硫黄亦佳。其啓蒙ニ、石硫黄、タカノメノイワウ。一名靈黄。黄礞。留黄。留黄。焰洩。黄英。九靈黄童山不住。凡硫黄ハ温泉アル山ノ土常ニ焼テ【384】、俗ニ地獄ト称スル処ニ器物ヲ以テ蓋ヒ置ハ、焰氣器中ニ觸テ煤ノ著タル如ク、純黄色ナル者アリ。此ヲ生ユワウト云。肥前ノ島原等ヨリ出、唐山ニテ和産ノ硫黄ヲ舶硫黄ト称ス。万病回春ニ出。マタ『雲根志』ニ、石硫黄、諸国産ス。日本ノ産、尤佳ナリ。予諸方ヨリ取集メ見ルニ、其色悉違ヘリ。肥前島原等ノ産至品ナリ。然レドモ同産ニ上品・下品アリ。僧契沖氏（撰津人）曰、流黄、ユノアワ。『和名抄』ニ、俗云由王。コレハル・ワウト云ベキヲ、ルト・ユ同韵ナレバ、通シテユワウト云ナリ。今俗ニ伊王ト云ハ、ユトイトハ、ヤ行ノ下ニテ五音通スレド、ルトイハ通ゼザレバ誤ナリナドアリ。

【383】『箋註和名抄』ニ……小野蘭山曰、今俗呼鷹目申王者石硫黄呼鷓鴣由。王者石硫丹也。国本なし。

【384】「凡硫黄ハ温泉アル山ノ土常ニ焼テ……万病回春ニ出」この部分、甲本は頭注にて記す。

○白土『箋註和名抄』【385】ニ、『唐韵』云、塋（音惡和名之良豆知。○『本草和名』同訓）白土也。（『廣韵』同。玄応音義引蒼頡篇『文選』子靈賊注引張揖並云塋白土也。孫氏子蓋依之。『西山經』云、太次之山。其陽多塋法塋似土色甚白。按『説文』塋白深也。本以白土深白之字。轉謂白土為塋）マタ『伊呂波字類抄』ニ、白塋。（シラツチ）白善。白土。（已上同）マタ『本草和名』ニ、白塋。和名之良都智。マタ『本草綱目』ニ、白塋。『釈名』白善土。（別録）白土粉。（衍義）画粉。（時珍曰、土以黄為正色。則白者為惡色。故為塋。後人諱之呼。為白善宗爽曰白善土。切成土塊壳于人浣衣）其『啓蒙』ニ、白塋、イマリヅヂ、ナンキンヅチ、アフラオトシ、ミカキツチ、ミカキスナ、シラツチ、ハミカキツチ、チャワンツチ。一名白壁土（『医家正傳』）肥前伊万里及唐津ニテ茶碗類ヲ焼ヲ、本山茶碗トイフ。伊万里ノ方言アツケト云。疑ハ塋ノ字ニヨルカ。肥前ヲ上品トス。又

善土二品アリ。硬ヲ粳米土トイフ。肥州・房州・江州ヨリ出ル者はナリ。マタ『雲根志』ニ、白堊土ハ白ク軟ナリ。滑石ニ似テ滑カナラズ。諸山ニ産スナドアリ。

【385】『箋註和名抄』ニ……按『説文』堊白深也。本以白土深白之字。轉謂白土為堊一國本、この部分『和名抄』より引用とす。

○松子【386】『箋註和名抄』ニ、五粒松子。脚氣。『獨活酒方』云、獨活一斤五葉松五両。（合葉七種之内也。○肘後方療氣有『獨活酒方』用獨活附子

無松葉。『千金方』有松葉酒療脚弱十二風痺石能行以上二十八字曰及福井本・下総本皆無。獨廣本有之今附存）『楊氏漢語抄』云、五粒松子。（粒五葉也。松子未都乃美。○『証類本草』引蕭□〔分万？〕云、有五葉者。一叢五葉如鉢。名五粒松子如巴豆。新羅注ニ、進文又載。『開宝本草』云、海松子生新羅。如小栗三角。其中仁香美東

夷食之。当果与中土松子不同。亦即是也。李時珍曰、海松子出遼東及雲南。其樹与中国松樹同。惟五葉一叢者録内。結実大如巴豆。而有三稜一角尖尔馬志。謂似小栗。殊失本体中国松子大如柏子。亦可入藥。不堪果食。案李賀有五粒。小松歌陸龜蒙。待松齋一夜綾貞白霜外空聞五粒。凡李義山詩松喧翠粒新劉夢得待翠粒照晴露。皆以粒言松也。

『西陽』・『五雜俎』云、今松言兩粒五粒々当作五鬣。癸未雜志云、凡松葉皆双股。而高廉所産每穗乃五鬣焉。下総本無注五字及「也」字）マタ『東雅抄録』【387】ニ、

『倭名抄』・『漢語抄』ノ五粒ヲ引テ、五粒松子ハ、マツノミト注セシハ海松子ト云モノ即是新羅松子。『本草図経』ニ、五粒字。当作五鬣。音傳訛也。五鬣為一叢ト見エシ者ニシテ、李東壁『本草』ニ、五鍼者。為松子松ト云此ナリ。新羅松子ノ如ハ即今モ朝鮮ヨリ来ル者此ナリ。彼国ニシテモ其地ニ産スル所、悉ク皆此樹ナルニハ非ス。海松子処ニ有之。生深山中。樹如松柏実瓜子ナドモ見エ、其子ニモ数等アリテ、玉角香ヲモテ最奇トシ珍トスナドモ見エタリ。此国ニモ播殖シ、物ノ生ヒ出シモアレド、子ヲ生スルコトノ如ハ、カシコヨリ来レル物ニハ及ハズ。『癸辛雜識』ニ、倭人所居。悉以其国所産新羅松為之。即今之羅木也。色白而香。仰塵地板皆是也ト見エシヲ、或説ニ、新羅松ハ剔牙松也。此方処々ニ在ト云。サレド宋人ノ日本ノ羅木ト云シ者ハ別ニコレ一物ナルベシ。マタ『本草綱目啓蒙』ニ、海松子、朝鮮マツノミ、カラマツノミ。一名位叱新羅海松。凡ソ松葉ニ針ナル者ハ常ナリ。此松ハ五針ナリ。今俗ニ五葉松ト呼者ハ、赤松葉ノ形ニシテ五針ナリ。海松ハ葉燈心草ノ大サニシテ皆白シ。朝鮮人、来聘ノトキ、多クコノ松子ヲ齎シ来ル。名産ナリ。カタ大ニシテ巴豆ノコトシ。三稜上尖リ、茶褐色皮アツクシテ、破リカタシ。内ニ白仁アリ。油多シ。味山胡桃ノコトシ。生食スベシ。新ナル者ハ種テ生シヤスシ。木理扁柏ニ似タル故扁柏ニ代モチフ。コノ松卵、長サ六七寸。鱗甲モ大ナリ。鱗甲コトニ子ニ粒アリ。時珍ノ説ノ、中国松子大如柏子ト云ハ、尋常ノ松子ナリ。鱗甲コトニ二粒アレドモ形小ニシテ、米粒ノ如クニシテ、白黒斑アリ。葉ニハ海松子、尋常ノ松子トモニ用フ。果子ニハ海松子ヲ用フ。松子ハ、一名万年豆、鍊形子、不老丹。マタ『松屋筆記』【388】ニ、『続後紀』

天長十年八月二、差弾国貢松実御贄云々。『北山抄』ニ、夜左近陣差柏梨於王卿侍臣云々。按ニ南部ノ柏実、イト大キナリ。朝鮮ハタオナシ松ニ似テ其葉ノサマヤ、殊也。コレ柏実ナルベシ。ナドアリ。『古今要覧稿』【389】二百六十六見ルヘシ。

【386】以下、国本なし。代わりに「関氏曰、或曰、朝鮮人常ニ松実ヲ食フ。其实ハ常ノ物ヨリハ大キク、亦ソノナレル数モ多シ。或曰、彼松実ハ支那ニテイフ松栢ノ栢ノ実ニ當トイフ」とあり。

【387】「マタ『東雅抄録』ニ……サレド宋人ノ日本ノ羅木ト云シ者ハ、別ニコレ一物ナルベシ」国本なし。甲本は附箋の形で記す。

【388】「マタ『松屋筆記』ニ……朝鮮ハタオナシ松ニ似テ其葉ノサマヤ、殊也。コレ柏実ナルベシ。ナドアリ」国本なし。甲本は頭注にて記す。

【389】『古今要覧稿』二百六十六見ルヘシ」国本・甲本なし。

○**噪**曼本「喫」ニ作ル。

改頁

『大日本史』志（二百四十）【390】

葛津立国造（○立疑直之訛。蓋国造有賜直姓者也）大名草彦命子若彦命成務帝時為国造。（『旧事本紀』）清和帝時有肥前藤津郡領葛津貞津（『三代実録』）或国造之裔也。

【390】『大日本史』志（二百四十）以下の文、国本・甲本なし。記載内容から藤津郡に入れるべきか。

二、糸山貞幹『肥前風土記纂註』所引『肥前国風土記』 本文

『肥前風土記纂註』所引『肥前国風土記』本文については、貞幹が序文で底本および校合に使用した写本の奥書や来歴をあげ、詳しく解説している。これによれば、寛政十二年（一八〇〇）五月に刊行された荒木田久老校訂本（序文では「印本」とする。奥書に「右一冊者。肥前国長崎人大家惟年。所齋本也。原誤謬尤多矣。寛政十一己未年三月。於京師旅寓校正之。加訓点畢。蓋依城戸千楯。長谷川菅諸等之需者也。皇太神宮権祢宜從四位下荒木田神主久老」と記す）を底本とし、湯本（奥書に「右肥前風土記者。所藏官之秘府也。湯谷某謹誌」とある本を三回転写したもの）・竈本（奥書に「右之風土記四帖。以竈御殿預家之傳本。令書寫了。文政八年十月上旬。日秦公均」とある本を二回転写したもの）・曼本（奥書に「元祿十三年歲次庚辰冬十二月初五日。以曼珠院所藏之本書於高野村蓮華寺法仰実観」とある本を三回転写したもの）・葎本（奥書に「肥前国大村人岩永常輔游学尾州三年。于此業成帰郷。余以其国旧典幸而存從叟写之。天明六年丙午仲秩筆菴河村秀根」とある本を三回転写したもの。ところが、「葎本」による校異が一例もないことから、異本数種とされるなかの一本と思われる（前章補注11参照））および異本数種（乙本序文による）と校合したとある。

ここで、『肥前風土記纂註』に引かれた『肥前国風土記』の本文の

みに注目してみると、諸本間での異同がはなはだしい。たとえば、国会本をみると、他本で底本を改めた箇所傍書で「緒^印」というように底本の文字を記すなど、他の三本とは異なる体裁で記されている。これは「弼云」として書写した村岡良弼の書き入れが多くみられる国会本の特徴を考えると、村岡良弼による書き込みの可能性が大きい。また、もっとも完成度が高いとされる明治三十四年（一九〇二）七月清書本を書写した乙本は、書写にあたった人物が専門的な知識を有しなかったためか、注釈文と同様に誤写が多い。

このほか、清書を重ねていくにしたがい、本文の文字を意図的に改めた箇所もみられる。養父郡曰理郷の条を例にあげてみると、国会本・甲本・丙本では「亘理郷」としていたのに対し、乙本では「曰理郷」と改めている。これには甲本に附されている重野安繹の序文が関係していると考えられる。その箇所をあげると次の通りである。

但亘理郷、日曰亘三字之辨、恐未正確、博士正説亦似闕明了。

久老以曰為曰訛是矣。曰篆文^ㇿ今昨日、曰篆文^ㇿ今作曰、日

実也。周環無缺、曰詞也。象開口、此其所以異、不必拘字形廣

狹、曰王伐反、曰理和答利也。二字音訛乃為正格。和名抄、奥

羽肥豊諸国、皆作曰理、日字不可訓和答。故後人妄改作亘耳。

聞之大槻博士文彦、曰仙臺藩巨室亘理氏、其先塋墓碣、寛文以

前、皆書曰理、幕府閣老等往書牘亦然。無作亘理者、可以為確證。然則和名抄曰理轉写之訛而、其作亘理年代、亦略可知也。

これによれば、「亘理」というようになったのは後世になってからで、寛文以前は「曰理」であったことを指摘して批判している。安繹による批判をうけて、甲本より後に清書した乙本の段階になって「曰理郷」に訂正したのではないかと推測される。というのは、安繹の序文が「明治癸卯七月」すなわち明治三十六年（一九〇三）とあり、乙本清書の二年前であるので、矛盾が生じる。乙本は原本ではないため、そのあたりの理由を明らかにできないが、甲本の冒頭に「明治廿九年。其後段々書入。八月中清書」とあって、適宜書き

入れした様子が見えることから、明治三十四年（一九〇一）に清書してから訂正したのではないだろうか。

さて、『肥前風土記纂註』は、たびたび述べているように、諸本間での異同がはなはだしく、これは本文も同様である。ことに底本とした乙本は、原本の完成度が高いと評されているにもかかわらず誤脱が多いため、そのまま利用することはできない。そのため、他本との校合を必要とするが、注釈文の校異とともに本文の校異を示すと煩雑となる恐れがあると判断し、前の翻刻では校訂後の本文を掲げることとした。よって、ここでは『肥前風土記纂註』に引かれた『肥前国風土記』本文のみを校合した結果を示すことにしたい。

【凡例】

- 一、佐賀県立図書館乙本を底本とし、佐賀県立図書館甲本（略称、甲本）・佐賀県立図書館丙本（略称、丙本）・国立国会図書館所蔵本（略称、国本）・佐賀県立図書館所蔵糸山貞幹校訂本（略称、貞幹本）を対校した。
- 一、風土記本文を十四ポイントとし、分注は（ ）で括って大字で示す体裁に改めた。
- 一、本文の字体は底本に従った。
- 一、校異により、底本の字や体裁を改めた場合は該当する箇所を網掛けにした。

總記

【本文】

郡一十一所。鄉七十。里一百八十七。驛一十八所。〈小路(1)〉烽二十所。〈下国〉城一所。寺二所。〈僧寺〉。

肥前国者。本與肥後国合為一國。昔者。磯城瑞籬宮御宇御間城(2)天皇之世。肥後国益城郡朝來名峰。有土蜘蛛打猴頸猿二人。帥徒衆一百八十餘人拒捍皇命。不肯降伏。朝廷勅遣肥君等祖健緒(3)組(4)伐之。

於茲健緒組。奉勅悉誅滅之。兼巡國裡。觀察消息。到於八代郡白髮山。日(5)晚止宿(6)。其夜虛(7)空有火。自然燦燦降下。就此山燎之。時健緒組見而驚怪。參上朝廷奏言。臣辱被聖命。遠誅西戎不(8)霑(9)刀刃。梟賊自滅。自非威靈。何得然之。更舉燎火之狀奏聞。天皇勅曰。所(10)奏之事。未曾所聞。火下之國可謂火國。即舉健緒組之勲。賜姓名曰火君健緒組(11)。便遣治(12)此國。因火(13)曰火國(14)。後分兩國而為前後。又纏向日代宮御宇大足彥天皇。誅球(15)磨贈於。而巡狩筑紫國之時。從葦北火(16)流浦。發舩幸於火國。度海之。間日沒。夜冥不知所着。忽有火光遙視行前。天皇勅(17)棹人曰。直指火處應勅而往果得着崖。天皇下詔曰。何謂邑也。國人奏言。此是火國八代郡火邑。但不(18)知火主。于時天皇詔群臣曰。今此燎火非是人火。所以号火國知其所(18)由。

【校異】

- (1) 小路―底本「路〈小〉」とす。
- (2) 御間城―国本この下に「入彦」の二字あり。
- (3) 緒―国本「諸」の右傍に「緒^印」と記す。
- (4) 組―国本「組」を補う。
- (5) 日―底本なし。国本・甲本・丙本により補う。
- (6) 宿―国本、「峯^印」とす。
- (7) 虚―国本「虚」を「虚」に訂正す。
- (8) 不―国本「下」とし、右傍に「不^印」と記す。
- (9) 露―丙本「露」に作る。
- (10) 所…国―この十二字、丙本なし。
- (11) 組―国本「組」の右傍に「純^印」と記す。
- (12) 治―国本「治」を「治」に訂正す。
- (13) 火―貞幹本「名」に作る。国本「火」の右傍に「楚之字誤」と記す。
- (14) 国―貞幹本「君」に作る。
- (15) 球―国本・丙本「珠」に作る。
- (16) 火―底本なし。国本などにより補う。
- (17) 勅…天皇―この十八字、丙本なし。
- (18) 所―国本「所」の右傍に「尔^{シカル}」と記す。

基肄郡

【本文】

基肄郡。郷六所。里⁽¹⁹⁾十七。驛一所。〈小路。〉
昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。御^二筑紫国御井郡高羅之行宮^一遊^二覧国内⁽²⁰⁾^一。霧覆^二基肄之

山⁽²¹⁾「天皇勅曰。彼国可謂霧之國」。後人改号「基肄國」。今以為「郡名」。

長岡神社。〈在「郡東」〉。

同天皇自「高羅行宮」。還幸而在「酒殿泉之邊」。於此薦膳之時。御具甲鎧光明異常。仍令占問卜部殖⁽²²⁾坂奏云。此地有神。甚願御鎧。天皇宣。實有然者奉納神社。可為永世之財。因号「永世社」。後人改曰「長岡社」。其鎧貫緒悉爛絕。但冑并甲板⁽²³⁾。今猶在也。

酒殿泉。〈在「郡東」〉。

此泉之季秋九月。始變白色。味酸氣臭。不能喫飲。孟春正月。變而清冷人始飲喫。因曰「酒井泉」。後人改曰「酒殿泉」。

姬社鄉。

此鄉之中有川。名曰「山途川」。其源出「郡」北山。南流而會「御井大川」。昔者。此川之西有荒神。行路之人多。被「殺害」。半凌半殺。

于時卜求崇⁽²⁵⁾由「兆云」。令「筑前國宗像郡人珂是古祭吾社」。若合願者。不起「荒心」。覓⁽²⁶⁾珂是古⁽²⁷⁾。令「祭神社」。珂是胡⁽²⁸⁾即捧幡祈禱云。誠有欲吾祀者。此幡順風飛往墮願吾之神邊。便即舉幡順風放遣。于時其幡飛往墮於「御原郡姬社之社」。更還飛⁽²⁹⁾來落此山途川邊之⁽³⁰⁾田村。珂是古自知「神之在處」⁽³¹⁾。其夜夢見臥機。〈謂「久都」⁽³²⁾毘枳」。絡埭〈謂「多々」⁽³³⁾利」。舞⁽³⁴⁾遊出來壓警⁽³⁵⁾珂是古。於是亦⁽³⁶⁾識「女神」。即立社⁽³⁷⁾祭之。自爾已來行路之人不被「殺害」。因曰「姬社」。今以為「鄉名」。⁽³⁸⁾

【校異】

- (19) 里——貞幹本、この下に「一」あり。
(20) 内——底本なし。国本などにより補う。
(21) 山——貞幹本「上」に作る。
(22) 殖——国本「隨」とし、右傍に「殖_測」とあり。
(23) 坂——貞幹本「坂」に作る。
(24) 郡——国本「吞_フ」とし、右傍に「郡」と記す。
(25) 崇——底本「出示」に誤る。甲本・貞幹本により改む。国本「崇」とし、右傍に「崇」と記す。
(26) 寛——貞幹本「寛」に作る。
(27) 古——貞幹本なし。
(28) 胡——貞幹本「古」に作る。
(29) 飛——貞幹本なし。
(30) 邊之——貞幹本「之邊」に作る。
(31) 處——国本・甲本・貞幹本「家」に作る。
(32) 都——国本「都」の右傍に「那」と記す。貞幹本「那」に作る。
(33) 々——貞幹本「多」に作る。
(34) 舞——国本・甲本・貞幹本「舞」に作る。
(35) 驚——国本・甲本・貞幹本「驚」に作る。
(36) 亦——貞幹本なし。
(37) 社——底本なし。国本などにより補う。
(38) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

養父郡

【本文】

養父郡。郷四所。里一十二。烽一所。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。此郡百⁽³⁹⁾姓舉^レ部⁽⁴⁰⁾參集。御狗出而吠之。於此⁽⁴¹⁾有二產婦臨見。御狗即吠止。因曰^二犬声止國^一。於今⁽⁴²⁾訛謂^二養父郡^一也。

鳥櫟郷^一〈在^二郡東^一 ⁽⁴³⁾〉

昔者。輕島明宮御宇譽田天皇之世。造^二鳥屋於此郷^一。取^二聚⁽⁴⁴⁾雜鳥^一。養馴貢^二上朝廷^一。因曰^二鳥屋郷^一。後人改曰^二鳥櫟郷^一。

曰⁽⁴⁵⁾理郷。〈在^二郡南^一〉

昔者。筑後国御井川。渡瀬甚廣人畜難^レ渡。於^レ茲纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時就⁽⁴⁶⁾生葉山^一。為^二舩山^一。就^二高羅山^一。為^二梶山^一造^二備舩^一漕^二渡人物^一。因曰⁽⁴⁷⁾二曰⁽⁴⁸⁾理郷^一。

狹山郷^一〈在^二郡南^一〉

同天皇行幸之時。在^二此山行宮^一。徘徊曰。望^二四方^一分明。因曰^二分明村^一。〈分明謂^二佐夜氣志^一。今訛謂^二狹山郷^一。 ⁽⁴⁹⁾〉

【校異】

(39) 百—貞幹本「佰」に作る。

(40) 部—国本「動」とし、右傍に「部」と記す。

(41) 此—底本「是」の右傍に「此」と記す。国本・甲本・貞幹本「此」に作る。

(42) 今—国本「今」の右傍に「此^印」と記す。

(43) 在^二郡東^一—底本なし。国本・甲本により補う。貞幹本「在^二郷東^一」に作る。

- (44) 聚―国本「聚（異体字）」の右傍に「聚_印」と記す。
 (45) 日―国本・甲本・貞幹本「亘」に作る。
 (46) 就―国本なし。甲本「就」を補う。
 (47) 日―貞幹本「日」を補う。
 (48) 日―国本・甲本・貞幹本「亘」に作る。
 (49) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

三根郡

【本文】

三根郡。郷六所。里⁽⁵⁰⁾十七。驛一所。〈小路。〉

昔者。此郡與_二神埼郡_一。合為_二一郡_一。然海部直島。請分_二三根郡_一。即縁_二神埼郡三根村之名_一。以為_二郡名_一。

物部郷。〈在_二郡南_一。〉

此郷之中有_二神社_一。名曰_二物部經津主之神_一⁽⁵¹⁾。曩者。小墾田宮御宇豐御食炊屋姫天皇。令_二来目皇子_一為_二將軍_一遣_レ征_二伐新羅_一。于_レ時皇子奉_レ勅到_二於筑紫_一。乃遣_二物部若宮部_一立_二社於_一⁽⁵²⁾此村_一。鎮_二祭其神_一。因曰_二物部郷_一。

漢部郷。〈在_二郡北_一⁽⁵³⁾。〉

昔者。来目皇子為_レ征_二伐新羅_一。勅_二忍海_一⁽⁵⁴⁾漢人_一將_レ来_二居此村_一。令_レ造_二兵器_一。因曰_二漢部郷_一。米多_一⁽⁵⁵⁾郷。〈在_二郡南_一。〉

此郷之中有^レ井⁽⁵⁶⁾。名曰^ニ米多⁽⁵⁷⁾井^一。水味鹹。曩者。海藻生^ニ於此井⁽⁵⁸⁾之底^一。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。御^ニ覽井底之海藻^一。即勅賜^レ名曰^ニ海藻⁽⁵⁹⁾生井^一。今訛謂^ニ米多⁽⁶⁰⁾井^一。以為^ニ郷名^一。⁽⁶¹⁾

【校異】

- (50) 里——貞幹本、この下に「一」あり。
(51) 之神——貞幹本、この二字なし。
(52) 於——国本「於」を補う。
(53) 北——貞幹本「北東」に作る。
(54) 海——甲本「海」を補う。
(55) 多——貞幹本「田」に作る。
(56) 井——国本「中」とし、右傍に「井」と記す。
(57) 多——貞幹本「田」に作る。
(58) 此井——この二字、甲本「井此」に作る。
(59) 藻——底本なし。国本などにより補う。
(60) 多——貞幹本「田」に作る。
(61) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

神埼郡

【本文】

神埼郡。郷九所。里二十六。驛一所。烽一所。寺一所。⁽⁶²⁾

昔者。此郡有^ニ荒神^一。往来之人多被^ニ殺害^一。纏向日代宮御宇天皇。巡狩之時。此神和平。自^レ爾以来

無_二更有_一慄₍₆₃₎。因曰_二神埼郡_一。

三根鄉₍₆₄₎。〈在_二郡西_一。〉

此鄉。有_レ川。其源出_二郡北山_一。南流入_レ海。有_二年魚_一。同天皇行幸之時。御船從_二其川瀬_一。來御_二宿此村_一。天皇勅曰。夜素御寐。甚有_二安穩_一。此村可_レ謂_二天皇御寐安村_一。因名_二御寐₍₆₅₎。今改_二御字₍₆₆₎為_レ三₍₆₇₎。寐字為_レ根。

船帆鄉。〈在_二郡西_一。〉

同天皇巡行之時。諸氏人等舉_二落葉_一。船舉_レ帆參_二集於三根川之津_一。供_二奉天皇_一。因曰_二船帆鄉_一。又御船沈_二石四顆_一。存_二其津邊_一。此中一顆。〈高六尺徑五₍₆₈₎尺₍₆₉₎。〉一顆。〈高八尺徑五尺₍₇₀₎。〉無_レ子婦女。就_二此二石_一。恭禱祈者。必得_レ妊₍₇₁₎產一顆。〈高四尺徑五尺₍₇₂₎。〉一顆。〈高三尺徑四尺。〉亢旱₍₇₃₎之時。就_二此二石零_一。并祈者。必為_二雨落_一。

蒲田鄉。〈在_二郡西₍₇₄₎。〉

同天皇行幸之時。御_二宿此鄉西_一。薦_二御膳_一之時。蠅甚多鳴。其声大囂。天皇勅云。蠅声甚囂。因曰_二囂鄉_一。今謂_二蒲₍₇₅₎田鄉_一訛也。

琴木岡。〈高_二二丈周五十₍₇₆₎丈。在_二郡南_一。〉

此地平原。元來無_レ岡。大足彥天皇。勅曰此地之形。必可_レ有_レ岡。即令_二郡丁_一起造。此岡造畢之時。登_レ岡宴賞。興₍₇₇₎闌之後。豎_二其御琴_一。々₍₇₈₎化_二為樟_一。〈高五尺周三丈。〉因曰_二琴木岡_一。宮處鄉。〈在_二郡西南_一。〉

同天皇行幸之時。於_二此村_一奉_レ造_二行宮_一。因曰_二宮處鄉_一。(79)

【校異】

- (62) 貞幹本、この下に分注で「(僧寺)」とあり。
(63) 標―国本・貞幹本「煉」に作る。
(64) 郷―貞幹本「郡」に誤る。
(65) 因名_二御寐_一―この四字、貞幹本なし。
(66) 字―国本、後から「字」を補う。
(67) 御字_{為_レ三}―この四字、貞幹本なし。
(68) 五―貞幹本、後から「五」を補う。
(69) 高六尺徑五尺―貞幹本、大字に作る。
(70) 高八尺徑五尺―貞幹本、大字に作る。
(71) 妊―貞幹本「姪」に作る。
(72) 高四尺徑五尺―貞幹本、大字に作る。
(73) 早―底本「早」に誤る。国本などにより改む。
(74) 在_二郡西_一―底本、大字に作る。国本などにより改む。
(75) 蒲―貞幹本「囂」に作る。
(76) 十―貞幹本なし。
(77) 興―国本「興」とし、右傍に「興」と記す。
(78) 々―国本・貞幹本「琴」に作る。
(79) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

佐嘉郡

【本文】

佐嘉郡。郷六所。里⁽⁸⁰⁾十九。驛一所。寺一所。

昔者。樟樹一株。生^レ於^二此村^一。幹枝秀高。莖葉繁茂。朝日之影蔽⁽⁸¹⁾杵嶋郡蒲川山^一。暮^レ日之影

蔽⁽⁸²⁾養父郡草横山^一也。日本武尊巡幸之時。御覽樟茂榮^一曰。此国可^レ謂^二采国^一。因曰^二采郡^一。後改号^二佐嘉郡^一。

一云。郡西有^レ川。名曰^二佐嘉川^一。年魚有^レ之。其源出^二郡北山^一。南流入^レ海之。川上有^二荒神^一。往来之人半生半殺。於^レ茲⁽⁸³⁾縣主等祖。大荒田占問。于^レ時有^二土蜘蛛大山田女狭山田女^一。二女子云。取^二下田村之土^一。作^二人形⁽⁸⁴⁾馬形^一。祭^二祀此神^一。必有^二応和^一。大荒田即随^二其辞^一。祭^二此神

々⁽⁸⁵⁾。歆^二此祭^一。遂応和之。於^レ茲大荒田云。此婦如^レ是⁽⁸⁶⁾。実賢女。故以^二賢女^一。欲為^二国名^一。因曰^二賢女郡^一。今謂^二佐嘉郡^一訛也。

又此川上有^二石神^一。名曰^二世田姫^一。海神⁽謂^二鰐魚^{一)}。年常逆^レ流潛上。到^二此神所^一。海底小魚多相從之。或人畏^二其魚^一者無^レ殃。或人捕食者有⁽⁸⁷⁾死。凡此魚⁽⁸⁸⁾。經^二二三日^一。還而入^レ海。⁽⁸⁹⁾

【校異】

(80) 里——貞幹本、この下に「一」あり。

(81) 影蔽——底本「蔽影」に誤る。国本などにより改む。

(82) 蔽——貞幹本「蔽」を補う。

(83) 茲——国本「是」に作る。甲本「是」とし、右傍に「茲」と記す。

(84) 形——貞幹本、この下に「及」あり。

(85) 々——貞幹本「神」に作る。国会本「神」を補う。

(86) 是——国本「此」に作る。甲本「此」の右傍に「是力」と記す。

(87) 有―国本「有烈」、甲本「有」と補う。

(88) 魚―貞幹本この下に「等」とあり。

(89) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

小城郡

【本文】

小城郡。郷七所。里二十。駅一所。烽一所。

昔者。此村有_二土蜘蛛_一。造_レ堡隱之。不_レ從_二皇命_一。日本武尊巡幸之日。皆悉誅之。因号_二小城郡_一。

松浦郡

【本文】

松浦郡。郷一十一所。里二十六。驛五所。烽八所。

昔者。氣長₍₉₀₎足姫尊。欲_レ征_二伐新羅_一。行_レ於_二此郡_一而。進食於_二玉島小河₍₉₁₎之側_一。於_レ茲皇后。

勾_レ針為_レ鈎₍₉₂₎。飯粒為_レ餌。裳糸₍₉₃₎為_レ縉。登_二河₍₉₄₎中之石上_一。捧_レ鈎祝曰。朕欲_下征_二伐新羅_一。

求_中彼財宝_上。其事功成凱旋者。細鱗之魚吞_二朕鈎縉_一。既而投_レ鈎片時。果得_二其魚_一。皇后曰。甚希見

物。〈希見謂_二梅豆羅志_一〉₍₉₅₎。因曰_二希見国_一。今訛謂_二松浦郡_一。所以此国婦女。孟夏四月常以₍₉₆₎

_レ針鈎_二年魚_一。男夫雖₍₉₇₎鈎₍₉₈₎。不_レ能_レ獲₍₉₉₎之。

【校異】

- (90) 長―底本「息」に誤る。国本などにより改む。
 (91) 河―国本「阿」の右傍に「河」と記す。
 (92) 鈎―国本「鈎」に作る。
 (93) 糸―貞幹本「絲」に作る。
 (94) 河―国本「阿」の右傍に「河」と記す。
 (95) 希見謂「梅豆羅志」―底本「希見豆羅謂「梅志」」に誤る。国本などにより改む。
 (96) 以―貞幹本「勾」に誤る。
 (97) 雖―国本「羅」に誤る。甲本「羅」を見消して「羅」とし、さらに見消して「雖」とす。
 (98) 釣―貞幹本「鈎」に作る。
 (99) 獲―国本「羅」に誤る。甲本「羅」を見消して「獲」とし、さらに見消して「獲」とす。貞幹本「得」に作る。

【本文】

鏡渡。〈在_二郡北_一。〉

昔者。檜隈廬入野宮御宇武少廣国押楯天皇之世。遣_二大伴狹手彦連_一。鎮_二任那之国_一。兼救_二百濟之
 国_一。奉_レ命到来至_レ於_二此村_一。即娉₍₁₀₀₎「_二篠原村_一」〈篠謂_二志奴_一。〉弟₍₁₀₁₎「_二日姫子_一」成_レ婚。〈日下部君等
 祖也。〉容貌美麗。特絶_二人間₍₁₀₂₎。分別₍₁₀₃₎之日。取_レ鏡與_レ婦婦₍₁₀₄₎含_レ悲啼渡_二栗川_一。所_レ與之鏡
 緒絶沈_レ川。因名_二鏡渡_一。

【校異】

- (100) 娉―国本「嫂」の右傍に「娉」と記す。

- (101) 弟——貞幹本「第」に誤る。
 (102) 間——底本「門」に誤る。国本・甲本・貞幹本により改む。
 (103) 別——貞幹本「明」に誤る。
 (104) 婦——貞幹本「、」に作る。

【本文】

褶振峯⁽¹⁰⁵⁾。〈在^二郡東^一。峰冢名曰^二褶振峯^一。〉

大伴佐⁽¹⁰⁶⁾手彦連。發^レ船渡^二任那^一之時。弟⁽¹⁰⁷⁾日姫子。登^レ此用^レ褶振招。因名^二褶振峯⁽¹⁰⁸⁾。然弟⁽¹⁰⁹⁾日姫子。與^二狭手彦連^一相分。經^二五日^一之後。有^レ人每^レ夜来。與^レ婦共寢至^レ曉早歸。容止形貌似^二狭手彦^一。婦抱^二其恠^一。不^レ得^二忍默^一。窃用^二續麻^一繫⁽¹¹⁰⁾其^二人欄^一。随^レ麻尋⁽¹¹¹⁾往。到^二此峯⁽¹¹²⁾頭之沼邊^一。有^二寢蛇^一身人而沈^二沼底^一。頭蛇而臥^二沼壅^一。忽化^二為人^一。即歌⁽¹¹³⁾曰⁽¹¹⁴⁾。志努波羅能。意登比賣⁽¹¹⁵⁾能古表。佐比登由母。為^レ祢弓⁽¹¹⁶⁾牟志太夜。伊幣尔久太佐牟⁽¹¹⁷⁾也。

于^レ時。弟日姫子之從女。走告^二親族^一。親族⁽¹¹⁸⁾發^レ衆昇而看^レ之蛇并。弟日姫子並⁽¹¹⁹⁾亡不^レ存。於^レ茲⁽¹²⁰⁾見^二其沼底^一。但有^二人屍^一。各謂^二弟⁽¹²¹⁾日女子之骨^一。即就^二此峯⁽¹²²⁾南^一造^レ墓治置。其墓見在。

【校異】

- (105) 峯——貞幹本「峰」に作る。
 (106) 佐——貞幹本「狹」に作る。
 (107) 弟——貞幹本「第」を補う。
 (108) 峯——貞幹本「峰」に作る。
 (109) 弟——貞幹本「第」に誤る。

- (110) 繁——貞幹本「擊」に誤る。
 (111) 尋——貞幹本「染」の如き字の右傍に「尋」と記す。
 (112) 峯——貞幹本「峰」に作る。
 (113) 歌——国本「哥」の右傍に「譌」と記す。
 (114) 日——貞幹本「云」に作る。
 (115) 賣——国本「売」の右傍に「賣」と記す。
 (116) 丑——貞幹本「吳」に誤る。
 (117) 牟——国本「年」に誤る。
 (118) 親族——貞幹本なし。
 (119) 並——貞幹本なし。
 (120) 茲——甲本「是」の右傍に「茲」と記す。
 (121) 弟——貞幹本「第」に誤る。
 (122) 峯——底本「峰」に作る。国本などにより改む。

【本文】

松浦縣。々(123)東三十里。有_二帔搖岑_一。〈帔搖比礼府離。〉最頂有_レ沼。計可半町。俗傳云。昔者檜前天皇之世。遣_二大伴紗手彦_一。鎮_二任那国_一。于_レ時奉_レ命經_二過此处_一。於_レ是。篠原村。〈篠資農也。〉有_二娘子_一。名曰_二乙等比賣_一。容貌端正。孤為国色。紗手比古。便娉成_レ婚。離別之日。乙等比売。登_二望此岑_一。举_レ帔招。因以為_レ名。

【校異】

- (123) 々——国本「縣」に作る。

【本文】

賀周里。〈在二郡西北一。〉

昔者。此里有二土蜘蛛一。名曰二海松樞媛一。纏向日代宮御宇天皇。巡國之時。遣二陪從大屋田子一。〈日下部君等祖也〉⁽¹²⁴⁾。誅滅時。霞四含不_レ見物色。因曰二霞里一。今謂二賀周里一訛之也。

逢鹿驛。〈在二郡西北一〉⁽¹²⁵⁾。

曩者。氣長足姬尊。欲_レ征_二伐新羅一。行幸之時⁽¹²⁶⁾。於二此道路一有_レ鹿遇之。因名二遇鹿驛一。々東海。有_二蛸。螺。鯛⁽¹²⁷⁾。海藻。海松等一。

登望驛。〈在二郡西一〉⁽¹²⁸⁾。

昔者。氣長足姬尊。到_レ於二此處一。留為二雄裝一。御臂之韉。落_レ於二此村一。因号二韉驛一。々東西之海。有_二蛸。螺。鯛。雜魚。海藻。海松等一。

大家島。〈在二郡西一〉⁽¹²⁹⁾。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡幸之時。此村有_二土蜘蛛一。名曰二大身一。拒_二皇命_一不_レ肯_二降伏一。天皇勅命誅滅。自_レ尔以來。白水郎等。就_レ於二此島一。造_レ宅居之。因曰二大家島一。々南有⁽¹³⁰⁾窟。有_二鐘乳及木蘭一。廻縁之海。蛸⁽¹³¹⁾。螺⁽¹³²⁾。鯛⁽¹³³⁾。雜魚。及海藻。海松。多之。

值嘉島。〈在二郡西南之海中一。有_二烽冢⁽¹³⁴⁾三所一。〉

昔者。同天皇巡幸之時。在_二志式島之行宮一。御_二覽西海一。々⁽¹³⁵⁾中有_レ島。烟氣多覆。勅遣⁽¹³⁶⁾二陪從阿曇連百足一。令_レ察_レ之。島有_二八十餘一。就中二島。々⁽¹³⁷⁾別有_レ人。第一島名。小近。土蜘蛛大耳。

居_レ之。第二島名大近。土蜘蛛垂耳居。自餘之島。並人不_レ在。於_レ茲百足。獲_二大耳等_一。奏聞。天皇勅_レ令_二誅殺_一。時大耳等叩頭陳聞曰。大耳等之罪。実當_二極刑_一。雖_レ被_二戮殺_一。不_レ足塞_レ罪。若降_二恩情_一。得_二再生_一者。奉_レ造_二御贄_一。恒貢_二御膳_一。即取_二木皮_一。作_二長匏_一。鞭匏。短匏。陰匏。羽割匏等之樣_一。獻_レ於_二御所_一。

於_レ茲天皇。垂_二恩赦_一放更勅云。此島雖_レ遠猶見_レ如_レ近。可_レ謂_二近島_一。因曰_二值嘉島_一。則有_二檳榔。木蘭。枹子。木蓮子。黑葛。篁。篠。木綿。荷。莧₍₁₃₈₎。海則有_二匏。螺。鯛。鯖。雜魚。海藻。海松。雜海₍₁₃₉₎菜_一。彼白水郎富_レ於_二馬牛₍₁₄₀₎。或有_二一百餘近島_一。或有_二八十餘近島_一。西有_二泊_レ船之停_二二處_一。一處名曰_二相子田停_一。応_レ泊_二二十餘船_一。一處名曰_二川原浦_一。応_レ泊_二一十餘船_一。遣_レ唐之使。從_二此停_一發。到_二美彌良久之濟_一。〔即川原浦之₍₁₄₁₎西濟是也。〕從_レ此發_レ船指_レ西度之。此島白水郎。容₍₁₄₂₎貌似₍₁₄₃₎二隼人_一。恒好_二騎射_一。其言語異_二俗人_一也。₍₁₄₄₎

【校異】

- (124) 日下部君等祖也―底本小書す。国本などにより分注に改む。
- (125) 在郡西北―底本小書す。国本などにより分注に改む。
- (126) 時―甲本「時」なく、「幸」の下に「〔入ルヘシ〕」とあり、「因」の下に「〔時〕」とあり。
- (127) 鯛―甲本「鯛」を補う。
- (128) 在郡西―底本、大字に作る。国本などにより改む。
- (129) 在郡西―底本、大字に作る。国本などにより改む。
- (130) 有―国本「有」の右傍に「有」と記す。
- (131) 匏―国本「匏」に作る。
- (132) 螺―国本「鯛」の上に「螺」を補う。

- (133) 鯛―国本「鯛鯛」に作り、「鯛」を抹消す。
 (134) 冢―国本「家」に作る。
 (135) 々―甲本「海」に作る。
 (136) 遣―底本「遣」に誤る。国本などにより改む。
 (137) 々―甲本「島」に作る。
 (138) 貞幹本、この下に「其」あり。
 (139) 海―貞幹本「魚」に誤る。
 (140) 馬牛―国本「牛馬」に作る。
 (141) 之―底本「浦」の下にあり。国本などにより改む。
 (142) 容―貞幹本「客」に誤る。
 (143) 似―貞幹本「侶」に誤る。
 (144) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

杵嶋郡

【本文】

杵嶋郡。郷四所。里一十三。驛一所。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。巡幸之時。御舩泊^二此郡盤⁽¹⁴⁵⁾田杵之村^一。于^レ時。從^二舩狀戩⁽¹⁴⁶⁾之穴^一冷水自出。へ一云。舩泊之处。自成一島^一。天皇御覽詔^二群臣等^一曰。此郡。可^レ謂狀戩島郡⁽¹⁴⁷⁾。今謂^二杵嶋郡^一訛之也。郡西有^二湯泉出之巖^一岸峻極人跡罕及也。

孃子山。へ在^二郡東北^一。

同天皇行幸之時。土蜘蛛八十女。又在^二此山頂^一常捍^二皇命^一。不^レ肯^二降服⁽¹⁴⁸⁾。於⁽¹⁴⁹⁾茲遣^レ兵滅。

因曰^二孃子山^一。(150)

【校異】

(145) 盤——甲本「盤」を抹消す。

(146) 戰——貞幹本「歌」に誤る。

(147) 郡——貞幹本なし。

(148) 服——貞幹本「伏」に作る。

(149) 於——国本なし。

(150) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

【本文】

縣南二里。有^二一孤山^一。從^レ坤指^レ艮。三峯相連。是名曰^二杵島山^一。坤者曰^二比古神^一。中者曰^二比賣神^一。艮者曰^二御子神^一。(一名軍神。動則兵興矣。)> 鄉閭士女。提^レ酒抱^レ琴每^レ歲春秋。携^レ手登望。樂飲歌舞。曲盡而帰。歌詞云。阿羅札符縷。耆資麼加多愷塢。嵯峨紫彌刀。區縊刀理我禰尼。伊謀我提塢刀縷。(是杵島曲(151)。)>

【校異】

(151) 曲——国本「也」に作る。

藤津郡

【本文】

藤津郡。鄉四所。里九。驛一所。烽一所。

昔者。日本武尊行幸之時。到_レ於_二此津_一。日没_二西山_一。御船泊之明旦₍₁₅₂₎遊覽。繫_三船纜₍₁₅₃₎於_二大藤_一。因曰₍₁₅₄₎藤津郡_一。

能美鄉。〈在_二郡東_一。〉

昔者。纏向日代宮御宇天皇。行幸之時。此里有_二土蜘蛛三人_一。〈兄名大₍₁₅₅₎白。次名中白。弟名小白₍₁₅₆₎。〉此人等造堡隱居。拒_二皇命_一不_レ肯降服_一。尔時遣_二陪從紀直等祖釋日子_一。以令₍₁₅₇₎誅滅_一。於_レ茲₍₁₅₈₎大白等三人。但叩頭陳_二己₍₁₅₉₎罪過_一。共乞_三更奉_二主人_一。因曰_二能美鄉_一。

託羅鄉。〈在_二郡南_一臨_レ海。〉

同天皇行幸之時。到_レ於_二此鄉_一。御覽。海物豐多。勅曰地勢雖_レ少_二食物_一豐足。可_レ謂_二豐足村_一。今謂_二託羅鄉_一訛之也。

鹽田川。〈在_二郡北_一。〉

此川之源。出_二郡西南託羅之峰₍₁₆₀₎。東流入_レ海。潮満₍₁₆₁₎之時逆流。潮満流勢太高。因曰潮高満川_一。今訛謂_二鹽田川_一。々源有_レ淵。深₍₁₆₂₎許丈。石壁嶮峻。周匝如_レ垣。年魚多在。東邊有_二湯泉_一。能愈_二人病_一。₍₁₆₃₎

【校異】

(152) 且——貞幹本「且」に誤る。

- (153) 纒——貞幹本「覽」に誤る。
 (154) 因日——貞幹本なし。
 (155) 大——国本「太」に作る。
 (156) 白——底本「名」に誤る。国本などにより改む。
 (157) 以令——貞幹本「令以」に作る。
 (158) 茲——国本「是」に作り、甲本「是」を抹消して「茲」とする。
 (159) 己——国本「巳」に誤る。
 (160) 峰——国本・貞幹本「峯」に作る。
 (161) 満——国本、この下に「潮」を補う。
 (162) 二——国本「三」に作る。
 (163) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

彼杵郡

【本文】

彼杵郡。郷四所。里四。驛二所。烽三所。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。誅_レ滅球磨贈₍₁₆₄₎。吟_一。凱旋₍₁₆₅₎之時。天皇在_二豊前国宇佐海濱行宮_一。

勅_二陪從神代直_一。遣_二此郡速来村_一捕_二土蜘蛛_一。於_レ茲有_レ人。名曰_二速来津姫_一。此婦女申云。妾弟名

曰_二健津三間_一。住_二健村之里_一。此人有_二美玉_一。名曰_二石上神之木蓮子玉_一。愛而固藏。不_レ肯示_レ他。

神代直尋_二覓_一之_一。超_レ山逃走落_二石岑_一。〈郡以北之山。〉即逐及捕獲推_二問虛実_一。健津三間云。実有_二

二色之玉_一。一者曰_二石上神木蓮子玉_一。一者曰_二白珠_一。雖_レ比_二礪硃_一願以献之。₍₁₆₆₎

亦申云。有_レ人名曰_二篋築_一。住_二川岸之村_一。此人有_二美玉_一。愛之固秘定無_レ服_レ命。於_レ茲神代直迫₍₁₆₇₎

而捕獲問_レ之。篋_レ籙云。実有_レ之。以_レ貢_レ於_レ御。不_二敢愛惜_一。神代直。捧_二此三色之玉_一。還献_レ於_レ御。于_レ時天皇勅曰。此国可_レ謂_二具足玉国_一。今謂_二彼杵郡_一訛之也。

浮穴郷。〈在_二郡北_一。〉

同天皇。在_二宇佐濱行宮_一。詔_二神代直_一曰。朕歷_二巡諸国_一。既至_二平治_一。未_レ被_二朕治_一。有_二異徒_一乎。神代直奏云₍₁₆₈₎。波烟之起村。未_二猶被_レ治_一。即勅_レ直遣_二此村_一。有_二土蜘蛛_一。名曰_二浮穴沫₍₁₆₉₎媛_一。捍₍₁₇₀₎皇命_一。甚無_レ禮。即誅_レ之。因₍₁₇₁₎曰_二浮穴郷_一。

周賀郷。〈在_二郡西南_一。〉

昔者。氣長足姫尊。欲_レ征_二伐新羅_一行幸₍₁₇₂₎之時。御船繫_二此郷東北之海_一。鱸舶₍₁₇₃₎之戕戕化_二而_一為_レ磯_一。高二十餘丈。周十餘丈₍₁₇₄₎。相去十餘町。突立₍₁₇₅₎嵯峨草木不_レ生。加以陪從之船。遭_レ風漂_レ波。於_レ茲有_二土蜘蛛_一。名_二鬱₍₁₇₆₎比表麻呂_一救_二濟其船_一。因名曰_二救郷_一。今謂_二周賀郷_一訛之也。

速₍₁₇₇₎来門。〈在_二郡西北_一。〉

此門₍₁₇₈₎之潮之来者。東潮落者西涌₍₁₇₉₎登。涌響同_二雷音_一。因曰_二速来門_一。又有_二杉木_一。本者著_レ地。末者沈_レ海。海₍₁₈₀₎藻早₍₁₈₁₎生。以擬_二貢上_一。₍₁₈₂₎

【校異】

(164) 贈——貞幹本「贈」に作る。

(165) 凱旋——貞幹本なし。

(166) 之——国本「之印」とする。

(167) 追——貞幹本「追」に作る。

- (168) 云―国本「日」に作り、甲本「日」の右傍に「云」と記す。
 (169) 沫―底本・国本・貞幹本「沫」に誤る。
 (170) 押―貞幹本「才早」に作る。
 (171) 因―貞幹本なし。
 (172) 幸―貞幹本「宮」に誤る。
 (173) 舶―貞幹本「舳」に作る。
 (174) 丈―貞幹本なし。
 (175) 立―貞幹本「出」に作る。
 (176) 簪―国本「簪」の略字の右傍に「簪」と記す。
 (177) 速―国本「速」の右傍に「連_刻」と記す。
 (178) 門―国本「内」の右傍に「門_刻」と記す。
 (179) 涌―貞幹本「潮」に誤る。
 (180) 海―国本「濱」に作り、甲本「濱」の右傍に「海」と記す。
 (181) 早―国本「早」の右傍に「草」と記し、貞幹本「草」に作る。
 (182) 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

高来郡

【本文】

高来郡。郷九所。里二十一。驛四所。烽五所。

昔者。纏向日代宮御宇天皇。在_二肥後国玉_一(183)名郡_一。長渚濱之行宮覽_二此郡山_一曰(184)。彼山之形。似_レ於_二別島_一(185)。属_レ陸之山坎。別在之島坎。朕欲_レ知_レ之。仍勅_二神大野宿祢_一。遣_レ看之。往_二到此郡_一。爰有_レ人(186)迎来曰。僕者此山(187)神。名高来津彦。聞_二天皇使之来_一奉_レ迎而已。因曰_二高来郡_一。土齒池。〈俗言_レ岸為_二比遲波_一。在_二郡西北_一。〉

此池東之海邊有_レ岸。高百餘丈。長三百餘丈。西海波濤常以濯滌。縁₍₁₈₈₎土人辞_一。号曰_二土齒池_一。々堤長六百餘丈₍₁₈₉₎。廣五十餘丈。高二丈餘。池裡縱橫二十餘町許。潮来之常突入₍₁₉₀₎。荷菱多生。秋七八月。荷根甚甘。季秋九月。香味共變。不_レ中用也。

峰₍₁₉₁₎湯泉。〈在_二郡南_一〉

此湯泉之源。出_二郡南高来峰西南之峰_一。流_レ於_レ東。流之勢甚多熱異_二餘湯_一。但和_二冷水_一。乃得_二沐浴_一。其味酸。有_二流黄。白土。及松_一。々₍₁₉₂₎其葉細有_レ子。大如_二小豆_一。令_レ得_レ嚙₍₁₉₃₎。₍₁₉₄₎

【校異】

- ₍₁₈₃₎ 玉―底本「王」に誤る。国本などにより改む。
₍₁₈₄₎ 日―貞幹本「田」に誤る。
₍₁₈₅₎ 島―貞幹本「嶋」に作る。
₍₁₈₆₎ 人―国本「入」の右傍に「人」と記す。
₍₁₈₇₎ 山―国本「石」の右傍に「山」と記す。
₍₁₈₈₎ 縁―底本・国本・貞幹本「縁」に誤る。甲本により改む。
₍₁₈₉₎ 丈―貞幹本「夫」の如き字に作る。
₍₁₉₀₎ 入―貞幹本「出」に誤る。
₍₁₉₁₎ 峰―貞幹本「峯」に作る。
₍₁₉₂₎ 々―国本・貞幹本「松」に作る。
₍₁₉₃₎ 嚙―貞幹本「喫」に作る。
₍₁₉₄₎ 貞幹本、この下に「以下脱漏」とあり。

【附録二】伴信友「風土記考」・平田篤胤『古史徵開題記』の比較

【凡例】

- 一、上段に伴信友「風土記考」（『比古婆衣』所収、『伴信友全集』第四卷、ぺりかん社、一九七七年八月）、下段に平田篤胤『古史徵開題記』（山田孝雄校訂『古史徵開題記』、岩波書店、一九三六年九月）を配置し、「風土記考」と『古史徵開題記』で記述が一致する箇所をゴシックにした。
- 一、伴信友「風土記考」の全文を掲げ、これに該当する『古史徵開題記』の記述を抄出した。
- 一、本文は一〇・五ポイント、注は八ポイントとした。
- 一、文末の頁数は、それぞれのテキストによる。
- 一、それぞれに対応する記述がない場合は空白とした。

伴信友「風土記考」

今世に遺れる諸国の風土記に、いと古く珍重きとまた後なるとがあるを、今己が見たる限を以て其大概を論ひ定め試むとす、然るは大抵の人は風土記といへば延長の年頃に成れる物とのみ思ふ由なれど然有ず其より古く次々に出来たる物なり、其はまづはやく風土記を召れたりし事は続日本紀に、和銅六年五月甲子、制。畿内七道諸国郡郷名著^ニ好字^一令^レ作^ニ風土記^一〔此五字見本どもに脱たり今扶桑略記濫觴抄に依て補ふ〕其郡内所生銀銅彩色草木禽獸魚虫等物具録^ニ色目^一及土地沃墾山川原野名号所由、又古老相伝旧聞異事、載^ニ于史籍^一言上とあるを奉りて進れる記これなるべし、其は仙覚が萬葉集抄に大和国宇智郡の事を説て、和銅六年令^レ註^ニ進風土記^一之時任^ニ太政官下之旨^一定^ニ二字^一用^ニ好字^一也と云るを思ひ合せて弁ふべし〔和漢合連に、和銅五年の格に作風土記と記せるは、此六年の事なるを一年違へて書誤れるものなるべし、さてこの合連は僧円智吉田光由が、慶長十六年の頃撰集たる書なり〕此和銅の度に註進れる風土記の今世に逸れるは、常陸風土記ぞ其が中の一篇なるべき〔文を略げる処ありて全くはあらず、され今伝はれる本に題名なきは、脱たるかまた原より無しにや〕

(二七七頁上段一行目〜同頁下段二行目)

平田篤胤『古史徵開題記』

斯て此後の事は、信友が委く考へ記せる稿あり。其説に、今世に遺れる諸国の風土記に、いと古く珍重きと、また後なるとが有を、今己が見たる限を以て、其大概を論ひ定め試むとす。然るは大抵の人は、風土記といへば、延長の年頃に成れる物とのみ思ふ由なれど然有ず。其より古く次々に出来たる物なり。其はまづ古風土記を召れたりし趣を案るに、元明天皇紀に、和銅六年五月甲子、制。畿内七道諸国郡郷名著^ニ好字^一其郡内所^レ生。銀銅彩色草木禽獸魚虫等物具録^ニ色目^一、及土地沃墾、山川原野名号所由、又古老相伝旧聞異事、載^ニ于史籍^一言上。とあるを奉りて進れる史籍、すなはち風土記なるべく所思たり。其は仙覚が萬葉集抄に、大和国宇智郡の事を説て、和銅六年令^レ註^ニ進風土記^一之時。任^ニ太政官下之旨^一定^ニ二字^一用^ニ好字^一也と云るを思ひ合せて弁ふべし。〔古き年代記の和銅五年の条に、作^ニ風土記^一とあるは、此時の事を、一年たがへて伝たる説を取れる物ならむか。また古事記も和銅五年に上れるを四年に開たるを思へば、共に二年めに上れるものにて、年代記には詔命ありし年を挙たるにもあるべし。〕此和銅の度に註進れる風土記の今世に逸れるは、常陸風土記ぞ其が中の一篇なるべき。〔文を略げる処ありて全くはあらず。され今伝はれる本に題名なきは脱たるか。また原より無しにや。〕

(二四八頁一二行目〜二四九頁一〇行目)

其は此風土記の発端に、常陸国司解申古老相伝旧聞事、問^二国郡旧事^一「古老答曰云々〔記中に古老曰云々と記せる処あまたあり〕と書出たるは全く和銅の詔命の文を奉たる文なること著く、又白壁郡とあるは式和名抄等にも載たる真壁郡なり、こは統紀延暦四年の詔に先帝御名及云々、自今以後宜^二並改避^一於^レ是改^二姓白髪部^一為^二真髪部^一云々とあるによりて思ふに此度白壁を真壁と改られたるなるべし、然れば此記延暦四年より以前に書たるものならむ事決しこれも和銅の度に注進れるならむと論へる証とすべし、また郡に隸て里と書たるも慥き証とぞ思はるゝ〔出雲風土記に、郷字者、依^二靈龜元年式^一改^レ里為^レ郷とあるに依ていふ〕また出雲風土記は天平五年二月卅日勘造とあればかの和銅六年より二十年ばかりの後に進れる物なり、此は和銅の詔命によりて進れりし後故ありて再勘へて進れる記なるべし〔また新記に引たる土佐国風土記に、高野天皇宝字八年云々と記せる文あり、此は出雲風土記を勘進せる天平五年より三十年後のことなり、また萬葉集抄に引たる筑前風土記に、当奈羅朝天平四年歲次壬申とあるも彼天平五年の前年にて間近きが上に、当奈羅朝とあれば、今の京となりての文なり、

(二七七頁下段二行目〜同一八行目)

其は和銅の制にも、載^二于史籍^一言上と有て、風土記てふ名目の無ればなり。然らば後に風土記と号られたるか。其はとまれ、萬葉集抄釈紀等に此記文を引て、常陸風土記とあれば、既く然号たる事疑なければ、今も然いふ。〕其は此風土記の発端に常陸国司解申古老相伝旧聞事。問^二国郡旧事^一「古老答曰云々〔記中に、古老曰云々と記せる処あまたあり。〕と書出たるは、全く和銅の詔命の文を奉たる文なること著く、

また郡に隸て里と書たるも慥き証とぞ思はる。〔出雲風土記に、郷字者、依^二靈龜元年式^一改^レ里為^レ郷と見え、後備中風土記にも、靈龜年中云々とあるに依ていふ。〕また出雲風土記は、天平五年二月卅日勘造とあれば、かの和銅六年より二十年ばかりの後に進れる物なり。此は和銅の詔命によりて進れりし後、故ありて再勘へて進れる記なるべし。〔また新記に引たる土佐国風土記に、高野天皇宝字八年云々と記せる文あり。此は出雲風土記を勘進せる天平五年より、三十年後のことなり。また萬葉集抄に引たる筑前風土記に、当^二奈羅朝天平四年歲次壬申^一とあるも、彼天平五年の前年にて間近きが上に、当^二奈羅朝^一とあれば、今の京となりての文なり。〕

(二四九頁一一行目〜二五〇頁八行目)

此等同時に出来たる記ならんか、是も萬葉集抄に引たる備中国風土記に、奈良朝廷以天平六年甲戌とあればまた其後に出来たる記なること決し」

また肥前豊後のは大概出雲のと同じ体裁なれば同じ頃に進れる物なるべし、文のさま出雲のよりも後れて見ゆれば延長三年に召上たまへる記ならむと思はるれど「延長三年の官符の事は下にいふべし」延喜十四年四月三善清行朝臣の意見封事「本朝文粹に載たり。」に臣去寛平五年任^二備中介^一彼国下道郡有^二邇磨郷^一爰見^二彼風土記^一云々とて引たる備中風土記の体を按るに、「此文二十二社註式古本にも引たり、なほ此国の風土記とて萬葉集抄二十二社註式の異本、諸社根元記等に引たる文のあるも同じ体裁に見えたり」肥前豊後のよりも稍後さまに見ゆるすら寛平の頃既に在し書なれば肥前豊後なるは元よりにて共に延長のあなたより在来し風土記なるべし「寛平五年より延長三年まで三十餘年なり」さてその外古書等に引たる諸国の風土記の文の体裁を考るに常陸出雲など、同じ趣に見ゆるがあり、また肥前豊後のなど、等じほどと見ゆるもあり、また彼備中のなるが如き書さまなるも有と思はれて区々なるが如くみゆ「其文少づつなれば、實して論へるにはあらず。其大凡を推考へて言ふなり」

(二七七頁下段一八行目〜二七八頁上段一五行目)

此等同時に出来たる記ならむか。是も萬葉集抄に引たる備中国風土記に、奈良朝廷以天平六年甲戌とあれば、また其後に出来たる記なること決し」また肥前豊後のは、大概出雲のと同じ体裁なれば、同じ頃に進れる物なるべし。文のさま出雲のよりも後れて見ゆれば、延長三年に召上たまへる記ならむと思はるれど、「延長三年の官符の事は下にいふべし」延喜十四年四月、三善清行朝臣の意見封事に、「本朝文粹に載たり。」臣去寛平五年、任^二備中介^一彼国下道郡有^二邇磨郷^一。爰見^二彼風土記^一云々とて引たる、備中風土記の体を按るに、「此文二十二社註式古本にも引たり。なほ此国の風土記とて、萬葉集抄、二十二社註式の異本、諸社根元記等に引たる文のあるも、同じ体裁に見えたり。」

肥前豊後のよりも、稍後さまに見ゆるすら、寛平の頃既に在し書なれば、肥前豊後なるは元よりにて、共に延長のあなたより在来し風土記なるべし。「寛平五年より、延長三年まで三十餘年なり」さてその外古書等に引たる、諸国の風土記の文の体裁を考るに、常陸出雲などと同じ趣に見ゆるがあり。また肥前豊後のなど、等じほどと見ゆるもあり。また彼備中のなるが如き書さまなるも有と思はれて、区々なるが如く見ゆ。「其文少づつなれば、實して論へるにはあらず。其大凡を推考へて言ふなり。」

(二五〇頁九行目〜二五一頁八行目)

また釈日本紀に筑紫風土記曰とて肥後の関宗の事、筑前の芋瀬野の事の文を引たる「今一つ御津柏の事の文をも引たり、此は何れの国なるにか、いまだ考へず」又筑前宗像社記に、西海道風土記曰とて身形郡の名の所由を記せる文ありて古文と見ゆ、此等も上に論へる風土記なるを五畿七道に帙を分たる方の名を取れるなるべし、総て風土記は各国にて記せる書にして撰者も各別なれば必しも文法は等かるまじき理なり、然れば何れを何時のと慥かに知べからねど上に論へる風土記どもは決く延長より已前に成たる物なる事は、違ふまじくぞ所思ゆる、さて延長に風土記召れし事を朝野群載に載せる、延長三年十二月十四日の太政官符に、五畿七道諸国司_三早速勘_二進風土記_一事、右如_レ聞諸国可_レ有_二風土記文_一今被_二左大臣宣_一僞、宜_下仰_二国宰_一令_上勘_二進之_一若無底探_二求郡内_一尋_二聞古老_一早速言上者、諸国承知依_レ宣不_レ得_二遲廻_一符到奉行とあり「この符文類聚符宣抄にも載たり」此符の旨は諸国に前に進れりし風土記の案文有べきを今度そを覆勘て進るべし、もしそれ無底ば郡内を探ね求め古老に尋問て更に撰記して上るべしとなり「上に引たる和銅六年の詔命に、古老相伝旧聞異事載_二于史籍_一言上とあると同旨にて、国々の古伝を専と記さしめ給へる事知べし」

(二七八頁上段一五行目〜同頁下段一五行目)

また釈紀に、筑紫風土記曰とて、肥後の関宗の事、筑前の芋瀬野の事の文を引たる、「今一つ御津柏の事の文をも引たり。此は何れの国か、いまだ考へず」また筑前宗像社記に、西海道風土記曰とて、身形郡の名の所由を記せる文ありて古文と見。此等も上に論へる風土記なるを、五畿七道に帙を分たる方の名を取れるなるべし。総て風土記は、各国にて記せる書にして、撰者も各別なれば、必しも文法は等かるまじき理なり。然れば何れを何時のと慥かに知べからねど、上に論へる風土記どもは、決く延長より已前に成たる物なる事は、違ふまじくぞ所思ゆる。さて延長に風土記召れし事は、朝野群載に載せる、延長三年十二月十四日の太政官符に、五畿七道諸国司_三早速勘_二進風土記_一事。右如_レ聞諸国可_レ有_二風土記文_一。今被_二左大臣宣_一僞。宜_下仰_二国宰_一令_上勘_二進之_一。若無底探_二求郡内_一尋_二聞古老_一早速言上者。諸国承知依_レ宣不_レ得_二遲廻_一。符到奉行とあり。此符の旨は、諸国に前に進れりし風土記の案有べきを、今度そを覆勘て進るべし。もしそれ無底ば郡内を探ね求め、古老に尋問て、更に撰記して上るべしとなり。「上に引たる、和銅六年の詔命に、古老相伝旧聞異事載_二于史籍_一言上とあると同旨にて、国々の古伝を専と記さしめ給へる事知べし」。

(二五一頁八行目〜二五二頁七行目)

此官符に依て前に進れりし風土記の案を更に勘進れる国々の多かるべく、また新に古老の旧聞を探索めて上れるも有べけれど、古書どもに引てわづかに遺れるは其差別知べからず。「本朝書籍目録に、風土記諸々土地本縁と載たり、此等の類の風土記なるべし」故古き風土記の趣を取り総て考るに、各国にして旧くより聞伝たる古老の説を専と記さしめ給へる物にして、古事を証す便となること少からず、いとも珍重たく貴き籍なるが中にはいかにぞや思はるゝ事のをりく無にしも非ず、然れど其は既くより誤り伝へたる事も有げに見え、また常時のさかしら説も稀々には有げに見ゆれば熟く見て撰ひ取べきなり

抑風土記は古老の旧聞を専と記さしめ給へる物なる由は上に引る和銅六年五月の詔命に古老相伝旧聞異事載_二于史籍_一言上と見え、其を奉りて記し進れる常陸風土記の発端に、常陸国司解申古老相伝旧聞事問国郡旧事古老答曰云々「上に引たる和銅六年の詔命の文を承たる文なり、心を着けて見るべし」と書出たるを始め記中に古老曰云々と書る処あまたあり〔但し此記は国司の撰たる趣に作たり〕

(二七八頁下段一五行目〜二七九頁上段一三行目)

此官符に依て、前に進れりし風土記の案を、更に勘進れる国々の多かるべく、また新に古老の旧聞を探索めて上れるも有べけれど、古書どもに引てわづかに遺れるは、其差別知べからず。「本朝書籍目録に、風土記諸々土地本縁と載たり。此等の類の風土記なるべし」故古き風土記の趣を取り総て考るに、各国にして、旧くより聞伝たる古老の説を、専と記さしめ給へる物にして、古事を証す便となること少からず。いとも珍重たく貴き籍なるが、中にはいかにぞや思はるゝ事のをりをり無にしも非ず。然れど其は既くより誤り伝へたる事も有げに見え、また常時のさかしら説も、稀々には有げに見ゆれば、熟く見て撰ひ取べきなり。抑風土記は、古老の旧聞を専と記さしめ給へる物なる由は、上に引る和銅六年五月の詔命に、古老相伝旧聞異事載_二于史籍_一言上と見え、其を奉りて記し進れる常陸風土記の発端に、常陸国司解申。古老相伝旧聞事。問_二国郡旧事_一古老答曰云々「上に引たる、和銅六年の詔命の文を承たる文なり。心を着けて見るべし。」と書出たるを始め、記中に古老曰云々と書る処あまたあり。〔但し此記は、国司の撰たる趣に作たり。〕

(二五二頁七行目〜二五三頁五行目)

また出雲風土記の発端に、老細思枝葉、裁定詞源、亦山野濱浦之處、鳥獸之棲、魚貝海菜之類、良繁多悉不陳、然不獲止粗拳梗概、以成記趣とあるは此記を上るべき詔命を当国の国司の奉りて其下宰に掌らせ古老等に命せて記させたる書なるが故に其老人等が言もて老と自称へるなり、上に挙たる延長三年に風土記を召れたる官符に、探求郡内尋問古老早速言上とあるも和銅の旧章に准拠たまへりと思ひ合すべし〔古は国々に国老郡老府老庄老古老一老など称ふ長のありしと見えたり、それは東寺に秘藏たる古文書どもを見し中に、承平二年丹波国多紀郡司解状の連署に、国老多紀臣国老日置公と記し、同年近江国蒲生郡安吉郷宇土田庄田地券抄色目之事とある文書に、以前の立券文の署名を載たる中に、郡老從七位上佐々木山公房雄と見え、応徳五年伊勢国大國庄の文書の連署に庄老と云もあり、此等の称なほあり、此外応永十八年の田券に國名は破れて見えざれど、其連署に一老とあり、弘安元年の文書に若狭國太良庄百姓藤井宗氏古老百姓真利真安など記せるもありき、また筑前國宇佐八幡宮に藏たる元亨二年の文書の写を見しに、連署に府老監代紀朝臣とあり、こは太宰府の府老なるべし、此等にも思ひ合せて老とは記の作者が自称なりと知らる、さて今世にも將軍家の御政申行ひ給ふあたりの御事は更なり、大名衆の政申す職に家老といひ老と云があり、また市にも駅にも年寄宿老など称ふがあり、

(二七九頁上段二三行目〜同頁下段八行目)

また出雲風土記の発端に、老細思枝葉、裁定詞源、亦山野濱浦之處、鳥獸之棲、魚貝海菜之類、良繁多悉不陳、然不獲止粗拳梗概、以成記趣とあるは、此記を上るべき詔命を、当国の国司の奉りて、其下宰に掌らせ、古老等に命せて記させたる書なるが故に、其老人等が言もて、老と自称へるなり。上に挙たる、延長三年に風土記を召れたる官符に、探郡内尋問古老早速言上とあるも、和銅の旧章に准拠たまへりと思ひ合すべし。〔古は国々に国老、郡老、府老、庄老、古老、一老、など称ふ長のありしと見えたり。それは京の東寺に秘藏たる古文書どもを見し中に、承平二年丹波国多紀郡司解状の連署に、国老多紀臣、国老日置公と記し、同年近江国蒲生郡安吉郷、宇土田庄田地券抄色目之事とある文書に、以前の立券文の署名を載たる中に、郡老從七位上佐々木山公房雄と見え、応徳五年伊勢国大國庄の文書の連署に、庄老と云もあり。此等の称なほあり。此外応永十八年の田券に國名は破れて見えざれど、其連署に一老とあり。弘安元年の文書に、若狭國太良庄百姓藤井宗氏、古老百姓真利真安など記せるも有き。また筑前國宇佐八幡宮に藏たる、元亨二年の文書の写を見しに、連署に府老監代紀朝臣とあり。こは太宰府の府老なるべし。此等にも思ひ合せて、老とは記の作者が自称なりと知らる。さて今世にも、將軍家の御政申行ひ給ふあたりの御事は更なり。大名衆の政申す職に、家老といひ老と云があり。また市にも駅にも年寄宿老など称ふがあり。

(二五三頁五行目〜二五四頁七行目)

また国によりては郡または村にも年寄と称ふがあるは上古より老人は能く物事を識り行ふものなるにより親み尊ぶて其分々の長と倚頼たるから、自然に老と云が職の称の如くなりて、某老といふ称の出来たり覚らるゝなり、なべて古世は人の心深く厚くして、若人は賢し立ずして、何事も老人を貴び、物問ひ習ひたりし風俗なること、書等に見えたる故実に考へ合せて、熟々弁へ曉るべし。然るを後には、老たる若をいはず賢者ぶるが長だちて、事執る事もある俗とはなりにたれど、然すがに今も其なごり覚えていと尊き御国がらなりかし、漢国にてもいと上古には国老などいひて老人を尊む意はへの無にしもあらざりしかど、素より賢しだつ国がらなりければ、代々に官を建替へ事々しき名を付て、賢々しく持成せるまに、ますゝ世は乱れたりき、皇国にしても彼国の唐の世の官を擬ひ建め給ひしかど、実はもはら其建たまへるやうには非ずて、終に今の御世の様に成来しは、弥益に古に復る御国風の所思でいと尊し、こは因にいさゝか論へるなり」

(二七九頁下段八行目〜同一五行目)

また国によりては、郡または村にも、年寄と称ふがあるは、上古より老人は能く物事を識り行ふものなるにより親み尊ぶて其分々の長と倚頼たるから、自然に老と云が職の称の如くなりて、某老といふ称の出来たり覚らるるなり。なべて古世は人の心深く厚くして、若人は賢し立ずして、何事も老人を貴び、物問ひ習ひたりし風俗なること、書等に見えたる故実に考へ合せて、熟々弁へ曉るべし。然るを後には、老たる若をいはず賢者ぶるが長だちて、事執る事もある俗とはなりにたれど、然すがに今も其なごり覚えていと尊き御国がらなりかし。漢国にても、いと上古には老人を尊む意はへの無にしもあらざりしかど、素より賢しだつ国がらなりければ、代々に官を建替へ事々しき名を付て、賢々しく持成せるまに、ますゝ世は乱れたりき。皇国にしても彼国の唐の世の官を擬ひ建め給ひしかど、実はもはら其建たまへるやうには非ずて、終に今の御世の様に成来しは、弥益に古に復る御国風の所思でいと尊し。こは因にいさゝか論へるなり。」

(二五四頁七行目〜二五五頁四行目)

さて此老細思枝云々の文の説につきて平田篤胤が云、終文に、天平五年二月卅日勘造、秋鹿郡人神宅臣金太理とあるを思ふに、此記は当昔この金太理といふ人所の老として作るならむ其はまづ其記せる事実ども當時新に記せる旧聞も有べけれど大概は旧より当国に記し伝たる書ありて此時其をいさゝか修ひ勘へて造れるにて細思枝葉裁定詞源云々とは源より伝詞の枝葉とある繁多き文をば裁定めて公より命せ給へる趣に記し成せる由なるべし、其は意宇郡なる国引の古事を記せる文の類は、決めて天平の頃の文に非ず、かの履中天皇の御世に国史を置いて記させ給へる時などよりもなほ旧く書き伝へけんとさへに思はるゝは、古文章を採て載たるなるべくそれに反りて安来郷の下なる語臣猪麻呂が古事は、始に浄御原天皇御世甲戌七月といひ終に自爾時至于今日經六十歳とあれば旧く聞伝たる事を天平五年に肇て記せる物なるべきを思ひ合せて暁るべし〔文の状も国引の古事の文とはいたく異にして新しく見えたり〕

(二七九頁下段一六行目〜二八〇頁上段一六行目)

偕この老細思^二枝葉^一云云の文を、篤胤も同じ趣に考へて、終文に、天平五年二月卅日勘造、秋鹿郡人神宅臣金太理とあるを思ふに、此記は当昔この金太理といふ人、所の老として作るならむ。其はまづ其記せる事実ども、当時新に記せる旧聞も有べけれど、大概は、旧より当国に記し伝たる書ありて、此時其をいさゝか修ひ勘へて造れるにて、細思^二枝葉^一裁^二定詞源^一云々とは、源より伝詞の枝葉とある、繁多き文をば裁定めて、産物なども悉くは陳ねず、挙ずは、獲有べからぬ物をのみ梗概に挙て、公より命せ給へる趣に記し成せる由なるべし。其は意宇郡なる国引の古事を記せる文の類は、決めて天平の頃の文に非ず。かの履中天皇の御世に、国史を置いて記させ給へる時などよりも、なほ旧く書き伝へけむ。とさへ所思ゆる伝なれば、古文章を採て載たるなるべく、此に反りて安来郷の下なる、語臣猪麻呂が古事は、始に浄御原天皇御世甲戌七月といひ、終に自^二爾時^一至^二于今日^一経^二六十歳^一とあれば旧く聞伝たる事を、天平五年に肇て記せる物なるべきを、思ひ合せて曉るべし。「文の状も、国引の古事の文とは、いたく異にして新しく見えたり。」

(二五五頁四行目〜二五六頁二行目)

さて普通の本に右の文の上に字を下て得而難可誤といふ五字一行あり〔一本には小字に書きまた此五字なき本もあり〕此は後人の此の文の意を得がてに得而難可読と傍書したるがまた後人の読を誤にあやまりて固有の文と思ひ混へて一行に記せる物なりと云へるは誠に然る説等なり〔上件論へる説どもを委曲に読弁へて古風土記なる事どもを考へ通し、古事記日本紀に洩れたる伝を撻ひ探りて其闕たるを補ふべき物なりかし〕さてまた江李部集に〔天江匡房卿の詩集〕冬日於州廟賦詩小序に、昔西曹始祖菅原京兆行県邑以作風土記〔作の字一本に注とあり、さてこの次きの文に、今東曹末儒江侍郎思卿貢以興学校院〕と云へるは乃ち清公卿の菅原氏にて京職の官に任されたるをいへる文なり、行県邑作風土記とは任國中其国に有来れる風土記の絶たるを憤して更に風土記を作れる由なるべし、然考たる証は続日本後紀に見えたる此主の伝に、大同元年任尾張介不用刑罰施劉寛之治、弘仁三年秩満〔中間五年を歴〕入京補左京亮とある時に合ひて聞ゆるをもて知るべし〔此後の外官は、式部少輔のとき大同七年に兼阿波守、九年に朝儀の改制に関りその後彈正大弼に任されてありし時、天長元年出為播磨權守不異左貶、時人憂之、二年八月公卿議奏国之元老不合遠離、更使入部、兼文章博士、三年三月亦遷彈正大弼兼任信濃守、復転左京大夫文章博士如故、承和二年兼但馬守、侍読後漢書、六年正月云々、老病羸弱行歩多艱、九年十月丁丑薨時七十三と見えて任国に下られたりとは聞えず〕

(二八〇頁上段一六行目〜同頁下段二〇行目)

さて普通の本に、右の文の上に字を下て、得而難可誤といふ五字一行あり。〔一本には小字に書き、また此五字なき本もあり。〕此は後人の此の文の意を得がてに、得而難可読と傍書したるが、また後人の読を誤にあやまりて、固有の文と思ひ混へて、一行に記せる物なり。と云へるは誠に然る説等なり。〔上件論へる説どもを、委曲に読弁へて、古風土記なる事どもを考へ通し、古事記、日本紀に洩れたる伝を撻ひ探りて、其闕たるを補ふべき物なりかし。〕

(二五六頁二行目〜同七行目)

これよりそのかみ早く風土記の絶たる国々もありし事推して知るべくかの延長三年の官符にふどきを勘進せさせ給へる事状もまた推して察るべし〔清公卿の尾張介に任されたる大同元年より延長三年まで中間百十六年を歴たり〕

（二八〇頁下段二〇行目～二八一頁上段四行目）

右に論へる風土記にはあらで世に総国風土記といふが散々になりてあるを余が蒐集て見たるは二十七国ばかりぞある〔新井君美ぬしの筆記には三十国ばかりの残篇を見られつるよし見えたり〕悉残缺たる卷々にしていづれの卷もいたく虫喰また破壊たる由にものしてひとつも全きあらず、然る中に駿河のみ一国の諸郡備はりたれどこれも又虫喰などして缺たる所多し、さて其風土記どもなべては巻端に日本惣国風土記第若干某国某郡と記し、一郡毎に巻を分ち或は一国を一巻とせるもあり、大概是郷庄等の下に公穀仮粟、神社の下に圭田、寺の下に寄田など称ふ名目をもて其税数またそれらの地量を記しまた土産の物などとりぐに記せり、さて其賦税の名目田地の量称などにもいとあやしき称あり、

(二八一頁上段五行目〜同一七行目)

さて此記、なべて巻端に、日本惣国風土記第若干、某国某郡と記して、一郡ごとに巻を分たるも、また一国を一巻とせるもあり。また風土記とのみ書て、某国云々と書出したるもあり。其は伊賀伊勢尾張のみなり。其中に伊勢のは、異本に日本惣国風土記と書たるも有て、大かた同じ書体なれば、伊賀尾張のも准へて共に惣国風土記なるべく所思ゆ。〔されど、その伊勢風土記抄にも、日本惣国風土記と無ければ、昔より然る本もありしなり。〕またなべては郷庄等の下に、公穀仮粟、神社の下に圭田、寺院の下に寄田など書て、其税また地坪の量を記せるに、其を記さざる国もあり。其外一貫して記さまの同じ例ならぬは、いまだうるはしく卒業ざる草案を、まづかんにめし上て、糾さむと為たまふ間に、故ありて止みしなるべし。〔此時代の考は上にいへりき。〕また賦税の名目、田地の量称などに、いまだ聞も及ばぬ事ありて、疑はしきが如くなれど、然る名称どもは、世々に異なる事の有て、今容易く知がたき事の少からぬは、古文書どもに、彼此見えたるに思ひ合すべし。〔中には、いさゝか考へたる証もあれど、いと事長ければ洩しつ。〕

(二六一頁一一行目〜二六二頁一〇行目)

又神社の創建祭神の名寺院の開基の由などをも記せり然ある中に諸国区にして同例ならず、又地名地理も古に合へるが無きにしもあらねど、古にも後にも合はざる謾なる事どもを志どけなく書なせる偽書なり、さはいへども稀に其国の古伝説を記せるものに依りて書交へたりげにおもはるゝ事あれどなべて謾説せる中に見えたればたやすく信がたきをよくよく選びとりて旁の考には備ふべし、さておほかた基本どもの奥書に残篇なる由をことわりて**文和の年間中原師行の名を記したる本を始め、其後には嘉慶文亀大永弘治天正などの年月を記して写せる人人の名を識せるがあり、又さばかり昔の年号はなくて寛文万治のことと写せる由記せる本もあり、さて又同じ国郡の残篇の文の別本にて二通あるもあり、かにかくにも偽書なればたやすく信まじき書にぞ有ける**〔多門院日記に、天正十八年七月廿九日日本国の郡里指図絵に書き海山川里寺社田数以下悉註すべき由、御下知云々、禁中に可被籠置之用云々と見えたるは、此風土記に由ありて聞ゆれども、偽書の弁は暫く置て、その天正十八年より前々に此風土記の残篇を写せる由、奥書せる本の多かるにも合ず、又そのかみの乱世にさばかりの国の図籍を選定て進りたるべくも思はれず、下知ばかりにて事止たりしなるべし、いづれにも此風土記にはあらずかし〕

(二八一頁上段一七行目〜同頁下段一六行目)

偕又惣国風土記と云が有り。委く欠残りたる篇なるが、中にたゞ駿河国のみ大かた全たれど、其も虫喰などして欠たる処あり。〔惣国風土記の中に、此国のばかり全き故にや。既に塙保己一の群書類従に取り修れて板に彫たり。〕さて此記ども、既く世に廃々になりて、少づつ遺たるも、虫喰などに損なはれて全からぬよし。古くは**文和の年間に、中原師行の奥書せられたる本を始め、其後嘉慶文亀弘治天正などの年間、別人の奥書したるも有り。**〔また然ばかり昔の奥書なくて、**寛文万治の頃に写したる本も有り。**そは巻々を見て曲に知べし。さて此奥書どもにも、疑はしげなる事のなきにしも非ねど、本ども互に写誤ありて、正しく思ひなさるゝ所も少からず。また奥書せる人の伝の知られずして、考がたきもあり。或人云此記の奥書どもは、後人のさかしら心に、珍たげに見せむとて、書入たる物ならむかと云り。さる事もあるべくや。〕

(二五六頁七行目〜二五七頁二行目)

然るをはやく今井似閑が萬葉緯に此風土記どもを採集めて今所書記風土記殘編十四帖、並民部省図帳殘編二帖者荷辻柳陰之恩惠所撰写也、伝聞從林氏之書樓出、近世引用此書雖未見及而与古書合符節則非偽書必矣、誰家文苑所秘置矣記卷數亦可珍賞焉といへり〔與古書合符節といへど、然る事はさらに見えず、ふと疎に見て然はいへるなり、

(二八一頁下段一六行目〜二八二頁上段二行目)

また此風土記の加賀国の卷の奥に、右之風土記者加賀國之水帳也、尤為官人為其用以官本令校合畢、嘉慶二年二月下旬、左中将元隆とありて、その水帳を小帳と書ける本もあるを、新井君主の加賀人室直清がり答られたる書に、その風土記の事を小帳とある本によりて民部省大藏省などの中に在し小帳と云ものなるを、後人の風土記と心得たるものなるべしと云はれたるはいかゞ、官の諸帳に大帳といふはあれど、小帳と云ふはさらにきこえたる事なし、此ぬしも此風土記どもをよくも見ずしてふと然つなほざりことせられたるなるべし〕

(二八二頁上段二行目〜同六行目)

さて此風土記は、今井似閑が萬葉緯に、十四帖、取集めて収たりき。〔記して云らく、今所書記風土記殘編十四帖、並民部省図帳殘編二帖者、荷辻柳陰之恩惠所撰写也。伝聞從林氏之書樓一出。近世引用此書雖未見及、而与古書合符節則非偽書必矣。誰家文苑所秘置矣記卷數亦可珍賞焉といへり。〕それと共に今己が彼国此郡と取り集たるが、二十七国ばかりの記である。〔新井君美ぬしの書に、三十国ばかりの殘篇を見られたる由見えたり。なほも尋ね求めて見まほしくぞ思ふ。〕

(二七一頁一四行目〜二七二頁二行目)

さて惣国風土記の、加賀国の記の奥書に、右風土記加賀國之小帳也。尤為官人為其用。以官本令校合畢。嘉慶二年二月下旬、左中将元隆とあり。按に各国の公文の中に、大帳と云は見えたれど、小帳と云は未知らず。二本に小帳を水帳と書る本あるに依て考るに、今の世に水帳とあるは、古の図帳の名残にて御図帳と云るを、しか書ならへるならむと思はるれど、よく思へば非じ。然れど当昔さる帳も在ぞしけむ。然るものゝ餘に聞及ばずとて、一向に疑はむ中々に偏なり。〔はやく新井君美ぬしの、加賀人室直清がり答られし書に、此小帳の事を論ひて、民部省大藏省などの中に在し小帳を云ものなるを、後人の風土記と心得たる物なるべしと言れたりき。また此奥書に、為官人爲其用と記せる嘉慶の頃は武家さまにて、足利義満將軍の、北朝の政申し給ふ時なれば、公家さまにては、貢賦の事など聞食ざりつらめど、然すがに朝廷の御稜威を下し奉らじの心すさみに、さる書さませる物なるべし。其頃の文書に例ある事なり。〕

(二六〇頁一五行目〜二六一頁一行目)

余わかゝりし頃古書を好む意にはかられて本文をばよくも読考へずしてたゞまづこれ作らせ給ひたりけん頃などを考へてよく採撰ひて考に備ふべき書なるべくおもひて、まど試におろ／＼下書なるものを書ささびおきつるを、年経て後に取出し見てもへばあらぬ強言してありけりとおもひなりぬ、其頃中山信名は古の制度どもを委しく心得たれば此事かたらひたるに其古にあらぬ事どもを明めて偽書なるよしを論へるによりていよゝ前の考に強説せる誤をさととりてわれながらあさましく背に汗あゆばかり恥かしくてなむ、さて又それより先に彼下書を平田篤胤に見せかたらひたるに、志ばしとて持去きて写しおきたりとて己にも知らせず古史徴の開題記にとり載て板本にさへものしたりき、すべてかたなりなる考書などは謾に人に借しては見すまじきもの也とはかねて思ひながら心ゆるびてけりと悔れどもかひなし、自閑がかの與古書合符節と書るも後には悔たりけむかし、

（二八二頁上段六行目〜同頁下段四行目）

さて又所謂風土記どもの中に山城伊賀尾張のはたゞ風土記と題して〔惣国とはあらず、但し山城伊勢に総国と書たる本も見えたれど、其はさかしらに加へたりと見ゆ〕其書ざまなべての総国とあるとは異にていさゝか其国の事記せる古き書に抛り、おろ／＼古伝説をもとりて記せるものなるべく聞ゆればよく選びとりてものゝ考に備ふべし〔但し伊勢は二通ありて、一通は例の総国にて、文法もそれと同じ、こゝに論ふは其を除きて、いま一通の本をいふ、さて又総国伊勢風土記抄と題して桑名郡の部ばかりをあらぬ異本どもを挙げ校へ、又古書どもを引て註せる中にも、偽作れる文ありていと謾なる妄説なるを、これもさきにはまどはされたりきさはいへど古の風土記になずらふべくもあらぬ後世の私しに作れるものなればよく其心志らひすべきなり、

（二八二頁下段四行目～同一四行目）

さて此は何の頃いかなる人のものせるにか考得ざれど其四国の中の風土記をむかしの書どもに引記せるを今おのれは見およびたるは、ト部兼俱卿の神名帳頭註同姓兼見本の二十二社註式に、山城国風土記云とて引たり伊奈利社の来由の文全く此風土記を採られたり、また伊賀名所記といふ書に「此書一冊あり、巻尾に山城大和伊賀三国之風土記地図等之内、并歌林之記録抄物等尽授之為三巻畢、陽月斎永閑判と有て、紹巴の奥書あり、さて此奥書の趣にては、こゝに論へる四国の如き大和の風土記もあるべく、また山城大和の名所記も有べきをそはいまだ見ず」当国穴師大明神の事を宗祇が至宝抄に風土記云とて引たる文、また名張郡の名の所由を風土記曰とて引たるも、全く此伊勢風土記の文を採れりまた伊賀史に「跋に云、応或人之需、撰伊勢伊賀両国史、蓋抄出於国司及書諸家之記文、或復先年就任在于伊勢時、搜求寺社之諸記者相併記之、故雖未全其始終唯次眼之所覃而已、後人補其不足正其謬則幸甚、天永庚寅（元年なり）十二月大江広房、その奥書に伊賀伊勢両国史者、信乃守橘直幹（主計頭橘以綱男、為大江匡房卿古子、改広房而天永二年還本姓）所撰也、借得新大納言本而遂書、永享七載藤尹賢書、また素聞有世伊賀伊勢両史、不慮従京都求出伊賀史令書写畢、分明二年十一月権大納言伊賀の国号の事に付て風土記者雖出自其国之言野史之類乎とて論はれたるも、此風土記を斥せり、

（二八二頁下段一四行目〜二八三頁上段一〇行目）

またト部兼見本の二十二社註式に、「同姓兼俱の神名帳頭注にも」山城国風土記云とて引たり伊奈利社の来由の文、全く此風土記を採れり。また伊賀名所記といふ書に、「此書一冊あり。巻尾に山城大和伊賀三国之風土記地図等之内、并歌林之記録抄物等尽授之為三巻一畢。陽月斎永閑判と有て、紹巴の奥書あり。さて此奥書の趣にては、山城大和の名所記も有べきをそはいまだ見ず。」当国穴師大明神の事を、宗祇が至宝抄に、風土記云とて引たる文、また名張郡の名の所由を風土記曰とて引たるも、全く此伊勢風土記の文を採れり。また伊賀史に、「天永元年に、大江広房作れり。此史は上に論へる新国史の中なるべし。」伊賀の国号の事に付て、風土記者、雖_レ出自_二其国之言_一、野史之類乎とて論ひたるも、此風土記を斥せり。「上に論へる如く、撰の正しく整はざるから、かく云るものなり。」

（二六六頁六行目〜二六七頁一行目）

また島原山の祭神の下にも此風土記の説を挙げたればむげに近き世に
さかしら人の作れるものならぬ事は知られたり

(二八三頁上段一〇行目、同一二行目)

また嶋原山の祭神の事を定せるにも、此風土記の説を挙て論へり。「また常陸国誌に引たる、筑波の名号の所由を云る文も、此記と同じ状の文と見ゆ。また遠江国人語けらく、先年当国榛原郡上長尾村に、古神社の廃絶たる跡なりと覺しき処に、大木の森あり。其処に八幡の小社ある傍より、古き鏡を掘出せるが、其銘に遠江国榛原郡五社之内、飯津沢神社圭田二十五束、所祭高皇産靈尊也。欽明御願也。日本風土記出所如斯と有しと云へり。此銘文の字と、惣国風土記なる分と合せ見るに全く同じ。但し風土記には、当郡神社六社あるに、五社とあるは合はず。また神名帳には飯津佐和とあるに、沢と書るは、風土記ともに正しからず。然れど仮字用格の正しからぬは、此外にも例あれば、然のみ難なし。さて此鏡鑄たる時代は知らざれど、銘文の書さま、然ばかり古のしわざとは思はれず。そのかみ社の衰へ行を祝等が悲しみて、然ものせしが、乱世のあらびなどに、遂に社も廃絶たるが、辛くして其鏡の土中に埋れ遺れる物なるべし。されどかゝる事は、えせ人の偽りて物せること、近き世にも例あれば、能々正さざれば、一向には信がたし。など子細に尋ねべきなり。

(二六七頁一行目、同一五行目)

〔世に国名風土記とて、国名の所由のみを仮字にて書たる物あり、また其を真名にて書たるもあり、仮字なるぞ元書と見えたる、さて此書むげに近き世に書たる物ならず、卜部家より出たるものなりとみゆる事あり、中には古書によりて書たるも有れど、大かた国名の由緒をさかしらに造りこしらへたる謾説にて、さらに抛るべきものにあらず〕

(二八三頁上段一三行目〜同一五行目)

其はとまれ上に論へる趣にても、惣国風土記も古書なる事は疑なく思はるゝを、近き頃古学する人、一わたり見過してや有けむ。古の令式に符はず、今に聞ゆる事も無ければ、あらぬ偽書なりとて採も見ぬとか。〔民部省図帳の残篇も〕其は彼令式書にのみ泥みたる偏見なり。斯ばかりにも偽書作さむとせば、出雲豊後の古き風土記などは、既くより世に伝はりたれば、其等に似せて作るべく、また令式にも打合せ、物に広く見えたる地名神社などを書記し、都て正史に見えたる事実をこそ記すべけれ。然有ぬをもても、中々に偽書ならぬ一の証とは為べきなり。〔俗に国名風土記とて、国名の所由のみを仮字にて書たる物あり。また其を真字にて書たるもあり。仮字なるぞ元書と見えたる。さて此書むげに近き世に書たる物ならず、卜部家より出たるものなりと見ゆる事あり。中には、古書に現に記せる古伝をとりて書たるも有れど、すべては国名の由緒を、作者の私のおしあてに考たる物にして、古に叶はぬ物なり。〕

(二七一頁二行目〜同一三行目)

また彼惣国風土記いたぐひて元亨二年十二月下吏日下民部省〔史生源忠勝史生案行案〕とある図帳の残篇九国ばかりの少づつ存りて其記さま惣国風土記に似て見ゆれば同じ物ならむかと思はるゝ事の有て、同国郡なる所のあるに引合せて読試るに合へるも違へるもあれどこれも惣国と同趣にもあらざるを是も前にはまだひたりき此等の図帳をも似閑が萬葉緯に集載て、

（二八三頁上段一六行目〜同頁下段四行目）

序に図帳之内至鳥羽後鳥羽兩代之事則非古代之図帳明矣と云るはなほまだへるなり、さてまことの民部省図帳はいかなる体裁なるものなるにか其残篇はさらなり書どもに引載たる文をだにいまで見あたらず、

（二八三頁下段四行目〜同八行目）

元亨二年十月下民部省とある図帳の残篇、九国ばかりの少づつ存りて、其記さま惣国風土記に似て見ゆれば、若くは同じ物ならむかと思はるゝ事の有て、同国郡なる所のあるに引合せて読試るに同じ伝の符るもあり。また甚く違へる事もありて、素より異書なり。

（二六七頁一四行目〜二六八頁二行目）

また後なる図帳と云るは、いはゆる元亨二年のなるべし。此は既に今井似閑が、此等の図帳を集めて其序に、図帳之内至鳥羽後鳥羽兩代之事一則、非古代之図帳一明矣と云るが如し。

（二六九頁一行目〜同三行目）

又その図帳といふ名も令式などにも見及ばず又いづれの御世にいで
き始たるにやそれも考へざれど、書紀孝徳卷大化二年八月の下に、
宜観国々堰堺或書或図、持来奉示、国県之名来時將定、職員令民部
省の職掌に、道橋津濟渠池山川薮沢とあるうい義解に唯抛地圖知其
形界至於檢勘不更関渉也など見えたるぞ図帳の原始成べく、続紀天
平十年八月辛卯令天下諸国造国郡図進と見え続紀延暦十五年八月己
卯勅、諸国地圖事蹟疎略加以年序已久口字闕逸宜更令作之など見え
たるは其図を正し改させたまへるなるべし、

(二八三頁下段八行目〜同一八行目)

さて民部省図帳にも古なると後なると有けるなるべし。其古なりは
いつの頃に出来始たるにや考へざれど、孝徳天皇紀大化二年八月の
下に、宜_下観_二国々堰堺_一或書或図_上持来奉_上示。国県之名来時將_レ定
云々。聖武天皇紀天平十年八月の下に、令_下天下諸国、造_二国郡図_一
進_上と見え、桓武天皇紀延暦十五年の下に、八月己卯是日勅諸国地圖
事蹟疎略加以_二年序已久口字闕逸_一宜_三更令_レ作_レ之など見えたるは、
図帳の原始なるべく

(二六八頁二行目〜同七行目)

さて其図帳の事の古く物にあたりたるは東寺に蔵たる古文書の中に、
延喜十五年十月廿二日丹波国牒東寺伝法供家多紀郡大山庄田之状
云々、彼庄地之内図帳注公田七坪三百八歩十九坪四家七十二歩之外
依員注寺田一已了、無有他妨云々と書て、守源朝臣を始め介掾
目の連署あり当時既に図帳の在しこと知られたり、

(二八三頁下段一八行目〜二八四頁上段五行目)

：東寺に蔵たる古文書の中に、延長三年八月廿五日伊勢大神宮司牒「東寺政所衙」云々。
去承和年中、以「寺領田」為成「円田老処」。以「庄外勅施」入東寺五十二箇坪坪田「令
レ相」博庄内公田「云々とあり。また延喜十五年十月廿二日、丹波国牒「東寺伝法供家」。多
紀郡大山庄田之状云々。彼庄地之内、図帳注公田七坪三百八歩、十九坪四家七十二歩之外、
依員注「寺田」一已了。無有他妨云々と書て、守源朝臣を始め、介掾目の連署あり。こ
れ承和延喜の頃より、庄内に公田ありし証なり。また若狭国田太良御庄注進。元亨四年
作稻検見目錄事。合「公田拾漆町式段半拾歩」云云とあるなど猶多し。また庄内より貢物
を奉りし趣を記せる文書もあり。此外論ひ弁ふべき事も少からねど、いと／＼事長けれ
ば洩しつ。大かに准へて知べく、なほ細に考へなば、慥しき証のいくらかも出来べけれど、
然ばかりの暇なければさて有るなり。また仮字づかひの正しからぬがをり／＼あるも、
治暦の頃の書ならむには然あるべきなり。」さて此記、上に論へる如き状にて
出来たるべければ、年久しく官庫に蔵りて、かつ／＼世に写し出せ
るも、秘蔵せるから、なべて世には知られずして有来りしなり。

(二六四頁一行目〜同十四行目)

正しく民部省に図帳の在し事は、玉海に安元三年四月内裏焼亡の条に、民部省図帳倉不焼亡と見え、職原抄民部省の条に又有図帳国郡榜示載以明白謂之民部省図帳、百鍊抄に嘉祿二年盗人切穿民部省文庫盗取文書諸国図帳少々紛失と見え、又延応二年四月廿日平戸記に、参大殿渡御撰政殿云々仍即以大内記信房入見参之次、申民部省文庫破壊間事、是先日図帳可湿損之間可渡外記文殿為其被仰之故也、

召_二文預友兼_一相尋子細之所逐年破壊性入之石勿論及五月雨而所残之図帳、雖一通不可全然之由所申也、仍申件事也、仰云猶被仰合人々可被左右云云、又民部省町皆以為権門押領之間逐年凌夷之子細此次被申了といへる事見えたり、二条良基公の足利義満公に撰て進りたまへる百寮訓要に民部省此省は諸国の事を司るなり、国々の年貢なども此省にて沙汰しける也、民部省図帳とて日本国の指図境などを定たる文の数百巻此省には昔より伝はりて日本国の重宝にて侍りしなり、近頃うせて侍るにやいたく見及び侍らず諸国の境相論などの時は此図帳にて考へられしかば明鏡にてぞ侍りしと見え、本朝書籍目録に民部省図帳と載たるは巻数を記さざるは詳ならざりしなるべし、

(二八四頁上段五行目〜同頁下段六行目)

正しく民部省に図帳の在し事の物に見あたりたるは、玉海に安元三年四月内裏焼亡の条に、民部省図帳倉不_二焼亡_一と見え、職原抄民部省の条に、又有_二図帳_一国郡榜示載以明白。謂_二之民部省図帳_一云々。百鍊抄に、嘉祿二年盗人切_二穿民部省文庫_一盗_二取文書_一。諸国図帳少々紛失と見え、

百寮訓要に、民部省図帳とて、日本国の指図境などを定たる文の数百巻、此省には昔より伝はりて、日本国の重宝にて侍りしなり。近頃うせて侍るにや見及び侍らず。諸国の境相論などの時は、此図帳にて考へられしかば、明鏡にてぞ侍りしと見え、本朝書籍目録に、民部省図帳と載たるは巻数を記さず。

(二六八頁九行目〜二六九頁一行目)

今按るに親房卿の職原抄に上に引る如く図帳の事記されたるは旧式を記されたる物にしてそのかみ図帳の全くは在ざりしなるべし、其は同ぬしの書遺し給へる伊勢国洞津の考書に安濃社のほとりに安濃塚とて侍り是は国の図帳して民のつかさに参らせしに榜示の塚とのみ書のせぬ、今尋るに其形ばかりもなしと書れたるは古の図帳の遺れるを見て然曰へるなるべくまた古の図帳に在し所の当時廃れたりし事をも証すべきなり、其より後には上に引たる百寮訓要に図帳の事を近頃は失て侍るにや甚く見及はべらずと二条良基公の書給へるは当時はやく図帳は絶たりしにこそ

(二八四頁下段六行目〜同一七行目)

また同元亨二年に、僧師鍊が元亨釈書を著はして献れるも、事異ながら御世の在状おもひ合さるゝなり。然るを此朝に奉仕られし、源親房卿の職原抄に、上に引る如く、図帳の事記されたるは旧式を記されたる物にして、真古の図帳の全くは在ざりしなるべし。其は同朝臣の顯政に書て与られし伊勢国洞津の考書に、安濃社のほとりに安濃塚とて侍り。是は国の図帳して、民のつかさに参らせしにも、榜示の塚とのみ書のせぬ。今尋るに、其形ばかりもなし、と書れたるは、古の図帳の遺れるを見て、然曰へるなるべく、また古の図帳に在し所の当時廃れたりし事をも証すべきなり。其より稍後の事ながら、上に引たる百寮訓要に、図帳の事を、近頃は失て侍るにや、甚く見及はべらずと、二条良基公の書給へるは、古の図帳の事を云るにて、元亨のは世に偏からざりけむ事、惣国風土記と同じ趣なるべし。

(二七〇頁二行目〜同一二行目)

【附録二】鈴木重胤『延喜式祝詞講義』所引風土記一覧

【凡例】

- 一、この表は『鈴木重胤全集』第十～十二巻（鈴木重胤学徳顕揚会編、一九三七～一九四〇年）所収『延喜式祝詞講義』にみえる風土記関係の記述を一覧化したものである。
- 一、巻・項目については『延喜式祝詞講義』、全集・頁・行については『鈴木重胤全集』にもとづく。
- 一、引用された風土記の本文は、ゴシックで示した。

	巻	全集	頁	行	項目	国	条	注釈対象	風土記関係箇所	記述形態	備考
1	1	10	22	1～2	祈年祭	出雲			出雲国風土記に 伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命 と申せるなど、御名を白す事を諱て然は申せるなり、		
2	1	10	22	2～3	祈年祭	常陸			常陸国風土記に 諸祖天神 と書て、注に 俗曰ニ賀美魯岐賀美魯味魯美一 と有り、然れば汎く男女の皇祖神を指すの称なり、		
3	2	10	186	8～9	生島能御巫能辞	出雲		国引坐神	(出雲国風土記に、 国引坐八東水臣津野命云々 と有る、八東水臣津野命は、出雲国日御前社記に、須佐之男命の亦名と為る、実に然る言にてこの神と同神なり、…	注	
4	2	10	187	1～3	生島能御巫能辞	出雲			然るを出雲国風土記に、 伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命、五百津鉏所取々而與下所レ造ニ天下ニ大穴持命二所大神 と見えたる如く、熊野加武呂乃命は須佐之男神に坐し、二所大神は大穴命少彦名命の二所に坐せり		
5	2	10	189	8～10	生島能御巫能辞	出雲	国引	狭国	狭国の例は出雲風土記国引段に、 八雲立出雲国者、狭布之堆国在哉初国小所作故将ニ作縫ニ詔而云々 、又神武天皇御紀に、妍哉乎国之獲矣、雖ニ内木綿之真迹国ニ猶ニ如蜻蛉之贅蛄ニ焉と詔給へるなど、皆迫なる義なるに同じ、		
6	3	10	277	1～3	辞別伊勢爾座	出雲	国引	狭国	但狭国者広久云々の詞上に有を以て按ふに、考の説の如く出雲国風土記なる国引の文に初国小く作れりしを、佗国の国の餘有る処を三自の綱打掛て縫足はし、作足はしゝ事有る例にて、国土経営の当昔には何らも斯在る事の有る可ければ、其故事に本就て此譬は有るなり、		
7	4	10	331	10～11	水分坐皇神等	志摩		事代主神	志摩国風土記に、 事代主神到ニ于伊勢島ニ而得レ饌祭ニ天神地祇ニ因其地曰ニ饌敷ニ と見えれば、事代主神子守神二柱を合せて栗島神とは記せるなり、		
8	4	10	340 341	14～15 1	水分坐皇神等	出雲	飯石郡	須佐之男命	出雲国風土記飯石郡の所に、 須佐之男命坐至ニ坐須佐郷ニ、而此国者雖ニ小国ニ国処也、故吾名者不レ著ニ木石ニ、詔而即饌ニ置巳命之御魂ニ而定給大須佐田、小須佐田矣、故云須佐即有ニ正倉ニ …		
9	4	10	341	1～2	水分坐皇神等	出雲	島根郡	須佐之男命	…また島根郡の所に、 須佐之男命詔ニ詔朝御饌勸養五贇組之処ニ而定給之処云ニ朝酌郷ニ也 と有り、		
10	5	10	391	3～6	春日祭	常陸	香島郡	鹿島神 御鎮座の事	御鎮座事は、常陸国風土記香島郡の所に、 天地草昧巳前諸祖天神（俗云賀味留岐賀味留美）会ニ集八百万神於ニ天之原ニ、時諸祖天神告ニ云今我御孫命光ニ宅豐葦原水穗之国ニ、自ニ高天原ニ降来大神名称ニ香島天之大神ニ、天則号ニ曰香島之宮ニ地則名ニ豐香島之宮ニ、 と見えたる如く、天上なる香島之宮は、大神の神積り坐す常宮なるが、常陸の豊香島之宮は大神の御霊を留め鎮め給ふ宮処たり、		
11	5	10	391	12～14	春日祭	常陸		武甕槌神	鹿島としも称ふ由は師説に、風土記に武甕槌神を 香島大神 と称し、其坐し処を 香島之宮 と号しを、此国にては豊香島宮と名くと云るを思ふに疑無く、鹿を愛養ひ置給へる島なる故の名なり」と云れしは信に然る可し、		
12	5	10	391	14～15	春日祭	常陸		鹿島神の訓み	然れども迦具志摩と訓れたるは如何有む、国造本紀に建借馬命と有るを、風土記に 建借間命 と作たれば旧訓の如く迦志摩と訓むぞ宜し在る可き、		
13	5	10	395	4～5	春日祭	常陸		香取神宮の摂社	尚常陸風土記に、 行方郡自郡西北提賀里云々、其里北在香島神子之社 と有り、		
14	5	10	415	4～6	春日祭	肥前		斎主神	肥前風土記に、 三根郡有ニ神社ニ、名曰ニ物部経津主神ニ、囊昔小墾田宮御宇豐御食炊屋姫天皇令ニ来目皇子征ニ伐新羅ニ、于時皇子奉レ勸到ニ於筑紫ニ、乃遣ニ物部若宮部ニ立ニ社於此村ニ鎮ニ祭其神ニ、因曰ニ物部郷ニ、 と有は此斎主神を祀れるなり、		
15	5	10	440	2～3	春日祭	遠江			又此神の亦名を大宮比咩神と申す事は上に引る遠江国風土記と神代紀に 思兼神妹万幡豊秋津姫命 と見え、…其大宮比咩神は、天鈿女命同神たる由古史徴に記されたれど未其説を聞ず、	？	
16	5	10	453	2～4	春日祭	遠江		糟垣	○今云此より加須我に糟垣の字をも書りと見えて、上に已に引たる遠江風土記に 敷智那郡岐佐岡神社俗号ニ岡糟垣ニ、所祭天児屋根大宮比咩也、	注	
17	5	10	453	4	春日祭	駿河		糟垣	また駿河風土記に 安辨郡菅沼神社所祭糟垣大神也 など有れば、正しく春日に当る也)	注	
18	5	10	465	8～9	春日祭	出雲			出雲風土記に、 大神大穴持命御子云々爾時祖神御子乗レ船而率ニ巡八十島ニ宇良加志給云々 と有を契沖説に、小兒を翫ぶを手宇良加須と云ふ此なりと云る如く、言義は情挙にて他念無く遊樂ひ給ふ事を云るなり)	注	
19	5	10	465	13～14	春日祭	丹後		薬	酒を薬と為るの事の此の古書に見えたるは、丹後風土記に、 天女八人降来云々、爰天女善為レ醴レ酒飲ニ盃吉万病除云々 と有を以知る可し、		
20	5	10	466	2～5	春日祭	丹後		薬	又丹後風土記に、 復至ニ竹野郡船木里奈具村ニ、即謂ニ村人等ニ、云ニ此处我心奈具志久ニ乃留ニ居此村ニ云々 と有て、注に古事平善者云ニ奈具志ニと有れば久志は辞也、然れども此なる二の具志は薬にて正しく物を差云るなり)	注	
21	6	10	493	7～9	広瀬大忌祭	摂津		保食神	故神代紀にも古事記にも保食神（亦名大気都比売神）は所穀給へる趣なるを摂津風土記には 稻倉山昔止與■（口＋字）可乃売命居ニ山中ニ以盛レ飯因以為レ名又曰昔豊宇可乃売神常居ニ稻椋山ニ而為ニ膳厨之処ニ後有事不レ可レ得レ已遂還ニ於丹波国比遲乃麻奈草ニ と有を思ふ可し、		
22	6	10	528	15	広瀬大忌祭	出雲			出雲風土記に所ニ造天下ニ大神と有は神代より大国主神を然称申せりしと通え、		
23	6	10	557	1～4	広瀬大忌祭	常陸		視動	常陸風土記に 自ニ高天之原ニ降来大神名、称ニ香島天之大神ニ、天則号ニ曰香島之宮ニ、地則名ニ豐香島之宮ニ と有は、大地の運動有は万有を茂生する甚美き事なるが故に、豊と冠らせたるにて、地動なる時は天は静なり、地に実動有て人其を所思ざるが天地に往来坐す神は、其視動実動共に明亮に知し召が故に此二を以て云ふ事多在り、		
24	9	11	87	1～4	大殿祭	出雲			予此考有て柱簀重に語けるに同人の云けるは、然らば古史百二十二段に成文為られたる出雲風土記に、 所ニ以号ニ楯縫ニ者神魂命詔云々、天御量持而所レ造ニ天下ニ大神之宮造奉詔而御子天御烏命、楯部為而天下給之 と有る、天御烏命の烏は鳥字の誤にて、天御烏命ならむと思ゆ、	注	古史から孫引き？

25	9	11	102 103	14～15 1～4	大殿祭	出雲	意宇郡 拝志郷	棟梁	因に云此棟梁を御心之林と譬祝き給へる意は、出雲風土記意宇郡拝志郷の條に、 所レ造ニ天下ニ大神命得レ平ニ越八国ニ為而幸時、此処樹林茂盛、爾時詔吾御心之波夜志詔、故云レ林 （神龜三年改ニ字 拝志一 ）と有る如く物の茂く盛なるを林と云ふが、棟梁は柱桁などの如く茂く有る物に非ず、譬へば物の樞紐と成れる処なるを以て、御心之林とは祝給へるにて、御心之林とは博く宇宙の物事を智識て心の栄と為す義なり、		
26	9	11	106	1～2	大殿祭	駿河			駿河風土記に引る香具山日記には、 同レ床共ニ大殿ニ臥麻志止云々 と見えたり、此に依れば書紀なるも拾遺なるも殿字を大殿と訓りしなり、)	注	駿河風土記が香具山日記を引用か
27	9	11	123	4～6	大殿祭	豊後		和幣	豊後風土記に、 速見郡木綿郷、此郷之中栲樹多生常取ニ栲皮ニ以造ニ木綿ニ因曰ニ抽富郷一 、又宝基本記にも謂下以ニ穀木一作中白和幣上名ニ号木綿一と有り、斯在ば白和幣は木綿の事、木綿は穀木皮以て織れる布にて古は普く用たりし物也、		
28	9	11	132	3～6	大殿祭	遠江		天鈿女命 大宮売命	其は卷五（春日祭條）に遠江風土記に、 敷智郡岐佐岡神社俗号ニ岡糟垣ニ所祭天兒屋根大宮比咩也 と有を引て云る如く、此神は所謂る御戸開神と坐す栲幡千々姫命に坐て、天兒屋命の後神と坐れば、其妹神天兒屋命の皇神の御中皇御孫命の御中執持て、茂檜の本末傾けず、中間ふる功德を共しく成して仕奉られしなり、		
29	9	11	133	10～12	大殿祭	丹後		大宮売命 造酒	丹後風土記に 比沼山頂有レ井其名曰ニ魚井一、今既成レ沼此井天女八人降来云々、爰天女善為ニ釀酒ニ飲ニ一坏ニ吉万病除レ之云々、斯所謂竹野郡奈具社坐豊宇賀能売命是也 と有れば、此なる大宮売命と申すは豊宇賀能売命の造酒の事を掌坐す御名なり、		
30	9	11	136	6～8	大殿祭	出雲	楯縫郡	造酒	(出雲風土記楯縫郡の條に、 佐香郷郡家正東四里一百六十歩、佐香河内百八十神等集坐御厨立給、而令レ釀レ酒給之、即百八十日喜謠解散坐、故云ニ佐香一 と有も、右の御厨を建たるに就ての寿触なり、	注？	
31	9	11	138 139	13～15 1	大殿祭	遠江		大宮比咩命	遠江風土記に 岐佐岡神社俗号ニ岡糟垣一、所祭天兒屋根大宮比咩也 と有るぞ天鈿女命の亦名なるにて、同名異神なるが、此彼考合するに豊宇気毘売神の衣食住に幸ひ給ふ御霊屋作りの事の本を執せれば、已に屋船命と申し其亦名を大宮売命と申して御殿の神に在せるが、其御殿にて在る所の諸種の事業はしも幽より天鈿女命を賛けて、又大宮比咩たる功用を令立給ふ所也、		
32	9	11	141	9～11	大殿祭	駿河		殿	殿を意富登能と訓む証は、古語拾遺に大殿祭の大を省て殿祭と作き、神代紀に同レ床共レ殿と有を、駿河風土記に引る香具山日記には同床共大殿と有を此彼合せて知る可なり、		駿河風土記が香具山日記を引用か
33	10	11	237 238	12～15 1～7	六月晦大祓	備後		武塔神	備後風土記に、 疫隅国社、昔北海志、武塔天神南海神之女子乎與波比甞出坐甞曰暮ニ彼所一、蘇民将来二人在在、兄蘇民将来貧窮、弟将来富饒、屋倉一百在在、爰塔神借ニ宿処一、惜而不レ借、兄蘇民将来借奉即以ニ粟柄ニ為レ坐、以ニ粟飯等ニ饗奉饗、々々畢出、坐後爾經年率ニ八柱子ニ還来而詔久、我将奉（来力）之為ニ報答一曰、汝子孫其家甞在哉止、問給蘇民将来答申久、已女子與ニ斯（新力）婦ニ待止申、即詔久以ニ茅輪一令レ著ニ於腰上一、隨詔令レ著即夜甞蘇民與ニ女人二人ニ乎置天、皆悉許呂志保呂保志天夜、即詔久、吾者速須佐能雄能神也、後世ニ疫氣在者汝蘇民将来之子孫止云天、以ニ茅輪一著ニ腰上一、詔隨レ詔令レ著、即在レ家人者得免止詔支 と有る、此時に創れる事なるが、此趣にては輪を越すには非らずして、腰に輪を着るぞ本旨なりける、偕此は神名式なる備後国深津郡須佐能袁能神社の故事にして、北海は出雲国を云ひ、武塔天神の塔は齋宮寮式に塔称ニ阿良良岐一と有れば、武荒然と申す亦名なりけり、（但此は釈紀七及古事記裏書に引く所を以て校して引き、尚日本紀纂疏にも備後風土記 武塔神乃進雄神之別号其祠今見ニ在備後州ニ曰ニ疫隅社一 と見え、神代口訣にも備後国風土記 北海武塔神通ニ南海龍女ニ矣在ニ深津郡ニ須佐能袁能神社也 有下 宿借ニ蘇民将来ニ之事 と見えたり）	注	
34	10	11	245	12～13	六月晦大祓	出雲		沐浴	出雲風土記に、 御身沐浴坐 と有るは、禊祓の事なるに思合す可し、然れば上に取ニ咎於神祇ニ耶と有るも殊に由有り、		
35	10	11	289	12～14	六月晦大祓	日向		日高見之国	（日向風土記に 宮崎郡高日村、昔者自レ天降神以ニ御劍柄ニ置ニ於此地一、因曰ニ劍柄村一、後人故曰ニ高日村一 と有れど、木より高日と云ふ所有て、其所に劍柄を忘れたる故事も有りけむが一に成れるなり、高日も日高も同じ事なるを思ふ可し、)	注	
36	10	11	291	5～7	六月晦大祓	常陸		日高見之国	常陸風土記に、 信太郡、古老曰難波長柄壺前大宮馭宇天皇之世云々、分ニ茨城郡七百戸ニ置ニ信太郡一、此地本日高見国也 、と有は地形に依て日高見国と云るに非ず、地名なれど元来地形に依て号る所なる可し		
37	10	11	291	8～9	六月晦大祓	豊後		日高見之国	又豊後国の郡名日高は比多と和名抄に見ゆ、風土記には 日田 と有り、是に因て思へば飛騨国も日高国かと云はれたるは然る言也、		
38	10	11	365	2～3	六月晦大祓	伊勢		伊夫加斯	伊勢風土記に、 惡神伊不加理臣人民亡火氣発起而天下不レ安 など有るも、薨慤しく明かならざる由也、		
39	10	11	387	10～11	六月晦大祓	肥前		佐賀郡	神名帳頭注に、肥前風土記を引て、人皇卅代欽明天皇廿五年甲午冬十一月甲子、 肥前国佐賀郡興止姫神有ニ鎮座一一名豊姫 と有て、…	？	
40	10	11	399	2	六月晦大祓	出雲		隅	（隅を須と云へるは、天日隅宮を出雲風土記に 天日栖宮 と作る例なり）	注	
41	11	11	449	11～12	鎮火祭	出雲		粟島	出雲風土記に 島根郡粟島周二百八十歩高一十丈 と見え、粟島と云名計りは意宇郡出雲郡にも有り、		
42	11	11	449	12	鎮火祭	伯耆		粟島	又伯耆風土記に 金見郡粟島 有り		
43	11	11	465	13～14	鎮火祭	伊賀		金山彦	伊賀風土記に 敢国神社所祭少彦名與金山彦也 と見ゆ、（但此に就て土金の伝など云ふ事も有るなるは皆後世の杜撰也、)		
44	11	11	505	8～11	鎮火祭	常陸			若て常陸風土記に 天地權輿草木言語之時、自天降来神名称ニ普都大神一、巡ニ行葦原中津国一、和ニ平山河荒梗之類一、大神化導已畢心ニ存帰一レ天、即時隨レ身嚴杖（俗曰伊川乃川恵）甲戌桶剣及所執玉珪悉皆脱履留ニ置茲地一、即乘ニ白雲ニ還ニ昇蒼天一、 と有るは此方にて用給ふ所の調度等の形体を茲地に遺給ひ、其靈容を携て天に上坐るなるが、此嚴杖（俗曰伊川乃川恵）を云者は正しく平国の広茅ならむと所思たり、（…		
45	11	11	508	11～13	鎮火祭	出雲		黄泉門	然れば其千引石を以て塞給へる黄泉門は、出雲国の伊賦夜坂とは伝たれども其所在は神の幽して見せ給はざるなれば深く索む可きに非ず、所以に風土記にも出雲国意宇郡に 伊布夜社 を載たれども、其平坂の事など無きは已く神世より幽に入れるが故なり、		
46	11	11	508	15	鎮火祭	出雲		黄泉門	偕又風土記出雲郡宇賀郷の下に出たる、黄泉の穴は右なるとは異なり思ひ混ふ可きに非ず、)	注	
47	11	11	512	7～8	鎮火祭	出雲		都伎多都	然るを後に校訂されたる古訓古事記には、都伎多都疏と訓れたれば其頃に至て伝の説を改られたる事著し、出雲風土記に 意宇杜而御杖衝立 なども有りて、自為る事に云るは此例と同じき者なり、)	注	
48	12	11	569	6～7	大嘗祭	常陸		新嘗	常陸風土記には福慈神筑波神の新嘗為給ふこと見えたるなど、天皇の御事に局れる称ならぬ思ふ可き者なり)	注	

49	12	11	569	13～15	大嘗祭	常陸		新嘗	○今云常陸風土記に福慈神筑波神の御祖神の国巡給ふ時に、福慈神に宿を乞給へるに今夕は新嘗の由を申給ひて宿し奉らざりしかば、筑波神の許に往坐しけるに今夕は新嘗の節なりと雖も、他人こそは有め御祖神の来坐るを何てか宿し奉らざらむと申て宿奉れりし状を以て、其斎慎める事共の大凡ならぬ趣見えたり)	注	
50	13	12	14	2～4	伊勢太神宮 二月祈年 六月十二月月次 祭	伊勢		宇治	神名秘書に載る風土記に、 宇治郷者伊勢国度会郡宇治村五十鈴川神造二作宮社一奉レ斎ニ太神一、是因以ニ宇治郷一為ニ内郷一也、今以ニ宇治二字一為ニ郷名一以為レ名 と有り、此い因れば太神を斎奉れるに就て内郷と為る由なれども、予が思ふには廻りを山以て取繞て其中に隠れる奥区を云なる可し、		神名秘書所引
51	13	12	28	6	伊勢太神宮 二月祈年 六月十二月月次 祭	摂津		治・沼	古事記裏書に引る摂津風土記に、 比遲乃麻奈韋 と有れば治の方に定む可なり、		古事記裏書所引
52	13	12	43	13～15	伊勢太神宮 豊受宮同祭	摂津		保食神	古事記裏書に引る摂津風土記に、 昔豊宇可乃売神宮常居ニ稻椋山一而為ニ膳厨之处一、後有レ事不レ可レ已遂還ニ於丹波国比遲乃麻奈韋一 と有るは、諦しく此時の事なる可く思ゆるに、…		古事記裏書所引
53	13	12	52	11～15	伊勢太神宮 豊受宮同祭	丹後	吉佐宮	酒殿神	此大神を酒殿神と申せり、倭姫命世記を始神宮の書共に、酒殿神伴神者和久産巢日神子豊宇賀能神靈石坐亦酒造天之甕一口大神靈器以敬拝祭也、古語吉祥甕腹満甘露酒名曰ニ神酒一献ニ三節祭一也、亦甕名ニ賀多普器一と有て、此次に丹後風土記を引り、其は下に云べし、 諸已にも引る同書丹波国吉佐宮の條に、和久産巢日神之子豊宇可能売命（船稻靈神也）生ニ五穀一而普醸レ酒奉ニ御饗一 と有は、此神の天より天降来坐して御饗を奉らせ給ふなるが、此に依て思ふに此酒を醸事は、此国土にて豊受大神の事始させ給へるを、天上に昇坐て後に天宮にて供奉らせ給へるなり、		孫引きか
54	13	12	53 54	7～15 1～4	伊勢太神宮 豊受宮同祭	丹後		酒を醸事	丹後風土記に、 比沼山頂有レ井、其名曰ニ魚井一、今既成レ沼此井天女八人降来浴レ水、于時有ニ老夫婦一、名曰ニ和奈佐老夫和奈佐老婦一、此老等至ニ此井一、而窃取ニ蔵天女一人之衣裳一、即有ニ衣裳一者皆飛上、于時無ニ衣裳一女娘一人即身隠レ水而独愧居、爰老夫謂ニ天女一曰吾無レ児請夫女娘汝為レ児、天女答曰妾独留ニ人間一何敢不レ從、請許ニ衣裳一、老夫曰云々、遂許即相副而經レ宅相住十餘歳、爰天女善為レ醸レ酒飲一盃吉万病除レ之、于時其家豊而土形富故云ニ土形里一云々、後老夫婦等謂ニ天女一曰汝非ニ吾児一、暫借住耳宜ニ早出去一、於是天女仰レ天哭慟慟レ地哀吟、即謂ニ老夫婦一曰、妾非下以ニ私意一來上是老夫婦所レ願何免ニ厭惡之心一、忽存ニ出去之痛一、老夫増発レ瞋願レ去、天女流レ涙微退ニ門外一謂ニ郷人一曰、久沈ニ人間一不レ得レ還レ天、復無ニ親故一不レ知ニ由所一レ居吾何也、吾何也哉、拭レ涙嗟歎仰レ天歌曰、阿麻能波良、布理佐介美礼婆、加須美多智、伊幣治麻土比天、由久幣志良須母、遂退去至ニ荒塩村一、即謂ニ村人等一云思ニ老夫老婦之意一、我意無レ異、亦至ニ丹波里哭木村一、抛ニ榲木一而哭故木云ニ哭木村一、復至ニ竹野郡船木里奈具村一、即謂ニ村人等一云ニ此処我心奈具志久一、乃留ニ居此村一斯所レ謂竹野郡奈具社坐豊宇賀能売命是也、とあるは全く信難き事ながら、此大神の御徳の未全く斎給はざりし程には斯りし事も有しなりけり、大国主神の未稚く御在し間八十神の為に甚く窘られ給ひ、又其禍事に依て終には御名に負せる如く国土経営の尊き貴き御徳を成し給へる思合せて、此風土記の状も実に然る可くこそ所思るなり、		
55	13	12	54	5～7	伊勢太神宮 豊受宮同祭	丹後		豊受大神の 鎮座地	(但風土記に、 其家豊而土形富故曰ニ土形里一此自ニ中間一至ニ于今時一曰ニ比沼里一 と有は、如何なる事なり、此は此比沼麻奈韋神社の立せ給へる其地を土形里と云より後人の附会せる也、比沼は比治なる可き事已に云りき)	注	
56	13	12	54	7～11	伊勢太神宮 豊受宮同祭	丹後		和奈佐夫婦	但古事記に粟国謂ニ大宜都比売一と有る、其は豊宇気毘売神の御名なるを以思ふに、彼国は其神の生坐し地なる故に、其神の御名を以て国名とは成せりし者なり、然るに神名式に阿波国那賀郡和奈佐意富曾神社有り、此を拠て為て攷るに、彼国に在しゝ間に斯る事の有て後に丹後国に移坐し、其より摂津国稻椋山には至坐けむと所思たり、然も有ば彼風土記の和奈佐夫婦の事は阿波国にて在し事なりけり、		
57	13	12	54	11～14	伊勢太神宮 豊受宮同祭	丹後		豊宇気毘売 大神	其社に隣りて宇奈為神社有も、未豊宇気毘売神の少女に在し程の事に由有て聞えたるをや（同国美馬郡波爾移麻比弥神社有るも御祖母の由なり、又伊射奈美神社、天橋立神社など有をも思合す可し、今も那賀郡に大宜山と云有り、大宜都比売神社有り、式には載られざれども其社の神体は飯ヒを持る女神の左衽なる古き木像なる有は大に拠有なり）但右の事は、風土記に就て云へるなるが、…		
58	13	12	60	11～13	伊勢太神宮 豊受宮同祭	山城			山城風土記には、 天照高美牟須比命 と見え、天照御門神、天照御魂神、天照麻羅建雄神、天照高日女神など、古書に所たる皆皇太神を申奉るには非ず、		
59	13	12	76	12～13	四月神衣祭	伊勢		多気郡	風土記に 難波長柄豊崎宮御宇天皇丙午竹連磯部直ニ氏建ニ此郡一 焉と有り、此は孝徳天皇御世の事なり		
60	13	12	77	8～9	四月神衣祭	伊勢		機殿	(風土記に、機殿号ニ八尋之機屋一、倭姫命奉レ斎ニ大神一日作立也と見ゆ)	注	
61	13	12	117	4～6	六月月次祭	出雲		興玉	出雲風土記に、 所レ造ニ天下一大神大穴持命云々、但八雲立出雲国者我静坐国青山廻賜而玉珍置賜而守 と有る玉珍は借字にて靈の事なれば、此の興玉の意も此を以て解べきなり、		
62	14	12	356	4～6	遷却崇神祭	山城		日子・御子	○今云山城風土記なる彼丹塗矢の化て成れる神の子を片山日子神と云るを、神名式に山城国愛宕郡片山御子神社と有も此の例なり、同式に備前国邑久郡片山日子神社有て、赤坂郡に鴨神社四座と有を合考ふるに日子と御子と同じ)	注	
63	14	12	356	13～14	遷却崇神祭	出雲	楯縫郡		出雲風土記楯縫郡の條に、 神名楯山云々古老伝曰、阿遲須枳高日子命之后、天御梶日女命来ニ坐多吉村一云々 と見えたるも、其同神なる可く所思ゆ、	注	
64	14	12	359	3～4	遷却崇神祭	摂津		難波高津	津国風土記に難波高津は天稚彦が天降し時属て下れる神天探女磐舟に乗て此に至る、天磐舟の泊る故に高津と号云々と云り、		
65	14	12	398 399	15 1～2	遣唐使時奉幣詞	播磨		天之日矛	播磨風土記に 天日槍命從ニ韓国一度来到ニ於宇頭河底一、而乞ニ宿処於葦原志拳乎命一云々、即許ニ海中一 と有も、又其国中の塞給ひし故に、終に葦原志拳乎命の其辺に鎮座す社に乞て此国に入しなり、		
66	14	12	401	8～11	遣唐使時奉幣詞	摂津		住吉	摂津風土記に 所ニ以称ニ住吉一者、昔息長足比売天皇世住吉大神現出而巡ニ行天下一冀ニ可レ住国一時、到ニ於沼名椋之長岡之前一（前者今神宮南辺是其地）乃謂斯実可レ住之国、遂讚称之云ニ真住吉国一、乃是定ニ神社一今俗略レ之直称ニ須美乃敷一と有り」と云れたるが如し、但当時真住吉国と云しは菟原郡住吉郷の事なりしを、後に住吉郡なる今地に移奉れるより其地名を移されたる事下に云へる如し…		

67	15	12	416	4～6	出雲国造神賀詞	出雲	楯縫郡楯縫郷	皇御孫の天降	（出雲風土記楯縫郡楯縫郷の所に、 所_三以号_二楯縫_一者神魂命詔云、十足天日栖宮之楨横御量千尋榜繩持而百結々八十結々下而、此天御量持而所_レ造_二天下_一大神之宮造奉詔而、御子天御鳥命楯部為而天降下給之、爾時退下来坐而大神宮御装束楯造始給所是也云々 と有も、大神の宮造は天より神を降して令作給へるなり、	注	
68	15	12	416	6～9	出雲国造神賀詞	出雲	出雲郡杵築郷	皇御孫の天降	又同記出雲郡杵築郷の所に 所_レ造_二天下_一大神之宮将_レ奉、與_二諸皇神_一等_一參_二集宮処_一杵築故云_二寸付_一と有る皇神等も、天より下して宮造ら令給ふ神等に坐り、其は大国主命を始めて其御子神等共に幽冥に入給ふ後なるを以知べし、偕其神等に杵築宮より天に復り参上り給ひし事云も更なり、）	注	
69	15	12	448	3～4	出雲国造神賀詞	出雲		須賀宮	風土記に 大原郡須賀社不_レ在_二神祇官_一と見えたるを思ふ可し、此を近世在_二杵築大社後八雲山麓_一など云へるは無稽の妄説なり、又大原郡に御室山神須佐乃乎命御室令造給所_レ宿故云_二御室位置と有も須賀宮に依れる也、記伝見る可し、）	注	
70	15	12	448	5～6	出雲国造神賀詞	出雲		出雲の国号	然るに出雲風土記に 所_三以号_二出雲_一者、八東水臣津野命詔_二八雲立之語_一之故云_二八雲立出雲国_一也 と有時は其源二有るに似たり、		
71	15	12	448	6	出雲国造神賀詞	出雲		出雲の国号	又風土記和名抄共に出雲国出雲郡出雲郷有れば、此出雲と彼の出雲と名義異なるが如しと雖も然に非ず、		
72	15	12	448	11～13	出雲国造神賀詞	出雲		出雲の国号	偕右の風土記の義は須佐之男命の前に、夜久毛多都伊豆家夜幣賀岐と御歌はしゝの事の名高く有りしを、其大神の後に思ほし出し給ひて其事を其地に在し詔給ひし故に、其郷名と為り郡名と為り終に国号とさへ成れるなり、		
73	15	12	449	4～5	出雲国造神賀詞	出雲		青垣山	出雲風土記に 八十神者不_レ置_二青垣山裏_一詔而云々 と有は、青山の周れる中なる国秀の美地を青垣山裏と云て此に同じ、		
74	15	12	449	7～10	出雲国造神賀詞	出雲	意宇郡母理郷	青垣山	又出雲風土記意宇郡母理郷の処に、 所_レ造_二天下_一大神大穴持命越八国平陽而還坐時、来_二坐長江山_一而語我造坐而令国者皇御孫命平世所_レ知依_レ奉、但八雲立出雲国者我静坐国、青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔故云_二文理_一（神龜三年字改_二母理_一） と見えたり、此に依れば大穴持命の静坐む料に出雲国は青垣山廻らして作賜へるにて、此詞に出雲国青垣山内と有に克協へり、		
75	15	12	450	3～7	出雲国造神賀詞	出雲		杵築	下津石根爾宮柱太敷立 _二 、高天原爾千木高知坐須は、考に熊野大神と大穴持命と二神の宮を云へり」と有る然る可し、偕此二宮の中に熊野は実に青垣山内と云べき地形なるを、杵築は後釈に、古事記に於 _二 多藝志之小浜 _一 造 _二 天之御舍 _一 と有る宮なる可ければ、海辺に近くて青垣山内とは云難き地ならむか、風土記には御崎山の西麓なる由見えたり」と云れたる如くなれ共、国造の其宮に向ひて申す詞ならず、其斎為る斎館に一年招奉れりし云々の状を述るなれば、此彼を兼て大凡に云へる者なり		
76	15	12	450	9～11	出雲国造神賀詞	出雲		伊射那伎乃日真名子	伊射名伎乃日真名子は、伊邪那岐大御神の貴御子と申さむが如し、出雲風土記に 伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命 と有を、後釈に須佐之男命なりと有は寔に謂れたる説なりけり（其は其下文に五百津鉏所 _二 取々 _一 而與下所 _レ 造 _二 天下 _一 大穴持命上云々と有を以知可し、大穴持命に神鉏を授け與給ふ神は此神を除て何か有む、猶此下に云を見る可し、）		
77	15	12	451	5～7	出雲国造神賀詞	出雲		加夫呂伎	加夫呂伎は後釈に神祖なり、須佐之男大神は大穴持命の祖神に坐が故に、出雲国にては殊に如此申す也」と云れたる如く、已に引る風土記に唯に 熊野加武呂乃命 と見え、長寛勘文に引る初天地本紀に、熊野大御神加夫里支名久志弥居怒命とも有て、其御名を申さざるも其御名の上に冠らすも共に大穴持命の祖神に坐故なり、		
78	15	12	451	13～15	出雲国造神賀詞	出雲	島根郡朝酌郷（注）	熊野大神	熊野大神は、神名式に意宇郡熊野坐神社（名神大）と見え、風土記にも 熊野大神 と載せ、 熊野山郡家正南一十八里（有_二櫛櫛_一也、所謂熊野大神之社坐） と記せる是なり（同記島根郡朝酌郷の條に 熊野大神命 と有り、此は地名を以て神の御名に称奉れるにて、熱田大神石上大神など申さむが如し）		
79	15	12	460	11～13	出雲国造神賀詞	出雲	安来郷		出雲風土記（安来郷條）に 神須佐乃乎命天壁立廻坐之爾時、来_二坐此処_一而詔吾御心者安平成詔故云_二安来_一 と有も同じ意味の御言なり、此を以て其美好しき御心を想像り奉る可し、		
80	15	12	460 461	14～15 1～7	出雲国造神賀詞	出雲		国引	此より御父大神の事依し奉らせ給ふ天下を治給ふ可く思ほし成て、須賀宮に留ませ給ひ間も無して国引の御功を立給ひて其を作固め給ひ、其御事は御子大国主神に授け任ね給へる事已に引る風土記に、 伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命、五百津鉏神鉏所_二取々_一而與下所_レ造_二天下_一大穴持命_二所大神_上 と有を以て知られたり、但此二所大神とは少彦名命を合せたる御言と聞えたり、又御子神等を数多に生給ひ国土人民の為に各自の功徳を令立給ひて、先に天照太御神の天上にて事始め給へる食衣宅の事に殊に御心を尽し給ひ殊に其道を弘定め給へり、（国引の故事は出雲国耳の事と思ふは心狭し、風土記に国引坐八東水臣津野命と有て、已に其神の御名なる上は在ゆる国々を引来縫して、国形と成給へるが故なり、其が中に出雲国のは即彼国記に遣り伝はるにそは有りけれ、他国と雖も各然有りつるが伝説の亡びたるな _レ めり、甚惜しき事ながら国引坐神と申の伝への存れりこそ天下の幸には有けれ、）	注にも風土記の名があり	
81	15	12	461	7～12	出雲国造神賀詞	出雲		須佐之男大神の食物に功しみ給ふ証	此大神の食物に功しみ給ふ証は、風土記に 須佐郷神須佐能袁命詔、此国者雖_二小国_一国处在故我御名者非_レ着_二木石_一詔而、即已命之御魂鎮置給之处、然即大須佐田小須佐田定給故云_二須佐_一有_二正倉_一と見え、又朝酌郷熊野大神命詔朝御饌勤養五贄組之处定給 と有る、此一二事を以ても食物の事に劳かせ給ふ事知られ、又后神を稲田媛と申し其父母に稲田宮主神と云号を給へるにて著明きを、猶其御業を令継給はむと為て娶 _二 大山津神之女名神大市比売 _一 生 _二 子大年神 _一 次宇迦之御魂神と古事記に見えたる、此は保食神の稲穀を天にて太御神の農作らせ給へるを害ひ給へるを此国にて償給へるなり、		
82	15	12	461 462	14～15 1	出雲国造神賀詞	出雲	大原郡	衣服	又衣服の事に御霊を幸はへ給ふ事は、風土記（大原郡條）に 高麻山古老伝云、神須佐能袁命御子青櫛佐草■〈目十古〉命是山上麻蔀初故_二高麻山_一 と有る、此麻は天にて青和幣白和幣有しを、此国にて蔀初給へるは衣服の料なる事云も更なり、		
83	15	12	463 464	15 1	出雲国造神賀詞	出雲		国作坐志	国作坐志は杵築大神の御事なり、下に国作之大神と見えたり、神代紀に国作大已貴神と有るを、出雲風土記に 所_レ造_二天下_一大神大穴持命 とも、 所_レ造_二天下_一大穴持命 とも又省きては 所_レ造_二天下_一大神 と耳記せり、		
84	15	12	467	7～9	出雲国造神賀詞	出雲		大穴	偕大穴と作るは此記を始と為て万葉七（廿三丁）に大穴道、出雲神賀詞又神名帳又出雲風土記等に 大穴持 、姓氏録に大穴牟遲命など有り、是等も皆於富那と訓べき証は、和名抄に信濃国埴科郡郷名の 大穴 を於保奈と記せる是なり、		
85	15	12	469	4～7	出雲国造神賀詞	出雲		大穴持命	然れば大穴持命と申奉らむぞ主張たる此大神の御名には坐ける、古事記に御父大神の御命に為 _二 大国主神 _一 と有れば、打任せて其御名の主たるが如く思ゆれ共、此詞及び神名式共に大穴持命と被載又出雲風土記などにも 大穴持命 と耳記せるは、此は殊に其御行事に依て称へ負せ奉れるなれば、此大穴持命と申すなむ主たる御名なる可き、		

86	15	12	469	10～13	出雲国造神賀詞	出雲		二柱神乎始天	二柱神乎始天は、右の熊野杵築両神宮を始と為てなり、神名式に出雲国意宇郡熊野坐神社（名神大）出雲郡杵築大社（名神大）と見え、風土記には 熊野大社杵築大社 と有て、城内の神社三百九十九所の最首として甚も尊く竝無き大神宮なるが、中にも殊に熊野は神祇令義解にも出雲国造斎神と有て、凡て正史に熊野は先、杵築は後に挙げられ、勲位も杵築よりは一等進み給へるを何時の乱世よりか斯有初けむ、		
87	15	12	480	10～11	出雲国造神賀詞	出雲		高天能神王	出雲風土記に 御祖神魂命 と有などは其御末の神に対へて祖と云るなれば上の例なり、		
88	15	12	484	8～10	出雲国造神賀詞	出雲		天穗日命	偕天穗日命は天より此国に降著て大国主命を和し鎮給へれば、此神の事跡なむ多く在る可を、風土記に一だに載ざるが此国にての更名を以て記せるなり、		
89	15	12	484	10～11	出雲国造神賀詞	出雲	出雲郡伊努郷	天穗日命	同記（出雲郡伊努郷ノ條）に 国引坐意美豆努命御子赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命 、と有る赤衾は発語にて伊努へ係れるなり、意保須美は熊野大隅の大隅と同じければ別神には非る也、		
90	15	12	485	10～12	出雲国造神賀詞	出雲	秋鹿郡伊農郷	伊努比売の御母	偕其伊努比売の御母を索るに、風土記（秋鹿郡伊農郷條）に 出雲郡伊農郷坐赤衾伊農意保須美比古佐和氣命之后天璽津日女命云々 と有るにて著きを、亦名は神名式に出雲郡伊努神社神魂伊豆乃売神社と見えたる、其即御稷段なる伊豆能売神に坐て即水戸神なり、		
91	15	12	486	1～2	出雲国造神賀詞	出雲	飯石郡	天穗日命	或説に風土記（飯石郡條）に 飯石郷伊毘志都幣命天降坐処云々 と有る、其神必天穗日命なる可し、否鎮命と聞ゆると云へるは然る説なり、		
92	15	12	486	2～5	出雲国造神賀詞	出雲	熊野郡		又同記（熊野郡條）に 野城駅依ニ野城大神坐－故云ニ野城－ と有て、神名式にも野城神社と出たるが、風土記よりは後神名式よりは前に熊野郡より分りたる熊義郡に天穗日命神社有り、此に因て野城大神と申すは天穗日命に坐事著し、然れども風土記には本の天穗日命と申には抱らず、其神の此国土にて負せ奉る御名を以て伝へたり、		
93	15	12	486	13～15	出雲国造神賀詞	出雲		風土を国体と云事	偕風土を国体と云事は出雲風土記に、 国之大体首レ震尾レ坤東南山西北属レ海と見え、又其文中に吾敷坐地者国形宜者とも国稚美好有ニ国形如ニ画鞆－哉 と見ゆ、（然れば風土記の訓は国形文なるを思ふ可し、…		
94	15	12	502	5～6	出雲国造神賀詞	常陸		布都怒志命	（常陸風土記に 天地権輿草木言語之時自レ天降来神名称ニ普都大神一、巡ニ行葦原中津之国－和ニ平山河荒棧之類－云々 と有など思合す可し）	注	
95	15	12	504	5～8	出雲国造神賀詞	出雲	意宇郡母理郷	大国主命の皇御孫命に此国を奉らせ給はむ御心	（大国主命の皇御孫命に此国を奉らせ給はむ御心は、出雲風土記意宇郡母理郷條に、 所レ造ニ天下－大神大穴持命越八口平賜而還坐時、来ニ坐長江山－而詔我造坐而令国者皇御孫命平世所知依奉、但八雲立出雲国者我静坐国、青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔云々 と有る、此一事を以ても推量奉る可し）	注	
96	15	12	520 521	12～15 1～4	出雲国造神賀詞	山城			偕古事記白橿原宮段に、美和之大物主神と有は後に出来たる名を前に及ぼせるが、上に其段に載たる故事は山城風土記の伝の混れにて、其実は水垣宮段なる意富多々泥古の出自を云る故事と一に在て、其は神代紀に又日事代主神化ニ八尋熊鰐一、通ニ三島溝櫛姫一（或云ニ玉櫛媛一）而生児云々と有る、是正説なる事下に事代主命の下に云が如し、（其は白橿原宮段に、三島の遑昨之女名勢夜陀多良比売、其容姿麗美故美和之大物主神見感而、其美人為ニ大便一之時化ニ丹塗矢一、自下其為ニ大便一之溝流下上突ニ其美人之富登一爾其美人驚而立走伊須々岐、乃将ニ来其矢一置ニ於床辺一、忽成ニ麗壮夫一即娶ニ美人一生子名謂ニ富登多々良伊須氣余理比売命一云云と有は、山城風土記に 建角身命娶ニ丹波国神野神伊可古夜日女一生子日ニ玉依日一、次日ニ玉依日売一、於ニ石河瀬見小川之辺一遊為時丹塗矢自ニ川上一流下、乃取挿ニ置床辺一遂感孕生ニ男子一云々 と有る、此より紛ひたる伝なり、此事下に近守神登貢置天の下に、山城風土記及諸を挙て辨たるが如し、	古事記と風土記の伝の混乱を指摘、注で両書の記述を比較	
97	15	12	522	4～8	出雲国造神賀詞	土佐			偕土佐風土記に 倭迹々媛皇女為ニ大神婦一、毎夜有ニ一壮士－密来曉帰、皇女思レ奇以ニ線麻－貫レ針及ニ壮士之曉去－也以レ針貫レ櫛、及レ旦也看レ之唯有ニ三輪遣－レ器、故時人称為ニ三輪村－社名亦然 と有は、古事記には活玉依毘売の故事なるを、此は異なる伝なるが如くなれ共、風土記の伝の方古説なる可し、其は記の書成て後に然る異説を伝る事は別に慥なる事有るが故なり、然れば此三輪の故事は、々大物主神の倭迹々姫命に通ひ坐る間に前に在し事なる可し、		
98	15	12	523	2～4	出雲国造神賀詞	駿河			又旧事紀には右の故事を神代に泝せ記して、其始に大巳貴命乗ニ天羽車大鷲一而覓妻と有は、下に引る駿河風土記なる御穂神社の故事を取紛らしたるなり、天より降給ふにこそは天羽車大鷲にも乗給はめ、国土にて有る御妻間には似着しからず、	注	
99	15	12	523	11～12	出雲国造神賀詞	出雲		神奈備	出雲風土記に神名樋山の地名見えたるも有り、 石神高一丈、周一丈許、側有ニ小石神百餘計一 と有る此にて、神竝の義を知るに足れりと云べし、		
100	15	12	523	12～14	出雲国造神賀詞	出雲		城名備山	同記に 城名備山所レ造ニ天下－大神大穴持命、為レ伐ニ八十神造城－故云ニ城名備山一 と見えたるは、城を竝べたるに依て城名樋山と云には非ず、櫛を竝べて城を造給へる故に然云なり、		
101	15	12	531	14～15	出雲国造神賀詞	出雲	意宇郡		…出雲風土記（意宇郡條）に、 飯成郷大国主命天降坐時当ニ此处一而御膳食給故云ニ飯成一 と有れば、其和魂大物主神と共に天上に参昇給へりしなり、		
102	15	12	539	6～7	出雲国造神賀詞	出雲	神門郡		出雲風土記（神門郡條）に、 高岸郷所レ造ニ天下－大神御子阿遲須枳高日子命甚昼夜哭坐、仍其処高屋造而坐レ之、即建ニ高橋一而登降養奉故云ニ高岸一 と見え、…		
103	15	12	539	7～12	出雲国造神賀詞	出雲	仁多郡		又同記（仁多郡條）に 三津郷大神大穴持命御子阿遲須枳高日子命御須髪八握于レ生昼夜哭坐、而辞不レ通爾時御祖命御子乗レ船而率ニ巡八十島一、宇良加志給鞆猶不レ止哭之大神夢願給命告ニ御子之哭由一、夢爾願坐則夜夢ニ見坐之御子之辞通一、則寤問給爾時何処然云問給、即御祖前立去於坐而右川度坂上至留申是処也、爾時其津水沼於而御身沐浴坐、故国造神吉事奏参ニ向朝廷一時其水汲出而初也、依レ此今座婦彼村稻不レ食若有レ食者所レ生子不レ云也、故云ニ三津一、 と見えたる大神は大穴持命御祖命は多紀理毘売命に坐し、夢に願奉し神は天神に坐事云も更なり、		
104	15	12	540	2～6	出雲国造神賀詞	出雲土佐	楯縫郡	阿遲枳高日子命	又同記（楯縫郡條）に 神名樋山古老伝云、阿遲須枳高日子命之后天御梶日女命来ニ多久村一産ニ級多伎郡比古命一、爾時教詔汝命之御祖之向位欲下生ニ此所一宜上也、所謂石神宮者即多伎郡比古命御魂当レ早乞レ雨時必令レ霽也 と見えたる天御梶日女命は、土佐風土記に 土佐郡有ニ朝倉郷一、郷中有レ社神名津羽々神羽々神天石帆別命今天石門別命子也 と有る天津羽々神の御事と聞えたり、此を約めて阿波々神とも阿波神とも申せるにや、日本後紀に阿波神是三島大社天后也とも有は実に愛たき古伝なり、	出雲風土記に見える天御梶日女命について土佐風土記の所伝をあげて説明	

105	15	12	541	7～9	出雲国造神賀詞	出雲		須伎	出雲風土記に 伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命、與下五百津鉏神鉏所ニ取ター、而所レ造ニ天下ニ大穴持命ニ柱大神上云々 と有る如く、御父大神の熊野大神より賜はりつる神鉏を事依され奉給へるが故に然負坐る御名なり、		
106	15	12	543	8～10	出雲国造神賀詞	出雲	意宇郡	鴨地	出雲風土記（意宇郡條） 賀茂神戸所レ造ニ天下ニ大神命之御子阿遲須枳高日子根命、坐ニ葛城賀茂社ニ此神之神戸故云レ鴨 と有を以見れば弥著明かり、其は次事代主命の下に委しく云を見べし、		
107	15	12	544 545	13～15 1	出雲国造神賀詞	土佐		高鴨神	…此事を土佐風土記に、 有ニ土佐高賀茂大社ニ其神名為ニ一言主神ニ云云、時與ニ天皇ニ相競有ニ不遜之言ニ天皇大瞋奉レ移ニ土左ニ、神隨而降神身已隠以レ祝代レ之、初坐ニ加茂之地ニ後遷ニ于此社ニ而高野天皇宝字八從五位上高賀茂朝臣田守等奏而奉レ迎ニ鎮於葛城山下高宮岡上一、其和魂者猶留ニ彼国ニ于レ今祭礼と有り、 斯れば三百五年計の間彼国に坐りしなり、		
108	15	12	546	3～4	出雲国造神賀詞	土佐		高鴨神	…風土記に 神身已隠以レ祝代レ之 と有を見べし、今此社一宮村と云に立せ給へりとぞ、此は古土左郷なりし所也）	注	
109	15	12	547	10～12	出雲国造神賀詞	出雲	神門郡八野郷	神屋	其は出雲風土記神門郡八野郷の下に、 須佐能袁命御子八野若日女命坐之爾時、所レ造ニ天下ニ大神大穴持命將ニ娶給ニ為而令レ造レ屋故云ニ八野ニ と有る、八野は屋主にて妻屋の主と云事なるが、是亦同神に坐事云も更なり、		
110	15	12	549	4～10	出雲国造神賀詞	出雲		事代主神	（已にも云る如く事代主神はしも、大国主神の珍子と坐に、出雲風土記に一だに其御事迹の伝無く、唯味鉏高彥根神の御事耳見えたるは、彼に在る御事迹の国土経営の間の事なる故に、事代主と申す御名を以て伝はらぬなり、且国避の事に於ても此神天神の御命を直に諾ひ奉れりしかば、御事迹などの遺る可くも非れば、其国に伝の有べくも非ぬ筈の事なり、此等の事を思合せて其同神にして異名なる事を思ふ可し、右の書紀の一書に三津之碕と有は、風土記に稽るに阿遲須枳高日子命の遺跡なるを、事代主神の此地に射鳥遊遊を物為給へるなど、其同神なる証とも云べし、摂津国西成郡に三津の地名有り、其に味原山と云が有を風土記に 味鉏山 と云て其神の坐由なるに、式に東生郡阿遲速雄神社有なども傍考合す可きなり、猶下に云を見べし）	注	
111	15	12	552	5～8	出雲国造神賀詞	出雲	仁多郡	八尋熊鰐	（出雲風土記仁多郡の下に 恋山古老伝云、和爾恋ニ阿位村坐神玉日女命ニ而上到爾時玉日女命以レ石塞レ川不レ得レ会レ所レ恋故云ニ恋山一、 と有るは事代生命の八尋熊鰐に化為給ひし事を脱せるなる可し、此古老の伝は摂津国にて在し故事なれども其山に祭れるから其にて在し事の如く伝たるなる可し、…	注	
112	15	12	552	13～15	出雲国造神賀詞	河内か		酒解神	…酒解神は其社記に依に大山祇神に坐し、愛宕郡貴布禰神社乙訓郡小倉神社は共に闇竊神也、其例大和国葛上町鴨都波八重事代主神社、鴨山口神社、葛下郡深溝神社と有も右に同じく、河内国社本神社二座と有る此を、風土記に 所レ祭事代主命也と有を或書に一座水神一座山神 と有も、上の如き御所縁に依て然云伝たる者なり、		
113	15	12	552 553	15 1～2	出雲国造神賀詞	伊豫		摂津国島下郡三島鴨神社は事代主命に坐事	又摂津国島下郡三島鴨神社は事代主命に坐事云も更なるを、伊豫風土記に 宇知郡御島坐神御名大山積神云々は神者津国御島云々 と有を以見れば、同じ相座に鎮坐事決き者なり、		
114	15	12	553	13～14	出雲国造神賀詞	陸奥		伊豆佐売神社	陸奥風土記に 伊豆佐売神社所レ祭溝昨比売也 と有は正しき証にて、上に云る説共に打合て甚愛たし、…		
115	15	12	554	2～4	出雲国造神賀詞	出雲		事代主神伊古奈比売命の御事迹	且此事代主神伊古奈比売命の御事迹の出雲風土記に所見たるは、国避けの時より事代主命と御名に負坐し、其御名の方の御霊の現身と化為て伊古奈比咩命（亦云玉櫛媛）に娶給へるが故に、彼国にては伝はらぬにてぞ有ける		
116	15	12	566	3～5	出雲国造神賀詞	山城		用ニ鳴鏑一	用ニ鳴鏑一とは、彼山城風土記に所見たる 玉依日売於ニ石川瀬見小川ニ為レ遊時丹塗矢自ニ川上ニ流下 と有る其丹塗矢は、大山咋神の射放ち給へる鳴鏑なる伝の名高かりし故に、用ニ鳴鏑一之神者也とは云る也、		
117	15	12	568 569 570 571 572 573	1～15 1～15 1～15 1～15 1～15 1～9	出雲国造神賀詞	山城		別雷神・大山咋神共に事代主命の亦名なり	右の如く別雷神大山咋神共に事代主命の亦名なりと雖も、山城風土記及秦氏本系帳に伝へたる古説の混雜を糾して後に明亮なる可し、今本文を挙て其下に云を添べし、 可茂社称ニ可茂ニ者日向曾之高千種峯天降坐神賀茂建角身命也、神倭石余比古天皇之御前立上坐而、宿ニ坐大倭葛木之峯一、 （今云此の建角身命は…） 自レ彼漸遷至ニ山城国岡田之賀茂一、隨ニ山代河ニ下下坐葛野河與ニ加茂河ニ所上レ会至坐迺見ニ賀茂河ニ而言、雖ニ狭少ニ然石川清川在仍名曰ニ石川瀬見小川一、自ニ彼川ニ上坐定ニ坐久我国之北山基ニ從ニ爾時一名曰ニ賀茂ニ也、 （○今云、此段全く事…） 賀茂建角身命娶ニ丹波国神野神伊可古夜日女ニ生子、名曰ニ玉依日子ニ次曰ニ玉依日売一、 （○今云、此より下に…） 玉依日売於ニ石川瀬見小川之辺ニ為レ遊時、丹塗矢自ニ川上ニ流下、乃取挿ニ置床辺ニ遂感孕生ニ男子一、 （○今云年中行事秘抄に…） 至ニ成人ニ時外祖父建角身命造ニ八尋屋ニ堅ニ八戸扉ニ醺ニ八腹酒一、而神集々而七日七夜楽遊、然與レ子語言汝父將レ思人令レ飲ニ此酒一、即拳ニ酒坏ニ向レ天為レ祭分ニ穿屋簷ニ而升ニ於天一、乃因ニ外祖父之名ニ号ニ可茂別雷神一、 （今云右の旧記及本朝文集には…） 所謂丹塗矢者乙訓郡坐火雷神在 （○今云、古事記に謂ゆる大山咋神の…枳紀に引る風土記にも賀茂別雷命父丹塗矢乙訓坐火雷神社は是と見え、註式にも其同伝を載たる丹塗矢乙訓社は是と有を思ふ可し、…） 可茂建角身命也、丹波神伊可古夜日売女也、玉依日売也、三柱神者夢倉里三井社座也 （○今云、枳紀に引るに夢倉里三身社称ニ三身一者、賀茂建角身命也丹波伊可古夜日女也、玉依日女也三柱神身坐故号ニ三身社一、今訛云ニ三井社一と有にて事意著明し、此今云々と云る今は、風土記を奏進為る延長の今也、三井とは三柱神の並居給ふ由なり…） 妹玉依日子者今賀茂県主等遠祖也 （○今云、姓氏録山城国神別に賀茂県主神魂命孫、武津之身命之後也と見え、又鴨県主賀茂県主同祖云々と有り、風土記と姓氏録と其父子に依て伝の異なる也、…）と見えたり、此伝を正して辨る時は右の風土記の可茂社云々より從ニ爾時一名曰ニ賀茂ニ也迄は賀茂事代主命の故事にて、其より以下は建角身命及其子其孫の上の故事にて、其本二條なるが混れて一に為れる事上にも下にも辨れたるが如し、		山城風土記と秦氏本系帳の古説の混乱を糾して明らかにするために山城風土記の本文を引用し、注を附す。注で古事記白樺宮段の伝を引用して山城風土記の伝の混れを指摘（P570、13行目～P571、2行目）

118	15	12	575	3～11	出雲国造神賀詞	山城		日向曾之高千穂峯天降坐神云々	偕山城風土記に 日向曾之高千穂峯天降坐神云々 と有は、皇御孫命の天降り坐時に天之八衢に参迎給ひし事を云るなり、此は事代主神其父大神と共に此国土を奉避り給ふ時の大国主神の御言に、僕子等百八十神者即八重事代主神為二神之御尾前一而仕奉者違神者非也と申給へる御言を結びて顕出給へるが、其時の御名乗に猿田彦大神と聞え給へるが、其は事代主命に坐事を慥に見認め深く遠く考定めたる所有て、三卷（太神宮祈年祭詞）十三卷等に委しく註せるが如くなるが、説長ければ此には記さずと雖も其大略を云むに、古事記に其御天降の時に天宇受売命の間に答て、僕者国神名猿田毘古神也、所二以出居一者聞二天神御子天降坐一故仕奉御前而参向之侍と申給へるは、其御尾前に仕奉り給ふ義なり、然れば右の風土記の原文には、 日向曾之高千穂峰天降坐神賀茂事代主命也、皇御孫命之御前立云 など有けむを建角身命の神武天皇を導申給へる事と混同に為る者なる事明らけし（事代主命の猿田毘古神に坐るが、天鈿女命に送られ給ひて山城国の賀茂に至坐る事は下に云を見べし）		
119	15	12	575	11～13	出雲国造神賀詞	山城		上坐而宿二坐大倭葛木山之峯一	偕風土記に 上坐而宿二坐大倭葛木山之峯一 とは、神代紀に因曰二発二顕我一者者汝也、故汝可二以送レ我而致一レ之矣云々、即天鈿女隨二猿田彦神所一レ乞遂以待送焉と見えたる如く、日向より伊勢に到給ふ因に物為給へるなり、		風土記の本文を神代紀で注釈
120	15	12	575 576	13～15 1	出雲国造神賀詞	播磨		日向曾之高千穂峯天降坐神云々	此より前播磨風土記に室神社の故事を誌せるに、上古は大なる藤葛の南山より北嶺に這繞ひて海面見え分ざりしを、当社の御神賀茂別雷神日向国高千穂峯二上嶽より洛北二葉山へ遷らせ給ふ時、此国に暫時影向し給ふ時此所名津なりと見行して、便供奉の神等に令せて斧鉞鎌の三刃を以て彼藤葛を悉く伐払ひ給ひ湊を給ひしかば、程無く名湊と成り往来の船風波の難を凌ぎ侍る」と有るは其時の事なヾめり、		
121	15	12	577	6～8	出雲国造神賀詞	山城		事代主神（亦名猿田彦神）の葛木より別雷山の麓に鎮り定坐す道次	偕風土記に 自レ彼漸遷至二山城国岡田之賀茂一、隨二山代河一_下_下坐葛野河與二加茂河一_{所上レ}会迫、見二賀茂河一而言雖二狹少一然石川清川在仍名曰二石川瀬見小川一、自二彼川一上坐定二坐久 我国之北 山基一從二爾時一名曰二賀茂一也 と有は、右の事代主神（亦名猿田彦神）の葛木より別雷山の麓に鎮り定坐す道次也、		
122	15	12	586 589	13～15 1～12	出雲国造神賀詞	出雲		八百杵築宮爾静坐支	神名式風土記共に見えたる所出雲国にては熊野大社杵築大社を有て、自餘の諸社とは相並ばざる事今云ふ限に非ず、後釈に引れたる風土記に 杵築郷郡家西北廿八里六十歩、八東水臣津野命之国引給之後、所レ造二天下一大神之宮将二奉與一、諸皇神等参二集宮処一、杵築故云二寸村一（神亀三年改二字杵築一） と是を以八百丹杵築と云名義を意得べし、冠辞考に弥百と多くの土を重疊て杵築固めたる宮地を云り」と有は然る言なり、此文に八東水臣津野命国引之後と有は、同紀国引の文に国引坐八東水臣津野命云々国々来々引来縫国者自二去豆一乃打絶而、八百米支乃御埼也と有に对へて云るなり（然るは国引坐八東水臣津野命の時に、支豆支乃御埼は成れりしかども杵築郷と云地は未成ずて有けるを、所造天下大神を天日隅宮に鎮奉る時に至て、諸皇神等の弥百土を以て杵築給ひしなりと云意なる事能々照し応せて悟る可き者なり、偕右の八百米は八百丹を誤れるかとも思ひしかども、師説に八百米を杵以て搗と云意の発語也」と有や然る可からむ、且右の杵築郷古は出雲郡也しを、今は神門郡に属る由記伝十四に見えたり、同書に風土記に 出雲郡出雲御埼山、郡家西北廿七里三百六十丈、高三百六十丈周九十六里一百六十五歩、西下所謂所造天下大神之社坐也 と有は、杵築大社なるべし」と云れたれども、其は杵築郷の下に 郡家西北廿八里六十歩 と見え、御埼山の下に 郡家西北廿七里三百六十歩 と有を以思誤られたるなヾめり、御埼山の廿七里三百六十歩は郡家より最近き所を云るにて、其周九十六里一百六十五歩と有の西下を遙に程隔たる事云も更なり、此は神名式に御碯神社と見え、風土記に美佐伎社と見え、同記式外に御前社同御埼社と有此にて、今日御埼社と云是也、…)		
123	15	12	593	8～9	出雲国造神賀詞	出雲	大原郡	肥河	(…さて肥河は風土記大原郡條に 斐伊川郡家正西五十七歩、西流入二出雲郡多義村一 と有れば、其河下は出雲郡にて杵築大社とは同じ郡内也)	注	
124	15	12	593	12～13	出雲国造神賀詞	伊勢		厳神	伊勢風土記に 員辨郡執賢師神社大巳貴命也 と有を証と為べし		
125	15	12	594	2～9	出雲国造神賀詞	出雲		御向社	祭神は古事記に其神之嫡后須勢理毘売命云々、如此歌而為二字岐由比一而宇那賀氣理氏至レ今鎮坐也と有れば、大国主大神其后神と共に好しく睦び坐て其相坐に鎮坐るなり、此文の今は此記を奏上為られし和銅の頃の今なり、然るを神名式に杵築大社（名神大）同社大神天后神社と有れば、別社の如く聞ゆれ共同相殿の神をも別に挙る例無きにしも非れば、古事記の伝に依べくぞ所思ゆる、（但出雲大社志に大社客神五座と有て、御向社筑紫社天前社二字と見えたり、社伝に御向社は嫡后須勢理毘売命、筑紫社は宗像三女神、天前社は三徳姫命、門神社は櫛磐脇二神なりと云り、思ふに御向社は風土記にも然見えたれば、右の大神天后神社に当る可か、筑紫社と天前社との二座は式にも風土記にも見えず、且須勢理毘売命と宗像さん三女神とは同神なる由、上に委しく註るが如くなるを御向社筑紫社と分て祀らるゝは其御名に依て御功用の異有れば別に祭れるなる可し、…)	注	
126	15	12	595	5～8	出雲国造神賀詞	出雲		熊野大神	偕上（熊野大神條）に云る如く熊野大神は天皇の天津日繼と所知看す現事顕事に相对へて、神事幽事を所知看大神に坐れば正しく熊野神宮杵築神宮と宮号を以記奉給ふ可き事なるを、式にも風土記にも社号を以被載て自餘の天下の諸神社に格別に勝らせ給ふ事も見えず、		
127	15	12	604	10～11	出雲国造神賀詞	出雲		天穂日命	汝天穂比命云々と右に引る神代紀の伝に依て思に、大国主大神を八百丹杵築宮に令鎮座奉給ひしは天穂日命に坐り、彼風土記に 所レ造二天下一大神之宮将二奉與一諸皇神等参二集宮処一杵築 と有など、総ての事共此天穂日命其司と為てこそは物為させ給ひけめと所思ゆ、（但此は推量の説の如くなれども…)		
128	15	12	606	2～5	出雲国造神賀詞	出雲	熊野郡	能義郡天穂日命神社	偕天夷鳥命の天降坐る時に御父天穂日命の御霊実を持降り給て、其出雲国に斎奉らせ給ひけむ、其は神名式に能義郡天穂日命神社有る是なる可し、此を風土記熊野郡條に 野天駅依二野城大神坐一故云二野城一 と有は、未能義郡の分れざる以前の書なればなる事上に註るが如し、但当郡にも野城神社神名帳に載れり、一社にして二方に分れたるなめり、		
129	15	12	606	5～7	出雲国造神賀詞	出雲		出雲国中に於て大神と称る者	偕風土記に出雲国中に於て大神と称る者、僅に所造天下大神と佐太大神と此野城大神と三処有る耳なるを、官帳に収れりと云ふ耳にて名神大社の部にも列らせ給はざるが不審しくて、猶考るに既に佐国に移し祀れるが故にぞ有ける、		
130	15	12	607	3～6	出雲国造神賀詞	出雲		天穂日命の遺跡	社伝に当社は神武天皇四海を一統坐々て神祇の恩に報給はむとて即位四年先皇天を祀り、次に山川を祭り給ふ時此所は天穂日命の遺跡なる由にて、神霊を出雲国より迎奉り此山に配祭れり、此事風土記に有る由に云るは然も有るべし、天穂日命の遺跡とは此神の天翔り国翔りて初て降着給ひし地なるを以て云なる可し、		

131	15	12	619 620	10～14 1～2	出雲国造神賀詞	出雲	玉	古語拾遺に櫛明玉命之孫造ニ御祈玉一、（古語美保伎玉言祈祷也）其裔今在ニ出雲国一毎レ年與ニ調物一貢ニ進其玉一と見え、臨時祭式に凡出雲国所レ進ニ御富岐玉六十連一、（三時大殿料卅六連、臨時廿四連）毎レ年十月以前令ニ意宇郡神戸玉作氏造備一、差使進上と有を以て知べし、風土記に 意宇郡玉作山郡家西南廿二里（有レ社） と有る此地にて造れるなり、有レ社は玉作湯社と有る此なる可し、神名式には玉作湯神社同社坐韓国伊太氏神社と有て二座なり（風土記に由宇社と有る、其韓国伊太氏神社なり 又玉作川源出ニ郡家正西一十九里拜志山一、北流入ニ子海一有ニ年魚一 と見えたるも同じ所なり、右の玉作は温泉有る地なり）			
132	15	12	621	6～10	出雲国造神賀詞	出雲	横刀	偕横刀に八握劍十握劍など云は其長さを計りて云ひ、又尾羽張と云はは其鋒の張広ごれるを云ひ、広矛など云も此に同じければ其横刀の長く広きを以譬とは為る者なり、（出雲風土記なる神名に 八尋鋒長依日子命 と見えたる、此八尋は柄の長きを云事なれ共、如此く続きたる中に広と長とを対はせたる味有て聞ゆ、神名式に熊野郡鷹日神社と有る鷹日は借字にて、劍の高柄なる可し、風土記には 多加比社 と有り、此御横刀を作る所なる可し）	注		
133	15	12	631	12～15	出雲国造神賀詞	出雲	島根郡手染郷	多志爾	古事記允恭天皇段の歌に佐々婆爾宇都夜阿良礼能多志陀志爾、韋泥氏牟云々、雄略天皇段の歌に多斯美陀気多斯爾波韋泥受、出雲風土記島根郡手染郷の下に 所レ造ニ天下一大神命詔、此国者丁寧所レ造国在詔而、故丁寧負給而今人猶誤謂ニ手染之郷一云耳 と有る、此丁寧も多志爾と訓べし、然らざれば手染に縁無し、万葉十二に慥使乎云々と有り、多志爾は慥になり、		
134	15	12	632	4～7	出雲国造神賀詞	出雲		爾	又出雲風土記に 所ニ以号ニ仁多一者、所レ造ニ天下一大神大穴持命詔此国者非レ大非レ小、川上者木穗刺加布川下者河志婆遠度之、是者爾多志枳小国在詔故云ニ爾多一 と有る爾は神武天皇御紀に妍哉乎国之獲矣（妍哉此云ニ鞅奈珥夜一）と有る妍にて、国の麗美しき事を云るにて多志枳は辞也と雖も、慥の意にて妍慥き由なり、		
135	15	12	632	7～9	出雲国造神賀詞	出雲	楯縫郡沼田郷	爾多の爾	又同紀楯縫郡沼田郷の下に 宇乃治比古命以ニ爾多水一而御乾飯爾多爾食坐詔而爾多負給之 と有る爾多の爾は、祝詞に赤丹乃穗爾聞食と有る丹にて、物を食て御面の赤らむを云れば、此は丹慥にて同意ながら其義異なりと雖も辞の多志は何時も同じ事なり、然れば愛たしは愛慥新たしは新慥にて共に此の多親と同意なる者なり、		
136	15	12	634	5～10	出雲国造神賀詞	出雲	神門郡	若水沼間能	風土記神門郡の下に 吉栗山郡家西南廿八里 と見えたる、其細書に 所謂所レ造ニ天下一大神宮材造山也 と有る、吉栗山と云も栗に良はしき地名と聞えたるに、五卷春日祭條に云る如く鹿島神宮を造れりし材の栗なりしを此に合せて思ふに、古に栗を宮材に用ひたりしかば、彼天日隅宮を造て令鎮坐たる由を以て、其宮材の料の栗木に生れりし実を以て献れるなる可し、		
137	15	12	635	7～9	出雲国造神賀詞	出雲		水	偕出雲風土記なる仁多郡御津の水は、神代に美たき由縁の有る水なる故に、国造の此齋ひにも用ひ初る事なれば、御贄五十昇の内にも雑へて此水を献れる可し、然る故に此言は有ならむ、彼三津は斐の川に傍たる郷にて津は其河門なり、		
138	15	12	635 636	12～15 1～2	出雲国造神賀詞	出雲		神代に美たき由縁の有る水	右の神代に美たき由縁の有る水とは、風土記に 三津郷大神大穴持命御子阿遲須枳高日子命御須髪八握于レ生、昼夜哭坐之辞不レ通云々、大神夢願給告ニ御子之哭由一、夢爾願坐則夜夢見ニ坐之坐之御子辞通一、則寤問給爾時御津申爾時何処然云問給、即御祖前立去出坐而石川度坂上至留申ニ是処一也、爾時其津水沼於而御身沐浴坐、故国造神吉事奏參ニ向朝廷一、時其水沼出而用初也云々、故云ニ三津一 と有る是なり、偕此は阿遲須枳高日子命此津の水沼にて御身沐浴ぎ坐し美たき例に依て、国造の神吉事奏しに朝廷に参向ふ時に其水沼に出て身沐浴し、又御贄を調ふるに用ひ初る由なる可し、		
139	15	12	636	2～6	出雲国造神賀詞	出雲	意宇郡忌部神戸	沐浴	又意宇郡忌部神戸の條に 国造神吉詞奏參ニ向朝廷一時、御沐之忌重故云ニ忌部一云々 と有も、其道次にて身沐浴する事なるが、右の三津に始め又此に至て身を滌ぎ清むるなる可きが、此詞には右の二を合せて云るなり（出雲宿禰俊信が校正本に水沼於而と有を沼於を汲出の誤とし、下なる水沼出而と有る沼をも汲の誤と為るは僻事なり、本の任にて有べし、神名式に三沢神社と有は此処なる可し）		

【初出一覧】

第一部 国学者の風土記研究

第一章 平田篤胤と風土記―『古史徴開題記』を中心に―（『史料』二三五、二〇一二年九月）

第二章 鈴木重胤の風土記研究―『延喜式祝詞講義』を中心に―（『史料』二三九、二〇一三年九月）

第三章 岡平保『風土記考』について（『史料』二三八、二〇一三年六月）

第四章 岡平保『播磨風土記考』翻刻（『皇學館論叢』四六・三・四、二〇一三年六月・八月）

附論一 「太子」の用語に関する覚書（『史料』二三三、二〇一二年二月）

附論二 大化前代のキサキの序列について―元妃を中心に―（『政治経済史学』五五五、二〇一三年三月）

附論三 開皇二十年の遣隋使をめぐる―坂本太郎氏の所説を中心に―（『史聚』四五、二〇一二年三月）

第二部 『肥前国風土記』とその受容

第一章 『肥前国風土記』校訂（新稿）

第二章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』について（新稿）

第三章 糸山貞幹『肥前風土記纂註』―翻刻と校訂―（新稿）